鳥取県文化観光事典

目次

【使用にあたって】

○旧郡域については、巻末の地図を参照してください。

○ふりがなは、スペースの都合上、該当する漢字に合わせて記載されていない場合がありますので予め御了承ください。

○国及び県の指定文化財の名称及び指定時期は、原則として指定の官報（公報）告示に拠りました。

○動植物の名前は、原則としてカタカナで表記しています。（特産物など一部のものを除く。）

○項目の頭の「史跡」「名勝」の記載は、国、県、市町村が「史跡」「名勝」に指定しているものについて表示しています。

○開館時間・問合せ先は紙面の都合上、原則として娯楽施設・博物館など「施設紹介」として取り扱ったものに限らせていただきました。なお、開館時間を記載していますが入館時間に制限がある場合がありますことを予め御了承ください。

○範囲が広範囲にわたるものなどについては、交通アクセスを記載していない場合があります。また、複数の方法がある場合がありますので目安としてください。

総論

総　論

【概　況】

豊かな自然

鳥取県は北は**日本海**に臨み、南には秀峰**大山**を含む中国山地が控えている。この地形が四季をより鮮やかなものとし、さまざまな表情を見せるだけでなく、豊かな自然を育んでいる。**鳥取砂丘**をはじめ大山、**浦富海岸**、県内各地に点在する美しい渓谷など、自然が創る芸術にあふれている。また、県内各地に温泉が湧出していることも鳥取県の特徴の一つである。世界有数のラジウム含有量を誇る**三朝温泉**、白砂青松と大山の眺望が美しい**皆生温泉**、山陰最古の温泉である**岩井温泉**などがある。近年、淀江町、中山町などでも温泉が発掘され、新たな観光ポイントとなっている。

交流今昔

日本海は**松葉がに**や**白イカ**などの特産物を産する海であるばかりでなく、古くから大陸と人、もの、文化などが行き交った交流の海でもあった。近年、県内から日本最大級といわれ、弥生時代のクニのようすをとどめた**妻木晩田遺跡**や、豊富な出土品から弥生の博物館といわれる**青谷上寺地遺跡**などが発見された。これらの遺跡から大陸との交流をうかがわせる遺物が多数出土している。

平成九年（一九九七）、境港市で開催されたジャパンエキスポ鳥取９７「山陰・夢みなと博覧会」は、「翔け、交流新時代へ」をテーマに開催され、国内外から県人口の三倍以上の百九十三万人の人が訪れた。

現在、県では韓国をはじめ日本海対岸の諸国と、文化、学術などさまざまな分野での交流が取り組まれている。平成十三年（二〇〇一）四月には米子―韓国・ソウルを結ぶ定期航路が開設され、さらに両地域は近くなった。

鳥取の力

また、鳥取県の自然や風土の中でこそ育まれた農産物や培われた最先端技術がある。

鳥取砂丘には世界のいろいろな砂漠地の気象条件を再現することのできる**乾燥地研究センター**・アリドドームがあり、乾燥地研究の拠点施設として乾燥地農業などの研究が進められている。このほかにも氷温技術や、特産物であるカニの殻から採取したキチン・キトサンを活用した製品開発などがある。

ながいも、**らっきょう**、**ぶどう**、**白ネギ**などの農産物は、先人が長年砂丘地に挑み努力して耕作した結果、今や県を代表する農産物となっている。

また、二十世紀の鳥取県の農業を牽引してきた**「二十世紀梨」**は、現在も国内で生産量第一位を誇る。一方で「ゴールド二十世紀梨」「おさゴールド」など新たな梨の研究、栽培も進められている。

県民の財産

県内には、大国主命（おおくにぬしのみこと）をはじめ多くの神々にまつわる神話や、歴史の舞台となった場所があるほか、**三徳山三仏寺**や**仁風閣**をはじめ国宝・重要文化財などに指定された文化的価値の高い建築物や昔ながらのまち並みが残っている。

現在、県では自然あふれる豊かな風土、そこに秘められたさまざまな魅力や良さ、長年受け継がれてきた伝統などを守り育むとともに、文化と観光面を生かしながらその良さを多くの人に知っていただくことに取り組んでいる。

【鳥取県の歴史】

古　代

鳥取県内で人の生活が始まったのは、旧石器時代にさかのぼる。西伯郡淀江町の原畑遺跡では石製のナイフ形の石器が発見されている。

縄文時代になると、人々は丘陵地や湖などの水辺に集落を形成し始めた。狩りをし、食べ物を採取し、火を用い、土器や木器を作っていた。この時代の代表的な遺跡である上福万遺跡（米子市）では、埋葬施設と考えられる穴（土こう）や集石遺構、縄文土器などが発見されている。水辺の集落では人々が食べた貝の殻が捨てられた貝塚や魚類を含む残さいが、また、**湖山池**の南岸に位置する**桂見遺跡**では、全国最大級の丸木船が二艘出土するなど場所によっても生活に違いがあることが遺構や出土品からうかがわれる。

大陸から稲作が伝わったのは今から二千数百年前といわれる。そして弥生時代には稲作が本格的に始まった。鳥取県内では米子市の**目久美遺跡**で初めて水田跡が発見された。稲作の始まりは人々を定住させ、よりまとまった機能的な集落の形成へつながった。これらの集落は、外敵から守るために村の周囲に壕をめぐらした環壕集落である。集落の内部には竪穴住居や食糧などを蓄えた貯蔵穴が発見されている。この時代の代表的な遺跡としては、**尾高浅山遺跡**（米子市）、宮尾遺跡（会見町）などが知られる。また、**青木遺跡**（米子市）は、住居跡など千基にのぼる遺構が発見された西日本最大級の弥生遺跡である。竪穴住居と掘立柱建物が見られる。ほかにも集落跡からは甕や高杯など多量の弥生土器が出土している。また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓が出現した。四隅突出型墳丘墓は出雲地方を中心につくられ始めた墓であり、県内でも尾高浅山遺跡や**阿弥大寺墳丘墓群**などで発見されている。

近年発見された**妻木晩田遺跡**は、弥生時代の集落跡としては日本最大といわれる。この遺跡は居住、防衛、埋葬などの機能ごとに区切られているのが特色である。また、住居跡や墳丘墓などを通して弥生時代中期から古墳時代までの集落の変遷がわかる。

やがて古墳が出現し始める。古墳はその地域を治めていた権力者のものと推察される。**国分寺古墳**（倉吉市）では、副葬品として埋められた中国製の三角縁神獣鏡などが発見されている。また、**橋津古墳群**（羽合町）では大型の前方後円墳が発見され、墳丘は川原石が葺かれ、埴輪がめぐらされていた。また、勾玉や鉄刀など豊富な副葬品などからも、当時、**東郷湖**周辺を治めていた人の力の大きさをうかがい知ることができる。また、**天神川**河口近くの砂丘の中から発見された**長瀬高浜遺跡**は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

古墳時代後期は、県内の地域でも古墳の構造に違いが見られる。また、他地域の影響を示す副葬品が出土している。例えば、**石馬谷古墳の石馬**は九州で見られるもので、何らかの交流があったことを示すものとして興味深い。

西暦六四五年の大化改新以来、律令制的な諸制度が徐々に導入されてゆき、七〇一年の大宝律令で律令国家が完成する。その地方支配はまず国を置き、その内部をいくつかの郡に分けて統治するものであった。

鳥取県域は東部が**因幡国**、西部が**伯耆国**とされ、因幡に巨濃郡以下七郡、伯耆は河村郡以下六郡が置かれた。

国の役人は「国司」で、都の貴族・官人が任命された。任期は四～六年で、

その間は任国に赴いて支配にあたった。国司の長官は「守」であるが、奈良時代の著名な人物としては伯耆守山上憶良や因幡守**大伴家持**などがいる。国の役所を「国庁」といい、国庁を含む一画が「国府」と呼ばれた。因幡国の国庁は岩美郡国府町中郷、伯耆国は倉吉市国府、国分寺にあった。どちらも発掘調査が行われているが、特に伯耆の国庁跡はほぼ全域が発掘され、国の史跡に指定されている。

「郡司」（郡の役人）には、その地方の古くからの豪族が任命された。たとえば墓誌・骨蔵器で有名な伊福部徳足比売は、因幡国の伝統的豪族である伊福部氏の出身であるが、同氏は奈良時代には法美郡の郡司であった。なお、伊福部氏はのちに因幡国**一宮宇倍神社**の神主となり、伊福部系図（「伊福部臣古志」）を伝えている。

白鳳時代～奈良時代にかけて、仏教がこの地方にも急速に広まった。この時期に建立された地方寺院の跡が因幡十一か所、伯耆で十三か所確認されている。それらのうちで最もよく知られるのは、西伯郡淀江町の**上淀廃寺**であろう。一九九一年、壁画の断片が発掘され、一躍有名になった。これらの寺院は郡司など地方豪族が建立したもので、彼らの力の大きさをうかがわせる。

ところで、因幡・伯耆地方は、古くから朝鮮半島・大陸と直接的な交流をもっていた。上淀廃寺の出土物にもそのことをうかがわせるものがあるが、九世紀には新羅商人の往来がみられ、新羅海賊に対する警固命令も出されている。また、渤海の使節も九世紀末と十世紀初頭の二度、伯耆に来着している。

平安時代後期になると荘園（中央の有力者の私有地）が急激に拡大していった。因幡・伯耆も例外ではない。それらは、地方豪族が私領を皇室・貴族・大社寺等に寄進することによって成立したものであるが、地方豪族は寄進後もその現地支配者（下司）としての権限を持ち続けた。ただこの時期に、荘園になっていない土地（国衙領という）もかなり残っていた。郡などの国家的な支配制度もまだ十分に機能しており、郡司はなお強い力を持っていた。その郡司や荘園の下司などの地方豪族は、平安後期には治安の悪化などの理由から武装を強化し武士となっていく。因幡では長田氏、伯耆では小鴨氏、紀氏などが知られる。また、**大山寺**や**三徳山三仏寺**などの有力寺院は多数の僧兵を抱えており、こうしたさまざまな武力が平安末期の争乱状況を生みだしていった。

中　世

一一八〇年、関東で源頼朝によってあがった打倒平氏の火の手は、またたくまに全国に拡がっていった。伯耆国でも、東部の小鴨基保（平氏方）と西部の紀成盛（反平氏方）、さらに、それに大山寺と三徳山がからみ、激しい戦闘があった。

頼朝は鎌倉幕府を樹立し、国ごとに「守護」を、国内の荘園・国衙領に「地頭」を置いたが、守護、地頭に任命されたのは、ほとんどが東国の武士であった。彼らは鎌倉末ごろまでには一族を移住させ、その地域の有力な武士として戦国期まで勢力を張った。毛利氏（私部）、伊田氏（大江）、矢部氏（若桜）などはいずれも東国出身の武士である。鎌倉時代は東国武士が全国に拡大していった時代だったのである。

鎌倉末期、隠岐国に流されていた後醍醐天皇は、一三三三年、**伯耆国**に脱出し、**船上山**（東伯郡）から全国に倒幕の命を発した。これを支援したのが、**名和長年**らの伯耆の武士である。

南北朝時代になると、半世紀にわたって続いた戦乱の中で、地方武士（地頭）を指揮、統率する役目をもつ守護が実力を蓄えてくる。南北朝初期に伯耆の守護となった**山名時氏**は中央の政争に乗じ、観応二年（一三五一）以降、但馬、因幡、美作なども実力で支配下に置いた。

貞治三年（一三六四）の幕府との和睦の際には、時氏はこれらの国の守護に任ぜられた。山名氏は明徳二年（一三九一）の明徳の乱によって大きく力を削がれたが、因幡、伯耆、但馬の三国については、守護職が認められた。その結果、この三国については戦国時代の後半まで山名氏の支配が続くことになる。

しかし、その支配は他の守護大名と同様、決して強固なものではなかった。応仁の乱（一四六七～一四七七）を契機に、因幡では有力国人の反乱が続き、因幡の山名氏は衰退した。伯耆でも守護家の相続争いに出雲の尼子氏が介入し、大永年間（一五二一～一五二七）には、伯耆の西半分は尼子の勢力下に入っていた。尼子氏は天文年間（一五三二～一五五四）の中ごろには因幡まで影響力を行使するほどになっていく。

尼子氏は永禄九年（一五六六）毛利氏によって滅ぼされ、因幡・伯耆は毛利氏の勢力下に入る。天正初年（一五七三～）には、尼子再興をめざす山中鹿之助と毛利氏が、因幡を戦場に合戦をくりひろげ、さらに天正八・九年（一五八〇・一五八一）には、織田方の部将・羽柴（後の豊臣）秀吉が因幡に入り、毛利方と激しく戦った。その最終戦が天正九年七月～十月の鳥取城包囲戦であった。この戦いは「鳥取城の渇え殺し」と呼ばれる悲惨な状況を生みだした。

鳥取城落城後、秀吉は、鳥取、鹿野、若桜のそれぞれに宮部継潤（鳥取城）らを配し、因幡経営の体制を整えた。伯耆については、東三郡（河村・久米・八橋）が織田に味方した南条氏の領国となり、毛利氏の将吉川氏が西三郡（汗入・会見・日野）を領有することで、秀吉と毛利方の国境が確定した。この体制は関ヶ原合戦まで続くが、その戦後処理で亀井氏を除く諸氏は領地を没収され、代わって池田長吉（鳥取城）、山崎氏（鬼ヶ城）、中村氏（米子城）が入国してくる。近世の始まりである。

近世

豊臣氏滅亡の二年後の元和三年（一六一七）、播磨国姫路城主であった池田光政が因伯三十二万石を支配する鳥取城主に転封され、翌年入部した。さらに寛永九年（一六三二）、因幡鳥取の池田光政と備前岡山の池田光仲の国替えが発表された。これ以降光仲の系統が明治維新まで続くこととなる。また、伯耆の十八か村三千石は大山寺領として明治維新まで存続するが、ほぼ今日の鳥取県の境界がこれによって確立された。このうち、米子、倉吉、松崎、八橋などの町では家老が町方と寺社について自分手で行う「自分手政治」が行われた。

藩政は家老が奉行を指揮して月番で担当、藩主には直接の補佐役である用人と目付役が側近としてついた。役所は鳥取城の二の丸（のちに三の丸へ移る）で、用人、目付役、勘定頭、裏判吟味役などがつとめ、郡代、町奉行、普請奉行、寺社奉行らに指示を与えた。

城下町鳥取は元来、六万石規模だったので三十二万石を受け入れるために城下の拡張が行われ、池田光政の時代にほぼ今日の鳥取市の原型が形成された。米子の町も吉川広家の時代に湊山の築城とともに城下町が建設され、池田光仲の家老・荒尾但馬守の城預かりの時期までに城下町はほぼ完成をみた。倉吉の城下町の形成は天正年間の頃とされる。池田光政時代の伊木長門守によって陣屋を中心に町づくりが進められた。

江戸時代の各藩ともそうであったが、鳥取藩でも藩祖・池田光仲の時代に早くも財政難に苦しめられた。このような財政難を解消しようと元禄十一年（一六九八）から米村広治を中心として施行されたのが、請免制と呼ばれる貢租の定額化であった。これにより藩財政は安定したが、凶作時に藩と農民の対立は一気に表面化することになり、享保二年（一七一七）以降、規模の大きな一揆が起こるようになった。中でも元文四年（一七三九）の大凶作をきっかけとした一揆は、因伯両国にわたる大規模なものであった。

嘉永三年（一八五〇）八月、鳥取藩は水戸の徳川斉昭の五男・慶徳を藩

主に迎え藩政改革に着手する。この改革は経費不足に加え改革派と守旧派の対立などで失敗する。

幕府は内憂外患で、鳥取藩も尊王攘夷と佐幕の間で難しい選択を迫られていた。攘夷の立場を取っていた鳥取藩でも「黒船」の来航に備え、藩内各地に御台場を造り警戒を強めた。藩営で銃砲製造を行うこととし、中部の六尾村に二基の反射炉を建設させた。藩主・慶徳は、「尊王敬幕攘夷」という折衷案を考えていたようだが各派閥、特に過激派の動きに翻弄され、何一つ実現できなかった。鳥取藩は幕府と薩長が戦った慶応四年（一八六八）の鳥羽伏見の戦い以後、薩長側に立って戦闘に参加し、東北地方にまで転戦した。このときに鳥取藩の主力として活躍したのは足軽と農兵を中心とした銃兵であった。

《産業》

自給自足が原則であった封建時代の農村においても、農業における生産力の発達に伴い商品経済の発展がみられるようになった。

特に木綿の栽培は、よい砂質を持つ伯耆で盛んに行われ「伯州綿」と呼ばれるほど盛んになった。木綿に関係して染料の藍の生産も盛んになり、赤碕、御厨（みくりや）では紅花が盛んに作られた。伯耆で木綿が盛んだったのに対し、因幡では蝋と紙が代表的な特産品であった。

この他、中国山地の山間に位置する日野郡では鉄山の経営が行われた。また、中部の倉吉では農業生産の向上に大きな役割を果たした稲扱千歯（いなこきせんば）が製造され、全国へ販売された。

商品経済の発達は社会的分業を進め、農村内部に商工業従事者を生み出していき、藩は生産減少を警戒してたびたび在郷商人の抑制・禁止を出したが、農村内部の商品経済の発達を止めることはできなかった。

《文化・教育》

文化事業に力が入れられ、まず、鳥取藩の藩校・尚徳館（しょうとくかん）が宝暦七年（一七五七）二月に開校した。ただし、従士以下や農商工の者は入学できなかった。尚徳館では主に儒学を中心とした学問が行われ、後に武術の稽古場なども作られた。さらに幕末には尊王攘夷の高揚から国学や兵学も開講された。

十九世紀に入ると農村でも読み、書き、そろばんの寺子屋がみられるようになる。また、寺子屋よりもやや高度な私塾も開かれた。

藩政時代の文人たち

「文人」とは文筆にたずさわる人をいう。特に詩文、書画をとおし、洗練された趣味を持った人を指す。鳥取藩政時代の代表的な文人として、建部樸斎（たてべぼくさい）（一七六九～一八三八）、正墻適處（しょうがきてきしょ）（一八一八～一八七五）、牧野芝石（まきのしせき）（一八四〇～一九〇三）の三人があげられる。

建部樸斎は、鳥取で南画を最初に描いたといわれる。鳥取藩西館の池田定常に仕え、経書を講義し詩作の相手を務めた。建部の絵の特徴として詩画一体があげられる。作品には、『老樹図』『帰牛図』などがある。

因幡国

因幡国は、律令制度の地方支配単位に起源がある。その設置は、七世紀終わりごろのことであった。ただ、「いなば」という地域名は六・七世紀ごろからあったようである。奈良時代、因幡国は巨濃・法美・八上・知頭・邑美・高草・気多の七郡に分かれ、その内部はさらにいくつかの郷からなっていた。国の政庁（国庁）は法美郡稲羽郷（岩美郡国府町）に置かれていた。因幡国内を官道の山陰道が東西に貫き、これは但馬・丹波を経由して都につながっていた。

ただ、因幡と都との往来は、志戸坂峠（八頭郡智頭町）を越えて山陽道に合流するルートが用いられることが多かった。十一世紀末に因幡守平時範が赴任してきたときの記録では、志戸坂峠を越えて往復している。これは近世になっても変わらず、鳥取藩の参勤交代路として利用された。

中世には、南北朝期半ばの**山名時氏**以降、代々山名氏が守護に任ぜられ、戦国時代半ばまで山名氏の領国となっていた。守護所（守護の役所）は、室町時代中ごろからは天神山城（鳥取市布勢）であった。十六世紀後半になると山名氏は没落し、代わって尼子氏、毛利氏、織田氏の勢力が相次いで進出し争奪を繰り返した。しかし、天正九年（一五八一）の羽柴秀吉による鳥取城攻略によって因幡国は織田氏の支配下に入り、争乱は終結した。

豊臣政権下では宮部氏（鳥取城＝鳥取市）・亀井氏（鹿野城＝気高郡鹿野町）・垣屋氏（桐山城＝岩美郡岩美町）・木下氏（鬼ヶ城＝八頭郡若桜町）によって分割支配された。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦後は、宮部氏らが改易され、池田長吉（鳥取城）、亀井氏（鹿野城）、山崎氏（鬼ヶ城）によって分割支配するところとなった。三氏はそれぞれ居城を近世的な城郭に修築し、城下町も整備した。鹿野町、若桜町も今にその面影を残している。

元和三年（一六一七）、池田光政が因幡・伯耆二国の大名に封ぜられ、鳥取城と鳥取城下町が拡張、整備された。現在、残る町割りなどはこのときのものである。

光政は、寛永九年（一六三二）、従兄弟である岡山城主・池田光仲と入れ替わりに岡山に転封になり、以後は、光仲の子孫が鳥取藩主として明治維新まで続いた。

伯耆国

「ははき＝ほうき」という地域名は六・七世紀に成立していた。

ただ伯耆国の直接的な起源は、七世紀末に定められた地方行政単位「伯耆国」にある。山陰道に属し、国内は河村・久米・八橋・汗入・会見・日野の六郡に分けられていた。国の政治の中心である国庁（国府）は久米郡八代郷（倉吉市国府・国分寺）に置かれていた。

古代から伯耆国では、**大山寺**（西伯郡大山町）、**三徳山三仏寺**（東伯郡三朝町）、**船上山**（東伯郡赤碕町）など、山岳仏教寺院が修験道場として栄えた。大山寺、三徳山に残る建築物・仏像などが往時をしのばせている。

一三三三年、隠岐国を脱出した後醍醐天皇は、船上山から全国の武士に鎌倉幕府打倒の命を発した。このとき天皇を助けた地元の武士・**名和長年**は、建武政権で重職を得ている。

南北朝初期には**山名時氏**が守護に任じられ、その後、戦国時代の初めごろまでこの地域を支配した。

しかし、十六世紀になると隣国出雲の戦国大名尼子氏が勢力を拡大し、伯耆に進出してくる。永禄九年（一五六六）、尼子氏が滅亡した後は、毛利氏の支配下に入り、天正十年（一五八二）の羽柴（豊臣）秀吉と毛利氏の国境確定後は、東伯耆三郡（河村・久米・八橋）は羽衣石城（東伯郡東郷町）の南条氏の領国となり、西伯耆三郡（汗入・会見・日野）は毛利氏の将であった吉川氏が支配した。関ヶ原の合戦で西軍に味方した南条・吉川氏は領国を没収され、代わって伯耆一国を中村氏が領有することになった。中村氏は、吉川氏が築き始めた米子城を完成させ、米子城下町の整備を行ったが、のちに改易され、元和三年（一六一七）に池田光政が因伯二国の大名として入封した。

寛永九年（一六三二）に岡山の池田光仲が光政と入れ替わりに鳥取城主となり、以後、明治維新まで続いた。米子城は筆頭家老・荒尾氏が城預となって守備した。

近　代

《政治》

慶応四年（一八六八）七月、鳥取藩は東京行幸供奉を命じられ、それを機に藩主・慶徳は新政府と直接連絡をとるようになった。明治二年（一八六九）一月には薩長土肥に続いて版籍を奉還し、同年六月に改めて慶徳は鳥取藩知事に任ぜられた。

明治四年（一八七一）七月十四日に廃藩置県が断行され、**因幡国**八郡と**伯耆国**六郡、播磨国の神東、神西、印南の三郡のうち二十四か村が鳥取県となった（後、播磨国の分領は姫路県へ編入）。ついで、隠岐国四郡も編入した。藩知事にかわって政府任命の県令（現在の知事のようなもの）が置かれることとなり、初代県令は尊攘派として維新期に活躍した鳥取県士族の河田景与であった。同五年（一八七二）四月には「鳥取県職制」が定められ、藩にかわる新しい県庁と県吏の役割が定められた。さらに県政を施行していくにあたり、県民の意向を知る必要から鳥取の慶安寺に議事所を開設し、県政各般にわたって意見を交換した。

こうしたものは地方議会の先駆的役割を果たした。国家財政の中核となる地租については明治六年（一八七三）七月に「地租改正条例」が公布され、地価の調査決定の事業が進められていくが査定は割高であり、農民たちは江戸時代の請免制による租額とかわらない地租額を押し付けられることとなった。

因幡・伯耆に隠岐の三か国を管轄していた鳥取県は、明治九年（一八七六）八月二十一日で廃止され島根県に併合された。秩禄処分で窮迫していた旧藩士族らは不満を高め、国会開設運動や自由民権運動などに参加して共立社などの政治結社を結成し鳥取県再置運動を進めた。

政府も山県有朋を派遣して実情を調査し、明治十四年（一八八一）九月十二日、鳥取県が再置された。ただし、因幡に比べ人口の多い伯耆からは因・伯の人情、地理の相違、鳥取までの距離などから再置への反対などもあった。このような因・伯の地域対立はしばしば県会の運営にも反映された。さらに、大正三年（一九一四）十二月にも鳥取、島根両県の合併が両県会で決議されたものの実施にまで至らないなど、両県合併の動きはその後も長く尾を引いた。

鳥取県再置後の初代県令は山田信道であった。山田は産業近代化のためにも道路の開設整備が鳥取県にとって緊急の課題であるとし道路整備に着手した。このほか、士族の窮乏を救うべく、北海道への移住が進められ、釧路や岩見沢などに入植が行われた。

明治二十二年（一八八九）、大日本帝国憲法が発布され、翌年には総選挙があり、県内からも三人が当選した。続いて、第一回帝国議会が開かれ近代国家としての体制が整った。鳥取県では明治二十二年十月一日から市町村制が施行された。市制は鳥取に施行され、初代市長には岡崎平内が選任された。米子、倉吉、境、淀江には町制が施行された。地方制度の確立とともに県議会の活動が活発となり、県政の基礎が固まっていった。

明治維新後、農林業の近代化に遅れを取り、伝統的産業の近代的対応も遅れていたため近代的工場の稼働も限定されていた。なによりもその最大の要因は全国の都市や市場につながる交通体系の不備であった。初代県知事の山田信道は道路建設事業に当たった。明治四十五年（一九一二）京都―出雲今市間の**山陰線**（現山陰本線）が山陽側に二十年遅れて開通し、文化、産業の発展に大きな影響を与えた。明治三十年（一八九七）、日清戦争後の軍備増強のなかで鳥取市に歩兵第四十連隊が設置された。

大正デモクラシーの流れのなか、県下でも都市部の青年層により護憲運動が推進された。さらに第一次世界大戦後の産業発展は、さまざまな社会問題を生みだした。県内でも民主主義、普通選挙の要求が高まり、政治だけでなく教育や文学、芸術方面にも大きな影響を与えた。

《教育》

明治五年（一八七二）学制が発布され、義務教育と公立学校の原則が確立されたが、就学率が九割台に達するのは明治三十年代の半ばになってからであった。

明治六年の鳥取変則中学に始まる中等教育は、明治十九年（一八八六）に一県一中学で鳥取中学校だけとなるが、同三十二年（一八九九）に米子に、同四十二年（一九〇九）に倉吉に中学校が開設された。四十三年（一九一〇）には鳥取商業が、また十八年には倉吉農学校が全国に先駆けて県立となった。二十一年（一八八八）には婦人会による鳥取女学校が開校し、三十年（一八九七）に鳥取市立高女となった。さらに、明治四十三年には遠藤董らにより鳥取盲唖学校が開校された。

大正十年（一九二一）に開校した鳥取高等農業学校は、砂丘の開発とその利用、**二十世紀梨**や因伯牛の研究などに貢献した。

《産業の変遷》

明治も半ばを過ぎると、産業における近代化が軌道に乗りだしていく。なかでも木綿は、江戸時代より鳥取を代表する重要物産で、明治に入っても西部を中心に盛んであった。明治半ば以降、輸入綿糸の急増と良質で廉価な綿布に対して、紡績糸を主原料とするようになり綿作は衰退する。

その一方で、鳥取、倉吉、米子に蚕種検査所を、県立農事試験場に蚕種製造所が設けられ、鳥取県は全国有数の養蚕地域となった。これにともない、県内各地に製糸工場が作られた。明治後期になると工場はしだいに機械化され、蒸気機関を使用して大規模工場が設立された。しかし、製糸業は第一次世界大戦の戦後恐慌以降、衰えを見せ、大正期には県外の大製糸資本にとってかわられる。

倉吉農学校や県立農業試験場の設立、巡回教師による改良普及活動などによって、農業の近代化が図られた。また、中井太一郎による農事改良は全国に普及し、稲作の能率化に大きな役割を果たした。

機械船の導入に伴い、沿海漁業から沖合漁業へと漁業も近代化された。なかでも奥田亀造、徳田平市兄弟は角輪組を組織し、朝鮮半島を中心としてトロール漁を開始した。

日野郡の製鉄業はすでに幕末の開港以来、安い外国産の輸入により大きな影響を受けていた。根雨の近藤喜八郎は旧式の製鉄から近代的な製鉄業への転換を図り、二部（にべ）村上代に福岡山製鉄所を建設し、蒸気機関を備えて操業を開始した。明治三十七年（一九〇四）には米子に近代的工場である米子製鋼所が坂口平兵衛らにより発足された。

また、倉吉の稲扱千歯（いなこきせんば）は江戸時代より鳥取藩の特産として広く全国に普及していた。**山陰線**（現山陰本線）の開通とともにさらに商圏を広げたが、第一次大戦後、足踏式回転脱穀機の登場により稲扱千歯は大正十一年（一九二二）に姿を消した。

鳥取県では、元来、鳥取藩の御用紙として**因州和紙**が作られていた。

明治二十年（一八八七）、県は高知から教師を招き、三椏（みつまた）栽培と土佐の製紙法の普及のため、佐治村と倉吉市に製紙伝習所を開設した。改良製紙法が在来技術にとってかわった。さらに明治二十九年（一八九六）以降、蒸気機関が導入され、和紙生産も近代化が図られた。しかし、生活様式の変化とともに和紙の占める位置は大きく後退し、ほとんどが機械生産による安価な洋紙にとってかわられた。

【鳥取県の自然・風土】

鳥取県の地形、地質

鳥取県の面積は三、五〇七平方キロメートルで、東西に約一〇〇キロメートルと長く、南北には比較的短く約四〇キロメートルである。南に中国山地が位置し、県内の河川はすべて北の**日本海**に注いでいる。

鳥取市、米子市は、プサン（韓国）―アルジェ（アルジェリア）―オクラホマ（米国）と同緯度に位置し、経度ではウラジオストク（ロシア連邦）、オーストラリアの中央砂漠とほぼ同じ位置にある。

山地の面積が、県全体の八十六パーセントに達する。鳥取県を東部、中部、西部と分けることが多いが、それぞれに大きな河川、平野、砂丘地があり、火山がそびえ、平野には城跡の建っていた孤立丘がそびえている。**千代川**の上流部には八頭の山地、**日野川**の上流域には日野の山地がある。

鳥取県を構成する地質は山地に多い三郡変成岩で、全県的には花崗岩質の岩石が多いが、第三紀層が鳥取平野の南と米子市の南方に発達している。**鉢伏山**（はちぶせやま）安山岩や**大山**（だいせん）、**扇ノ山**（おうぎのせん）溶岩は火山岩である。砂丘や砂州（さす）は最も新しく第四紀にできた。

花崗岩地では砂鉄を集めるかんな流しが盛んに行われた。鳥取県には豊富な水資源があり、表流水、地下水の多さは地形と気象の特質がもたらしたものであり、温泉の豊富さも地質に関係している。景観にも恵まれ、県内には多くの名勝、旧跡、天然記念物があり、国立公園、国定公園、県立公園および自然環境保全地域がある。なかでも大山、**鳥取砂丘**と**浦富海岸**、温泉は鳥取県の代表的な観光地となっている。

鳥取県のなりたち

地質時代				できごと	該当する主な地層
1万年前	新生代	第四紀	完新世	砂州の形成 平野の形成	クロボク、新砂丘（クロスナ）
			更新世	**砂丘の形成** 段丘の形成 **大山火山活動**	北条砂丘・鳥取砂丘 大山火山灰層
175万年前		新第三紀	鮮新世	中国山地の上昇 火山活動 深成作用	扇ノ山、氷ノ山火山岩類、鶴田玄武岩 長砂流紋岩
530万年前			中新世	日本海域の縮小 日本海の拡大 **日本海の誕生** 海底火山活動	三朝層群 三徳累層 鳥取層群、多里層 小鹿累層
2300万年前 6500万年前		古第三紀			因幡期貫入岩類
	中生代	白亜紀		深成作用 陸化・火山活動	用瀬期貫入岩類
		ジュラ紀			
2億4500万年前		三畳紀		変成作用	
	古生代			海の時代	八東層・智頭層・志谷層
5億4000万年前					片麻岩類（溝口町）

鳥取県の気候

鳥取県は**日本海**に面し、太平洋側の各地域と比べると、冬季の日照時間や降水量に大きな差が見られる。

冬季は、シベリアの高気圧から吹き出す寒冷で乾いた北西の季節風が、日本海をわたる間に水分を補給し、中国山地を上昇する際に雲を発生させ、日本海側に雨や雪をもたらす。このため、冬季は降水量が多く、年に何度か大雪が降ることもある。日照時間も少なく日中の気温も低いが、雲に覆われるため夜間の冷え込みはそれほど厳しくない。大陸の高気圧が強く張り出す時は、太平洋側は晴天で空っ風が吹き抜けるのに対し、日本海側は鉛色の空に、北西の季節風が吹き抜け、時には雷雨や雪を降らせる。特に県東部や山間部では降水量が多く、雪も多い。

また、沿岸部と山間部では、気温や降水量に差が見られる。夏は、北海道を除く日本列島全体が、太平洋高気圧の影響を受け、高温多湿となり、冬季のように日本海側と太平洋側との差異は認められない。年平均の気温は、日本海を流れる対馬海流の影響を受け比較的温暖である。

日本海

アジア大陸の東縁に位置する縁海の一つ。大陸縁辺で島や半島に囲まれた海を縁海とよび、アジア大陸東縁ではほかにオホーツク海や東シナ海などがある。

日本海は、その中央部の海底の高まりである大和海嶺～朝鮮海台を境に北部の日本海盆と南部の大和海盆・対馬海盆に分けられる。日本海盆は水深三、七〇〇メートルに達し、海底は厚い堆積物により平坦で、地殻は薄く大洋的である。

これに対して、大和海盆や対馬海盆は、水深約二、〇〇〇メートルとより浅く、海底の地形には起伏があり地殻は大陸と海洋の中間的な性質をもつとされる。大和海嶺は、大和堆と北大和堆からなり、最も浅い所の水深は、それぞれ二三六メートル、三九七メートルである。この高まりの延長は、隠岐諸島をのせる隠岐海脚（尾根状の海底の高まり）を経て山陰海岸へと連なっている。

日本海の成因については、もともと大陸であった所が削剥され陥没して海になったという陥没説、あるいは大陸の縁辺に裂け目ができそれが拡大して海になったという海底拡大説などがある。いずれの場合も、およそ二千五百万年前の中新世初期に始まったとする意見が強い。

日本海と周辺の海は、間宮海峡、宗谷海峡、対馬海峡など水深が二〇〇メートルより浅い海峡で繋がっているが、海水面が低下した氷河時代にはこれらの海峡部は陸化し、日本海は閉ざされていたと考えられている。

現在、この日本海に対馬海峡や朝鮮海峡を通じて南方から対馬暖流が流入し、冬季には大量の水蒸気を発生して日本海沿岸部の豪雪の原因となっている。

また、流入した暖流と日本海固有の冷水は混合することなく潮目を形成し、その付近はプランクトンが豊富であり、良好な漁場となっている。

県内の国立・国定公園

【山陰海岸国立公園】

鳥取砂丘から京都府網野町にいたる国立公園。全長は七五キロメートル、陸地面積は八、七八四ヘクタール。昭和三十八年（一九六三）七月に国立公園に指定された。鳥取県・岩美町から兵庫県・竹野の間には、**日本海**の荒波がつくった断崖、岩礁、小島などの変化に富んだ見事な海岸が約一五キロメートルにわたって続いている。岩美町の**浦富海岸**は、「山陰の松島」といわれ洞門、洞窟、奇岩などが多く見られ、国の天然記念物にも指定されている。昭和四十六年（一九七一）一月には、田後地先の海面九・八ヘクタールが海中公園に指定された。

また、浦富海岸の東に広がる鳥取砂丘は東西一六キロメートル、南北二キロメートルの海岸砂丘である。ここでは砂簾、砂柱、風紋といった自然がつくる砂丘独特の現象や植物を見ることができる。

【大山隠岐国立公園】

中国地方の最高峰・**大山**をはじめ**蒜山**、三瓶山などの山々とその麓に広がる高原、島根半島、隠岐島からなる国立公園で、面積は三五、〇五三ヘクタールである。

昭和十一年（一九三六）二月に大山は「大山国立公園」として指定され、昭和三十八年（一九六三）七月に蒜山や隠岐島まで拡大し、名称も「大山隠岐国立公園」に改められた。そして、平成十四年（二〇〇二）三月にはカタクリの自生地として知られる毛無山やブナ、ミブナラの自然林がのこる**宝物山**も含まれた。大山は、春は新緑、夏は登山、秋は紅葉、冬はスキーと一年を通じて楽しむことができる。また、古くより山岳仏教が盛んでいろいろな史跡や文化財も多い。

【氷ノ山後山那岐山国定公園】

鳥取、兵庫、岡山三県にまたがり、中国山地の東端に位置する。面積は四八、八〇三ヘクタール。昭和四十四年（一九六九）四月に国定公園に指定された。

中国山地第二の高峰・氷ノ山を中心に**扇ノ山**など千メートル級の山々が続く。鳥取県では東から河合谷高原、扇ノ山、氷ノ山、那岐山などが県境に沿って指定されている。氷ノ山は、ブナの原生林などすばらしい自然にも恵まれ、夏は登山、冬はスキー場と知られる。また、天然記念物であるイヌワシをはじめ**サンショウウオ**など生息する動物は変化に富んでいる。このほかにも紅葉で知られる**芦津渓**などが含まれる。

【比姿道後帝釈国定公園】

鳥取、島根、広島の三県にまたがり、中国地方のほぼ中心部に位置する。面積は七、八〇八ヘクタール。昭和三十八年（一九六三）七月に国定公園に指定された。

鳥取県内では、日南町と島根県との県境にある**道後山**と日南町と島根県境にある**船通山**が含まれる。道後山はかって放牧場として利用されていたなだらかな高原が広がり、ハイキングが楽しめる。また、ツツジの名所として知られる。

また、船通山は「八俣のおろち」で有名な素戔嗚尊の神話にちなんだ伝説や地名が残っている。山頂近くには樹令二千年といわれる天然記念物の大イチイがある。春にはカタクリの可憐な花が美しい。山頂まで遊歩道も整備され、春から秋にかけてハイキングが楽しめる。

【県の鳥】オシドリ

ガンカモ目ガンカモ科の水鳥で、冬季の雄は美しく、銀杏羽という翼の風切羽の一部はイチョウの葉の形に似ている。それを帆のように立てている。他のカモ類と異なった習性があり、開けた水面ではなく陰を好み、巣も樹木の洞中につくる。アジア東部に分布し、鳥取県ではカルガモのように渡りをする鳥と留まって営巣する鳥がいる。

冬季の鳥取県では**東郷池**や日野町の**鵜の池**をはじめ、多くのため池や河川に見られる。日野町根雨では餌付けをされた数百羽が**日野川**に集まる。

【県の花】二十世紀梨の花

（二十世紀梨の項参照）

バラ科の落葉高木で中国が原産。千葉県で作り出された一品種が県内全域で栽培され、鳥取県の代表的な特産物となった。葉は卵形、四月ごろにサクラに次いで白い美しい花を開かせる。果実は大形で球形、外皮に小斑点がある。東伯郡東郷町などの産額が多い。花の観賞価値も高い。

【県の木】ダイセンキャラボク（大山の植物分布の項参照）

イチイ科に属する低木の針葉樹。国立公園に指定されている**大山**の頂上に大群落があり学術上評価が高く、昭和二十七年（一九五二）三月、特別天然記念物に指定された。大雪地帯に適応した植物で半年は、雪の下で生きる。枝は全て、シベリヤ方面に向かっている。花は春の初めにつくが目立たず、また、雌雄別株である。挿木で増えるので植木として売られており、庭木として珍重される。

【県の魚】ヒラメ（ヒラメの項参照）

平成二年に「第一回海づくり大会」が開催されたのに合わせて公募し、県が進める「育てる漁業」の一環として生産研究が行われていたヒラメが選ばれた。淡泊な味で、高級魚として知られる。

【鳥取県の慣習・行事など】

《鳥取県の方言》

鳥取県の方言は、大きく分けて因幡・伯耆両地方で異なる。

因幡地方では、いわゆる訛（なまり）は少なく、アクセント・イントネーションともに関西地方に似通っている。港町・山間部などでは、「マメ（元気）・ダイツウ（おしゃれ）」など古語を由来とする方言がよく聞かれる。また町屋では物腰の柔らかい、接頭語・補助動詞表現が方言の特徴である。（「ゴザンス・～しナンセエ」）

伯耆地方は、一般に雲伯方言とまとめられるよう、「ダンダン（ありがとう）」など、出雲ズーズー弁と共通する方言が多く聞かれる。ラ行の子音rが発音されない、ハ行の子音hはフィと発音する、といった特徴がある「フィサシブー（久し振り）」。

《トンドウ》

小正月に歳神を送る火祭りであるとんど行事は、本来、土居（どい・デイ）と呼ばれる小字単位で、氏神境内や橋のたもとなどで行われていたが、現在は大字単位で一か所にまとめて行われるところが多い。

県内では、気高町**「酒津のトンドウ」**が知られる。ここでは、松を芯とし、注連縄を何重にも巻いた大きな円錐形の山が漁港に作られる。一月十四日の午後、裸の小学生たちが海草を手にトンド場の周りと集落の家々を清める。翌十五日は、一時、二時、三時と触れが回り、四時の漁港のサイレンとともに火が点けられる。行事に子ども組が参加し、魔除け・御祓いが加わっているのが特徴で、平成三年（一九九一）には県の無形民俗文化財に指定されている。

また、伯耆、特に弓浜地方では、講集団で歳徳神をまつり、「トンドさん」と呼ばれる神輿が巡行するのが特徴である。所によっては、笛・太鼓のお囃子つきで「伊勢音頭」などを歌いながら、獅子や天狗も加わって行列仕立てで集落内を門付けして回る。行列巡行後、円錐形に注連飾りを盛った山に火が点けられる。伯耆では、この山に大きな竹を十字に刺したり、扇子や紙製の鯛を飾ったりと派手なものが多い。

《正月行事》

因幡、伯耆の山間部では、俵を二つ置いた上にムシロを敷き、桶を載せる歳徳神飾りがみられる。この桶を「歳桶」と呼び、一年十二か月を表す米十二合をはじめ、栗・ミカン・昆布・田作り・串柿・お金を入れる。その他、伯耆地方の山間部には、鏡餅の古型とされる、おむすびを餅でくるんだ「力餅」を供える習慣も残っている。なお、この「歳徳神」を納戸に祀る所もある。

正月二日は、仕事初めで、縫い初め・書き初めなどが行われる。ところによっては鍬初めなどを行う。七日は七草粥とともに鳥追いが行われる。

趣きの違ったところでは、境港市竹内に伝わる「オコナイ」行事がある。これは、大きな鏡餅を薬師堂に奉納する行事で、仏教の法会と農耕儀礼が習合した仏教民俗行事である。

《盆行事》

八月七日ごろから十三日くらいまで、かつては県内各地で盆市が立ち、盆を迎えるためのゴザ、オガラ（アサキ）、ボンゲタなどが売られた。鳥取県東部では、初盆を迎えた家の墓地に青い竹の花立てを贈る習慣があり、現在でも竹売りの姿が見られる。

十三日の仏迎えでは、家の前にシャーラー棚と呼ばれる餓鬼仏を供養する棚を設ける。夕方には、墓、続いて家の前で線香やオガラに火を点けて先祖霊を家へ招く。集落全体で仏迎えをする岩美町太田では、マンドウが点けられる。マンドウとは、竹を釣り鐘形に細工し、百八本のロウソクをつけたもので、初盆を迎えた墓前に立て、その前で女性たちが御詠歌や般若心経をあげる。

十五日から十六日にかけて行われる仏送りでは、シャーラー棚や仏壇の供え物を川や池、海に流す。なかでも、中山町では、高さ四メートルにおよぶ藁のたいまつを作り、墓前で焼いて仏を送るマンドウ行事が町内各地に伝わっている。また、赤碕町では、新仏の位牌を舟に乗せて海に流すシャーラー舟の行事もある。

【鳥取県の交通】

鳥取県は東西に長く、**日本海**に沿って走る**ＪＲ山陰本線**と国道九号が主要な幹線である。鉄道は、山陰本線から山陽方面と鳥取県をつなぐ**ＪＲ因美線**と**伯備線**が分岐している。また、境港方面へは**境線**が結んでいる。平成六年には、**智頭急行**が営業を開始し、関西方面への移動時間が大幅に短縮された。

道路網は、中国横断自動車道岡山米子線が全通し、山陽方面へつないでいるほか、現在、鳥取市―松江市間をつなぐ山陰自動車道の整備が進められていて、一部（大山町と安来市間）が開通し、鳥取県と島根県が初めて自動車専用道路で結ばれた。「鳥取―米子間一時間構想」の実現に向けて期待が高まっている。また、関西方面をつなぐ中国横断自動車道姫路鳥取線の整備が始まり、高速道路網の拡大がさらに図られている。

また、鳥取県には二つの空港があり、いずれも市街地から近く利用の便が良い。東京、福岡、名古屋の各都市を結んでいる。

鳥取空港　鳥取市湖山　ＪＲ鳥取駅より空港バスで十五分

鳥取空港は、鳥取市街地から約七キロメートルの距離に位置し、**日本海**に面している。県東・中部および兵庫県北部をカバーしている。現在は、鳥取―東京便が定期運航している。

鳥取市に定期航空路開設が認可されたのは、昭和六年（一九三一）十一月七日のことで、城崎（きのさき）に本拠をおいた日本海航空株式会社によるものであった。空路は、三菱Ｍ・Ｃ第一号機（水上飛行艇）による円山（まるやま）川～湖山池間であった。しかし折からの満州事変と不況のため未就航に終わった。

第二次世界大戦中、湖山砂丘裏に労働奉仕でできた湖山飛行場は、陸軍九八型グライダー輸送機のテスト飛行場となり、昭和十九年（一九四四）には陸軍練習機ユングマン五〇機の練習場となった。

ついで、戦後の昭和三十二年（一九五七）五月二日、市営鳥取空港の開設が許可され、Ｇ級不定期飛行場として同年九月二十一日開港式が行われた。以来極東航空のＤＨ・タブ一〇人乗りが、週三回就航したが、経営状態は芳しくなく、また、滑走路の不足、無線施設の不備、乱気流と保安林の障害などの理由から休航となった。

鳥取県は地域開発のためにも近代的地方空港の再建計画にのり出し、同三十八年（一九六三）調査を開始し、三十九年（一九六四）に運輸省に許可を申請した。続いて同年二月二十日に設置が許可され、海岸にほぼ並行した保安林地区に工事を開始し、同四十二年（一九六七）三月に完成した。四十二万平方メートルの用地の大部分は鳥取市の提供で、一部は鳥取大学の演習林を借用したものであった。ここに総事業費二億六千万円（内半額県負担）で長さ一、二〇〇メートル、幅三〇メートルの滑走路が完成した。併せて、民間出資の空港ビルや国の保安事務所も整備され、鳥取空港は日本にある地方空港二十九のうちの一つになり、三種Ｆ級に格付けされた。こうして、昭和四十二年七月三十一日には盛大な鳥取空港開港式が行われた。

昭和四十四年（一九六九）には鳥取―大阪便が就航した。（なお、大阪便は現在、廃止されている。）さらに安全性確保のために、一、五〇〇メートルに滑走路が延長された。昭和六十年（一九八五）七月滑走路が一、八〇〇メートルに延長され、鳥取―東京間を結ぶ定期航路にジェット機が就航した。さらに、平成二年（一九九〇）七月には滑走路が二、〇〇〇メートルに延長され、中型ジェット機の就航が可能となり、初の国際チャーター便が就航した。また、同年十二月から、鳥取―東京便は一日三往復に増便された。

平成十三年（二〇〇一）十二月から翌年二月まで、名古屋―鳥取―福岡

便の季節運航が実施されるなど、利用拡大が図られている。

米子空港　米子市大篠津　ＪＲ米子駅前より空港バス約三〇分

米子空港は、**弓ヶ浜半島**の砂丘地に位置する。県中・西部および島根県東部をカバーしている。現在は、東京、名古屋、福岡の国内三路線が定期運航しているほか、平成十三年（二〇〇一）四月からは、県民の長年の願いであった国際定期便（米子―ソウル）も就航し、山陰の空の玄関として期待が高まっている。

米子での民間空路は、昭和十三年（一九三八）六月、三柳（みつやなぎ）に空港が完成し、同十四年（一九三九）十月十日以降米子―大阪間に国内空路が開設された。ついで十五年（一九四〇）四月一日からは、朝鮮半島への日本海横断空路が開かれた。

しかし、昭和十六年（一九四一）以降、空港は陸軍航空隊の基地に転用され、被爆して荒廃した。一方、大篠津付近におかれた海軍航空隊美保基地は、終戦後、米軍基地となった。昭和二十六年（一九五一）一月以降、空路開設が可能となり、同二十九年（一九五四）十一月から極東航空が、基地の一部を借りて米子―大阪間に空路を開いた。

昭和三十年（一九五五）からは全日空が運航し、同三十一年（一九五六）二月には米子空港ビルが開設され、本格的な空港としてスタートすることとなった。ついで同三十八年（一九六三）六月一日には、米子―広島線が、同年十月十日には、米子―東京線があいついで新設された。

さらに昭和四十年（一九六五）四月一日から大阪線には、旅客機ＹＳ１１機が運航するようになり、同年八月一日以降は米子―隠岐間も開かれた（現在両路線とも廃止）。平成三年（一九九一）四月には米子―名古屋線が就航した。

平成八年（一九九六）三月には滑走路が二、〇〇〇メートルに延長され、さらに平成十三年（二〇〇一）には二、五〇〇メートル化に向けての実施調査計画が始まった。

また、国際定期便は、週三便運航し、米子とソウルを約九十分でつないでいる。

◉鉄道

山陰本線

東西の両文化地帯を結び、山陰の動脈として重要な機能を持つ山陰本線の延長は、京都から下関まで約六八〇キロメートル、鳥取県内だけで一一〇キロメートルに及ぶ。

山陽線の全通が明治三十四年（一九〇一）であるのに対し、境を起点として御来屋まで開通したのが明治三十五年（一九〇二）十一月、そして鳥取まで延伸されたのは、明治四十年四月であった。鳥取京都間の全通は明治四十五年（一九一二）三月であった。山また山のトンネルや特に余部（あまるべ）の鉄橋架設（日本最高四〇メートル）等の工事は至難をきわめたが、山陰は海岸線に沿っているので、**日本海**の美しい男性的な景観が旅客を楽しませる。

また、沿線には保津（ほづ）峡、城崎温泉、**浦富（うらどめ）海岸**、**鳥取砂丘**等の**山陰海岸国立公園（さんいんかいがんこくりつこうえん）**、県内各地の温泉群、**大山（だいせん）**、美保ノ関、出雲大社と著名な観光地がある。

しかし、近年、新幹線、飛行機、長距離バスなどの整備が進むにつれ利用客が減少している。

智頭（ちず）線

智頭線は、兵庫県上郡（かみごおり）町と八頭郡智頭町の間五六・一キロメートルで、杉木立や美しい景観が続く。智頭線は現在、智頭鉄道急行株式会社が運営に当たっているが、当初は国鉄建設線として建設が進められていたものである。

国鉄建設線智頭線（智頭～上郡）は、明治二十五年（一八九二）から鳥取・姫路を結ぶ鉄道として建設運動が展開されてきた。

昭和に入りようやく智頭・上郡間が建設予定線に編入された。昭和三十

六年（一九六一）五月、鉄道建設審議会において調査線に、続いて昭和三十七年（一九六二）三月に着工線に採択された。この鉄道は鳥取県東中部と阪神地方とを結ぶ最短路線で、**大山**、**皆生**、**三朝温泉**などの豊富な観光資源や、山陰地方の農林水産資源を京阪神地帯に結びつけ、山陰地方の後進性を打開する主要な動脈となるもので、関係者が早期建設を要望していた路線である。

昭和四十一年（一九六六）、工事実施計画が認可されたが、昭和五十四年（一九七九）には閣議で了解された「日本国有鉄道の再建」を受けて工事中止が決定された。

昭和六十一年（一九八六）五月、鳥取県、岡山県、兵庫県および関係市町村や民間企業が株主となり智頭鉄道株式会社が設立され、昭和六十二年（一九八七）二月に工事が再開された。

平成六年（一九九四）六月には社名を智頭急行に変更し、同年十二月に開業した。これにより鳥取駅と大阪駅は二時間三十分で結ばれた。

因美線

因美線は鳥取、東津山駅間七〇・八キロメートルを結び、姫新線、津山線によって姫路・岡山に通じ山陰・山陽の横断連絡線としてその重要度は高い。昭和七年（一九三二）七月に全通した。

沿線には、**氷ノ山後山那岐山国定公園**地内の那岐山、紅葉の**芦津渓**のほか、**因州和紙**と**佐治川石**の佐治村、**流しびな**の用瀬町、**アユ**と**霊石山**、**牛ノ戸焼**の河原町など、名勝・史跡や名物が多い。

若桜線

若桜線は、因美線郡家駅から若桜駅に至るローカル線である。昭和五年（一九三〇）十二月に全通した。昭和六十二年（一九八七）から若桜町などからなる第三セクターによって運営され、地元住民の足として重要な役割を担っている。

沿線には**氷ノ山**や**岩屋堂**をはじめ、**花御所柿**の果樹園地帯、郡家町の土師百井廃寺塔跡や**因久山焼**など名勝史跡の地も多い。

伯備線

伯備線は伯耆大山駅から、岡山県倉敷駅まで一三八・四キロメートルを結び山陰・山陽を横断する幹線として重要な役割を担っている。昭和三年（一九二八）十月に全通した。このため広島・岡山・四国方面との連絡がたいへん便利になり、さらに山陽新幹線開通後は、**大山**・**皆生温泉**・出雲大社方面と京阪神、中東部日本を結ぶ動脈として重要性を増した。

また、特急・急行などが増強され電化が図られるなどして、これらの地方との間は一層時間的に短縮されてきた。

沿線には**比婆道後帝釈国定公園**をはじめ**奥日野県立公園**、**オオサンショウウオ**生息地、**大山**など、多くの史跡・名勝・天然記念物がある。

境線

米子市から境港市までの一八キロメートルを結ぶローカル線である。明治三十五年（一九〇二）十一月に開通した山陰最初の鉄道の主要区間である。なお、境駅―米子駅が「境線」と命名されたのは明治四十二年のことである。

鳥取県の鉄道敷設は、境港が良港であることから建設資材を海上輸送し、ここから陸上輸送するため、明治三十三年（一九〇〇）十月から境港を起点として始められた。

米子駅から境港駅までを約四十分で走行している。**弓ヶ浜半島**を縦断し、沿線には、米子**白ネギ**やさつまいもなどの産地がある。

交通の主な歩み

年号	内容
明治三十五（一九〇二）	山陰最初の鉄道開通（境駅～御来屋駅）
明治四十五（一九一二）	山陰線開通
昭和三　（一九二八）	伯備線開通
昭和五　（一九三〇）	若桜線全通
昭和七　（一九三二）	因美線全通
昭和三十　（一九五五）	戸倉トンネル開通
昭和三十二（一九五七）	鳥取市営飛行場開設
昭和三十六（一九六一）	国道九号白兎トンネル開通
昭和三十八（一九六三）	米子―東京便就航
昭和四十　（一九六五）	境港に一万トン岸壁完成
昭和四十一（一九六六）	大山環状有料道路開通
	国鉄智頭線起工
	鳥取・米子―大阪間特急バス運行開始
	三朝高原有料道路開通
昭和四十二（一九六七）	県営鳥取空港開港
昭和四十四（一九六九）	鳥取～大阪便就航
昭和四十五（一九七〇）	蒜山大山有料道路できる
	蒜山大山スカイライン開通
昭和四十六（一九七一）	国道五三号改修、黒尾トンネル開通
昭和四十七（一九七二）	境水道大橋開通
昭和四十八（一九七三）	鳥取バイパス、津ノ井バイパスの完成
昭和四十九（一九七四）	国道一八〇号全線開通
昭和五十三（一九七八）	鳥取駅高架完成
昭和五十四（一九七九）	鳥取―東京便就航
	人形トンネル・志戸坂トンネル開通
昭和五十六（一九八一）	米子空港にジェット機就航

年号	内容
昭和五十七（一九八二）	国鉄伯備線・山陰本線（伯耆大山～知井宮間）電化開業
昭和五十九（一九八四）	米子―福岡便就航
昭和六十　（一九八五）	倉吉線廃止
	鳥取空港にジェット機就航
昭和六十一（一九八六）	鳥取港が商港として本格スタート
昭和六十二（一九八七）	智頭線建設工事再開
	若桜鉄道開業
昭和六十三（一九八八）	鳥取・米子―東京間に高速バス運行
平成二　（一九九〇）	鳥取空港の二、〇〇〇メートル滑走路完成
	中型ジェット機が就航
	初の国際チャーター便就航
平成三　（一九九一）	米子～名古屋便就航
平成四　（一九九二）	国道九号北条バイパスが全線開通
	米子自動車道全線開通
平成六　（一九九四）	一般国道四三一号全線開通
	智頭線（智頭～上郡）開通
平成七　（一九九五）	境港―中国・大連間に定期航路開設
	境港―韓国・釜山間に定期航路開設
平成八　（一九九六）	米子空港の二、〇〇〇メートル滑走路完成
	中型ジェット機就航
	米子～札幌便就航
平成九　（一九九七）	国道三七三号志戸坂峠開通
	国道三一三号犬挟峠開通
平成十一（一九九九）	米子～福岡便が就航
平成十三（二〇〇一）	国際定期便（米子―ソウル）が就航

自然の恵みと味
鳥取県のおいしい食材たち

《魚介類》

松葉がに

鳥取県の代表的な冬の味覚の一つ松葉がには、成長したズワイガニの雄（おす）のことで殻が固く、ハサミは大きく、ずっしりと重い。

鳥取県のズワイガニ漁は、十一月上旬頃から三月まで山陰沖の漁場で行われる。六〇～九五トンの漁船が、長さ約二キロメートルに及ぶ二本のロープの先に袋網をつけて海底のカニをすくいとる「沖合底曳網」という方法で行われ、主に**鳥取港**、**網代**（あじろ）**漁港**、**田後**（たじり）**港**、**境漁港**に水揚げされる。

鳥取県で松葉がに漁が本格的に始まったのは大正時代に入ってからで、明治二十二年（一八八九）に但馬から県東部にこの漁法（無動力）が伝わったのがきっかけである。

近年、松葉がにが江戸時代から食べられていたことが明らかとなった。「松葉がに」という名称が登場する最古の文献である弘化二年（一八四五）の『鳥取藩町目付日記』には、祝宴の献立に「松葉がに」が含まれていたことが記載されている。

松葉がには、刺身や、茹でたり、焼いたりして食べたり、白菜を入れてカニすき（ちり）で食べたりする。また、カニみそと呼ぶカニの内臓は、赤みそと砂糖、酒を少々入れて甲羅（こうら）のまま火にかけて煮て、炊きたてのご飯にまぶして食べるとおいしい。

鳥取県では、平成十二年（二〇〇〇）に十一月の第四土曜日を「松葉がにの日」と定めた。この日を中心に県内の各産地では多彩なイベントが開催される。

若松葉がに

ズワイガニは、脱皮を繰り返して成長していく。脱皮してまもない雄（おす）のカニは、殻が柔らかくて軽く、また、肉に比較的水分が多いため、以前は「水（みず）ガニ」と呼ばれた。一尾当たりの価格も松葉がにの十分の一程度である。

平成十三年（二〇〇一）三月から、鳥取県松葉がにＰＲ推進協議会では、「水ガニ」を「若松葉がに」と名称変更し、身が柔らかで食べやすく、おいしいこのカニのイメージアップを図っている。

親がに

成熟したズワイガニの雌（めす）で、「子持ちガニ」とも呼ばれる。松葉がにに比べ値段も手頃なことから、鳥取県ではかかせない冬の食材である。

産卵後、腹部に抱える成熟した卵は「そとこ」、甲羅の中の卵巣は「うちこ」と呼ばれる。

短冊切りした大根と親がにを入れたみそ汁は、県内でよく食べられる家庭料理である。カニの香りやおいしさを無駄なく味わうことができる。

ベニズワイガニ

ベニズワイガニは、昭和四十五年頃からイカ釣漁業を行わない時期の漁として始まった。

九月から翌年六月までの十か月間に、直径一・二～一・五メートルのかごに餌となるサバを入れて、水深八〇〇～一、八〇〇メートルの海底に沈めて漁獲する。

境港には、全国のベニズワイガニの約七割が水揚げされ、その多くはカニ爪肉、棒肉などに加工され流通している。

スルメイカ

日本でよく食されるイカに、スルメイカ、ヤリイカ、コウイカ、ホタルイカなどがあるが、境港で一番多

くとられるのはスルメイカである。スルメイカの寿命は一年で、この間に三〇センチ位まで成長する。新鮮なものには胴に黒褐色の斑点があり、その斑点を指先ではじき明滅すると、活きの良い証拠である。これは「イカの提灯」と呼ばれる。

イカ漁は、集魚灯でイカを集め、疑似餌で釣り上げる。主な漁場は大和堆や山陰沖で、魚群を追い北海道まで北上する。

スルメイカは、他のイカに比べ利用範囲が広く、刺身、フライ、塩辛、干物などで食べられる。**田後・網代漁港**で作られる「甘塩スルメ」は、薄味で、肉厚、そして柔らかい。あぶって引き裂いて食べるほか、天ぷら、フライなどにする。

県中・西部の海沿いの地区では、「イカ飯」が食べられる。イカの足、ワタを抜いて洗い、その中に、一晩水につけたモチ米と細かく刻んだ人参、干し椎茸などを混ぜたものを詰めて、しょうゆ、砂糖で味付けしただし汁で炊き上げる。

また、網代漁港などでは、イカの子をすり、小麦粉を入れて団子や餅の形にして熱湯で茹で、焼いて生姜じょうゆで食べたり、野菜と一緒に煮たりして食べられている。

ハタハタ

県東部の**田後、網代漁港**を中心に、九月から翌年五月にかけてハタハタが水揚げされる。

ハタハタ漁は、秋田沖の漁獲が不振となった昭和五十年代後半から盛んに行われるようになり、現在、鳥取県の水揚量は全国で上位にある。

各漁港では、ハタハタを甘塩で一夜干しした「干しはた」が作られている。そのほかにもハタハタすしや煮付け、小さいものは南蛮つけにして食べられている。

ヒラメ（県の魚参照）

ヒラメは、鳥取県周辺の砂浜海域に生息する代表的な魚であり、平成二年には「県魚」となった。

三～五月には、大型のものを刺網や一本釣で、春から秋には小型底曳網で漁獲される。県内の各漁港で水揚げされる。

県では、「獲る漁業から育てる漁業」を目指し、昭和五十六年（一九八一）に栽培漁業センターを開設した。ここでは、ヒラメをはじめ、クルマエビなどの稚魚の生産が研究され、大量に種苗放流を実施するなど、資源の増殖と安定した漁業に向けた取り組みがなされている。

また、平成三年（一九九一）、世界初のクローンヒラメの開発に成功している。

トビウオ

トビウオは「アゴ」とも呼ばれる。能登沖にある産卵場を目指し、対馬暖流にのって**日本海**を北上する群を、まき網、刺し網、流し網で漁獲する。県内では主に赤碕港、**田後港**、夏泊漁港、酒津漁港で水揚げされている。

トビウオは、刺身にしてカレギをまぶして食べたり、つみれにしてみそ汁に入れたり、焼いたりする。

また、鳥取県の名産の一つに「あごちくわ」がある。トビウオの身をすり、味付けしたものを竹に巻きつけて焼いたもので、こうばしさとあごの豊かな香り、そして歯ごたえのある食感が特徴である。

イワシ

イワシは近海で獲れる比較的庶民的な魚である。境港は、周辺に処理能力の高い水産加工施設が多くある

ことなどから、マイワシの水揚量が、平成四～八年の五年間、日本一であった。漁は、大中型まき網業で、通年行われる。しかし、近年、マイワシ資源が激減しており平成十三年（二〇〇一）には境港では全く獲れなくなってしまった。

マイワシを骨ごと包丁でよくたたき丸めて作ったイワシ団子は、だし汁で煮たり、みそ汁に入れたり、揚げたりといろいろな味わい方ができる。

また、マイワシより魚体が小さく、沿岸部に分布するカタクチイワシで煮干しなどが作られている。

サバ

日本海のほぼ全域に生息し、鳥取県でも水揚量の多い魚である。煮たり、焼いたりと調理法もさまざまである。

サバは、血合肉の割合が高く、魚体の大きさに比べ内臓量が多いため、鮮度が落ちやすい。このようなことから刺身など生で食べられることは少ない。東部の酒津（さけのつ）漁港では鮮度の良い間に、サバを背開きにして甘塩で味をつけた「塩サバ」や竹ぐしにさして素焼きにした「焼きサバ」を加工している。「塩サバ」は焼いて食べ、「焼きサバ」は軽くあぶってしょうゆをつけたり、ネギと煮たりして食べる。

郷土料理の「ねぶかめし」は、身をほぐした焼きサバとねぶか（ネギ）を砂糖、しょうゆ、酒で甘辛く煮て、ごはんに混ぜたものである。

サバには脳の働きをよくするといわれるＤＨＡが多く含まれており、栄養豊かな魚である。

岩ガキ

初夏から八月末にかけて、県内の磯では潜水によるイワガキ漁が行われる。一般的に、「カキは冬のもの」と思われがちであるが、**日本海**のイワガキは夏に旬を迎える。殻付きのまま、レモン汁をたらして食べると、「海のミルク」といわれるにふさわしい濃厚な味が広がる。

天然礁のみで行われていた漁獲が、平成に入り人工増殖場でも本格的に始まった。県内の各漁港で水揚げされ県内のスーパーや鮮魚店、直販所などで販売されている。鳥取県の夏の味覚の一つである。

アユ

県内の三つの一級河川（**千代川**、**日野川**、**天神川**）では、六月一日の解禁とともにアユ漁が始まり、夏の訪れを告げる。

このアユ漁は、昭和五十年（一九七五）に千代川漁業協同組合に大規模な生産施設が設けられ、人工種苗の大量放流がきっかけに盛んになった。その後、日野川漁業協同組合にも同種の施設が整備された。これらの川では、現在、アユ資源を増やすため毎年三百万尾以上の稚魚が放流されている。

八頭郡河原町や日野郡日野町には、アユ料理の専門店もあり、アユずしなどが堪能できる。

いぎす草

「えごのり」とも呼ばれる。主に県中・西部で食べられ、赤碕漁港、御崎（みさき）漁港、御来屋（みくりや）漁港で水揚げされている。

このいぎす草をもどして、とろ火で煮とかし、容器に入れて固めた料理を「いぎす」という。薄く切り、酢味噌や辛子じょうゆ、しょうがしょうゆで食べる。海の豊かな香りと独特の歯触りが特徴である。

《農作物》

二十世紀梨

鳥取県で栽培されている梨の中心品種である二十世紀梨は、東郷町など三十二市町村で栽培され、梨栽培面積の七十五パーセントを占める。

二十世紀梨は、明治三十七年（一九〇四）に千葉県より導入された。黒斑病や天災によって、幾度となく栽培の危機に直面したが、先人の努力によって克服され、「二十世紀梨」は鳥取県の主要な特産物となり、生産量で日本一となった。

現在、京阪神を中心に全国へ出荷されている。また、東南アジア、アメリカなどに輸出され、その甘さとみずみずしさから高級フルーツとして取り扱われている。

近年、二十世紀梨の栽培面積は、後継者不足などの理由から減少しているが、二十一世紀になっても変わらぬおいしさを提供するとともに、「ゴールド二十世紀梨」など新たな梨の栽培にも取り組んでいる。

花御所柿（はなごしょがき）

花御所柿は、鳥取県東部因幡地方でのみ栽培されている品種であり、他の柿に比べて甘いことで知られる。約二百年前に郡家町の野田五郎翁が大和国から枝を持ち帰り接木したのが始まりと伝えられている。栽培が本格的に始まったのは明治時代で、現在、郡家町を中心に栽培されている。十一月下旬から十二月上旬に食べ頃を迎える。

このほかにも「富有（ふゆう）柿」「西条柿」などが栽培されている。

ぶどう

鳥取県の本格的なぶどう栽培は、明治四十年代に始まり、大正十年（一九二一）には、ぶどう組合が結成され県外に出荷している。

昭和四十年代後半から「巨峰」が導入され、県内全域に拡がった。

現在、倉吉市、北条町など中部地区の市町村を中心に、主に「巨峰」「デラウエア」「ピオーネ」の三品種が栽培され、県内及び大阪市場で販売されている。

すいか

鳥取県のすいか栽培は、明治時代に始まった。東伯郡内で「大山すいか」が導入され、大正末期には栽培面積六〇〇ヘクタールにもなった。その後、病気などによって一時栽培が途絶えたが、昭和二十五年（一九五〇）には四〇〇ヘクタールにまで回復し、現在、生産量は全国四位である。

特に、**大山**（だいせん）の裾野に広がる黒ぼくの丘陵地で栽培される「大栄スイカ」は、全国でも三位の出荷量を誇る。このほか倉吉市などで、ハウスやトンネル栽培が行われ、六月上旬から七月下旬に出荷、主に京阪神で販売されている。

ながいも

栄養価が高い食材として知られるながいもは、昭和二十七年（一九五二）に砂丘地のかんがい施設の整備が始まったことにともない、盛んに栽培され始めた。

現在、大栄町など**北条砂丘**地を中心に五一ヘクタールで栽培されている。近年は、貯蔵施設の利用によって周年出荷し、主に九州で販売されている。

らっきょう

らっきょうは、**鳥取砂丘**で栽培される代表的な作物である。

明治四十二年（一九〇九）に一七ヘクタールで栽培されていたという

なつかしいふるさとの味

記録があるが、本格的に栽培が始まったのは、防風林とかんがい施設が整備された終戦後である。

砂地で栽培されるらっきょうは色が白く、きれいに仕上がる。最近は、健康食品として人気がある。現在、京浜及び京阪神で販売され、生産量は全国第二位である。

白ねぎ

白ねぎは、県内の砂丘地で栽培されている代表的な作物の一つであり、昭和四年頃に弓ヶ浜で栽培が始まったと言われている。

現在、「春ねぎ」「夏ねぎ」「秋冬ねぎ」と周年栽培が可能となり、米子市から境港市にかけての弓ヶ浜を中心に栽培され、主に京阪神に出荷されている。

《酪農製品》

鳥取和牛

鳥取県の和牛飼育の歴史は古く、江戸時代、「大山牛馬市場」は当時の日本三大市場の一つであった。鳥取県の和牛は良好な発育、飼いやすさなどの点で評価が高く、主産地として数多くの良牛を生産してきた。これらは「因伯牛」として有名であり、各県の改良基礎牛として貢献してきた。

平成三年（一九九一）から、「鳥取和牛」として売り出されている。ふくよかな香り、まろやかな口あたり、ほどよい霜降り、あざやかな色あいと光沢など、和牛のおいしさが凝縮されている。

乳製品

県外でも高い評価を受けているものの一つに乳製品がある。**大山**のふもとの豊かな自然の中で育った乳牛の良質のミルクから牛乳をはじめアイスクリーム、ケーキなどさまざまな製品が作られ、県内はもとより京阪神でも販売されている。

県内の酪農家によって結成されている大山乳業農業協同組合は、鳥取県の乳製品製造のほとんどを担っている。

《郷土料理》

大山おこわ

鳥取県西部、**大山**のふもとで祭りや季節行事などで食べられてきた家庭料理である。もとは、大山で修行する人たちにふるまわれていた精進料理の**大山寺**のおこわが、家庭に入り現在の「大山おこわ」へと変わっていったといわれる。

もち米に、椎茸、ゴボウ、栗、こんにゃく、油揚げ、鶏肉などを混ぜて、だし汁、酒、砂糖、しょうゆなどで味付けし炊き込んだものである。

各家庭や地域よって具も異なりそれぞれの味がある。具が豊富で、栄養のバランスがよい料理である。

いただき

米子から弓ヶ浜にかけて伝わっている家庭料理である。

大判の油揚げに、米、ささがけした人参とごぼう、細かく刻んだ干し椎茸を詰めて、つま楊枝で口をふさぐ。大きめの鍋に並べて、しょうゆ、砂糖、酒、こんぶだしを注いで煮る。

かつては、祭り料理や漁師の弁当として作られていたようである。

「いただき」という名前は、みん

なで「いただきます」と言ってたべることや、頭にかぶる傘の内側のてっぺんにいれる三角錐の綿入れ（いただき）の形に似ていることに由来するといわれる。

また、「ののこ」「ののこめし」とも呼ばれる。「ののこ」とは、寒いときに着る半纏（はんてん）をさす、この地方の方言である。厚揚げにご飯が詰まったふっくらとした形容が半纏に似ていることから呼ばれているようである。

いがい飯

県内の漁村では、磯でいがい獲りが行われている。特に海が比較的穏やかになる初夏から盛んに漁が行われる。いがいは、三角型の形をした貝殻の色が黒褐色の貝で、岩礁に着生している。フランス語ではムール貝という。青谷町夏泊では、海女（あま）によるいがい漁が行われ、民宿などで食べることができる。いがいの身は味がよいことから吸い物やいがい飯に用いられる。

いがい飯は、殻から身を外し、しょうゆ、酒、みりん、だし汁などでいがいと米をたきこんだものである。あっさりとした味と磯の香りが特徴である。

ばばちゃん鍋

「ばばちゃん」とは、別名「ばば」とも呼ばれる深海魚である。学名を「タナカゲンゲ」という。

県東部の岩美町では、数年前からこの魚のおいしさを多くの人に知ってもらおうとさまざまな料理作りを行ってきた。

この「ばばちゃん」は、外見はグロテスクであるが、白身であっさり味。かつては地元の漁師の間だけで食べられていた食材であるが、今では、なべ、から揚げ、煮付けなどに調理されている。なかでも「ばばちゃん鍋」は寒い鳥取の冬を代表する味の一つになった。

ばばちゃん鍋は、地元では次のように作られている。まず、腹開きにして骨のついた片身の血合、内臓を取り除き、よく水洗いする。皮をむき、五センチ位のぶつ切りにし、湯とおしする。ばばちゃんの頭を水にいれてだしをとり、しょうゆで味をととのえ、ばばちゃんの身、豆腐、野菜を入れる。

小豆雑煮（あづきぞうに）

鳥取県内の多くの地域、特に日本海に面した市町村では、昔から正月に小豆雑煮が食べられていた。小豆雑煮が食べられる地域は、石川、兵庫、島根など日本海側の一部の地域に限られているといわれる。

各家庭で多少味は異なるものの、事前に煮ておいた小豆を水に入れ、砂糖、塩で味をととのえる。

伝統の技と美

鳥取県の工芸品

因州和紙　佐治村・青谷町

因州和紙の歴史は定かではないが、古くは平安時代の『延喜式』に**因幡国**から朝廷に紙が献上されたことが記されている。

また江戸時代には、藩の保護、奨励があり紙業が本格的に始まった。特に因幡地方の青谷地区と佐治地区は藩の御用紙を扱っていたこともあり、盛んに生産された。戦後、生活様式の変化等に伴い紙の製造に大きな打撃を受けた。

現在、県内では青谷町と佐治村で製造され、画仙紙などの書道用紙や工芸紙、染色紙の開発・生産により、他産地を圧倒し、多くの和紙愛好家や書道家に愛用されている。

また、近年伝統技術を基礎として、和紙の特性や機能性を活かし現代の生活様式などに合わせた新製品の開発もなされている。因州和紙は、昭和五十年（一九七五）には国の伝統工芸品、五十一年（一九七六）には県の無形文化財に指定されている。

弓浜絣　米子市

鳥取県西部の弓ヶ浜で織られてきた絣は「浜絣」「弓ヶ浜絣」と呼ばれ、素朴な絵柄とざっくりした風合と藍と白のコントラストが特徴である。江戸末期に弓ヶ浜で綿花の栽培が始められ、主に自家用衣料として綿布に織られていた。

江戸時代末期から大正時代にかけて絣織りと綿作りは最盛期を迎えた。江戸時代には、藩の保護と指導のもと、各農家で盛んに生産され絣の生産技術はさらに進歩した。

現在は、着物地のほかテーブルセンターやのれんなどが作られている。

倉吉絣　倉吉市

倉吉市では江戸時代から木綿が特産品として生産され、全国の商人が往来していた。そんな中で亀甲、山水、松鶴などの模様に見られるような美術的で精巧な絵絣が生まれ、明治時代には全国へと販売され、急速な発展を遂げた。

しかし、大正時代には他産地の機械化の導入により衰退していった。

昭和四十六年（一九七一）に倉吉絣保存会が結成され、継承されている。

流しびな

旧暦三月三日、災厄を人形に託して川に流す流しびなの行事が古くから鳥取県東部で行われてきた。

赤紙に胡粉で白い梅の花を描き、金の烏帽子にはかまを着けた男びなと女びなを組み合わせて、さん俵やオシキにのせたものが用いられてきた。

現在も、八頭郡用瀬町と鳥取市では毎年ひな流しの行事が開催されている。また、その愛らしさや可憐さから郷土玩具としてだけでなく、土産品としても製品化されている。

はこた人形　倉吉市

倉吉市の郷土玩具で、著名な張り子の人形である。江戸時代後期の天明年間に備後屋治兵衛が倉吉の素朴でつつましやかな娘に惹かれ、これをモデルに人形を作ったと言われる。「はこた」という言葉は「おぼこ娘」を意味する。

作り方は、桐の木型に和紙をのりで張り重ね、乾燥させて型から抜き取る。その後、胡粉で下地を塗り、泥絵の具で彩色し、にかわでつや出ししてある。かつては「ハーコサン」と呼ばれ、幼い女の子の遊び相手として求められていた。

倉吉市新町の**「赤瓦」**（伝統建造物保存地区内）で、平成十年（一九

九八）倉吉市の無形民俗文化財保持者に指定された備後屋六代目三好明氏が製作実演している。

木彫人形十二支　岩美町

約二百年前、木地師・小椋佐兵衛が作州より鳥取市吉岡に移住し、挽物を製作したのが始まりと言われている。当時、木地師は山に入って自由に木を取ることが許されており、木を求めて、全国の山を歩いていた。小椋佐兵衛の流れをくむ小椋家の七代目が、独創的なデザインによる木彫十二支を製造した。

泥絵の具で色鮮やかに彩色され、それぞれの動物の特徴をとらえた人形は、素朴な中にユニークな表情をうかがわせている。昭和三十九年（一九六四）には、年賀切手の図案に採用された。

《焼き物》

鳥取県で焼き物が始まったのは江戸時代からで、良質の土や石に恵まれた県東部と西部で盛んに行われた。特に寛政年間に始まった藩の「国産品保護開発政策」のもと、藩の中心地であった現在の鳥取市周辺では、藩の保護策を受け、多くの焼き物が作られた。

まず、**因久山**がお手懸かりとなり、以後、磁器製品開発の奨励のもと吉成焼（磁器）、浜坂焼（磁器）、賀露、浦富などの窯が創始された。

藩は、一時期、因幡における他国（他藩）の商人による売買や他国からの仕入れを禁止した。藩内の窯でまかなわれていたこともあったがやがて輸入も許され、**久能寺**などの御懸りも民営となった。

十八世紀になると、半ばころより数多くの民窯が興廃した。会見焼、**法勝寺焼**、落合焼、賀露焼、福井焼、浜坂焼、吉成焼、**浦富焼**、曳田焼、**牛ノ戸焼**などでは、日用雑器が焼かれていたが、これらがいずれも業を廃してしまった中で、昭和初め、民芸運動の指導者であった**吉田璋也**の努力で現代民窯として復興し、現在に至っている。中井窯、浦富窯も吉田の指導のもと復興した。

現在、県内には約三十の窯がある。

因久山焼（久能寺焼）　郡家町

「因久山焼」は、古くは久能寺焼といった。因久山焼という名称は、因幡の久能寺焼に由来する。

久能寺は、八頭郡郡家町の八東川と私都川が合流する付近に位置する。二つの川から運ばれて堆積した陶土は良質であった。

また、垂仁天皇に野見宿禰土蔵を造って献上したところ、天皇より土師姓を賜ったといわれ、久能寺の付近には土師百井という地名や土師神社があるなど、古代から製陶業に携わっていた人たちがいたことを示す。二百年余り前の明和年間のころに藩主・池田家に御用焼を承った。このとき京都からやってきた陶工が御室焼の陶法を伝えている。

その後、藩主の保護のもと陶法の研究が重ねられ、近江の国から招かれた陶工が信楽焼の技術を取り入れることで、現在に伝わる陶風が確立された。一時、民営になったが藩窯としての性格を担う窯であった。因久山焼には茶道具をはじめ徳利、油壷、煮皿などの日用品も多くある。

現在の因久山焼は、淡い青色と乳白色の流れ模様が基調となっていて、茶道、華道用品を中心に製作されている。

牛ノ戸焼　河原町牛戸

牛ノ戸焼は、天保年間（一八三〇～一八四四）に石州から来た職人が伝え、現在まで民窯として継承された。牛ノ戸焼は焼くと硬くしまり、堅牢で壊れにくく、水がめ、徳利、丼、小鉢などが造られている。明治から大正時代に全盛時代を迎え、因幡から美作、若桜で販売されたほか、徳利は遠く北海道まで運ばれていた。

その後、他地域の焼物に圧倒され衰退したものの、昭和初期に**吉田璋也**の指導のもと復興し、民窯陶器として全国に知られるようになった。現在、主に徳利、すり鉢などの食器や茶器、花器などの日用雑器が焼かれている。

上神焼　倉吉市上神

上神焼は倉吉市上神地方に興ったやきものをいう。中でも「伯尾山窯」「伯州尾山窯」は歴史が古い。「伯尾山」は、弘化年間（一八四四～一八四八）に地元の富豪が窯を手に入れ、本窯を築き、京都、但馬から陶工を招き茶器を焼かせたのがはじまりといわれる。その焼物には「伯尾山」と刻印された。

また、文久三年に当地へやってきた陶工が焼いた作品には「伯州尾山」と刻印されている。

その後絶えかけたが、明治二十九年（一八九六）、清水焼の名工を招いて再興されたのが亀玉山である。その後も伯面山、玉伯と廃業、再興が続いた。

現在の上神焼上神山窯元は、昭和七年（一九三二）に加賀の平野洞雲が開窯したものである。京風の作りに長い伝統に培われた地方色が取り入れられた色鮮やかな焼物が特徴である。主に、茶器、酒器、食器などが製作されている。

法勝寺焼　西伯町

法勝寺焼は、明治三十六年（一九〇三）、落合窯・松浦久治郎の弟子であった安藤秀太郎が久治郎の死後、陶業を伝承し「法勝寺焼」を創設した。

しかし、法勝寺焼のもととなる「落合焼」は伝承によると、約二百五十年前に江州（滋賀県）の陶工によって始まったと伝えられているが、寛政五年（一七九三）松浦助六が西伯郡西伯町落合に開窯し日用陶器を焼いたのがはじまりといわれる。この窯の製品は、一時、会見焼などと呼ばれた時期もあった。

法勝寺は、江戸時代、山陽に抜ける主要路にあたり、奥日野地方のたたら製品はここを通った。その帰りに焼物を奥地へ運んだと伝えられている。日野郡をはじめ、備中、備後、出雲など幅広く販売されていた。

焼き上がりの柔らかみが特徴で、主に茶器、花器、食器などが製作されている。現在ある法勝寺焼松花窯は安藤秀太郎の開窯によるものである。

また法勝寺焼皆生窯は、二代目が松花窯の脇窯として皆生に登窯を築いたのが始まりである。手法や焼成は勝寺焼松花窯と同じであるが、皆生の砂や**日野川**の砂鉄を粘土や釉薬に混ぜるなど新しい試みがなされている。

中井窯

昭和二十年（一九四五）に開窯した新しい窯である。鳥取の民芸家・**吉田璋也**の指導を受け、用の美を大切にした、健康的で使いやすい民芸品が製作されている。

地元の粘土を使用し、黒・緑・白の釉薬に特徴がある。主に食器、茶器、花器が製作されている。

浦富焼　岩美町浦富

現在の岩美町浦富にあった磁器窯で焼成された製品をいう。江戸末期から明治維新によって、廃藩になるまでの数十年間、染付の日用雑器が焼かれたといわれる。鳥取藩の記録によると、浦富の焼物には田後村の土が用いられ、主に日用品を造り、浜坂焼などとともに因幡の需要を充たしていたという。

浦富焼の窯跡についてはその規模や形など不明であるが、昭和四十三年（一九六八）、県工業試験場の研究によって再現に成功した。

昭和四十六年（一九七一）、桐山城祉の山麓に窯を築き、白磁、染付、黒刷毛の磁器の茶器、花器、食器が製作されている。

《酒　造》

鳥取県の人口一人当たりの清酒の消費量は全国でも有数である。

現在、県内には東から西にわたり三十近い酒蔵があり、地域色豊かないろいろな酒が造られている。鳥取県は、**日本海**に面し、背後には中国山地がある。冬の冷たい季節風はこの中国山地にぶつかり、鳥取県に雪を降らせる。寒暖のはっきりした気候である。冬の寒さをはじめ、中国山地に降り積もった雪がもたらす豊かな水、そして澄んだ空気など美酒がうまれる環境が整っている。

また、県内の酒造りには主に「玉栄」、「山田錦」などの酒米が使用されている。これらの酒米の約三分の二が県内産米である。

かつて鳥取県には「強力」という鳥取県特産の酒米があった。明治時代に開発され、大正時代に最盛期を迎え、以後次第に減少した。この強力は、精米度が上がっても心白部分が壊れにくいという性質があり、「山田錦」同様に酒造りに適した米である。その反面栽培しにくいという欠点もある。

一時期栽培が途絶えていたものの十数年前からこの「強力」を使用した酒も造られ始めた。

しかし、全酒米使用量はまだ少なく、鳥取県の特産米による酒造りが期待される。

東部

TOTTORIKEN BUNKA KANKOUJITEN

▲石谷家住宅（智頭町）

▲観音院庭園（鳥取市）

- 鳥取市
- 国府町
- 岩美町
- 福部村
- 郡家町
- 船岡町
- 河原町
- 八東町
- 若桜町
- 用瀬町
- 佐治村
- 智頭町
- 気高町
- 鹿野町
- 青谷町

千代川

日野川・天神川と並ぶ鳥取県の三大河川の一つで、県東部を北流し**日本海**に注ぐ。流路延長は約五七キロメートル、流域面積は一、一九〇平方キロメートルである。流路延長は日野川につぎ、流域面積は最も広く、鳥取県の全面積の約三分の一を占める。岡山県との県境に近い、中国山地の沖の山（標高一、三一八メートル）に源流をもち、途中多くの支流を集めて流下する。山間盆地状に開いた支流との合流点には、上流側から智頭、用瀬、河原の町並みが立地している。河原町より下流は鳥取平野となり、鳥取市内を貫流して賀露の河口から日本海に流出する。

千代川の支流には**芦津渓谷**、**猿渡渓谷**、**三滝渓**、**諸鹿峡谷**など渓谷美にすぐれた景勝地が多い。また三滝、千畳滝、大鹿滝、雨滝など勇壮な滝も多く、これらの渓谷と滝は、いずれも県の自然環境保全地域に指定されている。なお芦津渓谷と三滝渓は、**氷ノ山後山那岐山国定公園**に含まれる。河口をはさんだ両側の海岸沿いには砂丘が広がる。この砂丘をつくる砂の多くは、流域に分布する花崗岩のマサを千代川が運搬したものである。

千代川の本流流路が南北方向をとるのに対して、支流は東西方向のものが多い。例えば、流路延長三二・五キロメートルと最長の支流である八東川は東方に、二一・五キロの佐治川は西方へ延び、千代川全体の流域範囲を東西に押し広げている。そのため流域範囲は上流に向かって開いた扇状となり、降雨が集中し下流域では洪水が発生しやすい。

大正七年（一九一八）九月の台風による出水で死者三十名、浸水家屋一万戸以上という大被害となったのをはじめ、洪水が何度となく発生した。昭和初期から洪水防止のための河川改修が行われ、昭和六年（一九三一）、それまで鳥取平野で大きく曲流していた流路が、直流する新千代川として生まれ変わった。なお、市北部の松並町から浜坂にかけて見られる池や湿地は、旧千代川の河道跡である。河口部でも、出水時の排水能率を高めることや堆砂防止を目的に、河口の付け替えが行われ、取り残されたかつての河口は**鳥取港**として整備・利用されている。

千代川の氾濫によって形成された鳥取平野には、たえず変転した千代川の流路の痕跡が残されていて、こうした旧河道には伏流水も多く、鳥取市叶地区では市内の上水道原水として取水されている。

〈鳥取砂丘と周辺〉

鳥取砂丘

《分布の範囲》

千代川河口に発達する鳥取平野の海岸部に東西一六キロメートル、南北二キロメートルにわたって広がる海岸砂丘の総称である。西から末恒砂丘、湖山砂丘と続き、千代川の河口から東の浜坂付近までの範囲を狭義の鳥取砂丘と呼び、その東は福部砂丘である。鳥取砂丘は明治・大正期までは浜坂砂丘と呼ばれていたところで、現在その一部である一四六・二ヘクタールが国の天然記念物に指定され、その中心部の一三一ヘクタールが特別保護地区に指定されている。

《砂丘の成因》

日本海から海岸にうち寄せられた砂粒が離水し、風によって内陸側に運搬され堆積してできたものである。砂粒の供給源は千代川上流の花崗岩質岩石に由来する石英を主とする砂や、過去に堆積した砂質の堆積物が浸食されて再び漂流して海岸にうち寄せられた砂（砂粒の流径は一・二ミリから一・四ミリ程度である）が、冬、日本海をわたる強い北西の季節風に運搬されてできた。

砂丘は文字通り風成の「砂の丘」であって、水成の砂州や浜堤とは区別される。

《地形》

固結していない砂丘は、風が吹くとその強さと方向により、また、砂の粒径や形、量などの性質により絶えず形を変える。風向に直行してできる砂丘を横列砂丘と呼ぶ。鳥取砂丘では海岸線にほぼ並行して横列砂丘が発達し、三列の砂丘列を作っている。砂丘列は海岸線から奥になるほど先にできたもので、砂丘を海岸側に残しながら発達するので、一般に海面が低下する時期にできる。

砂丘列の高さは数メートルから数十メートルに達するものまであり、風上側では急角度に、風下側では低

角度になる、風向きに並行してできる縦列砂丘と呼ばれるものは風向が強いときに形成されがちである。鳥取砂丘では明瞭な横列砂丘が二列見られ、二列目は馬の背と呼ばれており、高さ三〇メートル以上に達し、観光客が最も多く集まるところである。三列目の砂丘列は不明瞭で丘陵状に発達している。砂丘列の間にある丘間低地は水が集まりやすく、鳥取砂丘では湧水が見られる。季節によっては池になるのでオアシスと呼ばれている。砂丘が風でえぐられ、スリバチ状にくぼんだ地形を鳥取地方ではスリバチと呼んでいる。バルハンとよばれる砂丘風下にできる三日月状の凹地形に似ている。

風によって砂丘の表面に幅が数センチ、高さが一センチ程度、長さが数メートルの、規則的な峰と谷が作る微地形を鳥取砂丘では「風紋」と言い表している。この「風紋」の用語は鳥取砂丘に関連して使い始められたと思われる。砂丘がつくる微地形には、このほかにも砂簾、砂柱がある。

《地質》

鳥取砂丘は形成の時期により、古砂丘と新砂丘に分けられる。これは両者の間に挟在する火山灰によって証明される。この火山灰は約五万年前の**大山**火山のもので、これが古砂丘を覆っている。よって古砂丘は新世に形成されたと考えられる。その上には姶良火山灰層（約二万年前）があり、新砂丘を覆う。新砂丘は完新世のものである。

なお、新砂丘は腐植物を含んだ黒色のクロスナを挟んでいる。クロスナはイネ科の植物珪酸体を含んでおり、草原化したことを示す。

《砂丘利用の歴史》

鳥取砂丘では、浜坂で発見された尖頭器が時代は不明であるが最も古い人類遺物といわれている。長者が庭、追後スリバチ付近、オアシス付近で石器や土器片が多数出土した。縄文時代の遺物らしいものもあるが、確かなものは弥生時代以降中世までの遺構や遺物である。また、クロスナ中には、石器の半製品が出土していることから、草原化した当時の砂丘が生活に快適な場所であったことがわかる。なお、直浪遺跡は縄文時代から古墳時代までの複合遺跡である。

《砂丘研究史》

日本の砂丘の研究は鳥取砂丘で始まった。鳥取県出身の徳田貞一が大正六年（一九一七）に「バルハンとスリバチ」を発表し、その中で砂丘の土地利用を考えている。飛砂を防ぐための植林、砂地に適した作物の栽培や潅漑の研究などである。大正十二年（一九二三）鳥取大学の前身、鳥取高等農林学校に湖山砂丘試験地が付設され、後に浜坂に移り鳥取大学農学部に引き継がれた。地形や地質の研究も並行して進められ、砂丘の気象研究も始まった。スプリンクラーの導入、**らっきょう**や**ながいも**などの栽培法が研究され、現在、これらは砂丘地の特産物となっている。

また、**乾燥地研究センター**に併設された実験施設アリドドームでは、先進的な研究が進められ、世界の乾燥地研究の拠点施設となっている。

《砂丘の動物》

一見すると砂丘には動物が生息しないようであるが、詳細に観察すると砂丘で生育するもので最も多いのが昆虫である。つぎにクモが多く、いずれも体の色は砂色で体に毛が多い。砂丘や砂中で生活するのによく適応した色、形となっている。ヤマトマダラバッタやハマスズも同様である。また、イソコモリグモも暑さを避ける数十センチの穴を掘り、糸で内壁を崩れないようにしたり、獲物の通行を探知する糸を砂上に広げたりする。なかでもアリジゴクを作るハマウスバカゲロウは全国的にも珍しい存在である。

《砂丘の植物》

砂丘は生きている。常に動いている。砂丘の植物は風に吹き飛ばされないようにするため、早く湿った砂丘の層にまで発根しようとする。砂

がとられて根が浮くか、反対に植物に砂がかぶるといった環境の中で、砂丘に適応した独特の植物（砂丘植物）が生育する。

また、大きな砂丘には、あちこちに植物がまったく生育しない所と、群落のある所とがある。海岸に近い所にはハマボウフウ（浜防風）が多い。俗にボウフウともいう。ハマボウフウが正確な名称でセリに似たセリ科植物である。早春の若芽が食される。ゆでて酢味噌で食べるのが普通で、春から夏にかけて県内の旅館、料理屋などで供される。茎は白く、独特の香味がある。栽培することもできる。砂が動くところには植物は育ちにくいが、コウボウムギはこのような所にも適応し生育する。鳥取砂丘には、代表的砂丘植物といってよいくらいのコウボウムギの大きな群落があり、研究価値がある。

一般に砂丘植物は、根がよく拡がるもの、根の深いもの、根が極端に太いもの、反対に極端に細くて多いもの、葉の厚いもの、葉の表面が非常に光沢があり水の蒸発を防いだり、光を反射したりするものがある。

ハマゴウ・ハイネズのような平伏した木本植物もあるが一般的に草本が多い。ハマベノギクは枝が四方に平伏し、ネコノシタは砂丘を匍伏し、ハマニガナは砂中を横に這い、茎は地下に伸びる、スナビキソウは直根太く砂中にはいり、コウボウムギ・ビロウドテンツキ・ケカモノハシ・オニシバ・ハタガヤなどの渉草は多くのヒゲ根を張り出している。

また、ビロウドテンツキ・カワラヨモギ・ハマゴウのように、細毛を密生して、水分の蒸発を防ぐための構造を持つものなど、砂丘に適応した形態や特性をもっている。

鳥取大学乾燥地研究センター

鳥取市浜坂
ＪＲ鳥取駅よりバス二十五分、浜坂小学校入口下車、徒歩十五分

鳥取大学乾燥地研究センターは、乾燥地における砂漠化の防止、農業開発に関する研究を行うための全国共同利用施設として、平成二年（一九九〇）六月に設立された。

鳥取大学の砂丘地農業研究は、大正二年（一九一三）、前身である鳥取高等農学校から始まり、昭和三十三年（一九五八）には鳥取大学農学部附属砂丘利用研究施設が設置された。以後、全国でただ一つの砂丘専門の研究機関として、我が国の砂丘地と乾燥地の農業開発において先駆的な役割を担ってきた。

共用施設に改組されてからは、国内外からの多くの大学院生や研究者が共同研究などに取り組んでいる。

平成十年（一九九八）には、球形の実験施設アリドドームが設置された。ここでは、世界の研究施設とネットワークを結び、現地情報に基づいて乾燥地のシュミレーション実験などを行うことができる。

近年、このアリドドームは年数回公開され、多くの人が乾燥地研究や乾燥地について情報を得るところとなっている。

●問合せ先　☎０８５７・２３・３４１１

鳥取砂丘と文学

東西一六キロメートル、南北二キロメートルにおよぶ**鳥取砂丘**は自然が造りだした広大な砂の芸術作品である。風紋（ふうもん）や砂廉（されん）の紋様は、風と砂とが織りなす神秘の世界である。

多くの文学者がここを訪れ、感性を刺激されながらそれぞれの砂丘を見出した。市道浜坂二号線沿いにはいくつかの碑が点在し、砂丘文学碑コースと呼ばれている。

「月荒き砂丘は古邑うづむとや」
森川暁水（もりかわぎょうすい）（一九〇一～一九七六）の句碑。昭和十二年（一九三七）秋に砂丘を歩いたときの作品である。この句碑は、昭和四十四年（一九六九）に建立された。

「秋風や浜坂砂丘少し行く」
昭和七年秋、島根県で開かれた山陰俳句大会に出席した高浜虚子（たかはまきょし）（一八七四～一九五九）の一行は、地元の結社・野火吟社に招かれ鳥取砂丘を訪れている。そのときに虚子が詠んだ句。句碑は昭和三十九年（一九六四）十月に建立された。

「砂丘を幾つ越えしが波音の
　真近く聞えて海まだ見えず」

この歌は、鳥取市で歌誌「情脈」を創刊、全国的に活動を展開した枝野登代秋（一九〇四～一九六八）の作である。歌碑は、情脈三〇〇号記念として昭和三十三年（一九五八）に建てられた。

「浜坂の遠き砂丘の中にして
　さびしき我を見出でけるかも」

作家、有島武郎（一八七八～一九二三）は、大正十二年四月、砂丘に遊び、砂の広がりに向き合い、「さびしき我」を見つけたのだろう。有島は、この一か月後、愛人と情死している。歌碑は、昭和三十四年（一九五九）に建立された。碑は武郎の妹・山本愛子の揮毫による。なお、この歌によって、「砂丘」の名称が広く知られることになった。

道をしばらく歩き、浜坂の集落が見えはじめる所に「武郎・晶子佗涙の地」と書かれた碑がある。

この碑は平成三年（一九九一）に建立されたもの。昭和五年（一九三〇）に鳥取砂丘を訪れた与謝野晶子（一八七八～一九四二）が武郎をしのんで詠んだ歌が有島の歌と並んで刻まれている。

「沙丘踏みさびしき夢に与かれる
　われと覚えて涙流るる」
（与謝野晶子）

「浜坂の遠き砂丘の中にして
　侘しき我を見出でつるかな」
（有島武郎）

有島の下句は、昭和三十四年に建立されたものと異なっている。碑の建立に関わった人によると、この歌は色紙に書かれた武郎の直筆を見て彫ったという。

多鯰ケ池

鳥取市浜坂
ＪＲ鳥取駅よりバス二十五分、砂丘北口下車、徒歩五分

鳥取市浜坂と岩美郡福部村湯山にまたがり、浸食谷の北側を**鳥取砂丘**によって堰止められた堰止湖である。平均水深七メートル、最大水深一四メートルである。湖水面積は約〇・二三平方キロメートル、湖岸の延長は三・一キロメートルある。池内には小島、沖の御前島がある。減水時には磯の御前島が姿を現す。大島（弁天島）は古図では島で示されているが、激しい飛砂により明治時代に陸続きになった。

池の周辺の地質は第三紀中新世に形成された凝灰角礫岩とその上を覆う玄武岩溶岩で構成される。北岸には古砂丘とそれを覆う火山灰層、さらにその上に新砂丘砂が分布している。多鯰ヶ池に流入する表流水はなく、減水期と増水期の水位変化は二メートル前後である。ＰＨ（八七年八月）六・九～七・二、透明度は三メートル前後である。池は西の古盆と東の古盆に分けられ、深度、湖沼の栄養型などに違いがある。

湖水は宿院義般によって拓かれた樋門により湯山に流し、農業用として利用されている。池にはツルヨシ、シャジクモなどの植物、タガイ、ドブガイ、ヌマカイメン、ブラックバス、ヤリタナゴなどの動物が生息している。冬にはコガモ、マガモ、タゲリなどが飛来する。

多鯰ヶ池には蛇の伝説があり、近年、蛇を祭神とする弁天さまが設けられた。**山陰海岸国立公園**内にあり、砂丘と一体化した景観保全が望まれる。

伝説

昔、庄屋の家で美しい娘・お種が働いていた。ある冬の夜、人々が雑談で「さて何か甘いものが食べたいな」というと、お種はどこからかおいしい柿を取ってきて食べさせた。不思議に思った三人の若者が、夜、後をつけたところ、お種は多鯰ヶ池に来て飛ぶように蛇となって池を渡り、池の中の島にある柿の木に登って取った。それを見た若者たちは驚いて逃げ帰った。お種は本当の姿を見られたため、池に沈んでしまったという。

県立鳥取砂丘こどもの国

鳥取市浜坂
ＪＲ鳥取駅より車で約十五分

鳥取砂丘こどもの国は、子どもたちに太陽の光のもと健康的な遊びを与え、子どもたちの創意工夫や豊かな情操を育むことを目的として、昭和四十八年（一九七三）五月に**山陰海岸国立公園鳥取砂丘**内に開園した。

現在の施設は、平成十二年（二〇〇〇）三月にリニューアルオープンしたもので、「遊び、ふれあい、発見、創造」をテーマに、一九ヘクタールの敷地には、さまざまな遊具やレールトレインなどの乗り物、雨や雪の日でも遊ぶことのできる広場や工房、バードケージが設けられている。休日には家族連れで賑わっている。

●開園時間　午前九時～午後五時
●休園日　第三水曜日（休日の場合はその翌日）、年末年始
●問合せ先　☎０８５７・２４・２８１１

鳥取市

鳥取市街地

鳥取市街地は**久松山**（標高二六四メートル）を扇の要として、**千代川**に向かって開いている。扇の先端では商工業団地や住宅地の整備が進み、郊外店舗の進出も著しい。

一方、久松山山麓には**鳥取城跡**や鳥取県庁があり、袋川にかけて旧市街は整然とした城下町の町割が残る。桜並木の美しい袋川を越えると、新市街地はＪＲ線から千代川を横切り放射状に伸びている。

さらに千代川を下れば**松葉がに**で有名な**賀露港**に至る。**日本海**を東にとれば**鳥取砂丘**を経て**浦富海岸**と続く**山陰海岸国立公園**となる。西には神話のふる里である**白兎海岸**、夕日の美しい**湖山池**さらに南にはホタルの飛来する**吉岡温泉**と、市域に多くの観光地を持つ。また、ＪＲ鳥取駅近くの市街地に、温泉場を持つことも魅力的である。

久松公園の城跡に登ると市街地が一望に見渡せる。手前に**仁風閣**、左手の久松山から続く山裾は、**興禅寺**、**樗谿公園**さらに**観音院**と名所旧跡が続く。鳥取城跡周辺から伸びる若桜街道、智頭街道、鹿野街道は、江戸時代の初から城下町の骨格を形成し、今もなお各街道が市内の幹線道として生きている。

県庁前から裁判所へ通じる国道五三号筋はかつて大名小路と呼ばれ、家老はじめ役職の武家屋敷が並んでいた。新蔵通りを越えて**「わらべ館」**を過ぎ、追廻し通りを越えた辺りまでが元の武家屋敷街である。今、およその地割りをたどることができるが、町並みは残っていない。県庁前の県立図書館に箕浦家の長屋門が移築されており、往時をしのばせる。最近、馬場町にある岡崎平内（五百石取り）の屋敷で、武家屋敷の母屋が残っていることが発見された。

追廻し通りと片原通りの間に、久松山に対して少し湾曲した細い通りがある。この筋がもともとの袋川である。関ヶ原の戦い（一六〇〇年）の後、池田長吉（六万石）の治世の時に作られた城下町では、武家屋敷も町屋もこの位置から久松公園の間にあった。これは今の東町・西町に当たる。元和三年、池田光政（三二万石）が転封され、城下町の拡張が始まったとき、袋川が現在の位置に付け替えられたのである。新たに城下町となった袋川までの範囲は、三街道を挟んで縦四〇間・横幅六〇間を一町とする整然とした町割がなされ、大工町、鍛冶町、桶屋町などの町名を今に残している。袋川には若桜橋、智頭橋、鹿野橋、鋳物師橋さらに出合橋の五橋が架けられ、その位置は現在も同じである。なお、寛永九年（一六三二）、池田光仲の入封後も、幕末まで町並みに大きな変更はない。鳥取城下の町数四八町（実際には享保年間より四九町）と呼びならされてきた。

付け替えられた袋川は幅七間、深さ三間半の運河となり、通船は**賀露港**から千代川をさかのぼり袋川で城下に横付けされた。昭和九年（一九三四）になって、治水対策から袋川を市街地の東部から千代川に直行させる大改修が行われ、袋川の通船は終わった。袋川を渡り、智頭街道を瓦町と今町の境まで来ると、道路はロータリー交差に出会う。明治の最初に造られたロータリーから、当時のハイカラな都市計画の考え方をうかがうことができる。

その後、鉄道の敷設により、鳥取駅が現在の位置に設けられた。その結果、新しい市街地は瓦町のロータリーと駅前広場という二つの中心を持つ構造となって、網目状の街区を形成した。

本格的な戦災を免れたものの、鳥取市は昭和十八年（一九四三）の大地震と昭和二十七年（一九五二）の大火災という二度の壊滅的な打撃を受けた。智頭街道と二階町通りの交差点に建つ「五臓円ビル」は、度重なる大災害も耐え残った。また、市内の方々にある公園は、災害復興を機に設けられたものが多い。

現在、市のランドマークとも言える鳥取城の復元に向けた運動も活発である。今後とも広域的な観光の拠点として、鳥取市の役割はますます高まるものと期待される。

〈久松山と周辺〉

久松山

ＪＲ鳥取駅よりバス五分、県庁日赤前下車、徒歩七分（登山口まで）

久松山は鳥取市東北方にあり、戦国時代には鳥取城がこの山に位置し、江戸時代には鳥取藩主・池田家の居城となっていた。現在は、山麓に**久松公園**があり、**鳥取城跡**は国の史跡に指定されている。山頂の標高は二六三・一メートルで、市内を一望でき、鳥取市のシンボル的な山となっている。

久松山は、一見孤立峰のように見えるが、山体のほとんどは中生代白亜紀末から新生代古第三紀に活動した花崗岩類からできており、岩体は地中深くつながっている。石英斑岩～花崗斑岩～文象花崗岩類からなり、それらが長い年月をかけ、地下深くにあった岩体が地表に現れたものである。山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩に覆われている。

久松山を含めた周囲の山塊は、主尾根が北西方向に延び、南が高く北側が低くなっている。斜面は北東側が緩やかで南西側が急になっており、湯所の雁金山の斜面は急になっている。鳥取市西方から見ると台形のように見え、北方の**鳥取砂丘**側から見ると急傾斜で直立して見える。また、栗谷、水道谷、樗谿の谷が平行して北東方向に延びている。

久松山山塊には花崗岩や鮮新世火山岩類の他に、古第三紀の火山岩類や新生代第三紀の凝灰岩類が分布している。特に久松山北方山麓の円護寺石とよばれる凝灰岩は有名で、石材として利用されてきた。久松山には長田神社口、久松公園二ノ丸口から上る登山道がある。その他にも、**樗谿公園**から太閤ケ平を経るコースや円護寺からの登山道もある。

史跡 久松公園

鳥取市東町
ＪＲ鳥取駅よりバス五分、県庁日赤前下車、徒歩七分

久松山の麓にあって**鳥取城跡**を中心に**仁風閣**や**県立博物館**など見所の多い公園である。お堀端から見ると、白鳥の浮かぶ水堀と何段にも重なる石垣が歴史的な景観を創り出し、鳥取市を訪れる人々にとって印象的な場所となっている。同時に、「お城山」と呼ばれる久松山への登口であり、春のサクラ、夏の夕涼みと市民にもよく親しまれている。

城跡は旧藩主・池田家の所有であったが、大正から昭和にかけて鳥取市に寄付され公園として整備された。

明治四十年（一九〇七）、時の皇太子（後の大正天皇）が啓行されることになり、当時、池田家の別邸として計画されていた建物（仁風閣）を宿泊所として使用することになった。その後、仁風閣は管理を鳥取市に委託され、鳥取市が各種の式場として利用したほか、近くに動物園や茶店が設けられ、城跡一帯が市民との結びつきを強めていった。家老屋敷の一部を含め約二万坪が鳥取市に寄贈され、大正十二年（一九二三）より久松公園として一般公開された。なお、昭和十九年（一九四四）には、久松山を含め百数十ヘクタールが池田家より市に寄付されている。現在、動物園は市内の別の場所に移され、久松公園は史跡公園として整備されている。

公園内の桜は、ソメイヨシノやサトザクラを含め、その数は四百本を超える。二の丸のソメイヨシノは古

木である。これらの桜が植栽され始めたのは、大正十三年（一九二四）、昭和天皇の御成婚記念と伝えられる。春の開花期には、ぼんぼりが吊され屋台も出て花見客でにぎわう。四月初旬に満開を迎える。なお、公園入口のお堀端には、鳥取気象台による桜の開花宣言の指標となる標準木がある。

麓の二の丸や天球丸といった櫓跡からも、市街地から**千代川**、さらに**湖山池**が一望でき、鳥取市に来たときは訪れたい場所である。

史跡 鳥取城跡（二の丸、天球丸、山上の丸、太閤ケ平）

JR鳥取駅よりバス五分、西町下車、徒歩七分

鳥取市北東の丘陵部にある。十六世紀半ばの天文年間より明治維新に至る**久松山**を中心とした山城。山頂部には中世期の城郭遺構である山上の丸、山麓には慶長年間より明治に至るまでに整備された二の丸、天球丸、三の丸などの遺構を残す。国指定史跡となっている。

天文年間布施**天神山城**に拠る因幡山名と但馬山名の争乱の中で築城されたらしいが、どちらが築いたのか定かでない。その後尼子、毛利といった西方の大名勢力との拮抗の上で山名氏の支配が続き、山名豊国の下で鳥取城の砦と城下町の整備、建設が進められた。豊国はその後、羽柴（後の豊臣）秀吉の第一回鳥取城攻撃（一五八〇年）の際、家老の反対を押し切り秀吉に降ったため因幡国人衆により城を追われた。国人衆は毛利方より**吉川経家**を迎え秀吉勢に抗したが、籠城二百日で降伏、経家は自刃した。久松山麓の武道館前には経家の像が建つ。秀吉は宮部継潤を鳥取城に配したが、その子長熙（長房）は慶長五年（一六〇〇）関ケ原の合戦で西軍に組したため、城地没収のうえ奥州南部へ流され、城主は池田長吉に替わった。跡を継いだ長幸は元和三年（一六一七）、備中松山に転封となるまで在城した。この間池田長吉、長幸親子により、城郭の大改修、それに伴う内堀の延長、外堀の開削が行われた。また、鳥取城居館も南東方向へ拡張され、新たに二の丸、三の丸、天球丸が築造されるなど近世城郭としての鳥取城及び城下町の基本的な構造はほぼこの時に整えられた。

元和三年、播磨四十二万石の池田光政が幼少の故を以って因伯三十二万石に減封され鳥取に入封した。

光政時代の鳥取城は長吉時代の城郭のままだった。しかし、城下は四十二万石の家臣団が三十二万石の地に移転したため、城地の移転なども検討されたが、結局、元和五年から大拡張が行われた。光政時代に三十二万石の城下町鳥取になったことになる。寛永九年（一六三二）、光政は備前岡山二十八万石に転じ、替わって岡山より池田光仲が三歳で鳥取に封ぜられた。この国替以後、明治四年（一八七一）、廃藩置県に至るまで光仲の系統が鳥取城主として続いた。この間、元禄五年（一六九二）に天守櫓が落雷により炎上し以後再建されなかった。また、享保五年（一七二〇）には全城が火災で焼失し（石黒火事）、この火災の後再建されなかった建物も多く、政庁も二の丸から三の丸へ移った。幕末に最後の藩主・池田慶徳が入城後、部分的に改変したところもあるが、大筋は池田長幸時代の築城形態を受け継いだ。明治二年（一八六九）の版籍奉還、同四年の廃藩置県後も三の丸の櫓が政庁として使用されていたが、同五年鳥取県庁への移転により鳥取城は因伯両国統治としての役割を終えた。鳥取県が島根県となっていた明治十二年（一八七九）には建物も撤去され現在のような堀と石垣を残すだけとなった。

明治六年（一八七三）に内堀の内側は旧城内として町の一つに数えられ、同十六年（一八八三）十一町とともに東町となった。城地は池田家へ払い下げられたが、大正年間に二の丸などの跡地約二万坪が鳥取市へ寄贈され、大正十二年（一九二三）より遊園地として開放された。また、昭和十九年（一九四四）には久松山一帯も寄付された。かつての城内の建築物としては**仁風閣**の庭園に残る宝扇庵と二の丸への上り口にある小さな門の二つだけである。

現在は三の丸跡に県立鳥取西高等学校、扇御殿跡に仁風閣、**宝隆院庭園**、城代家老屋敷跡に**県立博物館**が設置され、一帯は**久松公園**となっている。

《二の丸》

池田長吉が城郭の大拡張を行った際、**久松山**北西に偏っていた山下の丸を大きく南東に移し、当地に城主の居館を経て本丸とも呼ばれた。享保五年の石黒火事で二の丸の建物は全焼し、藩主の居館、政庁は三の丸に移された。このため、これ以降三の丸が二の丸とも称された。

享保十三年（一七二八）に三階櫓のみが再建され、文政年間には武器庫として使用されていた。天守櫓の焼失後、鳥取城を代表する建物であり、俗に御三階と称された。この三階櫓の石垣北西隅の上方に丸く穴のあいた角石がはめこまれており、おさごの手水鉢と呼ばれている。

《天球丸》

三の丸の上、二の丸の南東の一段高い所にある。池田長吉の姉・天球院（若桜城主・山崎左馬允に嫁いだ後離縁）の居所がここにあったことからこの名が付いた。長吉入部以前からすでに砦のような設備がほどこされていたようである。享保五年の火災で焼失後再建されなかったようである。幕末には天球丸に武術調練の稽古所が造られた。

《山上の丸》

久松山の頂上にある郭で、池田長吉以前の城の中心であることから本丸、御天守、甲の丸ともいった。元来山城として築かれた後に天守閣を築いた。天正元年（一五七三）に山名豊国が築いた天守櫓を慶長六年（一六〇一）に池田長吉が新しく二重の櫓として建て直した。元禄五年十一月十一日の落雷により焼失、以後再建されることはなかった。

なお、月見櫓（着見櫓）のみ焼失を免れた。天守櫓の中央には長吉が三年を要して掘らせたという車井戸が残っている。久松山の頂上でもあり、鳥取市街、鳥取平野、中国山脈に**鳥取砂丘**を一望できる。

《太閤ヶ平》

粟谷町の谷筋の奥、百谷にかかる標高二五二メートルの本陣山の頂上部にある。天正九年（一五八一）羽柴秀吉が鳥取城を攻めたとき本陣を置いた跡であることからこの名がある。文化十年（一八一三）には鳥取城防火のため城周りの山々の松の巨木が伐採されたため、本陣山は芝山に変わったという。現在、**樗谿公園**より山頂に至る登山道も整備されている。鳥取城跡に付属する施設として国の史跡に指定されている。

仁風閣

鳥取市東町
JR鳥取駅よりバス六分 西町下車、徒歩五分

仁風閣は、明治四十年（一九〇七）鳥取城のある**久松山**の麓の旧鳥取藩主・池田仲博侯爵の別邸、扇御殿跡に皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）の山陰行啓の際の宿舎として建てられたものである。

宮内省内匠頭・片山東熊が基本案を作成した。片山東熊は工部大学校造家学科（後の東京大学工学部建築学科）の第一期生で、明治十九年（一八八六）以来、皇居造営事務局、宮内省内匠寮に奉職し、赤坂離宮（明治四十二年、現迎賓館）が代表的な寡作となっている。この基本案をもとに、後輩の橋本平蔵（鳥取県出身、明治二十九年帝国工科大学卒）が実施設計と工事監理にあたり、地元の大工棟梁・浜田芳造が施工を請け負い、明治三十九年（一九〇六）十月から七か月の突貫工事で翌四十年五月十日に竣工し、同年五月十八日から四日間、皇太子の御座所となった。「仁風閣」という名前は随員であった東郷平八郎によってつけられたものである。同じ目的で建てられた松江市の興雲閣が和風を取り入れた擬洋風建築であるに対して、仁風閣は、木造二階建てのフランス・ルネサンス様式を基調にまとめられた優雅な洋館建築で、山陰地方では最も古い本格的な洋館建築であると言える。

正面中央部の大きな櫛形ペディメントに特色があり、その下のベネチア窓との構成などにバロック的手法をかいま見ることができる。西方階段室の突き出しやその尖塔屋根が左右対称の正面に変化を与えている。背面庭園側は一階をバルコニー、二階をベランダとして開放感に満ち、軽快である。内部は各室とも、壁紙張り、マントルピース、カーテンボックス飾り、シャンデリアなどの装飾に意が払われており、山陰地方に建てられた本格的な洋館建築としては、他に例を見ない貴重な遺構である。

なお、山陰行啓以後は、大正十二年（一九二三）に池田家より扇邸とともに鳥取県に管理が委託され、以来、この二の丸一帯は久松公園と総称され、市民にも親しまれてきた。仁風閣は大正十五年（一九二六）に鳥取農村大学校の一部として活用され、鳥取地震以後は鳥取県庁の分室が置かれた。戦後は一時期、連合軍が使用していたが、昭和二十四年（一九四九）に県立科学館（後の科学博物館）となった。

昭和四十二年（一九六七）、池田家から鳥取県に正式に寄贈され、昭和四十八年（一九七三）の県立博物館新築移転に伴い鳥取市に委譲され、同時に国の重要文化財（建造物）に指定された。重要文化財の指定を受けた仁風閣は、昭和五十一年（一九七六）に修復工事を完了し、一般公開され現在に至っている。

一階は玄関車寄せを入るとまずホールがあり、その正面に随員控室が置かれている。その他は南側に事務所、薬局、県官出張所、応接室、北側に御道具置場、御服間、御拭間、御風呂場がある。二階は中央にホールが置かれ、東側に謁見所、西側に陳列所があり、南側に御食堂、共進所、侍従武官室が置かれ、北側に御座所、御寝室、御物置がある。階段は二か所あるが、南側に突き出た階段室は八角形で塔状になっている。内部は支柱のない螺旋階段である。仁風閣にはマントルピースが八か所（当初は各室全部十五か所に設置される予定だった）ある。御寝室のマントルピースにはイギリス製のタイルが張られていたという。また、御物置のマントルピースは最も保存状態がよく、修復の際に手本にされた。

名勝 宝隆院庭園

鳥取市東町
JR鳥取駅よりバス五分、西町下車、徒歩五分

仁風閣裏にある庭園で、鳥取市内の名園の一つである。この名園は、十一代藩主・池田慶栄の未亡人・宝隆院のために文久三年（一八六三）に十二代藩主・慶徳が扇御殿とともに作った池泉回遊式の庭園である。**久松山**を背景に自然林を活用した渓流の岩組、滝口がなす景色は美しい。鶴をかたどった池には、豪壮な亀島を浮かべ、地形の変化に富み、徳川末期の造園の味をよく残している。

四季折々の自然美を茶室で眺める景観はまた格別である。

県立博物館

鳥取市東町
JR鳥取駅からバス五分、西町下車、徒歩五分

山陰地方の生物、地学、考古学などの部門展示とともに文化財の保存と展示なども行い、郷土について学習し、体験する場所として、また県民自らの作品を発表する文化活動の高揚の場として昭和四十七年（一九七二）に建てられた。

敷地は**久松山**の麓、史跡**鳥取城跡**内にあり、城跡の眺望を考慮して、北東の一隅に配置されている。敷地面積一四、二九〇平方メートル、建築面積九、六九九平方メートル、地下一階、地上二階（一部三階建て）の鉄筋コンクリート造である。外観は巨大で単調とならないように建物をブロックに分割し、接続部にガラス張りの休憩コーナーを配し、外壁は小幅板のコンクリート打ち放し仕上げで高さも低く押さえた親しみやすい建物である。

鳥取藩政に関する資料約一万五千点をはじめ、県に関係の深い考古、民俗資料や、**前田寛治**など郷土ゆかりの画家などの作品や美術に関する資料、地学・自然科学資料が常時展示されているほか、年数回特別展も開催される。

- ●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
- ●休館日　月曜日、祝日の翌日、年末年始
- ●問合せ先　☎〇八五七・二六・八〇四二

名勝 興禅寺

鳥取市栗谷町
JR鳥取駅からバス五分、県庁日赤前下車、徒歩五分

鳥取藩主・池田家の菩提寺である。

寛永九年（一六三二）に、池田家がお国替えのときにここに移された。そのころは竜峰寺といった。もとは臨済宗で京都妙心寺の末寺であったが、元禄七年（一六九四）、黄檗宗に改宗した。隠元、即非の流れをくみ、本尊釈迦如来像をはじめ中

国南方の風を伝えている。

書院の庭園は蓬莱式観賞庭園で、借景にシイの木を主体とした常緑樹の自然林を生かし、幽玄な深さを感じさせる。前庭には杉ゴケが庭一面に伸び、京の庭を思わせる。この庭が作られたのは江戸前期であるが、所々に室町時代の作風がよく生かされており、典型的な書院庭園の名園である。

また裏山には**渡辺数馬**、臼井本覚の墓や、庭の隅には**キリシタン灯籠**、山門のそばには俳人・**尾崎放哉**の句碑がある。なお、庭内に残るキリシタン灯籠は、この寺の裏山にあった切支丹福田家老の墓地にあった礼拝物である。灯籠の竿だけとなったが、貴重な信仰遺物である。

参考

渡辺数馬の墓は、堂の裏手の山腹にある。剣客・**荒木又右衛門**とともに実弟の仇、河合又五郎を討ったことは有名である。碑面に寛永十九年竜王子臘月二日、一岳玄了居士塔、甫三十五歳云々とある。

キリシタン灯籠

鳥取市の**興禅寺**、**観音院**、一行寺、同市西町の松田家所蔵と、気高郡酒津東昌寺の五基は、昭和三十二年（一九五七）県の保護文化財に指定された。

キリシタン灯籠は、戦国時代の末から江戸時代のキリシタン弾圧が厳しかった時代に、隠れキリシタンたちが、偽政者の眼を逃れ、密かに信仰の対象物として礼拝したもので、古田織部正重勝らが、考案したことから織部灯籠とも呼ばれる。また、織部重勝のつくった茶器・織物には南蛮模様や十字架をあしらったものが多かった。大正時代末、キリシタン研究が盛んになり、一般にキリシタン灯籠と呼ばれるようになった。

鳥取県内にあるものはいずれも花崗岩で作られ、有和家蔵のものは完全な姿で残っている。しかしほかのものは中台、火袋、傘、宝珠を失い竿だけとなっている。これらの竿丈は七五センチから八三センチである。

隠れキリシタンたちは、竿の上部に彫刻されたふくらみを礼拝していた。これはクロス十字架を巧みに便化した形である。また、キリスト教では宇宙を表す場合、丸をもってその象徴としている。上部の横の丸味は字音を表現した姿である。宇宙の中心には「天の神」がいるとキリスト教では教えている。興禅寺、松田家、有和家が所蔵するものには丸味の中心に、ラテン語の「PATRI（パートリ）」を、「PTI」と便化し、裏文字にした文様が彫られている。なお、PATRIは「天の父」を意味する。

竿の中央から下部にかけてアーチが陰刻され、その中に尊像が陽刻されている。県内六基のいずれの竿の尊像も、胸に合掌し、衣には縦線があって、南蛮風のガウンがよく描かれ、外人の特徴がよくとらえられている。この尊像はイエス・キリストを表現している。興禅寺と松田家所蔵の竿の横には「岩松牙心　鳳来吟錦上花鋪　又一重」の句が陰刻されている。この詩句はキリスト教の聖霊を意味している。

文様の「天の父」、尊像の「キリスト」、詩句の「聖霊」は、キリスト教の三位一体の教えが象徴された礼拝物である。これらはキリシタン灯籠が造られ始めた初期の作で、創造時代型の代表作として、全国的にも貴重な文化財である。

また、一行寺、観音院、東昌寺のものは尊像のみ彫られ、迫害が厳しくなったころの擬装時代型で、そのころの代表作として重要なものである。

キマダラルリツバメ生息地

キマダラルリツバメは昆虫類、鱗翅目蝶類、シジミチョウ科に属する小形のチョウである。鳥取市東町長田神社付近、栗谷町**興禅寺**付近、上町護国神社境内の三か所は天然記念

物として指定されている。このほかにも鳥取県東部では各町村に、中部では倉吉市、三朝町、東郷町、泊村に、西部は**大山**周辺や江府町で発見されている。公園などのサクラやマツ類、砂丘や海岸地域のクロマツ・ニセアカシア林に関連がある。国内では岐阜県、京都府、兵庫県、岡山県に生息し、そのほか朝鮮にも分布している。

キマダラルリツバメは和名の示すように羽の裏面が黄斑で表面がルリ色であり、開いた状態の羽が三五ミリ内外の小蝶で、後羽には二本の尾状突起がある。キマダラルリツバメは、東洋熱帯区に生息し、幼虫時代はアリと共生することが判明している。卵から孵化するとハリブトシリアゲアリの巣に入り、アリから餌をもらって成長し、アリには蜜を分泌して与える。翌年、巣の中あるいは近くで蛹になり、やがて羽化する。

このように興味深い珍奇な習性をもっているこの仲間は、通常、旧熱帯区のものが多いが、キマダラルリツバメだけは旧熱帯区から遠い本州南部および朝鮮・中国等の北温帯に分布している。キマダラルリツバメが羽化するのは六月下旬から七月上旬が最も盛んである。よく晴れた無風のとき、木の上の方に注意し目を向けると見つけることができる。飛翔もなかなか速い。

キマダラルリツバメは、その数も極めて少なく分布も限られていることから、昭和九年（一九三四）五月に天然記念物に指定された。

箕浦家武家門

鳥取市尚徳町
ＪＲ鳥取駅よりバス五分、県庁・日赤前下車すぐ

県立図書館・公文書館の一角に江戸時代の武家屋敷の門が県庁前の道路に面して建っている。旧鳥取藩士箕浦家の表門で、かつては東町のお堀端にあったが、昭和十二年（一九三七）ごろ、師範学校の増改築に当たり武徳館（藩校）ゆかりの現在地に移築され、校門として使用されることになった。門は、入口扉の両側に控えの間が備えられた長屋門の形式である。屋根は瓦葺入母屋、壁は白漆喰、腰はなまこ壁になっている。お堀端にあった頃はささら子下見で、窓格子も木格子で、桁行も長い門であった。昭和初期には取り壊されることになっていたが、鳥取民芸運動の先駆者・**吉田璋也**や柳宗悦の努力によって残ることになった稀有の武家門である。

昭和四十九年（一九七四）四月に鳥取市の保護文化財に指定された。

正墻適處

正墻適處は、幕末から明治維新にかけ詩・書・画に優れた才能を発揮し、因伯における最高の文人と称された。正墻は、鳥取城下江崎町に生まれ建部樸斎に詩文を学び、嘉永二年（一八四九）には藩主・池田慶徳に招かれ藩校である尚徳館の改革に努めた。文久元年（一八六一）、密命を受けて九州諸藩の動きを探った。このとき、勤王の志士たちと交わりを結ぶ。明治六年（一八七三）、久米郡松上村（現在の東伯郡北栄町松神）に移り、詩文や書画の制作を楽しみながら、私塾を開き子弟の教育に努めた。この塾には遠く米子や津山地方からも集まってきたという。詩集に『研志堂詩鈔』がある。

牧野芝石は正墻適處に詩文を学んだ。詩・書・画と三つの技に優れていたので、「三絶の人」とも呼ばれた。明治十八年（一八八五）、パリで開かれた第二回日本美術展に出品している。晩年は鳥取中学（現在の県立鳥取西高等学校）で書道を教授した。

香川景樹

香川景樹は近世の歌人であり、和歌革新を唱え、新しく「桂園派」を立て情熱をそそいだ。

明和五年（一七六八）、鳥取藩士の家に生まれた。七歳で父を失い奥村家に養われ、奥村純徳と名のった。『続稲葉和歌集』に、純徳の作品が十一首収められ注目された。

二十六歳（寛政五年）のとき、歌道で名をあげようと京都へ行き、歌人・香川家の養子となって名を景樹

と改めた。そのころ歌壇は本居宣長の鈴屋派が飛ぶ鳥を落とす勢いであった。景樹は京都歌壇の新進歌人として期待された。同郷の蘭学者・**稲村三伯**との交友はよく知られている。

「歌は理わるものにあらず。しらぶるものなり」。景樹は、「歌は感動を言葉によって調べるもの。調べとは性情の声である」と独自の「しらべ」論を展開する。そして、この論をもとに歌壇革新を企図し「桂園派」を立てた。

『桂園一枝』は、景樹の還暦を記念してまとめられた歌集である。景樹が自ら選んだ九八三首を収めている。「しらべ」論を実作で示した和歌史上の代表的な歌集となった。ほかに『新学異見』『土佐日記創見』『古今和歌集正義』などの著書がある。

天保十四年（一八四三）、七十六歳で没した。

鳥取市尚徳町の県立図書館入口には、和歌革新の決意をうたう景樹の歌碑が立っている。この碑は、顕彰会によって昭和十七年（一九四二）に建立されたものである。

「敷島の歌のあらす田荒れにけり
あらすきかへせ歌のあらす田」

平井権八

鳥取市湯所二丁目の鳥取北中グラウンド横に「鳥取藩士平井権八屋敷跡」の標札と碑がある。それによると、平井権八は、鳥取藩主・池田光仲（一六五五～一六七九）に仕え、御前試合で優勝した、父の仇を斬って脱藩した、などと読めるが、平井権八という人物や事件について鳥取藩の記録はなく、実在したかどうか定かではない。

流布された話によると権八はすこぶる剣の立つ美男であったらしい。鳥取藩を脱藩したあと江戸に出て、吉原・三浦屋の花魁・小紫となじみ、遊興費欲しさに辻斬りを働き、鈴ケ森で処刑された。この話に侠客・幡随院長兵衛もからみ、浄瑠璃や歌舞伎に脚色され権八の名は有名になった。四世鶴屋南北の『浮世柄比翼稲妻』は特によく知られている。浄瑠璃などでは「白井権八」の名で演じられている。これは江戸方言で「ヒ」が「シ」に誤用されたためと考えられる。また、鳥取市内の**円通寺人形芝居**でも権八は活躍する。

名勝 観音院庭園

鳥取市上町
JR鳥取駅よりバス一〇分、立川二丁目下車、徒歩五分

柔らかな曲線を描く築山と月に映える池泉が幽玄の美を創り出す。江戸前期を代表する池泉観賞式の庭園である。天台宗観音院は普陀落山慈眼寺と号し、鳥取藩の祈願所であった。元は栗谷にあったが元禄年間（一六八八～一七〇四）に、現在地へ移った。その際、作庭されたものと推定されている。昭和十二年（一九三七）に国の名勝指定を受けている。

書院からみると、優美な築山の線が左右に交差して奥行きとしなやかさを見せる。池は意外に広い。池の右手、橋のたもとには一基の**キリシタン灯籠**が置かれている。灯籠は県指定文化財である。庭全体の簡素な造りに、武家書院に多い織部流の作庭を感じる。現在も、植え込みや石組は最小限に抑えられ、江戸初期の原型がよく引き継がれている。正面のゆるやかな谷筋が樹木をともなって渓谷を表現し、石組も認められる。観音菩薩が住む普陀落山から、水流れの野筋を通り大海に注ぎ、鶴亀とみられる島の配置もおもしろい。書院に座り、一服の抹茶に心いやされる。水面に映る山越の月を眺め、しばし茶人の世界に遊びたい。

なお、観音院の本尊は正観音で、江戸初期に城山から掘り出されたとの伝承がある。鳥取城の守本尊とされ、藩主・池田光仲の信仰が厚かった。現在も中国観音霊場三十三番札所である。

鳥取市歴史博物館「やまびこ館」

鳥取市上町
JR鳥取駅よりバス一〇分、御弓町下車、徒歩五分

国指定の重要文化財である**樗谷神社**のすぐそばに、平成十二年（二〇〇〇）七月に開館した。常設展示は、「鳥取の風土」「城下町鳥取」をテーマに、コンピューターを駆使してわかりやすく紹介されている。

見て、聞いて、触れて実感でき、子どもから大人まで楽しめる参加体験型の博物館である。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、祝祭日の翌日
●問合せ先　☎0857・23・2140

樗谷神社

鳥取市上町
JR鳥取駅よりバス一〇分、御弓町下車、徒歩五分

社地は水道山と大隣寺山にはさま

れた谷あいで、境内にはマツ・スギ・モミ・シイ・ツバキなどの常緑樹が繁り、幽すいの気が満ちている。神社の創建は慶安三年（一六五〇）で、鳥取池田家の初代にあたる光仲が、幕府に願い出て、日光東照宮の分霊を勧請したものである。古くは因幡東照宮といい、明治七年（一八七四）に谷の名の王子谷にもとづいて、樗谿神社と改称した。

昔、別当寺院の唯識院（いまの立川町に移った大雲院）があった跡の参道を進むと、神明造りの鳥居があり、左に石橋を渡ると神門がある。ここから随神門まで一五〇メートルの石だたみの両側には、かつてサクラの並木もあったと伝えられるが、今はなく数本のスギの巨木がうっそうとはえている。随神門をくぐると石段まで三二メートルの石だたみが、どっしりと美しい。両側には藩の重臣たちの寄進になる石燈籠十基ずつが林立している。石段を上ると、そこに昭和二十七年（一九五二）に国の重要文化財に指定された拝殿・唐門・本殿の建物が建っている。

工事の総奉行は荒尾大和、奉行は寺島彦右衛門、那須市郎右衛門らであった。大工棟梁は木原木工允、野

間能登らで、木原木工允は、浅草寺本堂・五重塔・上野東照宮・日光東照宮社殿などの建築にもあたった名工である。また、本殿の桁に施された鷹の彫刻は左甚五郎の作といわれる。用材はほとんど全部がケヤキ造りで、一部に彩色塗り、本漆塗りが施されているほかは白木造りで、各所に桃山風の飾金具が見られる。社殿全体のつりあいもよく、社地の幽玄さに調和して、江戸初期の神社建築として屈指のものといえよう。江戸時代に幾度も小修理が行われたがその後破損が著しく、とくに昭和十八年（一九四三）の鳥取震災によるいたみがひどく、昭和三十年（一九五五）、総工費三百七十余万円を投じて修理し、翌年十月に全工事を終了した。

社宝として、狩野探幽三十六歌仙画像や同じく鷹の図などがある。

権現祭

鳥取藩初代藩主・池田光仲公が、慶安三年（一六五〇）、日光東照宮の御分霊を「因幡東照宮」（現**樗谿神社**）として祀った。その二年後の承応元年（一六五二）九月十七日から奉納されるようになった祭礼行列である。

祭礼絵巻によると、樗谿を出発した御輿が古海河原のお旅所を中継し、再び樗谿に戻るという旧町域を一巡するコースで神官・僧・武家・町民も参加する鳥取城下で行われた最も盛大な祭礼であった。しかし、明治以降は神仏分離政策により、祭礼の規模が縮小され、下火になって明治四十年（一九〇七）を最後に行われていなかった（絵はがき等の古写真で様子をうかがい知ることができる）。

平成十二年（二〇〇〇）十月十四日、因幡東照宮創建三百五十年を迎え、市民の手による「権現まつり」が開催された。かつて権現祭で使われていた御輿も登場し、武者行列、獅子舞などが再現された。

獅子舞

因幡地方から但馬の一部にかけては、春秋の祭礼に金色の面長の獅子頭を使う獅子舞が奉納される。この獅子舞は、獅子頭の形状から「キリン獅子」と称され、因幡地方では主流である。また先導役が猩々（想像上の動物）であること、笛・太鼓・鉦の伴奏でゆったりと舞う点などが特徴である。

キリン獅子舞の起源は、鳥取藩初代藩主・池田光仲公が、慶安五年（一六五二）、「因幡東照宮」（現**樗谿神社**）に奉納したという説がある。樗谿神社の祭礼が行われなくなった現在、「正統権現流」と称する大和佐美命神社（鳥取市中砂見の大湯棚地区と上砂見地区）、「権現堂古流三方舞」と称す**岩坪神社**（鳥取市岩坪）、「三方舞」と称する**宇倍神社**（国府町宮下）などが、本家樗谿の獅子舞を伝えていると考えられる。この三つの獅子舞はいずれも県指定民俗文化財である。平成十年（一九九八）には、**倉田八幡宮**（鳥取市蔵田）・下味野神社（下味野）・**賀露神社**（賀露）、**玉井神社**（智頭町芦津）、澤神社（八東町才代）の獅子舞も県の無形民俗文化財に指定された。

なお、因幡地方でも、獅子舞を奉納しない（獅子頭を伝えない）、もしくは神楽獅子舞を伝える集落がある。伯耆地方では、獅子舞というよりも、祭礼行列の中で獅子頭をかぶった者が行道するスタイルが一般的である。その他、子どもに獅子を舞わせる集落では「神楽まわし」と称している。

わらべ館

鳥取市西町
JR鳥取駅よりバス五分　わらべ館前下車

子どものうたとおもちゃをテーマに、遊びの文化性に着目し、県と鳥取市が協力して整備し、平成七年（一九九五）七月に開設した。

この施設は、「童謡館」と「鳥取世界おもちゃ館」からなる。

「童謡館」は、県が進める「童謡・唱歌のふるさと」づくりの拠点施設であり、地元のすぐれた音楽家や童謡・唱歌を紹介している。

また、「世界おもちゃ館」は、平成元年に鳥取市で開催された「世界おもちゃ博覧会」の成功を顕彰したもので、昔ながらの懐かしいおもちゃや外国の玩具が展示された「おもちゃの部屋」がある。おもちゃづくりや唱歌教室なども開催され、子どもたちには夢と創造性を与え、そして大人には郷愁を感じさせる。

建物は、旧県立図書館跡に建てられ、歴史を伝える建物を残すため、建物の一部には旧県立図書館の外観が復元されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　第三水曜日（祝日の場合は翌日）年末年始
●問合せ先　☎0857・22・7070

大雲院

鳥取市立川
JR鳥取駅よりバス一〇分　立川大橋下車

天台宗に属する寺で、慶安三年（一六五〇）、藩主・池田光仲が創建した。もと東照宮の別当寺院であったが、明治二年（一八六九）神仏分離となったときに東照宮を樗谿神社と改め、大雲院を現地に移転したものである。

現在、旧国宝の紙本金字法華経巻第二、第四の二巻が所蔵されている。これは、昭和十七年（一九四二）六月に重要文化財に指定された。伝には、万里小路宣房の筆となっているが、正しくは巻第二は二十二人、巻四は十七人の筆者によって書かれたものとされる。両巻とも巻頭は伏見天皇の御筆と考証されている。この紙背に約五十通の消息（手紙）が達筆で記されている。これは慈道法親王ということであったが研究によると、伏見天皇筆で御子・後伏見天皇にさし出されたものであるという。経文の筆者と消息の筆者が同一の伏見天皇で、同天皇の逆修経（生前に前もって菩提をとむらうために法会をいとなみ、書き写しおいた経）であったと推定されている。この経巻は江戸時代末、日野郡黒坂の緒形氏から、当寺に奉納されたということ以外は、明らかでない。

財団法人渡辺美術館

鳥取市覚寺
JR鳥取駅からバス十五分　渡辺美術館前下車すぐ

鳥取市の医師が昭和初期から六〇余年に渡って収集した国内外の古美術品約三万点が収蔵されている。

収蔵品は、江戸時代各地の大名が贅を尽くして作らせた絵画や壺、道具、武具のほか、大陸の文化や歴史を伝えるものなど多彩である。

また、鳥取藩に関する品々も展示されている。

●開館時間　午前一〇時～午後五時（入館は四時三〇分まで）
●休館日　火曜日・年末年始
●問合せ先　☎〇八五七・二四・一一五二

摩尼寺

鳥取市覚寺
ＪＲ鳥取駅よりバス十五分、覚寺下車、徒歩四〇分

鳥取市覚寺部落から二・五キロメートルの山奥にある。天台宗に属し、本尊は帝釈天である。承和年間（一三四五～一三五〇）に慈覚大師が開いた。

因幡地方の住民の崇敬が厚く、五月二十六日の会式および春秋の彼岸には多くの参詣の人々でぎわう。

高い石段を登ると途中に山門があり、石段を登りきると、右に鐘楼、左に籠り堂がある。本堂は山の中腹を切りひらいて建てられている。奥の院はここからなお、数百メートル登らねばならない。大きな立岩は、帝釈天出現の地といわれる。

付近には**道好**、**小泉友賢の墓**、鼠屋大蕪の句碑、継子落しの滝、鶏山などがあり、摩尼寺縁起の感じをそのままに、俗世を遠ざかった感じである。

参考

道好の墓

摩尼寺の石段の下、茶屋の背後の山腹にある。道好は摩尼寺の僧侶で、秀吉がこの寺を焼きはらおうとしたとき、守って寄せ付けなかった。秀吉は一策を考え、法事にことよせて道好を本営に招待した。その留守の間に寺を焼き払った。これを知った道好は急いで帰ったが既に焼けてしまっていたため、怒り自ら穴を掘ってこれに入り死んだという。

小泉友賢の墓

摩尼寺の石段下、左手の茶屋の後にある。墓碑には「白水先生碑」と刻まれている。友賢は、鳥取藩の侍医で貞享五年（一六八八）に因幡民談記一〇巻を記した。七十歳で亡くなった友賢は「自分の死後は摩尼山中の草の根に埋めて墓を作り碑を建てるなどしないように」と遺言したことが墓石に記されている。

伝説

昔、湖山の村に宇文長者がいた。長者夫婦には子供がなく、それを嘆き、円護寺の大日如来に祈ったところ、一女子を得た。

しかし、この女子が八歳の夏に姿を隠したので長者が探すと、童女に化けて海上の雲霧の中三日三夜戯れ、立岩の頂で帝釈天になった。それを見た者は歓喜し私財を投じ、寺を建てた。これが喜見山摩尼寺である。

（摩尼寺縁起より）

離水海食洞

鳥取市浜坂
ＪＲ鳥取駅よりバス十五分、丸山下車、徒歩五分

鳥取市丸山の交差点から浜坂へ向かう道路沿いにある洞窟。入口の部分の高さは約一メートル、最大幅〇・九メートル、奥行一八メートル。

離水海食洞は、かつての海岸線の崖が海水の浸食を受けてできた地形で、海岸線が後退したことにともなって内陸に見られる洞窟。縄文時代前期の日本列島が暖かく海水面が高かった（縄文海進）頃に形成されたと考えられている。離水海食洞の付近には、かつての海食崖であった崖も見られる。

吉川経家

吉川経家は安芸国の吉川氏の一族で、石見国福光城（島根県邇摩郡温泉津町）の城主であった。

天正八年（一五八〇）五月、羽柴（後の豊臣）秀吉は毛利氏の勢力下にあった因幡に侵攻し、鹿野城、鬼ヶ城など主要な諸城を攻略した。これをみた鳥取城の山名豊国は秀吉に帰属することを決めたが、家臣がこれに反対し豊国を追放した。残った家臣は、毛利氏の山陰経営の責任者であった吉川元春に城将の派遣を要請し、元春の命を受けた吉川経家が、天正九年三月、海路賀露に上陸し鳥取城に入った。城兵は千人余りであった。しかしこのとき既に因幡のほとんどと東伯耆は織田方の勢力下に

入っており、鳥取城は孤立無援の状況にあった。しかも当初から城内に食糧の蓄えは乏しかった。

同年六月、姫路を出発した秀吉軍二万は、七月十二日には鳥取城の東方の太閤ケ平に本陣を構えた。秀吉軍は鳥取城を完全に包囲し、城外との連絡路を断った。そのため八月の終わりごろから、城内の兵粮が尽き餓死者が出始めていた。経家はよく城兵を統率し持ちこたえたが、ついに城兵の助命を条件に自刃し、十月二十五日に鳥取城は開城した。後世、鳥取城の「渇え殺し」といわれた攻城戦である。

吉川経家の墓が、鳥取市内の円護寺にある。二基の五輪のうち一基が経家、もう一基は経家の家臣たちの墓と伝えられている。

〈鳥取市街地〉

鳥取温泉

鳥取市吉方温泉町、末広温泉町、永楽温泉町の鳥取駅周辺に湧出する温泉。明治三十八年（一九〇五）、山陰線鉄道敷設工事に伴い温泉が発見された。池内源六が掘削に成功し、現在の温泉地開発の端緒となった。これとは別に、元禄年間に湯所に温泉があったという記録があり、寺町に寺町温泉があったことが『大正の鳥取』に記述されている。

現在の温泉域であるＪＲ鳥取駅前から吉方温泉町には、約三十本の泉源が集中しているが、汲み上げが過密になるとお互いが干渉するので、稼働しているのは十八本である。温泉の深度は中心部で四八メートルと浅堀井で、約六十度の温泉水が得られている。その反面、中心域を外れると深堀をしても高温水は得られない。平均温度四十四・五度、湧出量は毎分八八四・四リットル。泉質はナトリウム、塩化物、硫酸塩泉である。

温泉水は鳥取駅付近の地下に潜在する第三紀層の岩盤の高まりに発達した断層や並列する割れ目に沿って上昇し、一部は洪積層や沖積層内を流動していると考えられている。

県庁所在地に温泉の湧く例は全国でもあまりみられない。鳥取市はもともと城下町であったので市内には、**仁風閣**、**興禅寺**、**観音院庭園**、**玄忠寺**、**景福寺**など名勝史跡も多い。

物産 鳥取県物産観光センター

鳥取市末広温泉町
ＪＲ鳥取駅より徒歩五分

鳥取市の中心市街地に昭和六十一年（一九八六）八月に開設した。

伝統の技を生かした工芸品、農畜水産物の加工食品、菓子、酒類など、鳥取県内のあらゆる特産品が揃っている。

●開館時間　午前九時三〇分～午後六時三〇分
●休館日　第三木曜日
●問合せ先　☎０８５７・２９・００２１

鳥取民芸美術館

鳥取市栄町
ＪＲ鳥取駅より徒歩五分

昭和初期に民芸運動を進めていた**吉田璋也**が開設した。白い土蔵造りの建物は、昭和二十四年（一九四九）十二月の開館当時、鳥取民芸館と呼ばれた。

館内には、山陰に伝わる古い民芸品をはじめ、日本全国や中国、ヨーロッパなどからも収集された民芸品が多数陳列されている。

右隣にある八角形の建物には、童子地蔵堂で享保年間から明治までの無名の石工が刻んだ百四十七体の童子地蔵が安置されている。

●開館時間　午前一〇時～午後五時
●休館日　水曜日（祝日の場合はその翌日）
●問合せ先　☎０８５７・２６・２３６７

吉田璋也

吉田璋也は柳宗悦の民芸理論に共鳴して民芸運動を繰り広げ、民芸の興隆に大きな業績を残した。

明治三十一年（一八九八）、医師を父に鳥取市に生まれた。新潟医学専門学校（現在の新潟大学医学部）を卒業後、京都、倉敷、大阪、奈良などで医療に従事した。昭和五年（一九三〇）暮れ鳥取市に帰り、医院（耳鼻科）を開業した。牛ノ戸の茶碗に魅せられた吉田は、そのころ経営に苦しんでいた**牛ノ戸窯**（河原町）を指導し再興させた。

吉田がプロデュースした民芸は、木工、竹工、挽物、漆工、石工、金工、染物など広範囲にわたった。古い民芸作品（残存民芸）の保存も大切だとしながらも、民芸品の制作（新作民芸）の指導育成に努め、地方の工芸に新しい刺激を与えた。

民芸の拠点「たくみ工芸店」を鳥取市内に開設、さらに東京にも出店し、鳥取県の民芸品を県内外にＰＲ

し、販売を促進した。昭和二十五年（一九五〇）には、**鳥取民芸美術館**を開設、優れた民芸品を展示し鑑賞と勉強の場を提供した。また昭和三十六年（一九六一）には「たくみ割烹店」を開店、郷土色に富む庶民料理を地元の民芸陶器に盛りつけ、「用の美」を実践してみせた。

昭和四十七年（一九七二）、七十四歳で死去。

稲村三伯

稲村三伯はわが国最初の蘭和辞書を編集し、蘭学の発展に大きく貢献した医師・蘭学者である。

宝暦八年（一七五八）、現在の鳥取市川端三丁目の医師である松井家に生まれた。生誕地には標柱が立てられている。

鳥取藩の医師・稲村三杏に医学を学び養子となった。藩医の後継者となった稲村は、藩校尚徳館や福岡の亀井南溟の塾に学び、三杏の死後、藩医を継いだ。

蘭医・大槻玄沢のオランダ語入門書『蘭学階梯』を読んで発奮し、寛政四年（一七九二）江戸に出て藩邸に勤めながら玄沢の門に入り、蘭学を学んだ。蘭和辞書があれば蘭学研究はもっと発展すると考え、学友とともにオランダ人・ハルマの辞書をもとに寛政八年（一七九六）、『波留麻和解』を完成した。わが国初の蘭和辞書であり、欧日対訳辞書としても最初のものであった。この辞書には六万四千三十五語が収められている。

稲村は後に藩医を辞め、江戸下総国海上郡（現在の千葉県）などを転々としている。そのころ海上随鴎を名乗った。文化三年（一八〇六）には京都で蘭学塾を開き、京都の蘭学はこれにより盛んになったといわれている。解剖の本『八譜』はこのころに執筆された。六十四巻からなる大冊である。文化八年（一八一一）、五十四歳で永眠。

鳥取市本町一丁目の遷喬小学校玄関には三伯の胸像を置いた歌碑がある。同郷の歌人・**香川景樹**が稲村を讃えて詠んだ歌が刻まれている。

「いく葉、くすしき種のひとくさを、
豊あし原に　まきし人これ」

伊谷賢蔵

伊谷賢蔵は、「行動美術協会」を中心に精力的に活動するとともに、多くの新進画家を育てた。

明治三十五年（一九〇二）、鳥取市川端一丁目で質店を営む旧家に生まれた。京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）に入学、本格的に油彩に取り組む。春陽会、二科会で受賞を重ね、画家として順調な道を歩む。

昭和十四年、陸軍従軍画家となり、中国北部へ派遣された。中国の民衆の生活や風景に感動、特に千五百年もの長い年月を耐えてきた雲崗石仏に強く打たれた。連作『雲崗石仏』は民族の力と悠久の歴史の流れを力強いタッチで描いている。戦意高揚の絵が多いなかで、伊谷は広大な自然や滋味に満ちた人間を描いた。

終戦後、向井潤吉らと「行動美術協会」を結成し、昭和四十五年（一九七〇）に亡くなるまでの二十五年間、その中心画家として精力的に活動するとともに、京都学芸大学などで多くの新進画家を育てた。この間、鳥取へもたびたび帰り、冬の山陰海岸や秋の**大山**を好んで描いている。

主な作品に『大同石仏』『阿蘇』『裏大山晩秋』『万年山』『クスコの朝市』などがある。

八百谷冷泉

八百谷冷泉は、『大波濤』で知られる日本画家である。

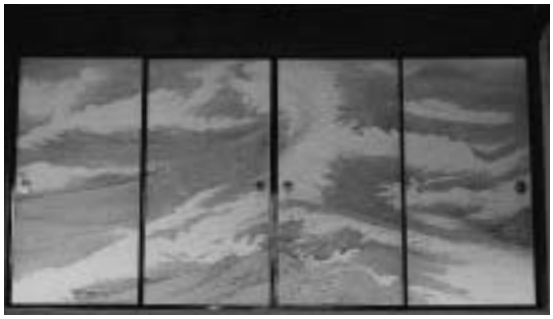
明治二十年（一八八七）、現在の鳥取市職人町に生まれた。幼いころから絵を描くのが好きで、二十二歳のとき京都、円山派の山元春挙について学んだ。大正七年に文展に入選し、同十三年には初期の代表作『孔雀』を完成させた。精密で、華麗な描写は格調高い。

昭和十二年、矢野橋村、小杉放庵、**菅楯彦**らと「墨人会」を結成している。しかし、太平洋戦争が勃発し、

教授をしていた大阪美術学校も閉鎖された。さらに長男の戦死と不幸が相次ぎ、一人帰郷し終戦を迎えた。

冷泉は、岡益の長通寺（国府町）が気に入り十年間滞在している。そのお礼として描いたのが、冬の**日本海**が激しくしぶく二十枚の襖絵『大波濤』である。冷泉は、この絵を描くため岡益から鳥取市の**賀露港**まで約一八キロメートルを歩いて通い、三年あまりの取材ののち、一気にこの絵を描きあげたという。昭和三十四年（一九五九）、七十一歳で没した。

今、長通寺は「冷泉寺」とも呼ばれている。



聖神社

鳥取市行徳　ＪＲ鳥取駅より十五分　千代橋下車付近

天津日高日子番熊邇々芸命（天孫降臨の神）日子穂々手見命（邇々芸命の御子で神話の海彦の神）事代主神（大国主命の御子）を祭神とし、古くから「聖の大社」として崇められてきた。

社殿の創立年代は明らかでないが、現在の本殿は宝永七年（一七一〇）八月に建立されたものである。安永五年（一七七六）八月には、神階の最上位である正一位をうけている。本殿の建築に当たっては、当時の建築技術の粋が集められ、『鳥府志』にも、「国中無双の麗宮なり、工匠巧みをきわめ、彫刻美を尽せり」とある。社殿は昭和三十二年（一九五七）四月、県の保護文化財に選定された。

神幸祭もこのころから大祭の規模をもつようになった。『因幡志』には「（安永）六年六月、初めて夏祭行はる。それより毎年六月六日から十一日まで、祭礼を執行する。氏子男子の童蒙謡躍して歌舞をなす播車、台車を引渡して殊に賑はしく神威を増し霊光赫々たり」とあり、また『鳥府志』にも「寛政の初年、氏子構の町々から各屋台を出し、子供歌舞伎を仕組み内町より古海の松原まで挽出し、其の道筋屋台の中より、琴・三味線・胡弓・笛・太鼓の拍子を揃へ、或いは銅羅を打鳴らし法螺を吹き種々の音曲を尽し（略）見物の老若男女堵墻の如く街衢に立塞り其の賑はしき事類なし（略）」と記しているがそのいずれをみてもいかに町をあげての大行事であったかがうかがわれる。なお祭神の事代主神は、最初、聖神社の摂社として境内に社殿があり、恵美須神社の祭として毎年十月二十日祭典を奉仕していたが明治三年（一八七〇）本社に合祀された。

毎年五月下旬は、鳥取市が聖神社のお祭りムードでわきかえる。

常忍寺

鳥取市行徳　ＪＲ鳥取駅よりバス五分、行徳口下車、徒歩五分

日蓮宗正中山法華経寺（現千葉県市川市）の末寺で、一尊四菩薩を本尊とする。

紀州侯・徳川頼宣の母堂・於万の方が（家康の側室養珠院）法華を信仰し生涯に法華三個寺を（父母夫君のため）建立しようと思いたち、まず養珠寺（和歌山県）、本遠寺（山梨県）の二か寺を建立した。残りの一か寺は日常上人の生国である**因幡国**に建立しようと念願していたが、果たすことができなかったので、その旨を孫娘（光仲の正室・茶々姫）に遺言した。茶々姫は日常上人が紀伊国（和歌山県）から鳥取の芳心寺の住職となるや、寛保元年（一七四一）九月母堂の遺言によって一寺を建て鷲峰山常忍寺としたといわれる。なお、常忍とは日常上人の別の名である。

本寺に蔵する絹本著色普賢十羅刹女像は有名で、巨勢金岡あるいは唐五道子の筆と伝えられているが、定かではない。鎌倉時代のものと推察される。これは、明治三十七年（一九〇四）二月に国宝に指定された。そのほかにも大蔵経など数々の宝物があったが、大洪水のとき破損した。

日常上人は元富木播磨守常忍といい、承久二年（一二二〇）、因幡の富木郷に生まれ、のち下総国（千葉県）中山に移って北条氏に仕え、富木殿と称えた。日蓮上人の法を聞いてありがたく感じ、上人が亡くなった後薙髪し、日常と改め下総国に正中山法華経寺を建立した。

景福寺

鳥取市新品治町
ＪＲ鳥取駅より七分、新品治町下車、徒歩八分

曹洞宗に属し、福井県永平寺の末寺である。景福寺は、南北朝時代の貞治三年（一三六四）に開山した。通幻禅師が摂津に創った古寺である。通幻和尚には伝説でいう「飴買い幽霊」によって育てられたとの伝承がある。その後、姫路城主・池田輝政の家老・荒尾隆重が姫路に移し荒尾家の氏寺とした。元和二年（一六一六）に備前に移し、寛永十年（一六三三）に荒尾家老と共に鳥取に移り、栄えた大寺である。

江戸時代、鳥取景福寺、倉吉定光寺、米子**総泉寺**を因伯の三禄所とし、禁制の宗門切支丹と不受不施派を取り締らせていた。景福寺は因伯二州の総務所であった。これらの取締り覚帳は、慶長十八年（一六一三）から約百五十年間の記録を留めた貴重な資料である。

寺宝として**土方稲嶺**、**谷文晁**、**島田元旦**などの有名な書画、骨董類が多く所蔵されている。

また、大坂冬の陣、夏の陣で豊臣方につき活躍した**後藤又兵衛**その子や、武芸に秀でた**羽生郷右衛門**、画家の**島田元旦**・**土方稲嶺**などの墓がある。

参考

後藤又兵衛の墓

大坂冬の陣及び夏の陣で活躍したが四十六歳で戦死した。そのとき二歳だった子・為勝は母親に抱かれて**因幡国**（鳥取）に亡命し、成長の後、池田光仲に仕えた。為勝の子正俊が祖父の勇名を慕って建てたのがこの墓である。大きな五輪塔二基が又兵衛夫妻の墓である。

羽生郷右衛門の墓

武芸をもって池田光仲に仕え勇名をとどろかせた。墓はひき臼を似せて造られている。また、墓には辞世の句が刻まれている。

「世の中をめぐりめぐりて因幡路に
　しばらく足をひき臼となる」

荒木又右衛門

江戸時代初期の武芸者である。慶長三年（一五九八）、伊賀上野に生まれた。大和郡山藩に仕えていたが、義弟の仇討ちを助けるためその職を棄て協力した。

義弟・**渡辺数馬**は備前岡山藩主・池田忠雄の家臣であった。数馬の弟が同僚の河合又五郎に斬殺される事件があり、その仇打ちを又右衛門が助勢した。寛永十一年（一六三四）、鍵屋の辻（現在の三重県上野市の郊外）で仇討ちを果たした。日本三大仇討ちの一つといわれているが、厳密には藩主・忠雄の遺命による「上意討ち」であろう。

寛永十五年（一六三八）八月十二日、又右衛門は鳥取藩に迎えられている。同月二十八日に又右衛門の死が藩で公表されているが、切腹か毒殺か、その死は謎に包まれている。

墓は鳥取市新品治の**玄忠寺**にあり、境内には遺品館もある。

玄忠寺

鳥取市新品治町
ＪＲ鳥取駅バス一〇分、新品治下車

浄土宗知恩院末寺で、その創建は永正五年（一五〇八）と伝えられる。万治三年（一六六〇）以前には下台町にあったが、この年全焼して現在地に移った。江戸時代には、遊行上人来鳥のとき、真教寺、大行寺とこの寺が輪番で旅宿にあてられたという。たびたび火災にあい、宝永二年（一七〇五）には、本堂、庫裏ともに焼失した。今の本堂は、寛政十二年（一八〇〇）ごろの建築で、庫裡は八上郡徳吉村の農家を移したものである。

境内に高浜十兵衛、**荒木又右衛門**、**黒田稲皐**らの墓がある。また、庫裏では、高木啓太郎筆の羅漢襖絵が展示され、境内にある遺品館には、荒木又右衛門の遺品が展示されている。

鎌倉十七

鎌倉十七は、万治・寛文・延宝（一六五八～一六八〇）のころ天下に知られた力士である。

鳥取藩の歴代藩主は相撲を好み優秀な力士を多く召し抱えていた。当時、鳥取藩ほど領内に力士が多い藩はなかったといわれる。そのためか百近い力士塚が鳥取市内に確認されている。因幡の相撲を語るとき忘れてならない力士が鎌倉十七と**両国梶之助**であろう。

鎌倉十七は本名を畔柳茂右衛門といい、寛永の末に奥州に生まれたといわれる。池田光仲に仕えた。

十七歳のとき、鎌倉の勧進相撲で優勝したため、それにちなんで鎌倉十七を名乗るようになった。鎌倉の化粧回しには緋糸で日の丸が付けられていたので、日の下開山鎌倉十七とも呼ばれた。

鳥取市立川町一丁目の広徳寺に墓がある。力士の墓としては最も古く、今も相撲関係者が葬でている。

尾崎放哉

放哉は、季語や形にとらわれない自由律の俳人、それも漂泊の俳人として知られる。本名を秀雄。明治十八年（一八八五）、鳥取市吉方町に生まれた。明治三十二年（一八九九）、県立第一中学校（現在の県立鳥取西高等学校）に入学。この頃から句作を始めている。明治三十八年（一九〇五）、東京大学法学部に入学、従妹との結婚を望むが周囲に反対される。以後、酒におぼれることが多く、人間不信も強くなる。就職しても次々に辞めている。

大正十二年（一九二三）、仕事も家族も捨て、京都、須磨などの寺男として寺を転々とし始める。孤独と貧苦、放浪の生活の中で放哉の句は輝き始める。

大正十四年（一九二五）、師である荻原井泉水の尽力により、小豆島にある西光寺南郷庵に落ち着いた。しかし、極貧と病苦の生活が続き、大正十五年（一九二六）、四十二歳で亡くなった。

「せきをしてもひとり」

「肉がやせてくる太い骨がある」

死と向き合いながらも自由を全うし、独自の心象を歌った。放哉の生き方がそのまま自由律俳句である。

「春の山のうしろから烟が出だした」

尾崎家の菩提寺である栗谷町の**興禅寺**にこの句碑がある。辞世の句で井泉水が書いた。

平田眠翁

平田眠翁は鳥取藩の医学・本草学者で、文化四年（一八〇七）に生まれた。京都の水野皓山らに本草学や物産学を学んだ。和歌もたしなんだ。

嘉永一年（一八四八）、鳥取中土手（現在の鳥取市）に開業し、やがて鳥取藩の薬園掛を務めた。薬園は現在の鳥取市立川、県立鳥取東高等学校の前あたりにあった。

文久一年（一八六一）からは十年間、薬園長を命じられた。明治になり、鳥取県医学校が開設されるとその教授を務めた。明治十五年（一八八二）に亡くなった。

著者に『物薬効録』などがある。なお曾孫は劇作家の田中千禾夫であり、千禾夫の夫人は同じく劇作家の澄江である。

種田山頭火の句碑

俳句と旅に生きた種田山頭火（一八八二～一九四〇）の句碑は全国各地に建てられている。山頭火が生まれた防府市の「山頭火研究会」によると、没後五十年の平成元年には百基の句碑を数えている。鳥取県内にも三基ある。

「松はみな枝垂れて南無観世音」

鳥取市安長の東円寺境内に建つ。山頭火に心酔していた住職が昭和四十八年（一九七三）に建立した。この句は**尾崎放哉**死没の地小豆島の南郷庵を訪れたときに詠んだ。山頭火は、放哉と同じ自由律俳句誌『層雲』の同人で三歳年下の放哉を終生敬愛していた。

「分け入っても分け入っても青い山」

この句は、昭和二年秋、用瀬町の『層雲』同人・森田千水を訪ね半紙に書き残したもの。八頭郡用瀬町の役場前に建つこの句碑は、昭和五十九年（一九八四）に建立された。用瀬町内の「文学の小径」に並ぶ碑の一基である。

「へうへうとして水を味ふ」

西伯郡大山町大山寺の清光庵入口に昭和六十年に建立された。『層雲』同人で倉吉市出身の**河本緑石**との双句碑である。生前、顔を合わすことのなかった二人の句碑を並べ魂の出会いをということで建てられた。

なお、緑石の碑には「星、みんな消えてしまった　頂上にすはる」と彫られている。

しゃんしゃん傘踊り

昭和四十年（一九六五）、高田勇鳥取市長と横枕在住の高山柳蔵によって考案された踊り。

鳥取市では、**聖神社**、大森神社の五月の例祭に合わせて、昭和三十六年（一九六一）から「鳥取祭」が行われていたが、市長をはじめとする要人の市中パレードが中心であった。昭和三十九年（一九六四）の市役所新庁舎完成を機会に、高田市長と高山柳蔵が鳥取市域に伝わる**「因幡の傘踊」**を大衆化し、新作民謡「きなんせ節」に合わせて、誰でもいつでもどこからでも踊れる踊りを目指し考案したといわれる。

祭の名称は一般公募され、シャンシャンという鈴の音と、市街地の温泉で湧く湯がシャンシャンと鳴る音から「しゃんしゃん祭」と名付けられた。以後三十年以上、毎年八月十六日に行われている。市民あげての一斉傘踊りが、鳥取市街を鮮やかに彩る。

〈鳥取市南部〉

岡野貞一

岡野貞一は、『故郷』『春の小川』『朧月夜』など、今も多くの人に親しまれ、歌い継がれている文部省唱歌を作曲した。

岡野は、明治十一年（一八七八）に、現在の鳥取市古市に生まれた。岡野が生まれた家の周辺には、豊かな自然があった。

少年期に鳥取教会で永井幸次（後に大阪音楽大学を創設）の弾くオルガンや讃美歌に魅せられ、西洋音楽に強い関心を寄せるようになった。

明治二十九年（一八九六）、音楽家を志し、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に進んだ。専攻は声楽であったが、作曲にも秀でていた岡野は、卒業後も助手として学校に残った。

明治四十二年（一九〇九）から、文部省唱歌編さんの事業に参画した。ここで、高野辰之と岡野による数々の名曲が生まれている。『春が来た』（明治四十三年）、『紅葉』（明治四十四年）、『春の小川』（大正元年）、『故郷』『朧月夜』（大正三年）である。日本の懐かしい風景や四季が高野の美しい言葉で表現され、岡野の上品でやさしい旋律がしなやかに包みこんでいる。

岡野は、東京音楽学校での講義のかたわら毎週日曜日、本郷中央公会堂（教会）でオルガンを弾き、聖歌隊を指導した。この活動は昭和十六年（一九四一）に急性肺炎のため六十四歳で死去するまでの四十三年間続けられた。

鳥取市東町の**久松公園**入口には『故郷』の音楽碑が建っている。昭和四十八年（一九七三）に設置された。

また、鳥取県は、岡野をはじめ郷土が生んだ偉大な音楽家を知ってもらい、童謡・唱歌の普及を図るために、昭和六十三年（一九八八）から「童謡・唱歌のふるさと」を提唱し、童謡・唱歌のふるさとづくりに取り組んでいる。

市内の街路には音楽碑をはじめ、音楽チャイム、童謡カリヨン（鐘）、案内板などが設置され、岡野貞一の業績を讃えている。

糸賀一雄

知的障害のある子どもたちの福祉と教育に一生を捧げた。

戦災孤児や知的障害のある子どもたちのために、昭和二十一年（一九四六）、同志と共に大津市内に「近

江学園」を設立した。そこで、障害児との共同生活を通し、当時の貧しい福祉政策の中で先駆的な福祉教育を実践するとともに、障害児のための職業施設などを設立した。

糸賀は大正三年（一九一四）、鳥取市に生まれた。昭和十四年（一九三九）、京都大学を卒業し、滋賀県庁に務めた。秘書課長、兵事厚生課長、食糧課長などを歴任した後、県庁を辞め、「近江学園」を設立した。

糸賀は「この子らを世の光に」と言っている。憐れみの政策ではなく、この子らは自ら輝く存在であるから、いよいよ磨きをかけて輝かしたいという。糸賀の説く福祉の指針を求めて多くの人が学園を訪れた。

講演や相談の依頼も相次ぎ、大学での講義なども行う一方、ふるさと鳥取へもしばしば足を運び、助言や指導に当たっている。

昭和四十三年（一九六八）九月、講演中に倒れ、子どもたちに見守られながら五十四歳で亡くなった。

有隣荘（ゆうりんそう）

鳥取市国安
JR鳥取駅よりバス十五分、国安上下車、徒歩三分

鳥取平野南部の国安にある旧西尾家住宅は、現在は有隣荘と名付けられ、会食や茶会など広く市民に利用されている建物である。国安は大正七年（一九一八）の**千代川**の大洪水で甚大な被害を受け、集団移転を行った。西尾家は宮大工も加わり五年の歳月をかけて昭和四年（一九二九）に竣工した。因幡地方では、明治以降、智頭の米原家（明治三十年頃）、**石谷家**（昭和二年頃）、若桜の木島家など素封家の贅を尽くした住宅が相次いで造られるが、西尾家もその一つである。建物は主屋・離れ・栂の間の三棟が池泉回遊式庭園に対して雁行形に配置されている。

主屋は棟を高く上げた入母屋の瓦葺き屋根を載せ、軒を二重に廻した豪華な造りとなっている。屋敷の角にある表門も入母屋の屋根を載せ、門扉はクスノキの一枚板が使われている。その脇には樹齢二百年を超えると言われるシイの木があり、旧家としての風格を伝えている。主屋の奥には茶室などの建物が付設している。西北にある本格的な池泉回遊式庭園は、広大な敷地の西側にせり上がるように樹木を配し、南の八坂山を借景にした庭園は京都の庭師によって造られたものと言われる。

茶室と奥座敷からなる「栂の間」は旧藩主池田家より拝領したもので、旧屋敷より移築されたものである。花頭窓を床脇に設け、緊張感のある禅宗風書院造となっている。

昭和三十六年（一九六一）に米原家の所有となり、迎賓館として改修された。昭和六十年（一九八五）の「わかとり国体」を機に増改築を施し庭園を整備して一般に開放され、以来、鳥取市の奥座敷として広く利用されている。

福田家住宅

鳥取市紙子谷
JR鳥取駅よりバス二〇分、紙子谷下車、徒歩七分

福田家は、代々庄屋を務め、二十代も続いた家柄と伝えられる。その主屋は復元すると桁行八間・梁間四間の広間型三間取になり、いわゆる「四八」と称される大規模民家である。現在は庇を付けて拡張されて、桁行九間・梁間五間で、部屋数も多くなっているが、外壁は土壁を塗廻した大壁の古風なつくりとなっている。屋根は、妻上部に三角形の煙抜きのある入母屋造の茅葺屋根で、棟には因幡地方独特のカラスオドリがのっている。

屋根裏の小屋組は**三百田氏住宅**（さんびゃくだ）に似ているが、土間廻りだけでなく、納戸（なんど）廻りにも入側柱が入り、桁行梁も入側列に架かっており三百田氏住宅より古い構造形式を伝えている。

柱や梁などの主要構造部材も手斧ではつったままであり、大黒柱だけでなく側柱も太い。また、畳を敷いていたのは「おくのま」だけだったと見られ、他の室の柱間寸法は畳の納まりを考えずに設定してある。土間に取りつく床框（敷居）も柱芯に納まり、柱間寸法などは畳の納まりを考えたものでないことがわかる。

柱配りや、構架材に比べて柱が太く安定している点に特色があり、古風な手法が見られる。建築年を示す具体的な史料はないが、部材の大きさ、仕上げの状態から見ると、江戸時代初期を下らぬ建築と推定できる。

昭和四十九年（一九七四）二月に国の重要文化財に指定された。

倉田八幡宮（くらたはちまんぐう）

鳥取市馬場宮田
JR鳥取駅よりバス一〇分、八幡神社口下車すぐ

社伝によると元正天皇の養老年間（七一七～七二四）、応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三柱の神を宇佐八幡宮から勧請し、因幡平野開拓の守護神として奉祭したと伝えられている。元暦年間（一一八四～一一八五）、

後鳥羽天皇のころ大江広元は因幡守（いなばのかみ）に任ぜられるや、直ちに倉田八幡宮の境内を拡張し、社殿造営の工事を行った。本社は因幡の古社として、特に将軍家の尊敬が厚く、代々の国守豪族もまた敬神深く、そのため千百余石の神領を持ち、因幡の大社として全盛を極めた。

社殿廻廊は拡大されて、本殿・弊殿・拝殿・神楽殿・奏楽社・神饌所・神門・神輿庫・神馬舎・宝庫・納額所・透塀・雑器所・休憩所・社務所・参籠所等一大霊域を形成していた。

当時は因幡一円はもとより、他地方からの参拝人があふれ、春秋二回の渡御祭の祭事は当国随一の盛事で、広大な門前町を形づくっていた。神域は国安集落から、大覚寺にいたるじつに広大な地域で、山陰道では出雲大社につぐ大社であった。

天正九年（一五八一）六月、羽柴（豊臣）秀吉が当国に攻めいったとき、兵火にかかり、境内の社殿、社宝ことごとく焼失して、神職も四散し、往時の姿はなくなった。

その後、河島大宮司が小社を再建し、藩主の寄進、奉納によって規模は拡張されていった。明治十二年（一八七九）六月、旧号の八幡宮に復称した。

昭和十八年（一九四三）の鳥取大震災には本殿以下十三棟が全壊し、二十年（一九四五）十一月には終戦により社格は全廃された。現在の本殿は、昭和二十四年（一九四九）七月に造営されたものである。

当社の**獅子舞**は因幡地方に伝わる権現堂古流より古い型で、古式豊かな崇高な舞いである。元禄時代から氏子中の蔵田から奉納することになっている。

社叢は主にタブノキからなるが、エノキ、ムク、シイなどの大株もある。イチョウの老木は雌木で根周り一〇メートル、樹高四〇メートル、樹齢千年におよぶ大木である。タブノキの巨樹に富む社叢として有数のものであり、昭和九年（一九三四）三月、国の天然記念物として指定されている。

円通寺（えんつうじ）人形芝居

鳥取市円通寺に伝わる人形芝居。江戸時代、藤右衛門という人物が当地に伝わる七七調の労働歌「円通寺節」や盆踊りの口説きに合わせて人形を操り芝居をすることを考えついたのがその始まりといわれる。明治・大正時代には、農村娯楽として流行し、多数の座元が存在し各地に巡業したという。

特徴は三味線・鼓弓・太鼓の伴奏に合わせて唄われる「円通寺節」と、人形芝居の口上との融和である。

題材は、他に例を見ない「三吉デコ」に始まり、祝福芸能**「大黒舞」**、鳥取の伝説的な英雄が活躍する**「平井権八」**など地方色豊かなものから「京都心中」など悲恋物語まで多様である。同保存会では、円通寺人形芝居伝承館（鳥取市円通寺）で練習・上演（不定期）しており、興業に出かけることもある。

昭和五十九年（一九八四）に県の無形民俗文化財に指定された。また、昭和六十年（一九八五）には、国の記録作成などの措置を講ずべき無形民俗文化財として選択された。

円通寺節（えんつうじぶし）

鳥取市円通寺

千代川流域の鳥取市円通寺に伝わる労働歌である。

元和三年（一六一七）、姫路から鳥取に転封してきた池田光政（いけだみつまさ）は、寛永九年（一六三二）に岡山へ移るまでの間、後世に「三十二万石」と称される池田家隆盛の礎を築いた。なかでも鳥取城の修築と城下町整備は光政の偉業にあげられる。

鳥取市内円通寺からは、この厳しい土木作業に多くの人々が駆り出された。そして、その作業に併せて歌われた「円通寺節」という労働歌が伝わっている。囃子詞の「奴の念力（がんりき）岩をも通す」から「念力（がんりき）節」と異名がある。

意上奴（いがみぬ）神社

鳥取市香取
ＪＲ鳥取駅よりバス約十五分、香取下車、徒歩約二〇分

周辺の村の総社として七社大明神

と呼ばれていた。『延喜式』に記された小社で、仁寿年間（八五一～八五四）に正六位上の神階を授けられている（社記）。

『延喜式』所載の神社名「意上奴」は、古事記や万葉集・日本書紀などの読みでは、「オカミノ」と呼ばれていたと考えられる。「イガミヌ」と読ませたのは、明治初期の神社制度確立期の神官によるもので、祭神も速須佐之男命と保食神とされている。「オカミ」は、『万葉集』では「わが岡のおかみに言ひてふらしめし、雪の摧けしそこに散りけむ」とあり、岡や水辺にすむ龍蛇の神で、水を司る神と信じられていた（岩波・古語辞典）。以上のようなことから、意上奴神社の祭神は、水を司る水神と解される。

また、スダシイを主とした社叢は、常緑広葉樹林の自然植生をよく残している。昭和四十九年（一九七四）四月四日に鳥取市の天然記念物として指定された。面積は約三・九平方キロメートルである。鳥取県は、昭和五十年（一九七五）に、既指定地区を鳥取県自然環境保全地域の特別地区に、その西・東の緑地区四平方キロメートルを普通地区に指定した。

社叢の高木層では、胸高直径二メートルもあるスダシイが優占し、直径一メートルを超えるタブノキやウラジロガシも混在している。その下の亜高木層にはヤブツバキやサカキなどがみられ、低木層には若いスダシイの個体が多く極相林の様相を示している。

越路雨乞踊

鳥取市南東部、越路に伝わる風流芸能の雨乞踊。記録によると、江戸時代中期、宝暦六年（一七五六）には踊られていたことがわかっている。雨乞踊は、本来、干ばつの時に降雨を祈願するものであるが、当地区では雨を授かったことの願開きとして、神に感謝する踊りとして伝承されてきた。現在も、雨乞いをして降雨があった年の秋に奉納されることになっており、近年では平成五年（一九九三）に行われた。昭和三十四年（一九五九）に県の無形民俗文化財に指定されている。

踊り子は、浴衣に前掛け・手甲・脚絆の揃いの衣裳を身に着け、頭には花笠を被る。花笠の後ろ側に付いている水色の布は雨を表しているという。この格好は、中世の絵巻物などに描かれる「風流踊り」の姿に似ており、雨乞踊の起源を中世に求めることができる。

越路の雨乞踊には、現在十曲の演目が伝えられている。まず、道化役のささら摺りを先頭に、棒振り・笛吹・子踊り・新発意・本踊り・地方の総勢五十名が「入端」という曲で踊りながら越路神社に向かい、境内では、陣笠・陣羽織姿の新発意が口上を述べて、地方が歌を唄い順に踊っていく。九番の踊りが終わると、最後に「穣田」という曲を踊りながら神社から退場する。

史跡 空山古墳群

鳥取市香取、広岡　JR鳥取駅よりバス二〇分、香取下車、徒歩二〇分

鳥取市の南東、空山の山腹にあり、横穴式石室を主体とする約七十基の円墳からなる因幡地域有数の古墳群。ほとんどが、直径十数メートルの小規模な古墳で、六世紀後半から七世紀初頭頃に築造されたものと推定される。

古墳群のうち、空山二号墳、九号墳、十号墳、十五号墳、十六号墳の五基の石室内には、人物、魚形、鳥形、舟形、三角紋などの線刻絵画が描かれている。十五号墳を除き、破壊が激しく、いずれも古くから開口されており、後世の追刻も多いため、本来の線刻画の実態は不明。九号墳を除く四基が県史跡に指定されている。

史跡 防ケ塚古墳

鳥取市広岡　JR鳥取駅よりバス二〇分、香取下車、徒歩二〇分

標高約五〇メートルの丘陵東斜面の裾部に立地する円墳。墳丘の遺存状態は良好で、直径は約一三メートル、高さは約三・三メートル。横穴式石室は、全長が約七メートルで南東方面に開口し、玄室の天井部は、中ほどの天井が高くなる「中高式」となっている。石室内の壁面には、多くの幾何学模様状の線刻が見られ、とくに羨道右側壁には、石室入口に向かって両足を開き弓を大きく引く約一九センチの人物像が写実的に描かれている。周辺丘陵には、百基あまりの古墳が存在し、広岡古墳群を形成している。昭和五十六年（一九八一）に県史跡に指定された。

〈湖山池・白兎周辺〉

湖山池

JR鳥取駅よりバス二〇分、青島公園下車すぐ

鳥取市の西に位置する汽水の海跡

湖。面積は六・九平方キロメートル。これは、日本の湖沼では三十二番目の大きさで、汽水の海跡湖では十七番目、池と名の付く湖沼では日本一である。池の周囲は一八キロメートル、平均水深は二・八メートルある（池の北端にある竜ヶ崎沖で最大水深は六・五メートルである）。富栄養湖で透明度は一メートルである。

更新世最後のリス・ウルム間氷期に古砂州が湖山池の北方および西方に達し、「古湖山池」ができた。完新世になって海面は低下したが縄文海進により海とつながった。その後の海退により潟湖ができた。

池の南東の湖底から弥生時代の土器・土師器が出土している。これにより地形形成の時期が推定できる。池には青島、猫島、津生（うぶ）島、団子島などがある。青島、猫島はかつて、トンボロにより陸続きになっていたと考えられる。

湖山池は海岸まで一、二〇〇メートルしかなく、湖山川を通して海水の流入もある。夏期には、ヨシ、マコモ、エビモ、アオミドロなどの植物とタニシ、カラスガイ、モクズガニなどの底生動物、コイ、フナ、シラウオなどの魚類が生育し、冬はマガモ、コガモなどの水鳥やプランクトンも多い。

また、冬になると池の西岸で**石がま漁**が行われ、冬の風物詩となっている。かつては池が凍結した記録もあるが、近年は見られない。一方、夏には赤潮が発生することも多く、湖山池の公園化が計画され、水質保全が図られている。

伝説

数百町歩の湖山池全体は、もとは湖山長者の水田であった。ある年、田植をするため早乙女を集めて植えさせたところ、猿に気をとられ、一日のうちに植えることができなかったので、長者は残念に思い、黄金の扇子をもってきて、西の山に沈もうとしている太陽をさし招いた。すると太陽は少し後にもどった。次の年もやはり田植えが一日で終りそうになかったので、扇子で太陽を後に戻して田植えを行った。

安心し翌朝、田んぼを見てみると、田んぼは水の底に沈み、茫々たる湖水になっていた。

石がま（漁）

鳥取市湖山池で厳冬期に行われる、独特の漁である。石がまとは、湖底にフナの通路を確保して積み上げた石積みで、その形が釜を伏せたようであることから名付けられたという。地元ではツジとも呼ばれる。

江戸時代初期から行われていたとも言われるが、明確ではない。地元には、嘉永六年（一八五三）に普請が行われたという資料が残っている。

石がまを上から見ると、池の中央方向を上にしたホームベースに近い形をしている。石がまの奥には、フナを追い込む扇状に開いた板が立ち、その根本にはドウカンと呼ばれる箱が埋め込まれている。

石がま漁は、一月末頃、一日かけて行われる。人々は物音を立てないように近づき、石がまの上方から突き棒で、隙間を突き、フナをドウカンの方に追い込む。突く作業は休み

なく続けられる。

追い込みが終わると、ドウカンを仕切り、文字通り一網打尽する。この瞬間が、石がま漁の醍醐味である。近年は漁獲量が減少したといわれるが、現在でも二〇〇～三〇〇キロのフナの漁獲量がある。平成十三年（二〇〇一）現在、漁が行われる石がまは二基しかない。

防己尾城跡

鳥取市金沢
ＪＲ鳥取駅よりバス二十五分、松原下車、徒歩四〇分

湖山池西南の水面に突きだした、標高三八メートルほどの丘の上にある。今も本丸、二の丸、三の丸といわれる曲輪（削平地）が残っている。当城のみどころは、西南部に続く尾根を遮断する大規模な堀切である。これによって、池中に孤立する堅固な城郭となっている。なお堀切は、現在は池を周回する道路となっている。十七世紀末に書かれた『因幡民談記』には天正年間（一五七三～一五九一）の初めに、吉岡将監が築いたとあるが、確かなところは不明である。

吉岡氏は、室町時代には吉岡荘（鳥取市吉岡あたり）の荘官であった。天正九年（一五八一）の羽柴（豊臣）秀吉の鳥取城包囲戦の際には、毛利方に属していた当城へ羽柴軍がたびたび押し寄せ、激しい戦いが繰り広げられたが城の守りは堅く、羽柴軍をそのたびに撃退し、秀吉の馬印が奪われたこともあった。鳥取城開城直後に吉岡氏が城を出て、廃城となった。

史跡 天神山城跡

鳥取市松保・布勢
ＪＲ鳥取駅よりバス十五分、布勢下車、徒歩二〇分

湖山池西端の標高二五メートルほどの丘を中心に、周辺の平地を取り込んで築かれた中世の城館。江戸時代終わりごろの「田畑地続全図」や、戦後まもなく撮影された空中写真から、丘の周囲に二重・三重の堀・土塁がめぐられていたことがはっきりとわかる。

また、南方の宇山も取り込むように堀が掘られていたことも確認できる。これらの絵図や写真は、この地方の築城技術を知る上で重要な資料になるものである。

十八世紀末に書かれた『因幡志』は、文正元年（一四六八）に、守護の山名勝豊が守護所として築いたとするが、確かなところは不明である。ただ、室町期から戦国期前半に因幡の守護所であったことは間違いない。永禄六年（一五六三）、山名豊数は一族の山名豊弘を擁する武田軍に敗れ、当城を放棄したようである。

城跡は現在、鳥取農業高校の敷地や宅地となっている。高校の背後の丘の上には削平地が残っているが、平地の部分は破壊され、往時の面影はない。鳥取県の史跡に指定されている。

双盤念仏

鳥取市湖山の浄土宗寺院、水中山栖岸寺に伝わる仏教民俗芸能。双盤という鉦を撞木で叩きながら念仏を唱えるという全国的にも珍しい形態の法要である。

双盤念仏は、本来、一千日間念仏を唱え続け、一千日目を迎えた日に奉納されたものであったが、現在では三年ごとに、四月上旬の三日間だけ披露される。双盤念仏の奉納は一流れといい、双盤の打ち方、念仏の唱え方にもいくつもの種類があり、その指示はすべて「上鉦」の役鉦と念仏によって指示される。鉦の音の抑揚、撞木の上げ下げ、念仏の節回しなど、十数人の講員全員が、一つにまとまることによって双盤念仏の荘厳な響きが出る。

昭和三十八年（一九六三）に県の無形民俗文化財に指定されている。

和泉式部産水の井戸

鳥取県湖山

平安時代の歌人、和泉式部が産湯を使ったと伝えられる。

伝説では、大江定基が因幡守となって当地に赴き、国府町町谷村の宝生山円城寺の千手観音に参詣して授かったのが式部であるとされる。式部親子は湖山の地に住んだと伝えられ、他にも胞衣塚や屋敷跡がある。

しかし、大江定基が因幡守であったという記録はなく、和泉式部の父であった事実もない。おそらく大江定基の屋敷跡とされる「宇文」の地名とそこに湧く「泉」があったことによってできた伝説であろう。さらに、円城寺には式部伝説を語り伝える女性唱導者の一挙点であった千手観音の縁起と「泉」の由来が混合してできた伝説と推測される。

大野見宿禰命神社

鳥取市徳尾　ＪＲ鳥取駅よりバス一〇分、徳尾下車すぐ

『延喜式』に記載のある古社である。祭神として大野見宿禰を祀る。『日本書紀』によれば、この神は、垂仁天皇の時代に大和国の当麻蹴速と相撲をとって勝ったという相撲起源伝承の神である。また皇后の葬儀の時、殉死の風習を禁じて埴輪を墳墓にたてることを言上した。社伝ではその功績によって、この地を朝廷から与えられたという。この神を主に祀ったのは因幡の土師部で、宿禰の徳を慕った人々は、めいめい手に土をもってきて報賽したため、長年の間に堆積して一つの丘になったという。現在も神社のある丘は、こんもりした森を形成し、俗に「徳尾の森」といわれている。

神社社叢

鳥取市徳尾　ＪＲ鳥取駅よりバス一〇分、徳尾下車すぐ

社叢は小丘全体で、地形や方位に対応し林相に若干の差異がみられるが、総じてスダジイ―モチノキ群落が多い。一方、平地に近接する陰湿な斜面ではタブノキ―モチノキ群落がみられ、平地の森林の極相を示す照葉樹林の一典型として昭和九年（一九三四）八月に国の天然記念物に指定された。

特にモチノキが全体の三分の二を占め、比較的大きなものだけでも五百本もありモチノキの多い社叢としても貴重である。この他、ヤブツバキ、カクレミノ、クロキ、トベラ、タラヨウ、ヤツデなど常緑広葉樹が大変多く、鳥取平野に残された典型的な照葉樹林として学術的な価値が高い。

田賀久治

田賀久治は、四十年間にわたって**鳥取砂丘**を撮り続け、「砂丘の田賀」と言われた写真家である。

大正七年（一九一八）、鳥取市徳尾に生まれた。写真館を営業するかたわら山陰海岸などを撮影している。

土門拳との出会いが、写真家としての田賀に決定的な影響を与えた。土門拳は『古寺巡礼』撮影のため、鳥取県をしばしば訪れていた。このとき国府町の**岡益石堂**、三朝町の**三徳山三仏寺**を案内したのが田賀だった。田賀は、写真を撮ることへの土門の執念を見た。また、土門に砂丘を撮れ、と強く勧められた

昭和三十年代、砂丘は植林や観光客で急速に変化していた。ゴミと土と雑草が目立ち始めていた。田賀は砂丘の美しさをせめて映像に残そうと、砂丘を追い続けたのである。

昭和四十四年（一九六九）、『砂丘』連作で二科賞を受賞し、昭和四十七年（一九七二）には「日本写真家協会年度賞」を受賞した。これらの功績から昭和五十四年（一九七九）に、鳥取市文化賞を受賞した。田賀の作品はアメリカの写真年鑑『ライフタイム』にも紹介された。昭和六十一年（一九八六）、六十八歳で死去。

写真集に『砂丘の幻想』『源境』がある。

桂蔵坊・おとん女郎

因幡地方には狐に関する昔話が、比較的多く伝わっており、郷土玩具（土人形）のモチーフにもなっている。

桂（経）蔵坊というのは、鳥取城のあった**久松山**に棲み、池田の殿様に仕えていた狐である。江戸まで二百里の道のりを三日で往復するという健脚を生かして飛脚の代わりを務めていたが、ある日、罠にかかって死んでしまった。殿様は憐れんで祠を建てて祀ったという。この祠が久松山中腹の中坂神社である。

また、おとん女郎とは、立見峠（鳥取市本高～野坂間の峠）に出没した狐で、若い女に化け、人をだまして頭を剃るという特意技をもっていたという。

布勢の山王

（天神山城跡の項参照）　ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分、布勢下車

鳥取市布勢天神山の南に連なる小山を卯山という。卯山の山腹に鎮座するのが日吉神社で、布勢の山王様と呼ばれている。興国年中（一三四〇～一三四六）、**山名時氏**が**因幡国**

守護職のとき、近江（滋賀県）の坂本から日吉神社を勧請して祀ったのがはじまりという。大己貴命、大山祇命、猿田彦命を祭神とする。

小児の疳の守護神として厚く信仰され、社殿のくくり猿を持ち帰ると子供の病気が治るという。

五月十五日の例祭には、参拝者で賑わう。また、山上からの湖山池の眺めはすばらしい。

尾車文五郎

尾車文五郎は、初めて東京相撲（現在の日本相撲協会の前身）で活躍した郷土力士で、名力士・荒岩亀之助を育てた。

現在の鳥取市湖山地区に生まれた。本名は勝山芳蔵。明治四年（一八七一）三月に入幕し、同十年（一八七七）十二月に引退した。力士としての成績よりも大関・荒岩、横綱・大砲を育てた親方として名高い。

「湖山のおおめしぐらい」という話が伝わっている。スルメ二十枚をおかずにして飯二升を食べ、このあと茶屋で饅頭二百個をたいらげ、さらに笊いっぱいに蒸したイモをほおばり、それでやっと満腹になったという。

鳥取市湖山町北一丁目に、「尾車文五郎墓」と刻まれた力士塚が建てられている。また、湖山地区の二本松に文五郎の遺髪が埋めてあり、その碑が国道沿いにある。

史跡 布勢古墳

鳥取市布勢
ＪＲ鳥取駅よりバス十五分、布勢下車、徒歩七分

湖山池東岸の日吉神社後背丘陵の尾根に立地する西向きの前方後円墳。全長約六〇メートル、後円部径約二四メートル、高さ六メートル、前方部幅二〇メートル、高さ五メートル。昭和四十七年（一九七二）、宅地造成のための立木伐採によって発見された。保存状態は良好で原形をよく残しており、同四十九年（一九七四）に国指定史跡となった。

後円部附近では土師器・須恵器片が、また前方部先端では円筒埴輪片が出土し、これらの遺物より六世紀代に築造されたものと推定される。発掘調査が行われていないため、内部構造および外部施設などは不明。

湖山池周辺では、ほかにも大型前方後円墳が見られるが、当古墳は、南方約一・五キロメートルに位置する桷間一号墳（全長九二メートル）に次ぐ規模のもので、古墳時代後期における因幡地方の有力首長の墓と考えられる重要な古墳である。

県立布勢総合運動公園

鳥取市布勢
ＪＲ鳥取駅よりバス十五分、布勢下車

県立布勢運動公園は、昭和五十九年（一九八四）八月に県内で初の都市公園として、県民のスポーツの振興と体力の向上を図ることを目的に設置された。

五二ヘクタールの園内には、一周四〇〇メートルの全天候型特殊合成ゴム舗装された第一種公認競技場のほか、野球場、二つの補助競技場、多目的広場、テニス場があり、昭和六〇年（一九八五）の「わかとり国体」「全国身体障害者スポーツ大会」や平成七年（一九九五）の「鳥取インターハイ（全国高校総体）」の主会場でもあった。

平成七年（一九九五）には、約三、五〇〇人収容できるメインアリーナとサブアリーナを備えた「鳥取県民体育館」が整備された。

このほかにも、ソメイヨシノ約千本が植えられた「桜の園」や「せせらぎの庭」、遊具を備えた「おもしろ広場」などがあり、県民の憩いの場としても活用されている。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
●休園日　一月一日
●問合せ先　☎〇八五七・二八・七二二一

桂見遺跡

鳥取市桂見
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分、倉美下車、徒歩五分

湖山池南東岸の標高一メートル前後の低湿地に立地する縄文遺跡。昭和五十一年（一九七六）、ほ場整備の工事にともない発見された。

縄文時代から古墳時代までの遺物が出土したが、とくに特殊泥炭層から多量の植物性食料残滓、木製品が出土して注目された。同層からは、縄文時代中期末から後期初頭の中津式を主体とする土器や、石斧柄・櫂・木鉢・槍状・弓状の木製品、石鏃・石斧・石錘・石皿・磨石・敲石・石匙などの石器類が出土し、また、スダジイ、アカガシ、トチ、オニグルミ、ヒシなど、堅果類を主とする食料残滓も見つかった。当時の人々の食生活や生活環境の実態をうかがわせる貴重な遺跡である。

なお、平成五年（一九九三）以降の調査で、縄文時代後期中葉（約三千五百年前）の二隻の丸木舟が発見

された。一隻は、全長七・二四メートル、最大幅七四センチ、深さ三五センチと現存する縄文時代のものとしては最大級のものである。もう一隻は、全長六・四一メートル、最大幅七〇センチ、深さ一〇センチのもので、波の低い内海で用いられたものと推測される。

いずれも平成十三年（二〇〇一）に県の保護文化財に指定され、現在、**県立博物館**で展示されている。

森林公園とっとり出合いの森

鳥取市桂見
ＪＲ鳥取駅より車で約十五分

七七ヘクタールの敷地内にはさまざまな植物や樹木、そして自然を楽しむための設備が設置され、その名のとおり四季折々いろいろな自然に出合い、ふれあいを深めることができる。

約一・四ヘクタールの芝生広場は、平成十年（一九九八）四月に開催された第二十二回全国育樹祭の会場にもなった。展示館では、里山の四季や動物たちの森での生活などを紹介している。

また、園内には明治三十七年（一九〇四）に鳥取県に初めて導入された**二〇世紀梨**の親木が三本あり、「とっとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

春はヤマザクラ、ツツジの花に彩られ、夏はコナラやソヨゴなどの緑が美しく、秋は広葉樹林が赤や黄色に色づき、一年を通じてさまざまな表情を見せ、散策路・自然探勝路に適している。

●開園時間　午前九時～午後五時
●休園日　年末年始
●問合せ先　☎０８５７・２６・７４１６

吉岡温泉

鳥取市吉岡温泉町
ＪＲ鳥取駅よりバス三〇分、吉岡温泉中央下車すぐ

湖山長者の伝説で知られる**湖山池**の南岸約一キロメートル、鳥取市吉岡温泉町の吉岡川に沿って湧出する山峡の閑静な温泉である。湧出区域は東西一八〇メートル、南北二〇〇メートルの範囲である。泉源は九井あるうち四井が利用され、集中管理されている。湧出量は毎分九一七リットルで、無色透明の単純泉である。平均温度は四十八度、吉岡花崗岩と呼ばれる花崗岩の割れ目に沿って湧出している。

温泉の発見は、十世紀とも十四世紀ともいわれるがはっきりしない。鹿野の亀井武蔵守の所有する「亀井殿湯」があったといわれ、江戸時代には藩主の入浴する「一の湯」、「二の湯」「株湯」や、傷やおできを治す「瘡湯」、屋根のない馬湯などがあった。

温泉周辺の地質は花崗岩で、それを切る二方向の断層の交点に温泉が湧出する。鳥取地震の際にできた活断層の「吉岡断層」は温泉のすぐ南を東西に走る。国民保養温泉地。

伝　説

一〇〇〇年の昔、この村に住む葺岡長者の美しい娘が顔に悪疽を病み嘆き悲しんでいた。ある夜、夢の中に日ごろ信仰していた薬師如来が現れて、柳の下に霊泉のあることを教えた。これで難病もたちまち快癒したことから、その薬効はあちらこちらに伝わった。

岩坪神社

鳥取市岩坪
ＪＲ鳥取駅よりバス四十五分

鳥取市の西南の郊外、砂見谷の奥に位置する。集落の上手、谷川の上流に、岩盤が水にえぐられてできた滝壺がある。岩坪という名もこれから出たものと考えられる。滝壺の上には、古く坪大明神といわれた神社がある。現在は岩坪神社と呼び、伊邪那美神を主神とする。

この神社の**獅子舞**は、雄獅子、雌獅子二頭で舞う珍しいもので、昭和三十四年（一九五九）六月に県の無形文化財に指定されている。付近には松上三所大菩薩を祭る**成就院**もある。

成就院

（岩坪神社の項参照）

山号を松上山といい、鳥取市立川にある**大雲院**の末寺である。明治維新になって神仏混淆を禁止したとき、松上神社から大日、観音、弥陀

の三尊を分離してここに安置したので、松上三所大菩薩といわれる。大日は高さが一・四一メートル、観音と弥陀は一・八メートルあり、いずれも木彫りの立像である。刀法優秀で鎌倉前期をくだらないものといわれている。

大和佐美命神社獅子舞（おおわさみのみことじんじゃししまい）

鳥取市上砂見

佐美命神社に奉納される獅子舞。毎年十月十七日前後の日曜日、同神社の例祭日に奉納される。「正統権現流」と称し、鳥取東照宮（現在の樗谿神社（おおただにじんじゃ））の権現流から習ったと伝えられている。中砂見の大湯棚地区と上砂見地区の二カ所に伝わっており、大湯棚の獅子舞を雄獅子、上砂見の獅子舞を雌獅子と呼んでいる。舞のテンポは非常に緩慢であるが、時に勇壮な動作を盛り込み、神々しく厳粛な雰囲気に盛り上がりをみせる。猖々（しょうしょう）の先導による二人舞で神前より出発し、練り込み、腹這い、返しなど一定の形式に従って参道をジグザグに進み二往復する。

普通獅子舞は神前に向かって進むが、当地のものは神前より出発することから、これが神の権化と認識されている。

大湯棚の獅子舞に用いられる獅子頭は、江戸時代中期に鳥取で製作されたと伝えられ、獅子頭の傑作として昭和二十九年（一九五四）に県の保護文化財に指定されている。

矢矯（やはぎ）神社社叢

JR鳥取駅よりバス二十五分、矢矯口下車、徒歩一〇分

鳥取市の郊外、湖山池の南にある吉岡温泉を経由し、さらに湖山川を約四キロさかのぼると矢矯集落に着く。集落入口の道路沿いにひときわ目立つ老木の茂った矢矯神社が見える。

社叢は自然な林の状態がよく残り、社殿前方の傾斜の緩やかな湿潤の土地には胸高直径が二〇〇センチのタブノキや八〇センチのウラジロガシの巨木がうっそうと茂る照葉樹林である。また、亜高木にはヤブツバキが優占するほか、ホオノキやコハウチワカエデなど山地性の落葉樹も出現する。林床にはムサシアブミ、ミゾシダ、ミヤマカタバミ、ツタウルシなどが目立つ。

社殿の裏斜面は主にウラジロガシ、モチノキが多く、サカキ、アカシデ、タブノキなどが構成するウラジロガシ林である。

北東に開く谷筋の奥に位置するためか、ツノハシバミ、ツルシキミなど冷温帯域に生育する植物が混じっていることも注目され、昭和三十一年（一九五六）三月に県天然記念物に指定された。

安蔵（あぞう）公園

鳥取市河内
JR鳥取駅よりバス約四十五分、安蔵下車、車の場合は約二十五分

市街地より約二五キロ、山の中腹に整備された四・六ヘクタールの公園内にはテニスコート、木製遊具などが設置されているほか、冬はスキーが楽しめるスキー場があり、休日は家族づれなどで賑わっている。

また、近くにログハウスやオートキャンプ場などの宿泊施設を備えた安蔵森林公園がある。

●開園時間　午前九時～午後四時（テニスコートは午後五時まで）
●休園日　火曜日（テニスコート）
●問合せ先　☎0857・56・0293

松上（まつがみ）神社のサカキ樹林

鳥取市松上
JR鳥取駅よりバス三十五分、松上下車、徒歩一〇分

野坂川の上流にあたり、国常立命を祀る神社の境内は社叢をなし、サカキ、スダジイ、タブノキ、カゴノキなどの常緑広葉樹がよく繁茂し、サカキは全樹林の三分の二を占めて密生している。しかも枝と枝とが接着して連理の枝となっている所もあり、サカキの樹林として有数なものである。昭和十九年（一九四四）三月、県の天然記念物に指定された。

北海道移住の碑

JR鳥取駅よりバス二〇分、賀露大橋下車すぐ

湖山川が賀露港に流れ込む小高い丘の上に「釧路開拓移民出港之地」の碑が立つ。これは北海道開拓百年を記念して昭和四十三年（一九六八）十月に建立され、裏面には「明治十七年六月三日に四十一戸一九六人、明治十八年五月一一日六四戸三一七人が出港した」と記されている。

北海道開拓はその初期には全国から困窮した士族を集めて行われた。碑の横にある「釧路開拓移民出港の地」という碑文石は、釧路市と鳥取市の姉妹都市提携三〇周年を記念して平成五年（一九九三）十二月に建てられたもので、釧路移住のいわれと、両市の市章が記されている。なお、鳥取県からは釧路以外にも岩見沢、江別、室蘭、根室などにも移住しており、士族以外の一般人の渡航も多かった。碑と碑文石の両脇には

両市の木であるハシドイとサザンカがそれぞれ植樹されている。

県立鳥取港海友館

鳥取市港町
JR鳥取駅から車で約十五分

平成七年（一九九五）四月に鳥取県港湾事務所に併設して設置された。**日本海**の姿や県が交流を進めている対岸諸国、鳥取県の漁業を支えてきた漁法や漁具について、映像や展示物で紹介している。

●開館時間　午前八時三〇分～午後五時
●休館日　毎週月曜日、年末年始
●問合せ先　☎０８５７・２８・２４３２

賀露港

鳥取市賀露

千代川河口に開けた漁港であり、今は**鳥取港**として鳥取県東部の海の玄関口ともなっている。**「松葉がに」**漁の基地でもあり、鳥取中央漁業協同組合が沖合底引き船八隻を有している。港の船溜まりに面して、鮮魚の直売店やカニ料理の旅館が並び、釣り宿ともなる。

一歩、陸側に入れば、路地を挟んで密集した家並みが続き、漁村の風情を強く感じさせる。賀露（かろ）は、もともと加路、賀呂、軽と記載され、地元では「かる」と発音する人も多い。語源ははっきりしない。歴史は古く、賀露神社の社伝によると、天平勝宝六年（七五四）、遣唐使が僧・鑑真を伴って帰国した時、遣唐副使である吉備真備（きびのまきび）の船は難破し、賀露沖の小島（今の鳥ケ島）に漂着したという。また、『日本三代実録（さんだいじつろく）』（寛平四年（八九三）編さん）によると賀露神社は貞観三年（八六一）に従五位の授与があったとされ、**因幡国**の外港として重要視されてきたことがわかる。さらに、『因幡堂薬師縁起』で名高い京都の因幡堂に安置された薬師如来像は、この賀露の湊の海中から拾われたとされており、「一遍上人絵伝」にも登場する。

江戸時代、北前船をはじめ**日本海**沿いに運ばれた物資は賀露湊で川舟に移され、千代川から旧袋川をさかのぼり、鳥取城下へ陸揚げされた。既に、承応二年（一六五二）には鳥取藩初代藩主・池田光仲（いけだみつなか）が藩船の「川口番所」を設け、大坂への藩米の廻送も賀露を経由させた。

そのため、賀露の湊は「賀露千軒」と呼ばれ、にぎわった。幕末の元治二年（一八六四）には、お台場が二か所設けられ大砲が据えられている。

明治に入っても**山陰線**（現山陰本線）の鉄道が敷設されるまでは、境港や舞鶴方面へは海運頼りであり、賀露を経由する定期船が就航していた。しかし、千代川から流出する土砂は河口の形状を変化させ、度々港を埋めた。河川の治水と防波堤工事なしには、安定した港の利用は不可能であった。昭和五十年代になって、千代川河口の付替えを含めて、新しい鳥取港の埋め立て整備が進み、今の賀露港の姿となった。

漁港としては、沖合い底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタの他、沿岸イカ釣りによるイカ類の漁獲が多い。また、小型底引き船によるヒラメやマダイ漁も盛んである。なお、平成七年（一九九五）には世界カニフェスティバルを開催し、毎年カニフェスタを行っている。賀露港の西浜地区では、海浜公園に向けた整備も進んでいる。今後とも、都市に直結した海浜観光の拠点として発展が期待されている。

鳥取港

鳥取市賀露・港町

もとの賀露港である。港湾は広く、賀露地区、千代地区、および西浜地区の三地区に分かれる。賀露大橋のたもとには、明治期に行われた北海道移住の出発地を記念する碑が建っている。とくに明治十七年（一八八四）の三十六戸、百七十五人の釧路移住は、今も釧路市に釧路町として名を残す。新しい岸壁では、荷役作業の一方、市民にとって格好の釣り場となっており、家族総出で釣り糸をたれる姿が見られる。

昭和二十八年（一九五三）、地方港「鳥取港」として、改めて整備がスタートした。防潮堤や護岸など漁港としての整備に始まり、その後、鳥取市が産業都市として成長するに従って、鳥取市の外港として期待が高まった。昭和五十年（一九七五）には重要港湾に指定される。さらに、昭和五十四年には**千代川**の河口が東側へ八〇〇メートル移動され、拡張部分は埋め立てられ、一万トン岸壁一バースと五千トン岸壁三バースが造成された。平成九年（一九九八）に開設された「鳥取ポートパーク」があり、マリンスポーツの基地としてプレジャーボートの係留岸壁が造られている。さらに、手狭になった旧賀露漁港の西側、西浜地区の一部

を埋め立て、新たな漁港区の造成が行われ、平成十一年（一九九九）に西浜地区漁港区として開設された。

西の境港と並び、東の海の玄関口であり、今後、環日本海交流を進める要として発展が期待されている。

賀露神社

鳥取市賀露北
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分、徒歩二分

賀露神社は、大山祇命、吉備真備など五神を祭神とする。吉備真備は唐から帰国する時に流され賀露港に漂着し、その縁で祭神となったと伝えられている。いつ創建されたかは不明である。

『日本三代実録』によると、「賀露神」は貞観三年（八六一）に従五位下になり、十七年後の元慶二年（八七八）に従四位上へと進階している。賀露神社が急速にその位を上げていったのは、その頃の**日本海**沿岸防備に関わり、国にとっても大切な神社であったためと考えられる。また、『時範記』には、国司として因幡に下向した平時範が承徳三年（一〇九九）に当社に奉幣したと書かれている。

近世には、賀露大明神とか吉備大明神と呼ばれた。歴代藩主祈祷所として保護され、社殿の修理などにも藩費が給された。また、宝暦七年（一七五七）から、賀露入港の商船から、塩十俵につき銭三文を、神社修造費の名目で、「宮銭」として徴収することを許可された。

明治元年（一八六八）、現社名に改められた。

当社は特に漁業・海運業を営む人に信仰されている。今は四月の最終日曜日に祭りが行われる。祭り当日までに、若者の氏子数人が身を清め、桧の板に卯木の枝を手でもみ、すり合わせて火を起こす「もみ火神事」で聖火を得る。この火で神饌をはじめ祭事一切がまかなわれる。祭日の午前中は、神社で祭典が行なわれ、午後には、神輿に分霊を移し、キリン獅子・榊・黒鉾・赤鉾・奴行列・太鼓・武者行列を従え、神輿を御座船に移し、沖合いの小島を往復する海上渡御が行なわれる。着飾った少年の氏子が、伴船に乗り込み、漕ぎながら、太鼓に合わせホーエンヤと掛け声を掛けることから「ホーエンヤ祭り」といい、現在は二年に一度行なわれる。また、秋祭りには、近年、幼児の氏子による泣き相撲が奉納相撲の一つとして行なわれるようになり、にぎわっている。

白兎海岸

鳥取市白兎
ＪＲ鳥取駅よりバス三〇分、白兎下社

白兎の正木ヶ端岬の東に広がる砂浜海岸と波食棚。『古事記』の神話に出る「因幡の白うさぎ」伝承の地。正木ヶ端岬の沖合八〇メートルのところの島が淤岐ノ島で、岬と島の間に連なる飛び石状に並んでいる岩が白うさぎが渡ったワニの背に見立てられたもので、島の南北に広がる「千畳敷」「恋島」などの波食棚の一部である。淤岐ノ島の地質は、第三紀中新世の火山活動により形成された河原火砕岩の亜角礫岩である。

海岸の南には「身干山」や「**白兎神社**」、岩盤の窪地と砂丘の透水バランスで生じる水位の増減がほとんどない「不増不減の池」などがある。身干山は砂丘地であったが、砂を採取された際、地下に多数の弥生期～中世までの遺物や五輪石、宝篋印塔などを出土した。また、**ハマナス自生南限地**として天然記念物に指定されている。白兎海岸は近年、海水浴のほか、サーフィンが盛んである。

西の小沢見海岸もきれいな海岸で、ポケット状砂丘が発達し、鳴り砂の現象が見られる。海水浴の適地として観光客でにぎわう。正木ヶ端岬からの眺望がよく、因幡一円の海岸を見ることができる。県の自然環境保全地区に指定され、海岸景観形成地区の指定を受けている。

白兎神社（はくと）

鳥取市白兎
ＪＲ鳥取駅よりバス三〇分、白兎下車

白兎神社は大兎大明神、あるいは兎の宮白兎大明神といわれ、鳥取市白兎の小高い丘の上にある。主神は白兎神、そのほかに豊玉姫命及び保食神を合祀している。由緒について、古くは古事記、日本書紀にも記されている。『延喜式』には記載されていないが大社であった。兵乱に遭い、古書などと共に焼失し、創建については明らかでない。その後、慶長年間（一五九六～一六一五）の末、鹿野城主・**亀井茲矩**（かめいこれのり）が社殿を再興し、社領二十石二斗を寄進した。さらに、池田氏が藩主となってからも厚く信奉され、近国の参詣者を集めていた。縁結び、疱瘡・麻疹などに霊験著しいとして有名である。

社殿は寛文九年（一六六九）九月と安永二年（一七七三）に再建築され、今の社殿は明治二十九年（一八九六）の建立である。例祭日は、四月十七日、十月十七日である。

明治元年（一八六八）に保食神を、ついで大正元年に川下神社（主神豊玉姫命）を合祀した。川下神社は、当初は近くの気多前神（けたのさき）ガ岩にあった。白兎神社とともに兵乱に遭い、宝暦十四年（一七六四）七月に再興され、大正元年（一九一二）合祀された。豊玉姫命は綿津見神の女神で、口碑によれば神ガ岩で庵を結び鵜の羽をしき鵜草葺不合命（うがやふきあえずのみこと）を生み、のち竜となって海に入ったのでここに祀られたとある。婦人病の神として知られている。

神話「因幡の白兎」の舞台であり、うさぎが身体を洗った不増不減の池がある。

国府町

宇倍神社（うべじんじゃ）

岩美郡国府町宮ノ下
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分、宮下下車、徒歩五分

宇倍神社は東方稲葉山の一角の上に鎮座する。『延喜式』に記載される名神大社であり**因幡国**（いなばのくに）の一ノ宮であった。祭神である武内宿禰（たけのうちのすくね）は三六〇歳以上生きたと言われ長寿の神として知られる。本殿の後の丘は亀金（かめがね）と呼ばれ、古来、祭神ご昇天の霊跡であるといわれ、宿禰双履（ぞうり）の跡と伝えられている。先年この双履の跡の下から粘土床を有する古墳が発見されて古鏡一・管玉一・小玉一が出土したので、この小丘は円墳であることが証明された。

『諸社根元記』または『二十二社註式』に孝徳天皇の大化四年（六四八）、社壇を造るという記載は、おそらく当社の社殿建立のはじめであろう。嘉祥元年（八四八）、国府の西で失火があり、府舎が危険に頻したが、国司が祈願に参詣したため鎮火の霊験があらたかであった、と『続日本後紀』に記されている。

元和年中（一六一五～一六二四）には、鳥取藩主・池田光政（いけだみつまさ）は社領三十石を寄付した。寛永九年（一六三二）、池田光仲（いけだみつなか）は備前（岡山県）から入国し、社領高を改めて寄進した。以来、歴代藩主に崇敬されてきた。

なお境内にあった国府神社は、大正六年（一九一七）九月、境内末社に指定され、七年四月には坂折・下山・白山・上・安田・小早などの六社とともに合祀された。

例祭は四月二十一日で、当日行われる獅子舞および大名行列は有名で、獅子舞は昭和三十四年（一九五九）十二月、県の無形民俗文化財に指定されている。

史跡 池田家墓所

岩美郡国府町奥谷
JR鳥取駅よりバスで二〇分、宮下口下車、徒歩十五分

ここには鳥取池田家初代・光仲から十一代までを葬る。寛永九年（一六三二）年六月に家督を相続した備前岡山藩主・池田光仲は三歳であった。このため軍事・交通の要衝である岡山には光仲の従兄で鳥取藩主・池田光政が赴くこととなり、従兄同士での国替が行われた。これ以後、鳥取藩では光仲の系統が明治維新まで続いた。墓所は光仲の逝去後初めて選定調査され、元禄六年（一六九三）七月奥谷に決定した。これ以降、歴代の藩主はたとえ江戸やその他で逝去しても必ず奥谷に葬った。歴代藩主の遺骸は烏帽子、狩衣の装束で柩に納められ、一旦、菩提所である**興禅寺**に安置された後に葬列を以って奥谷の廟所に納められた。初代光仲は、黄檗宗の開祖隠元和尚に帰依し、改宗したこともあり、墓碑や台座に亀趺を使用するなど、儒教的色彩の濃い墓となっている。二代綱清を除き、歴代藩主の台座には亀趺が置かれている。

歴代藩主夫人は文久二年（一八六二）までは江戸住まいし、入国を許されなかったので、遺骸は江戸弘福寺の墓所に埋葬された。関東大震災の区画整理により昭和五年（一九三〇）九月、弘福寺から奥谷へ改葬されたが、初代、二代、八代の夫人は宗派の関係で他へ埋葬されている。この他、鳥取藩は東館、西館と呼ばれる分家を興したが、これら東、西館の当主たちの墓もある。元来、江戸で亡くなった当主は江戸弘福寺に葬られていたが、藩主夫人同様、昭和五年九月に奥谷に改葬された。こうして現在では七〇を越える墓碑が立ち並ぶ墓所となっている。

墓所の手前の広い内庭には昭和八年（一九三三）頃まで清源寺が残っていた。この寺は、元禄七年、二代藩主・綱清が開基となり、興禅寺千岳和尚を開山として創建され、以後一切の廟事はこの寺が行い、興禅寺住職が兼務した。池田家は明治三年（一八七〇）に神道に改宗したため無檀家であった清源寺は廃寺となった。墓所にはサクラ、カエデが植えられ、春の花、秋の紅葉の眺めも良い。

昭和五十六年（一九八一）に国の史跡に指定されている。

史跡 因幡国庁跡

岩美郡国府町中郷
JR鳥取駅よりバス二〇分、国府町役場前下車、徒歩一〇分

袋川中流域の国府町中郷などの集落にある奈良時代から平安時代にかけての役所跡。周辺には、古墳群をはじめ、条里跡、伊福吉部徳足比売墓跡（国史跡）、**宇倍神社**などがある。

『万葉集』の最後を飾る「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」の歌は、国守として赴任中の**大伴家持**がこの地で詠んだものである。また、十一世紀末の国守平時範の日記『時範記』によると、西門、南庭、幣殿などの施設があったことが知られる。

中心にあたる国府域は、昭和四十七年（一九七二）から同五十四年（一九七九）にかけて行われた発掘調査によって、庁集落の東端、中郷部落の南端、国分寺部落の東端、法花寺部落の中ほどを結ぶ八町四方ほどの地域であることが明らかになった。調査の際、中郷字瀬戸田、星ケ森など国府域の北西隅で、十棟余の掘立柱建物、二条の柵、二基の井戸、道路、側溝などの国庁施設が発見された。主要な建物群は、北側の安田地区、東側の庁地区にまで達しているものと推定され、桁行五間×梁行四間（柱間二・四メートル）の南北両面庇付掘立柱建物や、同じく五間×二間（柱間二・七メートル）の切妻型掘立柱建物等の建物跡などが見つかっている。これらの建物群は、奈良時代末から鎌倉時代初期にかけて建造されたものであり、直径三〇～四五センチほどの柱材が良好な状態で多く残っていた。

国庁跡からは、木簡、石帯、硯、墨書土器、緑釉陶器などの多くの遺物が出土しているが、とくに「仁和二年假文」（假文＝休暇届）の墨書を残す題簽は、律令制度の一端を示

す貴重な資料である。

昭和五十三年（一九七八）、遺跡の発見された瀬戸田、星ケ森、安田などの約三二、〇〇〇平方メートルの地域が国の史跡に指定されている。以後、史跡公園として環境整備が行われている。

因幡国分寺跡

岩美郡国府町国分寺
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分

律令制下の官寺跡で、寺域は国分寺集落とその周辺を含めた二町（約二一五メートル）四方と推定される。昭和四十七年（一九七二）以降のほ場整備にともなう発掘調査によって、建物跡などが見つかり、礎石は平成元年（一九八九）に町の保護文化財に指定された。

因幡国分寺は**因幡国庁**の南西に位置し、昭和五十一年の調査では、南門の位置や寺域を示す溝状の遺構が発見された。そこから北東約九〇メートルの位置で回廊と考えられる掘立柱建物跡、また、南門から北西約四〇メートルの場所で塔の跡が発見されている。これらの確認された遺構から、中門は国分寺集落の南端付近、金堂は細男神社の境内周辺にあったものと推定される。

国分寺は、天平十三年（七四一）、仏の功徳によって平和な国を築くことを目的として、聖武天皇が全国に建立を命じた寺院で、正式名称は「金光明四天王護国之寺」という。因幡国分寺も八世紀中頃に建立されたと考えられるが、その経緯および廃絶の時期については不明である。

なお、現在、国分寺集落にある最勝山国分禅寺は、江戸時代に再興されたものである。

因幡万葉歴史館

岩美郡国府町町屋
ＪＲ鳥取駅からバス二十五分、因幡万葉歴史館入口下車、徒歩五分

万葉の歌人・**大伴家持**が万葉集の最後の歌を詠んだ地に、平成六年（一九九四）十月に開設された。

国府町内で発見された**梶山古墳**を原寸大で復元した展示物をはじめ、ハイビジョンやコンピューターを駆使して、万葉文化や因幡の歴史、民俗芸能がわかりやすく解説されている。

このほかにも、『万葉集』に詠まれた約五十種類の植物が植えられた回遊式庭園「万葉と神話の庭」や、因幡の山々や万葉の里を見渡せる高さ三〇メートルの展望台「時の塔」がある。

●開館時間　午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）
●休館日　月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始
●問合せ先　☎〇八五七・二六・一七八〇

物産

万葉の館

岩美郡国府町庁
ＪＲ鳥取駅よりバス二十五分、万葉歴史館入口下車、徒歩五分

因幡万葉歴史館のそばに建つ。万葉人の生活に大きな役割を果たしていたといわれる薬膳に注目し、地元の野菜や山の恵み、薬草を用いた現代風の薬膳料理を提供している。このほか、地元特産品の展示販売している。万葉の食文化を体験、研究できる施設。

●開館時間　午前十一時～午後九時（物産館：午前十時～午後六時）
●休館日　月曜日
※祝日の場合は翌日
●問合せ先　☎〇八五七・二七・〇三五八

大伴家持

「新しき年の始の初春の
今日降る雪のいや重け吉事」

鳥取県岩美郡国府町庁に立つ歌碑には万葉仮名で「新年乃始乃……」と彫られている。

この歌を詠んだ大伴家持（養老二年・七一八～延暦四年・七八五）は天平宝字二年（七五八）夏、**因幡国**（鳥取県東部）の国守（因幡守）に任ぜられた。政争に敗れての左遷ともいわれている。翌年正月一日、国庁の館で開いた新年宴会でこの歌を詠んだ。

「新しい年の始めのきょう、雪が降っている。今年もこの降り積もる雪のように良いことが重なってほしい」。

『万葉集』の四千五百十六首の最後をしめくくる歌でもある。このことから家持はこの国府町で万葉集を編さんしたといわれる。

この歌碑の右側に、国文学者・佐佐木信綱（一八七二～一九六三）の歌碑も立っており、家持の歌をたたえている。

「ふる雪のいやしけ吉事ここにして
　歌いあげけむ言ほぎの歌」

これらの歌碑は、家持の歌が作られて千二百年経ったのを記念して昭和三十九年（一九六四）に建立された。

また、国府町は平成六年（一九九四）、「家持大賞」を創設し、毎年優れた短歌を表彰している。

岡益の石堂

（安徳天皇御陵参考地）
岩美郡国府町岡益
ＪＲ鳥取駅からバス二〇分、岡益橋下車、徒歩二〇分

岡益集落の東方、通称「石堂の森」と称される丘陵上に立地する石造建築物で、約六メートル四方の基壇の上に、総高約二・〇メートルの石塔と、それを囲むように設けられた石障によって構成される。現在、宮内庁によって安徳天皇御陵参考地とされている。

石塔の構造は、円柱とその上に置かれた中台からなるが、円柱に施されたエンタシスと、中台の裏側のパルメット（忍冬唐草文）の浮彫は、はるかギリシャからシルクロードを経て伝わってきたものである。

丘陵周辺で瓦や土器が出土していることから、以前から、寺院（「岡益廃寺」）の存在が推測されていたが、平成九年（一九九七）から十一年にかけて行われた石堂周辺の発掘調査によって、金堂、講堂、回廊と推定される建物の柱穴跡や、瓦、土器が検出された。これらの出土遺物から、寺院の創建は七世紀末から八世紀初頭であり、また、検出された建物跡の配置から、石堂は「岡益廃寺」の塔として建てられたものと推定される。

史跡　梶山古墳

国府町岡益
ＪＲ鳥取駅よりバス三〇分、岡益橋から徒歩二〇分

標高九二・三メートルの梶山丘陵にある十二基余の梶山古墳群の中心的な古墳で、古墳時代後期（七世紀中頃）の築造と推定される。

凝灰岩製の切石で築かれた横穴式石室は、奥行き約八・八メートル、幅一・四メートル、高さ二・一メートルで、玄室、玄門、前室、羨道からなり、大正時代以前から開口していたが、昭和五十三年（一九七八）に壁画が発見された。玄室奥壁の上半分には、右向きの魚文（長さ五三センチ）を中心に、上に曲線文や同心円文、三角文が、下に円文などが赤黄色の顔料で描かれている。

昭和五十四年（一九七九）に国史跡に指定されたが、その際、部分的な発掘調査が行われ、須恵器、土師器、瓦状土製品、刀子、鉄製棺金具、金製薄延板片などが発見された。現在、石室は、壁画保存のため閉塞され、年一回公開している。

また、平成四年（一九九二）以降の発掘調査によって、墳丘の形状が対角長約一七メートル、一辺二・五～八・五メートルの変形八角形、前面に石垣で囲まれた高さ約二メートル、東西約一四メートルの方形壇を有するなど、特異な形態をもつ古墳であることが判明した。

志賀直哉来訪記念碑

岩美郡国府町岡益
ＪＲ鳥取駅よりバス三〇分、岡益橋から徒歩一〇分

昭和三十一年（一九五六）十月二十日、志賀直哉は鳥取文化財協会副会長の川上貞夫や民芸運動の**吉田璋也**らの案内で岩美郡国府町岡益の**「岡益の石堂」**を見学した。古代ギリシャ建築に特有のエンタシスと呼ばれる中央部に美しいふくらみを持つ石柱や、中国・雲崗石窟に見られ

る忍冬文様などに「格調が高いね」と感嘆した。

また、国府平野に点在する因幡三山（甑山・今木山・面影山）を遠望し「じつにやわらかな風景だね」と賞賛したという。

岡益の体験を志賀直哉は「妙」の一字に託している。**長通寺**境内の記念碑にはこの「妙」が彫られている。

このとき同伴した『女人文芸』同人の岡田美子の歌もこの記念碑の側面に刻まれている。

「りんどうを胸にかざりて山路ゆく七十四歳の直哉はうつくし」

史跡 鷺山古墳

国府町町屋
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分

古墳時代後期に築かれた円墳。規模は、直径約一〇メートル、高さ約一・五メートルで、横穴式石室を有する。昭和四十一年（一九六六）、石室内に線刻画が発見され、同五十六年（一九八一）に県史跡に指定された。

石室は、早くから開口されており、羨道全部、玄室の一部の石材が失われているが、この時期に造られた**千代川**右岸地域の古墳に特徴的な、玄室の中ほどの天井が高くなる「中高式」の形態を持つ。

また、玄室の壁面には、魚、舟、鳥などの多数の線刻画が描かれている。とくに奥壁中央に描かれた魚は全長が一・二メートルに達し、左に向いた魚の線刻画は、鮭か鱒を表現したものと見られ、目、口、胸鰭、背鰭、尾鰭などの細部にわたって描かれている。側壁に刻まれた高さ二一センチの舟には、帆や網も表現されるなど写実的である。こうした魚や舟の壁画は、回遊魚や渡り鳥、舟が戻ってくるように、死者の魂が蘇ることを願ったものと考えられている。

史跡 新井の石舟（石舟古墳）

岩美郡国府町新井
ＪＲ鳥取駅よりバス三〇分、新井下車、徒歩五分

国府町新井の東方の山麓に位置する古墳。安徳天皇とともに壇ノ浦から逃れてきた二位の尼（平清盛の妻）の墓とも伝えられている。昭和五十八年（一九八三）、町の史跡に指定された。

墳丘の封土のほとんどが失われているため、築造時の規模や墳形は不明。横穴式石室についても、入口部の両側壁が破損し、築造当初の規模や状態は不明である。現在、計測される石室の規模は、入り口西側の奥行きが約三・六メートル、同東側が約六メートル、高さが一・四メートルである。

石室内には、古墳時代後期（七世紀）のものと推定される凝灰岩製の切石造りの家形石棺（通称「二位の石舟」）が納められている。石棺は、長辺一九〇センチ、短辺一一〇センチ、高さ五五センチの棺と、厚さ約二四センチ、一辺約一一四センチの蓋二枚で構成され、現在、蓋の一枚は棺の上に置かれているが、もう一枚は棺の前方に転落している。そのためか、石棺内に水が溜まることが多く、その水をかき回すと長雨になると伝えられている。

史跡 栃本廃寺塔跡

岩美郡国府町栃本
ＪＲ鳥取駅よりバス四〇分、栃本下車、徒歩一〇分

袋川の支流・大石川の右岸段丘上に立地する七世紀末～八世紀前半頃の創建と推定される寺院跡。柱孔、舎利孔をもつ塔の心礎二個、建物の基壇跡や礎石などが残存し、遺跡として確認されていたが、平成九年（一九九七）から十一年にかけて行われた発掘調査によって、金堂、講堂、二基の塔の建物跡などが検出された。

伽藍配置は、金堂を中心として、東と南に塔、北西に講堂を配するもので、これらの建物が同時期に存在していたとすると、全国に例のない特殊な伽藍配置の寺院であったことになる。また、瓦が発見されなかったことから、板葺、檜皮葺、あるいは茅葺の屋根であったと考えられる。

寺域については、西限部を示す落段状の遺構しか確認されていないため詳細は不明であるが、東西約七〇～八〇メートル、南北約七五～一〇〇メートルと推定されている。

造営時期は、出土した土器の形式から、南塔は八世紀前半、講堂は八世紀中頃と考えられ、金堂は七世紀末に創建された可能性も指摘されている。寺院は、九世紀代まで存続していたと推定されるが、廃絶時期は不明。

二個の心礎の所在する栃本字塔ノ垣下塔ノ垣は、昭和十年（一九三五）に国史跡に指定されているが、平成十年（一九九八）には、周辺地域と廃寺塔跡を含めた約一五、〇〇〇平方メートルが環境整備計画区域となった。

学行院

岩美郡国府町松尾
JR鳥取駅よりバス三十五分、吉野橋下車、徒歩一〇分

真言宗醍醐派の古い寺である。はじめは花慶山光良寺といい、元明天皇和銅二年（七〇九）に、**因幡国**高草郡伏野村（現鳥取市伏野）の伏野長者の発願で創建されたといわれている。当寺の本尊薬師如来坐像は行基の作といわれ、高さ二・一八メートルある。このほかにも、脇侍は左に月光菩薩座像、右に日光菩薩座像が立ち、いずれも二メートル近い威容を備えている。また、吉祥天をはじめ千体に及ぶ仏像を安置していたといわれる。中でも薬師如来は屈指の霊仏であるとして、諸国からの参詣者を集めていた。

保元平治の兵乱に遭い、著しく衰退した。安徳天皇寿永年間（一一八二～一一八四）に平清盛の妻・二位禅尼が財を投じて再建し、また平知盛および西連法師が巨鐘を鋳て寄進したと伝承する。

室町末期に世は再び乱れ、荒廃し廃寺寸前となった。近くの紹慶という豪農がその荒廃を嘆き、慶長五年（一六〇〇）に、山伏の覚行と協力して四間に六間の草堂を建て本尊を安置した。学行院の名はこれに由来するといわれる。

本尊薬師如来は、放射状の光背をもち、八重の台座も当時のままである。日光、月光両菩薩も時代の優雅さを表わした優秀作である。吉祥天も重量感のある優れた作である。かつてこれらの諸仏が金色に輝いていたころは、その光に恐れて雨滝川に魚介類があがらなかったといわれた。奥州（岩手県）平泉の金色堂にも同様の伝説がある。秘仏であるため、いつでもは拝観できない。大正元年（一九一二）九月に重要文化財に指定された。

大黒舞

大黒舞とは、室町時代頃から行われていた遊行民による門付けの祝福芸で、その歌は各地の民謡や芸能に取り入れられ、現在に伝えられている。

鳥取市円通寺では、要造（使用人）が旦那さんにいわれて、大黒舞を舞うという人形芝居の演目がある。豊作を祝う、めでたい内容は、観衆である農家に向けて作られたものである。また佐治村津無では、本来、盆踊の演目の中にあった大黒舞を、祝福芸能として伝えている。

因幡の傘踊

鳥取市横枕と国府町高岡・美歎・麻生に伝わる、長柄の傘を使い剣舞のように舞う踊り。しゃんしゃん傘踊りの原型である。

横枕では、天明六年（一七六八）の飢饉の際に、雨乞い祈願のため、神楽歌に合わせて踊り、奉納したのが起源と伝えられている。その後、農村の娯楽として、見せる芸能の要素が強くなり、二人組みで技や型を競い合う踊りとなった。現在では、毎年の八月十四日、赤穂義士の装束を着た青年たちが、初盆供養のために集落内を門付けして回る。

一方、国府町の傘踊は、もともと江戸時代後期の干ばつの際に、花笠を持って踊られた雨乞い祈願の踊りが原型である。明治時代末期に高岡の山本徳次郎が、従来の傘踊りに剣舞の形を取り入れて、長柄の大傘で踊るものを考案した。踊りは、偶数人で鶴亀一対を表す高低の二人組を基本に構成されている。揃いの浴衣に白鉢巻き、白襷の若者が勇壮に踊る。

いずれの傘踊りも昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

高岡神社社叢

岩美郡国府町高岡
JR鳥取県駅よりバス三〇分、高岡下車、徒歩一〇分

社叢は、国府町高岡集落の北北西、標高約一〇〇メートルの南向きの緩斜面に位置し、社殿後方から東側にわたる高地のスダジイ林と、低地部のタブノキ、ヤブツバキ林に分かれる。

スダジイ林には、スダジイ、ウラジロガシを主体とし、他の社叢のシイ林と大差はないが、タブノキ・ヤブツバキ林中の亜高木層にヤブツバキの老樹が圧倒的に多いことが特異な植生であり、昭和三十四年（一九五九）六月に県の天然記念物に指定された。早春にはヤブツバキの美しい花が咲く。この他、主要な構成樹としてムクノキ、ケヤキ、ホオノキ、ヤブニッケイなどがみられる。

名所 雨滝

国府町雨滝
JR鳥取駅よりバス五〇分、雨滝下車、徒歩二〇分

扇ノ山山麓にある高さ四〇メートルの滝。**氷ノ山後山那岐山国定公園**の中にあり、扇ノ山火山の溶岩流からできた河合谷高原北西の縁辺部に

位置する。扇ノ山に降った雨水は、雨滝を経て**千代川**支流の袋川へと流れ出る。滝より上流の峡谷は、雨滝峡谷と呼ばれ急峻な谷を形成し、下流は緩やかな流れとなる。

雨滝付近の基盤岩は、新生代第三紀の鳥取層群の泥岩・砂岩層である。岩石は、新生代鮮新世火山岩類に属す安山岩で、雨滝安山岩と呼ばれている。峡谷最上流部は扇ノ山安山岩で標高約一、〇〇〇メートルの河合谷高原を形成する。

周辺は豊かな自然林に覆われ、四季を通じて見事な飛瀑を見ることができる。炎天下の夏には避暑として最適であり、新緑の春と紅葉の秋も美しい景色を鑑賞できる。雨滝の一〇〇メートル下流には落差二〇メートルの布引の滝があり、山道を八〇〇メートル歩いた北側には二段の筥滝がある。さらに、上流にも数多くの滝があり、一部は中国自然歩道から眺めることができる。

菅野のミズゴケ湿原

岩美郡国府町菅野
JR鳥取駅より車で五〇分

菅野湿原は、国府町菅野地内の大石川と上地川に挟まれた**扇ノ山**の溶岩台地の末端部、標高三九〇メートルに形成された湿原である。昔は沼であったが、泥土が深くて水田化できなかった面積の〇・九ヘクタールが湿原として残され、オオミズゴケが生育した。鳥取県内ではオオミズゴケが生育する湿原は極めて少なく、しかもこのような低標高地における湿原は貴重な存在であり、学術的に価値が高いことから昭和四十二年（一九六七）十二月に県の天然記念物に指定された。

湿原はオオミズゴケが地表面を覆い、カキツバタ、サワギキョウ、ヌマトラノオ、マアザミ、コバギボウシ、サワオグルマなどが流水溝を中心に群落をつくっている。この他トキソウ（ラン科）、モウセンゴケ（イシモチソウ科）など貴重な植物も生育している。

野村愛正

野村愛正は、大正後期から昭和初期にかけて多くの作品を発表し、広く大衆に親しまれた作家である。

明治二十四年（一八九一）、岩美郡大茅村楠城（現在の岩美郡国府町楠城）に生まれた。鳥取中学（現在の鳥取西高）を中退し、新聞記者となる。明治四十五年（一九一二）、**橋浦泰雄**、井上星蔭（**白井喬二**）、吉村撫骨らと文芸誌『水脈』を創刊し、小説を発表した。大正六年、大阪朝日新聞の懸賞小説に応募した『明ゆく路』が、二百十一編の応募作の中から一等に選ばれ、文壇にデビューした。戦時中は国府町に疎開し、児童誌『山びこ』を創刊している。晩年は連句に没頭した。昭和四十九年（一九七四）、八十三歳で死去。

昭和五十年（一九七五）、生地の国府町楠城に文学碑が建立された。また、昭和四十五年（一九七〇）には八頭郡佐治村にも句碑が建立された。

岩美町

駟馳山

岩美町・福部村

岩美郡岩美町大谷から福部村岩戸にかけての**日本海**に面する標高三一四メートルの山。**鳥取砂丘**や網代港から見ると火山の孤立峰のような姿を見せるが、火山ではない。新生代第三紀の鳥取層群の荒金火砕岩層と駟馳山砂岩泥岩層を基盤に、その上層を鮮新世火山岩類や溶岩が覆ってできた山である。地質は東南側に位置する二上山や立岩山と同じで、国道九号に沿う断層であるが、連続性が切られ、その後の浸食などにより現在の形となった。

山全体が、**山陰海岸国立公園**の一部で、海食崖や波食棚が発達し、凝灰岩と角礫岩の互層により、洗濯岩のようになっている箇所もある。また、節理や層理に沿った浸食地形や山体を構成する岩石が観察できる。また、海水浴シーズンには磯遊びの格好の場所となる。

福部村岩戸北方の滝ヶ浜には、幅一五〇メートル、高さ一〇〇メート

ルの安山岩の見事な柱状節理が発達している。また、山体の荒金火砕岩層中には方解石や東沸石などの鉱物や黒色のガラス質様の松脂岩がみられ、黒曜石とよく混同される。

名勝 浦富海岸（うらどめかいがん）

岩美郡岩美町浦富
JR岩美駅よりバス一〇分、町営駐車場下車すぐ

浦富海岸は**山陰海岸国立公園**の一部で、鳥取県の東端に位置する。

浦富の町を中心に東へ約一〇キロ、鳥取・兵庫両県の境界である岩美町陸上（くがみ）鼻から、西は**駟馳山**（しちやま）の断崖が**日本海**におちる郡界に至る、長さ一八キロの海岸の呼称である。

絶壁の陸上・羽尾（はねお）の両岬や、田後・網代の小半島は日本海中に突出し、その間に陸上（くがみ）・羽尾・浦富の長汀と、小栗・城原・鴨ヵ磯の曲浦が湾入し、白砂青松がこの長汀曲浦に連なっている。浦富海岸は、岬と小砂浜の交互する裏日本式の海岸である。

西浦富海岸西側は、花崗岩質の岩石からなり、浦富海岸東側は主として火山砕屑岩（さいせつがん）類からなる。景勝のほとんどは、花崗岩に発達する割れ目や節理に支配されていて、通常、波浪や風雪の浸食を受けて海食洞窟や洞門ができるが、加えて過去の海面変動が大きな要因になる。羽尾岬の「陸の竜神洞」、「海の竜神洞」はそのよい例で、浦富海岸には数十の洞窟・洞門があり、地殻変動や海水面変動を知る手がかりとなる。

また、千貫松島、太郎兵衛島、菜種島、松島などの離れ岩は激しい浸食作用の結果、陸地から切り離されたものである。人を寄せ付けない海食崖は標高一〇〇メートル前後の平坦面から一気に一〇メートルから数十メートルの急崖となっている。児落、菜種島、羽尾岬、陸上岬などの断崖面は節理面に沿い、日本海の激しい波浪の浸食作用によるものである。これらの地形によく映えるクロマツは、季節風の影響で偏向して育ち、花崗岩の岩肌と対照的で優れた景観を形成している。

田後地区の鴨ヶ磯、城原海岸は、海の透明度も八～二五メートルと優れていて、特異な海食地形と豊富なホンダワラなどの海藻を見ることができる。黒島付近にはクロダイ、イシダイなどの魚類が生息している。この地域は、海中の優れた景観を保存するために浦富海岸海中公園地区に指定されている。

かつて内務省が名勝地の調査を実施したとき、諸伯国府犀東（こくふさいとう）は、浦富海岸をまれに見る名勝地と賞讃した。また、天然記念物の調査にきた故理学博士・佐藤伝蔵は、神斧鬼筆、地質学上黙過すべからざる稀有の天然記念物地だと絶賛した。文豪・島崎藤村も、浦富海岸が「山陰松島」と呼ばれていることに対し、「松島は松島、浦富は浦富」とその比類のないことを讃えた。

浦富海岸は、天然記念物として指定され、昭和二十二年（一九四七）八月には山陰八景選出の投票で第二位に選ばれ、立久恵（たちくえ）・三朝とともに山陰三景となった。昭和三十年（一九五五）六月には山陰海岸国定公園、ついで同三十八年（一九六三）七月十五日には国立公園に指定された。

網代・田後間の海岸線には遊歩道（約三キロ）が、また牧谷から東海岸の竜神洞間には二キロにわたり歩道が完成し、ハイキングなどにはうってつけのコースである。

《浦富海岸の動植物》

植物では、露岩地にクロマツが張り付くように自生し、この中にヤシャブシ、トベラ、マサキ、マルバグミ、ネムノキなどの木本類、ハマベノギク、ワカサハマギク、オニヤブマオ、ツワブキなどの草本類などが随伴する。さらに砂丘ではハマエンドウ、ナミキソウ、スナビキソウ、ハマゴウなどが群落を作り、海食崖にはタイトゴメ、ハマボッス、潮風の当たる草地にはヒゴタイ、ユウスゲなどが見られる。また、クロマツ林中には山地性のミズナラが生育している。

動物では、クロサギ・イソヒヨドリなどの鳥やムラサキウニ、アカウニ、サンショウニ、アオウミウシなど岩礁の動物が特徴的である。

鳥取県の砲台跡

岩美町ほか

幕末の国内外における情勢の急激な展開の中、他藩同様鳥取藩も海防に力を入れてきた。天保十三年（一八四二）末頃には、藩内の各番所へ大筒が配備され、その後も増備されている。江戸近在の品川台場や大坂天保山などの台場での警備の経験はあったものの、鳥取藩での台場の建設は、文久二年（一八六二）より開始された。そして、鳥取藩は浦富、賀露、浜坂、橋津、赤崎、由良、淀江、境の八か所の台場を築造した。これらの台場は、藩倉などの重要施設の防備が目的だったが、賀露と浜坂の台場は、鳥取城防備が目的だったと考えられる。海岸防備の台場の他に野戦砲台も数か所構築された。海岸砲台は文久四年（一八六四）までには完成したようである。八か所の台場の中で規模、装備では境のものが最大であった。台場は幕府の命により鳥取藩が築いたが、藩財政が逼迫していたこともあり、実際の構築費用は地元農民の労役や大庄屋らの献金に頼った。

また、完成後の守備は地元農民から編成された農兵により行われた。各台場には六尾村（現大栄町）の反射炉で鋳造された砲が配備された。しかし、新式砲が国内で生産されるようになり、設置された砲は一度も使用されなかった。そして、明治維新後の対外情勢の中、必要なくなった台場は、明治三年（一八七〇）に六尾村の反射炉の砲製造具が鋳潰されたのと前後してその役割を終えた。

現在、境、橋津、由良、淀江の県中西部の四つの台場は公園として整備されている。遺構をよく残しているものもあり、昭和六十三年（一九八八）七月に一括して鳥取藩台場跡として国の史跡に指定されている。

県東部の台場跡としては、浦富のものがよく残り、公園として整備されている。これは、平成十年（一九九八）十二月に国の史跡に追加指定されている。賀露にあったものは住宅造成とともに失われたようで、浜坂の台場もこどもの国近くの有島武郎の石碑や鳥取市指定の保存樹木である「一里松」あたりにあったはずであるが、現在ではその跡を目で確かめるのは困難である。

露軍将校遺体漂着記念碑

岩美郡岩美町浦富

日露戦争終結の鍵となった**日本海**海戦が終了して三週間ほど経った明治三十八年（一九〇五）六月一七日に旧村の漁師二人が、それぞれ**田後港**の沖合いでロシア帝国将兵の水死体を発見した。村民たちは協議の末、**浦富海岸**鴨ケ磯で葬儀を営み埋葬した。

この田後村民の行動を顕彰しようと、岩美町浦富出身で国連大使などを歴任した澤田廉三が刻銘して、昭和三十七年（一九六二）に鴨ケ磯椿谷に「露軍将校遺体漂着記念碑」が建設された。その横に、今日では一部が風波のために摩滅しているがそのいわれを記した碑文石が建立された。これとは別に浜に流れ着いたロシア兵の遺体は隣海院で「露山忠白信士」という戒名を授けられ、小羽尾の墓地に葬られている。

県立山陰海岸自然科学館

岩美郡岩美町牧谷
JR岩美駅から車で五分

山陰海岸国立公園である**浦富海岸**にもほど近く、裏庭は羽尾岬自然探勝路にもつながる。

山陰海岸自然科学館は、山陰海岸国立公園を訪れる人たちに、山陰海岸の美しい自然をいろいろな角度から紹介し、楽しんでもらうとともに、自然保護の心を育むために、昭和五十六年（一九八一）七月に開館した。

山陰海岸の生い立ちや自然、生物、海と人の関わりが映像やパネルなどでわかりやすく紹介されている。

また、毎年夏休みには自然観察会や子ども科学教室などが開催されている。

●開館時間　午前九時～午後四時（七・八月は午後五時まで開館）

●休館日　月曜日、祝日の場合はその翌日（七月二十日～八月三十一日は無休）

●問合せ先　☎０８５７・７３・１４４５

網代新港

岩美郡岩美町大谷
JR岩美駅より車で十五分

浦富海岸の奇岩を間近に、**松葉がに**（ズワイガニの雄）漁で有名な漁港である。ズワイガニ漁の沖合底引き船十二隻を有する。現在、沖合底引き網は、網代港、**田後港**、**賀露港**他の鳥取中央漁協の船団にだけ許可されている。どの港に水揚げされても、「松葉がに」のタグが付けられており、識別できる。網代港は蒲生

川が北西に向けて**日本海**に注ぐ河口に位置し、北西風に悩まされてきた。江戸時代のはじめ、石見国の浜田（島根県浜田市）から漁民が移ってきたとも、同じ頃に若狭国（福井県）の漁師が延縄（はえなわ）漁を伝えたとも言われている。当時、地元の海域を越えて出漁する漁民は「旅漁民」と呼ばれていた。この旅漁民による日本海沿岸の交流が活発だったことを物語っている。

また、鳥取藩の藩米の積出し港でもあり、文久二年（一八六二）には積石の防波堤が築かれた。さらに、文久三年には「浦富台場」がつくられ、六尾（むつお）の反射炉（大栄町）で鋳造された大砲が据えられていた。

山陰線（現山陰本線）が開通するまでの一時、城崎―網代間の定期航路が就航していたこともあった。大正年間に入って、発動機付き漁船による底引き網漁法が導入され、本格的な漁港への道を踏み出す。昭和二十六年（一九五一）には、全国的に利用される第三種漁港に指定され、現在、海上保安庁の海上所保安署も設置されている。底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタの他、沿岸イカ釣り船によるスルメイカの水揚げが多い。昔の「カンコ船」の伝統を引き継ぐ船外機船による磯物の収穫も無視できない。なお、体験型観光としてイカ釣り体験できる。

山陰海岸国立公園の浦富海岸の中心地であり、浦富めぐりの遊覧船が常時就航している。また、西向きの海岸は夕日がすばらしく、夏季限定だが夕日クルーズも開催されている。

田後（たじり）港

岩美郡岩美町田後
ＪＲ岩美駅よりバス一〇分、田後下車

山陰海岸国立公園の浦富海岸の東肩に位置し、浦富地区の街路からも近い。西は奇岩、岩礁、洞窟が続き、東に向かっては一転して砂浜が多くなる。夏は海水浴やキャンプでにぎわう。釣り宿を兼ねて民宿を経営する家も少なくない。漁港としては**松葉がに**漁が有名で、沖合底引き船十一隻が所属している。

文禄年間に、石見国（島根県）の漁民が移住してきたと伝えられる。海の道を通して、漁民の交流の歴史は古い。しかし、本格的な築港は嘉永元年（一八四八）に始まる。鳥取藩により藩米の**賀露港**への廻送を目的とした捨石の防波堤である。約五〇メートル程度の堤であったが「千両づくり」と呼ばれ、当時としては大金が投じられた。この防波堤は明治二十三年（一八九〇）の波浪で崩れたという。以後、第七防波堤まで、営々として防波堤工事が続いた。国立公園であるため、離岸堤も景観に配慮して海面に沈んだ形の潜堤としている。この間、昭和二十六年（一九五一）には旧運輸省の避難港に指定されている。

漁獲は、沖合底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタ、エビ類、とくにカレイの水揚げが多い。また沿岸イカ釣り船によるスルメイカが目立っている。

港の背後に位置する田後地区は、せり上がった地形に張り付いた密集集落で典型的な漁村集落の街並みを残している。

史跡 二上山城跡（ふたがみやまじょうあと）

岩美郡岩美町岩常（いわつね）
ＪＲ岩美駅より車で約一〇分

標高三四六メートルの二上山の頂上部に築かれた中世の山城である。城は山頂部とその周辺に広がる数ヶ所の曲輪（くるわ）（削平地）からなっている。規模は大きいが、他の山城とくらべて曲輪の数は少ない。

十八世紀末に書かれた『因幡志』は、文和年間（一三五二～一三五五）に**山名時氏**（やまなときうじ）が築城したとする伝承を伝えているが、時氏はそのころ幕府に背いて**因幡・伯耆**・出雲・美作の四か国を実力で占領し、都をうかがってたびたび但馬に侵攻していた。当城はその位置からみて、時氏方の東の防衛を担うものであった可能性は高い。その後の動静は明らかにならないが、戦国末期に再び姿を現す。天正八年（一五八〇）の羽柴（豊臣）秀吉書状に「岩経（いわつね）之城」と記載されているのは二上山城のことである。秀吉は、この城を因幡と但馬の境目の重要拠点として垣屋氏に守らせた。

なお、昭和五十四年（一九七九）に行なわれた調査の際に、山頂部の曲輪（くるわ）地表面から、戦国末ごろの備前焼・唐津焼・輸入磁器などが数多く

見つかっている。鳥取県の史跡に指定されている。

仙英禅師

仙英禅師は、幕末の大老・井伊直弼の禅の師として知られる。

禅師は、寛政六年（一七九四）、因幡国岩井郡浦留村（現在の岩美郡岩美町浦富）に生まれた。七歳で仏門に入り、四十七歳のとき彦根清涼寺の住職に招かれた。清涼寺は彦根藩主・井伊家の菩提寺である。ここで井伊直弼は禅師について禅の道を修業している。幕末、ペリーの来航によって国内が開国と攘夷で騒然としていたとき、禅師は井伊に開国の必要性を説き、井伊の決断を促した。

禅師は、井伊が没した四年後の元治元年（一八六四）、七十一歳で亡くなった。

昭和三十三年（一九五八）、禅師の遺徳を顕彰する碑が岩美町浦富の道竹城跡に建てられた。花崗岩で造られた高さ四・七メートルの堂々たる碑は、遠く海外を望み、天に向かってそびえ立っている。

牧谷のはねそ踊

岩美郡岩美町牧谷

「はねそ踊り」は兵庫県北西部の浜坂町、温泉町から鳥取県北東部の岩美町、鳥取市、気高町、青谷町でみられる。「はねそ」の語源は、着物の裾を跳ね上げて踊る「跳ね裾」に由来するとか、「跳ね候へ」という掛け声に由来するなどの説がある。

本来の盆踊りは、音頭取りの「絵本太閤記」や「仮名手本忠臣蔵」などの口説き唄にあわせて仮装して踊ったといわれる。しかし、現在は見せる演出の要素も強くなり、浴衣姿に六尺長柄の傘を持った男性と、編み笠をかぶった女性が対になって踊る。

昭和四十九年（一九七四）に県の保護文化財に指定されている。

因幡の菖蒲綱引き

岩美郡岩美町大羽尾、気高郡気高町水尻・宝木、青谷町青谷に伝わる端午の節句の綱引き。現在は月遅れの端午や、六月第一の土・日曜日に行っている。綱引きは、その勝負によって豊作や豊漁を占う神事であり、さまざまな節目に行われる。鳥取県の東部でショウブヅナと呼ばれている綱引きは、五月節句に子ども組を中心に行われる。昭和六十二年（一九八七）に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

岩美町大羽尾では、子どもたちが屋根にあげられた菖蒲、ヨモギ、カヤを集めて綱を作り、浜に出て、お宮側とお寺（観音さん）側に分かれて綱引きをする。そしてその綱で土俵を作りすもうをとった後、綱を二つに切って、お宮とお寺に納める。

気高町や青谷町では、子どもたちが綱を持って町内を回り、門付けも行われる。

唐川のカキツバタ群落

岩美郡岩美町唐川
JR岩美駅よりバス二〇分、唐川口下車、徒歩四〇分

唐川は稲葉山の一部を占め、標高約三百メートルの高原地帯にある集落である。この集落の東南約半キロメートル、標高三七〇～四〇〇メートルの大沢の尻に一ヘクタールにおよぶ大湿原があり、ここにカキツバタの大群落がある。多年生草本でアヤメ科に属し、日本名は「書き付け花」から転化したものである。書き付けとは、こすりつけることで、花汁で布をこすって染める昔の習わしである。毎年五月下旬になると濃紫の花が開き、山間に一大美観を展開する。カキツバタにまじって湿原植物も多く、中国地方の代表的な湿原である。

旧藩時代、家老・荒尾家およびその家中の者が花見に来遊したといわれ、唐川の旧家小倉方には、「しっとりと草履湿しぬ燕子花」の短冊が保存されていて、当時の花見の情景がうかがわれる。

湿原植物は、地元唐川の人々によってよく保護され、初春のサワオグルマの黄色、初夏のカキツバタ、秋のサギキョウの紫色と、四季折々に

美しい景観が広がる。また、湿原にはモウセンゴケなどの食虫植物や多様な湿原植物も多く、学術的にも貴重である。カキツバタは昭和十九年（一九四四）三月に国の天然記念物に指定された。

許野乃兵主神社

岩美町新井
JR岩美駅より徒歩五分

大国主命、素盞嗚命を祭神とする。『延喜式神名帳』に載る神社のうち巨濃郡（現岩美郡岩美町域）九座の一つである。許野をコヤと読ませるが、当地の旧郡名巨濃に由来すると考えられる。同様に『延喜式』に記載される神社として同町河崎に佐弥乃兵主神社がある。

兵主神は、大陸渡来の製鉄・軍事の神といわれている。兵主神を祀る式内社は、全国で十九社二十一座があり、その内但馬に八社、因幡に二社ある。日本海側の限られた地域に集中していることが、伝来径路を暗示するようで注目される。江戸期には兵主大明神、許野乃兵主大明神といわれたが、明治四年（一八七一）に、現社名となった。

境内一帯から弥生式土器などが多く出土していて、昔の祭祀跡をうかがわせる。

当社に鳥居を寄進すると不幸が起るとか、寄進してもすぐ倒れるという言い伝えがあり、この神社には、現在も鳥居がない。

新井三嶋谷墳丘墓

岩美郡岩美町新井
JR岩美駅より車で五分

岩美町の蒲生川中流域の左岸に立地し、新井三嶋谷遺跡内の弥生時代後期初頭に造られた二基の墳丘墓。同遺跡は、低丘陵の先端部に位置し、墳丘墓の他に、縄文時代後期の石器工房跡、土壙墓二基、古墳時代中期の古墳二基と後期の古墳一基で構成される。平成十一年（一九九九）、岩美南小学校建設工事中に発見され、同年に二基とも町史跡に指定された。

二基の墳丘墓のうち、一号墳丘墓は、方形を基調とし、長辺が約二六メートル、短辺が約一八メートル、高さは最大三メートルと、当時としては最大の規模である。また、墳丘斜面には貼石が施されており、一部には石列が見られる。二号墳丘墓は、古墳時代中期に築造された古墳によって墳丘の大半を失っているため、墳形、築造時期の詳細は不明であるが、一号墳丘墓とほぼ同時期のものと思われる。

なお、一号墳丘墓の墳頂は平坦面である。確認された三基の埋葬施設のうちの二基からは、器台・高坏・壺などの葬送儀礼に用いる供献土器が出土した。これらの土器類は、破砕された状態で発見され、完形品は見られないことから、墓壙上で行われた葬送儀礼の際に破砕され、供献されたものと考えられる。

湯景 岩井温泉

岩美郡岩美町岩井
JR岩美駅よりバス一〇分、岩井温泉下車すぐ

蒲生川沿いに湧出する温泉。古くは湯村と呼ばれた。伝承によれば清和天皇の九世紀の中頃、宇治の長者・藤原冬久が発見したといわれる鳥取県最古の温泉である。

『因幡志』によると戦国時代の戦乱で湯池がつまり中断したが、池田光政が再興し、一の湯とお茶屋が建てられた。寛政年間には八湯あり、集落も百五十八戸と繁栄していた。神社、東福寺などへの参詣、近在や近くで繁栄していた荒金、銀山などからの湯治客でにぎわった。一の湯は藩主専用、他は銭湯であった。新湯は元禄十一年（一六九八）に藩が掘削したものである。たびたび大火に遭ったがその都度再建された。

明治十一年（一八七八）、ライマンによる山陰の地下資源調査の記事によると、岩井温泉には七つの湯があり、株湯と一の湯が五十七度、中湯、小女郎、宮田が四十七度、前田、伊藤、山田の各湯は四十六度で、株湯と山田湯は盛んに泡を発していたという。

現在、九つの源泉がある。そのうちの一自噴泉および三動力泉は集中管理され、五井は未利用である。平均温度は四十五・九度、湧出量は毎分一、一〇四・三リットルである。温泉は、岩井火砕岩層に発達する断層および割れ目から温泉水が上昇すると考えられている。

主な泉質はカルシウム、ナトリウム、硫酸塩で、皮膚病、リューマチ、神経痛に効くという。明治四十五年（一九一二）の**山陰線**（現山陰本線）の開通で京阪神からの温泉客が増えた。一時期は岩井軽便鉄道が敷設されにぎわった。温泉街のほぼ中央に岩井共同浴場湯かむり温泉がある。また、**湯かむり唄**が有名である。国民保養温泉地。

湯かむり唄

岩美郡岩美町岩井

岩井温泉に伝わる珍しい習慣である。温泉地でよく耳にするのは、調子を取って湯をかき混ぜる湯もみ唄であるが、湯かむり唄は、湯治客が頭に載せた手拭いに、柄杓で湯をかけながら歌う一種の数取り唄である。本来、湯治の効果を高めるため長く湯に浸かろうとして、入浴者が順々に十番ごと歌い、「何々尽くし」など即興的にひねり出された唄である。

現在、岩井では、盆踊りなどでも歌われる地域の代表的な民謡となり、振り付けの付いた「湯かむり踊り」として、新しい形で伝承されている。

ゆかむりギャラリー・尾崎翠資料館

岩美郡岩美町岩井
JR岩美駅からバス一〇分、岩井温泉下車すぐ

昭和初期の文壇で異彩を放ちながら駆け抜けて行った女性作家・**尾崎翠**。尾崎翠の文学を記念し、併せて尾崎を生んだ郷土・岩美町の風土を広く知ってもらおうと、町内の旅館経営者によって設置された。資料館は、のどかな温泉情緒漂う**岩井温泉**にある旅館（「花屋」本館）の一室に設けられている。

尾崎の生い立ちや作品、近年制作された映画などについての資料が展示されている。

●開館時間　午前一〇時～午後五時
●休館日　無休
●問合せ先　☎〇八五七・七二・一四三一

史跡 岩井廃寺塔跡

岩美郡岩美町岩井
JR岩美駅よりバス一〇分、学校前下車、徒歩二分

蒲生川右岸の山裾に立地する白鳳期創建の廃寺塔跡。国指定史跡。周辺の「弥勒堂」、「大門」などの地名や地形から、現在の**御湯神社**境内から岩井小学校にかけての地域が、寺域と推定される。

岩井小学校の玄関前には、凝灰岩製の塔の心礎が残っており、地元では「鬼の碗」と呼ばれている。心礎は、長径三・六メートル、短径二・四メートル、上面に一辺一・四メートルの正方形の柱座が造りだされ、その中央に直径七七・五センチ、深さ三二・七センチの柱孔がある。さらに、柱孔の底には直径二〇センチ、深さ一四・二センチの舎利孔が穿たれている。

周辺からは、単弁八葉蓮華文瓦、単弁十二葉蓮華文弁などの五種の軒丸瓦が出土した。その形式から、平安時代まで存続したことが推測される。また、伽藍配置は、遺物の出土状況、地形などから、塔の西側に金堂が位置する法起寺式と考えられている。

なお、岐阜市岩井の延算寺の木造薬師如来立像（国重要文化財）は、平安時代に巨濃郡岩井から遷座したと伝えられているが、巨濃郡には当廃寺以外に寺院があった形跡がないため、当廃寺と何らかの関係があったと考えられる。

御湯神社

岩美郡岩美町岩井
JR岩美駅よりバス一〇分、学校前、徒歩二分

岩井に湧く温泉に由来する神社で『延喜式』にも載る古社である。祭神は御井神・大己貴命・八上姫命・猿田彦命。文久元年（一八六一）の棟札に、神社創建以来千五十年とあるところから、神社ができたのは弘仁二年（八一一）であったといわれている。

『因幡志』によれば、古くは「大野ノ宮」といったという。江戸時代には「伊勢宮」ともいわれた。

幕末の文久三年（一八六三）には、神社創建千五十年を祝って芝居の興業などを三日三晩行い、大いににぎわったという。

明治元年（一八六八）、現在の社名になった。

田村虎蔵

田村虎蔵は、子どもにわかりやすい歌詞と歌いやすい曲をめざし、「言文一致唱歌」を唱え、その普及に努めた。

明治六年（一八七三）、岩井郡馬場村（現在の岩美郡岩美町馬場）に

生まれた。身体が大きかったので虎蔵と名づけられたという。

明治二十五年（一八九二）、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）校長、村岡範為馳（八頭郡出身）の講演を聞いて発奮し、東京音楽学校に進んだ。卒業後、音楽教育の現場に立ち、「子どもには子どもの言葉で、その生活感情に合った唱歌」が必要なことを知った。そのころの唱歌は欧米の民謡が多く、その歌詞はいかめしい文語体であった。

友人の石原和三郎（作詞家）らの協力で言文一致唱歌を編さんし出版した。明治三十三年（一九〇〇）、『幼年唱歌』（金太郎、大寒小寒、花咲爺など）を出版、つづいて『少年唱歌』（虫の楽隊、小さき星など）と『国定尋常小学校唱歌集』（一寸法師、うぐいす、大黒さまなど）と数多くの唱歌を作曲し出版した。

明治三十年代から約三十年間、全国各地で音楽講習会、唱歌講習会の講師をしている。昭和十八年（一九四三）、七十一歳で亡くなった。

昭和四十一年（一九六六）、田村虎蔵の業績を伝えるため、『大こくさま』の音譜を刻んだ音楽碑が鳥取市の白兎海岸に建てられた。

尾崎翠

尾崎翠は昭和の一時期を駆け抜けた女性文学者である。その独特の感性と表現力は、尾崎の死後数十年経った今、新しく多くのファンをとらえている。

明治二十九年（一八九六）、岩井郡岩井宿（現在の岩美郡岩美町岩井）に生まれた。教育熱心な家庭に育ち、文学への夢をふくらませていった。大正八年（一九一九）、日本女子大学に入学、その翌年一月に小説『無風帯から』を『新潮』に発表した。志賀直哉や佐藤春夫、菊池寛らとならび二十三歳の翠の作品が掲載された。その後、小説、戯曲、映画評、短歌などを次々に発表し、新しい文学の担い手として注目されるようになった。

しかし、持病の頭痛がすすみ、薬に頼ることが多くなり、昭和六年ごろには幻覚症状が見られはじめている。代表作『第七官界彷徨』はそういう中で執筆された。

昭和七年（一九三二）秋、兄によって強制的に東京から鳥取へ連れ戻された。その後四十年間、文学とは無縁でひっそり生きた。昭和四十六年（一九七一）、七十五歳で亡くなった。

死の二年前、『第七官界彷徨』が文学全集に収録され話題となった。昭和五十四年（一九七九）と平成十年（一九九八）には『全集』も出版された。

近年、尾崎の功績を讃え、魅力を共有するためフォーラムが企画され、映画も制作された。翠が通学した鳥取市雲山の面影小学校には記念碑がある。また、翠の出身地岩美町の**岩井温泉**には**資料館「湯かむりギャラリー」**が開設され、尾崎翠に関する資料や作品が展示されている。鳥取市職人町の養源寺に墓がある。

岩美町民いこいの里

岩美郡岩美町大坂
JR岩美駅から車で四〇分

小田川上流に位置する。優雅に落ちる南滝の浅い沢で水遊びをしたり、その周辺に整備された遊歩道でせせらぎを聞きながら森林浴を楽しんだりすることができる。

キャンプ場のほかスポーツやアスレチックができる多目的場や日本海を望む展望台が設置されている。

棚田

岩美郡岩美町横尾

中国山地を越えて鳥取県に入ると、**日本海**に向かって大きく落ち込む急峻な地形と山麓に広がる棚田の美しさに、ふと足が止まる。棚田は田毎の月あるいは千枚田と呼ばれ、景勝地として好まれる一方、耕して天に至ると言われるように山間地の生活を特徴付けるものでもある。県内に棚田は多い。水田面積の二割近くが棚田と考えられている。全国的には水田の一割にも満たない。とくに日野川流域の日南町、江府町や溝口町に多く、中部では三朝町や関金町に多い。東部は比較的少ないが、一箇所にまとまった棚田が広がる。「日本の棚田百選」（農林水産省選定）に選ばれた地区は、若桜町春米と岩美町横尾の二地区である。

岩美町横尾へは、国道九号から岩美町蒲生で分かれ旧蒲生峠への道をたどる。峠の手前には、横尾、洗井さらに蕪島の三集落が続き、約二五ヘクタールにわたって五百枚の田が広がる。勾配は十六分の一と比較的緩やかで、起伏のある山腹に石積みの棚田が見事である。

現在、棚田ボランティアが結成され、農業体験を兼ねて作業に参加している。また、都会の市民向けに棚田を区画して貸付けるオーナー制度も始まっている。棚田が都市と農山村の交流の場になろうとしている。

蒲生峠

岩美郡岩美町蒲生
JR岩美駅より車で二〇分

国道九号を鳥取市から東へ向かい、**岩井温泉**を通り抜けた鳥取県と兵庫県境にある峠。現在は蒲生トンネルが整備され、トンネルを抜けるとそこはもう兵庫県温泉町である。蒲生トンネルにさしかかる手前の岩美町塩谷で国道から右折する道路をたどると山の神、銀山、横尾、洗井、蕪島の各集落を経て、蒲生峠の標示に出会う。ここが旧蒲生峠（標高三三五メートル）である。近くには近世初頭まで生野銀山や石見銀山と並ぶ銀鉱山があった。また、横尾には美しい**棚田**が続き、「日本の棚田百選」に選ばれている。

古来、山陰道は京都へ通じる重要な道路であり、県内では鳥取城下から兵庫県但馬地方へ至る但馬往来と呼ばれてきた。鳥取から蒲生峠まで二五キロメートル、峠から温泉町千谷まで三・二キロメートルある。江戸時代の峠道は、山の神から尾根づたいに蒲生峠まで直登していた。慶応四年（一六九八）の山陰道鎮撫使・西園寺公望一行もこの峠を越えた。今も一部に石畳の旧道跡を確認することができる。

明治時代、旧山陰道が国道九号になり、幾度かの改良の後、蕪島経由の路線に変更された。現在の旧道は昭和三十八年（一九六三）に完成したものである。高度経済成長時、県内一の幹線道として人と物の移動に大きな役割を果たした峠道も、昭和五十三年（一九七八）に蒲生トンネルが貫通しその道を譲った。旧道沿いには今も明治二十五年碑銘のある延命地蔵菩薩の台座が残る。周辺は歴史的な地点として、案内板や東屋など整備が進んでいる。平成八年に「歴史の道一〇〇選」に選定された。

観照院

岩美町岩本
JR岩美駅よりバス一〇分、岩本下車、徒歩五分

観照院は天台宗に属し、本尊は千手観音である。かつては古海山網代寺（阿代寺）といい、中世までは同町網代にあった。いつ頃開山したかは明らかではないが、旧境内の地下から出土した鐘には「因州巨野郡岩井庄阿代寺」の銘文と共に「正平十五年」（一三六〇）の記年銘がある。また、安政五年（一八五八）の文書には「網代寺」とあり、万延元年（一八六〇）の文書には「観照院」とあるので、寺号が改称されたのはその頃のことと考えられる。

『因幡志』には、文禄年中（一五九二～一五九六）に水害で寺院が倒壊したが、住民の力で再建されたと記されている。同寺『縁起』によると、慶安二年（一六四九）、堂舎が新造されたとある。その後、慶応三年（一八六九）に火災で焼失し、明治五年（一八七二）、再建されている。

本尊は海中から出現したといわれ、近世には卯年のみ開帳される秘仏であった。

橋浦泰雄

橋浦泰雄は、鳥取県文芸運動の先駆者である。また広く画家、社会主義運動家、民俗学者として活躍し、多くの業績をあげている。特に柳田国男を支え、日本民俗学の形成に貢献したことは大きい。

明治二十一年（一八八八）、岩井郡岩本（現在の岩美郡岩美町岩本）に生まれた。二十四歳のとき、文芸誌『水脈』を発行し、鳥取県における文芸運動の先駆けとなった。その後上京し、絵を学びながら社会主義運動に関わった。

柳田国男に民俗探訪について尋ねたことがきっかけで民俗学にも関わり始め、組織づくりや運営の面で柳田の活動を支えた。昭和五十四年（一九七九）、九十歳で亡くなった。

著書に『家族制度の研究』『まつりと行事』『民俗探訪』『熊野太地浦捕鯨史』などがある。また、『広辞苑』（岩波書店）第一版の民俗学の分野の解説を担当している。

岸辺福雄

岸辺福雄（福叟）は、昔ばなしや児童文学の作品を子どもたちに話して聞かせる口演童話のパイオニアである。

明治六年（一八七三）、現在の岩美町に生まれた。兵庫師範学校を卒業したあと兵庫県内で小学校の教諭をしながら、幼児教育には口演が最適と考え、口演童話を始めた。

明治三十五年（一九〇二）上京し、幼稚園、女学校を相次いで創立し教育に打ちこんだ。大正末期からは絵雑誌『コドモノクニ』の編集顧問も務めている。このころ、児童文学者の巌谷小波（いわやさざなみ）・久留島武彦（くるしまたけひこ）とならんで〝口演童話の三羽烏〟といわれている。昭和三十三年（一九五八）、八十五歳で死去。

口演童話集に『岸辺福叟名話集』（昭和十七年）、その理論書に『お伽噺仕方の理論と実際』（明治四十二年）がある。なお前記『名話集』には、この本の作品は「話す童話で、読む童話ではありません」と記してある。

福部村

善光院（ぜんこういん）

福部村細川
JR福部駅より徒歩二〇分

山号を無量寿山といい、宗派は天台宗である。本尊である阿弥陀如来は、子年（ね）のみ開帳される秘仏で、長野善光寺と同形式の鎌倉期製作の金銅仏といわれる。開山したのは、白鳳丙子（六七六）赤阪長者とも栄照和尚ともいわれる。当院は、因伯における善光寺信仰の拠点寺院として栄え、かつては一遍上人の遊行参詣もあったのでは、と想像する説もある。

近世初までは、寿量山清泰寺といったが、無量寿山安養寺善光院に改め、貞享五年（一六八八）に村内の中谷から現在地に移された。

境内には「細川梅」という江戸期の俳書『毛吹草（けふきぐさ）』などにも紹介された白梅があった。直径一寸五分の大輪の花で、花弁には五色の飛白が入り、花見時には時の藩主・池田光政も訪れてにぎわったが、明和七年（一七七〇）の夏枯死したといわれる（『因幡民談記』『因幡志』）。

本堂前には牛馬神の大日如来を祀った大日堂がある。一月十四・十五日の縁日には大にぎわいし、春・秋分には堂でごまが焚かれ、息災祈願が行われた。このとき、近くの山で笹を採って堂内にある牛の像をなでた後、持ち帰って牛馬に食べさせたという。

福部村歴史資料館

福部村湯山
JR鳥取駅からバス二〇分、砂丘東口下車、徒歩一〇分

福部村歴史資料館は平成二年（一九九〇）十一月に国立公園である**鳥取砂丘**の中に設置された。

福部村内では、縄文時代前期から弥生時代、古墳時代の遺跡が数多く発見されており、これらの遺跡から出土した国の重要文化財や県指定文化財をはじめ、因幡地方に伝承されている民具、古文書などの歴史的資料が展示されている。

●開館時間　午前一〇時～午後五時
●休館日　木曜日、祝日の翌日、年末年始
●問合せ先　☎0857・29・7211

らっきょう

中国原産のユリ科の多年草で、草丈は二五～五〇センチ。秋遅く花茎を出し、その頃に赤紫色の花が散形花序をなし球形に集まって咲く。果実は結ばない。葉は冬には枯れず、六月頃に枯れる。鱗茎は狭卵形で、醋や味噌などに漬けて食べると食欲増進に効用がある。

岩美郡福部村の砂丘らっきょうは有名で、栽培は江戸時代にはじまり、大正六年（一九一七）から本格化した。販売額は平成四年（一九九二）には約八億円の高額を記録し、年々更新しつつある。

温泉　ふくべふれあいランド

岩美郡福部村海士
JR鳥取駅から車で二〇分

鳥取砂丘にもほど近い。「砂丘温泉ふれあい会館」と「ほっとスイミングプール」からなる。

砂丘温泉ふれあい会館の二階にある展望浴場からは、**日本海**を眺めることができる。また、ほっとスイミングプールには二五メートルのプールがある。ここからも日本海を望むことができる。

近くには、らっきょう畑が一面に広がり、秋には赤紫色の可憐な花が咲く。

●開館時間　午前一〇時～午後八時三〇

分（入館は午後八時まで）
●休館日　木曜日、年末年始
●問合せ先　☎0857・75・2316

荒坂神社

福部村八重原
JR福部駅より徒歩二〇分

荒坂神社は、大己貴命、少彦名命などを祭神とする古社で、『延喜式神名帳』に載る法美郡（現鳥取市・岩美郡の一部）九座の一つ「荒坂神社」と考えられる。

『日本三代実録』に、貞観五年（八六三）に「新羅国の人が因幡国荒坂浜に漂着した」とあり、当社はその頃は荒坂浜近くに鎮座していたと推定されるが、現在その地がどこであるかはわからない。

近世にはこの神社は矢谷村（福部村内箭渓）に鎮座し、荒坂山王と称されていた。『因幡志』は「…神光衰微して渺たる一小社なれど……近傍に幣殿・神楽殿・燈明田・油代などいふ名、尚田土の称に残れり。上古大社たりしこと察すべし」と記している。

明治初年（一八六八）に、荒坂神社と改称し、同四年（一八七一）現在地に移された。

坂谷神社社叢

岩美郡福部村栗谷
JR福部駅から徒歩十五分

坂谷神社社叢は、福部駅から東へ四〇〇メートル離れた標高三〇～一〇〇メートルの南向きの斜面に位置し、スダジイを主とする大規模な照葉樹林である。

特に、参道石段の両側と社殿のある石窟をぬけた一帯には優れたスダジイ林が見られる。

また、石段を登ったあたりにはケヤキの大木が多く、ヤブツバキの老木も珍しくない。

そして、亜高木層には樹皮に独特な模様をもつカゴノキが目立つ。幼木もかなりの数が育っている。さらに低木には暖地性植物のコショウノキやフユザンショウ、草木層にも南方系のシダ植物であるクリハランなど希少な貴重植物の存在が注目され、昭和五十八年（一九八三）九月に県天然記念物に指定されている。

郡家町

安藤祭り

八頭郡郡家町郡家

九月最終土曜日に行われる祭。伝承によると、文政六年（一八二三）農業用水の不足に悩む農民を救うために、当地の豪農・安藤伊右衛門は私財を投じて、八東川から水を引き入れるという大事業を成し遂げたという。そしてでき上がった用水路は、井右衛門の偉業を讃えて「安藤井手」と呼ばれた。その普請の際に勧請した用水弁天社の祭礼が、「安藤祭り」である。

祭では、屋台が地区を巡行し相撲が奉納される。奉納相撲に関しては、井右衛門が大の相撲好きであったという説と、四股に地下水路壁や土手を固める信仰があるという二説ある。

自性院

郡家町下峰寺
JR東郡家駅より車で約七分

自性院は、上峰寺との境の山上にあって、通称「峰の薬師」といわれている。明治十四年（一八八一）に廃寺扱いになったものの、霊験あらたかな仏として、今も厚い信仰を集めている。真言宗に属し、本尊は薬師如来である。開かれた当時は生峰寺と称し、鳥取市の金剛院の末寺であったという。

明治以後、当寺院の什宝・文書は新興寺へ預けられ、新興寺から天佑寺（郡家町）に回送されたといわれている。現在、当院に残るのは過去帳だけである。

当寺院は、光明皇后の母・橘夫人の誓願によって建立されたものと伝えられている。本尊は、奈良法隆寺の分身如来で、行基が製作し、法隆寺・三河（愛知県）風葉山薬師寺の本尊と共に日本三薬師の一つといわれた。開基当時は、壮麗を極めた寺院で、信者でにぎわったというが、戦国期の兵火によって焼失し、衰退していった。

福本のオハツキイチョウ

八頭郡郡家町福本
JR郡家駅より徒歩一〇分

祖師堂境内にあるイチョウで、葉の先にギンナン（種子）ができるのでオハツキイチョウといっている。目通り周囲二メートル内外、高さ四〇・五メートル、この木は約百年前、

福本の三好覚三郎という人が、若いときに山梨県下山村上沢寺の御葉つきイチョウ（国指定天然記念物）という名木を、分れイチョウと称して植えたことに始まる。実がなるようになったのは五、六十年前からである。御葉つきイチョウは、従来、老年相の木にできると考えられていたが、若木にもでき、要因は遺伝的なものである。福本のものは普通のイチョウと御葉つきを混じえたものである。御葉つきには一個から三個くらい実がつき、葉柄の長いのが特徴である。

山梨県上沢寺は、身延山の裏山にあり、身延山の七ふしぎの一つとして、「高祖御枝曰犬霊木銀杏実」と題し婦人の乳の護符としていることで有名である。鳥取県では特に珍しく、昭和四十五年（一九七〇）二月に県指定天然記念物に指定された。福本の母樹の西方二〇メートルの所に一本若木が生えてオハツキと確認されている。

市場城跡（私都）

八頭郡郡家町市場
ＪＲ東郡家駅より車で約十五分

私部（私都）城とも呼ばれた中世の山城で、私部郷の地頭・毛利氏の居城であった。毛利氏は安芸国の毛利氏と同族で、もとは東国の武士であった。城は標高二七六メートル（比高一四〇メートルほど）の山頂部に中心をもち、そこから北方に伸びる数本の尾根上に数多くの曲輪（削平地）が造成されている。因幡では最も大規模な中世城郭の一つである。今、残っている城跡は、戦国後期の遺構であるが、創築は室町期かそれ以前にさかのぼる。文明年間（一四六九～一四八六）、毛利氏は守護山名氏と敵対し、当城でもたびたび合戦が行われたことが知られる。延徳元年（一四八九）には山名豊時との戦いに敗れ、城も落城した。ただ、毛利氏はその後もこの地域の領主として勢力を維持していた。天正（一五七三～）の初年には尼子氏再興をめざす山中鹿之助が攻略し、それを毛利氏が奪い返すなど、激しい争奪戦が繰り広げられた。

天正九年（一五八一）、羽柴（豊臣）秀吉の鳥取城攻略後は、但馬の山名氏が入城した。

大樹寺のウラクツバキ

八頭郡郡家町福地
ＪＲ鳥取駅よりバス四〇分、福地下車、徒歩五分

曹洞宗の大樹寺に育つ、樹高九メートル、幹周り一・九メートル、推定樹齢は四百年の有楽椿。わが国のウラクツバキの中で最大級のものであり、町の天然記念物に指定されている。

ウラクツバキは関西では有楽椿、関東では太郎冠者と呼ばれ、茶人でもあった大名の織田有楽が茶花として愛好した。花期が長く、十一月から三月にかけて、ピンク色の花を次々と咲かせるが、花底が紅色のヤブツバキの花とは異なっている。ツバキ類には珍しく香りがある。最盛期には優雅な花が咲き続け、その姿は壮観である。

安徳の里姫路公園

八頭郡郡家町姫路
ＪＲ東郡家駅から車で二〇分

郡家町内には安徳天皇の墓と伝承されている「上岡田五輪塔群」が祀られており、公園内に設置された「安徳天皇資料館」には、平家物語長門本（複製）や安徳幼帝が行在されていたことを伝える合掌地蔵などが展示されている。小さな子どもから大人まで楽しめるように、遊具を備えた子供広場、テニスコート、自転車モトクロス場や親水広場がある。

また、休憩・宿泊施設やキャンプ場もあり、ゆっくりと自然に親しむことができる。

●開園時間　（管理棟）午前九時～午後六時
●休園日　月曜日（祝日の場合はその翌日）十二～三月は閉園
●問合せ先　☎0858・74・0302

西御門の大イチョウ

八頭郡郡家町西御門
ＪＲ郡家駅よりバスで一〇分、西御門下車すぐ

山麓に仁王堂があり、庭を昇る石段の右の方に斜に広く根をはった一本のイチョウがある。イチョウ科に属し日本名「鴨脚」の中国宋時代の

音よみ「ヤーチャオ」の転訛であるといわれている。『因幡志』には「仁王堂の前に七抱へ許りの銀杏樹の大木ある是也。十二月三十日の夜、この木に疱瘡神やどるといい伝えて諸人畏敬し銀杏の葉を乞請けて守袋に収めてまじないとなす」とあるように、ホウソウの神として木の根本に銀杏権現を祀っている。天然痘が流行したときには遠近から人々がやってきて、イチョウの葉をお守りとしたという。

この木は雌木で、上の方は地上二メートルの高さで周囲八メートル、高さ二五メートルの大木で、枝が四方に出て壮観である。約五〇センチの大きなチチといわれる気根がさがっており、イチョウの有数な大木として「とっとりの名木百選」に選定された。

和多理神社（わたり）

郡家町殿
JR郡家駅よりバス一〇分

和多理神社は、『延喜式神名帳』の八上郡同名社と考えられる。猿田彦命（さるたひこのみこと）を祭神とする。

社伝によると、景行天皇のときに創社され、大同二年（八〇七）に、和多理山（越山）から現在地に移されたといわれている。近世までは、大多羅大明神といわれ信仰されてきた。

『因幡志』には、隠岐を脱出された後醍醐（ごだいご）天皇が、**名和長年**を伴い当地に潜幸され、当社に参拝、祈願された。また、長年は当社に十町六反余を社領として寄進したと記載されている。

天正八年（一五八〇）、羽柴（豊臣）秀吉の因幡侵攻の際、兵火に焼かれ社領も没収された。その後、若桜城主・山崎家盛によって修理が行われ、宝暦三年（一七五三）、社殿が再建された。

中島菜刀（なかしまさいとう）

中島菜刀は、華麗な色彩で描く日本画家である。その作品は、横山大観にも激賞された。

明治三十五年（一九〇二）、八頭郡賀茂村（現在の八頭郡郡家町）の農家に生まれた。本名は益雄。村巡業の歌舞伎一座に加わっていた両親に連れられ因幡、但馬地方を回った。五歳ごろから画才を発揮し、凧絵を描いて家計を助けたという。

大正十年（一九二一）、村の篤志家の後援で京都市立絵画専門学校（現在の京都市立芸術大学）に入学し、養鶏場でアルバイトしながら絵を学んだ。画号の「菜刀」は、鶏の餌にする「菜」を「刀」で刻んだことにちなむ。

昭和四年（一九二九）、第十六回院展に『松葉かき』が初入選、二年後には院友に推された。同十七年（一九四二）、梨の袋かけを描いた『薫風梨園』で院賞（白寿賞）を獲得し、横山大観に激賞された。

敗戦後、鳥取市や八頭郡、気高郡内を転居しながら絵筆をとるが病床に伏すことが多くなる。再起をめざして京都に帰ったが、昭和三十年（一九五五）、五十三歳で死去。

代表作には『群鶏』『炭焼』『かや刈り』『麒麟獅子』『芭蕉庵詩仙堂』がある。菜刀の作品は、流転の生涯であったためか、このほかの主要な作品のほとんどは、所在がわかっていない。

船岡町

天満山公園（てんまんやまこうえん）

八頭郡船岡町船岡
若桜鉄道因幡船岡駅より徒歩十五分

船岡町役場の背後にそびえる天満山（標高二一八メートル）の山麓に、千本を越えるサクラの木が植えられ、花見の場所として名高い。若桜鉄道の因幡船岡駅に降り、役場を目指して歩くと約十分で国道四八二号に沿った役場の建物に着く。その角を曲がると天満山公園に登る道がある。「天満の天神」と親しまれてきた天満宮がある。祭日の旧三月二十

五日と九月二十五日には、入学祈願などに来る若者も多い。桜公園の一角には、郷土の作曲家・**岡野貞一**が作曲した『春が来た』の歌詞と譜面を記した碑が建立されている。

天満山からの眺望は、八東川の流れに沿った里山の風景がのどかに広がる。電車と徒歩で春の一日を楽しみたい場所である。

下船岡神社祭

船岡町船岡
若桜鉄道因幡船岡駅より徒歩一〇分

下船岡神社は、猿田彦命、天鈿女命などの神々を祀る。例祭が行われる五月三日には、氏子中の男子は幼児から年寄りまで全員が参加し、御幸行列を構成する。地区をあげての大規模な祭である。榊、幟武者、大名行列などが御輿を先導する。いわゆる鳥取東照宮（現**樗谿神社**）の神幸祭の形式を取る。

この祭りの特徴の一つに獅子舞があげられる。獅子舞は神幸行列の最後尾を練り、舞は出立ち・御神事場・奉納事の三回奉納される。角がある大型の獅子頭を用いた獅子舞は、樗谿神社の**権現祭**および**麒麟獅子舞**の形式とそれ以前の形態とを折衷している。また、夕刻に行われる御輿の「宮入り」も特徴的なものである。この時、榊と御輿がぶつかり合う。

能引寺

船岡町下野
若桜鉄道因幡船岡駅よりバス十五分、寺前下車すぐ

能引寺は、山号を虎石山といい臨済宗妙心寺派に属する。本尊は虎御前の守り本尊でもあったという地蔵菩薩である。大隣寺（鳥取市）の末寺である。

当寺縁起によると、富士のすそ野の敵討ちで有名な曽我兄弟の一人、曽我十郎祐成の愛人虎御前が、十郎の没後、各地を放浪した末、当地で庵を結んで没した。その後、彼女の叔父・僧忍山が比叡山よりやって来て、当寺を建立したと伝えられている。建立当時は天台宗の寺院であったが、応仁年間（一四六七～一四六九）、京都建仁寺の僧天隠（洛賜とも）が来住し、臨済宗に改宗した。

境内には、虎御前がその上に座して写経したという「虎ケ石」があり、裏山には虎御前の墓と伝えられる宝篋印塔と、宝永五年（一七〇八）銘の一字一石塔が建っている。

竹林公園

八頭郡船岡町西谷
若桜鉄道隼駅より徒歩二〇分

扇状地に広がる園内には国内外の珍しい竹と笹の二百品種が、庭園風に植栽され、竹林浴を楽しむことができる。また、バーベキューができる炊事棟やバンガロー、テントサイトを備えたキャンプ・遊具場が整備され、芝広場ではグラウンドゴルフができる。また地元で採れた食材を使った食堂もある。

サクラや芝サクラ、あじさいなどの花とともに、四季折々に異なった表情を見ることができる。

●開園時間（管理棟）午前八時三〇分～午後五時三〇分
●休園日　水曜日（祝日の場合は翌日）
●問合せ先　☎〇八五八・七三・八一〇〇

橋本興家

橋本興家は日本の版画史に大きな足跡を残した。「日本の城」を描くことをライフワークとし、伝統美を世界に伝えた。

明治三十二年（一八九九）、八頭郡船岡村（現在の八頭郡船岡町）に生まれた。二十二歳で上京し、東京美術学校（現在の東京芸術大学）に入学。三十七歳のとき、現代日本版画の草分け、平塚運一に誘われ、版画の道に進むこととなった。

その二年後から「城」をテーマにした作品に取り組み始めた。それまでの版画の常識を破る多色摺り木版画四十号の大作『古城早春』『古城清秋』、さらに五十号の『夏景名城』を発表し、美術界から注目された。「城」シリーズは百数点にも及んだ。

現代日本版画の国外への紹介にも力を入れた。昭和三十四年（一九五九）、ボストンで開かれた「日本現代版画歴史展」、同三十七年（一九

六二）に大英博物館で開かれた「現代日本版画展」などに出品している。平成五年（一九九三）に九十三歳で死去。

作品には、「城」シリーズのほかに、『砂丘』『大山』などがある。

大江神社

船岡町橋本
若桜鉄道因幡船岡駅よりバス一〇分、才原下車すぐ

大江神社は、天穂日命・三穂津姫命などを祭神とする。『延喜式』記載の「大江ノ神社」と考えられる古社である。社伝によると、元暦元年（一一八四）に因幡守に任ぜられた大江広元が深く崇敬していたと伝えられる。

当社は、古い文書の記載からみて因幡一宮・**宇倍神社**に次ぐ社格があったようで、因幡二宮とする説もある。『因幡民談記』によると、当社の嘉元三年（一三〇五）銘の棟札には、「正一位権現」「地頭　平宗泰」の文字が見える。また、神社の柱に書かれた銘文には、貞治七年（一三六八）から応安三年（一三七〇）に神社が造営されたとあり、平宗泰の子孫が名を連ねている。平氏は後に町内水口にあった半柵城主・伊田氏の先祖と考えられている。

かつては社地八尾八谷を有したというが、文禄二年（一五九三）の洪水によって山が崩れ、社地は流れ、今の田畑となった。

江戸時代には財原大明神、大江大明神といわれ、近郷六か村の総産土神であった。明治・大正期に近隣の神社を合祀した。

河原町

霊石山

八頭郡河原町稲常
ＪＲ鳥取駅からバス二〇分、稲常下車、徒歩十五分

鳥取市、八頭郡河原町、郡家町の境界にある標高三三三・五メートルのテーブル状の山体をした山。「霊石山」の名は、山腹中央部に猿田彦命の霊がこもる「御子石」と呼ばれる巨大な安山岩の転石があり、この「霊のこもる石」に由来するという。因幡誌には、「土俗この山の一国の中央にありてこれより四方の境にいたって七十八里と云へり」とあり、因幡の中央の山として知られていた。

霊石山は、下層から河原火砕岩層、円通寺礫岩砂岩層、鮮新世火山岩類で構成されている。山頂部の鮮新世火山岩類は三〇～五〇メートルの厚さで、流動性に富んだ安山岩質の溶岩流でできている。

頂上から、北に鳥取平野や**千代川**、南に中国山地や八東川を一望することができ、伊勢ヶ平と呼ばれる草原状の平坦部は遠足やハイキングの好適地となっている。また、北側斜面から吹き上げる風がハンググライダーやパラグライダー飛行の格好の条件となり、麓の千代川河川敷へと舞い降りる光景がよく見られる。山頂にはテレビの中継基地が設けられているため、アスファルト舗装が施され、簡単に車で登ることができる。

山の中腹には**最勝寺**があったが、現在は山麓の片山集落に再建されている。

鳥取県林業試験場・県立二十一世紀の森

八頭郡河原町稲常
ＪＲ鳥取駅からバス二〇分、稲常下車、徒歩約一〇分

昭和三十年（一九五五）九月に優良品種の育成・増殖技術や育林技術や森林管理の研究などのため開場し

た。

平成七年（一九九五）には、新技術、新製品開発のため誰もが自由に利用できる木材加工研究棟が整備された。この施設は、智頭スギが柱、内・外装に使用され、県産材の利用拡大を図るためのモデル施設にもなっている。

この試験場の背後に広がる**霊石山**の豊かな森の一部を利用して設けられたのが「二十一世紀の森」である。「きのこの森」「野鳥の森」「生産の森」「薬草の森」のほか工芸実習館などがあり、自然観察や体験学習を通して森林や林業について理解を深める場となっている。

●開館（園）時間
木材加工研究棟　午前九時～午後五時
二十一世紀の森
午前九時～午後四時三〇分
●休館（園）日
木材加工研究棟
土・日曜日、祝日、年末年始
二十一世紀の森　年末年始
●問合せ先　☎〇八五八・八五・二五一一

最勝寺

河原町片山
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分、徒歩十五分

最勝寺は、山号を霊石山といい真言宗御室派の寺院で、薬師如来を本尊とする。当寺は、和銅年間（七〇八～一五）に僧行基が当地を訪れて草庵を開き始まったといわれる。

その後、天暦年間（九四七～五七）に、比叡山より慈恵僧正が来住し、多数の仏閣と僧坊四十二坊を造営したという。そのときは天台寺院であり、本尊は仁和元年（八八五）から天暦元年（九四七）まで当町長瀬の長谷寺に移されていたと『因幡志』には記されている。兵庫県生野町金蔵寺の鐘銘には、文永四年（一二六七）の年記と共に「因州最勝寺」とある。

応永三十四年（一四二七）、**摩尼寺**の僧・快乗が来住して真言宗に改めた。天正九年（一五八一）、羽柴（豊臣）秀吉の軍により霊石山一帯は焼き払われ、当寺も焼失した。昭和三十年（一九五五）、**霊石山**西側中腹より現在地に移された。

伝説では、建久四年（一一九三）に、伊豆修禅寺に幽閉されていた源範頼（頼朝の弟）が逃れてきて、この寺で没したと伝えられている（『因幡志』）。源範頼のものといわれる五輪塔が残っているが、その記年銘は永正（一五〇四～二十一）であり、合致しない。

長瀬の大シダレザクラ

八頭郡河原町長瀬
ＪＲ鳥取駅よりバス二十五分、河原下車、徒歩一〇分

中島家邸内の庭にあり、国道五三号から二〇〇メートルほど離れている。樹高は約一二メートル、胸高直径は八五センチ、樹齢は四百年と推定される巨木で、県内でも有数のものとして昭和三十四年（一九五九）六月に県の天然記念物に指定された。特に樹形が美しく、鳥が羽を拡げたように枝が伸びている。

花期は四月上旬で、赤味の強い淡紅色の花は実に美しい。花径は小さいが、一芽に平均四個の花がつき、

県内のシダレザクラの中では花の数が多いほうである。

八上比売神社

八頭郡河原町曳田
ＪＲ鳥取駅よりバス二〇分、曳田下車すぐ

西ノ日天王とも呼ばれる。古事記によると、大国主命はこの地の八上比売に求婚し、八十神たちとここに来たという。ワニに皮をむかれた白兎を救ったのはその途中のことである。いつ頃からここに八上比売を祀るようになったかは明らかでない。しかし、平安時代の『延喜式』には「八上郡売沼神社」の記載があり、当社をさすものと考えられることから、かなり古くからと推察される。

なお、『万葉集』によると、この八上郡から朝廷に奉仕した采女が、安貴王に愛されたため不敬罪に問われ本国に返されている。この采女はこの辺りの出身と考えられる。

河原町立歴史民俗資料館

八頭郡河原町渡一木
ＪＲ鳥取駅からバスで二〇分、役場前下車すぐ

民家であった木造茅葺平屋建の建物を移築改造し、昭和五十三年（一九七八）四月に開設された。

江戸中期のものと推定される家屋に配された農具や生活用具からは、

当時の生活様式や習慣などをうかがい知ることができる。

●開館時間　午前九時～午後四時
●休館日　月曜日、年末年始、祝日
●問合せ先　☎0858・76・3123

お城山展望台・河原城

八頭郡河原町谷一木
ＪＲ河原駅より車で五分

天正八年（一五八〇）に羽柴（豊臣）秀吉が因幡平定に際して陣を築いたという城山に、平成六年（一九九四）九月に河原町のシンボルとして開設された。

河原町は鮎のまちとしても知られ、別名「若鮎城」とも呼ばれる。高さ二四メートル、四階建てのお城をかたどった施設では、河原町の観光情報をはじめ、古くから伝わる焼物や伝統的産業や文化、地元に伝わる八上姫の神話や歴史を立体映像などを用いて紹介している。

また、天守閣のテラス展望台からは、遠く**鳥取砂丘**や中国山地の山なみが一望できる。夜間は二一基の照明でライトアップされ、まちのランドマークとしても親しまれている。

●開館時間　午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）
●休館日　月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末
●問合せ先　☎0858・85・0046

伊良子清白（いらこせいはく）

伊良子清白は近代詩史に異色の地位を占める詩人である。

明治十年（一八七七）、八上郡曳田村（現在の八頭郡河原町曳田）の医家に生まれた。本名は暉造（てるぞう）。生後十一か月で母と死別し、乳母に養育された。その後、転居癖、浪費癖のある父に従って流転する。明治十八年（一九八五）、三重県津市に転住、詩作をはじめた。『文庫』の主要同人として活躍、同三十三年（一九〇〇）に上京し、『明星』創刊に参画した。

明治三十九年（一九〇六）、詩集『孔雀船』を出版した。その中には明治三十三年から三十八年までの作品約百五十編から厳選した十八編が収められている。この詩集は、詩人として活動した期間が短かった清白の唯一の詩集である。以後、島根県浜田をはじめ、大分、台湾、京都と、辺地の医師を務めている。

昭和二十一年（一九四六）、六十八歳で死去。

「故郷の
谷間の歌は
続きつゝ断えつゝ哀し
大空の返響（こだま）の音と
地の底のうめきの声と
交りて調は深し」

これは、詩集『孔雀船』巻頭の「漂泊」第四連である。漂泊そのものであった清白の人生と響きあうこの詩は、河原町曳田の正法寺境内に建つ石碑に刻まれている。

釜ノ口土手（かまのぐちどて）

八頭郡河原町釜ノ口
ＪＲ国英（くにさ）駅より徒歩一〇分

千代川に沿った土手のサクラが珍しく、花見の名所である。鳥取方面からは国道五三号を河原町に入り、千代川と八東川が合流する出会橋を右に見て、さらに千代川をさかのぼる。高福トンネルを抜け、川筋が大きく湾曲する辺り、中ほどに桜並木の土手が続く。そこが釜ノ口土手である。

土手の左に見える釜口集落は、江戸時代には「高瀬舟の釜口」と呼ばれ、千代川を往来する川舟を扱い千代川とともに歩んできた。土手は、鳥取藩の参勤交代に使われた上方往来の道筋にあたり一里塚が置かれていた。また、若桜街道（今の国道二九号）と結ぶ脇街道の宿場としてもにぎわった。

現在は、千代川から引く二筋の井手（用水路）が水田を潤し、静かな農村のたたずまいを見せている。

田中寒楼（たなかかんろう）

田中寒楼は俳人で歌人。その言動から酒仙、哲人とも呼ばれた。

明治十年（一八七七）、八上郡小畑（現在の八頭郡河原町小畑）に生まれた。本名は国三郎という。鳥取中学（現在の県立鳥取西高等学校）在学中から正岡子規の説く俳句革新運動に共鳴し、句作した。明治三十二年（一八九九）、子規に「因幡に寒楼あり」と称賛された。

教員生活後、大正十四年（一九二五）春から俳句行脚を兼ね、沖縄を含め主として京阪以西を旅している。放浪の旅は三十五年続いた。晩年は、書や詩歌、酒の世界を楽しんだ。昭和四十五年（一九七〇）、九十三歳で死去。

「月ももう出て来い山も低うなれ」
（佐治村高山）

「不古今遠　木の葉が落ちてきた」
（八東町岩渕）

「雲に寝て
草花は目のさむるほとり」
（用瀬町役場前）

落河内の大キリシマツツジ

八頭郡河原町北村
ＪＲ鳥取駅より車で四十五分

桜谷旧家にある樹高三・六メートルのキリシマツツジ。枝は東西五・一メートル、南北七メートルに広がる、直径五センチ以上ある枝が二十本で、本県にあるキリシマツツジとしては有数の巨木である。推定樹齢四百年といわれ、昭和三十二年（一九五七）二月に県の天然記念物に指定された。

キリシマツツジは、九州南部の山岳地帯に自生する低木である。五月初めに赤色の美しい花をつけるので、観賞用として全国で栽培されている。この大キリシマが、真っ赤な花を咲かせる姿は見事で、「とっとりの名木百選」に選ばれている。

名勝

三滝渓

八頭郡河原町北村
ＪＲ鳥取駅よりバス五〇分、床下車、徒歩四十五分

千代川の支流曳田川上流部の渓谷で、八頭郡河原町の西端に位置する。曳田川と落河内へ向かう谷が別れる地点から、上流約五キロの間が県指定名勝の三滝渓である。北側の高山（一、〇五三メートル）から西回りに、南側の高鉢山（一、二〇三メートル）へかけて半円形に連なる一、〇〇〇メートル級の山々に囲まれ、そこに発達する多くの谷を主谷である三滝渓が集めている。

渓谷の景観は三つの区間に分けられ、上流に向かって口の景勝、中の景勝、奥の景勝と呼ばれる。渓谷入口にある高山神社の社叢は、椿の多い原生林的な樹林景観を見せ「権現の森」と呼ばれ、口の景勝を特徴づけている。杣小屋から標高五〇〇メートル付近の夫婦滝までの約一・五キロが中の景勝で、谷幅は狭くなり両岸には絶壁が迫り、奥の景勝の幽門峡へと続く。奥の景勝では、滝、淵の連続する渓流となり、なかでも落差約七〇メートルの千畳滝は、三滝渓の象徴的景観となっている。

渓谷の地質は、口の景勝から中の景勝の中間地点付近までが鳥取南部火山岩類と呼ばれる安山岩や流紋岩およびその火砕岩類で、これより奥は吉岡花崗岩と呼ばれる黒雲母花崗岩となる。いずれも古第三紀の火成岩である。このほか、周囲をとりまく高地には新第三紀鮮新世の安山岩溶岩や同質の火砕岩類が分布している。また、奥の景勝の谷底は花崗岩であるが、両岸壁はこの安山岩でできている。渓流に沿う道路の終点から遊歩道を辿ると、高さ長さともに四〇メートルほどの三滝吊橋に至り、ここから千畳滝を目前に望むことができる。

三滝渓のシャクナゲ

自然景観にも恵まれ、県の名勝に指定されている三滝渓はシャクナゲの名所としても知られている。特に千丈滝の前面に架けられた吊り橋から見る、周囲の絶壁の岩場にはヒノキ、ホンシャクナゲ群落が見られ、四月下旬から五月上旬にかけて毎年美しいピンクのシャクナゲの花が咲き乱れる。

シャクナゲの種名はホンシャクナゲであり、シャクナゲの仲間の代表的な種という意味の和名である。花冠は広い漏斗状で七列し、花の直径は約五センチもあってシャクナゲの仲間で最も美しい。本州の中部地方以西から四国地部に分布し、鳥取県内でも標高五〇〇メートル辺りに広く分布する。**三滝渓**では標高七〇〇メートルあたりに一番多く見られる。

落河内の大カツラ

八頭郡河原町北村
ＪＲ鳥取駅より車で四十五分

雌木で目通り直径は、約四メートル、枝張り東西三六・五メートル、南北三五・七メートル、枝張り総面積一、三〇〇平方メートル、高さ二五メートルもある。江府町州河原崎のカツラと並び、カツラとしては有数の巨樹である。

昭和四十八年（一九七三）三月、県の天然記念物に指定された。

米原章三

米原章三は政治、産業、経済、文化など幅広い分野に強い指導力を発揮した。

明治十六年（一八八三）、八上郡袋河原（現在の八頭郡河原町）の農家に生まれ、大学を卒業後、智頭町の山林地主・米原家の娘と結婚した。家業を継ぎ、まず山林事業の近代化に取り組んだ。

智頭町議会議員を経て、大正十二年（一九二三）に県議会議員、昭和三年（一九二八）には県議会議長に選ばれた。このころ、政府任命の知事に対し、党派を超えた実力者であった米原は「政務知事」と呼ばれ畏敬された。

県内の乗合自動車とタクシーが利用者獲得競争で白熱していたのを憂い、米原は政党の実力者を説得するなどして、昭和五年（一九三〇）、県東部のバス、タクシー八社を合併し、日ノ丸自動車株式会社を発足させた。このほかにも、鳥取大丸、日本海新聞、日本海テレビ、鳥取銀行など育てた企業は二十数社のぼる。昭和四十二年（一九六七）八十四歳で死去。

八東町

新興寺桜公園

八頭郡八東町新興寺
若桜鉄道安部駅より徒歩二十五分

平安時代から中世に栄えた**新興寺**境内の裏山に作られた桜園。国道二九号を若桜方面に向かい八東町に入る。「フルーツの里」の標示を過ぎ、左右に柿畑の広がる辺りが新興寺集落である。国道二九号沿いの各町ではもともと在来のエドヒガンが多く、ソメイヨシノなど新しい品種がまとまって植え込まれた公園は少なく、四月には花見をする人でにぎわう。また、新興寺谷川はホタルも多く、毎年六月中旬には新興寺ほたる祭が催される。

また、新興寺境内には至徳（一三八四～一三八七）年号の刻まれた宝篋印塔がある。僧坊四十八の伽藍を誇ったという往時の姿がしのばれる。

長源寺

八頭郡八東町岩淵
若桜鉄道八東駅下車、徒歩十五分

雲龍山長源寺は、黄檗宗に属する。創立年代は明らかでないが、古くは真言宗であったがのち曹洞宗に転じた。

京都花園妙心寺紫衣の大徳提宗和尚（寛文八年示寂、七十歳）が鳥取市栗谷町にある**興禅寺**の住職となり、黄檗宗に改派、始祖となった。その頃、長源寺も黄檗宗に改派し、開祖として迎えた。境内には、正平八年（一三五三）の宝篋印塔や延享五年（一七四八）鋳造の梵鐘（銘は百拙和尚）がある。この梵鐘は、太平洋戦争中の金属特別回収の際にも、特に県の存置鐘に指定され残った。

境内には故橋本栗谿詩碑や故河島遥斎歌碑、**田中寒楼**句碑のほか、梵鐘を残すのに貢献した川勝政太郎博士の句碑「石黙すれども我その声を聞かむ」がある。

勘右衛門土手

若桜鉄道八東駅より徒歩二〇分

年貢減免を要求して因伯数万の農民が決起した元文一揆の首謀者として処刑された勘右衛門は、八東町東の人で、土木・農業の技術者としても優れていた。八東川の洪水は幾度も大きな被害を起してきたが、勘右衛門は私財を投じて農民を指揮し、藩の援助を受けずに、金崎の樋門を起点に下流左岸約五〇〇メートルにわたる堤防を完成させた。この堤防は巨石によって構築され、藤かずらを植えて地盤の強化を図ったという。

金崎橋付近には、人柱をその下に入れて流失を防ごうとしたという「金崎の人柱」と呼ばれる巨石を今も確認することができる。堤防の起点近くには昭和四十年（一九六五）に建立された顕彰碑とそのいわれを記した碑文石などがあり、その脇の高台には勘右衛門兄弟の墓がある。

新興寺

八頭郡八東町新興寺
若桜鉄道安部駅より徒歩二十五分

八東町内の地名にもなっている新興寺は、山号を波羅密山といい、真言宗醍醐派に属する。本尊は聖観音である。

『因幡国新興寺僧等解案』（文治三年（一一八七）には、和銅年中（七〇八～七一五）、僧行基によって開かれた寺で「当国（因幡国）最初寺」といい、行基作の延命観音、千手観音を本尊としたと記載されている。その真偽は別としても、平安末～鎌倉初期には、因幡で有数の真言密教寺院であり、中世を通じて寺の

勢いは盛んであった。

安元三年（一一七七）と文治三年（一一八七）には、寺領内へ勝手に検断使（警察官）や、甲乙人（一般人）が入らないようにと願い出て、認められている。

建武元年（一三三四）には、後醍醐天皇の祈願所とされ、**名和長年**が寺領を保証していた。その後、寺領を侵害する者が次々に現われるが、その都度禁制が下付され寺領が守られてきた。しかし、戦国乱世になると寺領は奪われ、寺は衰退し、遂には僧一人が寺を守っていたという。その僧も慶長末年（一六一五）に没し、無住となり、以後、荒廃するにまかせた。天保年間（一六四四～四八）頃、再興され、最勝院（現鳥取市）の末寺となった。弘化三年（一八四六）に本堂が再建された。

裏の金峯山中にある平安末～鎌倉初に造られた経塚から出土した遺物と、至徳二年（一三八五）建立の宝篋印塔は、県の保護文化財に指定されている。

伊蘇乃佐只神社

八東町安井宿　若桜鉄道安部駅より徒歩十五分

伊蘇乃佐只神社は、『延喜式神名帳』に載る「伊蘇乃佐只神社二座」と考えられる古社である。祭神は神直毘神・大直毘神などである。近世には「浅崎大明神」といわれた。『因幡志』には、祭神はこの地の浅崎の瀬から出現したと記され、そこにでてくる「伊蘇乃佐只」は「磯の崎」のことで、「浅崎」と同義と考えられている。

元禄年中（一六八八～一七〇四）に現在地に遷座された。享保十二年（一七二七）の火災により文書・寺宝など全て焼失したといわれる（『八東町誌』）。

また、当社の祭神が、当地を開墾していた時、笹で目を突かれて痛められたという伝説があり、氏子の安井宿では端午の節供の笹餅は作らない。

八東町ふるさとの森

八頭郡八東町妻鹿野　若桜鉄道丹比駅より車で三〇分

ブナの森でキャンプが出来るという、少し贅沢な森林公園である。国道から分かれて、細見川をさかのぼること約二十分の距離にある。**扇ノ山**から流れ出て八東川に注ぐ細見川が深い渓谷を刻み、標高七〇〇メートルの山腹にブナの純林に近い森をつくっている。この森には簡易宿泊施設二棟をはじめ、バンガロー十棟、テントサイト十張りなどが用意されている。管理棟をはじめ炊事場や簡易水洗トイレ、温水シャワーなどの設備が整っている。

ブナ林の中は歩道があり、樹木の肌に触れながら散策することができる。見上げるとブナの葉が明るく空を覆う。渓流に下りれば、水遊びを楽しむこともできる。秋の紅葉シーズンにはブナの黄色い枯葉、また、渓流沿いにあるトチノキやカエデが多彩な色に変わり見飽きない。森林公園を起点に扇ノ山へ登山をする人も少なくない。

なお、園内にはアスレチック施設などがあり、子どもたちに人気がある。さらに、夏休みの昆虫採取にも最適な場所で、夜に森の中を懐中電灯で照らせばカブト虫やクワガタを見つけることができるなど、家族連れも十分楽しめる森である。

●休園日　十二月～四月二十八日
●問合せ先　☎〇八五八・八四・三七九九

物産　道の駅「はっとう」

八頭郡八東町徳丸　若桜鉄道徳丸駅より徒歩一〇分

フルーツの里八東町にあって、**りんご**の樹園地やスポーツ公園に囲まれた道の駅である。国道二九号が**千代川**から別れて八東川沿いに開けた農村を走る辺り、若桜鉄道の徳万駅付近に位置する。戸倉峠越えの往来にあり、また**氷ノ山・扇ノ山**一帯のレクリエーションの起点として人の集まる情報基地でもある。駐車場は広く百六十二台を収容できる。

八東町ではスポーツ・レクリエーション施設として、ゲートボール場などを備えた「総合運動公園」の整

備が進められ、さらに特産の果物を販売する目的で「フルーツ総合センター」が建てられた。平成七年（一九九五）八月、複合施設のメリットを生かした道の駅が誕生した。管理は、第三セクター「八東町地域振興株式会社」が行っている。

八東町は果樹栽培が盛んで、とくに西条柿の栽培で知られる。その他、**二十世紀梨**、**ぶどう**、リンゴが栽培されている。道の駅の店頭にはこれらの季節の果物が並ぶ。また、町内ではフルーツ加工にも取り組んでおり、各種のフルーツ菓子もみやげ品として好評である。

道の駅の背後にある公園には芝生広場や野外遊具もあり、家族連れも多く訪れる。春には、今では珍しくなったエドヒガン桜の大木が白い花をつけ、花見を楽しむこともできる。近くには観光農園や体験農園があり、道の駅でも案内がある。

清徳寺社叢（せいとくじ）

八頭郡八東町清徳
若桜鉄道八東駅より車で一〇分

八東駅から四キロの山峡に清徳寺の広大な寺跡がある。境内には珍しい名木、巨木がある。寺の右手にある檜膚（ひわだ）ザクラは、檜皮で葺いた寺の屋根がくずれて倒れ、檜皮の上にサクラが自然に咲いたことからこの名がついた。目通り九〇センチ、一・七メートルの上から北に出た一枝は枯死し、南、東、西に各一枝が出ている。樹高七メートル、花はヤマザクラ系統で花色弁片のなかほどに紅色の一線のあるものもある。十五ないし十七弁花で雄しべ二本のものも多く、一本のものや三本のものも混じっている。がく片は六個から十個のものもある。樹勢は弱い。

また、寺の前方左に二本の巨木がある。西方が大カゴノキで、境内内の前方後円墳の後円部の盛土の外側に立っている。目通り四・四メートル、南北の枝張り一二メートルの老木で東側に空洞がある。カゴノキは「鹿子のき」の意で、樹木が生長すると若木のとき滑らかであったものが、円く鱗片となって剥脱していき、鹿皮状の白い紋ができるという特性がある。

葉は常緑で四国、九州、沖縄、台湾などに分布するクスノキ科植物で山陰では島根半島に多い。鳥取県では中、西部に少数自生しているが、清徳寺付近には自生しない。そのことから献木と思われる稀代の巨木である。

大カゴノキと並んで東方に立つ大モチノキは、目通り二・九五メートル、高さ二〇メートルで、樹勢強壮な巨木である。また、堂の右手前方の大ボダイジュは、立ち株の周囲五・五メートル、株から分かれた九本の枝は四方に張っている。樹高一五メートル、枝張二二メートルの巨木である。さらに清徳の小松庄平氏宅の裏には、オマキザクラが高くそびえている。この花は咲くと大麻（幣）の種子を蒔くことからこう名づけられたという。目通り周囲二・六メートル、樹高二〇メートル、枝張り一五・五メートル、開花時期は他のサクラより少し遅い。種類は未検定であるがこの地方の名木である。

矢部家住宅（やべ）

八頭郡八東町用呂
若桜鉄道丹比駅よりバス一〇分

矢部家は、祖先が若桜鬼ヶ城主で、南北朝の動乱期には山名方の国侍として『太平記』にも記載されている。天正年間には尼子（あまご）勢の攻撃を受けて滅びたと言われるが、その後、子孫がこの地に土着し江戸時代には代々大庄屋を勤めた古い家柄である。当地に帰農して五代目の時に火災に遭い、現在の主屋はその後に建てられたものと伝えられる。主屋の建築年は過去帳や家構えなどから承応～元禄頃と思われる。

主屋は梁間五間・桁行一一間と規模も大きく格調の高い建築である。現在は「中の間」部分が拡張され、また「納戸」も前後に仕切られ、「広間」も「玄関」、「台所」と前後二室となり、部屋数も多い。しかし、口納戸の古い柱やそれに残る痕跡などから間取りを復元すると、当時の大型民家形式の一つである広間型五間取りとなる。構造形式も土間境に入側柱が建つなど古式を伝えている。小屋組は大黒柱列にも棟を支える束が建っており、「さす組」と「うだつ造」を併せもつ独特な架構形式であるが、これをこの地方では「半小屋造」と称している。屋根は入母屋造の茅葺である。長大であるため、棟には当地方独特の棟飾りであるカラスオドリが十一個も乗っている。

昭和四十九年（一九七四）二月に国の重要文化財に指定された。

用呂の清水

八頭郡八東町用呂
若桜鉄道丹比駅よりバス一〇分、徒歩一〇分

清澄な湧水で、古くより地域住民の生活用水として大切に保全された。また、地域の重要な灌漑用水として利用されている。湧水量料は一日当たり三、〇〇〇立方メートル。平成二年（一九九〇）十二月、「因伯の名水」として県指定を受ける。下流に国の重要文化財**「矢部家住宅」**がある。

扇ノ山

鳥取県と兵庫県の県境には一、〇〇〇メートル級の山が連なり、その稜線沿いは**氷ノ山後山那岐山国定公園**に指定されている。この中の標高一、三〇九・九メートルの扇ノ山はなだらかな稜線を持ち、鳥取県側から見ると、山腹の尾根と谷が上方に向かって扇のように広がっていることからこの名前がついた。八頭郡、岩美郡、兵庫県美方郡にまたがる扇ノ山山塊は、第四紀更新世に活動した玄武岩質の火山群からなる。山塊内には、複数の地点にかつての火口に形成された火砕丘が認められ、これらから流出した多くの溶岩が分布している。山頂は、基盤の岩石からなるが、そのすぐ北側の「大ズッコ」と呼ばれる一、二七三メートルの円錐状のピークは火砕丘であると考えられる。このほか、北方稜線上の「小ズッコ」（一、〇八九メートル）、広留野北端の小丘（九三〇メートル）や、稜線をはさんだ兵庫県側にある上山高原南端の上山（九四六メートル）は火砕丘で、それぞれが独立した小火山である。これらの個々の火山には名称がなく、まとめて扇ノ山火山あるいは火山群と呼ぶ。これらは、浸食が進み火口の凹地形は残っていないが、周囲には火山弾や火山礫、スコリア（軽石）が分布している。**県立博物館**に展示されている県指定天然記念物の「扇ノ山火山弾」は、長径が一メートルを超え重量三六六キロの巨大な紡錘状火山弾である。扇ノ山から南西方一キロメートルに位置する八東町地内から採集されたことからみて、広留野北端の九三〇メートル火砕丘から放出されたものと考えられる。

溶岩の多くは玄武岩であり安山岩を伴う。山頂付近を中心に南西、北西、北方の三方向に広がって分布している。それぞれの分布域では、溶岩が当時の谷を埋めて流れたためにできた平坦な高原が、標高七〇〇～九〇〇メートル付近に発達している。広留野は南西、上山高原は北方に流下した溶岩がつくる高原で、ほかにも北西部に河合谷高原、山頂のすぐ北東に畑ヶ平がある。河合谷高原には県内最大規模の県営河合谷牧場があり、広留野や畑ヶ平では高原野菜の畑作が行われている。南西に流れた溶岩は、広留野を経て八東川にいたる。八東町富枝の採石場跡では約一〇〇メートルの垂直な崖をなして露出している。柱状節理の発達した安山岩溶岩で、国道二九号から至近距離で見ることができる。この東方の千石岩や来見野川中流諸鹿の屏風岩も、この溶岩がつくる岩壁である。扇ノ山火山群が活動した時代は溶岩の多くが逆帯磁で七三万年前以前を示していること、新期の溶岩が大山火山の約二十万年前の火山灰層を覆っていることから、およそ百万年前から数十万年前、地質時代でいう更新世前期から中期であると考えられる。

この山は須賀ノ山に連なり、冬季はスキー場として好適である。また、頂上からの兵庫県北部、鳥取県東部地方および**日本海**を眼下にした眺めはすばらしく、実に豪壮である。春はウド・ギボシ・フキ・ミズナの採取、夏はキャンプに適する。また、秋の紅葉も美しい。主な登山コースとしては、若桜線丹比駅下車、富枝から妻鹿野滝谷をへて頂上までの一五キロのコースがある。

《扇ノ山の動植物》

扇ノ山の山容は、やや円味をもつ老年前期の地形であり、河合谷高原をはじめ、いたるところに高原状の原野がひらけて、頂上付近には噴火口跡と見られる凹地（通称穴ガ原）がある。安山岩地帯にはブナ・チシマザサ群落があったが、皆伐され残

存する原始林は極めて少ない。登山路にはイタヤカエデ・ミズナラ・ブナ、渓谷にはトチノキ・サワグルミ・フサザクラなどが多く、ザゼンソウ・タジマタムラソウもある。

また、広い山域には多様な種の動物が見られる。大型哺乳類はツキノワグマが生息し、ときに山麓部にまで現れる。その他、テン、ヤマネ、ニホンザルなどが見られるほか、イヌワシ、クマタカ、オオタカ、ハチクマなどの大型猛禽類をはじめ、落葉広葉樹林にはゴジュウカラ、コガラ、キバシリ、コルリ、オオアカゲラ、ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、渓谷部にはアカショウビン、ヤマセミ、オオルリ、オシドリ、クロツグミなどが生息する。さらに山頂部には、メボソムシクイ、クロジ、マミジロ、カヤクグリなど中部地方亜高山帯の鳥も見られ、鳥類は豊富である。

比較的よく調査が行われている昆虫類では、金属光沢をもち緑色に輝くフジミドリシジミ、アイノミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミなどのミドリシジミ類が多い。早朝の光を受けてキラキラ群飛する様は一見に値する。ムカシトンボなど貴重な昆虫も記録されており、甲虫類も多様と思われるが、多くの分野で調査が行われていない。

穴力原付近にはマンガン鉱の露頭があるといわれる。また、上地川上流では、ハコネサンショウウオとヒダサンショウウオが発見されている。

若桜町

若桜神社

若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より徒歩一〇分

若桜神社は、国常立命、伊弉冊命、誉田別命などを祭神とする、近世には松上大明神とか松神といわれて信仰された。

社伝によると、武内宿彌がこの地方に下向したときに参拝した古社と伝えられる。中世には、矢部氏、平師盛、**名和長年**、山名氏などが武運を祈って武具や所領を寄進している。

かつて鶴尾山八平谷に鎮座していたが、応安二年（一三六九）に、矢部氏は鶴尾山に鬼ケ城を築城する際、神社を現在地の松上山に遷座した。その後、兵火に遭い神社は焼失したが再建された。藩政期には、郡中大社として藩の祈祷所に指定され、社領一石余、蔵米も同額与えられていた。明治四年（一八七一）に現社名に改称された。

例祭は、焼餅祭りといい、氏子は餅を焼いて神社に供えた。これは祭神が分霊されて行かれる途中、氏子の家に立寄って焼餅を食べられたという故事によるという。祭礼当日は、供えられた焼餅の山を、神幸の先祓い役が袋に入れて参拝者に投げ与えたものだという。

史跡 鬼ケ城跡

八頭郡若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より徒歩約五〇分

標高四四六メートルの鶴尾山の山頂部から中腹に築かれた、中世～近世初頭の山城である。創築年代は不明であるが、鎌倉期以来、若桜の領主であった矢部氏によって築かれたもの。

若桜は但馬、播磨との国境に位置する枢要の地で、天正初年の尼子再興戦においては、織田氏を背後にもつ尼子方、但馬の武士たちと結ぶ毛利氏、双方にとって極めて重要な城であった。そのため、天正三・四年（一五七五・一五七六）ごろ、当城を舞台に両勢力が激しく戦ったが、その中で矢部氏は没落し、天正四年に城は毛利氏のものとなった。

その後、天正八年（一五八〇）、羽柴（豊臣）秀吉の因幡進出によってその手中に帰し、同九年の鳥取落城後は秀吉の家臣木下重堅が入城した。

木下氏は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦によって滅亡するまで、二十年ほど在城した。慶長六年に山崎家盛が入城したが、山崎氏も元和三年（一六一七）に備中成羽に転封になり、代わって池田光政が因幡・伯耆二国を領有することになった。現在の遺構は、木下氏が中世山城の山頂部に石垣をめぐらした近世的城郭を築き、山崎氏が大改修したものと推定されている。ただ当城は池田氏によって徹底的に破却された。今残っている崩れた石垣、埋められた虎口（出入口）は、厳しい破却の模様をうかがわせるもので、この点でも貴重な遺構である。

若桜神社社叢

八頭郡若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より車で二分

若桜神社は旧郷社で、その社叢は若桜町と八東町にある遠見山から北東にのびる尾根の先端、南東斜面に位置する。標高は二二〇～二八〇メートルで、シラカシが優占するみごとな照葉樹林である。

神社の石段下にスダジイの大木が一本あるが、ほかはシラカシの巨木で、胸高直径が九〇センチを超えるものもみられる。

ヒノキなどが混交し、植林とみられる部分もあり、自然な林の姿が多く残っているとはいえないが、鳥取県下でシラカシの多い林は少なく、山陰海岸地域の照葉樹林の典型的な植生として、昭和五十七年（一九八二）四月、県の天然記念物に指定された。

カリヤ通りと蔵通り

八頭郡若桜町若桜
若桜鉄道若桜駅より徒歩五分

若桜町は中世にできたまちで、鬼ケ城のもと城下町が発達したと伝わる。江戸時代には鳥取から播州に達する若桜往来の宿場町となり、町並みが整えられた。

カリヤと呼ばれる深い庇が道路に張り出している町家が、町並みの特色である。このカリヤの発生は明治十八年とさほど古くない。度重なる大火の教訓として、道を広げ、両側には水路を新たに設け、家の前には約四尺（一・二メートル）のカリヤを付けるようになった。カリヤの下には、火事の媒介となるもの、通路の妨げとなるものはいっさい置いてはいけないと取り決められた。また、カリヤの下は自由に通行することができ、雨の日や、雪深い冬の季節には通路として利用され、里謡にも「若桜よいとこ　水が裏表　カリヤづたいに　傘いらず」と唄われている。中尾家、君野家をはじめいくつかの住宅には今でもカリヤが残っており、往時の町並みを今に伝えている。

表通りがカリヤ通りと称されるのに対して、裏通りは蔵通りと呼ばれている。その名の通り、裏通りには道に面して妻壁を見せる土蔵が建ち並ぶ。蔵はほとんどが石積みの土台の上に建てられ、全てが瓦葺で燃えにくく、防火帯の役目も果たしていた。これらの土蔵は一つ一つ表情が異なり、若桜独特の蔵並みを形成している。若桜の町並みは、このカリヤ通りと蔵通りを合わせ持つところに特色がある。

若桜弁天祭

若桜町三倉
若桜鉄道若桜駅より車で五分

江島神社は、古くから「弁天さん」と呼ばれ、周辺の住民に親しまれてきた。九月の初めの巳の日に行われる例祭には、近郷近在の信者が、縁結びや商売繁盛を願って参詣する。

若桜町歴史民俗資料館

八頭郡若桜町
若桜鉄道若桜駅より徒歩一〇分

赤瓦に白壁の建物は、かつては若桜町の町中にあった旧若桜銀行本店

（明治四十年建築）を移築したもので、展示資料のみならず建物の空間から往時の生活を実感できる。

若桜銀行の前進は、明治三十年（一八九七）に設立された若桜融通合資会社である。明治三十八年（一九〇五）に名称を合資会社若桜銀行と改め、同四十年（一九〇七）には木材の町にふさわしく欅造りのりっぱな行舎を若桜町大字若桜三七三番地に新築し移転した。歴史民俗資料館はこの建物をそのままそっくり移築したものである。

資料館の隣には、県の保護文化財**三百田氏住宅**がある。また、その隣には近年増設された「たくみの館」があり、豊かな森林資源を利用して発展した町の木工芸の体験ができる。

三百田氏住宅

八頭群若桜町屋堂羅
若桜鉄道若桜駅より徒歩一〇分

三百田氏住宅は、もと若桜町吉川にあった民家である。吉川は住宅が約二百戸の大きな村で、三百田家は古くからこの村の庄屋をしていた家柄であった。元禄七年（一六九四）正月付けの文書「一代普請合力人数帖」が残っていて、現在の主屋の普請の過程を知ることができる。それによると、元禄六年（一六九三）十月から工事にとりかかり、延べ人数八百十九人、銀百三十六匁、米一石二斗五升が費やされ、翌七年三月末に完成している。

現在地（若桜町歴史民俗資料館の隣接地）に移築されたのは平成五年（一九九三）である。移築前には四方に下屋があり石置き杉皮葺き庇が付いていたが、移築を期に、建築当時の姿に復元された。

間取り形式は、奥の間、納戸、ザシキ（ヒロマ）のある典型的な広間型三間取で、当地方の十七世紀の民家の特色をよく伝えている。また、桁行が八間、梁間が四間のいわゆる「四八」（しはち）と称される民家であり、「三六」（さぶろく）が普通であった当時としては規模も大きい。座敷部分と土間（庭）部分はほぼ同じ幅で、土間境中央に大黒柱が立つ。大戸口の下手には厩がある。

昭和三十九年（一九六四）三月、県の保護文化財に指定された。

若桜郷土文化の里

八頭郡若桜町大字屋堂羅
若桜鉄道若桜駅から徒歩十五分

若桜森林公園のふもとに県及び町指定の文化財や文化伝習施設などの建物が並ぶ。この辺り一帯は**「若桜郷土文化の里」**と呼ばれている。

この中に建つ**「若桜町歴史民俗資料館」**は、明治四十年（一九〇七）に建設された銀行の社屋を昭和五十六年（一九八一）に移転復元したもので、豪商の面影を伝える土蔵造りの建物は町指定文化財である。

また、県指定保護文化財**「三百田氏住宅」**は、平成四年（一九九二）より約二年かけて吉川集落から移築された庄屋の家である。入母屋茅葺き屋根などの建築様式に因幡地方の特徴をうかがい知ることができる。

若桜町山村文化保存伝習施設「たくみの館」は、平成七年（一九九五）十月に若桜町のまち並みの特徴である**「蔵通り」**と**「カリヤ通り」**をイメージして建てられた土蔵造りの建物である。ここには町の文化、産業に関する資料の展示のほか、ろくろを使って木工体験のできる体験学習室などが設置されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　月曜日　祝日の場合はその翌日、年末年始
●問合せ先　☎〇八五八・八二・〇五八三

岩屋堂

八頭郡若桜町岩屋堂
若桜鉄道若桜駅よりバス一〇分、岩屋堂下車すぐ

天然の岩洞に設けられた堂は「窟堂」ともいわれ、平安初期の大同年間（八〇六～八一〇）の創建と伝えられ、妙見神光寺の一部であった。鎌倉時代前期に改築されている。昭和二十八年（一九五三）十一月に国の重要文化財に指定された。さらに昭和三十二年（一九五七）三月、解体復元修理して創建当時の姿にもどされた。

正面三間、側面四間で屋根は前方が入母屋造り、うしろが切妻造りで床下は舞台造になっている。角柱・舟肘木・隅木など大面とりで時代の

古さを示している。（面取りは古いほど大きくとってある）本尊は本朝三不動の一つ、因幡の「黒皮不動」として信仰を集めた不動明王で、伝説によると弘法大師の作といわれる。

神光寺は、弘仁年間（八一〇～八二四）には七堂伽藍を連ねていたというが、いくたびの火災により、岩屋堂だけが残った。現在は真言宗醍醐派不動院という。三仏寺投入堂・出雲鰐淵寺・蔵王堂などともに岩窟利用の舞台造りであり、密教系であるという点でほぼ同じ系列にあるものである。

氷ノ山

八頭郡若桜町春米
若桜鉄道駅よりバス二十五分、山頂まで徒歩一三〇分

県南東部若桜町と兵庫県との県境に位置する標高一、五一〇メートルの山。中国地方で**大山**に次ぐ高峰で、須賀ノ山とも呼ばれる。

氷ノ山は、昭和十年（一九三五）に須賀山と改名したとき、氷の越の北にある赤倉頭（二、二三二メートル）を氷ノ山として、その名を存続させた。けれども依然として、須賀山を氷ノ山と呼んでいる場合がある。一応、氷ノ山山塊全体を指すものと考えた方がよい。

伝説によると、昔、神祖神霊が鎮座され、それを祀るお宮があった。崇神天皇の時、神籬および磐境をたてて皇祖神霊を祀られ、さらに垂仁天皇の時には神宮を造営し、祭祀の料としてこの地を皇室の御料地としたという。今も「高天原」と呼ぶ場所や二ノ丸、三ノ丸の地名が残っている。また、氷ノ山と名付けたのは、昔、天照大神がこの地に一泊して、朝日の光が木の枝に光り輝いているのをみて、「日枝の山」と名付けた。それが後に〝豹の山〟となり、さらに〝氷ノ山〟となったといわれる。但馬側では、古くは「四箇ノ山」と呼んでいた。

東西に延びる中国脊梁山脈から、北へ向かって千メートル級の山並みを、**扇ノ山**などとともにつくっている。この山並みのほか鳥取・岡山県境周辺の三室山・那岐山・後山などを含む一帯が、昭和四十四年（一九六九）に**氷ノ山後山那岐山国定公園**に指定された。

氷ノ山の山体は広大で、特に兵庫県側の南から東側にかけては緩い傾斜の山麓がひろがっている。一方、北半分と鳥取県側の東山麓の斜面は開析が進み、急斜面に多くの谷が形成されている。鳥取県側では、この急斜面につづいて春米付近まで緩い傾斜の地形が高原となって広がり、古くからスキー場として利用されてきた。

氷ノ山は、須賀の山安山岩とよばれる普通輝石シソ輝石安山岩溶岩からなる。これらは鮮新世末あるいは更新世前期に形成されたといわれている。この溶岩は、山頂の東や南では前述の緩傾斜山麓をつくり、その延長は若桜町南東部の大段と呼ばれる緩傾斜地へと続き、さらに北方へ細長く延び、赤倉山・兵庫県鉢伏山（一、二二一メートル）を経て兵庫県瀞川山（一、〇三九メートル）へと続く稜線を構成している。

山麓にある春米集落内を流れる春米川に滝があり、滝の壁に普含寺泥岩層が露出している。この滝壺に、普含寺泥岩層の下位にくる諸鹿礫岩層の砂質泥岩が顔をのぞかせていて、ここから巻貝化石のビカリアが産出する。ビカリアは、熱帯～亜熱帯の汽水環境を示す示相化石として、また始新世～中新世を示す示準化石として貴重な化石である。

また、西日本では珍しく樹氷を見ることができる。しかし、ここの樹氷は、北海道や東北に見られる樹氷とは異なり、樹木にふきつけられた雪が氷結してできたものである。日があたり風が吹くと、パチパチ、キシキシと音がして氷ノ山の名物である。また、天然記念物イヌワシの生

息地として有数である。

一年を通じて登山をすることができ、鳥取県側の春米部落を起点としたワサビ谷コース、千谷コース、氷ノ越コースの三つと、兵庫県側の関宮町福定から氷ノ越コースに合流する四つが主なものである。

また、この地方は、中国地方第一の多雪地帯で、雪質が軽く、スキー場として定評がある。十一月下旬から四月上旬までスキーが可能である。平成十一年（一九九九）、県営「**響の森**」を中心としたリクレーション施設がオープンし、夏・冬を問わず多くの人が訪れる。

《氷ノ山の動植物》

鳥取・兵庫県境にまたがる標高一、五一〇メートルの中国山地第二の高山である。大山火山系のトロイデ式休火山である。山頂には火口沢を残している。地質は古生層・第三紀層の安山岩や集塊岩からなっているが、露岩は少ない。標高一、〇〇〇メートルあたりまでは人工植林のスギや、天然原生林のブナを始めカツラ・トチノキ・ナツツバキ・クリなどがある。その上は低木性のエゾユズリハ・ヒメモチなどや高山植物のコケモモ・タマガワホトトギスがみられ、頂上近くにはスギ・キャラボク・シナノキなどの優占種がみられる。頂上尾根には五月上旬まで雪があり、チシマザサの群生が一面に広がっている。

この植生に対応するように、鳥類では中部地方の亜高山帯に繁殖するメボソムシクイ、コマドリ、ホシガラスが分布している。また、ブナを中心とする原生林には鳥類ではクマタカ、コルリなど、哺乳類でツキノワグマ、ヤマネ、モモンガなど、昆虫類はアイノミドリシジミ、フジミドリシジミなど多くの希少種がいる。しかし、クマやイノシシは生活圏が人の生活圏と重なり問題が生じている。

諸鹿川渓谷

八頭郡若桜町諸鹿
若桜鉄道若桜駅より車で二〇分

扇ノ山の南東麓に源流をもち、若桜町若桜で八東川に注ぐ来見野川流域の渓谷。尾根をはさんだすぐ北側には細見川が平行する。尾根は扇ノ山火山の溶岩流でできており、来見野川は細見川とともに、この溶岩と基盤岩類との境界部を浸食して流れている。来見野川流域に分布する基盤岩類には、下流部に三郡変成岩や非変成古生～中生層、カンラン岩や角閃岩などの超塩基性岩、中流部には新第三系中新統鳥取層群の礫岩層や泥岩層、上流部に鮮新統照来層群の火山岩～火砕岩がある。

流域の最も奥の集落が諸鹿で、ここから上流、大鹿滝までが諸鹿渓谷の中心部となる。諸鹿の北、右岸上方には屏風岩と呼ばれる柱状節理の発達した扇ノ山安山岩溶岩の大岩壁がそそりたつ。

道路が途切れる標高四五〇メートル付近で、左岸側から木地山谷が合流する。この二股から上流の本流は本谷と呼ばれ、谷幅は狭く急峻なV字渓谷となり、標高八五〇メートル地点まで大小の滝が続く。これら諸鹿の七滝と呼ばれる滝を代表するのが、高さ約二〇メートルの大鹿滝である。滝の壁は下部にクリンカー部（溶岩流基底の破砕された部分）をともなう扇ノ山の安山岩溶岩でつくられている。滝壺へは、西側尾根上にひろがる広留野高原から下るのが最も近い。大鹿滝の上流標高八五〇メートル地点には、安山岩溶岩を覆うやはり扇ノ山火山の噴出物である玄武岩溶岩からなる無名の滝があり、ここから上流は勾配のゆるい穏やかな来見野川源流部となる。

諸鹿集落付近には硬く緻密な泥岩が産し、諸鹿石と呼ばれて硯や花台に加工され利用されてきた。諸鹿石は、鳥取層群の普含寺泥岩層が、これを貫く火成岩岩脈の熱により変質したものである。

わかさ氷ノ山ふれあいの里

八頭郡若桜町春米
若桜鉄道若桜駅よりバス二十五分、ふれあいの里下車、徒歩三分

わかさ氷ノ山ふれあいの里は、中国地方第二の高峰**氷ノ山**の豊かな自然を、登山、ハイキング、キャンプ、スキーなどさまざまな角度から体験できるように整備された。

平成十一年（一九九九）七月に開設された「氷ノ山自然ふれあい館・響の森」には、ブナ林を再現し氷ノ山の自然を紹介した直径二三メートル、高さ一〇メートルの日本最大のジオラマをはじめ、イヌワシに乗って氷ノ山を空から観察する「イーグルスカイシアター」などがある。氷ノ山の地形、動植物や自然のしくみについて楽しみながら学ぶことができる。

また、ここでは自然観察や自然講座のほか、木の実など自然の恵みを

使用したもの作りや雪山ハイキングなどの自然体験プログラムが実施されている。

●開館時間　（氷ノ山自然ふれあい館・響の森）午前九時～午後五時

●休館日　月曜日及び年末年始、十二～三月は月曜日～木曜日

●問合せ先　☎0858・82・1621

落折

八頭郡若桜町落折
若桜鉄道若桜駅より車で十五分

国道二九号が若桜町から兵庫境側の波賀町戸倉へ越える県境に位置する。標高は八九一メートル。幾つものカーブが続き長らく難所だった県境部分も、平成七年（一九九五）、新戸倉トンネルの開通によって峠の下を一気に抜けて県境を越えることができるようになった。トンネルの延長は一、七三〇メートル、標高は若桜町側で七〇九メートル、兵庫県側の波賀町側では七六三メートルである。

氷ノ山（標高一、五一〇メートル）山系の一角にあり、山懐も深く、谷筋にはミズナラやカエデの自然林が残る。五月の新緑、十月から十一月の紅葉、それぞれに美しい。

落折集落は平家の落人伝説の山村であり、平の名字が多い。また、木地師の里でもあった。峠の前後は林業地であり、あちこちに杉木立をみる。特に戸倉側には「複層林施業地」という看板のある国有林の展示林があり、大径木の杉が林立する様を間近にみることができる。

鳥取市と姫路市を結ぶ国道二九号は古くから播磨往来と呼ばれ、姫路、大阪方面への最短コースであった。しかし、急坂の続く難所でもあり、鳥取藩の参勤交代の道は智頭町の志戸坂峠（今の国道三七三号）が使われてきた。現在、県内では九号につづく小さい番号に認定されている。この背景には明治以来の地元の熱意があり、今も「ルート二九」と呼ばれ、地域活性化の軸となっている。

冬季はスキー街道となり、若桜町側の「氷ノ山スキー場」、あるいは波賀町側の三つのスキー場へのアクセス道路となる。また、「八東」、「波賀」、「南波賀」、「一宮」、「山崎」と連なる道の駅街道でもある。地元産物のショッピングを楽しみながら、峠を行き交う人々が絶えない。

平家伝説

平家の落人が人目を避けて山間僻地に逃げのび、そこに住み着くという平家伝説は、県内でも岩美郡国府町、岩美町、八頭郡若桜町、佐治村、郡家町、倉吉市、東伯郡三朝町などの山間部に伝わる。

兵庫県境に近い若桜町の集落・**落折**は、郎党をつれた平経盛が当地で自害したと伝えられている。一説には氏神、舟河原明神は経盛の霊を祀っているという。集落内には、他にも経盛の墓所、位牌、身を隠したという洞窟がある。

落折のイチイ

八頭郡若桜町落折
若桜鉄道若桜駅より車で十五分

国道二九号沿い、**落折**集落のほぼ中央に、平家の残党・平経盛の墓がある。その脇にイチイの雄の大木が植えられている。樹高約六メートル、胸径七〇センチ、枝張り東西一四七・五メートル、南北六メートルあり、地方有数の巨樹である。

細見渓谷

若桜鉄道丹比駅より車で十五分

八東町の東端部を流れる細見川がつくる渓谷。細見川は流長約一三キロメートルで、**扇ノ山**（一、三〇九メートル）山頂南の源流部から八東町富枝まで流下し、八東川と合流する。

若桜町との町境に沿って延びる尾根をはさんだ南東側には、**諸鹿渓谷**をつくる来見野川が並行して流れている。細見川の上流部は、新第三紀鮮新世の照来層群に属する寺田安山岩層（鳥越火砕岩層ともいう）を浸食しながら流れ、流域には火砕岩や溶岩類が分布する。広留野登口付近から横地付近までの中流域では、左岸側で**扇ノ山**溶岩に、右岸側で寺田安山岩層に覆われて新第三紀中新世の鳥取層群普含寺泥岩層および諸鹿礫岩層がみられる。この下流の妻鹿野から横地にかけては、古生層を貫く角閃石ハンレイ岩や角閃岩および蛇紋岩化したカンラン岩が分布する地域に変わる。

妻鹿野の発電所前の渓床には、長

径五センチに達する巨大な角閃石をもつ角閃岩がみられる。また、横地付近のカンラン岩は蛇紋岩化が著しく、地滑りの原因となっている。横地を過ぎて下流域に入ると谷幅が広がり、細見川は谷底平野を流れるようになる。下流域では、左岸側に扇ノ山溶岩の安山岩が、右岸側には古生代から中生代初期にわたる三郡変成岩の千枚岩類が分布する。細見渓谷の中流域から上流域が渓谷と呼ぶにふさわしい景観を見せている。

用瀬町

三角山

八頭郡用瀬町用瀬
ＪＲ用瀬駅下車より徒歩一〇〇分

用瀬町の東方にある標高五一六メートルの三角型の山。別名を頭巾山ともいう。頂上には峰錫権現を祀る三角山神社があって、夏祭りには多くの参詣客でにぎわう。

三角山は中生代末の花崗岩からなり、傾斜は緩いところで五十～五十八度、急なところで七十二度と急峻な傾斜をもつ。この形はもともとにあった花崗岩が、風化し、大量に浸食されて、浸食に強い未風化の岩盤が尖峰のように残ったためである。三角山から南方の**洗足山**にかけては、同様の花崗岩質の山が見られる。

一の谷公園

八頭郡用瀬町用瀬
ＪＲ用瀬駅より徒歩一〇分

国道五三号沿いの用瀬町役場横から千代川対岸に**「流しびなの館」**を見て街中に入る。上方往来で栄えた宿場町の面影を色濃く残す旧道を行くと、猿田彦命を祭る**三角山神社**のある頭巾山（標高五一六メートル）を仰ぎ、東井神社の石段下に行き着く。右手の上口から山裾を巻くように歩道が整備されており、ヒノキ林内を抜けると一面にミツバツツジ園が広がる。毎年四月中旬頃が花盛りとなり、ぼんぼり提灯に照らされた淡く赤みを帯びた山腹の姿は幻想的で美しい。公園の上にある展望台からは、用瀬の町と**千代川**の川筋を一望することができる。近くには、同じくツツジで有名な愛宕山公園、戦国期の山城の**影石城跡**があり、一帯は森林公園として遊歩道が整備されている。町内には句碑・歌碑が多く、それらを訪ね歩く「散歩径」が楽しい。公園内には、谷口雲崖の「頂へ径まだ半ば花こぶし」がある。

三角山神社

八頭郡用瀬町用瀬
ＪＲ用瀬駅より徒歩十五分

用瀬町の東にそびえる険しい山、**三角山**はその山容から頭巾山ともいう。三角山神社はこの山頂に鎮座し猿田彦命を祭神とする。近世には峰錫権現といった。怪石巨岩の連なる修験の神社である。

天正九年（一五八一）の秀吉因幡攻めの折に兵火に焼かれた。現本殿は弘化二年（一八四五）に再建されたが明治四十年（一九〇七）に本殿を西向きに建て替えられた。

『因幡志』には、「…麓より本社まで十八町、山路は嶮し、……山下に垢離場、女人堂ありて、それより山中婦人を入れず…」とある。また、祭日には、信者は堂に泊り、願の成就した者は小石を手向けて礼にしたという。

一説には、天孫降臨のとき、猿田彦命が日向高千穂峰に行く前に、当山に寄りしばらく住んだので、「御栖山」といったのが、三角山になまったといわれている。

もちがせ流しびなの館

八頭郡用瀬町別府
ＪＲ用瀬駅より歩いて五分

用瀬町は、智頭川と佐治川が合流し千代川になる所に位置し、町では、毎年旧暦の三月三日に無病息災を願い、千代川に雛を流す行事が行われており、全国的にも知られている。

「流しびなの館」は、金閣寺を一部模した木造の建物である。

全国から集められた珍しい江戸時代からの雛人形、竹田人形、押絵雛など約六〇〇点が展示されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　水曜日、祝日の翌日

●問合せ先　☎0858・87・3222

ひな流し

八頭郡用瀬町別府
JR用瀬駅より徒歩五分

県東部地方では足利時代のころから旧節句には流しびなをする習慣がある。流しびなは、元来、人の災厄を除くためにこの人形を身代わりとして、災厄を背負わして流した。県内では用瀬町と鳥取市で現在も行われている。

用瀬町では、旧暦の三月三日、千代河原の「ふれあいの水辺」で古式ゆかしき行われる。祈祷神事の後、古くなった雛人形を焼き、古い雛人形が家を離れることに感謝し、はらい清める神事「雛のお焚きあげ」が行われる。

着飾った幼女や観光客が紙雛を乗せた桟俵を**千代川**に流しこれから一年間の幸せを祈る。

また、流しびなの日は、町内の家庭で雛飾りが公開される。

物産　用瀬町物産観光センター

八頭郡用瀬町別府
JR用瀬駅より徒歩五分

「流しびなの館」の隣に建つ。町内外の物産の展示即売をはじめ、談話室、休憩室、月見台などがあり、ゆっくりとすごすことができる。

●開館時間　午前九時～午後六時
●休館日　月曜日（祝日の場合はその翌日）
●問合せ先　☎0858・87・3220

史跡　景石（かげいし）城跡

八頭郡用瀬町用瀬
JR用瀬駅より徒歩三〇分

標高三二五メートルのお城山に築かれた中世の山城。用瀬集落との比高は二五〇メートルほどある。山頂部とそこから西に伸びる尾根上に数段の曲輪（くるわ）（削平地）があり、山頂部の曲輪は石垣で囲まれていたと推定されている。麓の谷の奥に屋敷跡とされる数か所の平地がある。

当城の初見は、延文五年（一三六〇）に赤松氏が影石城等を攻め落としたという、『太平記』の記事である。戦国期には用瀬氏の居城であったようであるが、天正年間（一五七三～一五九一）の初めから、山中鹿之助（やまなかしかのすけ）らと毛利氏の合戦に巻き込まれて、何度か戦いが繰り返された。さらに天正八・九年（一五八〇・一五八一）の羽柴（豊臣）秀吉の因幡攻略の際には、両方にとって戦略上の要地として、争奪戦の舞台となった。

十八世紀末の『因幡志』には、鳥取城の開城後、秀吉方の磯部兵部太輔という武士が城主として入ったと記している。用瀬町指定史跡。

文学の小径（こみち）

八頭郡用瀬町下町
JR用瀬駅より徒歩一〇分

用瀬町下町踏切のそばに立つ松尾芭蕉の句碑から用瀬小学校下の岸本正一歌碑までの通学道路、約一キロメートルを中心に文学碑や史跡記念碑が並ぶ「文学の小径」がある。

用瀬町は、古くから宿場町として栄え、文芸家や絵かきたちが多く訪れ、足跡を残している。そんな先人たちの文学碑を建てて顕彰し、町民の文化的関心を高めようと昭和五十七年（一九八二）、「用瀬文学碑建設の会」が町民の有志によって設立された。**種田山頭火**（たねださんとうか）や**田中寒楼**（たなかかんろう）らの文学碑が二十二基、史跡記念碑も十四基設けられている。この「文学の小径」は「もちがせの散歩道」とも呼ばれ、流しびなの里のもう一つの魅力となっている。

この道路に面して、大善寺・正覚寺・円教寺（用瀬三寺）と、氏神の東井神社が並び、さらに町立図書館と郷土館が建っている。

大安興寺（だいあんこうじ）

用瀬町鷹狩
ＪＲ因美線鷹狩駅より徒歩一〇分

大安興寺は、山号を医王山といい、真言宗に属す。高野山親王寺の末寺である。本尊は行基（ぎょうき）の作といわれる薬師如来である。

大化元年（六四五）、伝道仙人によって医王山の山上に開かれたと伝えられる。和銅二年（七〇九）行基により整えられ医王山大安興寺の称号を賜うとされる。また、その他の文書からみても、散岐（さぬき）郷内の熊野修験の拠点になっていたことがうかがわれる。

永正十一年（一五一四）、当寺は城郭としても用いられたため、万巻の経巻と共に兵火に焼失した。その後も、再興と焼失をくり返した。

一時、鷹狩（たかがり）村内にあったが、寛文十二年（一六七二）、医王山の山腹に移された。近世には藩の祈願寺にもなった。昭和三十七年（一九六二）の火事で焼失、現在は山麓に本堂が再建されている。

寺蔵の絹本著色釈迦十六善神（けんぽんちゃくしょくしゃかじゅうろくぜんしんぞう）像は県指定の文化財であり、また幕末に西郷隆盛と僧・月照が当寺に身を寄せたという言い伝えがあり、月照の短冊が残る。

犬山神社叢

八頭郡用瀬町宮原
ＪＲ因幡社駅より徒歩で五分

犬山神社叢は、篭山（九〇五メートル）から伸びる尾根の末端に位置する。標高一四〇～一八〇メートルの急峻な斜面にみられる原生林的照葉樹林で、昭和六十年（一九八五）二月に県の天然記念物に指定された。

社叢全体はスダジイの大木で覆われているが、とりわけ社殿周辺の尾根部分はスダジイの巨木が多く、北側傾斜にはシラカシ、ウラジロガシなどの照葉樹も混交している。

この社叢の北側斜面にはイヌブナがみられ、胸高直径四〇～六〇センチの大木が六本ほどあって樹幹にはマメヅタ（シダ植物）が着生している。

また、希少種のツクバネガシも一本みられ、樹高は一五メートル、胸高直径は四〇センチの大木である。そのほかミズメなど、**千代川**の谷筋の冷涼効果により、二〇〇メートル以下の標高ではあまり見られない樹林が混じる。自然やその地域の気候を反映した自然林として貴重である。

江波の三番叟（えなみのさんばそう）

八頭郡用瀬町江波

毎年十月二十二日に近い日曜日、江波神社の例祭日に境内にあるまわり舞台で上演されている。「三番叟」は化粧をした男の子が曲芸のように上体を反らしながら舞う。

江戸時代の中頃、大坂の商人が歌舞伎とともに伝えたといわれている。本来、集落内の総領だけに伝承されて、村祭りの歌舞伎の前座に祝儀として舞ったほか、病気平癒、安産祈願などに願立てをして舞ったものである。

他に類例を見ない芸能であり、農村歌舞伎の地方への伝播を知る上で価値が高いことから、平成六年（一九九四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

洗足山（せんぞくざん）

ＪＲ用瀬駅より徒歩一二〇分

八頭郡用瀬町南部にある標高七三六・三メートルの山。北方の**三角山**（みすみやま）から連なる花崗岩山地の最高峰。花崗岩の風化浸食によって残丘状に切り立った山容を見せる。西面の山麓には平坦な浸食面があり、東側は北流する赤波川によって深い谷が形成されている。

山の名の由来は因幡誌に「千賊山」と記されていることや用瀬町金屋の「千賊の岩屋」の伝説と関係があるようだが、詳細は定かでない。

中津美渓谷（なかつみけいこく）

八頭郡用瀬町屋住
ＪＲ因幡社駅より車で二〇分

八頭郡用瀬町の南部、中津美川がつくる渓谷。中津美川は、**千代川**支流の安蔵川に注ぐ小規模の河川である。岡山県との県境、黒岩高原の北斜面に源流があり、そこから北東に約四キロ流下して、用瀬町山口と下屋住の間で安蔵川と合流する。中津

美渓谷と呼ばれる範囲は明確ではない。

渓谷は、黒雲母アダメロ岩を主とする用瀬花崗岩の分布地帯を浸食し、多くの滝や淵が形成されている。支谷を多く集めることから八百八谷ともいわれる。渓谷の下流部には、かつて八頭鉱山があり、用瀬花崗岩中の石英脈を採鉱する珪石鉱山として稼行していたことがある。なお、用瀬花崗岩は節理の発達が弱いため割れ目の少ない良質な石材となり、山口北の安蔵川沿いで現在も大規模に採石されている。この石材は、この付近の旧地名である社（やしろ）村にちなんで、「やしろ石」あるいは「やしろみかげ」と呼ばれる。安蔵川との合流点の渓谷入口から、約二キロ上流まで林道があり、車も乗り入れることができる。

赤波川渓谷（あがなみがわけいこく）

八頭郡智頭町・用瀬町
ＪＲ鷹狩駅より車で十五分

赤波川は八頭郡智頭町・用瀬町を流れる**千代川**の支流で一級河川。智頭町沖ノ山（標高一、三一九メートル）に源を発し、用瀬町鷹狩字馬橋で千代川に合流する。流長一五・三キロメートルで、大部分は三郡変成岩地帯を流れるが、一部中生代白亜紀末期の用瀬花崗岩地帯を流れる。距離にすると一・二キロメートル余りであるが、この区域を赤波川渓谷と呼んでいる。

この渓谷の両岸には花崗岩の絶壁が切り立ち、河床勾配のきついＶ字谷を形成している。また、この渓谷には、花崗岩の巨礫やポットホール（おう穴）と呼ばれる浸食地形が多数見られ、美しい景観を楽しむことができる。ポットホールの数は、調査されたもので三十を越え、規模が小さいものや水中にあるものを含めると数えきれない。渓谷一体が赤波川おう穴群となっている。

ポットホールは、溝状（長楕円形）のものやホールの縁や底が複雑な形をしたものが多く、円球状のものは少ない。大きなものは深さ三メートルを越える滝つぼ状になったものや、穴の底が段上になったものなどが見られる。いずれにもホール内壁面はきれいに浸食されている。ポットホール以外にも花崗岩が節理に沿って浸食を受けた長い溝状の地形や何段もの階段状になった河床が観察でき、夏は川遊びに適している。

佐治村

田岡神社社叢

八頭郡佐治村津無（つむ）
ＪＲ用瀬駅よりバス一〇分、津無下車、徒歩三〇分

津無集落の上方、標高約三〇〇メートルの山地の緩い傾斜地にある小規模な社叢である。

社殿の周囲にある数本のケヤキの大木は、植えられたものと推定される。樹林となっているのはヤブツバキで、この中にシロダモやタブノキの若木が混じる。この樹林はもとはタブノキ、ツバキ林であったと推察されるが、ツバキ以外のものは伐採された可能性が高い。

この樹林の中の樹高一八メートル、胸高直径七三センチメートル、樹齢三百年のヤブツバキの巨木はひときわ目立つ。このほか、境内には約三十本のツバキの若木が林をなしており、いっせいに咲きそろう姿はみごとで、昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

和紙工房「かみんぐさじ」

八頭郡佐治村福園
ＪＲ用瀬駅より車で約二〇分

今も昔ながらの和紙製造の技法が

続けられている佐治村は、画仙紙の生産量では全国の六〇パーセントを占めている。

ここでは自分だけの作品づくりを通して、伝統工芸品の手すき和紙や紙すき作業について知ることができる。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
●休館日　水曜日
●問合せ先　☎０８５８・８９・１８１６

さじアストロパーク

八頭郡佐治村高山
ＪＲ用瀬駅より車で約二十五分

さじアストロパークは豊かな自然の山々に囲まれ、その上空には美しい夜空が広がる。

天文台に設置された国内最大級の口径を持つ反射望遠鏡や太陽望遠鏡で、宇宙の神秘や太陽の活発な活動を観察したり、プラネタリウムで幻想的な宇宙体験や星の物語を見たりすることができる。また、夜間観望会では、解説を聞きながら四季折々の星を楽しめる。

パーク内には、観測設備を備えたコテージやペンション、レストランがあり、ゆっくりと観測することができる。

●開館時間
四～九月：午前九時～午後一〇時
十～三月：午前九時～午後九時
●休館日　月曜日、祝日の翌日、年末年始、毎月第火曜日
●問合せ先　☎０８５８・８９・１０１１

林泉寺

佐治村高山
ＪＲ用瀬駅よりバス十五分、佐治村役場前下車、徒歩十五分

林泉寺は、山号を月光山といい、曹洞宗に属し、本尊は釈迦如来である。応永二十年（一四一三）の火災によって古文書類焼失したため、開山などについては一切不明だが、開かれた当時は、村内福園の山中にあって香泉寺といったと伝えられる。

応永二十三年（一四一六）、高山の中谷久兵衛が再興したとの説があるが、同寺の碑には「応永廿三年祝融灰尽」とある。

天正九年（一五八一）、羽柴（豊臣）秀吉の因幡攻めの際に焼かれた。これには次のような言い伝えがある。寺で打つ晩鐘を聞き、寺の存在を知った秀吉軍が引返して焼打ちした。なお、鐘の音を聞いた所は「聞尾谷」だったといわれる。

また、このとき和尚は、過去帳や文書類を作州化生寺（現勝山町）に運び、寺宝の漆千杯、朱千杯、蕨縄千束、金鶏のつがいを、「朝日さす、夕日輝く椿の下に埋めた」という長者伝説も伝える。

正和四年（一六四七）、村内宮ノ元に寺を移し、貞享元年（一六八四）に天徳寺（現鳥取市）の八世通翁を招いて開山とし、寺号・宗派を現在のものに改めた。寛保二年（一七四二）に焼失し、同三年に現在地に移された。

佐治村民俗資料館「民話の里」

八頭郡佐治村福園
ＪＲ用瀬駅より、バス十五分、役場前下車すぐ

明治、大正時代にこの地方で使われていた農・林業用具や和紙製造用などの古い民具が展示されている。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
●休館日　土・日曜日、祝日、年末年始
●問合せ先　☎０８５８・８８・０２１８

余戸の雨乞踊

八頭郡佐治村余戸

余戸に伝わる風流踊。雨乞いによる降雨に対するお礼として奉納された。約百人の踊子が八時間かけて踊る。

起源は、当地区の金山神社氏子である女人が宮中に出仕、十二あった踊りのうち八つを村に持ち帰ったと伝えられている。現在伝えられている衣装には、元禄時代の風俗さながらのものがあり、当時の風流踊を考える上で貴重な資料である。

昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。しかし、後継者不足で近年奉納されていない。

佐治川石

八頭郡佐治村に産する鑑賞石。佐治村加瀬木付近に分布する三郡変成岩帯の緑色千枚岩中に産する。源岩は凝灰角礫岩とみられ、白亜紀の花崗岩の貫入による接触変成をうけ、堅く緻密な岩石に変化している。岩石全体が暗緑色で凹凸に富んだ外観である。自然の山水風景を想わせるような趣を持ち、庭石や水石として鑑賞に供されている。

佐治川石は、佐治村細尾から加瀬木にかけての佐治川からやや離れた南岸山地のごく限られた区域に分布する。佐治川周辺は自然環境保全地域に指定されて、特に佐治村森坪から余戸の間は特別地域として採集などは禁止されている。なお佐治川石は、佐治村役場中庭にある「黎明の

庭」や佐治川の河川敷にある「佐治川石公園」で鑑賞することができる。

飯盛山

八頭郡佐治村津無
ＪＲ用瀬駅よりバス十二分、山頂まで約四キロ

標高五六〇メートルで、**三国山**東部末端に位置する。飯を盛ったような山体をしているのでこの名がある。山はコナラ・クリ・リョウブなどの落葉広葉樹の二次林におおわれ、ナシなども栽培されている。

山王渓谷

八頭郡佐治村中
ＪＲ用瀬駅よりバス三十六分、中下車、徒歩約二〇分

佐治川の支流山王谷川にかかる山王滝を中心とする渓谷。山王滝は、山王谷川の標高四五〇メートルのところにある滝で、基盤岩は三郡変成岩中の珪質千枚岩である。滝の落差は一五メートル、上部が浸食により三段の滝となり、滝つぼは幅二〇メートル、奥行一五メートル、深さ約二メートルの楕円形となっている。山王滝下流には、村営のたんぽり荘、山王谷キャンプ場などがある。また、近くには県営佐治川ダム・青少年旅行村などのハイキングコースがあり、春の新緑、秋の紅葉のシーズンは観光客でにぎわう。

佐治川渓谷

ＪＲ用瀬駅より車で二十五分

佐治川は岡山県境の**辰巳峠**に源を発し、用瀬町別府で**千代川**に合流する一級河川。佐治川の右岸は三郡変成岩の黒色片岩、左岸は珪質片岩の地層が分布し、佐治村を西から東に向かって流下する。佐治村尾際から余戸にかけては、蛇行したV字谷となり、佐治川渓谷と呼ばれる。

流域には、山王谷川、北谷川、木合谷川、津無谷川などの二十余りの支流があり、尾際の「猿渡り渓谷」は見事なV字谷渓谷をなす。また、尾際には、この峡谷地形を利用して昭和四十七年（一九七二）に佐治川ダムが建設された。

この他にも、標高一、二〇三メートルの高鉢山（山を南側から見るとかぶとの鉢のような形に見えるからこの名がある）、**氷ノ山後山那岐山国定公園**内にある三原高原、佐治川の支流西谷川にかかる亀滝、木合谷川上流にかかる不動滝など、見所が多い。

辰巳峠

八頭郡佐治村栃原

国道四八二号が佐治村栃原から岡山県上斎原村恩原へ抜ける県境に位置する。標高は七八六メートル。田住峠あるいは田角峠ともいう。国道五三号を用瀬町の**流しびなの館**付近で別れ、急峻なV字型渓谷の佐治川をさかのぼる。**さじアストロパーク**、和紙の里、茅葺屋根の**佐治村民俗資料館「民話の里」**、佐治川ダムと通り、栃原の集落を過ぎて山に掛かる。道路を覆うばかりのトチノ木の大木に出会うと峠は近い。一帯は不動山国有林を称し、トチノキの樹林は県の天然記念物に指定されている。

峠には、駐車場が設けられ柵から手を差し伸べると届くばかりにトチノの木の枝が広がる。ここまで登ると灰色肌のブナの木も混じる。また、道路脇には国府町出身の文学者・**野村愛正**（一八九一～一九七四）の「花栃や国境の道百折す」の句碑がある。

峠を越えて岡山県に入るとそれまでの急坂が嘘のようになだらかな恩原高原となる。恩原から**人形峠**を経て遠くは**蒜山高原**、さらに**大山**へと山岳ドライブが楽しめる。国道四八二号は京都府の宮津市を起点に、丹波山地と中国山地の山間部を踏破し、国道一八一号を経て米子市までを結ぶ雄大な山岳道路である。

なお、佐治村からの山越えは、昭和三十五年（一九六〇）に国有林との併用林道として開設され、その後県道、主要地方道を経て、国道に認定されたものである。江戸時代にはトチ、ブナ、カエデを使った木工が盛んで、木地椀やかぶり笠の産地として名をなした。その後、木工生産は廃れたが、天然林の深い渓谷に往時の面影をしのぶことができる。

三国山（みくにがせん）

ＪＲ用瀬駅より栃原行バス三十六分、山頂まで約一〇キロメートル

八頭郡佐治村、東伯郡三朝町、岡山県上斎原村の境にある標高一、二一三メートル（三角点は一二五二メートル）の山。一帯は花崗岩と三郡変成岩の基盤の上に安山岩がおおって、東西一五キロ、南北一五キロに及ぶ山塊を形成する。山の周囲の谷は深く、急流や滝が多い。山麓には山王滝、恩原牧場（岡山県）などがある。

佐治谷ばなし

昔から佐治村に伝わる話で、その内容は、日常のことを題材にした笑いを誘うユニークなものが多い。

現在、語り部の人たちによる伝承活動のほか、狂言で演じるなど新たな取り組みも行われている。

民話

親類の家に行った若者が、そこで食べたものがあまりにおいしかったので、その家の人に「これは何というものか」と尋ねると、「たんごだ」と答えた。

若者は、家でも作ってもらおうと思い、名前を忘れないようにするため、帰り道、「だんご、だんご、だんご」とつぶやきながら歩いていた。しかし、小川に出くわした。それを飛び越えるため、若者は「えいっ」と叫んだ。「えい、えい」とつぶやきながら帰った若者が、母親に「えいを作って欲しい」と言うと、母親は「えいとは何だ」と尋ねた。すると若者は「あのうまいえいを知らんだか」といって母親を棒でたたいたため、大きなコブができた。母親は、「お前がたたくからだんごのようなこぶができたがな」と歎いた。

若者はそれを聞いて、「ああそのだんご、だんご」といったそうな。（佐治谷ばなしより）

智頭町

諏訪神社（すわ）

八頭郡智頭町智頭
ＪＲ智頭駅より徒歩十五分

諏訪神社は、健御名方神（たけみなかたのかみ）・木花咲耶姫命（このはなさくやひめのみこと）など十六神を祭神とする。弘安元年（一二七八）に、信濃国（現長野県）の諏訪大社より分霊を勧請（かんじょう）したと伝えられる。

諏訪大明神といって、軍の神・鎮火の神として崇拝されてきた。蒙古襲来の時は敵国調伏を、建武中興の時は、後醍醐（ごだいご）天皇が鎌倉調伏を祈願されたと伝えられる。

江戸時代は藩主の祈願所にもなっていた。維新の時に現社名に改められた。

当社では、御柱祭（おんばしらさい）（四柱祭とも）という本殿の四隅に立つ杉の柱を立て替える神事が行われる。この神事は、天明二年（一七八二）、智頭宿大火の後、鎮火を願って信濃国諏訪大社にならい、寅年と申年、つまり六年毎の四月に、酉の日を選んで行われるようになった。

当日の未明、白シャツ白ズボンの若者達が山に入り、予め決めてある五～六十年生の杉の大木四本を、二丈六尺の長さに切り出し、ムカデという台座四台に載せて飾る。一台あたり台座と杉の重さは、約六〇〇キログラムにもなる。これを若者二百人が四組に分かれ、太鼓・幣振りを合図に、担いで山から降りる。四組は出合わないようにしながら、「ワッショイ」の掛け声と共に、約二時間かけて町中をくまなく練り歩く。午後、いっせいに神社に上り、境内に木四本を並べ、皮をはぎ、塩で磨き、くじで決められた東西南北に、各柱を立てる。

この祭りは、かつては信濃国大社と同様に、荒っぽい祭りで、けが人が多く出たという。最近は穏やかになったが、それでも擦り傷・ねんざなどのけが人が絶えない。

また、昔は例祭の日、智頭宿の五・六歳の男子のいる家では、一種類の道具で飾り物を作る一式飾りが作られ、通路に面した部屋に飾り、通行人の目を楽しませたものだという。

智頭の町並み

八頭郡智頭町智頭
ＪＲ智頭駅より徒歩十五分

鳥取から南に約三〇キロの距離に

ある智頭は、江戸時代には上方往来から備前（作州）往来が分岐する要衝の地で、鳥取藩の重要な宿駅として本陣・制札場・御茶屋などが設けられ、目付も常駐した。

上方往来が通る主往環は、上から下に緩やかな坂になっており、往環の左右、人家の軒下には水路が走り、豊かな水が絶えまなく流れている。道沿いには江戸末期の道標や、明治時代の「町火消頭領」の碑が建っている。

また道の両側には伝統的な町並みが続いており、今も諏訪酒造、塩田旅館などの町家が残っている。特に目に止まるのは、智頭往来の中央部に位置する木綿屋米原家と塩屋石谷家の建物である。明治の後期に建てられた米原家住宅は、木造二階建入母屋造り、木部は黒漆塗で、家構えは重厚である。備前往来の分岐点に位置するこの建物は、智頭宿の要となる建物である。石谷家は主往環の中央部に位置し、江戸時代には大庄屋や宿場問屋をつとめた。大正時代に建築された現在の家屋はさほど古くはないが、智頭杉をふんだんに用いた普請は、贅を尽くしており、智頭の誇りであり「樹精の宿り」とも称されている。杉の町として県内外に知られる智頭町では、深い緑に包まれた伝統的な町並みを「杉源郷（さんげんきょう）」として位置付け、町並みの保存と再生に力を注いでいる。建物の質も高いだけに、これからの保存活動には大きな期待が寄せられている。

石谷家（いしたにけ）住宅

八頭郡智頭町智頭
ＪＲ智頭駅より徒歩十五分

石谷家はいくつかの分家とともに智頭の町並みの中央部に位置し、間口も広く、智頭宿における中心的な存在であった。屋号を塩屋といい、宿場問屋をつとめ、智頭郡の大庄屋にも任ぜられたこともあり、明治以降はこの地方きっての林業家になった。

現存する建物群は大正十年（一九二一）、衆議院議員、貴族院議員をつとめた伝四郎の代に着工したもので、主屋は昭和二年（一九二七）に竣工し、その後順次完成したものである。

屋敷は正面中央に冠木門を設け、周囲を板塀や土蔵で囲い、その中に主屋をはじめ多くの建物を連結して邸宅の構えとしている。主屋は入母屋造、南北に棟を延ばす民家風住宅で、北側を土間とし、吹き抜けで屋根裏を見せる。一抱えもある大梁を縦横に組み、その上に束を立ち上げ貫を通すその小屋組は圧巻で、林業家の主屋ならではの豪快な造りである。南側に展開する客間も豪華で粋を凝らし、大きな池をうがった広い庭園と一体になった豪放さをつくりだしている。

石谷家住宅は、大小およそ二十棟にも及ぶ建物を抱える広大な邸宅で、全体によく管理されている。近世から近代にかけて、この地域に築かれた文化の一端を知るうえで、欠くことのできない遺構であり、平成九年（一九九七）七月に国の登録文化財となり、平成十二年（二〇〇〇）六月には町の保護文化財になった。現在、建物の主要部分が公開されている。

杉（すぎ）神社

ＪＲ智頭駅よりバス五分、杉神社前下車、徒歩五分

一風かわった神社で、スギの霊を祭ったところはちょうど、ナシの原木を祭神とした木の実神社とよくにている。

中国地方は、東西に中国山地が走り、鳥取県の総面積の約八〇パーセントが山地である。必然的に林業が発達し、全国的にみるとそのスケールは小さいが、県の重要な産業の一つであり、県内では特に八頭郡・日野郡地方が盛んである。なかでも八頭郡地方は質量とも優秀なスギを産出している。林業を専業とする人たちのスギへの信仰が、具体的に表されたものが杉神社である。

昭和二十八年（一九五三）十月、スギ生産の中心地である八頭郡智頭町に建立された。神社はスギを象徴的に型取った高さ一二メートル一二センチの三角塔で、拝殿もなければ本殿もない。山の緑に白く映える社殿は、他の神社とは異なった荘厳な

雰囲気をかもし出している。祭日は毎年十月の第一日曜日である。

神社は智頭から志戸坂峠をこえて、津山・岡山・姫路へぬける国道から五分の山合いにある。

虫井神社

智頭町大呂
ＪＲ智頭駅よりバス二〇分、虫井神社前下車すぐ

虫井神社は、里人大明神（妙見社）、都々良麻大明神、（三滝さん・蔵王権現社）荒海大明神（同社）の三神三社を祀る古社である。

景行天皇の時代に、この地の夷住山に住む夷が天皇の命令に背いた。そこで、天皇の命により武牟口命が平定した。このとき武牟口命に槻の弓と八枝を献じたと伝えられる「荒海」「里人」「都々良麻」のことであるといわれる。

嘉慶元年（一三八七）にこの三社を夷住山より山下に移した。近世には妙見社といわれ、山形郷（現智頭町山形地区）の総産土神・智頭郡中の大社として信仰された。

明治元年（一八六八）に現在名に改称され、周辺小社を合祀した。大正十年（一九二一）に現在地に神社を移し、新築された。

五穀の害虫駆除・風雨適順などの霊験著しい社として、岡山・兵庫県を含めて周辺の農民が多く参詣した。祭礼（十月二十八日）である花籠祭りは、平成二年（一九九〇）に県の無形民俗文化財に指定されている。このとき「背負い花籠」が奉納される。

虫井神社社叢

八頭郡智頭町大宮
ＪＲ智頭駅よりバス二〇分、虫井神社前下車すぐ

虫井神社は旧県社で、その社叢は、智頭からおよそ一〇キロメートル奥の、**千代川**の支流北股川に沿う標高三三〇～四四〇メートルの尾根の先端斜面に位置する。

この社叢は、社殿裏の南向きの斜面にウラジロガシ林が形成され、これに隣接する南南東斜面には森林の様子が急変してブナ、オオモミジ、クロモジなどを中心とする落葉広葉樹林が形成されている。

谷地形がなす冷涼な環境が影響しているものであろうが、この低標高におけるブナ林の存在は異例であり、また、照葉樹林帯からブナ林帯への移行するのに中間林帯を欠く例として学術的に価値の高い社叢として昭和六十一年（一九八六）十二月に県の天然記念物に指定された。

ウラジロガシ林には胸高直径が一二〇センチに達するウラジロガシのほかアカガシ、アラカシ、スダジイ、タブノキが混生し、ブナ林には胸高直径が八〇センチのものが十個体近くあり、これにミズナラ、ハリギリ、イヌシデ、オオモミジなどが混生するなどみごとである。

豊乗寺

八頭郡智頭町新見
ＪＲ智頭駅よりバス五分、豊乗寺口下車、徒歩一〇分

豊乗寺は真言宗に属する。山号を宇谷山といい、本尊は無量寿如来である。寺譜によると、弘法大師の弟真雅僧正が大同四年（八〇九）に開き、昔は、子院が十二坊あったといわれるが、いつ創建されたかは明らかでない。いずれにしても弘仁以降の建立と考えられる。寺には、十二天画像、金胎両部曼陀羅、八祖画像、山水画などの宝物がある。中でも絹本著色普賢菩薩像は稀有なもので、光背から仏身、衣裳、瓔珞、環釧すべて精緻優麗である。わが国の代表的作品であり、現在、東京国立博物館に保管されている。本画像は、昭和二十六年（一九五一）九月、日本美術品の代表的作品としてアメリカに送られ展覧されるなど、国宝中の国宝と称せらるべきものである。

このほか、明治三十七年（一九〇四）二月に、絹本著色楊柳観音像と木造毘沙門天立像が重要文化財に指定されている。

また、墓地内には、真雅僧正の手植えと伝わる樹齢六百年の三本の大杉がある。これは、県の天然記念物に指定されている。

板井原集落

八頭郡智頭町板井原
ＪＲ智頭駅より車で十五分

伝統的な集落のたたずまいを残し、茅葺き屋根の復元が進む。

現在、板井原集落を舞台に智頭町教育委員会により山村生活を体験するプログラムが組まれている。村の入口では、六体の地蔵さんが並んで出迎える。集落の中ほど、元の上板井原分校（昭和五十五年休校）の位置に公民館、その背後に向山神社がある。林道は昭和四十二年（一九六七）にようやく板井原トンネルが開通し、役場方面への直通ルートとして整備された。今でこそ集落にとけ込み、何気なく通って山越えに船岡町へも廻ることができる。

元の道は、川を挟んだ向こう、民家の家並みの中を通る細い集落道の方である。集落道沿いに家屋が配置された様子は、まるで街道沿いの家並みのようにも思える。母屋は十八棟残っている。

明治三〇年代に大火があり、明治末期からの建築が多い。しかし、蔵は大小三十八余りを数え、江戸時代の建築も少なくない。川筋から引き込んだ水路に洗い場の降り口が仕切られ、水場の風情も懐かしい。

水田は少なく、かつて養蚕と炭焼きが主業であった。また、江戸時代から晒し葛の産地として名高く、製法を今に伝えている。

芦津渓

八頭郡智頭町芦津
ＪＲ智頭駅より車で四〇分（遊歩道入口まで）

八頭郡智頭町の**千代川**支流北股川の峡谷で**氷ノ山後山那岐山国定公園**に含まれ、県東部では河原町の**三滝渓**とならぶ紅葉の名所である。昭和十年（一九三五）、水力発電用の三滝ダムが上流に建設された。

芦津渓谷は、大呂から芦津までの下の峡谷、三滝ダムまでの中の峡谷、ダム上流の上の峡谷に分けられるが、中の峡谷をさして芦津渓と呼ぶのが普通である。なお、国土地理院発行の五万分の一や二万五千分の一地形図では、芦津渓の名称は見られず、中の峡谷の上流部を**三滝渓谷**としている。

下の峡谷は三郡変成岩の分布域にあり、黒色千枚岩を浸食するＶ字峡谷である。中の峡谷の倉谷付近から上流は、南東の沖の山（一三一八メートル）を中心に分布する花崗岩や花崗閃緑岩の地帯となり、両岸には節理に沿って垂直に切り立った崖が続く。谷底には、急崖から崩落した径二メートルを越える花崗岩類の巨礫や多くの滝、急流、淵が見られ、渓床の露岩には直径四〇センチに達するおう欠が発達している。三滝ダムの五〇〇メートルほど下流に、芦津渓で最大の落差二一メートルをもつ三滝がある。三滝の名称は、通常は二筋の流れが水量の減少によって三筋に分かれることに由来する。

渓谷沿いには、北股川入口の郷原から倉田まで県道が通じ、これに続く林道沖の山線を進むと、南方の山中を迂回して三滝ダムへ至る。林道途中にある沖の山隧道の入口から、中国自然歩道を渓谷に沿って歩くと三滝ダムへ至る。

沖ノ山の自然林

沖ノ山は標高一、三一八メートル、鳥取県智頭町内にあり、沖ノ山国有林からなる。地形は低平で、古くから開発による樹木の伐材があり、残存原始林は極めて少ない。しかし、国定公園地域でもあり、また大切な生活用水を補給する**千代川**の水源地でもあり、自然保護のために原生林二八〇ヘクタールが保存された。この原生林は「学術参考林」に指定されている。

沖ノ山の残存林は芦津・八河谷に近い降雪地帯で、**日本海**側の北西の季節風を受け、冬季は降雪が多い。この条件のもと生育する代表的樹木はミズナラ・ブナ・チシマザサ、そしてその上方にスギ、特にアシウスギは地元でオモキノヤマスギと呼ばれる。多枝、伏条の雪下に適応性が高い。

那岐山

ＪＲ那岐駅下車、徒歩一二〇分

八頭郡智頭町、岡山県奈義町との

県境にある標高一、二四〇・三メートルの山。山腹は急斜面であるが、山頂は比較的緩やかな面が広がる。この山頂の面は、中国山地に点在する高位浸食面に相当するもので、隆起準平原遺物と考えられている。山頂をはさんで東西にのびる稜線を境に、北の鳥取県側と南の岡山県側とでは、地形が全く対照的である。北側は谷が深く山腹にはいくつもの渓谷が発達し、南側は急崖で日本原高原に達する。那岐山は、三郡変成岩に属する黒色千枚岩を基盤とし、これを不整合に中生代白亜紀の火山岩類で覆われている。北側の山麓には花崗岩が広く分布している。この花崗岩は、火山岩類に接触変成作用を与えていないことから、貫入した時期は火山岩類ができる以前と考えられている。**氷ノ山後山那岐山国定公園**の一部に指定されており、登山道や避難小屋などもよく整備されている。登山道は因美線那岐駅から奥本の谷を尾根づたいで行くか、河津原から谷に入るのが一般であるが、国道五三号の旧峠から尾根づたいに登ることもできる。

《那岐山の動植物》

那岐山は西南端で八頭郡智頭町と、岡山県勝田郡の県境にあって、海抜一、二四〇メートルの高山である。中生代の石英安山岩類からなる。中国山地のほとんどは、浸食・風化され準平原となっているが、那岐山はその準平原面上に中国山地の骨ともいうべき堅い岩塊が残ったいわゆる残丘（モナドノック）である。その南麓は一大断層をなしつつ津山盆地におちている。ブナ・チシマザサ群落であるが、ブナは皆伐され原始林はほとんどない。湿地にはザゼンソウがあり、岩場にはホンシャクナゲの群落がある。このホンシャクナゲは七数性で七弁花雄苫が十四本あり、大きく美しいことで日本一の野性の美花として知られる。また、この付近にはクロソヨゴがある。珍しいフジシダも分布する。

山頂が風衝低木林・草原となっていることから、特徴的な動物が生息している。鳥類では、高山性のメボソムシクイ、マミジロなどが夏季に見られ、チョウでは上昇気流に乗って集まるアサギマダラ、ツマグロヒョウモン、オオミドリなどが目立つ。また、六・七月に山頂付近のブナ林ではエゾハルゼミが、低木林にはコエゾゼミの鳴き声が聞かれる。

伝説によると、神代の神跡と伝える場所は「伊壮那岐命」の神霊静まります地といわれ、地名の「那岐」もこれに由来すると伝えられている。山頂の南側の岸壁には「天照大御神」と「伊壮那岐尊、伊壮那美尊」の神名が刻まれ、千数百年前から神霊を祀っている。

因美線那岐駅から下車し早野登山口から登ると、車道が二キロ余り続く。そこから四キロ余りの山道は千古の密林、スギ木立の美しい林である。八合目の天狗岩、力水辺り、喬木帯となり高山気分が漂いはじめるころ、眺望は急に開ける。九合目あたりにはホンシャクナゲ、ドウダンツツジの群落があり、昭和五十二年（一九七七）に町の天然記念物に指定された。七月上旬には赤桃色のヤマツツジが満開となる。

頂上に立って展望すると、北側は大山火山帯によって噴出した峨々たる壮年期の山々が重畳と連なり、遠く**鳥取砂丘**、**日本海**の浮ぶあたりは、まさに一大パノラマである。西に**三国山**、**蒜山**、**大山**も眺められる。南側山陽方面には、準平原の大波のような丘陵地がつづき、山陰方面とは対照的な地形を表わしている。はるかかなたに瀬戸内海・四国山脈、淡路島が雲霞のはてに眺められる。

春は新緑の頃に登山を、夏は深緑の山ろくでキャンプをすることができる。また、昆虫や植物採集にも好適地である。十一月上旬ごろに全山一面が燃えさかる紅葉は絶景である。冬は、雪質も良くスキーに適する。

下山には、西側に位置する大畑の紅葉トンネルを通り、原生林をくぐり、シャクナゲの根のはう山道を下り、馬の背を通って宇塚に出るコースが最適である。

気高町

温泉 浜村温泉

気高郡気高町浜村
ＪＲ浜村駅よりすぐ

二十三の温泉があり集中管理されている。平均温度は五十二度、湧出量は毎分八一〇・六リットル。泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物、硫酸塩泉である。

温泉水は、鳥取花崗岩に属する黒雲母花崗岩から割れ目を通って湧出している。

ＪＲ浜村駅の南側に位置する勝見温泉と北側の浜村温泉に分けられるが、現在は一括して浜村温泉と呼ぶことが多い。歴史は勝見温泉の方が古く、文亀元年（一五〇一）あるいは天正年間に発見されたとも伝えられる。鹿野城主・**亀井茲矩**（かめいこれのり）の家臣が白鷺を射たところ、傷ついた鷺が沢畔に止まって動かないのを見て温泉が沸いているのを発見したとか傷ついた鷺が傷を癒して飛び去った場所に農民が見つけたといういわれがある。

鹿野城主・亀井公は、温泉の近くの低湿地を埋め立てて保護に尽くしたという。『因幡志』によると当初五～六戸の小農村が三十戸の温泉集落となり、一の湯、二の湯、鷺湯など五か所の湯壺と薬師堂が建てられるなど、歴代藩主の入湯場として栄えた。

明治十五年（一八八二）には国道が浜村地区に建設され、その後、明治十七年（一八八四）に鈴木甚平が浜村地区に温泉を掘り当て、明治四十年代の**山陰線**（現山陰本線）の開通とともに浜村温泉が発達した。明治年間に、小泉八雲が投宿した記事が残っている。また、**「貝殻節」**で有名な浜村海岸に近く、夏には多くの海水浴客が訪れる。

貝殻節・ホーエンヤ節

日本海沿岸の鳥取市賀露、気高郡気高町浜村、東伯郡泊村泊などには、イタヤ貝（一般に帆立貝）漁を歌った「貝殻節」が伝わっている。歌詞もメロディも場所によって多少異なる。賀露では、そのはやし言葉をとって、ホーエンヤ節と呼ばれている。海の底をジョレンと呼ばれる道具で引いたり、櫓を漕ぐ労働作業が歌われており、木遣り歌・木挽き歌と同様の労働歌である。

昭和八年（一九三三）にレコード化された「新民謡浜村音頭・貝殻節」により、鳥取県を代表する民謡として知られるところとなった。

亥（い）の子（こ）祭

十月初めの亥の日を「亥の子」といい、県内でさまざまな儀礼が行われた。この日、山間部では、田の神が山へ帰るといい、そこではきな粉のボタ餅を供えて祭った。また、鳥取県東部では、この日にこたつを出すと火事にならないといわれている。

気高町以西では子どもたちが、集落の家の門口を「亥の子づと」という棒状の藁細工を打って回る風習がみられた。また同町姫路では、二番亥の子の日に、子どもたちが、わらづとにミョウガの葉を入れたものを持って各家の軒先を叩いて回った。

布勢（ふせ）の清水

気高郡気高町殿
ＪＲ浜村駅よりバス十五分

布勢平神社境内の岩から湧出する清水。昭和六十年（一九八五）六月に「因伯の名水」として県指定された。湧水量は一、〇〇〇立方メートルで、豊富な水量と清冷なことから飲用水をはじめ、さまざまな生活用水に役立てられてきた。古くから「八幡さんの清水」と呼ばれて親しまれている。

明治四十二年（一九〇九）には、他地域に先がけてこの清水で水道が敷設された。現在も泉のわきに給水施設が設置され、近辺への水道水の供給源となっている。水温は年間を通して十四～十四・五度である。湧水の水源は、河内川の伏流水と考えられている。

鹿野城主・**亀井茲矩**（かめいこれのり）が涼亭を設置して、納涼を行ったとされる歴史のある湧泉である。

姫路神社・百手の神事

気高郡気高町姫路
ＪＲ浜村駅よりバス一〇分、姫路下車すぐ

祭神は天照大神である。春秋二回この地方にはまれな神事が行われる。

春は、「百手の神事」といい、昔から春は毎年四月二十三日より行われている。神官はこの神事に奉仕するため二夜三日間忌みの潔斎をする。四月二十五日（現在はこの祭日近い日曜日）になると氏子の人々は神社に集まり、まずお釜清めの行事を行う。次に各自が幣を奉持し、氏子役員中から弓矢木剣を奉持する者もある。神官は神面をつけ本殿内から神事場に向かう。これよりさきに神域の場所には的が用意され、すべての準備が整えばお面を先頭に獅子舞は所定の場所で神事を行う。神事に参加する人々や神官、氏子、役員の幣を奉持している人々らが神殿社前を一周する。その後、神官は矛を持ち東西南北天地に向かって、昔から伝わっている神事を行う。終ってまた一同は前回同様一廻りしてのち、神官は弓に矢をつがえて矛と同様の神事を行う。その後さらにまた一周する。こうして神官は的に向かって十二本の矢を放つ。これが終了するとお面を先頭にまた一周し、お面や獅子舞は定められた場所につく。神官は本殿で神面を納め、氏子は幣を納める。これで春の神事は終る。この神事は五穀豊穣悪疫退散のために行う。昭和三十四年（一九五九）県の無形民俗文化財に指定された。

秋には「牛舌餅」という神事がある。旧暦十一月の第一番目の丑の日から大忌に入り、鳥居には七五三縄を張り、一般の人が神社社地に入ることが禁じられ、参拝することもできない。大忌中は三日間家にこもって謹慎し、食物も前日までに調理したものを食し、この期間中はいっさい煮炊きをしない。これを一名牛舌祭ともいう。当日は姫路部落の旧家福田家から牛の舌状の餅が神社に供えられ、後、この餅は細断して氏子中に配られる。

大龍院

気高町宝木
ＪＲ宝木駅より車五分

山号を雲谷山といい曹洞宗に属し、本尊を釈迦如来である。かつては真言宗で、金谷山龍太（帯）庵と称し**板井神社**の別当寺として、板井神社御手洗池の隣・龍ヶ崎にあったという。開山時期は不明である。

建武二年（一三三五）に隠岐島を脱出された後醍醐天皇は、勅使を派遣され、当庵に寺領二十四石を寄進されたと伝えられる。

その後、庵は荒廃したが、文明元年（一四六九）、守護山名元晴が当庵を現在地に移し、備中洞松寺（現岡山県矢掛町在）の宵厳（祥厳）長通和尚を招いて開き、山号、寺号、宗旨を現在のものに改めた。その後、亀井氏にも保護されている。

鳥取藩士・上野忠親が筆写した『正法眼蔵』十九巻が所蔵され、元旦にはこれを本堂に供える慣例がある。またかつての龍太庵跡から出土したという石造経筒が保存されている。

両国梶之助

両国梶之助は、元禄年間の名力士といわれている。

寛文四年（一六六四）、現在の気高郡気高町宝木に生まれた。幼名は弥太。鳥取藩のお抱え力士となり「山ノ井」と名乗った。これは、山ノ井戸水はだれも汲む者がないことから、即ち取り組む人がいないほど強かったということを意味している。また、「両国」という名前は、因幡・伯耆の両国にかなう者なし、ということから藩主・池田光仲が命名したという。

徳川御三家の紀州侯から召し抱えの誘いがあったが、鳥取藩が許さなかった。体重一五〇キログラム、身長一・九メートルの体格で、五十貫の錨を二つ持ちあげたという。宝木の山のふもとに両国の墓がある。墓石には、「宝永五子年（一七〇八）正月廿四日死法号春山登雲両国梶之助墓」と刻まれている。

水尻池（みずしりいけ）

気高郡気高町水尻
ＪＲ宝木駅下車、車で一〇分

気高町水尻の国道九号とＪＲ**山陰本線**の間に位置する。南北約七百メートル、東西約五百メートルに広がる。奥沢見（おくざうみ）から水尻に至る河谷の河口部が砂丘によって堰止められてできた凹地に水がたまった潟湖である。

大正四年（一九一五）および同十年（一九二一）に計二四ヘクタールを干拓し、夏期にはポンプで排水して稲作を行い、冬期には池のままとしていた。周囲約八〇〇メートル、面積〇・二五キロメートル、水深は一～二メートルである。減反政策の影響で昭和五十六年（一九八一）以降は、稲作を止め、年中池のままである。一時期、真珠生産のためイケチョウガイの養殖も行われた。

静かな水域には水鳥が生息し、昭和四十二年（一九六七）以降コハクチョウが飛来するようになった。最盛期には約二百羽のカモ類などでにぎわう。銃猟禁止区であり西因幡県立自然公園に指定されている。

池の周辺を回遊できる道路があり、**白兎海岸**に隣接し散策にも適している。

板井神社（いたいじんじゃ）

気高町奥沢見
ＪＲ宝木駅より車で一〇分

板井神社は、『延喜式神名帳』に記載の気多郡同名社に比定される古社である。祭神は天明玉命で、方六尺余の青石に乗って当社に降臨されたといわれる。この青石は、神体石として本殿地下に埋っており板囲がしてある。中世の一時期に当地は「宮石」と呼ばれた。

社伝によると、神功皇后が朝鮮出兵に際し武功を祈願して祀った神社で、天武帝の頃まで勅使の派遣が続いたと伝えられている。

建武二年（一三三五）、隠岐島を脱出された後醍醐（ごだいご）天皇は勅使を派遣し当社に祈願されたという。

寛文七年（一六六七）には、別当寺である龍太庵（現大龍院）が分離され、社領高も折半された。

近世は板屋（いたや）大明神とも板葺（いたぶき）大明神といわれ信仰された。

田中古代子（たなかこよこ）

田中古代子は、ひたむきに文学の夢を追い求めた情熱の作家である。

明治三十年（一八九七）、気高郡逢坂村大字郡家村（現在の気高郡気高町郡家）に生まれ、本名はコヨといった。結婚して涌島姓を名乗る。

地元新聞や中央の雑誌に作品を発表したり活動写真を上映したり、また記者として健筆をふるったりと話題の多い女性であり、文学青年たちから「新しい女」と呼ばれ、あこがれの的だった。

大正十年（一九二一）、大阪朝日新聞社の懸賞小説に応募した『諦観』が二位に入選し、新聞に連載された。生まれつき身体障害者の弟を抱えての生活の苦しさが克明に綴られ、読者の胸を打つ。

大正十三年（一九二四）、「水脈（すいみゃく）」の同人でもある涌島義博とともに上京し、本格的に作家として歩もうとしたが、先年から患っていた肺結核に神経痛や不眠症が加わり、鎮静剤を常用するようになった。東京生活の夢は破れ、昭和七年（一九三二）、鳥取へ帰り、昭和十年（一九三五）春、みずから命を絶った。三十八歳だった。

気高町では、生誕百年（平成九年）を機に、田中古代子とその文学に新しい光を当て、再評価をはじめている。平成十三年（二〇〇一）には文学碑も建った。

田中古代子の墓は鳥取市新品治（しんぼんじ）の**玄忠寺**（げんちゅうじ）にある。

鹿野町

湯景 鹿野温泉

気高郡鹿野町今市
JR浜村駅よりバス十五分、役場前下車すぐ

昭和三十年（一九五五）、かねてから湯徴のあった地点を鳥取大学名誉教授・原田光博士の指導で掘削に成功した。泉源九井のうち七井を集中管理している。平均温度六十一・四度、湧出量は毎分一〇九四リットル。単純泉であるが食塩泉を共存し、ラドン含有量も多いので一部には放射能泉もある。

温泉のうち三源泉は地下の吉岡花崗岩と鳥取花崗岩の境界部付近でほぼ南北に走る断層系にそって湧出している。その他は沖積層や洪積層、第三紀層から汲み上げている。自然環境や泉質に優れていることから国民保養温泉に指定され静かな保養地として発展してきた。鹿野温泉病院、各種厚生施設、町営国民宿舎、温泉館など公営温泉施設がまとまっている。また、利用後の温泉水は余熱を利用して洋蘭やバラなどの温室栽培に用いられ、花きモデル事業地になっている。近くには鹿野城跡もあり城下町の面影を偲ぶことができる。

湯景 ホットピア鹿野

気高郡鹿野町今市
JR浜村駅からバスで約十五分、役場前下車、徒歩三分

平成五年（一九九三）六月に**鹿野温泉**に開館した公共の温泉施設。ガラスブロックに包まれた円形の洒落た建物には、水風呂、気泡風呂、露天風呂、サウナが設けられている。

物産館も併設されている。また、近くにはそば道場もあり、町内外からの利用者で賑わう。

●開館時間　午前一〇時～午後九時
●休館日　第一木曜日（祝日の場合は第二木曜日）
●問合せ先　☎0857・84・2698

鹿野の町並み

気高郡鹿野町鹿野
JR浜村駅よりバス二〇分

鹿野は山中鹿之助幸盛の娘婿・**亀井茲矩**によって天正九年（一五八一）に営まれた城下町である。二代政矩が津和野に移封されるまで亀井氏の善政により繁栄した。元和の一国一城令により廃城となり、城下町としての機能は短期間であったが、亀井氏の経営によって、しっかりした町づくりが行われた。

武家屋敷のあった殿町、商人町の上町・下町、職人町の紺屋町などの町割は、今もよく残っていて、城下町の面影を伝える。商人町であった通りには、京風の格子構えを備えた町家が点在し、特に上町・下町の稲垣家、原田家、能勢家などの古い町家は往時の面影をよく留めている。これら古い町家は外壁は塗屋造りで、一階には出格子・腰格子・ハメ格子がバランスよく配置され、二階は屋根の低いツシ二階で卯建も添えられている。

町家の大半は明治時代の遺構で、卯建や軒を支える腕木などの細工は豊かで、軒の線に乱れがなく、町並みにも統一感が見られる。町並みを歩くだけで、建築の質の高さを感じることができる。

亀井氏の治政は、亀井氏が津和野に移ってからも受け継がれ、しっかりと根付いている。春には**城山神社祭**、秋には**亀井踊**が行われ、鹿野は、城下町としての伝統や洗練された気品が漂っている町である。

物産 鹿野そば道場

気高郡鹿野町鹿野
JR浜村駅よりバス二〇分、鹿野町役場前下車、徒歩一分

平成九年（一九九七）四月に設置されたこの施設では、そば打ち体験ができる。このそば打ちには、鹿野町内で栽培されたそばの実を石臼でひいてできたそば粉を一〇〇パーセ

ント使用している。また、自分で打ったそばはその場で食べることもでき、打ちたて、ゆでたてのおいしさを味わえる。

●開館時間　午前一一時三〇分～午後二時（レストラン）ただし、土・日曜日及び祝日は午後三時まで開館
体験は午前一〇時～、午後二時～の二回（要予約）
●休館日　毎週水曜日、年末・年始
●問合せ先　☎0120・135・228

城山神社祭礼

気高郡鹿野町鹿野
JR浜村駅よりバス十五分、立町下車すぐ

鹿野城城山の中腹に鎮座する城山神社の祭礼行列。城山神社は、創建年月は定かではないが、慶長年間、亀井氏が鹿野在城のとき鎮守として祀ったのに始まるといわれる。須左之男命を祭神とし、もとは妙見社といい、**加知弥神社**の摂社であった。

祭礼は江戸の初期から行われていたという。例祭日は、毎年四月十五日であったが、現在は隔年の第二土・日曜日に行われる。

行列は四台の屋台をはじめとして鹿野の各町内ごとに出し物（役）が決まっており、町内から選出された「役面」という若連中が祭礼を取り仕切るということが特徴である。

御幸行列は日曜日の昼過ぎに出発する。行列は榊・屋台（大工町）・幟差し武者（紺屋町）・屋台（山根町）・屋台（下町）・獅子（上町）・神輿（殿町の若連中）・金幣・神官・袴姿の「後供」の順となる。この神幸行列の一行を、七名の「役面」が警護役として、前になったり後ろになったりして伴走する。

神事行列は、紺屋町から大工町までの七つの町内を延々十数時間かけて巡る。鹿野の上町から獅子が出され、同町の屋台を先導する。一キロ半の道のりの最後となる御神事場（お旅所）に到着するころは十六日の夜中であり、ここで祭典がとり行われ獅子舞も舞われる。

このとき、提灯数十個に火を入れた四台の屋台が、暗闇にくっきりと姿を現して整列するさまは壮観である。

昭和三十四年（一九五九）に県の無形民俗文化財に指定されている。

志加奴・城山神社獅子舞

城山神社の祭礼行列では六番目に鹿野の上町から獅子が出され、同町の屋台を先導する。この獅子の舞方は、県東部に多く見られる**キリン獅子舞**の流れをくんでいるが、獅子頭はいわゆる神楽獅子である。また、獅子の先導役である猩々（想像上の動物）も、大きな白幣を持って登場するが、獅子の門付けの最中は玄関先にしゃがんでいるだけである。この獅子舞が沿道の各家を順次門付けするため、祭礼行列はそれに合わせてゆっくりと進む。

志加奴神社の祭日は四月二十二日に近い日曜日で、隔年の例大祭には十五分ほどの本舞が奉納される。昭和三十四年（一九五九）、県の無形民俗文化財に指定されている。

亀井茲矩

亀井氏はもと紀伊国の豪族で、戦国時代出雲に移って尼子氏に仕えたという。茲矩は出雲意宇郡湯郷（現島根県玉湯町）の領主・湯氏の後裔で、湯新十郎と称し尼子氏に仕えていた。尼子氏滅亡後は山中幸盛に従い、尼子再興を図って各地を転戦、幸盛の外舅の家号を継いで亀井氏を称し、後に織田信長、秀吉に属した。

天正九年（一五八一）十月の鳥取城落城後、羽柴秀吉は茲矩を鹿野城主とし、気多郡一万三千八百石を与えた。関が原合戦では茲矩は東軍に属して軍功を立て、戦後高草郡二万四千二百石を加増された。さらに茲矩の子政矩は慶長一〇年（一六〇五）に伯耆久米、河村両郡のうち五千石を与えられ、領有高は四万三千石となった。政矩は元和三年（一六一七）、石見国津和野に移封され、以後、明治維新まで津和野を所領とした。亀井茲矩在城の時代は、領内の新田開発に力を入れ、気多郡日光、高草郡湖山両池の干拓のほか、千代河西岸地域に大井手用水路を開削し、灌漑水路網を整備した。慶長年中には蘆

崎湊（現青谷町）を基点に長崎を経由してシャム（現在のタイ）などの東南アジア諸国と朱印船貿易を行い、巨利を得た。また、インドの仏跡にちなんで、居城を王舎城、城下を鹿野苑と呼ばせた。茲矩は、慶長十七年（一六一二）正月に没した。

墓の入り口は気高町字田仲にある。「亀井武蔵守茲矩」という茲矩について記した案内板の他、「亀井茲矩公大井手用水路開鑿四百年記念」の石碑と、「大井手土地改良区再建」を記念して平成五年（一九九三）九月に奉献された鳥居をくぐって坂を登った明星ガ鼻という小高い丘の頂上に墓がある。墓は石組みのほぼ正四角形で、高さ約三メートルの墓碑が建ち「中山道月大居士」と法名が刻まれている。墓碑の四面にはそれぞれ梵字なども刻まれているが現在では苔で覆われて判読しづらい。墓の手前両側には明治三十一年（一八九八）四月に伯爵・亀井茲常氏により奉納された石燈篭が二基建つ。墓は平成八年（一九九六）、二月に気高町の指定史跡に指定された。

亀井踊

気高郡鹿野町鹿野

本来は盆踊りで、因幡地方に伝わる**「はねそ踊」**の一つである。由来としては、戦国時代から江戸時代初期まで鹿野を治めた亀井氏の次のような伝承が伝わり、唄にも唄い込まれている。

戦国時代、鹿野城主・**亀井茲矩**は、近くの金剛城主・兵主源六を滅ぼす機会をうかがっていた。兵主が芸能好きであるのを知った亀井は、ある年の盂蘭盆に盆踊り大会を催した。そして兵主が郎党を引き連れて見物に出かけた隙に、亀井は金剛城に火をかけて、焼け落としたという。

以来、城下の者は亀井公を讃え、兵主を滅ぼすきっかけになった盆踊りを「亀井踊」と称し語り継いでいる。

現在は見せる芸能としての要素が強くなり、音頭取りを中心に、四つ目の黒紋付きに陣笠姿の踊り手六人が輪になって踊る。昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

名勝 譲伝寺庭園

気高郡鹿野町今市

譲伝寺は少林山と号し、江戸時代最初の鹿野城主・**亀井茲矩**の菩提寺である。中世には県下に曹洞宗を広める拠点となった寺院である。茲矩が鹿野城主となった天正九年（一五八一）には既に今の地にあり、鳥取県下に十六の末寺を持った。茲矩の没後、政矩の元和三年（一六一七）、亀井氏は津和野へ転封となるが、在城三十六年間、譲伝寺と鹿野城とは一本道でつながれていたと伝えられる。茲矩の墓石の他、茲矩が奉納したと伝えられる刺繍織物三点（県指定文化財）を残す。

書院の北側に広がる庭園は興味深い。書院から見る池泉、石組、築山、後背の森それぞれの位置が定まり、もともと池泉鑑賞式あるいは一部に回遊式を取り入れた庭園であったと推測される。現在、池の中央に木橋が架かり、左右の池に膨らみをみる。左手の護岸石組みに当たる部分が鶴亀の対応を示している。右手奥には築山から刻まれた野筋とおぼしき川流れが認められる。しかし、築山の高さはさほどなく、左右に波打つような穏やかさを持つ。池泉を含め、元は左手にさらに広がりを持ち、回遊式に近い大きさを持っていたことも考えられる。

熊谷道伸・子貞

熊谷道伸と子貞は、父子二代にわたって私塾を経営し、先駆的で秀れた庶民教育を実践した。

熊谷道伸は宝暦十三年（一七六三）、気多郡鹿野村（現在の気高郡鹿野町）の大庄屋の家に生まれた。彼は教養が高く人格者として知られ、信望も厚かった。このため若者たちが宅を訪れるようになり、いつとはなく私塾となった。「教えをこう者門にみち、教化一郷にあまねく、鹿野の学風これより大いに興った」と『鳥取県郷土史』（昭和七年）は熊谷道伸を評している。文化十三年（一八一六）、五十四歳で死去。

子貞は道伸の息子で、寛政十三年（一八〇〇）に生まれた。幼少のときから父について学問を修め、青年たちの教育に専念する父の姿を見て育った。

私塾を藩の公認と援助によって郷校に発展させ、ここで農村の主だっ

た人物を教育したいと考え、万延元年（一八六〇）、藩に願い出、聞き届けられた。自宅の隣に学舎を建て、県内初の郷校「修道館」が完成した。漢学・国学・農学など広い範囲にわたって教えた。文久三年（一八六三）六十四歳で亡くなった。

『拳賢論』『賞罰論』『郷学論』などの論文をとおし、人材を育成するとともに、人材登用が急務であることを説いている。鹿野町鹿野に道伸・子貞顕彰碑が建っている。

幸盛寺

気高郡鹿野町立町
ＪＲ浜村駅よりバス十五分、立町下車、徒歩五分

本派浄土宗に属し、京都知恩院の末寺で、宝徳年間（一四四九～一四五二）証誉恵教和尚が開いた。はじめは明照山持西寺といった。その後、**亀井茲矩**が山中鹿之助幸盛の菩提所と定め、天正年間（一五七三～一五九二）に現在の寺号に改めた。本尊は阿弥陀仏である。幸盛寺という額面は、亀井茲矩の筆のものが掲げられていたが、昭和十八年（一九四三）の地震で破損した。現在掲示されているもは、亀井茲建の筆によるものである。寺内にある鹿之助の墓は、縦横約二メートル、高さ一・二メートルの石垣の上に高さ一・五メートルの無縫塔が安置されている。「為幸盛寺殿潤林大居士」と刻まれ、その右方に「沙門城蓮社照誉上人建立」とある。天正六年（一五七八）七月十七日、備中（岡山県）甲部川阿井渡において暗殺された幸盛の遺髪を、亀井茲矩が得てここに葬った。

その他にも寺内には、尼子十勇士の一人である日野五郎之房の墓がある。五輪塔の高さは約一・三メートルあり、「高誉寿性居士文禄三年十一月廿五日」と刻まれている。

また、当寺のイチョウの巨木も有名である。胸高の周囲が五・三メートル、樹高が約三〇メートルある。

加知弥神社

気高郡鹿野町寺内
ＪＲ浜村駅よりバス一〇分、宮方下車、徒歩三分

彦火々出見命、鵜葺葺不合命、玉依姫命を祭神とする。創建年月は明らかでない。『延喜式神名帳』に載っている古社で、昔は勝宿大明神といい、宮谷あるいは明神ガ鼻にあったといわれる。中世以降、武将の崇敬が厚く、永禄八年（一五六五）には武田高信、田公高清、矢田幸佐等が社殿を造営し、天正八年（一五八〇）には吉川元春が戦勝を祈願して社領を寄進した。なお、元春の祈願状・寄進状二巻が昭和三十二年（一九五七）十二月に県の保護文化財に指定されている。

社伝によると、天正年中（一五七三～一五九二）、羽柴（豊臣）秀吉は防己尾城落城のとき社領を寄進したとのことである。その後、**亀井茲矩**はこの神社を崇敬し、たびたび社殿を修造し社領を寄進している。

また元和九年（一六二三）には池田光政が社殿を修理するなど、累代の藩主の崇敬が厚かった。大正二年（一九一三）二月には、当社の摂社および付近の神社十四社を境内に合祀し一社を建て、新たに勝宿神社とした。例祭日は十一月二十一日である。

寺内集落の薬師堂付近には、塔礎とみられる礎石がある。遺瓦は奈良後期のもので、昔、勝宿大明神の別当寺の旧跡だといわれている。なおこの神社神門の北側に**飯田年平**の歌碑がある。これには『なにごともめずらしげなき世の中に　見れどもあかぬ富士のかみやま』と刻まれている。

飯田年平

飯田年平は、国学や和歌に優れた学識と才能を発揮した。

文政三年（一八二〇）、鹿野・**加知弥神社**神職で歌人の飯田秀雄の次男として生まれた。幼年期から歌に優れた。五、六歳のとき母に『古今集』を教えられたが、すぐ暗誦して一句も誤らなかったと伝えられている。

十四歳のとき父に呼ばれて紀州に行き、加納諸平らに国学や和歌を学び、その後も諸国を歩き見聞を広めた。その優れた学識によって、年平、諸平、石川依平と並び「天下三平」といわれた。万延元年（一八六〇）、四十一歳の彼は藩の尚徳館に採用され、国学を担当した。明快で朗々としたその講義は、多くの人に敬服されたという。

明治元年（一八六八）、明治新政府に仕え、行政官・神祇官を歴任し、従七位を授けられている。同十九年（一八八六）、六十七歳で死去した。

著書に歌集『石園集』、随想集『石園歌話』などがある。

鹿野町寺内には、「なにごともめ

ずらしげなき世の中に見れどもあかぬ富士の神山」の歌碑が建っている。

佐谷峠

気高郡鹿野町河内
JR浜村駅より車で三〇分

主要地方道鳥取鹿野倉吉線が、鹿野町河内から三朝町俵原へ越える峠である。標高は五四〇メートル。鹿野町から**鷲峰山**を左に見て河内川沿いにさかのぼり、河内集落で支流の佐谷川に折れ、幾度かのヘアーピンカーブを抜けると峠に達する。反対の三朝町からは、**三朝温泉**街を通り一本道を**三徳山三仏寺**に続く大鳥居を走り抜け、投入堂の真下の谷から山に向かい、俵原集落を越えるとたどり着く。江戸時代には、鳥取と倉吉、米子を結ぶ伯耆往来の街道筋であり、因幡と伯耆の国境であった。年々、道路の拡幅やカーブ線形の改良が進み、走りやすくなった。鳥取市と倉吉市の連絡に、**日本海**沿いの国道九号の混雑を避け、新緑や紅葉を楽しみながら山周りのコースに利用する車が多い。

峠一帯は**三朝東郷県立自然公園**に含まれる。峠近くの駐車場に車を置き、スギ・ヒノキの造林地を抜け、近くの尾根に登ると思わぬところでブナ林の散策が体験できる。

また、俵原から**三徳山**までの谷筋の雪解けは遅く、五月の連休でも谷の残雪が楽しめる。夏には佐谷川や俵原一帯では、六月の終わりから七月の上旬まで自生するゲンジホタルを見ることができる。なお、俵原集落には俵原藤太（藤原秀郷）のものと伝えられる墓がある。その奥には県営牧場もあって、ちょっとした高原気分を味わうことができる。

鷲峰山

気高郡鹿野町古仏谷
（登山口まで）JR浜村駅より車で十五分

鹿野町の南部に位置する標高九二〇・六メートルの孤立峰である。山頂部はやや南北にのびた円錐状に盛り上がるが、山腹の標高七五〇～八〇〇メートル付近から緩やかな傾斜の尾根が東西南北に張り出している。

鷲峰山の名前の由来にはいくつかの説があるが、北側から望む山頂部と東西の尾根の形が、翼を広げた鷲のように見えるためというのもその一つである。また、昔はもっと高い山であったが、**大山**と背比べをして勝ったため、怒った大山に頂上をすくいとられて低くなってしまったという伝説が伝わる。

山体は、三朝層群東郷累層に含められる鮮新世の安山岩およびデイサイトの溶岩で構成される。同時代の、主として溶岩からなる火山岩類は県中部から東部に広く分布しており、一括して鮮新世火山岩類と呼ばれることもある。鷲峰山をつくる溶岩は、中生代の火山岩類や中生代末期～古第三紀の花崗岩を基盤岩として、西側半分では山頂を中心としたほぼ半円形に、東側では**毛無山**（五七〇メートル）に至る尾根上に細長く延びて分布している。

西因幡県立自然公園に含まれ、鹿野町殿口バス停から山頂を経て河内へ至る中国自然歩道がある。ほかに鹿野町鷲峰からの登山ルートがある。山頂からの眺望は良く、東に**湖山池**、北に**長尾鼻**、西には遠く大山を望むことができる。

青谷町

物産 青谷上寺地遺跡

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩五分

国道九号青谷羽合道路と県道の建設工事に伴い発見された弥生時代の集落である。

平成一〇年（一九九八）より行われている発掘調査によってさまざまな遺物が発見され、その豊富さから「弥生の博物館」といわれる。

平成十二年（二〇〇〇）六月、遺構から約五千点（少なくとも九十二体分）の人骨が出土した。この人骨のなかには、傷を負ったものものや結核にかかって変形したヒトの骨などが発見された。なかでも特筆すべきは、脳が残っている頭蓋骨が三つ発見されたことである。古代の人骨に脳が残っていることはまれであり、世界的にも数例しかなく、全国的にも注目を集めた。脳は頭蓋骨から取り出され、平成十三年（二〇〇一）春に公開されている。この脳については現在も調査が進められている。

青谷上地寺遺跡は出土品の多種多様さとその保存状態の良さでも知ら

れる。これは土のなかで真空パックのような状態にあったためである。人骨のほかにも大量の土器や木器をはじめ、鉄器、青銅器、骨角器、石器などが多数出土し、その総発掘数は数万点に及ぶ。これらのなかには動物の絵を描くなど精巧な細工がされているものも少なくない。また、弥生時代のものとしては日本最大といわれるスギ板や日本最古の窓と考えられる木製品、占いに用いられていた動物の骨など、他の遺跡には見られない貴重なものが多く、これらの、日々の生活や農具、漁具として用いられていたものを通して、弥生時代の生活や衣食住、大陸との交流を伝えている。

青谷上寺地遺跡展示館

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩五分

青谷上寺地遺跡から出土した木器および鉄器、大陸との交流をうかがわせる品々など約二百七十点が展示されている。

ここでは、ボランティアによる展示品についての解説も行われている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　毎週月曜日
●問合せ先　☎0857・85・0841

あおや郷土館

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩一〇分

まちを見渡せる小高い丘の上に、平成五年（一九九三）に開館した。

郷土出身のあるいは郷土で活躍している美術工芸作家の作品の展示をはじめ、青谷町の歴史・文化の紹介や日本を代表する著名な作家の作品なども取り入れながら、年十数回の企画展、特別展が開催されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　月曜日（休日の場合はその翌日）、年末年始
●問合せ先　☎0857・85・2351

物産　青谷ようこそ館

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩五分

青谷町内でとれた野菜、果物、穀類から作られた加工品が並ぶ。中には、甘長とうがらしやおからを使用したアイスクリームなどユニークな商品もある。また、地元の漁港・夏泊で取れるいがいを使ったいがい飯など、季節限定の商品も取り扱っている。

●開館時間　午前八時～午後四時
●休館日　月曜日（祝日の場合は翌日）
●問合せ先　☎0857・85・0600

相屋神社社叢

気高郡青谷町青谷
JR青谷駅より徒歩七分

相屋神社社叢は、住宅地に近く、JR**山陰本線**のすぐ南側の勝部川の西岸にのびる山脚の末端、標高五〇～七〇メートルに位置する。社叢の面積は〇・四ヘクタールとやや小さいが、スダジイを主とする山陰型の典型的な照葉樹林として昭和五十八年（一九八三）九月に県の天然記念物に指定された。

高木にはスダジイが優占し、タブノキやウラジロガシが混生するなど、林相県内各地域のスダジイ林と大差はない。しかし、林床に生える草木層にベニシダやオニカナワラビに加えて特にトキワイカリソウの多いことが特徴である。

なお、やや希少種で陰湿な環境に育成するタラヨウやイイギリの大木も観察される。

鳴り砂の浜

砂浜海岸で踏みつけると「キュッ・キュッ」と音を発する砂を鳴り砂という。砂が音を発するためには、砂粒の形や組成鉱物の性質、淘汰度、含有する水分、砂の固結度や砂浜の位置などが影響し、音は微粒塵の混入、汚れ具合でも微妙に変わる。

県内の河口には砂が堆積し砂丘や砂浜がよく発達している。それらの砂には石英分が八〇パーセント以上含まれており、形は亜角礫状のものが多い。直径が一・二ミリ以上の砂粒が占める割合が少なく、〇・四～〇・八ミリの砂粒が五十パーセント以上を占めている。かつ、粒子の大きさがよく揃っているうえ、波に洗われて汚れが少ないため、多くの海岸で鳴り砂の現象が見られる。

県内では井出が浜（青谷町）の鳴

り砂がよく知られ、このほかにもみなせ浜（青谷町）、石脇海岸（泊村）、宇野海岸（羽合町）、船磯海岸、水尻海岸、小沢見海岸（気高町）などの鳴り砂も良質である。また、鳴り砂は海岸の自然環境の良否を知る指標ともなる。

夏泊の海女

気高郡青谷町夏泊

夏泊の海女は、一説に豊臣秀吉を朝鮮に導いた筑前国（現在の福岡県）の漁夫・助右衛門が、その功績によって夏泊の地を拝領し、助右衛門の妻が潜水漁法を広めたといわれ、その歴史は長い。

かつては、肌にシマギと呼ばれる木綿の服を着ていた。メガネをし、水中に桶を浮かべ、ワカメ・テングサ・モズクなどの海草を採取したり、ワーブガネと呼ばれる貝起こしを使って、カキ・イガイ・アワビ・サザエなどの貝類を採取したりする海女の姿が夏の風物詩であった。この一回の採取作業を「一シオ」といい、大体一時間くらいで終わり、体をかわかした。

海女さんたちは老齢化したとはいえ、現在もウエットスーツを身につけ、昔と変わらぬ技術で魚貝類の採取をしている。

長尾鼻

気高郡青谷町
ＪＲ青谷駅より車で一〇分

気高郡青谷町と気高町の境界をなす約一・八キロの岬。新生代第三紀鮮新世の火山活動によって、中国山地から流出した溶岩が、**日本海**に向けて流れ出し、北に傾いたなだらかな溶岩台地を形成している。台地上部は、安山岩の風化土壌や**大山**の火山灰に覆われ、林、草地、畑地となっている。台地の先端部の岬状に突き出た形が、鳥の長い尾羽根の形に似ているところからこの地名がついたという。岬には、激しい日本海の波浪の浸食を受けてできた七〇メートルを越す高い海食崖、テラス状の岩棚（切り石、寺屋敷）、岩のくぼみにできた小さな池（血染めケ池）などを観察できる。岬や溶岩台地一帯の岩石は、粘り気の弱い溶岩が固まってできた安山岩で、冷え固まったときにできた板状の節理が発達している。

岬先端部には長尾鼻灯台があり、日本海を一望できる。また岬沖は豊富な魚種に恵まれ、岬がなす湾の奥部東側には船磯漁港、西側には夏泊漁港があり、両港とも天然の良港である。また、磯釣りの名所でもある。なだらかな台地状斜面は、**二十世紀梨**などが栽培され、農業も盛んである。

岬一帯は、西因幡県立自然公園の一部に指定されている。

山根和紙資料館

気高郡青谷町山根
ＪＲ青谷駅よりバスで十五分、山根下車すぐ

因州和紙は江戸時代に、藩の御用紙として保護され、御朱印船貿易で海外にも進出していた。青谷町は**因州和紙**の生産地として知られ、山根集落には現在も数件の和紙製造業者がある。

この資料館は、昭和五十五年（一九八〇）に設置された。全国的にも珍しい和紙の資料館で、和紙製造業を営む設置者が、長年かけて収集した世界中の紙や紙で作られた生活用品、紙に関する資料など約三千点が展示、収蔵されている。

日置のはねそ踊

「はねそ踊」は、江戸時代の中頃から因幡地方各地で伝承されてきた盆踊り（手踊り）の代表的なものである。日置川沿いの山根・河原両集落で八月十四日に踊られる。

口説きを唄う音頭取りは、臼を二、三個重ねた上に立ち、その脇に立てられた「梵天」と呼ばれる御幣や日の丸扇を付けた青竹を片手に持ち、もう一方の手に破れ傘を持って歌う特徴がある。踊り手は、その音頭取りを中心に輪になって踊る。

因幡の源左

源左は、信仰が厚く、その言動は多くの人を感化し導いたことから、妙好人源左と呼ばれた。「ようこそ

ようこそ」を口癖とした。多くの逸話が残っている。

乳を搾らせぬ牛でも源左が「ようこそようこそ」といいながら搾ると、牛は機嫌よく搾らせた。

草を背負って帰宅中に足をすべらせて川原に転落し、血だらけになった。「片腕折れても仕方がないに、ようこそようこそ」。

源左の畑に馬を入れ、大豆を食べさせている人がいると、「先きの、もっとええのを食わしたんなはれな」と呼びかけた。

柿どろぼうが多いのに、柿に梯子を立てかけておけと源左がいう。「なんぼ人が取っても、やっぱり家の者が余計食うわいや」。

源左は、天保十三年（一八四二）、気高郡山根村（現在の気高郡青谷町山根）に生まれ、昭和五年（一九三〇）、八十九歳で亡くなった。本名は源左衛門。明治に入って足利喜三郎と名乗ったが終生、源左で通った。

彼は字を書くことも読むこともできなかったが、彼に感化された人が彼の言葉や行動を伝え、それが逸話集のようにして残った。

民芸家の柳宗悦と願正寺の衣笠一省がまとめた『妙好人　因幡の源左』に詳しく紹介されている。

神前神社

青谷町鳴滝
ＪＲ青谷駅よりバス一〇分、北河原下車、徒歩一〇分

神前神社は、貞観十七年（八七五）に正六位上から従五位下に神階を昇叙された「因幡国神前神」（『日本三代実録』）に比定される古社である。祭神は猿田彦命・天宇受売命などである。

社伝によると、慶雲四年（七〇七）地内の美古峰に勧請したが、至徳二年（一三八五）に現在地に移されたといわれる。元弘三年（一三三三）、隠岐島を脱出された後醍醐天皇は、当社に代参を派遣して武運長久を祈られたといい、その折の短冊などが社宝として残るという。小森・亀井氏など武将から神田の寄進が続いた。

また、近世には神前大明神といわれた。明治・大正期に近隣社を合祀した。

旧暦十月の丑の日から酉の日までの九日間、氏子一同大きな声・音を立てず野良仕事も休む無音祭（お忌さん）が行われていた。これは祭神が出雲に行かれ酒造りの見張番をされたので、疲れて帰って来られるから無音にして慰労するためだという。この間に耳造酒を造って奉納する。文永・弘安の役のときから始められたと伝えられている。

幡井神社

青谷町絹見
ＪＲ青谷駅より車で十五分

幡井神社は、『延喜式神名帳』に記載された古社で、祭神は天照大御神・栲幡千千姫命などである。

社伝によると、宝亀三年（七七二）に勧請され、その後三度遷座され、寛政九年（一七九七）に現在地に落着いた。古くは西に接する笏賀庄（現泊村筒地・園・泊・石脇・宇谷）と当町長和瀬・絹見の因伯にまたがる産土神であった。近世には幡井大明神と称された。明治初年（一八六八）に近隣小社を合祀し現社名に改称された。境内には、推定樹齢三百年といわれる「タブノキ」がある。

田原谷

気高郡青谷町田原谷
ＪＲ青谷駅よりバス二〇分

勝部川をさかのぼって、八葉寺川と不動川の合流する辺りが田原谷である。集落の手前に、平成十年（一九九八）にオープンした「かちべ伝承館」がある。農村の生活体験を味わうことのできる施設で、現在、味噌、こうじ、豆腐、製粉などの加工実習を受けることができる。

不動川沿いに登ると霊場不動山である。山肌に無数の転石が置かれた不動さんを見て奥に進むと、スギやケヤキの大径木に囲まれた不動滝の滝壷に至る。落差三〇メートルの滝には座禅石がせり出している。さらに進むと、湯原滝、妙円滝と続く。六月と八月には、**「湯三昧」**と称する勤行が行われる。近年、ホタルの里づくりを目指して、ホタルをイメージした橋や街灯の整備が進んでいる。

伝承館のすぐ南には、地元で「建山さん」と親しまれている建山神社がある。参道の急な石段を登ると、脇に並ぶスギの大径木に圧倒される。昔々、**鷲峰山**と**大山**が背比べをしたところ、鷲峰山が勝ったため大山は怒って鷲峰山の山頂をつかんで投げた。落ちたところが建山となったと伝えられている。

不動谷川流域

気高郡青谷町田原谷
ＪＲ青谷駅よりバス十五分、不動滝入口下車徒歩一〇分

不動山入口から妙円滝の間の一キロメートルをいう。**鉢伏山**付近から

の溶岩流が流下してできた安山岩が、平野部と接する位置に不動滝、湯原滝、妙円滝などの規模の大きな滝が形成されている。三つの滝は、趣を異にし、自然豊かな渓流となっている。

新緑の頃から紅葉の頃まで訪れる人が多い。この渓流は、「因伯の名水」を育む渓流として、平成二年（一九九〇）十二月に県指定を受けた。

湯三昧（ゆざんまい）　柴灯護摩（さいとうごま）

気高郡青谷町田原谷

真言宗寺院、御滝山大善院は「田原谷のお不動さん」と呼ばれている。縁日は毎月第一日曜日で、内護摩を焚き、加持祈祷を行っている。大善院の奥院は、安永四年（一七七五）、大峯行者が開山したと伝わる落差二〇メートルあまりの「不動滝」である。この滝のそばで、六・八月の第一日曜日に行われるのが、「湯三昧」の儀式で、七月の第一日曜に行われるのが「柴灯護摩」である。湯三昧は、護摩木によって大釜で沸かした熱湯を笹の葉で振りかける荒行である。導師、行者たちが自らの身体に熱湯を振りかけ、その後、参拝者の身体にも振りかける。信者の間では、湯三昧で打ってもらうと身体の具合の悪い部分が良くなると信じられており、行者に患部を差し出す。

柴灯護摩は、境内に護摩壇を誂え、参拝者の祈願成就を祈祷する行事である。護摩壇の前には、杉の丸太で井桁を組み、柴木が入れてある。導師・行者は般若心経を唱えるなどのさまざまな作法をし、これに火を入れる。そして参拝者の祈願が書かれた護摩木を加持した後、火にくべる。煩悩や災厄を火によって焼き払うという行事である。

八葉寺（はっしょうじ）

気高郡青谷町八葉寺
ＪＲ青谷駅よりバス十五分

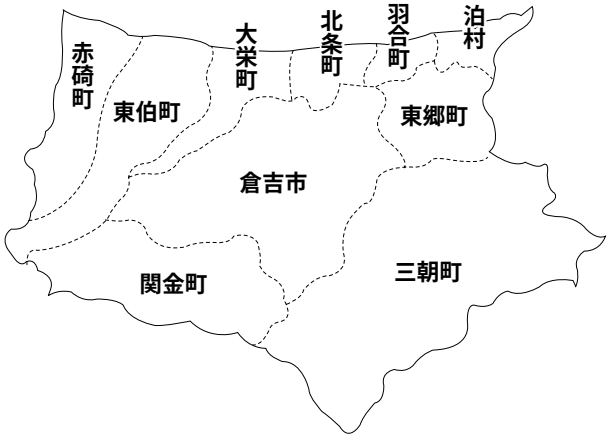
戦国期から名のある山村である。岩窟が発達し、不思議な空間を生み出している。青谷町の中心地から、勝部（かちべ）川沿いに走る。郷土文化を伝える「かちべ伝承館」、建山（たてやま）神社の社叢を左に折れると、右手に子守神社の境内が見える。この谷筋が八葉寺川であり、八葉寺集落はさらに谷の奥に位置する。鳥居を入ると右側に目通り周囲六メートル、樹高四〇メートルと言われる大イチョウが控えている。神社の石段を本殿に上がると、さらに上に岩窟と熊野権現社の拝殿が見える。いずれも、三〇メートルの高さはあると思われる安山岩の柱状節理が生み出した洞窟に埋め込まれたように建てられている。社殿の前に立つと、夏でもひんやりと涼しく、周囲の社叢も静寂そのものである。

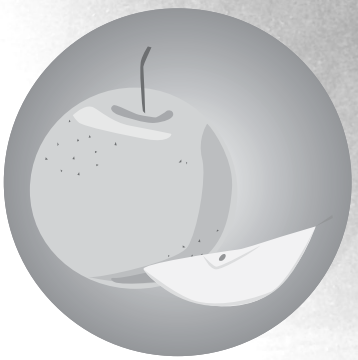
TOTTORIKEN BUNKA KANKOUJITEN

中部

▲法華寺畑遺跡（倉吉市）

▲東郷池（東郷町・羽合町）





●倉吉市　●羽合町　●泊　村　●東郷町

●三朝町　●関金町　●北条町　●大栄町

●東伯町　●赤碕町

天神川

中国山地の**三国山**、津黒山、**烏ケ山**に源を発する竹田川と小鴨川の二つの支流をあわせて**日本海**へと注ぐ一級河川。県中央部を流れ、県内三大河川の一つである。本流の流長（竹田川を含む）は三四キロ、指定延長三一・七キロ、流域面積は五〇〇・五平方キロメートルである。

天神川上流域の竹田川、三徳川は川底を深くえぐり、小鴨川上流部では**大山**南東部の火山裾野を開析して急崖の浸食谷を形成している。中流部には開けた谷底平野が見られ、小鴨川中下流部には大山火山噴出物が広く分布し、天神野台地や久米ヶ原台地を形成している。小鴨川と竹田川の合流地点には、倉吉の市街地が発達する。

かつて天神川下流付近で氾濫や乱流が繰り返されていた。そこで、流路を一定させるため河川改修が行われ、橋津より西側の東伯郡北条町江北にあった天神の森を開削し、現在の河口が作られ、下流部の河道が一定した。河口西側には東西一二キロ、南北一・八キロの**北条砂丘**が広がる。

倉吉市

打吹公園

倉吉市仲ノ町
ＪＲ倉吉駅よりバス十一分、市役所・打吹公園前下車、徒歩五分

倉吉市の旧市街地の南にそびえる打吹山（標高二〇四メートル）は、江戸時代の初めまで城郭が築かれ、その秀麗な姿とあいまって、地域のシンボルとして親しまれてきた。

明治三十七年（一九〇四）、当時の皇太子（後の大正天皇）の山陰行幸を迎える場所として公園が整備された。以後も整備が進められ、現在、城跡を含めて四五ヘクタールに及ぶ総合公園となっている。

打吹山一帯は、山麓の庭園や施設を除くとスダジイやシラカシなど常緑広葉樹が優勢な森林で覆われている。城跡を中心に林を開き、うっそうとした老樹の間を廻遊するように遊歩道が整備され、「森林浴の森一〇〇選」にも指定された名園である。

ソメイヨシノを中心にサクラ四千本、ヒラド、クルメ、キリシマなどツツジ四万本が植えられていて、山陰を代表する花木庭園であり、「日本の都市公園一〇〇選」「さくら名所一〇〇選」にも選ばれている。園内には回遊庭園の他、動物が飼育され家族連れも多く訪れる。四月から五月にかけては「倉吉春まつり」が開催される。

なお、**倉吉博物館**前から約三〇分で登ることができる打吹山頂上からは、眼下に倉吉平野、**天神川**、**日本海**を一望におさめることができる。近くには馬の絵馬で知られる**長谷寺**及び光格天皇の生母大江磐代君を祭る**大江神社**がある。

史跡 打吹城跡

倉吉市仲ノ町
ＪＲ倉吉駅よりバス十五分、市役所・打吹公園入口下車、徒歩四〇分

標高二〇四メートルの打吹山の山頂を中心として築かれた城。『伯耆民談記』は**山名時氏**の嫡子佐衛門佐師義が当城を築いたと伝えている。『陰徳太平記』には宇津吹城、宇津葺城とも記されている。『伯耆民談記』によると、城の正面を北にして天守台のある本丸のほか、南条備前守が居住していたという備前丸とよばれる「二の丸」、山田越中が居住していた「越中丸」（三の丸）、小鴨元清が居住していたという小鴨丸、山麓に「南条屋敷」があった。

現在、打吹山に残る城跡の遺構は、山頂部の曲輪部、西側に派生する尾根上に展開する曲輪群、北側の山麓部に分かれる。

しかし、配置からこれらの曲輪が造られた時期はそれぞれ異なり、室町時代には山頂部周辺、戦国期に西側の曲輪群、近世に主部と北側山麓部分が整えられたと考えられる。南条氏や近世初頭の中村氏によって整備されたものと思われる。

「倉吉」については、「覚書草刈将監」に草刈景継が倉吉城を攻めたと記されている。また吉川元春の書状には、毛利方の部将・益田元祥に「久米郡内倉吉五〇〇石」の地を約束している。

吉川氏奉行人・山県春次らは、益田氏家臣・小原豊前守に倉吉に所領を給付することに決めたが、代わりに「守護分」を与えている。近世の倉吉は三六三石余だったことから、益田氏に給付された倉吉は、打吹山山麓の城郭と倉吉町、さらに「守護分」のような周辺の郷村を含む広域の地域であろう。

伝　説

昔、むかし、山のふもとに舞い降りた天女が水を浴びていた。その姿を農夫が見つけ、羽衣を隠されてしまった。天女は天へ帰ることができず、農夫と結婚し二人の子供をもうけた。

ある日、天女は羽衣を見つけ子どもたちを残したまま、天に帰っていった。子どもたちは寂しがり、母を呼ぼうと山に登って太鼓を叩き、笛を吹いたという。「打吹山」という名前はこの伝説に由来する。

倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館

倉吉市仲ノ町　JR倉吉駅よりバス十五分、市役所打吹公園入口下車、徒歩五分

倉吉博物館は、桜の名所としても知られる打吹山のふもとにある**打吹公園**の一角に、倉吉市の市制二十周年を記念して、昭和四十九年（一九七四）五月に開館した。

館内は、美術部門と歴史部門に分かれ、**前田寛治**や**菅楯彦**をはじめとする郷土ゆかりの洋画家、日本画家の作品や倉吉市周辺の遺跡から出土した考古資料、国の重要文化財をはじめ、旧石器時代から江戸時代までの出土品などが展示されている。

重要文化財のうち二件は古墳時代の装飾須恵器である。野口一号墳（倉吉市志津）の装飾子持壺付装飾器台には、狩り・相撲・弾琴の様子を示す物語性に富んだ装飾がある。

また、上野遺跡（倉吉市三江）出土品は、装飾須恵器の終末形態を示し形式化が著しい。どちらも葬送儀礼の変遷過程を示す貴重な遺物である。古墳時代の土製祭祀遺物である谷畑遺跡（倉吉市上神）出土品は、種類の豊富さと量の多さに特徴がある。

県指定文化財のうち二件は弥生時代の遺物、他の二件は埴輪である。そのなかの小田銅鐸二口（倉吉市小田）は、弥生時代の農耕祭祀に用いられる祭祀具で、複数埋納された例としては県内唯一の出土例である。史跡**阿弥大寺墳丘墓群**（倉吉市下福田）出土品は、弥生時代の山陰地方特有の墳墓である四隅突出型墳丘墓の供献土器群である。埴輪は、甲と鎧を着け顔に入れ墨をした武人埴輪（倉吉市小鴨より出土）と小首を傾けた愛らしい表情の鹿埴輪（倉吉市向山より出土）である。

その他にも、奈良時代の遺物である**伯耆国分寺跡・国庁跡**の出土品や**大御堂廃寺跡**の銅製匙・獣頭などをはじめ、平安時代の瓦経塚としては日本最古の紀年銘をもつ**大日寺瓦経**などが常設展示してある。

昭和五十七年（一九八二）十月には、倉吉歴史民俗資料館が博物館に隣接して設置された。明治から大正時代の民俗資料が中心に展示され、当時の暮らしや産業について紹介している。

この地方で古くから盛んであった倉吉絣や鋳物業について知ることができる。

●開館時間　午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）

●休館日　月曜日、祝日の翌日、年末年始

●問合せ先　☎0858・22・4409

賀茂神社

倉吉市葵町　JR倉吉駅よりバス十五分、倉吉市役所打吹公園入口下車、徒歩一〇分

賀茂神社は、別雷神を祭神とする。当社の縁起などによると、明応年中（一四九二～一五〇一）に、京都上賀茂社から分霊を勧請したと記される。

かつては、賀茂皇太神宮とか賀茂大明神とかいわれ、寛政年代（一七八九～一八〇一）までは倉吉町の総氏神であったが、その後、町の東半分の総氏神となった。寛政七年（一七九五）の『神社改帳』から、四月酉日と九月十一日に御幸が行われた

ことがわかる。維新後、現社名に改称された。

当社には、鶏卵状の「星石」（天拝石とも）と呼ばれる隕石が保存されているといわれる。

また、当地で語り継がれている「羽衣伝説」では、天女が鳥居の近くにある井戸の傍に生えた夕顔をつたって天に昇ったといわれ、その井戸は「夕顔の井戸」と呼ばれる。

長谷寺

倉吉市仲ノ町
JR倉吉駅よりバス二〇分、長谷寺西口下車、徒歩十五分

奈良時代創建の古刹で、倉吉市打吹山にある。東西に二つの遊歩道があり、自然探勝するにふさわしい。

法道上人が開いたといわれるが明らかでない。本尊の薬師如来は、室町時代前後のものである。ここには昭和三十二年（一九五七）二月に県の保護文化財に指定された奉納絵馬が多く所蔵されており有名である。巨勢金岡が描いたといわれる「天文十八年白馬之図」は、夜な夜な絵から抜け出し、暴れ回ったという伝説があるほど勇ましい。この絵馬をはじめ、古くは天文五年（一五三六）、そして天和・延宝・貞享・元禄・安永・天保・嘉永とそれぞれの時代に描かれた立派なものが多い。延宝五年に倉吉の有力な商人赤崎屋次郎右衛門が奉納した、浮世絵風の歌舞伎踊りの図は美術的にも優れている。鐘楼には南洋から持ち帰った鐘と、明徳の年号のある鐘がかかっている。この鐘は『伯耆民談記』によると作州・長田八幡宮にあった梵鐘という。

サクラの頃は特に参拝者や観光客が多い。ふもとには池田恒興（勝入斎）を弔うために建てられた勝入寺がある。

大江神社

倉吉市葵町
JR倉吉駅よりバス十五分、倉吉市役所前下車、徒歩一〇分

明治十三年（一八八〇）十二月、倉吉市および付近の人々が大江磐代君の霊を祀ることを願い、許可を得て社号を磐倉神社と称えた。これを聞いた閑院宮載仁親王から神鏡を賜わったので、これを御神体として、賀茂神社に合祀した。

明治四十四年（一九一一）十月に倉吉市（当時は町）民により神社が新築され、更に社号を大江神社と改称し、**打吹公園**の西南に社殿を建設し、神鏡などを移した。

なお、大江磐代君は光格天皇の御生母である。父は倉吉の出身で岩室宗賢といい、母はりんといった。

磐代君の幼名はつるで、延享元年（一七四四）に、倉吉市湊町に生まれ、九才のときに父に連れられて京都にのぼった。禁裏使番の生駒守意は彼女を可愛がり、妻の寿仙は文芸や婦道を教え、後に成子内親王に仕えた。

磐代君は、天資聡明で徳操高く、筆跡にも優れ、また歌道にも通じていた。成子内親王が閑院宮典仁親王に嫁ぐときには侍妃となり、同家に入った。その後典仁親王の女房となり明和八年（一七七一）祐宮兼仁親王を出産したが、これが名高い光格天皇である。安永元年（一七七二）には第二皇子寛宮盈人親王を、ついで有栖川宮家を継いだ織仁親王を出産し安永六年「磐代」と呼ばれるようになった。

寛政六年（一七九四）、典仁親王が亡くなると、直ちに薙髪し法号を蓮上院楽邦定生禅尼とした。文化九年（一八一二）十二月九日、逝去した。六十九才であった。

物産 倉吉白壁土蔵群・赤瓦

倉吉市西仲町、東仲町、魚町
JR倉吉駅よりバス十五分、明治町下車、徒歩三分

江戸時代、倉吉には陣屋が置かれ、地域の経済・産業の中心として発展した。打吹山と小鴨川に挟まれた倉吉の古い町並みは、陣屋寄りの町筋が商人町となり、玉川を挟んで反対側の一筋が職人町を中心とした町となった。

西仲町から魚町にかけての玉川沿いの土蔵群で町並みの保存活用が進み、平成十年四月には、まちの活性化を願う人たちによってこれらの土蔵や古い建物を活用した「赤瓦」が誕生した。かつて造り酒屋や醤油屋として使用されていた白壁の土蔵や建物が、物産館、喫茶店、ギャラリーなどさまざまなかたちで利用され新たな魅力を発信している。現在、

赤瓦一号館から八号館まであり、観光客に好評である。

堺町一丁目、魚町、東仲町、研屋町、新町一丁目区は平成十年（一九九八）に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、町並み保存が進展している。しかし、西仲町を中心とした西半分は未選定のままである。この西仲町にある江戸時代から続く高田酒造は平成十三年（二〇〇一）、国の有形文化財に登録され、また、よい香りをかもしていることから同年環境省の「かおり風景一〇〇選」に認定された。重要な建物が並んでいるだけに、追加選定が待たれるところである。

●開館時間　午前九時～午後六時
　※店によって異なります。
●休館日　無休
●問合せ先　☎0858・23・6666

倉吉大店会

倉吉市魚町
JR倉吉駅よりバス十五分、明治町下車、徒歩五分

倉吉市街の中心部、魚町の東端、津山往来と倉吉往来の分岐点に土蔵造二階建の建物がある。これは、旧国立第三銀行倉吉支店として明治四十一年（一九〇八）八月に建てられたものである。

敷地はほぼ方形であるが東面と北面が通りに面する角地であるため、入口は角地に合わせて四十五度に振りポーチが付き出ている。外壁は白漆喰塗、腰は石張である。和風をモチーフとする外観に対して、内部は洋風意匠である。玄関から中に入ると、客だまりと営業室を分ける欅のカウンターには渦巻きの付いた持送りが付き、壁・天井は白漆喰。吹き抜けで天井が高く、中央のランプ吊り元の浮き彫り（中心飾り）は二重の円で縁どられ目を引く。二か所に設けられた階段も当初のものである。二階にはギャラリーや応接室がある。中心飾りの浮き彫りは二階応接室では葡萄唐草、西階段では桜があしらわれている。内外とも保存状態はよく、改造も少なく、当初の姿をよく留めている。屋根には国立第三銀行を表わす「三」の字をデザインした鬼瓦も残る。

交通の分岐点という立地から、建築当時よりランドマークとして親しまれており、明治から大正期の建物が多く残る歴史的町並みのシンボルとなっている。

平成八年（一九六六）十二月、国の登録文化財になる。

大岳院

倉吉市東町
JR倉吉駅よりバス十五分、明治町下車、徒歩五分

白壁土蔵群にほど近いところに位置する大岳院は、山号を万祥山といい、曹洞宗に属し、本尊は釈迦如来である。

慶長十年（一六〇五）に、米子城主・中村一忠の一族、中村栄忠が建立したといわれる。中村栄忠は八幡（現東伯町）城に入った父・中村一栄が死去したため、家督を継ぎ八幡から倉吉に転じた。亡父を三明寺村（現倉吉市）の廃寺であった山名寺を再興し弔った。しかし、小鴨川を渡って参拝する不便さから、天正の頃（一五七三～九二）に山名氏豊の居館跡という現在地に寺を建立し、一栄の法名「万祥院殿大嶽周磧大居士」から山号・寺号が付けられた。

天正十四年（一五八六）に、中村一忠の死により中村家は断絶し、栄忠も追放され寺も一時衰退したが、寺領の寄進もあり隆盛になった。

境内には、山名氏豊と娘・駒姫を祀った駒姫八幡と『南総里見八犬伝』のモデルとされる里見氏とその主従の墓がある。安房国（千葉）舘山十二万石の城主・里見忠義は、慶長十九年（一六一四）に大久保忠隣事件に連座して公称三万石（実質四千石余）の倉吉に転封された。元和八年（一六二二）、忠義は二十九歳で堀村（現関金町）で死去した。遺言によって遺骨は当寺と一部紀州高野山に葬られた。

県指定保護文化財の中国明代の古三彩鉢皿が所蔵されている。これも里見忠義の遺言によって当寺に贈られたものといわれる。

倉吉パークスクエア

倉吉市駄経寺町
JR倉吉駅からバス十五分、倉吉パークスクエア下車

倉吉パークスクエアは、中部地域の活性化を図るため平成十三年（二

〇〇一）四月にオープンした複合施設である。

ここには、ホールやセミナールームを備えた**「倉吉未来中心（くらよしみらいちゅうしん）」**や日本で唯一の梨をテーマにした博物館**「鳥取二十世紀梨記念館」**、生涯学習の拠点施設として立市図書館、「倉吉交流プラザ」がある。

また、「温水プール」や飲食・物販施設の「食彩館」など、遊びの空間としても充実している。屋外には、遊具ゾーンのほか、ニホンリスのオープンケージなどがあり、小さな子どもから大人まで楽しめる。

●開館時間
午前九時～（詳しくは各施設にお問い合わせください。）
●休館日　月曜日、年末年始
●問合せ先
☎〇八五八・四七・一一八四（代）

倉吉未来中心（くらよしみらいちゅうしん）

倉吉市駄経寺町　JR倉吉駅よりバス十五分、倉吉パークスクエア下車

倉吉未来中心は、「人、ものの交流、情報発信」をテーマに中部地域の活性化及び文化の拠点施設として整備され、平成十三年（二〇〇一）四月に開館した。千五百席の大ホールのほか、多目的に使用できる小ホール、大・小合わせて九つのセミナールームが設けられている。

アトリウムは、高さ四二メートルの吹き抜けの空間で、この施設のシンボルになっている。木造で構成され、自然光を十分に取り込んだ温かみあふれる場所となっている。

また、鳥取県男女共同参画センター「よりん彩」などの公的機関も設置されている。

●開館時間　午前九時～午後一〇時
●休館日　月曜日、年末年始
●問合せ先　☎〇八五八・二三・五三九〇

鳥取二十世紀梨記念館

倉吉市駄経寺　JR倉吉駅よりバス十五分、倉吉パークスクエア下車

平成十三年（二〇〇一）四月にオープンした文化・娯楽の複合施設**「倉吉パークスクエア」**内に設置されている。

梨をテーマにした日本で唯一のミュージアムで、鳥取県の代表的な農産物であり、二十世紀の県農業を支えてきた**二十世紀梨**をはじめ、世界の梨が紹介されている。

梨のルーツや歴史を紹介する展示をはじめ、鳥取県が二十世紀梨の特産地になるまでの歩みを映像やロボットでわかりやすく説明した劇場、世界各地の梨コレクション、梨を使ったさまざまな料理を試食できるキッチンギャラリーなど、見て、体験して、学べる施設となっている。

入口付近には、この施設のシンボルにもなっている、広がる枝の長さが二〇メートルもある国内最大級の二十世紀梨の巨木が展示されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　第三月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始
●問合せ先　☎〇八五八・二三・一一七四

史跡　大御堂廃寺跡（おおみどうはいじあと）

倉吉市駄経寺町　JR倉吉駅よりバス十五分、倉吉パークスクエア下車、徒歩三分

山陰最古級の寺院跡で、**天神川**と小鴨川の合流付近にある標高一六メートルの自然堤防上に立地する。古くから存在が知られ、江戸期の地誌にも記録がみえる。

平成六年（一九九四）からの発掘調査の結果、寺域や伽藍（がらん）配置などが明らかとなった。

寺域は、南辺が不明だが東西一三五メートル、南北約二一〇メートルと地方寺院としては広大な敷地をもち、この南東寄りに主要な建物が配されている。東に塔、西に金堂、北に講堂が配され、回廊が、塔と金堂を囲み講堂につながっている。金堂は南北棟で東に面し、塔に向き合う形となる。この建物配置は、全国にも数例しかない官寺特有の「川原寺式」伽藍で、大御堂廃寺の寺格の高さを物語っている。金堂の基壇（きだん）規模は、東西一二・三メートル、南北一八・四メートルである。塔は一辺九・六メートルあり、中央に心礎の抜き取り穴がある。講堂は、東西三二メートル、南北一六メートルである。講堂の北側には建物二棟が並置された僧坊がある。西築地塀中央付近では一メートル四方の井戸枠状の上水施設が見つかった。この木枠底部には木樋が取り付けられ、西側にある湧水地まで九六メートルのびている。

瓦・土器類の他、木製品・金属製品なども見つかっている。鬼瓦は蓮華文と全身鬼面文がある。軒先瓦は

七世紀中頃から八世紀後半頃までのものが十数種類あり、なかでも七世紀後半頃の瓦類が最も多い。このころ伽藍が整備されたと推定される。墨書土器には郡名を冠した「久米寺」銘があり、寺名が明らかとなったばかりでなく公的な性格を帯びた寺院であったことを物語る。

銅製匙や銅製獣頭の金属製品も見つかった。匙の形状は正倉院宝物や韓国慶州市の雁鴨池出土品に酷似している。銅製獣頭は、国内外に類似品が見られないが朝鮮半島産の銅を使用していることが科学分析で明らかになった。

官寺特有の伽藍配置や豊富で質の高い出土品などから、山陰地方を代表する貴重な白鳳寺院として、平成十三年（二〇〇一）に国史跡となった。

史跡 大原廃寺塔跡

倉吉市大原
JR倉吉駅よりバス一〇分、大原下車、徒歩一〇分

奈良時代の寺院跡。**天神川**下流の右岸段丘上に立地する。昭和九年（一九三四）、畑の開墾中に塔心礎が発見され翌十年に国史跡に指定された。

塔心礎は、長径二・九メートル、短径二・八メートルの方形に近い石で、中央部に直径〇・六五メートル、深さ〇・一二メートルの孔がある。厚みはないが面径は山陰地方最大規模を誇る心礎である。

昭和六十年（一九八五）から六次にわたる発掘調査の結果、金堂が西に、塔が東に並列し、背後に講堂が位置する法起寺式伽藍配置を持つことが明らかとなった。創建時期は七世紀末頃と推定される。寺域は東辺が約八一メートルあり、他三辺は七〇メートル前後と短く、地形に制約されたためかやや歪んだ方形区画である。講堂は掘立柱建物で、塔と金堂の中軸線より金堂側に寄って配置されている。この講堂の位置は、西北二キロ離れた**大御堂廃寺跡**や東伯町の**斎尾廃寺跡**と同じであり地域色のある建物配置となっている。

大量の瓦類、土器類とともに、鴟尾・塑像片・塼仏・金属製品などが発見された。このほか軒丸瓦と軒平瓦がある。創建時の軒丸瓦は大御堂廃寺跡と同型であり、影響があったことを物語る。軒平瓦には、忍冬唐草文を飾るものがあり、山陰地方には数少ない瓦当文様として貴重である。塼仏は如来立像を二段三列に配した「六尊連立塼仏」形式である。

寺域は現在、竹藪と果樹園になっているが、塔心礎は自由に見学することができる。

田内城跡

倉吉市厳城
JR倉吉駅よりバス一〇分、中部総合事務所前下車、徒歩十五分

『伯耆民談記』の田内城の項によれば、この城跡は田内の南「仏石山」の上にあり、国府川筋の向並木の往還がそのころの城下であると記されている。それを証明するように、国府川底から柱や井戸、鍛冶・職具が出土したと伝えられている。

この地域は、現在の倉吉市・田内の東を流れる小鴨川と三朝方面から流れ下る竹田川の合流点となっている。交通の要路の地で見日町として知られていた。

田内城の城下町として開けた見日町は、内海の中にある「小都会」とも伝えられ、殿町、大町、花町があったという。中世の時代では合流点に内海が形成され、現在より水量の豊富な川の中州に水上交通の拠点ができ、市が立ち人々が行き来したといわれる。『倉吉市誌』では、見日町について、「田内橋の下流より今津堰」に近い場所を推定し、ここが南北朝時代初めの守護所に近い町とみている。

史跡 三明寺古墳

倉吉市厳城
JR倉吉駅よりバス十五分、宮川町下車、徒歩十五分

市街地の北側に位置する向山丘陵の南側中腹に造営された円墳。直径一八メートル、高さ六メートルあり、山陰地方最大級の規模を誇る横穴式石室を持つ。横穴式石室は全長八・三メートルある。埋葬空間である玄室は、長さ三・七メートル、幅三・二メートルとほぼ正方形に近く、高さは三・一メートルと天井が高い。横穴式石室の構造は、正面奥に一枚の巨石を立て、その両側にやはり大きな切石を立てかけ、上部は別の石を石室側に内傾させて積み上げている。この古墳は古くから開口していたようで、発見当時、副葬品はなかった。切石を用材としていることと

石室構造からみて、七世紀初め頃の造営と考えられている。

この古墳の特徴は、玄室内に造られた石囲いである。奥壁に接して四枚の板石を長方形に組み合わせもので、現在は地蔵尊がその上に祀ってある。この石囲いは、熊本県などに分布する石室内に設置された「石屋形」と呼ばれる棺構造に類似している。正面の板石は、地蔵尊をのせるために立てられたらしく、本来は入り口に向かって口を開いたコ字形に組み合わせ、その上に蓋石をのせ床には小礫を敷いていたものと思われる。この石屋形状の施設は、鳥取県内には類例のない特異なもので、三明寺古墳の造営者が西北九州の有力者と密接なつながりをもっていたことを物語る。

墓制変遷を知る上で貴重な古墳であることから、昭和六年（一九三一）に国史跡に指定されている。

史跡 石塚廃寺跡

倉吉市石塚
ＪＲ倉吉駅よりバス三〇分、石塚入口下車、徒歩一〇分

天神川の支流、小鴨川左岸の河岸段丘上に位置する奈良時代の寺院跡。墓地のなかにある塔心礎とその北側約一七メートル離れた位置に金堂跡と推定される基壇状土盛が存在する。塔跡と金堂跡が南北に連なることから、主要建物の配置は堂・塔が一直線上に並ぶ四天王寺式とみられる。塔心礎は、長径約二・四メートル、短径二メートルの大きさで、中央に直径〇・七メートル、深さ〇・一二メートルの柱を据える円孔がある。金堂跡と考えられる基壇は、東西一六メートル、南北一二メートルの規模で数個の礎石が残っている。

軒丸瓦二種類と軒平瓦一種類が出土し、いずれも八世紀前半代の型式である。軒丸瓦の一つは、大きな中房の周囲に十六の短い蓮弁を配しているのが特徴である。この瓦は、伯耆国内には類例がなく、吉備津彦神社（岡山市）境内にある奈良時代の寺院跡出土瓦に似ている。軒平瓦は、忍冬唐草文を飾る珍しいもので文様の祖型は奈良法隆寺の軒平瓦にある。

昭和三十一年（一九五六）、県の史跡に指定されている。

山名時氏

山名氏の祖は、新田義重の長子・義範に始まり、義範が上野国緑野山名庄に住んだことから、山名を称号したといわれる。

『寛政重修諸家譜』には、義範六世を義氏とし、義氏ははじめに新田氏、後に足利尊氏に従った。足利方の部将として知られた山名時氏は、「大将軍山名伊豆守」と見えるのがはじめで（建武三年七月二日付け、平子重嗣軍忠状）、大将軍山名時氏に中国地方の諸氏が従っていたようである。建武三年（一三三六）頃の伯耆守護は石橋和義であったが、その後、山名時氏が守護に任ぜられたと考えられる。

建武四年に伯耆に入部した時氏は守護代・小林左京亮を通して**伯耆国**支配を強化し、守護領の拡大をはかった（三宝院文書）。

初期の足利政権にあって、尊氏の執事・高師直と尊氏の弟・直義が反目、観応元年（一三五〇）幕府は分裂し、中央官僚と地方の守護のほとんどを巻き込んだ争乱に突入した（観応の擾乱）。

時氏は、観応二年（一三五一）、直義、次いで足利直冬とともに南党となった。『太平記』によれば、山名時氏・師義父子は宮方の御旗を掲げ（南党として）富田判官、伊田、波多野、矢部、小幡の諸氏も同意したので、「伯州、雲州、因州、作州」四か国を勢力下に治めた、といわれる。

『伯耆民談記』には、時氏の拠点の一つとして久米郡田内城（現倉吉市厳城）があげられ、田内城から南西約二キロの地にある打吹城を記している。

打吹城は標高二〇四メートル、東伯耆三郡の一つ久米郡のほぼ中央に当り、伯耆国衙に近い地域である。反幕府の旗幟を明らかにし、中央政府に対抗した時氏父子は、一〇年余の後の貞治二年（一三六三）幕府と和解した。『太平記』に、この時、時氏が安堵された五国として、因幡、伯耆、丹波、丹後、美作とある。『太平記』によると、山名時氏は伯耆・丹波守護であるが、山名一族で前記の五か国の守護職を認められていたことになる。

極楽寺のシダレザクラ

倉吉市八屋
ＪＲ倉吉駅よりバス五分、八屋下車、徒歩五分

このシダレザクラは、鳥取県下最大のものである。明治元年（一八六七）、伊木の庄屋の涌嶋氏が苗木を二本取寄せその一本を境内に植えたもので、寺の門を入って左側にある。

樹高は一六メートル、胸高直径は

八四センチあり、主幹は途中で大きく二つに分かれ、さらに無数に分枝して南に二五メートル、東西二〇メートルのドーム型に広がり、末端の枝は細くて垂直に下がる。花は淡紅色で赤味が強く、一芽に三〜四個咲く。花径は小さく花弁は一枚、開花期は三月下旬から四月上旬である。

良質の土壌に恵まれ、樹齢が百年を過ぎても樹勢が良く、毎年華麗な花をみせ見物客でにぎわう。「とっとりの名木百選」に選ばれている。

波波伎神社

倉吉市福庭
JR倉吉駅よりバス一〇分、福庭車庫下車、徒歩十五分

事代主命・下照姫命・天雅彦命など九神を祭神とする。

『延喜式神名帳』の河村郡二座の内「波々伎神社」と考えられる。伯耆二宮とも、五社大明神とも小松大明神とも称され、失火・落雷などで幾度か焼失・再建がくり返された。

明治元年（一八六八）に、現神社名に改称された。

当社の神官を務める船越家は、『大同類聚方』に記載されている吹出物、やけど、打身などにきく秘伝の「伯耆薬」の製法を伝承していたが、現在は造られていない。

境内には**福庭古墳**と国指定天然記念物の社叢がある。

史跡 福庭古墳

倉吉市福庭
JR倉吉駅よりバス一〇分、福庭車庫前下車、徒歩十五分

古墳時代後期の古墳。大平山から西に延びた丘陵の先端部近くの伯耆二宮・**波波伎神社**境内に位置する。直径三五メートル、高さ四メートルの円墳で埋葬施設として横穴式石室をもつ。石室の全長は九・五メートルあり、玄室は長さ二・九メートル、幅二・二メートル、高さ二・三メートルである。

石室は、奥壁と側壁に表面を整形した大きな石を立て、その上に梁状の石を石室内側にせり出して据えている。壁石の接する個所には段をつけて組み合せ、玄門に架かる天井石には玄門石をはめ込むためのほぞ穴を設けるなど石室構築に精度の高い石工技術が反映されている。玄門近くの床面には、石障と呼ばれる遺骸を安置する場所を区画するための横長の石がある。

奥壁の上部には、赤色顔料による鋸歯文（連続三角文）が認められる。装飾を施した古墳は、県内東部から中部にかけて偏在するが、その多くは線刻によるもので顔料を使った彩色装飾は県内では珍しい。

古くから開口していたため、発見当時副葬品はなかったが、古墳の形がやや角張り方墳気味であることや石室の用材加工技術や構築方法などからみて七世紀代の築造と考えられる。

倉吉地方における横穴式石室の変遷過程を知る上で貴重な古墳であるとして、昭和三十一年（一九五六）、県の史跡に指定された。

大日寺

倉吉市桜
JR倉吉駅よりバス四十五分、桜下車、徒歩一〇分

市街地から田園風景が続くなかを西へ向かって八キロメートルほどいったところにある。寺伝によると、承和八年（八四一）に僧円仁慈覚大師が創建したといわれる、天台宗の古寺である。永延二年（九八八）には、恵心僧都が再興したといわれるが、正確なところはわからない。

所蔵される旧国宝・阿弥陀如来坐像は、高さ一一・六六メートルで鎌倉時代の作で、胎内に「嘉禄二年卯月」の銘文のある立派なものである。

また、寺の西方、極楽円地坊から多くの瓦経が出ている。経文を後代にまで保存するために、土の柔かいうちに経を硬筆のようなもので書いて、堅焼きしたと考えられる。延久三年（一〇七一）の文字も見え、筆者も記されている。史料として貴重なもので、その一部が当寺に所蔵されている。

なお、寺から〇・五キロメートル程離れた所に五輪塔が群立している。なかには源頼朝の墓と伝えられる、鎌倉時代の立派なものもある。

また、この五輪塔群の中に、昭和三十一年（一九五六）三月に県の天然記念物に指定された、樹高三〇メートル、樹齢千年のみごとな大イチョウがそびえている。

ここの鐘が出雲（島根県）の鰐淵寺にあって（寿永二年の銘）重要文化財に指定されている。

岩倉城跡

倉吉市岩倉字
ＪＲ倉吉駅よりバス四〇分、岩倉下車、徒歩四〇分

小鴨城とも呼ばれ、岩倉集落の南東にあたり、標高二四七メートルの通称「城山」に所在する。小鴨氏累代の居城であった。城山は東側で、ほかの山並みにつながるものの半孤立した山で、南側の山裾には岩倉川が流れている。

城跡の遺構は、山頂部と北西側の山麓部に見られ、山頂部は南側の最高所に主部を置き、南部を除く各方面に大小の曲輪を配置している。

『小鴨系図』は、小鴨掃部頭基仁が岩倉城に寄ったと伝えている。また、基保は平氏の軍勢催促に従ったと、『玉葉』にみえる。これにより、源平の戦いが全国的に波及していた時代に、伯耆国の在庁官人であった小鴨氏は、前国主であった平氏の指示に従ったことがうかがわれる。

小鴨氏の本拠は、久米郡小鴨郷である。鎌倉時代の正和五年（一三一六）、六波羅御教書案に、小鴨左衛門尉とみえているその人は、伯耆守護代と考えられている。室町時代の伯耆守護山名氏のもとで、守護代として知られるから、この時代にも伯耆地方の有力国人であった。

永昌寺

倉吉市岩倉
ＪＲ倉吉駅よりバス四〇分、岩倉下車、徒歩二〇分

永昌寺は、山号を久宝山といい、曹洞宗に属し、本尊は十一面観音である。開山の年代は不明である。岩倉城主であった小鴨氏の菩提寺でもあった。天正十年（一五八二）に同城が落城したとき、当寺も兵火にかかり焼け落ち、縁起など一切を焼失してしまった。寛永五年（一六二八）に再興された。

境内には県指定文化財の石造「岩倉十三重の塔」がある。高さが三・七メートルで、製作されたのは鎌倉中期と推定される。これは岩倉城の南の谷を隔てた山裾から出土したもので、十三重塔と並んで立つ三基の宝塔も同じ所から出土した。出土地近くの「奥の院」という所に大寺院跡が残っている。これも小鴨氏に関わる寺院跡と考えられている。

国庁裏神社

倉吉市国分寺
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、国府下車、徒歩十五分

国庁裏神社は、大己貴命などを祭神とし、文字通り伯耆国庁の裏に鎮座した。「コクチョウリ」とも「コクチョウノウチ」とも読まれた。創社年代は不明だが、国司が伯耆国内の神々をここに勧請し、伯耆の総社として祀り参詣したものと考えられる。

『伯耆民談記』によると、祭礼は伯耆国造の系譜を引くという石川家が司祭し、中世末、同家が滅亡するまで続いたといわれる。また、不入岡の国造屋敷と当社とを結ぶ道は、国造道と呼ばれたと伝える。

近世末まで惣社・総社大明神といわれ、国分寺村の産土神でもあった。また、藩の祈願所でもあった。明治維新時に、現社名に改称された。

史跡 伯耆国庁跡

ＪＲ倉吉駅よりバス二十四分、農高前下車、徒歩八分

国庁とは、奈良時代に中央から派遣された役人（国司）が地方政治を行う拠点であり、現在でいえば県庁にあたる。伯耆国では当時の中央である奈良により近い東部の久米郡八代郷（現在の倉吉市社地区）に置かれた。

伯耆国庁跡は、倉吉市国府集落の南西側にあたる標高約四〇メートルほどの低丘陵上に立地する。東約三〇〇メートルには、**国分寺跡**と国分尼寺跡（法華寺畑遺跡）がある。

国分寺跡の発掘調査を契機に、農道を切通し、崖面にみられた柱穴が注目を集め、昭和四十八年（一九七三）から昭和五十三年（一九七八）まで六次にわたる発掘調査が行われた。

国庁は、主要な建物が設けられる国庁域（内郭）とその周囲の国衙域（外郭）とから構成されている。

国衙域は、東西二七三メートル、南北二二七メートルの規模で、四方が溝で区画されている。東辺に、東西五一メートル、南北一四九メートルの張り出し部がある。これは、中央政治の拠点である平城宮と同じ構造である。

国衙域の中央部には溝で区画された東西八四メートル、南北九三メートルの国庁域が設けられている。国庁域の発掘調査により、主要建物の規模や配置、そして八世紀後半から十世紀初頭頃までの四時期に及ぶ変遷過程が明らかとなった。

《一期》八世紀後半。国衙が創建された。国庁域は、掘立柱建物塀により東西八四メートル、南北九四・五メートルに区画され、中に南門、南北に前殿、正殿、後殿を配し、東西には脇殿とその南側に楼閣風建物が設けられた。これらはすべて掘立柱

建物で左右対称に配置されている。

《二期》九世紀初頭。正殿と後殿の規模を若干大きくし、東西脇殿の北側には楼閣風建物が新たに配置された。

《三期》九世紀中頃。伯耆国衙が最も整備された時期である。国庁域の周りに溝を掘り、内側に築地塀をめぐらしている。東西八四メートル、南北一〇六メートルに区画し奥行きを拡げ、建物は南門以外すべて礎石建物に建て替えられた。また、南門から正殿の間をバラス敷の舗道とした。

《四期》九世紀末から十世紀初頭。国庁域を区画する溝を埋めて西と南に拡張し、東西一一一メートル、南北一二六メートルに区画した。建物配置と規模はそのままである。

このように伯耆国庁は、八世紀後半に掘立柱建物を主体として造営されたものが、九世紀初頭には礎石建物として整備され、十世紀頃には終末をむかえたことが明らかとなった。

土器類、瓦類の他に鉄製鋤先や八稜鏡鋳型・帯金具など、官衙特有の遺物がみられる。土器は食器類が大半を占め、なかには伯耆国内の郡名を記した「川村」や人名と思われる「人麻呂」などの墨書土器もある。瓦類は、南門付近と楼閣風建物周辺からの出土がほとんどで、主要建物は瓦葺きではなかったと考えられる。また、五枚が重なって出土した鋤先は、未使用状態であり、建物建設に先立つ地鎮具との見方もある。「瑞花双鳥文鏡」と推定される八稜鏡鋳型の出土は、国衙に付属する官営工房跡があったことを示すものである。

昭和六十年（一九八五）に、国分尼寺と推定される法華寺畑遺跡を含めて国史跡に指定された。その後、国庁の北東に位置し倉庫群の建ち並ぶ不入岡遺跡の存在が明らかとなり、この遺跡は納税のための物資収納施設であるという性格付けから国府関連遺跡と考えられ、法華寺畑遺跡も含めて、平成十二年（二〇〇〇）に「国史跡伯耆国府跡国庁跡　法華寺畑遺跡・不入岡遺跡」となった。

現在、国庁跡と不入岡遺跡は未整備であるが、法華寺畑遺跡では四脚門（西門）と板塀の一部が復元されている。

また、遺跡の全体像がわかるように、遺構復元模型も設置するなど歴史学習の場となっている。

史跡　伯耆国分寺跡

倉吉市国分寺・国府
ＪＲ倉吉駅よりバス二十四分、農高前下車、徒歩八分

国分寺は、奈良時代に聖武天皇の発願により国ごとに建てられた官立の寺院である。伯耆国分寺は、伯耆国の東部にあたる倉吉市国分寺集落の北側、**天神川**の支流国府川左岸の低丘陵上に建立された。

この辺りは古くから古瓦が出土するので、国分寺の所在地と考えられていたが、県道改修工事を契機に昭和四十四年（一九六九）、塔跡の位置が明らかとなった。その後、昭和四十五年（一九七〇）から四十六年にかけて三次にわたる発掘調査が実施され、金堂・講堂などの主要伽藍を特定することができた。

寺域は、東西一八二メートル、南北一六〇メートルの長方形に区画され、周囲に幅三メートル、深さ一メートルの溝を廻らし、東西と北には土塁・築地塀を造り境界としている。中心伽藍は、寺域の西寄り三分の一のところに南門・中門・金堂・講堂が南北一直線に配置されている。塔跡は、南東隅に位置する。寺域内からは、鬼瓦をはじめとして大量の瓦類と塔の軒先四隅に取り付けられていた風鐸、僧侶の修行用具である錫杖頭そして土師器・須恵器が出土した。創建期の軒瓦は、伯耆国分寺特有の瓦当文様で、なかには淀江町の**上淀廃寺跡**所有瓦の系統をひくものもあり、国分寺造営が伯耆国内の有力者の力を得て行われたことを示すものとして興味深い。

古記録（『続左丞抄』）によれば、伯耆国分寺は、北隣する国分尼寺内の倉の失火により天暦二年（九四八）に類焼したと伝えられ、発掘調査においても遺構や遺物に火災の跡が見受けられる。昭和四十九年（一九七四）、国の史跡に指定された。

不入岡・国分寺の石仏

倉吉市不入岡・国分寺
JR倉吉駅よりバス二〇分、国府下車、徒歩一〇分

不入岡集落西側の家並みの途切れた北端にある石仏。小礫を含んだ長方形土盛の北西隅に位置する。高さ一・二二メートルの舟形の安山岩に二体の像が上下に半肉彫りされている。上の像は、舟形の光背を負い蓮台に定印を結んで端座する阿弥陀如来坐像である。蓮華の彫り出しは細かく丁寧である。下の像は、合掌した僧形の坐像で上の如来坐像よりやや大きめに彫り出されている。

像の両側に銘文があり、右には、「永和元乙卯年十一月□日」、左は、「願主道意」とある。永和元年（一三七五）は、南北朝時代の北朝系の年号を示す。造像願主は**名和長年**の四男笠見四郎行忠とする説もある。

「道意」という僧が阿弥陀如来を礼拝する姿をあらわす室町時代初期の希少な石仏である。昭和三十一年（一九五六）、県保護文化財に指定される。

伯耆国分寺の石仏は、現在倉吉市立社小学校敷地内にあるが、もとは伯耆国分寺跡にあった。石仏は五体あり、長方形の輝石安山岩に彫られている。高さは四〇～八〇センチで、幅は二八～三七センチある。薬師如来を中心とした日光・月光菩薩ではないかとの見方もあるが定かではない。顔を印象強く表現しているが、身体の表現は彫りが浅く平板的である。

石仏二体の裏面には、幅約九センチ、深さ五センチの溝があり、この石仏が伯耆国分寺跡の塔の基壇地覆石を転用して造られたものであることが塔跡の発掘調査時に判明した。造られた時期は不明だが、表情のユニークな石仏として昭和三十一年に県保護文化財に指定される。

史跡 阿弥大寺 墳丘墓群

倉吉市下福田
JR倉吉駅よりバス二〇分、上福田下車、徒歩十五分

弥生時代後期の墳丘墓。丘陵先端近くの河岸段丘上に立地する。長方形の墳丘の角が突出する「四隅突出型」と呼ばれる墳丘墓三基からなる。昭和五十四年（一九七九）、五十五年（一九八〇）に農地造成事業に伴い発掘調査が行われた。

河川に向かって緩やかに傾斜する北側斜面を削って平坦面を設け、東西に連ねて築かれている。東側の一号墓は、東西一三・七メートル、突出部を含めた長さは一七・八メートルある。墳丘斜面と突出部には、川原石の貼石が施されている。突出部上面には、比較的平らな石を据え、飛び石のごとく並べている。埋葬施設は、墳丘に二基と墳丘外に十二基の土壙墓があり、いずれも副葬品はなく、数基の土壙墓に供献土器が見られる。

二号墓は一辺六・四メートル、突出部を含めた長さは八メートル、三号墓は一辺五・五メートル、突出部を含めると七・八メートルある。一、三号墓とも貼石や突出部の状況は一号墓とほぼ同じであるが、規模が小さい。

四隅突出型墳丘墓は、中国山地の三次平野に出現し、出雲地方を中心にその発展型が分布する。**妻木晩田遺跡**にみられるように多くは眺望のきく丘陵高地に立地するが、本墳丘墓は標高の低い河岸段丘上に築かれている。突出部が優美に伸び、しかも通路としての機能を持つことから、この種の墳丘墓の祖型を示すものとして昭和五十六年（一九八一）に国史跡に指定された。

物産 倉吉絣展示即売処

倉吉市新町一丁目
JR倉吉駅よりバス約十五分、明治町下車、徒歩三分

私邸の一部を開放して、昭和五十七年（一九八二）七月に開設された。作品は、地元の特産物や工芸品などを展示、販売する**「赤瓦」**内でも取り扱われている。

展示室には、反物、のれん、タピストリ等が飾られ、予約をすれば機

織の実演を見ることもできる。
●問合せ先　☎0858・22・3360

物産 倉吉絣舎

倉吉市福庭
JR倉吉駅より徒歩一五分

私邸に設けられた**倉吉絣**の展示施設。開設者は自ら倉吉絣を織り、長年研究してきた。開館した昭和五十四年（一九七九）以来、来訪者に解説を行い倉吉絣の美しさを伝えている。
入館を希望する場合は予約が必要。
●問合せ先　☎0858・26・6203

倉吉の鋳物師（いもじ）

鋳物とは、金属を溶かし、鋳型に流し込んで道具を作る技術のことで、こうした技術を持つ職人を鋳物師という。倉吉の上小鴨地区では、中国山地の鉄と、近隣の山から取れる炭、小鴨川の川砂を背景に、鋳物業が発展してきた。
なかでも、上古川の斎江（さいごう）家は寛永三年（一六二九）創業と伝えられ、昭和二十年（一九四五）まで約三百年続いた鋳物師職人の家系である。生活に欠かせない鍋釜、鉄瓶から寺院の梵鐘まで生産している。特に「斎江ガンス」と呼ばれる茶釜が多く流通していた。
斎江家は、鋳物師廃業後、資料の保存に務め、原材料から鋳造用具、関係文書など多岐にわたる資料を収集した。この斎江家の資料は、昭和六十年（一九八五）に国の重要有形民俗文化財に指定された。倉吉市の**歴史民俗資料館**（倉吉博物館）でも、その一部を展示公開している。

牛玉（ごおう）さずけ

倉吉市仲ノ町

打吹山の中腹に位置する天台宗の古刹、**長谷寺**（はせでら）で毎年旧暦の一月十八日（本尊十一面観音の初縁日）に行われる行事。
長谷寺が発行する「牛玉」という棒状の御守りを参拝者が競って奪い合う。牛玉とは、この地方でウツギと呼ばれる木を芯にして、長谷寺の御本尊の真言やさまざまな呪文が書かれているお守りで、平年は十二本、閏（うるう）年は十三本と一年の月数だけ授けられる。
牛玉には、それぞれ副賞として酒や米の商品がつき、牛玉を授かった者は、福を分け与える意味で、商品の酒や米を近所や知り合いに分ける慣わしになっている。
かつて牛玉さずけの夜には、参道に露店が立ち並び、おおいに賑わった。現在も、翌朝に東仲町・西仲町の商店街で観音市が開かれ、農具や竹製品、苗木などを求める人々の姿が見られる。長谷寺の牛玉さずけは、鳥取県中部地方の住民にとって、春を知らせる行事でもある。

くだがゆ（管粥）神事

旧暦の小正月に行われる占いの神事。竹筒を粥とともに炊き、粥の詰まり具合によって、翌年の農作物の豊凶を占う。
倉吉市生田地区では、現在、地区あげての行事として伝承されている。行事は「神男」と呼ばれる人物を中心に進められる。神事には、一年を表す一升二合（閏年は一升三合）の米と、早稲・晩稲・小豆など作物を表す十数本の竹筒が用意される。初日は、生田神社の籠もり堂で神男の指示に従い、竹に米を詰め粥を炊き上げる。翌日、粥は生田の水谷家に運ばれ、神男が竹を一本一本割って作物の出来高を発表する。この結果は紙に書かれ、氏子に配られる。
西伯郡中山町逢坂八幡でも旧暦の小正月に神官の指示のもとで同様のくだがゆ神事が行われる。

橋田邦彦（はしだくにひこ）

橋田邦彦は優れた生理学者であり、戦前に文部大臣を務めた。
明治十五年（一八八二）、久米郡倉吉（現在の倉吉市）の漢方医・藤田家に生まれ、十六歳のとき橋田家の養子となった。
東京帝国大学を卒業後、四年間にわたってドイツ、オーストリア、フランスなどに留学して生理学を専攻した。帰国し、東京帝大医学部教授としてわが国の生理学の基礎を築いた。昭和十二年（一九三七）、第一高等学校長を兼任した。昭和十五年（一九四〇）から十八年まで文部大臣を務めた。昭和二十年（一九四五）、終戦を迎え連合国軍から戦争犯罪人としての指名を受け、自決した。
橋田邦彦は、禅の哲学を背景に西洋の自然科学をとらえ直そうと試みた。『正法眼蔵釈意』『空月集』などの著書で説いている。
倉吉市内**打吹公園**（うつぶき）に、「学道不二唯従自然」と彫られた顕彰碑が建立されている。

河本緑石（かわもとりょくせき）

河本緑石は、教員のかたわら自由律俳句をはじめ現代詩、評論、油絵、俳画などの分野で才能を発揮した。

明治三十年（一八九七）、東伯郡社村（やしろ）福光（現在の倉吉市福光）の地主の家に生まれた。本名は義行。読書好きな少年で、中学生のときから自由律俳句を作っている。

盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）で、宮澤賢治らと文芸同人誌『アザリア』を発刊した。緑石は毎号、俳句や詩、随筆を発表している。宮澤賢治とは生涯変わらぬ親交を結んだ。

大正十年（一九二一）帰郷した緑石は、中学校の図画教諭・中井金三を中心に結成された芸術団体「砂丘社」に参加した。絵の展覧会や写生会、音楽会、雑誌の編集、講演会など多彩な活動を展開し注目された。

鳥取県立農学校（現在の県立倉吉農業高等学校）に勤務し農産加工、武道などを受け持ち、熱心な教員として生徒からの信望も厚かった。昭和八年（一九三三）七月、水泳訓練中の同僚を救助しようとして亡くなった。三十七歳だった。

主な著書に、詩集『夢の破片』、評伝『大空放哉傳』、句集『大山』がある。

県立倉吉農業高等学校の敷地には「あらうみのやねやね」、倉吉市国府には「風が落すもの拾ふてゐる」の碑があり、緑石の詩魂を讃えている。

中井金三（なかいきんぞう）

中井金三は、芸術団体「砂丘社」を通して先進的な芸術運動を展開し、鳥取県における芸術文化の発展を促した。

明治十六年（一八八三）、鳥取県久米郡中河原村（現在の倉吉市中河原）に生まれた。同三十八年（一九〇五）、東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部）に入学し、西洋絵画の新風に触れ画家を志したが、家業が倒産したため断念した。大正二年（一九一三）、倉吉中学校（現在の県立倉吉東高等学校）に図画教諭として着任し、芸術の最新の表現を説き、生徒の**前田寛治**（まえたかんじ）らに刺激を与えた。

大正九年（一九二〇）に設立した砂丘社には、前田寛治、**河本緑石**（かわもとりょくせき）、前田利三らがメンバーとなり、展覧会や写生会、音楽会、舞踏公演など幅広い分野で活動し刺激した。

昭和四十四年（一九六九）に八十五歳で死去するまで若い世代を導いた。

羽合町

橋津海岸（はしづ）

東伯郡羽合町橋津
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分

東伯郡羽合町橋津川付近の海岸。海水浴場南側は山が迫り、急な崖が連続している。この崖は、かつて海面が上昇していた頃の海岸線で、当時に形成された海食洞（離水海食洞）と海食崖（旧海食崖）がみられる。この崖の底面の高さは二～七メートルあるので、この高さ分だけ海面低下が起きたものと考えられる。離水海食洞の前面には砂丘砂が堆積している。橋津海岸東側の少し内陸には、新生代鮮新世安山岩からなる標高一〇七メートルの**馬ノ山**がある。

また、離水海食洞近くには**トウテイラン**の自生地がある。

橋津海水浴場があり、夏場には多くの海水浴客でにぎわう。

トウテイラン

トウテイランはゴマノハグサ科の多年生草本で、漢字で洞庭藍と書く。江戸時代には園芸植物として有名

であったが、中井猛之進博士の所見によると、この園芸用はトウテイランではなくヒメトウテイランで、ヨーロッパ産の輸入品であったようである。

トウテイランは日本に生育し、丹後、伯耆、隠岐など**日本海**沿岸（羽合町橋津～泊村小浜海岸）に自生する乾性植物である。昭和五十二年（一九七七）、羽合町の天然記念物に指定された。希少な植物であることから保護が必要となっている。

温泉 羽合温泉

東伯郡羽合町上浅津
ＪＲ倉吉駅よりバス十五分

風向明媚な**東郷湖**の北西部にある温泉。鳥取県に多い山間の温泉地と違って、平坦な田園が湖に突き出したような地形にあり、湖面を渡る風もかろやかである。周囲に海水浴場やスポーツ公園もあり、多様に楽しむことのできる温泉地として発展してきた。

十一の泉源があり、東郷湖にも二本の源泉がある。平均温度は五五・三度、湧出量は毎分二、九三八・五リットル。泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物、硫酸塩泉である。東郷湖周辺の沖積層の下に凝灰岩や安山岩からなる第三紀層があり、その下には花崗岩がある。それらに発達する割れ目に沿って温泉水が湧出している。現在、温泉は集中管理されている。

羽合温泉の歴史は、天保十四年（一八四三）、地元の人が鳥取藩主へ湖中の泉源利用を願い出たのが最初である。慶応二年（一八八六）、上浅津の湯村幸助が池の中に孟宗竹を差し込んで湯を集め、四斗樽に貯めて湖上温泉を楽しんだという。

明治時代になって上浅津で掘削に成功し、幸助が掘って成功した「幸助湯」などが基礎になり発展した。中でも「山陰ホテル」は、山陰地方初のホテル形式の温泉旅館であった。昭和四十年代末になって増改築が進み、伝統的な旅館がビル形式の大型宿泊施設へ変わっていき、県下でも有数の温泉地になった。

昭和五十三年（一九七八）、浅津温泉から羽合温泉に名称が変更された。

かつては、ＪＲ松崎駅から船で旅館へ向かっていたが、現在は国道九号から訪れる人が多い。

周辺では、**東郷湖羽合温泉臨海公園**の整備が進み散策に格好の場となっている。また、湖岸には東郷湖で漁をする船の船溜まりがあり、漁船の姿も湖上の風物詩になっている。このほかにも、**橋津古墳群**をはじめ**長瀬高浜遺跡**などの遺跡が多数ある。

温泉 ハワイゆ～たうん

東伯郡羽合町上浅津
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、羽合町老人センター前下車

羽合温泉を利用した施設で、平成五年（一九九三）六月に開設された。大、中、小の三つのタイプの浴槽があり、明るくゆったりとした造りになっている。施設内には、娯楽室やホールも備えられている。

周辺には、**東郷湖羽合臨海公園**があり、スポーツで汗をかいた後の入浴にも適している。

●開館時間　午前九時～午後九時まで
　※入浴は午後八時三〇分まで
●休館日　第一・三火曜日、それ以外の火曜日は午前休み
●問合せ先　☎０８５８・３５・４９１９

ハワイ風土記館、伯耆ロマンの里・馬ノ山公園

東伯郡羽合町上橋津
ＪＲ倉吉駅よりバス約二〇分、ハワイ海水浴場下車、徒歩二〇分

馬ノ山は、山陰最古最大級の馬ノ山四号墳があるほか、鳥取城を攻めた羽柴（豊臣）秀吉が**御冠山**に布陣し、吉川元春軍と対峙した所としても知られる。また、**三朝東郷湖県立自然公園**内にあり、眺望はすばらしく、一帯は、平成元年度（一九八九）から三年度にかけて、伯耆ロマンの里・馬ノ山公園として整備された。

平成四年（一九九二）四月には、埴輪と城をイメージしたハワイ風土記館が、馬ノ山の頂上に設置された。五階建ての施設には、遺跡から出土された土器や鎌倉時代の東郷荘（荘園）の様子を記した**「伯耆国河村郡東郷庄下地中分絵図」**などの歴史関係資料が展示されているほか、**東郷湖**や羽合平野が一望できる三六〇度のパノラマ展望室がある。

●開館時間　午前九時～午後四時

●休館日　月曜日・祝日・年末年始
●問合せ先　☎0858・35・2242

名勝　尾崎氏庭園及び尾崎家住宅

東伯郡羽合町宇野
ＪＲ倉吉駅よりバス三〇分、宇野東口下車徒歩五分

庭が造られたのは江戸時代中期と考えられる。約三十二坪の小池泉鑑賞式の庭園で、主屋の書院に座して見ると、向かって左にいり込みを見せ、ここに枯滝の石組を置く。石組は三尊形式で、中央の高さ八〇センチの立石を本尊に、左右それぞれ三三センチと二一センチの横石が配されている。中央部には出島が作られ、右方に長く流れを導き、池泉には亀島が突き出ている。池泉に向かって手前右角には、近くの海岸で取れた安山岩の自然石を利用した手水鉢があり、水面に雲や周囲の風景を写し、風雅な趣を醸し出している。立派なクロマツがあるほか、モッコクの大木やソテツ、地元産のツバキなど三十種を数える。

なお、主屋の建築年代は明らかでないが、作庭と同時期と考えられる。現在の家構は、梁間八間、桁行十一間で、梁間、桁行ともに三分された九間取の形式になっている。広間型五間取を原形とする考え方もあるが、広間部分の表側に式台が設けられ「げんかん」と呼称されていること、「なかのま」が仏間を控えた客室の次の間と考えると、江戸中期・明和頃に発展する整形六間取が原形で、裏側に拡張が行われたと考えるのが妥当だろう。茅葺き屋根は勾配がきつくどっしりとした構えである。屋根形式はいわゆる伯耆型の寄棟となり、大棟に櫓煙出しが設けられている。

庭に開く客間は書院形式の室で、二方を巡る縁は二段となり、庭園と客間のつながりをより色濃くしている。

昭和十二年（一九三七）十二月、国の名勝に指定されている。

馬ノ山

東伯郡羽合町橋津

馬ノ山は、**三朝東郷湖県立公園**の東北、橋津の東にある一〇七メートルの小山である。現在の馬ノ山は、多くは畑となりなだらかな丘陵をなしているが、鎌倉時代中期の**東郷庄下地中分絵図**によれば「馬野」と記されている。馬野は牧で、そこに馬が放牧されていたことがわかる。絵図に描かれている馬は、全部で十二頭、領家分五頭、地頭分五頭で、二頭が一宮領のものである。

天正九年（一五八一）、織田信長の部将・羽柴（豊臣）秀吉は、鳥取城に派遣されていた毛利方の城将・**吉川経家**ほか、因幡国人の籠もる同城を包囲した（第二回鳥取役）。

経家を救援するために、吉川元春は諸隊を率いて馬ノ山に布陣した。この折、元春は、橋津川の軍船をかえし東進の決意をしたといわれる。

一方、鳥取城を陥れた秀吉の大軍は西進して鹿野を経て、**東郷湖**の東標高一八六メートルの**御冠山**（東郷町宮内）に陣した。この折の馬ノ山の備えを見た秀吉は元春の決心を察知し、御冠山の本陣を払って鳥取に帰ったといわれる。元春方も、これを追撃せず軍兵をまとめた。

当地における東西二大勢力の衝突は避けられたが、馬ノ山の布陣は、元春の背水の陣として伝えられている。

史跡　橋津古墳群

東伯郡羽合町上橋津
ＪＲ倉吉駅より車で一〇分

東郷湖の北側に位置する古墳群。標高一〇六・九メートルの**馬ノ山**から北西に延びて日本海に突き出す丘陵の先端部に立地する。馬ノ山古墳群とも呼ばれる。

古墳時代前期から後期にかけて築造された前方後円墳五基、円墳十九基、墳形不明一基の計二十五基からなり、そのうち十四基が昭和三十二年（一九五七）に国史跡に指定された。

古墳群のなかで最大規模の四号墳は、前方部の一部が削り取られているが、現存長八八メートルの前方後円墳である。昭和三十一年（一九五六）の発掘調査で竪穴式石室・箱式石棺・埴輪棺などの埋葬施設が十基以上明らかとなった。竪穴式石室は、全長八・五メートルと全国でも最大級の規模を誇り、石室内から中国製の三角縁神獣鏡他五面、鉄剣・鉄刀

や石製腕輪（車輪石・石釧）など豊富な副葬品が発見された。これらの副葬品は畿内色の強いもので、大和政権と密接な係わりをもっていた伯耆地域の首長の墓と考えられる。この四号墳のさらに西側丘陵突端部に全長六八メートルの前方後円墳（二号墳）がある。未調査であるが、四号墳より立地的に好位置を占め、前方部が古相を示す撥形であることから、四号墳より先行して築造されたとの考えもある。いずれにしろ共に古墳時代前期に築造されたものである。

古墳群には、古墳時代後期築造の横穴式石室墳も含まれ、古墳時代の全期を通じて形成された古墳群であることがわかる。一帯は公園として整備されており、丘陵の高所に設置された展望施設には、古墳からの出土品を写真パネルで展示するなど古墳群のガイダンス施設ともなっている。

橋津の藩倉

東伯郡羽合町橋津
ＪＲ倉吉駅よりバス約十五分、橋津中央口下車、徒歩五分

橋津は古くから水運による物資の集散地として重要な役割をはたしていたが、江戸時代になると鳥取藩はここに灘御蔵を設置し、上米の津出しが行われた。

港には御手船（千石船）が出入りし、船番所や役宅が設けられ、御蔵から北方の浜屋敷にかけての往来（本通り）には廻船問屋、米問屋、旅籠などが軒を並べ賑わっていた。藩倉を描いた絵図「文化五年橋津御蔵絵図」（鳥取県立博物館蔵）によると、当時、御蔵十四棟、計屋一棟が軒を連ねていた。そのうち古御蔵・三十間北蔵・片山蔵の三棟の御蔵が現在も姿をとどめていて、鳥取藩藩倉の歴史を物語る貴重な遺構である。

現存する古御蔵は平屋建の身舎に庇をつけた桁行十二間・梁間三間の長大な建物である。古御蔵はもと桁行十五間だったが、現在地に移築した時（大正十年）に桁行十二間に縮小されたと思われる。内部は四間ごとに板壁で区切られ三室に分かれている。この蔵は棟札が現存しており、大工棟梁・新蔵、大工・辰蔵により天保十四年（一八四三）五月に上棟したことがわかる。壁は小舞壁で、外部は大壁、内部は半間ごとに立つ柱や下げ苧を露出させている。屋根は疎垂木の上に木羽を葺き、それを下地とする切妻桟瓦葺。鬼瓦には揚羽蝶紋（池田家家紋）がかたどられ、鳥取藩池田家の建物であることを強くアピールしている。三十間北蔵・片山蔵はいずれも桁行五間・梁間三間である。

藩倉を取り巻く御土居（土手）が周辺に一部残り、また付近にはこの地方きっての豪商・中原家（天野屋）の住宅や土蔵も現存し、往時の面影を今に伝えている。

平成八年（一九九六）十一月に三十間北蔵、同十年三月に古蔵が町の文化財に指定された。

長瀬高浜遺跡

東伯郡羽合町長瀬
ＪＲ倉吉駅より車で十五分

弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、**東郷湖**の北西、**天神川**河口近くの砂丘地に立地する。昭和四十九年（一九七四）にはじめて遺跡が確認され、昭和五十二年（一九七七）より実施された発掘調査によって、一〇メートル以上堆積した白砂の下にある黒砂中より多くの遺構や遺物が発見された。

調査面積は約五万平方メートルにものぼり、竪穴式住居跡百七十四棟・掘立柱建物四十八棟・井戸跡六基などの生活遺構、そして土壙墓四十二基・古墳四十一基・石棺墓三十基・木棺墓十四基・埴輪棺十三基などの埋葬遺構、弥生時代の玉作工房跡四棟、水田跡、畑跡などが確認された。また、大型高床建物、大型方形周溝遺構、形象埴輪群出土地なども発見されている。

この他にも大量の土器類や、埴輪類、金属製品などが多数出土した。弥生時代前期の管玉製作工程を示す玉作り関係資料や朝鮮系無文土器、小銅鐸や銅剣・銅釧・巴形銅器のほか、銅鏃・素文鏡などの青銅器がある。古墳時代前期の竪穴式住居跡からは鉄製農工具や鉄製釣針が出土している。また、奈良時代から中世末にかけてのものは、和鏡や白磁が墓域周辺で発見されている。

家形・甲冑形・盾形・鞆形・蓋形の形象埴輪と多数の円筒埴輪が、砂丘地の一か所から集中して出土したことは特筆すべきことである。これらの埴輪は、本来古墳に立て並べるべきものを何らかの事情で砂丘地に放置したものとみられる。鬼気迫る造形意匠と丹塗りされた埴輪群は葬送儀礼の祭具にふさわしく、なかでも甲冑形埴輪はほぼ実物大で重量感ある迫力の逸品である。実物の埴輪を使って古墳祭儀の実相を復元で

きるのは遺存状況が良く、器種がそろっている長瀬高浜遺跡の埴輪をおいて全国にも他になく、しかも、埴輪祭儀の古段階を示す埴輪群としても貴重であり、昭和六十一年（一九八六）に重要文化財に指定されている。

これらの遺構の調査や遺物の出土により遺跡の変遷が明らかとなった。弥生時代前期には管玉製作を中心とした玉作工房が営まれ、中期になると墓域を形成し、古墳時代前期から中期かけてはふたたび大きな集落がつくられる。この時期に、北東二キロの**馬ノ山**に四号墳をはじめとする**橋津古墳群**がつくられていることから、この古墳群を支えた人たちの集落であった可能性も考えられる。

古墳時代中期から後期には、集落が他に移動し、古墳が造営されるようになる。その後、奈良時代から中世末まで墓域として利用され、江戸時代初めころに飛砂によって一〇メートルもの白砂が堆積し埋没したものと思われる。

砂に埋もれた遺跡として全国的に注目された長瀬高浜遺跡であったが、終末下水道処理場建設のため、現場での記録を終えたのち消滅した。遺跡中最大の古墳で葺石をもつ一号墳は、遺跡近くに移築復元してある。出土品は、**羽合町歴史民俗資料館**に保管され一部が公開されている。

羽合町歴史民俗資料館

東伯郡羽合町久留
ＪＲ倉吉駅よりバス十三分、羽合町役場前下車すぐ

砂地に埋もれた遺跡として全国的にも有名な羽合町**長瀬高浜遺跡**の調査を契機に、出土品の公開を目的として、昭和五十九年（一九八四）に開館した。

資料館外観は、長瀬高浜遺跡で出土した古墳時代の家形埴輪をモチーフとした造りになっている。展示室は二つあり、一つは国指定重要文化財の長瀬高浜遺跡出土埴輪を、もう一つは、国史跡**橋津古墳群**の出土品をはじめ、町内の遺跡から発見された土器や石器を展示している。

重要文化財指定の埴輪のうち三十九個体は、ほぼ完全な姿に復原されており、そのうち家形埴輪・甲冑形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・円筒形埴輪・朝顔形埴輪が出土状況の写真パネルとともに常設展示されている。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分まで
●休館日　月曜日・祝日・年末年始
●問合せ先　☎０８５８・３５・３１１１

田後神社

東伯郡羽合町田後
ＪＲ倉吉駅よりバス十一分、田後下車、徒歩十五分

田後神社は、宝徳二年（一四五〇）、出雲国八重垣神社（現松江市）の分霊を、大ぼん（現北条町江北）に勧請したことに始まる。その後、**天神川**の川筋替えの時、現在地に遷座された。祭神は建速須佐之男命である。宝徳時代（一四四九～一四五二）に勧請され、牛頭天王を祀ったことから、近世には「大宝（法）天王」とも呼ばれた。

旧暦十一月一日に、新穀を供え豊作を祈願する霜月祭（お供え祭とも）という宮座形式の神事が行われる。

田後神社頭屋祭「宮の飯」

東伯郡羽合町田後
ＪＲ倉吉駅よりバス十一分、田後下車、徒歩十五分

羽合町田後の**田後神社**では、毎年旧暦の十一月朔日に「頭人」と呼ばれる五人の男性が「宮の飯」と呼ばれる神饌（神に捧げる特別な供物）をお供えし、一年の収穫を感謝する祭礼が行われる。

五人の頭人は、前日海に入り身を清め、海砂とホンダワラを一握りずつ持ち帰り、砂は境内などに敷き、ホンダワラは神前に供える。供えられたホンダワラの実の多い少ないで翌年の稲作の豊凶が占われた。当日は早朝から頭人頭の家で五升五合の玄米を臼でついて炊き、生の大根や炒った大豆などを混ぜ合わせた。これは「宮の飯」とか「御供」といわれ、後に氏子に分け与えられた。

この祭は、宝徳二年（一四五〇）に出雲の八重垣神社をこの地へ勧請（かんじょう）してから、五百年以上続けられているといわれる。室町時代の神祭の形式を伝える祭として重要である。

昭和六十一年（一九八六）に、県の無形民俗文化財に指定されている。

泊村

称名寺（しょうみょうじ）

東伯郡泊村泊
ＪＲ泊駅より徒歩一〇分

地蔵山清雲院称名寺は、浄土宗知恩院の末寺で心宗和尚によって開かれたという。本尊は恵心僧都（えしんそうず）作と伝える阿弥陀如来だったが、火災により焼失した。現在は、文政七年（一八二四）に、賀露（現鳥取市）の信者より寄進された湛慶（たんけい）作と伝える阿弥陀如来像が本尊となっている。

『蓮門精舎旧詞』によると、室町時代、地蔵菩薩が当村の浜に漂着し、これを安置する堂を建立したことがこの寺の始まりといわれる。『泊村の歴史稿』には、山号を地蔵山というのも、村人の夢枕に、「弘法大師作の元大山寺の地蔵尊が海底に沈んでいるので引揚げるように」とのお告げがあったからと記されている。この木像地蔵像は、村の文化財として泊地蔵堂に安置されている。

戦国期、寺は荒廃したが、本尊は河口城主・山名氏が城内で祀り、打吹城主・山名氏の家臣が寺を再建した際に戻された。また、この寺を称名寺とした。その後再び荒廃したが、寛文六年（一六六六）に再々興された。その後もたびたび火災に遭ったが、信者の熱意によって建立された。

泊村歴史民俗資料館

東伯郡泊村泊
ＪＲ泊駅より徒歩十五分

「村の歴史を知るために、村の歴史を伝えるために」ということを目的に、村内から農具、漁具、生活用具、民具などが収集され、昭和四十八年（一九七三）四月に旧泊中学校特別教室を使って開設された。さまざまな道具や生活用品を通して、当時の生活や気候などを知ることができる。

現在の建物は、昭和五十三年（一九七八）十二月に新築されたものである。

●開館時間　午前九時～午後四時
●休館日　年末年始
●問合せ先　☎０８５８・３４・３２２６

泊村グラウンドゴルフのふる里公園「潮風の丘とまり」

東伯郡泊村泊
ＪＲ泊駅より車で一〇分

遠くに**大山**を望み**日本海**を見下ろす高台に、平成五年（一九九三）八月に開設された。

グラウンドゴルフは昭和五十七年（一九八二）に泊村で考案されたスポーツであり、公園内には緑豊かな十六ホールのグラウンドゴルフ専用コースが広がる。そのほかにも巨大恐竜を配した探検の森、延長三四〇メートルのスパースライダーなどの遊具施設がある。

●利用時間　午前八時十五分～午後五時
●休園日　十二月三十一日、一月一日
●問合せ先　☎０８５８・３４・３２１７

泊港

東伯郡泊村泊
ＪＲ泊駅より車で五分

国道九号から分かれて泊港の町並みに入ると、漁港特有の密集した家々が続く。視界の開けたところが

泊漁港である。東に亀甲山（標高八七メートル）があり、山を背に、西北向けに防潮堤で囲まれた入り江である。湾の中程の突堤から右手が元の泊湊、左手は昭和六〇年代以後の新港である。灘郷神社の下には、湾内に溜まる砂を排出するため江戸時代に造られた道流提が残る。突堤はいずれも大正時代から築造されたもので、北防波堤、嶋提、南防波堤など当時の呼び方が今に伝わる。

現在、小型底引き船によるカレイ漁が盛んである。また、ブリ、アジ、マダイを目的にした刺し網漁や沿岸イカ釣漁が行われている。昭和五十六年（一九八一）には、採るだけの漁業から育てる漁業への転換を図る「鳥取県栽培漁業センター」が誘致され、石脇漁港に設置された。

港のある泊地区を挟んで、東の石脇漁港から小浜漁港は一里浜、西の宇谷地区までは八町浜と呼ばれる。昭和三十年代までは、この浜一帯で伝馬船による「地引き網」が行われ、ハマチやサバ、さらにイワシなどの大漁を見た。また、沖合では孟宗竹を使ってシイラを寄せる「しいら漬け漁」も盛んだった。このような漁法は、江戸時代から山陰海岸を代表する漁であり、今はめったに見られなくなった。村内には**泊村歴史民俗資料館**があり、当時の漁具が収集されている。なお、石脇地区は鳴き砂の浜で有名であり、夏は海水浴と海岸キャンプでにぎわう。

亀甲山には展望施設やグラウンドゴルフ専用コースのある「**潮風の丘とまり**」があり、グラウンドゴルフの発祥地（昭和五十七年泊村の考案）として専用コースが設けられている。山頂からは眼下に泊港から**日本海**を一望することができ、夕日がすばらしい。

東郷町

東郷湖（とうごうこ）（池）

東伯郡東郷町・羽合町

東伯郡東郷町と羽合町にまたがり、周囲約一〇キロメートル、面積約四〇八ヘクタールで、県内では**湖山池**に次いで大きい。湖底は低平で、水深は最深部で四・六メートル、概ね二・五メートル以下と浅い。

東郷池は、かつて**日本海**の入り江であったが、**北条砂丘**の形成と**天神川**からの土砂の埋め立てによって海から切り離され、潟湖として残されたものである。南半部から埴見（はなみ）川、羽衣石（うえし）川、東郷川、舎人（とねり）川が流入し、北西部から橋津川が流出して日本海に注いでいる。西側と南東側にはそれぞれ浅津、松崎の低湿地が広がるが、北東部では**御冠山**（みかむりやま）が張り出し、北岸には**馬ノ山**の丘陵が、南部には**鉢伏山**（はちぶせやま）から延びてきた低い尾根がせまっている。御冠山の張り出しと、浅津の低地が西から湖中に突き出ているため、池の形は中央部がくびれた瓢箪型を呈する。この形が翼を広げた鶴に見えることから、鶴の池とも呼ばれている。

湖底や湖岸から温泉が湧出し、松崎には**東郷温泉**が、浅津には**羽合温泉**がある。池一帯は羽合海岸と共に**東郷羽合臨海公園**に指定され、池を一周する道路や周囲の湖岸に各種のスポーツ施設、広場などが整備されている。**三朝東郷湖県立自然公園**の中核をなす池でもある。

東郷湖羽合（とうごうこはわい）臨海公園

東伯郡東郷町藤津（事務所）
ＪＲ松崎駅より徒歩十五分

東郷湖周辺に広がる約五一ヘクタールが三つの機能をもった公園として整備されている。

東郷町・羽合町にある「スポー

ツ・レクリエーションゾーン」には、ゲートボール場、テニスコート、スポーツセンター、リハビリスポーツ広場などがある。東郷町の湖畔には、国内最大級の中国庭園である**「燕趙園」**やクアハウス**「龍鳳閣」**などを含む「観光ゾーン」があり、ハワイ海岸には、海水浴をはじめサーフィンやジェットスキーなどマリンスポーツが楽しめる「海浜ゾーン」がある。

●問合せ先　☎0858・32・2189

伯耆国東郷庄下地中分絵図

「伯耆国東郷庄下地中分絵図」は、鎌倉時代・中期の正嘉二年（一二五八）十一月に作成された絵図である。地理歴史用「日本史」の教科書に、その部分図が紹介されており、著名な荘園絵図として知られている。

東郷庄として描かれている範囲は、**東郷池**を中心に橋津、馬野、伯井田、小垣、倉淵・耳江、長和田、東は野方、笏賀、西は北条郷、西郷、南は三朝町、竹田郷の地名がみえ、北は**日本海**に臨んでいる。

鎌倉中期から後期にかけて各地で荘園領主側と地頭とで荘園の利権をめぐる抗争が多発した。

東郷庄では、領家は京都の松尾神社と地頭の間での中分が複雑であった。地頭は東、荘園領主が西というように明確に区分できたり、自然地形（川山）、指標物によって境が理解できる場合には、絵図の必要はない。

伯井田、橋津など中分の取り決めが複雑であり、一宮領、地頭領、荘園領主（松尾神社）と三者の所領を明確に表現するのは困難であった。

また、この地が港湾や水上、陸上交通の要路にあたっており、幕府にとっても、重要な地域であった。将来に渡って、相論が起きないように、権益を明示する必要があり、正確な絵図として作成されたと思われる。

東郷庄の下地中分当時の地頭は、筑前から移住した原田一族が**伯耆国**に土着し、東郷氏と称して地頭に任ぜられたという説があるが、明らかでない。東郷庄の西に隣接する北条郷では、北条重時が地頭職にあり、建長元年（一二四九）には、庄四郎なる人物が地頭代に任ぜられている。北条氏は、鎌倉時代の後期にかけて交通の要衝に所領の拡大をはかっていた。

中世の交通路を考えると北条河（**天神川**）は**日本海**から、伯耆国府までを結ぶ重要な水上ルートに相当していた。

絵図には、神社や人家も描かれており、当時の状況がよくわかる。また、絵図に描かれた北条河は、橋津川に合流して海へ流れ込んでいるが、現在では流路が変えられ（江戸時代はじめの鳥取藩の工事による）、北条町の江北浜から海に流入している。したがって、絵図にみえる北条河の流路は、羽合町長瀬の東南方、羽合町役場前を通る国道九号付近が想定され、現在の船川に往時の様子をしのぶことができる。

温泉　東郷温泉

東伯郡東郷町松崎
ＪＲ松崎駅よりすぐ

東郷湖南岸に湧出する温泉。

江戸時代から湖中に温泉が湧き出ることが知られていた。天保十四年（一八四三）、地元の人たちが温泉利用を藩へ願い出たのが東郷温泉の始まりである。

東郷湖岸には、かつて龍湯島と呼ばれる島があり、明治時代には湧出する湯を用いた温泉施設があったが今はない。

明治五年（一八七二）、倉吉の豪農・山枡氏が旧引地村内の湖畔を掘削し掘り当てたのが「明五の湯」である。その後、泉源を開発して別荘とし、さらに改築し明治十七年（一八八四）に温泉旅館「養生館」とした。

その後、**山陰線（現山陰本線）**の開通に伴い、大正末期から新たな泉源開発も試みられ、松崎駅周辺にも温泉場が増え**三朝温泉**に次ぐ温泉地として名をなした。当時、松崎温泉と呼ばれていたが、昭和二十八年（一九五三）の東郷町誕生によって、名称は東郷温泉に統一された。

現在、五十一の源泉があり、うち十七井が利用され集中管理されている。平均温度は七十二・四度、湧出量は毎分一、二六二リットルである。

主たる泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物、硫酸塩泉である。胃腸病、リューマチ、神経痛によいといわれる。

温泉の地下の基盤は花崗岩で、JR松崎駅付近では、地下二二〇～二七〇メートル辺りにこの基盤に爆裂口のような形状で径三五〇メートルのほぼロート状のくぼみがある。そこには第三系の火山岩が凹部を埋めて厚く堆積している。温泉はこれらに発達する割れ目から湧出すると考えられる。

三朝東郷湖県立公園内に位置し、中国庭園**燕趙園**にも近い。毎年、七月十九日、二十日には「水郷祭」でにぎわう。

燕趙園

東伯郡東郷町引地
JR松崎駅より徒歩一〇分

鳥取県と中国河北省の友好のシンボルとして、**東郷湖**畔に開設した。

中国の歴代皇帝が造って楽しんだという皇家園林方式の庭園である。この庭園は、建設、素材の調達、加工など、全ての作業が中国で行われた。現地で造られたあと解体して日本に運ばれ、中国人技術者のもと、再度建設されたものである。

庭園内はボタンや蓮など四季折々美しい花に彩られる。平成十一年（一九九九）には、イベント会場である集粋館も設置された。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　第四火曜日
　※祝日の場合は翌日
●問合せ先　☎0858・32・2180

湯景 ゆアシス東郷「龍鳳閣」

東伯郡東郷町引地
JR松崎駅より徒歩一〇分

東郷湖畔に建つ龍鳳閣は、隣接する中国庭園**「燕趙園」**とマッチした中国風の建物となっている。

館内には、「寝湯」「運動浴」などいろいろなタイプの入浴方法を楽しむことができるほか、東郷湖を一望できる露天風呂もある。

また、プールやトレーニングルームなども設けられていて、多様な目的に合わせて利用できる。

●開館時間　午前一〇時～午後九時
●休館日　第四火曜日（祝日の場合は翌日）、十二月三十一日
●問合せ先　☎0858・32・2622

大伝寺

東伯郡東郷町引地
JR松崎駅より徒歩約十五分

大伝寺は、山号を九品山といい、曹洞宗に属する。九品堂とも呼ばれた。本尊は十一面観音と阿弥陀如来である。

万寿元年（一〇二四）に開かれたといわれ、大和当麻寺（現奈良県当麻町）で行われる練供養（浄土来迎会）の儀式で、中将姫の遺跡を移したと伝えられている。この寺の地名が「引地」というのもそれに由来するといわれる。

その後、寺は衰退し廃寺同然になったが、応安四年（一三七一）、羽衣石城主、南条貞宗によって再興された。その後も、幾度も災火に遭ったが、その都度再興された。慶長十年（一六〇五）の再興の際は、二十五菩薩の面を新調し、昔ながらの練供養を行なったと伝えられている。

現本堂は、明治十年（一八七七）に倉吉行蔵院を買い、移築したものである。阿弥陀堂には中将姫像と阿弥陀二十五菩薩像が祀られている。

旧暦三月十四日暮れから十五日にかけて**九品山会式**が行われ、遠近の信者の参拝でにぎわう。十五日午後は流灌頂の供養に続き、中将姫の練供養が行われる。

寺の前にある堀は、正嘉二年（一二五八）の東郷庄下地中分に際して、中分線として掘られたものであるとの説もある。

九品ばやし・九品山会式

九品山とは、東郷町引地の曹洞宗寺院、九品山**大伝寺**の春の祭礼のことである。会式（祭日）は、旧暦三月十五日、本寺に祀る中将姫の命日に行われる。この日は、中将姫の尊像が厨子から公開されるほか、先祖供養と塔婆や位牌を焼いて供養する流れ灌頂が行われ参詣者で賑わう。

かつては、中将姫を輿に載せ、阿弥陀堂の二十五菩薩に引き合わせる来迎会も行われ、県中部では、春の

三大祭り（他は**三徳山**と伯耆一宮）に数えられていたが、現在では、先祖供養を中心とした参詣となっている。

倭文神社

東伯郡東郷町宮内
ＪＲ松崎駅よりバス五分、藤津下車、徒歩三分

建葉槌命・下照姫命などを祭神とし安産の神としても知られる。この地方は、昔、織物を生業とする倭文族が多数居住したことから、織物の祖神といわれる建葉槌命を祀るため、創建されたものと考えられる。近くの**東郷湖**はまだ入海の時代で、現在湖岸にある藤津とか浅津と呼ばれる部落名は、古代織物の原料であったフジズルやアサに由来するともいわれている。

その後、農耕を生活の手段とした出雲族が移住し、大国主命の娘神である下照姫命も海路、宇谷と宇野の間にある仮ガ屋崎に着かれ、ここに居住され安産の普及に努めた。境内には安産岩と呼ばれる岩が参道横にある。また付近には御船岩・御腰掛岩などが残っている。他の神々も皆、大国主命の子神か関係の深い神々で、先住の倭文部と合流、生活し、後に祭神となった。

平安期に入ると、この地方も山岳仏教が隆盛を極め、神仏習合説は各地に神宮寺の創建を促したため、広大な社寺がこの付近にも伽藍を競うようになった。そのほとんどが天台宗に属していたという。この頃から当社は一ノ宮倭文大明神と呼ばれるようになった。当時の社殿は、大永年間（一五二一～一五二八）の戦乱によって荒廃したが、天文年間（一五三二～一五五五）に尼子晴久が社殿を造営した。

天正年間（一五七三～一五九二）には中国征伐の羽柴（豊臣）秀吉を迎え打つため、吉川元春は**御冠山**に陣取り、当社の神官や僧侶を追放して兵営としたが、霊夢を感じ神威を恐れて**馬ノ山**に引き上げた。その後、秀吉と元春は戦わず軍を引いている。その後も火事などにより消失・損壊を受けるたび、再建されている。現在の社殿は文化十五年（一八一八）に伯耆国内に義金を募り完成したものである。

大正四年（一九一五）、当社所有の山林の丘に下照姫の御墓と称する、土まんじゅうの形をした古墳からおびただしい埋葬品が発掘され、国宝に指定された。

毎年五月一日に行われる祭礼は、多くの人で賑わう。

浪人踊り

東伯郡東郷町松崎

当地に伝わる盆踊りで毎年七月二十日に開催される**東郷湖**の水郷祭でも披露される。

踊りの起源譚は、南条氏の遺臣の供養踊りとされている。東郷湖畔の**羽衣石城**は、天下分け目の関ヶ原の合戦の折に落城し、生き残った南条氏の兵士は浪人となって全国に散らばった。翌年から、盂蘭盆の夜になると浪人たちが集まり、城跡を見上げながら供養のために踊り、夜明けとともに去っていったという。

念仏踊りの形式を伝え単調な踊りである。音頭取りの七七七五調の哀調に富む口説きにあわせ、編み笠に黒装束の踊り手が、手をゆらゆら動かしながら踊る。拍子をとるところも音を立てず合掌するなど、鎮魂供養にふさわしい静かな踊りである。

昭和三十七年（一九六二）に県の無形民俗文化財に指定されている。

史跡 伯耆一宮経塚

東伯郡東郷町宮内
ＪＲ松崎駅より車で一〇分

平安時代後期の経塚。**東郷湖**東岸に位置する伯耆一宮**倭文神社**境内の東南側丘陵上にある。経塚は、一般に経典を地下に埋納した遺構で塚状に造られる。

伯耆一宮経塚は、直径一六メートル、高さ一・六メートルの円墳状で、深さ二メートル余りの所に長さ一・二メートル、幅〇・九メートルの石槨が存在していた。石槨内には、経典を納めた経筒や仏像、短刀があり、その周囲に多くの供養品が置かれていたという。

銅製経筒一口、金銅観音菩薩立像一躯、銅造千手観音菩薩立像一躯、銅板線刻弥勒立像一面、草花蝶鳥六稜鏡一面、素文鏡一面、檜扇残片、

短刀、刀子残欠、ガラス玉、銅銭二枚、漆器残片が出土した。

経筒は、総高四二センチで円筒形の筒身全体に埋納の趣旨が二百三十六文字にわたって刻まれている。「釈迦入滅後二千二十五年にあたる康和五年（一一〇三）十月三日に僧京尊が倭文神社の御前で如法経一部八巻を供養し、地中に埋納する」といった内容を記す。白鳳期に作られた金銅観音菩薩立像は、総高二一・五センチの細身の直立像で右手先が欠失している。銅造千手観音菩薩立像は、総高一六・三センチと小振りで平安時代の特徴を備えており、寄木造の手法を取り入れている。銅板線刻弥勒立像は、高さ一二・三センチ。舟形光背状の銅板に蓮華座上に直立する弥勒立像を毛彫りで描き、背面には「弥勒如来」と刻まれている。

本経塚は、造営時期が明らかで埋納品も多数にのぼることから経塚の実相を示す貴重な資料であるとして、出土品すべてが昭和二十八年（一九五三）に国宝に、昭和十年（一九三五）には国の史跡に指定されている。

史跡 北山古墳（きたやま）

東伯郡東郷町長和田（なごうだ）・野花（のばな）
ＪＲ松崎駅より車で五分

鳥取県のほぼ中央、周囲約一二キロの**東郷湖**の南岸、東郷町長和田・野花にある前方後円墳。丘陵の先端付近の尾根上に位置し、全長約一一〇メートル、後円部径約七〇メートル、高さ一二メートルあり、山陰地方最大規模の前方後円墳である。古墳時代中期初め頃の造営と推定される。

後円部側を湖に向け、前方部はなだらかに連なる丘陵を幅約一〇メートルにわたって丘尾を切断し形づくっている。墳丘には、人頭大の川原石が散乱しており葺石があったことがわかる。

後円部中央は、大きく盗掘されていたが、昭和四十一年（一九六六）の発掘調査により、遺骸を納めた埋葬施設二基が確認された。一つは埋葬施設の床面だけが遺存していたもので、長さ六・二メートル・幅四・三メートルの範囲に円礫を敷き詰めており、排水のための溝が前方部に向かって長さ一二メートル確認された。近くに散乱する石材から板石を積み上げた竪穴式石室であったと推定されている。もう一つは、長さ約一・五メートル、幅〇・五メートルの箱式石棺である。石棺内からは、人骨とともに中国製とみられる龍虎鏡や鉄刀・鉄斧・ヒスイ製勾玉・碧玉製管玉など多数の副葬品が出土している。また、墳丘各所からは、古墳時代中期前葉に位置付けられる円筒埴輪や、家、短甲、ニワトリなどの形象埴輪が多数出土している。

山陰地方における古墳時代中期を代表する古墳として重要であり、昭和五十五年（一九八〇）、国の史跡に指定された。

羽衣石城跡（うえしじょう）

東伯郡東郷町羽衣石
ＪＲ松崎駅より車で二十五分

南条氏の始祖は出雲国守護・塩冶高貞の息子で、南条伯耆守貞宗と伝えている。貞宗は貞治五年（一三六六）羽衣城を築いた。

倉吉駅と松崎駅のほぼ中間に位置する長和田から渓流に沿って、約四キロメートル上り、谷川の行き詰まった所に羽衣石の集落がある。ここから山道に入り登った頂上に羽衣石城があり、前面に**東郷湖**を見おろす。

現在では、山頂に模擬天守閣が改築されている（平成二年の建築）。翌年の調査によれば、備前焼、地鎮具と見られる壷、中国産の青磁器など出土している。

室町時代の南条氏は**伯耆国**守護代として知られている。永禄期、尼子（あまご）氏にかわって戦国大名毛利氏勢力が伯耆に及ぶとこれに従い、伯耆国三郡、河村、久米、八橋を支配した。

豊臣政権下でも東三郡（東郷町・倉吉市・東伯町）を領有している。慶長四年（一五九九）の諸侯分限帳に六万石と見える。元続の子・元忠は関ヶ原の合戦で西軍に参加したため改易となり、羽衣石城は廃城となった。

『陰徳太平記』に羽衣石の名称について、南条氏の家城の山を崩れ岩といったが、南条宗勝の父・紀伊守が羽衣石山と改めた、と記している。この中で、南条氏の祖が狩りの帰り道に出会った「天上の仙女」の話を紹介している。羽衣伝説は各地に伝えられているが、山上に大岩群のあるこの山にも、羽衣伝説が伝えられていたのであろう。

県立公園 三朝東郷湖（みささとうごうこ）

倉吉市・東伯郡三朝町・東郷町・羽合町

日本海を望み、湖と温泉と史跡に恵まれた県立自然公園である。倉吉

市・東伯郡三朝町、東郷町、羽合町の四市町にまたがる。総面積は一万五千六十七ヘクタール。

そのなかには**三徳山**一帯をはじめ自然保護の特別地域が六六一ヘクタールある。この特別地域は昭和二十九年（一九五四）に指定され、その後、昭和三十九年（一九六四）に拡張されて現在の規模となった。

夕日の美しい**東郷湖**を中心に、三朝、東郷、羽合の三つの温泉地がある。国宝**投入堂**のある**三徳山三仏寺**、城跡公園の**打吹山**、新緑と紅葉に彩られる渓谷美の**小鹿渓**、ブナ林のみられる**佐谷峠**と変化に富む。公園の範囲は、東は青谷町に接し、西は東伯町を境とし、南は岡山県境に至る。

中国山地の脊梁部から流れる小鹿川、三徳川が合わさって**天神川**に注ぐ。天神川は北に流れて広い沖積平野をつくっている。上流では小鹿渓にみるように深い渓谷となるが、山上はなだらかで**高清水高原**のような準平原が広がる。その間に、木地山、鉛山、神倉など魅力的な山村が散在する。小鹿川の最上流部にある中津集落は、平家の落人伝説で有名である。

平野部にも見所が多い。**橋津古墳群**は一帯が公園化され、眼下には**北条砂丘**、さらに日本海から**大山**の展望がすばらしい。東郷湖の北東には、伯耆一宮として歴史のある**倭文神社**が控える。南には、日本史の教科書に欠かせない中世の荘園争いを今に伝える絵図「**東郷庄下地中分絵図**」で著名な農地が広がっている。さらに、戦国の尼子・毛利合戦の舞台ともなった**羽衣石城跡**も近い。丘陵地は**二十世紀梨**の産地であり、東郷町の梨の評価は特に高い。梨畑を歩くと、白鳳時代の寺院跡を示す塔礎石に出会う。

昭和四十七年（一九七二）に都市公園として**東郷湖羽合臨海公園**が指定され、浅津地区を中心に東郷湖の湖岸あるいは海浜地域に、スポーツ公園や海浜施設の整備が進められた。温泉に、スポーツに、汗を流す行動的な観光レクリエーションも可能な地域である。

御冠山

東伯郡羽合町・東郷町・泊村

県中部、**東郷湖**の北東部に位置し、東伯郡東郷町、羽合町、泊村にまたがる標高一八六メートルの山。御冠山という山名は、山体が丸くドーム状を呈し、帽子のように見えることから付けられた。

鮮新世三朝層群の御冠山安山岩類と呼ばれる、シソ輝石と角閃石を斑晶としてもつ安山岩の溶岩で構成される。この溶岩は山頂を中心に、東と南は舎人川まで、北は日本海岸まで分布し、南西部では山麓が東郷湖に大きく張り出している。御冠山安山岩類の下には、やはり三朝層群に属する**鉢伏山**板状安山岩という別の溶岩があり、西に隣接する**馬ノ山**（一〇六メートル）はこの溶岩でつくられている。

山頂西の山麓には伯耆一宮の**倭文神社**があり、その南に位置する国指定史跡の**伯耆一宮経塚**からは、菩薩像などとともに康和五年（一一〇三）に築かれたことを示す銘文の書かれた経筒が出土し、いずれも国宝に指定されている。

御冠山一帯は**三朝東郷湖県立自然公園**の一部に含まれ、山麓は東郷産として特に人気の高い**二十世紀梨**の産地である。

鉢伏山

JR青谷駅から車で三〇分、松崎駅から車で二〇分

東伯郡東郷町と気高郡青谷町にまたがる標高五一三・九メートルの山。山体の基盤は花崗岩で、その上を新生代第三紀鮮新世の火山活動で形成された安山岩が覆う。安山岩の層厚は約二五〇メートルに達する。この安山岩のもととなった溶岩流はなだらかな台地状地形をつくり、山頂から北方にかけて分布して、鉢を伏せた山容を形成している。安山岩は板状の節理がよく発達し、鉢伏山板状安山岩と呼ばれる。

鉢伏山北麓に源を発する舎人川の上流には、落差四四メートルの今滝があり、西側にある支流漆原川には不動滝（落差三二メートル）がある。また、東側に位置する気高郡青谷町田原谷にも同名の**不動滝**（落差約二

〇メートル）がある。これらの滝は、鉢伏山山塊が沖積地と接するところに共通して位置している。今滝では、流水により、基盤の花崗岩が浸食を受け、上層にある安山岩が支えを失って崩壊し、急な崖となって滝が形成されている様子を観察することができる。

鉢伏山は、昭和二十九年（一九五四）に**三朝東郷湖県立公園**の一部に指定された。登山路が整備され、展望台のある山頂からは、**東郷湖**や**日本海**を一望できる絶景地となっている。

三朝町

温泉 三朝温泉（みささ）

東伯郡三朝町三朝・山田
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、三朝温泉下車すぐ

山間のかじか鳴く三徳川に沿って温泉が湧出している。現在二十九件の旅館があり、三千八百人の収容力を誇る。年間百五十万人を超える観光客を迎える、鳥取県を代表する温泉地である。

各旅館にある内湯は趣向を凝らした個性的なものが多い。また、外湯もおもしろく、三朝橋から見下ろす河原には「河原露天風呂」があり、せせらぎを聞きながら入浴することができる。屋内には「菩薩の湯」「株湯」などがある。

三朝の湯（湯村の湯）は長寛二年（一一六四）、大久保左馬之助によって発見されたといわれ、山田の湯は宝暦元年（一七五一）の開湯といわれる。宝暦の頃には二十三か所の湯壺があり、三徳山参詣客や湯治客で賑わった。大正時代にラジウムが発見され、本格的に温泉旅館が建ち並び始めた。大正三年（一九一四）三朝温泉のラジウムはラドン含有量が世界的にもトップクラスであることが発表され、「ラジウム温泉三朝」として一躍有名となった。

現在、九十四の源泉のうち六十八が利用されている。そのうち二十七が自噴泉である。平均温度は五十二・八度、湧出量は毎分一、九一三リットルである。神経痛、リューマチ、痛風に効能があるとされている。三朝温泉の湯は、温泉療法にも活用されている。

花崗岩の割れ目を上昇してきた温泉水は地下水によって拡散を止められ、加圧されて自噴している。河原露天風呂の上流に設けられた堤防は表流水をダム・アップして温泉の量と泉温を高めるためのものである。

三徳川に沿って旅館街の町並みが続く。三朝橋を中心に下流のかじか橋、上流の恋谷橋はそれぞれに風情のある架橋で、ぶらりと散策するのも楽しい。また、温泉街には、空き店舗を利用した「湯の街ギャラリー」がある。藍染めを展示している「藍の館」、三朝温泉に古くから伝わる伝統行事である「**陣所**（じんしょ）」を紹介した「**陣所の館**」、かじか蛙の「カエル人形館」、地元の調理師が高野豆腐を素材に製作した作品を展示する「調刻の館」、宮沢賢治の「カンパネルラの館」などがある。

三朝東郷湖県立公園内であり、近くには**三徳山三仏寺**（みとくさんさんぶつじ）や**小鹿渓**（おじかけい）などがある。

三朝温泉の文学・人物

独特の文化的風土を持つ**三朝温泉**には、湯けむりに誘われるように、多くの文学者が訪れ、魅せられている。

「仕事をへつかれいたはる百姓と
　あたまをならべ外湯に入るも」

三朝大橋の南詰めには、こう刻まれた木下利玄（一八八六～一九二五）の歌碑が立っている。利玄は大正五

年（一九一六）九月に、三朝温泉に泊まっている。歌碑は昭和五十六年（一九八一）に建立された。

「泣いて別れりゃ空までくもる
　くもりゃ三朝がよ雨となる」

三朝大橋南側から上流の**ふるさと健康むら**に向かう道の中程には、野口雨情（一八八二～一九四五）の民謡碑が立つ。これは「三朝小唄」の一節である。雨情は昭和二年（一九二七）八月に入湯している。碑は昭和二十八年（一九五三）に建立された。

与謝野寛（一八七三～一九三五）・晶子（一八七八～一九四二）夫妻は、昭和五年（一九三〇）に三朝温泉を訪れている。昭和五十六年にはかじか橋の南詰め口に歌碑が建てられた。

「水と灯の作る夜色のめでたきを
　見んと都と渓あひの湯場」
晶子

「三朝湯の
　ゆたかなるかなこころさへ
　この新しく湧くよ学ばん」
寛

「川波が雨の裾をば白くする
　三朝の橋をこへて来しかな」
晶子

斎藤茂吉（一八八二～一九五三）は、昭和九年（一九三四）五月に三朝を訪れた。**みささ美術館**入口には、昭和五十六年に建立された歌碑が立っている。

「したしさはうす紅の合歓の花
　むらがり匂ふ旅のやどりに」

「湯は流れ釣人もいて水流れ」
荻原井泉水（一八八四～一九七六）の句碑は木屋旅館前に建っている。荻原は、大正十五年（一九二六）以来、数度三朝に来ている。昭和四十七年（一九七二）六月には、句碑の除幕をかねた「層雲春季大会」が開かれた。

三朝温泉とキュリー夫人

三朝川の上流に開ける温泉郷・**三朝温泉**は長寛二年（一一六四）に白い狼を助けた武士が霊夢に導かれて発見したといわれる。昭和三年（一九二八）、その白狼の碑が建立された。また、三朝大橋南詰めには、昭和六十三年（一九八八）に建立された白狼とそれを救けた大久保左馬之祐のブロンズ像がある。

三朝温泉はラジウムの温泉として知られる。このためラジウムを発見したキュリー夫人へ感謝の気持ちを込め、昭和三十四年（一九五九）、温泉会館前（現ブランナールみささ前）に夫人の胸像を建立した。

旅館大橋

東伯郡三朝町三朝
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、三朝温泉下車すぐ

旅館大橋は、昭和六年（一九三一）に完成した木造二階建一部三階の近代和風建築である。大工棟梁は後藤鉄一郎。三朝の町をゆるやかに流れる三徳川と街道に挟まれた縦長の敷地に入母屋造の建物が幾重にも重なって独特な屋並みを見せている。切妻破風の屋根を乗せる玄関車寄せを入り、肥松の上がり框で靴を脱ぎ、ロビーに座すと三朝川のせせらぎが聞こえ、深緑の森に心がなごむ。二階にある百畳の大広間は本格的な書院造で格天井は高く、付書院・床・違い棚が一列に並び、反対側に舞台が設けてある。また大広間を覆う大屋根には千鳥破風が付いている。

客室は一つとして同じ間取りはなく、座敷飾りとなる床・棚・書院にそれぞれ工夫が見られ、中には船底天井の室もある。天井や床柱など、各客室ごとに用いた材質も異なり、「南天の間」「檜の間」といった客室名もある。回廊を東に進むと数寄屋のたたずまいそのままに表わした茶室「洗心亭」（大西良慶和尚命名）がある。

なお、建物の西端には妙見山の神の使い・白狼が発見したと伝えられる上之湯、中之湯、下之湯の三つの温泉があり、「天然巌窟の湯」と称されている。平成九年（一九九七）九月に本館・離れが、十二月にその他の棟が国の登録文化財として登録された。

みささ美術館

東伯郡三朝町三朝　ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、徒歩一〇分

アジアの宗教と美術をテーマに、ガンダーラ如来像やアジア各国の神々の像や宗教にまつわるものが展示されている。

展示物の中には地元**三徳山三仏寺**（みとくさんぎんぶつじ）に祀られている聖天と同型のものがある。

また、倉吉市在住の版画家・長谷川無弟（富三郎）氏の代表作をはじめ多数の作品が所蔵されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　火曜日・祝日の翌日
●問合せ先　☎０８５８・４３・３１１１

陣所（じんしょ）（大綱引き・ジンショ）

三朝温泉街で端午の節句に行われる藤カズラを使った綱引きである。かつては倉吉や関金でも行われていたという。

三朝の陣所は、県東部を中心に行われる**菖蒲綱引き**が明治初期に変化したものと考えられている。現在、五月になると地区の者は山から藤カズラを切り出して川に浸け、一本の綱の長さ八十メートル、周囲一・五メートル、重さ二トンの雌雄の綱を

からむ。

綱引きは、五月四日の夜九時過ぎに、地区を上（東―雄綱）と下（西―雌綱）に分け、それに温泉客が加わって行われる。かつては、綱引きに勝った方が豊作だといわれていたが、現在では東が勝てば豊作、西が勝てば商売繁盛ということになっている。

昭和六十三年（一九八八）に、町の無形文化財に指定され、平成十一年（一九九九）には、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として選択された。

なお、**日本海**を隔てた大韓民国にも、材料は異なるが雌雄の縄を用いた同様の祭りが存在する。

陣所（じんしょ）の館

東伯郡三朝町三朝　ＪＲ倉吉駅よりバス約二〇分、三朝温泉下車

「陣所」とは、三朝温泉で毎年五月四日に行われる「大綱引き」のことで、藤カズラをより合わせて、長さ八〇メートル、胴周りが最大二メートルもある巨大な雄綱・雌綱を作り、両綱を結合させて東西に分かれて引き合う伝統行事である。

三朝橋のたもとに建つ陣所の館には、「陣所」の一部をはじめ、行事の歴史や国内外の伝統的な綱引きが展示・紹介されている。

●開館時間　午前一〇時三〇分～午後九時三〇分
●休館日　木曜日
●問合せ先　☎０８５８・４３・３７１２

物産　道の駅「三朝・楽市楽座（らくいちらくざ）」

東伯郡三朝町大柿

国道一七九号は、倉吉市から三朝町を通り、**人形峠**を岡山県に越え、上斎原村から津山市へ向かう。国道の沿線、**三朝温泉**と人形峠の中間点にある。

特産品販売所「楽市楽座」、さらに隣接して木工センター「とちの木工房」がある。これらの施設は既に平成元年（一九八九）にオープンし、平成五年（一九九三）四月に道の駅の指定を受けた。

「楽市楽座」の名の通り、地元農家が自由に出荷することができ、季節ごとの旬の食材が並ぶ。隣には**二十世紀梨**とリンゴの樹園が育ち、農作業の体験やもぎ取りができる。春三月と秋十一月には「楽市祭り」でにぎわう。また、木工センターでは、製品の展示室があり、自由に木工作業を見学したり購入したりすることができる。

周囲は静かな里の風情があり、ドライブの合間の休息に格好の場所である。人形峠を越えると奥津温泉、国道四八二号をたどれば**蒜山高原**（ひるぜん）、**大山**あるいは湯原温泉に至る。岡山県境を挟んで、行くも帰るも立ち寄りたい場所である。

物産　ふるさと健康むら

東伯郡三朝町横手　ＪＲ倉吉駅よりバス十五分、三朝温泉病院前下車、徒歩一〇分

三朝温泉の西側に平成四年（一九九二）にオープンした。広場やふるさと体験村からなる多目的施設。

ふるさと体験村には、三朝町内外の特産品や工芸品が販売される物産館と織物や陶芸を体験することのできる工房がある。

●開館時間　午前八時三〇分～午後五時
●休館日　毎週火曜日（祝日の場合は翌日）

●問合せ先　☎0858・43・1116

さいとりさし

さいとりさし（採鳥刺）は、鷹狩りの餌にする小鳥を採る者のことである。県外では化粧をした男の子が可愛らしく舞う芸能もあるが、本県の場合、大人が狂言風に踊る。天下御免の鑑札を持つさいとりさしが権力をかさに横暴をふるう様子を、皮肉って踊ったのが始まりとされる。鳥を採ることから転じて「嫁を取る」、「福を取る」と連想され祝福の芸能としても踊られた。

また、東伯郡三朝町湯谷・関金町大鳥居（昭和四十九年、県無形民俗文化財に指定）、鳥取市覚寺（平成六年、鳥取市の無形民俗文化財に指定）などは古刹に近いことから、寺院の僧侶も風刺されている。温泉地に近いことで御座敷芸の一つとして発展した。

名勝 史跡

三徳山

東伯郡三朝町三徳
ＪＲ倉吉駅より車で三〇分

東伯郡三朝町東部、鹿野町との境付近に位置する標高八九九・七メートルの霊山。北と南をそれぞれ西に向かって流れる三徳川と小鹿川に挟まれた山塊の中心にあり、山頂から東西に緩い傾斜の稜線が幅狭く延びる。稜線の山腹、とくに北面は開析が進み急峻な斜面に深い谷が形成されている。

山体は、鮮新世の三朝層群に含まれる三徳山安山岩類と呼ばれる溶岩と、その下層の中新世鳥取層群に属する安山岩質凝灰角礫岩で構成されている。北面の標高約五〇〇メートル地点にある国宝の**投入堂**は、凝灰角礫岩と溶岩との境界部にできた天然の窪みを利用して建立されており、凝灰角礫岩の急崖を足場として、お堂の上には柱状節理の発達した安山岩溶岩が覆いかぶさるように張り出している。

北面の麓を流れる三徳川流域では、凝灰角礫岩に礫岩層や泥岩層・砂岩層が挟まれており、ここから広葉樹・針葉樹を含めた多様な植物化石が産出する。三徳型植物群と三朝成植物群が認められており、いずれも日本の後期中新世を代表する貴重な化石植物群となっている。

三徳山の麓の**三仏寺**から投入堂まで、途中鎖伝いの箇所もある急峻な登山道があり、これを登る参拝客や観光客も多い。

三徳山は、昭和九年（一九三四）に国の名勝及び史跡に指定されており、併せて今もなお自然が手つかずの状態で保全されている。**三朝東郷湖県立自然公園**に含まれる。

三徳山三仏寺

東伯郡三朝町三徳
ＪＲ倉吉駅よりバス三〇分、三徳下車、徒歩五分（参道入口まで）

標高八九九・九メートルの三徳山にある天台宗の古刹である。麓に輪光、正善、皆成の三院、そして本堂の裏の宿入橋を渡ると、背後にそびえる輝石安山岩とその集塊岩の急な北斜面を利用して、**文殊堂**、**地蔵堂**、**納経堂**、**投入堂**といった多数の国宝や重要文化財の建造物、鐘楼、**観音堂**、**元結掛堂**、**不動堂**、**十一面観音堂**等が建てられている。

三仏寺の由緒は明確ではないが、寺伝によると、慶雲三年（七〇六）役小角が三弁の蓮花を散らしたところ、その一弁がここに落ちたので（ほかは伊予石槌山と吉野）堂宇を建てて修験の行場にしたといわれている。三徳山奥の院「投入堂」は役の行者が法力で投入れたとされ、建立方法については、今もなお謎のままである。

平成十三年（二〇〇一）、奈良文化財研究所が行った年輪年代測定によって、投入堂は平安時代後期（一〇八六～一一八四）に建てられ、納経堂も投入堂と同時期に建立されたことが判明した。

嘉祥二年（八四九）、慈覚大師によって伽藍が建立され、阿弥陀・釈迦・大日の三尊を安置したので三仏寺といわれるようになったという。ただし、慈覚大師の来山は史実には明らかではない。

源頼朝、足利義満ともに同寺を尊崇し、盛時は三十八寺四十九院を数えたというが、兵火によりその多くを焼失した。

室町時代末には、近くの羽衣石城

の南条元続が崇敬し、天正五年（一五七七）に堂宇十八、坊十二を再興した。文殊堂の厨子の金物には、天正八年にこれらの金物を寄進した銘がのこっている。

寛永十年（一六三三）、因伯国主・池田光仲は寺領百石、山林境内東西五〇町、南北三〇町を寄付した。

現在の本道は、天保十年（一八三九）に池田斉訓が再建したものである。入口に古い石段が保存され、それに平行して新しい石段ができている。この旧石段の摩滅の著しさを見てもいかにその昔、参詣人が多かったかが想像される。

麓にある境内の宝物館には、源頼朝の奉納した太刀や納経堂で発見された古写経や銅鏡（旧国宝）、十一面観音などが所蔵されている。特に銅鏡は、直径二七・五センチの裏面にはオウムが花をくわえた模様を鋳出しており、表には胎蔵界の大日如来、菩薩等を針のごとく細かに彫刻した絵があり非常に美しい。十一面観音（旧国宝）は、漆塗りの美しい春日厨子に安置されている。慈覚大師作といわれるが、作風は平安時代の後期のものと思われる。このほかにも、長徳三年（九九七）九月二十日に、仏師信弘の弟子・平山が本願として奉納したという銘文も彫ってある。これは、江戸時代に百姓豊七が霊夢により近くの寺院跡から発掘したといわれる。

本堂裏から宿入橋を渡ると山にさしかかる。入山するには、寺務所の許可を得なければならない。四月十七日・十八日は春の縁日、七月十七・十八日は秋の縁日である。

奥院（投入堂）

寺伝によれば慶雲三年（七〇六）に役の行者（役小角）が法力をもって岩窟に投げ入れ建立したという。子守勝手蔵王三所の一つとして蔵王権現堂とも呼ばれる。

堂は安山岩溶岩流と擬灰角礫岩の接触部にできた岩窟内に建立され、標高五〇八メートルの高所にあって通称笠岩に守られ、千年を超える風雪に耐えて現在に至っている。

堂の柱は床下に延ばして長短さまざまに崖のくぼみに立ち、柱は筋違でつなぎ止められている、いわゆる崖造（舞台造）である。身舎は桁行二間・梁間一間で、身舎の前面と右側面の二方に幅一五〇センチほどの廻縁をつけている。身舎の屋根は緩やかで、庇は正面と両側面を片流れの縋破風とし、さらに右隅も一段低い縋破風をつけて変化をつけている。

身舎の柱は円柱であるが、庇を支える柱は大面取の角柱で、軒の反りなどと合わせて藤原時代の特徴をよくあらわしている。

付設する愛染堂は柱上井桁に組む土台の上に置かれた方一間、切妻入の小堂で、投入堂と同時期の作と考えられる。

納経堂

寺伝によると慶雲三年（七〇六）の創建とあるが、確証はない。もともと三徳山の鎮守としての祠であったものを納経堂にしたもので、堂内には法華塔が一基ある。

堂は**観音堂**と並んで**投入堂**と同様に厳窟状のくぼみに建つ。小堂ということもあろうが、数百年の風雪に耐えてきたものである。桁行一間、梁間一間、向拝付き、春日造こけら葺である。柱、肘木の面は大きく、古式を伝えている。建築年は、投入堂と同様、先頃の年輪年代式測定で平安後期の作ということが判明し、現存する神社、殿形式の建物では最古であることが判明した。

地蔵堂

本尊は子守延命地蔵菩薩、安産の守護神で、古くは御子守殿という。堂の創建は嘉祥二年（八四九）慈覚大師によるというが確証はない。

堂は崖上の岩角にあり、桁行四間、梁間三間、こけら葺、単層入母屋造で崖造（舞台造）の建築で、背面妻中央には軒唐破風がつけてある。軒は二軒繁垂木で、肘木・桁・垂木とも面をとる。内部は、厨子両脇柱と後壁の柱四本が円柱で、その他は大

面取の角柱である。内陣は外陣（礼堂）より一段高くなっており、厨子脇の別室は禅定写経などの場に使われた籠り部屋であろう。天井は全て化粧屋根裏である。

実肘木や拳鼻がついている斗組、頭鼻木鼻の絵様、角張った支輪の様式から室町時代末期の作と見られている。

文殊堂

本尊は文殊菩薩。寺伝によると、創建は、嘉祥二年（八四九）慈覚大師によるとある。しかし、当初より蔵王権現とともに三所権現の一つとされてきた。

堂は桁行四間、梁間三間、こけら葺の単層入母屋造で、急峻な岩場の尾根に建つ懸造で、堂の四方には縁が巡っている。正面は西方に向かっているが、後部に安土桃山時代に流行した軒唐破風が取り付けてある。**地蔵堂**と規模・様式ともに同じであるが、内陣は二本の円柱が立ち、天井は鏡天井になっている。全体的には地蔵堂を模しながら、それを多少整備している。内陣の鏡天井など、も意匠的にまとまっていることから、地蔵堂の後の建立と見られている。

様式の類似性から室町時代末に建造されたとする見解があるが、陰刻名などから見て、桃山時代のものと見られている。

観音堂

岩窟内に建てられた桁行三間、梁間三間の堂。正面と側面の三方に縁を巡らし正面側の一部は懸造りとなっている。江戸初期に建築されたと推定され、これは正保五年（一六四八）に鳥取藩主・池田光仲再興の寺伝と合致する。

奥二間を内陣、表一間を外陣とし、内陣中央に厨子が置いてある。軒は一軒繁垂木、屋根は入母屋で、両側面に千鳥破風を付し、変化に富んだ屋根の形となっている。

鐘楼堂

四隅に大面取角柱を建て、枠肘木を乗せ、桁を組み、中央部に梁を架け梵鐘を吊している。角柱は内方にわずかに転び、上下二本の貫で固めてある。軒は一軒繁垂木で、屋根は切妻こけら葺、**三徳山**全体を描いた繪図にはこの建物が入母屋となっているが、当初から切妻だったと思われる。

現鐘楼は、大正十四年（一九二五）に修理され、大半の部材が取り替えられたが、枠肘木、破風板の一部に古材が使われている。柱の面取り手法等が古制を伝え、鎌倉時代の力強さもうかがわせる。

不動堂

寺伝によると、本尊の不動明王は慈覚大師の作とされる。『伯耆民談記』（一七四二）には「大山善神方三尺五寸」とあり、後の不動堂となったもので、**投入堂**横の崖上に建つ小堂である。不動明王は、修験者が愛染堂の愛染明王や投入堂の蔵王権現と一体化し、降魔除災の超能力を得ようとして尊信してきたものであろう。

身舎・庇ともに角柱で、身舎と庇を海老虹梁でつないでいる。軒は一軒繁垂木で庇には縁を設けて高欄をめぐらす。木鼻や蟇股等にも意匠がこらされている。古材は軒桁と板壁の一部に残るだけで、全体的には江戸末期の造りである。

元結掛堂

観音堂脇の岩窟内に建てられた一間社春日造の小堂。身舎は円柱、庇は角柱、舟肘木、軒一軒繁垂木の簡素な構造で、庇には縁がつくが、階段は省略されている。舟肘木、破風、懸魚などに江戸初期の特徴が見えることから、観音堂とほぼ同年代の建造と推定される。寺伝によると、**三仏寺**で剃髪して僧になった者の髪を元結ごと納めた堂とある。

十一面観音堂

一間社春日造、野際稲荷とも称される小祠である。身舎円柱、向拝角柱でいずれも土台上に建っている。正面板扉定規縁の六葉金具、懸魚などの細部意匠には江戸中期の様式がうかがえる。

【国等指定文化財の状況】

奥院（投入堂）　国宝（昭和二十七年三月二十九日）

納経堂　国指定重要文化財（明治三十七年二月十八日指定）

地蔵堂　国指定重要文化財（明治三

十七年二月十八日指定）

文殊堂　国指定重要文化財（明治三十七年二月十八日指定）

銅鏡　国指定重要文化財（明治三十七年二月十八日指定）

木造蔵王権現立像　国指定重要文化財（明治三十七年二月十八日指定）

木造十一面観音立像　国指定重要文化財（大正九年四月十五日指定）

木造蔵王権現立像六躯　国指定重要文化財（大正九年四月十五日指定）

木造狛犬一対　県指定保護文化財（昭和六十二年十二月二十五日指定）

三仏寺・銅像誕生釈迦仏立像　県指定保護文化財（平成七年四月二十一日指定）

三仏寺写経　町指定有形文化財（昭和五十年六月十一日指定）

観音堂　町指定有形文化財（昭和五十年十月十三日指定）

鐘楼堂　町指定有形文化財（昭和五十年十月十三日指定）

不動堂　町指定有形文化財（昭和五十年十月十三日指定）

元結掛堂　町指定有形文化財（昭和五十年十月十三日指定）

十一面観音堂（野際稲荷）　町指定有形文化財（昭和五十年十月十三日指定）

三仏寺・男神・女神座像（坐像）　町指定保護文化財（昭和六十三年十月一日指定）

宮本包則刀　町指定保護文化財（昭和六十三年十月一日指定）

正善院庭園　町指定名勝（昭和六十三年十月一日指定）

三徳山の権現祭

東伯郡三朝町の**三徳山**で、四月十八日に行われる春の祭礼である。地元では「春会式」と呼ばれる。昭和初期までは獅子・具足・奉楽・榊・幟・三宝・御輿・寺院方・僧侶・御徒・烏帽子の順に御幸行列が境内を盛大に練り歩いていたが、昭和三十年（一九五五）の本尊、蔵王権現の修理完成を記念して行われたのを最後に途絶えている。

かつての御幸行列は、正午に本堂を出立し、石段を降りて馬場（現在の宝物館・収蔵庫の建つ場所付近）の御旅所に安置され、僧侶が読経をした後、裏手の坂を登って本堂に戻り、御輿が納められた。

現在、御幸は行われず、二体の御輿（蔵王権現と三仏寺といわれる）が本堂に出されて飾り付けられる。

大雲寺

東伯郡三朝町穴鴨　ＪＲ倉吉駅よりバス十五分、三朝町役場前下車・乗換、穴鴨公会堂下車徒歩五分

山号を西照山といい、浄土宗に属する京都知恩院の末寺だった。本尊は阿弥陀如来である。

この寺の縁起によると、空也上人が穴鴨谷に西照庵という庵を結んだことに由来するという。その後、庵は度々無住となったが、慶長年間（一五九六～一六一五）に、倉吉に流罪になっていた房州里見安房守を訪ねて来た知恩院三十一世霊厳が、当庵に泊ったとき、その由来を聞いて、西照山霊厳院大雲寺として再興した。

その後、この地の安田茂右衛門という者が寺を穴鴨谷から現在地に移した。そのため、霊厳を開山、茂右衛門を開基としている。

昔は、北に山門、東に冠木門があり、その他にも鐘突き堂があって、池には泉水が吹き出し、反橋のかかる立派な寺院だったといわれるが、弘化三年（一八四六）の村火事に類焼し、規模は小さくなった。河村郡札所の第五番札所である。

馬場の滝

東伯郡三朝町小河内　ＪＲ倉吉駅よりバス一〇分、三朝町役場前下車、車で二〇分、小河内集落から約一・五キロ

三朝町内を流れる福吉川下流にあり、高さは約五〇メートルで三段からなる水量豊かな滝。馬場の滝は、かつては不動尊滝と呼ばれていたが、江戸時代の鉄山師山口屋（内海家）が元禄七年頃までこの地でたたら製鉄を行い、砂鉄・木炭・銑鉄の輸送のために馬場が設けられ繁栄していたことから、この名に呼び変えられた。

花倉山のヒノキ・ホンシャクナゲの大群落

東伯郡三朝町笏賀　ＪＲ倉吉駅よりバス四十五分、小河内下車、徒歩一〇分

ホンシャクナゲはツツジ科に属する。昭和三十九年（一九六四）一月、県の天然記念物に指定された。ホンシャクナゲの大きなものは根囲り五〇センチメートル、樹高五メートルある。このような巨木が一〇メートル四方に九本ある。

花倉山は花倉権現とよばれ、若葉神社があり日帰りの行楽にも適する。ホンシャクナゲは**小鹿渓**、**三徳山**、**那岐山**等にもあるが、ここほど標高の低い場所での大群落は他にあまり例がない。開花は四月下旬から

で、近年花見客でにぎわうようになった。漢名の「石南花」は本種に誤ってつけたものという。

垢離取川（こりとりがわ）

JR倉吉駅下車よりバス四〇分

霊場**三徳山**（みとくさん）の雨水を集めて流れる清流。昔、参拝者がこの水で身を清めて入山したと伝えられる「身清めの滝」がある。また、滝に打たれると身体の「こり」がとれるという言い伝えもある。

歴史ある水として昭和六十年（一九八五）六月、県の「因伯の名水」に指定された。

「森林浴の森一〇〇選」にも選ばれた豊かな自然のなかにある。

三朝高原（みささこうげん）

県中部、**三朝温泉**のすぐ南にある標高三〇〇～四〇〇メートルの高原で、**三徳山**（みとくさん）山塊の西端部にあたる。カンラン石玄武岩溶岩とその上層の安山岩質凝灰角礫岩からなり、溶岩台地状の地形である。これらの火山噴出物は鮮新世の三朝層群坂本安山岩類に属するもので、基盤岩である白亜紀末期の黒雲母花崗岩を不整合に覆っている。不整合面上には、場所により砂岩・礫岩や珪藻土層などがはさまれ、木の葉などの植物化石を産出する。

名勝 小鹿渓（おしかけい）

東伯郡三朝町神倉
JR倉吉駅よりバス四〇分、三朝温泉下車、神倉行乗換二〇分、終点下車、徒歩三〇分

天神川水系三徳川の支流である小鹿川上流部の峡谷で、三朝町神倉から上流の中津ダムまでの、流長にして約三キロの区間。昭和十二年（一九三七）年に国の名勝に指定されている。

渓谷の上端と下流側には、それぞれ河床勾配の急な所と緩い所があって、渓谷区間は小鹿川の急流部にあたる。渓谷は約六千万年前の白亜紀末～古第三紀初頭に貫入した**人形峠**（にんぎょうとうげ）花崗岩とよばれる角閃石黒雲母花崗岩の分布域内にあり、渓床には浸食された花崗岩岩盤や、花崗岩巨礫の集積が見られる。岩盤の露出する所では、滝と淵とが連続し、この渓谷に特徴的な美しい景観をつくりだしている。神縄滝と雄淵、玉藻滝と雌淵、水晶滝と弥六淵がその代表で、探勝の中心となっている。とくに雄淵は深さが九メートルに達し、その景観は神秘的である。渓床に集積する花崗岩巨礫には、直径四メートルを越える巨大なものがあり、これも小鹿渓の見所の一つといえよう。間隔が広く節理が発達した花崗岩の谷壁からは、節理に沿って割れた大塊が渓床へ崩落し、運搬されることなく滞留して、巨礫の集積帯となっている。

中津ダムによって堰き止められた中津貯水池の水は、隧道を通して渓谷入口の小鹿第一発電所まで送水され、発電に使われている。これは、渓谷急流部の地形的高低差を利用した水力発電である。

渓流の左岸側には中津へ至る道路が平行して走り、渓谷内では渓床に沿う約一キロの遊歩道が整備されている。新緑や紅葉の季節には、探勝に訪れる人々でにぎわう。

また、小鹿渓の渓谷植物は美しく、シラカシ、アカガシ、ソヨゴ、ヤマグルマ、ホンシャクナゲなどの常緑広葉樹や、ブナ、イヌシデ、トチノキ、オニグルミ、サワグルミなどの落葉広葉樹が群落を構成している。この谷間は近くの三朝に比べて、七度ほど気温が低い。これは谷間全体が風洞の働きをするからである。このため中国地方では八〇〇メートルあたりから上部に生育するブナが、小鹿渓では四〇〇メートルあたりから生育している。

また、中津盆地は標高五五〇メートルに位置するが谷より温度が高い。そのため谷部では下にブナ、その上部にミヅナラ、アカマツと垂直的には反対の分布を示している。紅葉は、通常、上部から下部に移行するがここでは反対に下から山の上に向かって移る。そのほかにもシダ、コケ、地衣などが北方系の景観をなしている。

福山（ふくやま）

東伯郡三朝町福山
ＪＲ倉吉駅よりバス五〇分、福山下車、徒歩六〇分

竹田川の上流にあり、やや岡山県境に近い高原地帯の部落である。この付近には不動滝があり、隠れた名勝地として将来に期待のもたれているところである。

古くは部落を取り囲むように一面にミズゴケの大群が発達し、湿原のなかにはノハナショウブの群落もあり六月下旬から七月上旬にかけての花ざかりは壮観であった。しかし、昭和五十年代に谷川が改修され湿原がなくなり、ミズゴケやノハナショウブも急滅した。

不動滝は、この大湿原の水が竹田川の上流で福本川となった、この福山と小丸山の間にある。現在、不動社は肩山に移された。

不動滝は三段で、高さが四〇メートルある。どうどうと落下している瀑布は大風をまき起して、夏でも肌寒い。

付近にはホンシシャクナゲ、クロソヨゴ、イワナシ、イワウチワ、イワタバコ、オサシダなどが生育している。

福本のツバキ

東伯郡三朝町福本
ＪＲ倉吉駅よりバス五〇分、上西谷下車、徒歩三〇分

福本のツバキは、**天神川**の上流福本川に沿って三朝町から岡山県中和村に抜ける国道四八二号と、関金町に抜ける林道との分岐点近くに位置する、三朝町福本地内に生育する。

自生のヤブツバキで、県の天然記念物に指定された昭和四十八年時には大木が二本並び祠もあったが、現在は、高さ六メートルの大木が一本ある。毎年みごとな花を咲かせ実をつける。

このヤブツバキは昔、油を採取するために村人から保護されていたという。また作州往来の旅人の休息場所として利用され、ヤブツバキの根元近くからはきれいな清水が湧き出ていたと伝えられている。「とっとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

周囲の木が伐採され、日照が強くなったために樹勢に衰えが感じられる。

人形峠（にんぎょうとうげ）

東伯郡三朝町栗祖

国道一七九号が三朝町から岡山県上斎原村石越へ越える標高七三五メートルの県境に位置する。尾根伝いに、南は人形仙（標高一、〇〇四メートル）が控え、北に**高清水高原**が広がっている。ブナやナツツバキの混じる樹林やチシマザサの草原など変化に富んだ植生景観が見られ、ムカシブナなどの化石植物群も掘り出されている。江戸時代には打越峠と呼ばれ、津山往来の要衝として知られた峠道である。

当時の峠は、三朝町木地山から谷を詰め人形仙の肩を越える道にあり、今も石地蔵が残る。木地山集落は、かつて文字通り木地師の村であった。ここにある小椋家住宅は残り少ない木地師の民家建築として、三朝町の保護文化財に指定されている。

昭和三十年（一九五五）、ウラン鉱脈が発見され一躍全国的に有名な峠となった。国鉄バス（現ＪＲバス）が通る自動車道が整備され、翌昭和三十一年（一九五六）に人形峠という名称が付けられた。この人形峠の名は、昔々、大きいクモが住んでいて、峠を通る旅人を食い殺すので一計を案じ、木偶人形を立て食いついた大クモに遠矢を射掛けて退治したとの伝説に由来する。今も、トンネルの手前から入る山越の旧道として利用されている。旧道には核燃料サイクル開発機構（ＪＮＣ）の施設がある。

現在、国道は人形トンネルによって一気に県境を走り抜ける。このトンネルは昭和五十六年（一九八一）に開通したもので、延長は一、八六五メートル、鳥取県側の標高は六〇二メートル、岡山県側は標高六一〇メートルに位置し平坦である。

また、国道一七九号と四八二号は峠の前後で重なる。倉吉市から来る国道一七九号は、上斎原村から奥津町を通り、津山市、さらに姫路市へと向かい、佐治村から恩原高原を抜けてきた四八二号が上斎原村石塚で一七九号につながり、峠を越えて三朝町穴鴨で分かれて**蒜山高原**へと向かっている。

人形峠は、現在も交通の要所であり、中国山地の高原観光や山岳ドライブの臍の役割を果たしている。

高清水高原（たかしみずこうげん）

東伯郡三朝町・岡山県上斎原村
ＪＲ倉吉駅より車で八〇分

鳥取県と岡山県の県境にまたがる標高八〇〇～九五〇メートルのなだらかな高原。面積は約三〇〇ヘクタ

ール。台地は安山岩溶岩からなり、表面は芝生や低木で覆われる。南側には玄武岩・火山砕屑岩・礫岩からなる**人形峠**層がある。もともとは放牧地であった。

晴れた日は展望もよく、**日本海**側や岡山県側の山々を一望できる。春のワラビ狩り、夏のキャンプ、秋の紅葉と楽しむことができる。

関金町

温泉 関金温泉

東伯郡関金町関金宿　JR倉吉駅よりバス三十五分、関金温泉下車

岡山県との県境、**蒜山**三山の懐に位置し、「白銀の湯」と呼ばれる。聖武天皇の時代（七二四～七四九）に行基が開湯したとも、あるいは延暦年間（七八二～八〇六）に開湯したともいわれる。

小鴨川の支流矢送川と滝川の合流点に位置し、作州街道と**大山**への分岐点に当たる宿場町として、また湯治場として栄えた。寛文六年（一六六六）までは湯壺が二か所、宿屋が二軒であった。当初は滝山川の谷だけに温泉があった。温泉が今のようになったのは、昭和三十八年（一九六三）に行われた泉源調査により新しい泉源が掘られたことによる。豊富な湯は、集中管理され、国民宿舎や共同浴場が整備された。昭和四十五年（一九七〇）には国民保養温泉地に指定された。

現在、二十四の泉源があり、うち三泉は自噴している。また、五つの未利用泉がある。平均温度は六十六・五度、湧出量は毎分四二八・四リットルである。単純放射能泉で、リュウマチ、神経痛に効能があるという。

温泉周辺は花崗岩で構成され、二方向に発達する割れ目から湧出するものと考えられる。泉質に含まれる放射能は、湧出の過程に岩石や温泉沈殿物から溶出したものと考えられる。

近年、公共の湯として「**せきがね湯命館**」がオープンした。また、ミツバが美しい亀井公園がある。

伝説

弘法大師がある民家を通りかかったとき、女が芋を洗っていた。大師が芋を分けてもらいたいと頼んだとこころ、女は大師を旅の貧乏僧とみて、この芋はとてもえぐい芋なので食べられないと断った。僧は笑みを浮かべ、何も言わず立ち去った。

それ以来、芋は本当にえぐい芋になってしまったという。

温泉 せきがね湯命館

東伯郡関金町関金宿　JR倉吉駅よりバス三十五分、関金温泉下車、徒歩五分

蒜山、**大山**に抱かれた**関金温泉**に、平成七年（一九九五）四月に開館した。

雄大な山々を望むことができる露天風呂をはじめ、八種類の風呂が楽しめる。

- 開館時間　午前一〇時～午後九時
- 休館日　第二・四月曜日
- 問合せ先　☎0858・45・2000

地蔵院

東伯郡関金町関金宿　JR倉吉駅よりバス三十五分、関金温泉下車、徒歩五分

地蔵院は、山号を大滝山といい、真言宗御室派（京都仁和寺）に属す。

本尊は僧・行基の作と伝えられる大日如来である。かつては現在地より二キロメートル山に入った現奥の院にあり、大滝山千手寺といわれた。

天平勝宝八年（七五六）、行基によって開かれ、行基作の千手観音を本尊にしたと伝えられる。この寺は天暦三年（九四九）焼失したが、建久三年（一一九二）、佐々木高綱によって再建された。また、奥の院の観音堂に残る建久三年（一一九三）銘の棟札にも「供養成就　佐々木四郎高綱」とある。その後も洪水、山崩れで崩壊・再建を繰り返した。近世には大滝堂とも呼ばれた。

維新後、寺院維持のため、奥の院坊・千手寺は大滝山観音堂として従前の地に移り、本坊地蔵院は分離し現在地で存続することになった。

当院の地蔵堂に安置されている木造地蔵菩薩半跏像は、国の重要文化財に指定されている。これは、像高が四・八メートルあり、延命地蔵といわれる。胎内の銘文には、「建久二年（一一九二）源頼朝の命により佐々木四郎高綱の造立」とある。このほかにも、至徳二年（一三八五）銘の擬宝珠と宋代青磁香炉が所蔵され、いずれも県の保護文化財に指定されている。

伝　説

佐々木高綱が地蔵院を再建したときのこと。大工の棟梁は腕もよく人望もある人だった。しかし、完成期限がせまっても工事は一向に進まなかった。その頃から小人のような大工が夜間に工事を手伝い、予定通りに完成した。そして、完成と同時に小人大工は姿を消した。彼らは工事で出たカンナ屑が小人に変じて手伝ったのだろうと噂した。

また、ある年、地蔵菩薩の眉間にはめ込まれた白毫を、旅の役者が盗んだ。それ以来、関金宿で旅芸人が芝居をすると、必ず大雨が降ると伝えられている。

鳥飼家住宅

東伯郡関金町関金宿
ＪＲ倉吉駅よりバス三十五分、関金泉下車、徒歩五分

鳥飼家は関金町大鳥居にあって代々庄屋を営み、主屋が建築されたのは江戸後期と考えられる。伝承によると、鳥飼家は九州から小早川秀秋に仕えて戦国時代の終りころ当地に移り住んだという。鳥飼家には、制作年代が不詳であるが、一枚の家相図が伝わっている。それによると屋敷は広く、主屋以外に表門、土蔵、米蔵、味噌蔵、木小屋、裏門、隠居屋、井戸があったことがわかる。主屋は、桁行九間半、梁間四間と大きく、上手の三室と「広間」からなる広間型三間取りが変形した広間型四間取りで、土間部分の奥には台所として使用された「座敷」が「広間」から延びるように付設され、「広間」の裏側には幅一間の「料理間」が付いている。また、土間の下手には「牛室屋」（マヤ）が三室並列し、その奥に「下人室屋」が設けられていた。さらに、主屋の上手には「湯殿」と「雪隠」を付設していたが、この湯殿と便所は表側と裏側からそれぞれ使用できるように二つずつ設けられ、客用と家族用に使い分けられていたと思われる。この地を支配する庄屋クラスの屋敷構えと家構であったことがわかる。

現在、関金宿に移築された鳥飼家住宅は、家相図と解体作業によって明らかとなった古材などの痕跡から、建築当初の姿に復元されたものである。茅葺き屋根は葺降ろしとなり、小屋梁は大黒柱とその前後一間半のところにそれぞれ立つ入側柱によって直接支えられており、土間は三和土（たたき）仕上げとなるなど民家のもつ素朴な姿が忠実に復元された。

古民家での生活が実体験できる施設として一般に公開されている。

昭和四十九年（一九七四）三月、県の保護文化財に指定された。

関金のシイ

東伯郡関金町関金宿
ＪＲ倉吉駅よりバス四〇分、関金町役場前下車、徒歩で一〇分

関金温泉から小鴨川を挟み、対岸の安歩集落の段丘の上に一本のスダジイの巨木がそびえたっている。

樹冠は大きく傘状に広がり、その均整の取れた雄大な姿は、あたかも森のように見え、遠方からも目をひくほどである。

胸高直径は二三〇センチ、樹高は一八メートル、枝は二〇×二五メートルに広がる。**大山**の火山灰が腐食してできた肥沃な黒ぼくに恵まれたことによって、樹勢はきわめて旺盛である。

幾度かの小鴨川の氾濫にも耐えながら安歩集落を守りつづけた名木として昭和四十八年（一九七三）三月

に県の天然記念物として指定された。「とっとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

大山池

東伯郡関金町泰久寺
ＪＲ倉吉駅より車で四〇分

大山ならびに蒜山三山を水面に映し、ヨット、ボートなどの水上スポーツが楽しめる水辺として親しまれている。

周囲は天神野台地と呼ばれ、黒ぼくの火山灰土からなる台地が続き、野菜畑、梨畑、さらに芝生畑となり開けている。西に、大山から蒜山三山が連なり、空の広さと吹く風のすがすがしさにしばし時を忘れる。

もとは狼谷溜池と呼ばれ、地元の農地灌漑用の溜池として造成されたものである。明治四十年（一九〇七）、泰久寺の山根愛吉ら有志が台地の開拓と溜池造成を手がけたものが最初であった。その後拡張され、昭和十八年（一九四三）から二か年かけた大工事で現在の規模となった。周囲は一・四キロメートル、面積は一五ヘクタール。

堤防の上から湖面を見ると大山が逆さに映り、いつ頃からか大山池と呼ばれるようになった。なお、毎年十月には関係者総出で池の水を落として大掃除が行われ、このときコイやフナの手づかみに見物客が集まる。

今ではレクリエーション地域としての整備も進み、キャンプ場、ボートの艇庫、駐車場、休憩所、さらにはツツジ園が整備され、中国自然歩道のコースになっている。

近くには、奈良時代の寺院跡で塔礎石が残る藤井谷廃寺があり、倉吉市の伯耆国分寺跡も近い。ドライブやハイキングに好適な場所である。

犬挟峠

東伯郡関金町犬狭

旧国道三一三号が関金町山口から岡山県八束村敏の茶屋へ越える県境にある。標高は五一四メートル。大山隠岐国立公園の蒜山地区にあり、蒜山三山の内、下蒜山の一角を占める。旧国道は七曲の難所であったが、平成九年（一九九七）、山口集落の手前から新しく犬狭峠道路と犬狭トンネルが開通し、新しく国道三一三号となった。トンネルの延長は二、六二六メートル、標高は鳥取県側で三七一メートル、岡山県側で四四一メートルである。鳥取県側入口から八三六メートルの位置で県境を越える。

犬挟の語源ははっきりしない。犬狭峠とも書く。犬も通れないほどの急坂だったとか、その昔、大和武命が西国平定の折、矢の届く限りの敵は従えと射った矢が刺さった「矢ばさり」からきたとか諸説がある。江戸時代から作州街道あるいは美作街道と呼ばれ、倉吉と岡山県北を結ぶ主要な経路であった。当時、倉吉は脱穀用の千歯こぎ、木地椀や綿製品など、近隣の産品の集散地であり、街道はにぎわった。

倉吉市からは天神川水系の小鴨川に沿って走り、関金温泉を通り過ぎてすぐ左折する。橋梁で結ばれた谷筋を渡り、間近に迫る蒜山を見るドライブは迫力がある。また、大山も遠望できる。従来見ることのできなかった北東部の山体が美しい。また、蒜山側からトンネルを抜けてはるか下に見る日本海の漁火は幻想的で印象深い。なお、新しい峠道には道の駅「犬挟」があり、豊富な地元産物を手にすることができる。

物産 道の駅「犬挟」

東伯郡関金町山口
ＪＲ倉吉駅より車で六〇分

国道三一三号が関金温泉を通り抜け、犬挟峠の新しいトンネルへの上りにかかり、大山や蒜山をまじかに見ながら渓谷に架かる橋梁を走ると左手に道の駅の表示に出会う。堂々とした和風の木造建築がおしゃれな道の駅である。平成九年（一九九七）十月に登録され、翌年八月にオープンした。

標高三一三メートルの山間にありながら敷地は広く、四十台の駐車場スペースがある。

関金町や倉吉市はじめ県境を挟んで、岡山県側の八束村、中和村など関係団体が共同出資するという広域的な組織によるユニークな運営である。

販売される特産物も鳥取と岡山両県から広域に集まり、多種多様である。山菜やきのこ、地元農家の生産する高冷地野菜のほか、山村の加工グループによる手作りの漬物や食材が並ぶ。牛乳など蒜山のジャージー牛製品も直売される。かつて木地師が活躍した土地柄か、椀やお盆の木工製品も多い。

なお、敷地には小川の流れる緑地公園が造られ、一時のやすらぎを生む空間となっている。

関金田植唄おどり

田植唄踊りは、**大山**周辺に伝わる「かつま」（田植え唄）に合わせて、かつての花田植えの姿を再現した踊りである。場所によっては、馬鍬を引く牛のユーモラスな演技などで笑いをとる要素が加わっているものもある。

関金町では、昭和三十九年（一九六四）、町内の有志によって古老の間に伝承されていた古い民謡をもとに、かつての田植風景を近代的に振り付けたものである。

北条町

北条砂丘

東伯郡北条町、羽合町、大栄町

天神川河口から大谷集落までの東西約一二キロメートル、南北一・八キロメートル、面積一、一〇〇ヘクタールに達する起伏の緩やかな砂丘である。天神川の東にも長瀬砂丘とか羽合砂丘と呼ばれる砂丘があるが、もとは一連の砂丘であった。

北条砂丘は、約二十万年前の第四紀の更新世につくられた。海岸線に平行して一列の砂丘列がある。その内側には斜交した縦列砂丘や複雑な起伏の砂丘が見られる。そこには大山火山の火山灰層に覆われた古砂丘が発達し、その上を新砂丘が覆っている。新砂丘も腐植に富むクロスナによってさらに細分できる。クロスナは人類遺跡をともない、過去に砂丘が草原化し、快適な生活の場であったことを物語っている。特に、長瀬高浜では砂丘の地下に縄文時代と弥生時代以降の遺跡と遺物、畑の遺構が発見された。

また、古くから砂丘地農業が行われ、県下有数の農地であり、**スイカ**や**ながいも**、**ぶどう**が盛んに栽培されている。北条砂丘の砂は建設用に用いるため大量に採取され跡地は平坦化され大規模な農地となった。

現在、北条バイパスが砂丘の中を通り、近くには**北条オート・キャンプ場道の駅「北条」**が整備され、休憩地として広く利用されている。砂丘の南に北条平野が広がる。

茶臼山

東伯郡北条町国坂

国坂山とも呼ばれ、北条平野に孤立する標高九五・九メートルの茶臼山には、中世に増田玄蕃允・在沢左京亮が居住していたと伝えられている。山麓の東側に「殿屋敷」「馬場」などの小字が残る。茶臼山の山麓には、『延喜式神名帳』にもみえる伯耆六社の一つ、**国坂神社**がある。

天正九年（一五八一）羽柴（豊臣）秀吉は鳥取に進出し（第二回鳥取役）、この時、鳥取城を守備する**吉川経家**を応援する吉川元春は、本隊を率いて伯耆に入り、茶臼山に着陣、さらに「**馬ノ山**」に本営を移した。秀吉は**御冠山**（東郷町宮内）に布陣し、河村郡（現泊村、東郷町、羽合町、倉吉市の一部）で対峙した。

元和三年（一六一七）、因伯両国を領有した池田光政は、両国のほぼ中央にある久米郡茶臼山を「城府」にとりたてる候補地の一つに選んでいる。しかし新地のために、費用がかさむこともあり最終的に鳥取城下の拡張が決まり、鳥取城下町の整備が進められることとなった。茶臼山の付近には現在、北条町役場や**北条町歴史民俗資料館**もある。

国坂神社（くにさか）

東伯郡北条町国坂
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、国坂下車、徒歩一〇分

国坂神社は、明治元年（一八六八）に現社名に改められるまで、四宮大明神といわれた。少彦名命（すくなひこなのみこと）を祭神とする。この神社は『延喜式神名帳』にも記載された古社である。

中・近世には武将の崇敬も厚く、大永年間（一五二一～二八）には、国坂地内にある茶臼山城の城主・増田玄蕃允が、同社を再興したと伝えられている。竹内自安（近世米子の商人歌人・一六三八～一七〇八）は、元禄四年（一六九一）五月に、当社に詣でたとき、宮司宅で「かけまくも名にあらはれてこの神の国さか（栄・坂）へよと宮はしめけん」と詠んでいる。

また、かつて神社の東にあった神池（御手洗池）に群生したジュンサイ、コウホネを煎じて飲めば霊験があるといわれ、遠近から信者が集まった。三月八日（四月八日とも）が薬草の祭日で、神池や茶臼山の薬草を採って九日の未明に海辺に持ち出して清め、神社に供えた後、参詣者に分配する神事があったという。

北条八幡宮（ほうじょうはちまんぐう）

東伯郡北条町北尾
ＪＲ下北条駅より徒歩一〇分

北条八幡宮は、近世には山田八幡宮ともいわれた。誉田別尊（ほんだわけのみこと）などを祭神とする。貞観七年（八六五）に豊前宇佐八幡宮から勧請（かんじょう）したとの説もあるが、山城石清水八幡宮の伯耆四別宮の一つ、山田別宮の後身とする説が有力である。

永禄五年（一五六二）、岩倉城主・小鴨元清が社領五百石を、天正八年（一五八〇）に吉川元春（きっかわもとはる）が馬鞍を寄進している。元和二年（一六一六）には里見阿波守忠義（さとみあわのかみただよし）が社殿を再興するなど、当社は武将に崇敬されてきた。

明治六年（一八七三）には山田社、同二十六年（一八九三）には八幡神社、昭和六十三年（一九八八）には北条八幡宮と改称された。

ここには、祭神の一人である神功皇后が休まれたと伝えられる「御休み石」や、祭神である武内宿禰（たけのうちのすくね）が誉田別尊を抱き腰を掛けたという「御子抱石」（「安産岩」とも）などが残っている。

土下古墳群（はした）

東伯郡北条町土下
ＪＲ下北条駅より徒歩二〇分

標高一〇〇メートル前後の低丘陵上に築造された古墳群である。北条平野を一望できる丘陵に総数約二百八十基以上が確認されている。古墳の規模は、直径十数メートル前後の円墳がほとんどだが、方墳や大型の円墳、前方後円墳も含まれる。

このなかで最大規模の二三六号墳（通称北条大将塚）は、丘陵尾根上に立地する直径約四〇メートル、高さ約五メートルの円墳である。丘陵の高所には、白斑点をつけた鹿埴輪（重要美術品）が出土した「やすみ塚」と呼ばれる全長三二メートルの前方後円墳（二一三号墳）がある。

これらの古墳のほとんどが未調査だが、これまでに十基が発掘調査された。昭和五十七年（一九八二）に調査された一二九号墳は、四世紀後半に築造された一辺二〇メートル前後の方墳で、箱式石棺七基・土壙墓三基・土器棺一基が確認された。

平成五年（一九九三）には、やすみ塚に隣接する二一〇号墳が調査され、周溝内から人物埴輪・馬形埴輪・短甲形埴輪が出土された。人物埴輪のうち両手を挙げた女性像は白く点描して鹿皮を表現した衣装をまとっている。これはやすみ塚出土の鹿埴輪と同じ表現である。このような白色点描により鹿毛を表した埴輪は、ほかに倉吉市の沢ベリ七号墳の人物埴輪にみられるのみで、全国的にも珍しい彩色埴輪である。

北条町歴史民俗資料館

東伯郡北条町田井
ＪＲ倉吉駅よりバス二〇分、国坂下車、徒歩五分

北条町は、町の面積の四十四パーセントを砂丘地が占めている。現在、砂丘地は先進的な潅水設備が整備され豊かな農地として活用されている。

平成二年（一九九〇）十一月に開設されたこの民俗資料館は、砂丘地に挑んできた人々の歩みが展示されている。また、北条町には縄文・弥生時代などの遺跡が数多くあり、土器、石器、哺乳類の骨、木船などの遺物が数千点保管されているほか、近代洋画壇で活躍した**前田寛治**（まえたかんじ）画伯の作品、曹洞宗管長を務めた**日置黙仙禅師**（ひおきもくせんぜんし）の資料など、業績を遺した郷土の先人が紹介されている。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
●休館日　月・火曜日、祝日の翌日、年末年始（展示により変更あり）

●問合せ先　☎0858・36・4309

物産　道の駅「北条公園」

東伯郡北条町国坂
JR下北条駅より車で五分

国道九号が北条バイパスに入って中ほどの、国道三一三号との分岐点に位置する。そこには**北条砂丘**が延々と続き、砂丘海岸はクロマツ林に覆われている。これらのクロマツは飛砂から農地を守るために保安林として植えられたもので戦時中はこれらの松から脂を採取した。周辺の農地は、スプリンクラー灌漑の施設が完備されていて、定期的に一斉に散水される様子が砂丘独特の農村風景となっている。

平成五年（一九九三）十一月に道の駅の指定を受けた。以前からあった特産物販売所を中心に、レストランや売店、屋根付き広場「希望の館」がある。駐車場は百二十六台収容できる。**ながいも**、**らっきょう**、アムスメロン、**ぶどう**、トマト、いちじく、さらには**二十世紀梨**と季節に応じた品揃えが豊富である。

海岸林には「いこいの浜北条オートキャンプ場」がある。オートキャンプ場サイト、バンガロー、一〇〇張り分のキャンプサイト、温水シャワーなどが整備されている。海と松林に囲まれたキャンピングは快適で、人気のサイトになっている。

日置黙仙（ひおきもくせん）

日置黙仙は、永平寺貫主、曹洞宗管長を務め、仏教界に偉大な足跡を残した。

弘化四年（一八四七）、伯耆国久米郡島村（現在の東伯郡北条町島）の農家に生まれた。本名は源之助という。母、弟と相次いで死別、十二歳で仏門に入った。

明治新政府が神道を国教とし、神仏別離の政策をとったため、各地で仏教は排撃され寺や仏像が破壊されるなど、受難時代を迎えた。黙仙が住職を務めていた青谷町の中興寺でも、建物を小学校に使用する計画があったが、寺は仏教徒の修行のため大切だと唱え、拒絶し通した。

明治二十五年（一八九二）、静岡県袋井市の可睡斎（かすいさい）の住職に迎えられた。この寺は徳川家康が建立し九十もの寺を支配していたが、ここも廃仏政策により荒廃していた。直ちに可睡斎保存会をつくって、復興事業を始め、積極的に募金活動を進めた。黙仙の人徳と経営の才能が発揮され、寺はみごとに復興した。

海外にも活躍の場を広げ、タイ国王の即位式やサンフランシスコで開催された世界仏教徒大会などに日本仏教界の代表として参加、アメリカ大統領とも会見した。

大正九年（一九二〇）、七十四歳で死去。

前田寛治（まえたかんじ）

前田寛治は、近代日本の画壇に新しい風を吹きこんだ画家といわれている。

明治二十九年（一八九六）、東伯郡北条村（現在の東伯郡北条町）の農家に生まれた。大正二年、図画教諭として倉吉中学校（現在の県立倉吉東高等学校）に着任した**中井金三**に影響され絵画を学んだ。

大正十年（一九二一）、東京美術学校（現在の東京芸術大学）を卒業、帝展と二科展に入選し画壇にデビューした。翌年、パリに留学し、ルーブル美術館などで古典の名作に触れながらセザンヌやクールベに学んでいる。

二年半後、帰国した寛治は第六回帝展に『J・C嬢の像』を発表し特選となった。続いて『横臥裸婦』も特選となった。

大正十五年（一九二六）、パリ時代の画友、小島善太郎や佐伯祐三らと「一九三〇年協会」を設立し、『棟梁の家族』などを発表しながら理論的リーダーとして活躍した。

昭和五年（一九三〇）、将来を期待されながら、三十三歳で亡くなった。

大栄町

お台場公園

東伯郡大栄町由良
ＪＲ由良駅より車で三分

由良川が**日本海**に注ぐ河口とクロマツの海岸林に囲まれた風光明媚な場所にあって、史跡探訪からキャンピング、マリーンスポーツまで各種の楽しみ方のできるユニークな公園である。国道九号沿いの**道の駅「大栄」**が公園への入口である。

鳥取藩が幕末の文久三年（一八六三）に築造した砲台跡「由良台場」が、昭和六十三年（一九八八）に国の史跡に指定された。東西一二五メートル、南北八三メートルの敷地の周囲四〇〇メートルに土塁をめぐらし、八門の大砲を据え、常備の兵二十人さらに支援の農兵二百五十人を配置したと伝えられる。当時としても堂々たる砲台だった。大砲は、大栄町六尾に築かれたオランダ方式の反射炉（六尾反射炉）で鋳造された。町役場の近くに鋳造場の跡がみられる。

現在、公園には砲身三メートル、口径三五センチ、重量三トンという当時最大級の大砲のレプリカ（銅製）が展示されている。また、公園に隣接して、反射炉をデザインした「歴史文化学習館」があり、反射炉の模型がみられる。

平成三年（一九九一）には、その史跡の東側に九・七ヘクタールの広さの敷地に、スポーツやキャンプができる公園がオープンしている。陸上トラック、ローラースケート場、ゲートボール場、テニスコートなどの町民が親しめる施設があり、さらに海岸林の中にはテント百棟を張ることのできるキャンプ場がある。海浜キャンプが楽しめる場所として人気が高い。さらに、公園に接した由良川には、レジャー船二百隻を係留できる「マリーナ大栄」があり、日本海と直結したマリーンスポーツの基地として活用されている。

イベントも多数行われ、七月には大栄町特産の**ながいも**と**すいか**にちなんだ「すいか・ながいも健康マラソン大会」、八月には花火の打ち上がる「お台場まつり」が開催される。

物産 道の駅「大栄」

東伯郡大栄町由良宿
ＪＲ由良駅より車で一〇分

国道九号沿い、由良川が**日本海**に注ぐ河口近くに位置する。海に面した海岸林を前に、周囲に砂丘農地が広がり、その向こうには**大山**を望む。施設の一部は平成四年（一九九二）にはオープンし、翌年四月の第一回目の登録で指定された古い道の駅である。

大栄町特産の「**大栄すいか**」や「**砂丘ながいも**」をはじめ地元の野菜や加工品が豊富な「お台場市場」は、県内のファーマーズマーケットの先駆けとして有名である。レストランやバーベキューハウスもある。

西には史跡として整備されている幕末の鳥取藩の砲台「由良台場」跡があり、隣にはスポーツ公園の**お台場公園**がある。

高尾八幡宮

東伯郡大栄町西高尾
ＪＲ由良駅より車で二〇分

八幡宮は、元慶八年（八八四）に山城国石清水八幡宮（現京都府綴喜郡八幡町）から勧請したと伝えられる。同八幡宮の伯耆四別宮の一つ、種別宮とされる。誉田別尊ほか八神が祀られ、武運の神として武将に崇拝された。

戦国期、兵火で焼失、衰退したが尼子氏により再建され、社領七十五石を寄進された。尼子氏滅亡により社領を失うが、藩政期は藩主・池田氏の祈願所となった。寛延元年（一七四八）、落雷により社殿を焼失したが、氏子の寄進により再興されている。

明治五年（一八七二）に、高尾神社と改称されたが、同十二年（一八七九）に、八幡宮に戻された。

大正六年（一九一七）ごろ、境内から平安中期と思われる経筒が出土した。

観音寺

東伯郡大栄町東高尾
ＪＲ由良駅より車で約二十五分

元は近江堂ともいった。山号を円

通山といい、天台宗に属し、本尊は千手観音である。

この寺が所蔵する『観音堂略縁起』（万延元年・一八六〇）によると、行基が開いた寺と伝えられ、鎌倉初期に倉吉の**大日寺**や**長谷寺**とともに佐々木高綱によって再建されたという。

天保六年（一八三五）の再建の際には、籠堂なども建て増しされた。しかし、藩に無許可だったことからとがめを受け、同十四年（一八四三）には観音堂のみを残して全て破壊されたといわれる。

所蔵する平安後期の作と思われる古仏約五十体は、元は大日寺にあったもので、大永四年（一五二四）の五月崩れの戦乱（伯耆国の守護山名氏が出雲の尼子氏に滅ぼされた戦）のときにこの寺に移されたと伝えられている。うち木造千手観音立像と木造十一面観音立像は国の重要文化財に指定されている。

史跡 六尾反射炉跡

東伯郡大栄町六尾
ＪＲ由良駅より徒歩十五分

六尾集落の北部、由良川左岸段丘上に位置する、若一王子権現（現在は、西園の建速神社）の跡地五〇アール余の地に製鉄の反射炉が建設された。安政四年（一八五七）四月に着工され、同年九月に反射炉二基が完成、総長六丈五尺で、一基あたりの一回の銑鉄生産量は四〇〇貫であった。

六尾反射炉は、鳥取藩が銃砲鋳造のために建設した洋式反射炉で、瀬戸村の武信潤太郎が反射寵御用懸としてこれにあたった。

砲身穿孔のための水車（錐入場）の動力として、由良川の利用が試みられたが、緩流のために失敗、変わりに加勢蛇川上流の矢下村（現東伯町）から「岩坪」の地を経て「六尾」にいたる長さ二里半、幅一間ほどの用水路が一年半の歳月をかけて文久三年に完成した。

同年二月、境湊（現境港）経由で大坂表に五寸砲筒五挺、実弾七〇〇空丸三〇〇が輸送されている。このほか、岡山藩、浜田藩からの注文を受けていた。

由良だんじり

東伯郡大栄町由良

高江神社の例祭日である十月二十四日に行われる御幸行列では、青年が神輿のように担いだ、だんじりが巡行する。だんじりとは、関西地方の祭礼で用いられる飾りつけられた屋台のことで、通常、車輪が付き曳くものであるが、由良では担がれる。だんじりは、高さ三メートル、重さ四百キログラムに及ぶ。太鼓叩きをする四人と踊り手二人の子どもが乗り込んだだんじりを、二十人の青年が担ぐ。

だんじりは氏子の各家の前で下ろされる。そして、だんじりの担ぎ棒に板を敷いて作られた舞台の上では、扇と弊を手にした子どもが清めの踊りを舞う。だんじりを迎えた家では、酒と肴を用意してもてなす。

だんじり歌には、江戸時代、鳥取藩の米倉があった由良から米が積み出される様子が歌われている。沖で待つ大型船に米を運ぶ地元の小船の航海安全を祈願し、その願開きとして奉納されたのが高江神社の祭礼であり、だんじりの巡行であったことがわかる。

東伯町

史跡 斎尾廃寺跡

東伯郡東伯町槻下
ＪＲ浦安駅より車で七分

白鳳寺院跡で**大山**から派生するなだらかな丘陵上に立地する。ここから海岸線まで一キロ余りと近く、**日本海**を見渡すことができる。白鳳寺院の堂塔基壇が土に埋もれることなく遺存している稀有な遺跡として、昭和二十七年（一九五二）、山陰唯一の国の特別史跡に指定された。

金堂が東、塔が西に並列するいわゆる法隆寺式伽藍を持つ中国地方で

も類例の少ない建物配置を示す。講堂は塔・金堂背後の中軸線上にはなく金堂寄りに配されている。これと同じ講堂の配置は、東伯耆地域内の**大御堂廃寺**と**大原廃寺**にも見られ、地域的まとまりを示している。塔・金堂とも基壇化粧は川原石積で、塔の規模は東西一六メートル、南北一五メートル、高さ一・二メートル、金堂は東西二一メートル、南北約一八メートル、高さ一・六メートルある。講堂には基壇が造られず平地式である。昭和六十二年（一九八七）からの調査で、寺域を区画する溝が見つかり東西約一六〇メートル、南北約二五〇メートルと地方寺院としては広大な寺域を持っていたことがわかった。

寺域内からは瓦・土器類の他、鴟尾・塑像片・塼仏など多数が出土している。軒丸瓦は五種類、軒平瓦は二種類あり、このうち創建時の軒丸瓦は、中房に八個の珠文を配した複弁八葉蓮華文で、奈良県の紀寺と同じ文様である。

また、軒平瓦には、法隆寺と同じ忍冬唐草文もみられる。塑像片は仏頭・白毫・口唇・手足先・納衣など断片的であるが、主尊と脇侍を思わせる大きさの違いも見られ、このうち小振りの仏頭は、熟練した仏師の手による秀作である。堂塔周辺は、整備されており自由に見学することができる。

史跡 八橋城跡

東伯郡東伯町八橋
ＪＲ八橋駅よりすぐ

ＪＲ**山陰本線**八橋駅と八橋小学校との間にある丘の上に位置し、大江城とも呼ばれる。行松左衛門尉正盛の家城と伝えられる。戦国時代の中期、出雲の戦国大名・尼子氏は、部将吉田肥後守の舎弟・吉田左京亮を同城に配置した。

中世の頃、伯耆の荘園（久永御厨、八橋郡）から年貢として鉄などが京進されている。港としての八橋は物資の集散地でもあったから、伯耆の特産物を求めて北国船も進出していたと考えられる。

毛利勢力が伯耆に及ぶと部将・杉原盛重が同城を預かったといわれる。盛重は、尾高城に弥三郎元盛を置き、自らは当城で東伯耆羽衣石の南条氏と対抗していた。

天正九年（一五八一）、吉川元春は嫡子・元長を八橋城に派遣、南条氏が秀吉に応じたことから八橋城は毛利方の最前線となった。秀吉・毛利の和睦後は、当城は南条氏の持城となる。慶長五年（一六〇〇）、伯耆一国が中村氏の領地となると、一族の中村彦右衛門一栄が同城主となった。

史跡 狐塚古墳

東伯郡東伯町八橋
ＪＲ八橋駅より徒歩一〇分

海岸線から約五〇〇メートルばかり入った丘陵頂部に位置する前方後円墳。全長六一・七メートル、後円部径三一メートルあり、その規模は東伯町内最大である。主軸はほぼ南北に延び、前方部を北側の**日本海**に向ける。墳丘東側のくびれ部には、土器を供献する場所である造り出し（墳丘から張り出す平坦面）が見られる。後円部の背後には幅五メートルの掘割がみられ、丘尾切断により墳丘が形成されていることがわかる。

昭和四十九年（一九七四）の調査で前方部と後円部とのくびれ部で小型の横穴式石室が発見された。石室は、長さ一・七メートル、幅〇・七メートル、高さ〇・八メートルの規模である。この横穴式石室の存在から古墳築造時期は、古墳時代後期と思われる。昭和四十九年に町の文化

財に指定された。

津田家墓地（体玄寺内）

東伯郡東伯町八橋
ＪＲ八橋駅より徒歩三分

津田氏は尾張の人で、織田氏の一統であるが、織田氏の支庶も多かったことから、織田元信は津田に改姓したといわれる。その子・津田元定の時、古木城が炎上して系図記録・重書を失ったと伝えられる。津田元綱は、池田輝政に仕えて五千石、その子元房は三千石を付与された。父の死後、元房は合わせて八千石を領することになった。その子元匡は、寛永七年に家督を相続し、家禄は七千石、鉄砲五十挺を預かっていたといわれる。

寛永九年（一六三二）、池田光仲が鳥取藩主となると、津田将監元匡は八橋郡に所領を与えられ、八橋を預かった。伯耆街道と八橋往来との分岐点に位置し、宿場町であった八橋には津田氏の陣屋が置かれた。

八橋城跡の南方一五〇メートルの地に、津田家の菩提寺体玄寺があり、同寺の西側丘上に津田家の十一基の墓碑がある。鳥取藩に仕えた初代元匡と二代の墓碑は見えないが、三代から十二代までと、三代婦人の墓碑である。附近には一畑公園があり、桜の名所になっている。

逢束踊り

東伯郡東伯町逢束

江戸時代、逢束は由良・赤碕間の宿場町であり、藩倉も存在した港町として栄え、人の出入りも多かった。様々な地方の踊りが混入してできあがったのが、現在の逢束盆踊りであるといわれている。

現在は八月十四日に、海に面したあじさい公園で踊られる。演目は「西郷音頭」、「伊勢音頭」、「志賀団七」、「大文字茶屋」、「丁半踊り」の五種類である。このうち「志賀団七」は、薙刀を持った女と刀を持った男が仇討ちの場面を表現する演劇性の高い芸能である。

方見神社

東伯郡東伯町上伊勢
ＪＲ浦安駅より徒歩二〇分

天照大御神など十神を祀る。かつては、天照皇大神宮、上伊勢大神宮などと呼ばれた。

創社年代はわからないが、社伝によると広さ四町四方の境内を所有し、伊勢神宮を模して野の宮、斎王殿、着到殿などがあり、上官以下十数名の神官が奉仕していたといわれる。中世以降、兵火や火災で衰えたが、その都度、古くは国司の波多野氏や南条氏、中村氏が、近世では藩主・池田氏が四石余を寄進して興した。

かつて、祭日に向けての奉仕に、ミケノオコラ（「御饌の御子等」か）といって、氏子の中から十三歳未満の少女十二人を選び、お神酒を醸し、神饌を炊ぐ作法が伝えられていた。また、これら神饌用の稲を植えるときには、御田植祭を行ったという。

祭日には、当社を内宮、下伊勢鎮座の和伊智三社大明神（現槻下神社）を外宮に見立て、両社より十二頭の獅子頭と神輿を出し、同町神楽谷で落合いの神事を行った。例祭日は、かっては九月十九日であったが、現在は体育の日である。

神社の随神門には、鎌倉期の作といわれる木造随身立像が二体ある。

倉坂神社

東伯郡東伯町倉坂
山陰本線浦安駅よりバス十五分

倉坂神社は、近世には国石大明神・若一王神といわれ、石凝姥命など六神を祭神とする。創社年代はわからない。

荒廃していたが、氏子の神社再建への強い熱意により、明治元年（一八六八）に本殿が再建された。これは石見国（現島根県）の宮大工・嘉助が精魂込めて建造したものである。

総欅造りの本殿に飾られた数多くの彫刻は見事で、無名の大工の手による神社建築として、これだけ手の込んだものは多くはなく、赤碕町の**神崎神社**のそれに劣らないものといわれる。

なお、その彫刻の一つの馬には伝説がある。この馬は夜な夜な稲田に下りて稲苗を荒らすので、眼に釘を打たれ封じられたと語られている。

明治五年（一八七二）に倉坂神社となった。

転法輪寺（てんぽうりんじ）

東伯郡東伯町別宮
ＪＲ浦安駅よりバス三〇分

もと湯谷山大教院と称し、平安時代の初期に開かれ、山岳仏教の霊場として栄えたという。

天禄二年（九七一）、後醍醐（ごだいご）天皇の皇子と伝えられる空也上人（くうやしょうにん）が、諸国行脚の途中ここを訪れ、翌三年（九七二）九月にこの寺で亡くなったと伝えられている。上人は、自分の死期が近いことを悟り、自身の姿を残し衆生を守りたいとの願いから、上人自ら修業姿と往生姿の肖像を刻んだ。寺には上人の黒衣の修業姿（高さ九〇センチ）と、白衣の往生姿（高さ八十七センチ）が本尊として祀られている。秘仏であり御開帳以外には拝観できない。この木像は、昭和三十五年（一九六〇）に県の重要文化財に指定されている。なお、空也上人の事蹟の絵巻物が寺宝として伝わっている。これは、長さ一〇メートル余におよぶ絵巻物の大作で、江戸初期に描かれたものらしい。土佐派の流れをくむ大和絵で、この地方一流の絵師の筆になるものと思われ、繊細にして豪華である。上人の一代記を五つの絵によって表現し、一幅ごとにお家流の達筆で、上人の事蹟が描かれている。また、三百年前に、この地方の木地屋（ろくろ師）が寄進した格調高い法輪塔には、塔身の三段目の裏側に「空也四代伯州久米郡木地山万屋勝助内儀寄進承応三年二月二三日」と墨筆で書かれている。この地方の木地屋の研究には貴重な民俗資料であるとともに、全国的にまれにみる供養塔である。

寺の近くには、空也上人のものといわれる霊地がある。この墓地には、目通り周囲四・六メートル、高さ九メートルのイヌグスの巨木がある。この巨木はタブノキであり、樹幹は極めて大きく、その枝振りもよく樹勢も強い。県では昭和三十一年（一九五六）五月に天然記念物に指定した。

また、本堂の境内に自生する巨木で、古くから「空也イチョウ」と愛称されるイチョウの大木がある。日通り周囲五・四メートル、高さ二十八メートル、根周り十一・三メートルあり、昭和三十一年五月に県の天然記念物に指定された。

伝説

昔、転法輪寺（てんぽうりんじ）に飼い猫がいた。この猫が和尚さんの寝た後に人間に化けて踊っていた。それを知った和尚さんは、「おまえは長い間、寺に居てくれたけれど、もう出ていってくれ」と言って、鰹節を食べさせて猫を追い出した。

何日か後、遠くの村で長者の葬式があった。和尚が呼ばれて、いざ出棺というときに急に天気が荒れ始めた。そして、その状態は、何日も続いた。これは、化け猫が仕組んだことだった。

猫は占い師に化けて長者の家の前を通りかかり、「これは転法輪寺の和尚さんでないとおさまらない」と言った。そこで、転法輪寺の和尚さんが呼ばれ、拝み始めると嵐は止み、無事葬式を行うことができた。

それ以来、転法輪寺は広く知られ檀家も増えて栄えたという。猫の恩返しだったことから、今も寺の入口にはその猫の彫刻が飾られている。

伯耆の大シイ

東伯郡東伯町宮場
ＪＲ浦安駅よりバス二〇分、宮場入口下車、徒歩二〇分

春日（かすが）神社（祭神・天児屋根命（あまのこやねのみこと））の参道にある鳥居の近くの急斜面に立つ大シイ。

南方の枝は参道を越えて枝を垂れ生々と茂る。根際の周囲は斜面に沿って五〇メートルある。幹囲一〇・七二メートルあり、根元から一メートルの位置の幹囲は二〇・四九メートルある。胸高周囲は約一〇メートルで、枝葉の茂った面積は六六〇平方メートルに及ぶ。スダジイの木では有数の大木である。

このスダジイは、「日本の巨樹名木一〇〇選」に選ばれている。

また、昭和十二年（一九三七）四月、国の天然記念物に指定された。

古布庄の大スギ

東伯郡東伯町中津原
ＪＲ浦安駅よりバス約三十五分、終点下車、徒歩一〇分

大正神社（祭神素盞嗚尊ほか）の南に、一本のスギが高くそびえている。根囲り一三メートル、胸高直径二・三メートル、樹高三〇メートル、樹勢は良く、スギの巨木として有数である。また、古来から神木として地元住民の崇敬を集めた。

昭和三十二年（一九五七）十二月、県の天然記念物に指定された。また三本杉集落付近は大山鳥越、**地獄谷**から発する加勢蛇川の上流に位置し、国立公園**大山**の裏道にあたる。原始風景をのこす渓谷も多い。

三本杉の盆踊り

東伯郡東伯町三本杉

毎年、盆の八月十四日と、集落の金比羅さん・秋葉さんの縁日（七月十六日）に踊られる。

江戸時代中頃から踊られていたといわれ、鳥取県中部で広く踊られる「みつぼし踊り」の原型ではないかと考えられている。本来、神仏へ奉納するものだという古い盆踊りの要素を伝える事例として、昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定された。

一向平

ＪＲ浦安駅よりバス三〇分、徒歩九〇分

東伯町の南端、加勢蛇川上流の標高四五〇～五八〇メートルに広がる平原。加勢蛇川の右岸に沿って長さ約一・五キロ、幅八〇〇メートルほどの広さをもつ。**大山**の火山砕屑物に由来する砂礫層からなり、平坦面上には火山灰層をのせないことからごく新期の河岸段丘と考えられる。

現在、この平坦地では、酪農が営まれ、最上流部にはキャンプ場とその管理棟などがあり、中国自然歩道大休峠コースの起点となっている。

ここから上流の加勢蛇川は、大山の秘境の一つである**地獄谷**とよばれる峡谷となる。自然歩道をたどり地獄谷へ入ると、**鮎返りの滝**のすぐ上流に架かる高さ三〇メートル、長さ四五メートルの**大山滝**吊り橋を経て、約一・五キロで大山滝へ至る。大山滝吊り橋は二〇〇〇年に発生した鳥取県西部地震により一時通行不能となったが、現在は修復されている。

一向平と大山滝の間は、距離も短く起伏の比較的少ない歩きやすい山道なので、休日などにはハイキング客も多い。地獄谷は**大山隠岐国立公園**に含まれている。

大山滝

東伯郡東伯町野井倉
ＪＲ浦安駅下車よりバス三〇分、終点下車、徒歩六〇分

大山に源を発し、東伯郡東伯町を流れる加勢蛇川の上流にある滝。加勢蛇川上流の**地獄谷**の水を集めて、落差約四三メートル（上段二八メートル、下段一五メートル）を二段の滝を通して豪快に落下する。最大幅四メートル。水量、落差とも大山随一で、滝をつくる地層（造瀑層）は、古期大山砕屑物の溝口凝灰角礫岩中にはさまれる溶岩である。かつては三段の滝であったが、昭和九年（一九三四）の室戸台風によって崩壊し二段になったといわれる。

一般に、大山周辺に形成される滝は、地形の傾斜の変わり目や、浸食に強い溶岩と柔らかい火砕岩が分布するところにできやすく、加勢蛇川上流には、大山滝の他にも大休滝など多くの滝が形成されている。**大山隠岐国立公園**内の奥座敷の雄大な滝として、訪れる人が多い。

鮎返りの滝

ＪＲ浦安駅よりバス三十五分、徒歩二〇分

東伯郡東伯町加勢蛇川上流の標高約五一〇メートルに位置し、**地獄谷**の吊り橋の真下にある。落差は上段四メートル、下段四メートル。最大幅約三メートルの二段滝である。地獄谷入口にできた平坦な段丘面の一向平野営場から約八〇〇メートルの距離にある。

赤碕町

智積寺

東伯郡赤碕町竹内
ＪＲ赤碕駅よりバス一〇分、竹内停留所下車、徒歩三分

智積寺は、山号を**船上山**といい、船上寺、智積院、法蔵院などとも称され、かつては船上山山頂にあった。天台宗に属し、**大山寺**の末寺であったらしいが、現在は**大雲院**（鳥取市）の末寺である。本尊は地蔵菩薩である。

『船上山并寺内分限記』によると、寺が開かれたのは、元明天皇の頃（七〇七～一四）という。また、船上山にはこの寺をはじめ十数院あったといわれているが、戦国乱世の兵火によって焼失し、その度に再興がくり返され、文禄年間（一五九二～九五）には、争乱のために寺領がなくなったとある。これは、豊臣秀吉が寺領を取り上げたためで（『船上山根元記』）、以後、山上の各院は荒廃していった。その中の一院、大乗院は山を下り、竹内村に草庵を構え、各院に関わる寺務をとっていた。大乗院から法蔵院へ寺務が引継がれ、大正八年（一九一九）、法蔵院は名前を以前の船上山智積寺に戻した。

明治はじめに出された神仏分離令によって山上からおろされた古鐘には、「備前福岡庄　貞和三年（一三四七）…」という銘がある。これは、県の文化財に指定されている。また、本尊など三仏は享禄年間（一五二八～一五三二）の作といわれる。

神崎神社

東伯郡赤碕町赤碕
ＪＲ赤碕駅よりバス十五分、徒歩十五分

荒神さんとよばれ、牛馬の守護神として古くから有名である。現存する棟札によると、江戸時代、とくに八代将軍・徳川吉宗以後、盛んに尊崇され、鳥取藩主池田氏も代々尊敬している。社殿の本殿とその彫刻および向拝裏の滝の彫刻などが、昭和二十七年（一九五二）九月に県の保護文化財に指定された。

本殿は、鳥取藩のお抱え大工・小倉園三郎が、嘉永九年（一八五三）に建築し彫刻も施した。社殿は小さいが、地上に壇を造って礎石を置き、その上に腰組という手のこんだ組物を組上げて、その上に社殿を造るという、この地方では珍しい方法が用いられている。屋根下から縁下にかけて、彫刻が施され、建築というより工芸品というのがふさわしい。本殿向拝に唐破風、軒下には菊、竜、葡萄、りす、左側には素盞嗚命の大蛇退治、本殿正面屋上部には菊蓮、四隅の屋根下には鳳凰像、左側屋根下には扇と軍配・鶴、そして脇障子には恵比須、大黒、猩々、緑下には牛馬、波と兎、獅子、波と亀、そのほか木鼻に至るまで所狭しと彫刻してある。

拝殿向拝裏の竜は、本殿の制作者の孫である小倉平次郎が、明治十二年（一八七九）に完成したものである。縦四メートル四〇センチ、横六メートル三〇センチの天井の一面に、うねった竜が彫られている。豪放な構図と雄こんな刀法は天井全面をよく生かしている。また、正面梁間の竜宮城や拝殿屋外の神功皇后と武内宿彌の像も、細かい刀を使い巧みに彫られている。

菊港

東伯郡赤碕町赤碕
ＪＲ赤碕駅よりバス十五分、赤碕公民館前下車すぐ

承応年間（一六五二～五五）に藩倉と船番所が置かれ港として整備され、鳥取藩十湊の一つとなる。水深が浅いため、明治以降はこの港の東にある亀崎港（赤碕港）が使われるようになるが、江戸時代、藩倉の米はここから小船によって沖に停泊する千石船へ積み出しされ、大坂中ノ島の鳥取藩大坂御蔵屋に回送されて

いた。

菊港は東西二つの波止（防波堤）からなる。『鳥取県郷土史』には古老の言として、東の波止は享保・元文（一七一六～四一）頃に一二〇間、続いて西の波止が一八〇間の規模で築造されたと記されている。

また、『赤碕町郷土史』では、文政年間（一八一八～一八三〇）頃に西の波止が改築されたと推察されている。一方、西堤基部の案内板には寛政年間（一七八九～一八〇一）に築かれたとある。現在、菊港を描く古絵図は赤碕浦湊絵図（弘化二年＝一八四五、県立博物館蔵）と赤碕宿の古絵図（江戸後期、河本氏所蔵）の二枚が確認されている。特に後者は、波止改築前後の様相を示す貴重な史料である。この絵図の制作年は不明だが『赤碕町郷土史』のいう文政頃と考えられる。

波止は人頭大の玉石が積み上げて造られ、西堤は東堤に比べてやや小振りである。東堤は長さ一五〇メートル、幅一三・八メートル、高さ二・三メートル、西堤が長さ九〇メートル、幅五・三メートル、高さ三・四メートルである。菊港は、玉石積みの波止をよく残しており、わが国の江戸時代後期頃の築港の状況を知ることのできる港遺構として貴重である。

現在、西堤は途中で途切れ、それより先はテトラポットで補強されている。東堤の先端部に小さな灯台が設けてあり、また平成元年には、流政之作の石造彫刻「波しぐれ三度笠」（平成七年度鳥取県景観大賞受賞）が設置された。

赤碕塔

東伯郡赤碕町赤碕
ＪＲ赤碕駅下車より徒歩一〇分

海岸に位置する花見潟墓地に全国的に類例の少い石造美術品赤碕塔がある。

宝篋印塔と宝塔とを混合した特異な型式のもので、石造美術として手のこんだものである。代表的な花見潟の四つの西塔は、鎌倉時代に造られたものと考えられ、基壇から宝珠までの高さが三・二五メートルあり、優美なものである。

昭和三十一年（一九五六）に県の保護文化財に指定された。

物産 道の駅「ポート赤碕」

東伯郡赤碕町別所
ＪＲ赤碕駅よりバス十五分、ポート赤碕下車

国道九号沿い、赤碕港を見下ろす高台に位置する。赤碕漁港から水揚げされる鮮魚の販売で有名な道の駅である。眺望もすばらしく、情報コーナーのある円形の展望室からみる**日本海**は、その広さを実感することができる。また、漁火の夜景も見逃せない。

平成五年（一九九三）十一月に登録を受け、翌年八月に正式オープンした。駐車スペースは五十二台、大型車が楽々入れる設計となっている。鮮魚直売センターのほか、レストラン、さらにコンビニエンスストアがある。

なかでも鮮魚直売センターは赤碕漁業協同組合の直営で、新鮮なハマチ、ヒラメ、ウニ、サザエやワカメなどを販売している。道の駅全体の販売額も全国有数の規模になっている。

海が見える場所に、野外遊具を備えた「ふれあい広場」もあり、小さな子供も楽しめる。

また、近年、江戸時代に日本海で難破した韓国の漁船を鳥取藩と地元住民が手厚く保護したということが資料からわかった。その交流を後世へ伝えるため交流記念碑が設置されている。

大山や**船上山**のへの往来の折には是非立ち寄りたい道の駅である。

笠取塚古墳

東伯郡赤碕町別所
ＪＲ赤碕駅よりバス約一〇分、赤碕東口下車、徒歩五分

古墳時代前期の前方後方墳。赤碕港を見下ろす丘陵先端部に立地する九基からなる別所古墳群のうちの一つ。全長五三メートル、後方部辺三〇メートル、高さ五メートルある。後方部中央に盗掘穴があり、副葬品は伝わっていない。また、埋葬施設の構造についても不明である。埴輪は認められないが、前方部墳裾には葺石らしき石が散在している。

前方後方墳は、出雲地方に多く分布し、しかも古墳時代後期まで造り続けられているが、鳥取県内では数少ない。本古墳は、県下で最初に確認された前方後方墳として知られる。国道九号沿いに古墳が位置することから、後方部墳丘上に交通安全祈念碑が建てられている。本古墳の東側には、同じ古墳群の別所二号墳がある。全長三〇メートルの前方後円墳である。

以西踊り

東伯郡赤碕町以西ほか

東伯郡赤碕町旧以西村及び近接の中山町旧逢坂村でみられる盆踊り。この踊りの特徴は、櫓太鼓を中心として輪になり、浴衣に編み笠・頬被りといういう出で立ちの踊り手が、身体全体で「しな」をつくるように踊る点にある。

松江中学に赴任する道中、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が見た（「知られぬ日本の面影」記載）中山町の盆踊りはこの踊りだとされている。なお、同町下市の妙元寺には小泉凡氏（ハーンの曾孫にあたる）揮毫の記念碑が立っている。

史跡 出上岩屋古墳

東伯郡赤碕町出上　JR赤碕駅よりバス五分、出上下車、徒歩五分

古墳時代後期の古墳。墳丘は失われて、石室が露出している。石室は埋葬空間である玄室と前室とからなる複室構造で、玄室は長さ約三・六メートル、幅二メートル、前室は長さ一・六メートル、幅二メートルあり、石室全体は長方形である。奥壁の左右には、ノミ痕跡も鮮やかな切り石加工の側石が立てかけられている。玄門は、一枚石の中央を長方形に刳り貫いて造られている。床面には、奥壁から一メートルの所に仕切石がある。前室の左右には、柱状の石を立てて入り口とし、扉石をはめ込む段状の掘り込みがある。

出土品は、玄室内で金環が一個発見されているだけで、副葬品は不明である。

また、切石造りの石室で玄門が一枚石を刳り貫いて造られている石室は、淀江町の**岩屋古墳**（国史跡）をはじめ鳥取県西部に偏在している。本古墳はその東限に位置する。平成三年（一九九一）、県の史跡に指定されている。

河本家住宅

東伯郡赤碕町箆津　JR赤碕駅よりバス一〇分、箆津下車すぐ

河本家は、古くから大庄屋を勤めた家柄である。表門を入ると広い前庭があり、主屋は役所を兼ねて土間も広い。

主屋は四代目の普請と伝えられ、十八世紀中頃の建築と思われる。現在の建物は裏側に二間半ほど庇を付けて拡張したり、上手も角屋を延ばして客間を増設したりするなど改造が著しいが、もとは広間型五間取の建物と考えられる。

土間境の間仕切通りでは、大黒柱が棟通りから半間後により、表側の入側柱が側柱から一間のところに立ち、裏側では「へや」の上手の裏側よりに入側列の柱が見られるだけで、柱の位置が不規則になっている。小屋梁の長さが四間半も大きな梁間の架構なのに入側列に柱の見られないのは、入側柱が必要なくなったからで、小屋組架構の技術的な進歩を示すものである。

箆津のハマヒサカキ群落

東伯郡赤碕町箆津　JR赤碕駅よりバス一〇分、箆津下車すぐ

ハマヒサカキは、ツバキ科の樹高一・五メートル内外の常緑低木で、本州の千葉県以西から沖縄、朝鮮半島南部、台湾にまで自生する。暖地性で早春に花をつける雌雄別株の海岸植物である。

箆津海岸は、**大山**の裾野が大きく**日本海**に突出し、そこには顕著な風衝形を示す様々な植物群落が見られる。その中にハマヒサカキ群落が点在する。対馬海流によって北上したとみられるハマヒサカキは、島根半島では比較的多く、その自生が確認されるが、箆津に見られる自生は日本海沿岸の北限群落として昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

本種は仏花に用いるヒサカキに似ているが、葉がより革質で光沢が強く、密に互生する点で見分けられる。

智光寺の樹叢

東伯郡赤碕町　JR赤碕駅よりバス八分、赤碕中史下車、徒歩五分

赤碕町内を国道九号に沿って走ると、車窓から**日本海**岸に向けてエノキの高木とともに藪状にマテバシイが密集する智光寺の樹叢が見えてくる。

マテバシイは、ブナ科の暖地性常緑広葉樹であり、主に関東以西、四国、九州の太平洋沿岸を中心に分布

する。

智光寺境内のマテバシイは、島根県日御崎付近とともに自生の北限とされ、平成元年（一九八九）四月に県の天然記念物に指定された。

樹高約二〇メートルに達する数本の成木のほか、多数の幼樹、稚樹が認められ群落として安定している。これは、この付近の海岸が日本海にやや突出し、対馬海流の影響で冬季も比較的暖かい地域であることによるものと考えられ、植物分布上からみて貴重な存在である。

天皇水

東伯郡赤碕町大熊　ＪＲ赤碕駅よりバス十二分、高岡下車、徒歩五分

後醍醐天皇伝説の一つ。**船上山**に向かう後醍醐天皇が、当地にさしかかったとき、急に喉の渇きを訴えられた。従者が困っていると、天皇は近くの岩を指さし動かすようにと命じた。従者が大熊村一番の力持ちに岩を動かさせたところ、清水が湧き出してきた。喉を潤した天皇は悦んで、力持ちの男に「強力」と名乗るようにいった。

現在、赤碕町に多くある高力姓はこの強力が変化した名字だと言われている。

名所　船上山

東伯郡赤碕町山川　ＪＲ赤碕駅下車バス三〇分、船上山少年自然の家下車、徒歩三〇分

東伯郡赤碕町南西部にある標高六一五メートルの山。**大山**火山地域のうち、東側の主要部を構成する。矢筈ヶ山（標高一、三五八・六メートル）から北方に甲ヶ山（一、三三八メートル）、勝田ヶ山（一、二一〇メートル）を経て延びる山脈の北東端に位置する。

山容は頂部が平坦な溶岩台地状の地形をなす。山腹斜面のうち下部の山麓部は緩やかであるが、上部は柱状節理の発達した溶岩の急崖となり、東斜面の上部は垂直に近い絶壁となり、「屏風岩」と呼ばれている。この絶壁は一〇〇メートル以上もあり、岩壁登はんの格好の練習場となっている。

下部の緩斜面一帯は、浸食で崩壊した砕屑物が堆積した地形で、茶園原と呼ばれる草原となっている。山岳仏教が盛んだった頃、船上山の寺坊の僧侶たちがこのあたりで茶の湯に使うお茶を栽培していたことにちなんで名付けられた。ここでは毎年春に野焼きが行われ、桜の名所ともなっている。

矢筈ヶ山から北方に甲ヶ山、勝田ヶ山、船上山にかけての尾根は、下層から船上山溶岩、甲ヶ山溶岩、矢筈ヶ山溶岩と呼ばれる少なくとも三枚の厚い溶岩流が積み重なってできている。これらの溶岩は古期の大山火山活動によって流出し、尾根状になって残ったが、長い間の浸食により、周囲の高台が削られて、硬い部分が取り残されたものである。また、烏ヶ山南方の城山溶岩がつくる尾根、南西録の笛吹山から江府町吉原にいたる吉原溶岩の尾根もこれと同様な溶岩流である。

船上山の東側の急崖には千丈滝がある。この滝は勝田川支流にある落差の大きい滝で、東にある雄滝、西にある雌滝の二つの滝からなる。雄滝は船上山の溶岩台地の上を流れ、標高六二〇メートルから五一〇メートルにかけて発達し、落差は約一〇九メートル、最大幅は五メートルである。雌滝は標高六四〇メートルから五五〇メートルの付近に発達し、落差は約九〇メートル、最大幅は五メートル。どちらも板状節理の発達した両輝石石英安山岩の溶岩とその下の火砕流とを浸食して形成された滝である。

鱒返しの滝も勝田川支流の船上山溶岩にかかる滝で、落差六六メートル。上段、中段、下段に分かれている多段滝で、それぞれ四七メートル、十二メートル、七メートルある。

船上山は**名和長年**が後醍醐天皇を奉じて、北条氏の兵を破った古戦場である。一三三三年二月、天皇は隠岐島を脱出して伯耆に上陸され、以後五月に船上山を出発し、京都に帰還されるまでの八十余日を行宮として過ごした。この行宮跡は、国の史跡に指定されている。山上には、**船上神社**、行宮碑があり、麓には**県立船上山少年自然の家**がある。

船上神社

東伯郡赤碕町山川　ＪＲ赤碕駅よりバス三〇分、徒歩九〇分

祭神は伊左那美命・速玉乃男命・事解男命の三神で、昔から船上山三所権現といい寺僧が奉仕した。

明治十一年（一八七八）に両殿に安置してあった仏体および仏具を赤碕町竹内の**法蔵院（智積寺）**に移し、船上神社と改称した。社前に碑があるが二メートル一〇センチ、幅九〇センチ余りで、豊後（大分県）の儒学者広瀬旭窓の撰文と画が刻まれ、「伯耆国八橋郡船上山碑」とある。

安政四年（一八五七）に、逢坂の橋井氏が建てたものである。

県立船上山少年自然の家

東伯郡赤碕町山川
ＪＲ赤碕駅からバス三〇分、船上山少年自然の家下車すぐ

大山隠岐国立公園内にある**船上山**は、山岳仏教が華やかな頃は霊場として栄え、また後醍醐天皇が隠岐を脱出して潜行した場所としても知られる。

県立船上山少年自然は、雄大な自然と歴史にふれながら、青少年の心身の健やかな成長のため、昭和五十二年（一九七七）七月に船上山の中腹に開設された。定員二百人の宿泊室のほか、体育館や研修室、レクリエーションホールなどを備えている。

●休館日　月曜日及び年末年始、祝日（土・日曜日は除く）

●問合せ先　☎０８５８・５５・７１１１

塩谷定好

塩谷定好は終生ふるさとを離れることなく、洗練された技巧的作品で芸術写真を開拓した。

明治三十二年（一八九九）、現在の東伯郡赤碕町の回船問屋に生まれた。小学生のころからカメラを持って身近な海浜風景などを写していたという。

大正八年（一九一九）、赤碕町にアマチュア写真クラブ「ベストクラブ」を創設し、活動の拠点とした。「自然のこころをわたしのこころとして写す」として、豊かな郷土の自然や温かい人物像をとらえ、軟調の写真で表現した。また、印画紙を曲げたり、ゆがめたりしたデフォルメや、油絵の具を使って明暗をコントロールするなど、その作風は当時、多くの写真家に鮮烈な衝撃を与えた。

大正十二年、国際サロンに『砂丘』を出品し、初入選したのをはじめ数々の写真展に入賞した。西独ケルン美術館のフォトキナ写真栄誉賞受賞、日本写真協会功労賞など国内外で高い評価を得ている。

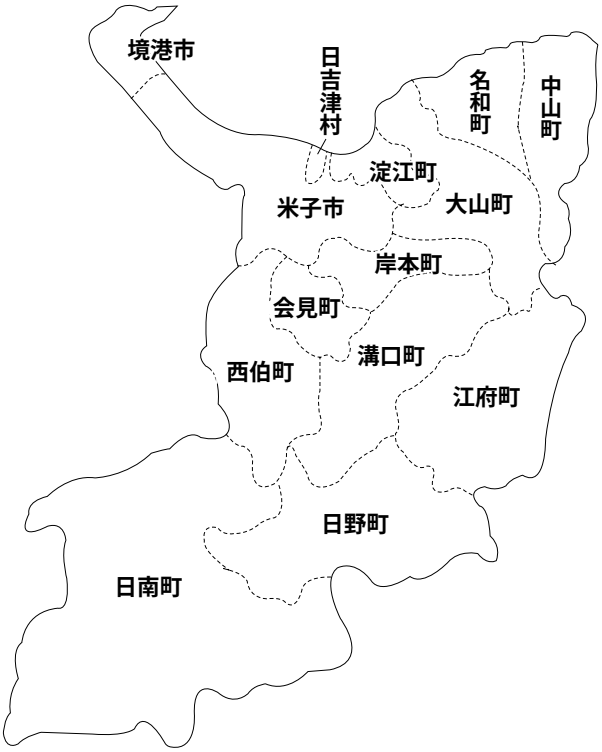
昭和六十三年（一九八八）、八十九歳で亡くなった。

TOTTORIKEN BUNKA KANKOUJITEN

西部

▲ペンション村（岸本町）

▲弓ヶ浜半島（米子市・境港市）



- 米子市
- 境港市
- 西伯町
- 会見町
- 岸本町
- 日吉津村
- 淀江町
- 大山町
- 名和町
- 中山町
- 日南町
- 日野町
- 江府町
- 溝口町

中海

島根県にまたがる県西部の汽水湖で、北は島根半島、東は**弓ヶ浜半島**によって**日本海**から隔てられている。周囲八四キロメートル、面積九・八五ヘクタールで、琵琶湖、霞ヶ浦、サロマ湖、猪苗代湖に次いで国内第五位の広さをもつ。平均水深は五～六メートルで湖底は平坦であるが、北端近くに最大水深一七メートルの凹所がある。弓ヶ浜半島北端の境水道で日本海に通じ、大橋川で西方の宍道湖と繋がっている。

中海の形成は、約十五万年前の最終間氷期にさかのぼる。当時、日本海の一部であった中海付近は、**日野川**河口から延びてきた砂州によって隔離され、内湾となった。続く最終氷期には海面が下がって陸域となったが、約六千年前の縄文海進時には再び海域となり、砂州も形成されて弓ヶ浜半島となり現在の中海が成立した。湖中の大根島と江島は、最終氷期のはじめ頃に噴出した玄武岩溶岩からなる低平な火山島で、大根島には中央部に位置する大塚山と呼ばれる小さなスコリア丘のほか二カ所に溶岩トンネルがあって、火山地形がよく残っている。

昭和三十八年（一九六三）、農水省直轄の中海干拓事業がスタートした。これは埋立てと干拓による農地造成と、中海の淡水化による農業用水の確保を目的としたものであった。しかし、環境保全や淡水化によって予想される水質汚濁などが問題となり、鳥取県側の彦名・弓ヶ浜両地区の埋立て、島根県側の揖屋・安来両地区の干拓、淡水化のための中浦水門の建設が完了したところで、事業は現在中断されている。残る本庄地区の干拓のために敷設された堤防は、江島・大根島を経て弓ヶ浜半島と島根県側を結ぶ道路として利用されている。平成十二年（二〇〇〇）十月六日に発生した鳥取県西部地震では、埋め立て地や干拓地に地盤の液状化などの被害が集中した。

中海には、毎年十月頃に飛来するコハクチョウをはじめとして水鳥が多く、彦名地区には野鳥観察のための**米子水鳥公園**がある。

日野川

鳥取・岡山県境の**道後山**（一、二六九メートル）および鳥取・岡山・島根県境の三国山（一、〇〇四メートル）の源流部から、県西部を北流して**日本海**に注ぐ流長七七・四キロの県内最長の一級河川である。

流域面積は、八六〇平方キロメートルで県東部の**千代川**（一、一九〇平方キロ）より狭い。

本流は、日南町、米子市など県西部の九市町村を流れる。江府町江尾までは北東に流下するが、ここから下流部では**大山**の西縁に沿い北北西の流路をとる。上流部の主な支流には生山から南に分かれる石見川と、このやや下流で北に分かれる印賀川がある。日野川と石見川の合流点付近には名勝の**石霞渓**があり、印賀川には**菅沢ダム**とその貯水池である日南湖があり、ともに**奥日野県立自然公園**の中心となっている。江尾付近から下流部では、溝口町古市で左岸側から野上川が合流するほかは、主として右岸側の大山から多数の支流を集めて流下し、岸本町岸本からは米子平野に入り、法勝寺川を合わせたあと**皆生温泉**東の河口に至る。

日野川の中流部から上流部は、三郡変成岩および花崗岩が分布している。生山から根雨の間や江尾の下流美女石付近では、これらの岩盤を浸食する穿入蛇行が見られる。花崗岩は風化によるマサ化が著しく、特に上流部のマサ土地帯では江戸時代にタタラ製鉄が盛んに行われた。カンナ流しによる流砂は、日野川によって運搬され、河口からのびる**弓ヶ浜半島**の砂州が成長する大きな要因となった。

大山関連

名所 大山

JR米子駅よりバス五〇分、登山道入口下車、徒歩一〇分

県西部に位置する中国地方の最高峰で、主峰弥山の三角点は標高一、七〇九・四メートル。山頂は弥山から東へ切り立った稜線状にのび、最高点の剣ケ峰（一、七二九メートル）を経て天狗ケ峰（一、七一〇メートル）に至る。弥山の三角点の標高は一、七一〇・六メートルであったが、平成十二年（二〇〇〇）に発生した鳥取県西部地震の際に崩落し、約八メートル東へ移設されたため現在のように一メートルほど低くなった。

南北方向から望む大山は、稜線下に大岩壁がそそりたち荒々しい山岳景観を見せるが、西から望むと穏やかな円錐状の山容を見せ、「伯耆富士」とも呼ばれる。山の北面と東面は、深く刻まれた谷が放射状に発達し、北壁に源を発する佐陀川上流部の元谷は浸食による大小の岩塊で埋め尽くされている。北面を流れる阿弥陀川や甲川には阿弥陀滝・庄司ケ滝が、東面を流れる加勢蛇川には大休滝や**大山滝**、**鮎返りの滝**などがあり、ハイカーたちの目を楽しませてくれる。

大山は、約百万年前から一万数千年前までの火山活動によって形成された大型の火山で、その噴出物からなる山麓部は南北約三〇キロメートル、東西約三五キロメートルに広がり、北の裾野は**日本海**の海岸まで達する。

大山は複成火山でその火山活動は、約四十万年前までの古期大山火山活動と、約三十万年前以降の新期大山火山活動の二期に分けられる。古期大山の噴出物は大量の溶岩と火砕岩が主で、矢筈ケ山（一、三五八メートル）から**船上山**（八六九メートル）へ延びる東大山や**烏ケ山**南方の城山の尾根は、この時代の普通輝石斜方輝石デイサイト溶岩で構成されている。火砕岩は溝口凝灰角礫岩と呼ばれ、山麓一帯に広く分布する。また北麓の鈑戸山（五一五メートル）や鍔抜山（七〇四メートル）、**豪円山**（八九一メートル）なども、古期大山活動期に形成された側火山である。

一方、新期大山の活動は何度も繰返されたテフラ（火山灰）の噴出で特徴づけられる。上空高く放出された火山灰の多くは、偏西風により大山から東方に運ばれ、東山麓では溝口凝灰角礫岩の上に厚く堆積している。これらの火山灰のうち、約五万年前に噴出したDKPと略称される大山倉吉軽石層は、北陸・信州・関東北部まで分布することが知られている。このような火山灰の噴出の間には、火砕流も流出して主に西麓に見られる**桝水（高）原**や清水原・槇原・水無原・福永原などの平坦地形を形成した。活動末期には溶岩ドームとして弥山・三鈷峰（一、五一六メートル）や烏ケ山（一、四四八メートル）が出現した。北西部に位置する孝霊山は側火山で、新期大山活動期の初期にできあがったものと考えられる。これら新期大山活動期の噴出物は、古期のものと同様デイサイト質であるが、黒雲母、角閃石、斜方輝石を含むことで特徴づけられる。

昭和十一年（一九三六）、指定された大山国立公園は大山地域のみを対象とするものであったが、昭和三十八年（一九六三）、岡山県の**蒜山**高原地域および島根県の島根半島、隠岐諸島、三瓶山地域が加えられ、**大山隠岐国立公園**として大きく拡充された。

大山寺周辺には旅館や土産物屋が建ち並び、春の新緑、夏の登山、秋の紅葉、そして冬のスキーと、四季折々にさまざまな表情を見せ、訪れる人々で賑わう。

標高七七〇メートルの大山寺からは弥山山頂へ夏山登山道が整備され、登山道の八合目から頂上までは、天然記念物の**大山キャラボク**の保護および踏み荒らしによる山頂部の荒廃を避けるため木道が敷かれている。かつては、弥山と天狗ケ峰の間の山頂稜線は大山縦走路として登山者に親しまれたが、弥山と剣ケ峰の

間には崩落により特にやせ細った個所があり、滑落事故が起こるなど危険なため、現在は登山道から除外されている。

大山寺を起点とする大山環状道路は、標高七〇〇～九〇〇メートルのブナ林帯を通り、桝水（高）原を経て烏ヶ山南東麓の鏡ヶ成まで、山体を西回りにほぼ半周する。新緑の初夏や、紅葉の時期には観光客の車で混み合うが、途中、**鍵掛峠**から望む大山南壁の景観はことに美しい。環状道路は**鏡ヶ成**で、蒜山高原に至る**蒜山大山スカイライン**および**関金温泉**に至る如来原倉吉線に分岐する。

《大山の歴史》

仏教渡来前の**大山**は、『出雲国風土記』の中で、「国引き」の神話の舞台となっている。

地形的に考えても、出雲・伯耆にまたがり、**日本海**沿岸に位置するこの山は、例えば航海の目標にしろ、陸上交通の拠点にしろ何らかのかたちで、この地方の重要なポイントとして崇められていたことが想像できる。

仏教渡来後、山岳仏教が始まり、かつては幾多の名僧学僧が出たが、明治元年（一八六八）、排仏毀釈によりその勢力が衰えた。奈良朝から平安朝にかけては、神仏習合説により、地蔵菩薩の垂迹が大智善神であるとして、大智明権現を祀った。南北朝時代には、後醍醐天皇を擁して、**名和長年**とともに弟・信濃坊源盛が多くの僧兵を引きつれて**船上山**で戦った。

明治三十七年（一九〇四）に指定された重要文化財の**阿弥陀堂**、昭和六十三年（一九八八）に指定された**大神山神社奥宮**、下山神社をはじめ、大山には文化財が多く残る。

また、大山はもとは山自体を御神体として崇め祀ったものといわれている。しかし、他の山と同様に近代まで一般の登山が制限されていた。

明治時代を迎えると登山への道も開かれ、新しい時代の大山の歴史が開かれていった。

《大山の動植物》

①植物分布

「高山植物」の名称は、ヨーロッパ・アルプスの植物を高山植物としたのが始まりであるが、実際は寒地植物というべきで寒い高山に分布するので、高山植物という。植物の熱帯から寒帯までの分布（水平分布）は、高山のふもとから頂上までの分布（垂直分布）と一致する点があり大山の高山植物の中に樺太・カムチャッカの平地や海岸の寒い地方に分布するものも見受けられる。

高山植物の分布帯は、山麓帯・高木帯、（下部・落葉広葉高木帯、上部・針葉高木帯）、低木帯、草本帯、地衣帯、雪帯と分けるのが標準であるが、大山では高木帯が山の下部にあって、すべて落葉広葉高木、上部は低木と草本だけで、その間に針葉高木帯がない。これは**日本海**側特有の変則的な分布であって、**大山**の気象条件に深く関係する。独立峰大山は十二月から三月までの四か月は、北西の季節風が強く吹きつける。丈の高い樹木は広葉を落して対処する

参考

夏には特に多くの登山客が大山を訪れる。登山者のなかには、御来迎を見ようと朝早くに宿を出発し登山する人もいる。しかし、大山の日の出を見るのは、頂上よりはむしろ途中の七合目から八合目まであたりが適当である。

大山では頂上から剣ケ峰に至る縦走路の途中から、日によっては元谷側に出る雲上に、自分自身の影坊主が写され、その頭部を中心に円形の五色の虹が出現することがしばしばある。これは「ブロッケンの怪」といって、アルプスなどの山岳ではよく見られる現象である。

本来の御来迎とは、どこでも見られる日の出をさすものではなく実はこの五色の光背を負った自分自身の仏形を、雪中に見ることである。

が、針葉樹はこの強い風の中葉をつけたままでは冬が越せない。よって、針葉高木が生育しないことになる。

大山の山麓帯はアカマツを主とし、マツムシソウの花咲く原野も多い。

大山寺横手付近から一、四〇〇メートルまでは落葉高木帯で、その下層はブナ・ミズナラ・イタヤカエデなどの落葉高木、その上層部はブナとオオカメノキ（落葉低木）を主とした美しい原始林が開ける。ブナの大群落は大山の自慢で日本中部以北のシラカンバにあたる。これらの樹木は雪や寒風をさけて落葉する。

この下層の高木林下には常緑針葉低木のハイイヌガヤ、チャボガヤ、常緑広葉低木のエゾユズリハなどが多い。これらは葉を落とさず雪をかぶるので、寒風を避けた最適の形態で冬を過ごす。一、四〇〇メートル以上は高木帯から直ちに低木草本帯になる。この間に緑色の針葉高木帯が存在しない点で、特異性がある。

低木草本帯まで来ると、北海道の高原でも見られる白い花を咲かせるノリウツギ（アイヌ名サピタ）の群落があり、甲ケ山や**蒜山**（ひるぜん）には、千島、樺太の平地や海岸にあるコケモモも見られる。さらにアカミノイヌツゲ・ダイセンミツバツツジ・ダイセンヒョウタンボク・ウスゲヤマザクラなどの下にダイセンスゲが目につく。

②ダイセンキャラボク

大山で一番目につくのがダイセンキャラボクの群落で、北西に向いたなだらかな一面を占める。この中の大群落は世界的にも貴重で特別天然記念物に指定されている。これは東西一一〇メートル、南北三二〇・八メートルに広がる、ゆるやかな大斜面を被い、すべてシベリヤ方面に向いて開けている。

この木はいずれも高さ五〇センチから二メートルの低木で、イチイの変種であり材は硬く、根元から多くの枝が分かれて平伏している。葉は針葉で尖端がとがり、常緑でやや広く、長さ十三ミリぐらいで枝の周囲から出ている。雌雄異株で、花は五月に咲く。

大山の頂上は十二月から五月の半年間は雪に覆われ、深さ三メートルに及ぶ。しかも、北西のシベリヤからの冷たい風雪は岩を砕くほど強い。植物はこの雪の下で大きな厚い毛布を着たような姿勢で寒風を防ぎ雪解けを待つ。

ダイセンキャラボクの純林をよく見ると、林緑に枝の枯れたものがある。これは北西の季節風によって雪が吹き飛ばされ、枝葉が雪風にさらされたために枯れたものである。これは頂上に生えるハイイヌツゲにも見られる。また、枝は、いずれも北西方、すなわち寒いシベリヤの方向で、山の下に向かっている。ダイセンキャラボクは寒さと雪を好む植物で、雪ずりに適応した高山植物といえる。

③高山帯の植物

大山の高山帯では、ミヤマイボタ・ヤブウツギ・ヤマヤナギ（元ダイセンヤナギ……今はつかわない）などの低木、ナンゴククガイソウ・ヒトツバヨモギ・イヨフウロ・コメススキなどの草本の群落がみごとである。このほかにエゾノヨロイグサ・ヤマオダマキ（ミヤマオダマキは産しない）、シュロソウ・アオヤギソウなど美しく、オオバショリマ・ヘビノネゴザ・シラネワラビ・ミヤマワラビなどのシダ類も見られる。シモフリゴケのようなコケ類が生育する**ダイセンキャラボク**の幹には大型の地衣類ウスバカブトゴケのみごとな着生が見られる。

小さい草本ではオオヤマフスマ・マイゾルソウ・イワカガミ・キュウシュウコゴメグサ（元ダイセンコゴメグサ）など、夏の大山頂上には可憐な花が咲き美しい風景が広がる。

桝水原（ますみずはら）に降りるいわゆる正面登山道から下山すると、高山帯を上から下へ三十二度の急斜面を下ることになる。上空からの展望はまた格別よい。わずかの岩場にキュウシュウコゴメグサ（元ダイセンコゴメグサ）・ヤマオダマキ・ダイセンオトギリをはじめツツジ科植物に属し常緑低木の小さな高山植物であるツガザクラ・コメバツガザクラ・シラタマノキ・ミヤマホツツジなどが点々と咲き美しい。上方にはキツネヤナギ（元ダイセンヤナギ）の一〇センチ内外の低木で、株の太いものが目立つ。下に降りると次第に丈が高くなって、横手道まで下りると一・五メートルの中低木になる。この斜面にはオオバギボウシの大群落やミヤマコアザミ・チャボゼキショウも見られる。

落葉高木帯になると、林内に光が

入らないところがある。この付近には日本中部以北の寒地に分布するオオヤマザクラ（別名ベニヤマザクラ・エゾヤマザクラ）が、雪の消えた五月頃に満開となりみごとである。オオヤマザクラは大山以南では島根県三瓶山（さんべさん）・山口県冠山に生育する。

④絶壁帯

岩石の落下が多く、わずかに安定したところにダイセンオトギリ・ミヤマクワガタ（元ダイセンクワガタ）・ヒメアカバナ・カンチコウゾリナ・チャボゼキショウ・ノウゴイチゴなどが生育する。これらが岩石と落ちて、八〇〇メートルの横手道の沢などで生長し、**お花畑**が見られる。

⑤大山の高山お花畑

大山頂上は海抜高度が高く、**元谷**（もとだに）や**地獄谷**では夏でも残雪があるほど気温が低い。よって七月、八月に高山植物がいっせいに開花し、お花畑が出現する。

⑥大山の高山植物の由来

高山植物は一般にたけが低く、株が太い。また、根が深く、花の美しいのが特徴である。高山植物は、夜になり気温が下ってから生長する。昼は空気が清浄で紫外線が多い。これは植物にも有害なため、自衛のための美しいアントチアン（花音素）とフラボンが発育し、紫外線を吸収して植物を保護している。高山植物の花の美しい理由がここにある。

大山が活動した第四紀更新世には、氷期と間氷期が繰り返した。この氷期時代には北方のベーリング海、オホーツク海の周辺、アラスカ、アリューシャン群島、カムチャッカ半島、樺太、千島、北海道などの寒地植物が南下し分布した。一方、朝鮮海峡が陸続き時代であったこともあり、この方面から寒地植物が渡来し、温暖になった現世にも高山に取り残されていると考えられる。特殊な自然環境でここに発生したものがある。

博労座（ばくろうざ）は**豪円山**（ごうえんざん）の西下にある谷間で、七〇〇メートルの低いところであるがブナの生育がよく、ブナやミズナラからなるみごとな原始林である。このように低い所にブナの美林があるのは北西のシベリヤから吹いてくる季節風の影響である。北西の季節風が豪円山にあたってはねかえり、長い期間渓谷に雪が残る。谷の気温も低くなりブナの生育に適した環境となっている。いわゆる山陰型渓谷植物景観をつくっている。

標高八九一メートルの豪円山にはみごとなクロマツ林が分布する。通常、クロマツが下位に、ブナが上位に分布するが、ここで見られる逆転分布は、学術上きわめて貴重である。

もともと大山にはクロマツが多い。特に伯耆大山・伯耆溝口あるいは中山町羽田井（はたい）などから登るいわゆる昔の大山の参道脇には、道標としてのクロマツの巨木が目立つ。樹齢三百年から三百五十年を数えるクロマツは、冬、深雪のため道を見失わないよう目印として植えられたものである。豪円山や**中ノ原**、**上ノ原**に生育しているクロマツは、参道脇のクロマツの種子が強い北西の季節風によって吹き飛ばされ生えたものである。

全山の植物は千種を超え、全山一大植物園の観がある。しかし採取は禁じられている。

⑦鳥類

大山は鳥の多いことでも有名である。大山寺付近の遊歩道で、多くの種類の鳥を見聞きできる。とくに五、六月の新緑の季節には、渡ってきた夏鳥も加わって賑やかになる。林の中では声・姿とともに人気のあるオオルリをはじめ、ウグイス、キビタキ、マミジロ、クロツグミ、センダイムシクイ、ヤブサメ、コサメビタキ、サンコウチョウ、ゴジュウカラ、アオバトなどの特徴ある鳴き声を楽しむことができる。また、アオゲラ、アカゲラ、オオアカゲラと大型のキツツキが幹を叩く迫力あるドラミングを聞くこともできる。これらの探鳥には**大神山神社**や**寂静山**の辺りあるいは横手道が適当である。

川床や**地獄谷**などの渓谷部ではヤマセミやアカショウビンに出会う。北壁の断崖に営巣するアマツバメは最もスピードが出る鳥だといわれ、ジュリリリと鳴き交わしながら鎌形の翼を張って飛ぶ様は南光河原で見ることができる。六月になると声のブッポウソウといわれるコノハズクや寂しさを感じさせるヨタカが鳴く。ガスや雨の夜は源頼光が退治した鵺の正体とされているトラツグミの声が不気味である。開けた場所ではカッコウやホトトギス、林の中ではツツドリなどの鳴き声を耳にす

る。また、草原ではセッカやホオアカが囀り、山頂や稜線近くの低木帯では、高山性のビンズイ、カヤクグリ、メボソムシクイ、クロジ、コルリが珍しい。

秋には冬鳥が渡ってくる。マヒワやアトリは大群を作って飛行したり、梢で採を餌ったりする。秋の深まりとともにツグミなどと同様に平地に渡ってくる。

年中通して見られるカラ類は、秋にはエナガを中心に、シジュウカラ、ヤマガラ、コガラ、ヒガラ、さらに科のちがうメジロやコゲラなどが入り混じり、一団となって移動していく。

ワシタカ類では中腹の山中でオオタカの営巣が発見されているが、クマタカ、イヌワシ、ハチクマ、ハイタカやハヤブサがそれぞれの時期に応じて見られる。ヤイロチョウやイスカのような個体数の少ない稀種も記録されている。

⑧昆虫類

標高差があり、地形も変化に富んでいることから、多様な植生に恵まれている。また、自然がよく残っているので昆虫類も豊富で、採集地として有名である。このため種あるいは亜種として「**ダイセン**」の名を冠するものが多い。

ダイセンコツノゼミ
ダイセンオサムシ
ダイセンナガチビゴミムシ
ダイセンミズギワナガゴミムシ
ダイセンナガゴミムシ
ダイセンツヤゴモクムシ
ダイセンコバネナガハネカクシ
ダイセンビロウドコガネ
ダイセンムツボシタマムシ
ダイセン
セダカコブヤハズカミキリ
ダイセンチビツチゾウムシ
ダイセンホソガガンボ
ダイセンヤマブユ
ダイセンシジミ
ダイセンセダカモクメ

とあげられる。甲虫で約千種、チョウで約百二十種が記録されている。**大神山神社**付近や横手道、二の沢、三の沢、さらに**桝水原**や原野に多くの種が生息していた。チョウのジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミ、アイノミドリシジミといったゼフィルス類は、横手道で早朝に乱舞したが、現在はあまり見られない。中国地方特産のウスイロヒョウモンモドキやヒョウモンモドキ、ヒメヒカゲ、オオウラギンヒョウモンなどの山地の草原に生息するチョウも、桝水原の開発で見ることができなくなった。

他の動物にも**ダイセン**ヤチグモ、**ダイセン**アイノダニ、**ダイセン**ニシキマイマイと大山の名が付くものがあるように、動物相の豊富さがうかがい知れよう。

《大山自然探勝路》

大山の自然探勝の遊歩道には、大山寺・切分け（金門）・**大神山神社**（おおがみやまじんじゃ）**奥宮**（おくのみや）まで上がって引き返し、**寂静山**（じゃくじょうざん）に上がり、**豪円山**（ごうえんざん）下にあたる立の坂の上で終るものがある。約二キロの山道には、樹木、鳥、自然などについて簡単に説明した看板がある。また、沿道の樹木には名札が設置されていて、一目で何という樹木かわかるようにしてある。これらを植物分類順にあげると次のとおりである。

イヌガヤ科　ハイイヌガヤ
イチイ科
　ダイセンキャラボク・チャボガヤ
イチョウ科　イチョウ
マツ科
　モミ・カラマツ・ヒメコマツ
　クロマツ
スギ科　スギ
カバノキ科
　アカシデ・クマシデ・イヌシデ
ブナ科
　ブナ・イヌブナ・クリ・ミズナラ
ニレ科　ケヤキ
モクレン科　ホオノキ
クスノキ科
　ダンコウバイ・クロモジ
ユキノシタ科　イワガラミ・ウツギ
マンサク科　マルバマンサク
バラ科　コゴメウツギ・ナナカマド
カスミザクラ・キンキマメザクラ
ウワミズザクラ・アズキナシ
マメ科
　ヤマフジ・ハネミイヌエンジュ
ウルシ科　ツタウルシ・ヤマハゼ
　ヤマウルシ・ヌルデ
モチノキ科　アオハダ・イヌツゲ
　クロソヨゴ・ソヨゴ
ニシキギ科　コマユミ・ツルマサキ
ブドウ科　ツタ
カエデ科　ハウチワカエデ
　オオモミジ・イロハモミジ
　ウリハダカエデ
マタタビ科　サルナシ

キブシ科　キブシ
ウリノキ科　ウリノキ
ミズキ科　ハナイカダ・アオキ
　ミズキ・ヤマボウシ
リョウブ科　リョウブ
ウゴキ科　コシアブラ
ツツジ科　ヤマツツジ・アクシバ
　ダイセンミツバツツジ
ハイノキ科　サワフタギ
モクセイ科
　ミヤマイボタ・ヤマトアオダモ
クマツヅラ科
　クサギ・ムラサキシキブ
スイカズラ科　ニワトコ・タニウツギ
　オオカメノキ・コバノガマズミ

《大山の民俗・芸能》

現在、**大山**の主要な祭礼は次のようなものがある。

①春祭り（五月二十四日）

春祭りは、三所権現（大智明権現＝地蔵菩薩、霊像権現＝観音菩薩、利寿権現＝文殊菩薩）の御幸行列が行われ牛馬市が立った。かつては、百人担ぎの御輿（大智明権現）と五十人担ぎの御輿（霊像権現）が繰り出して盛大に行われた。

祭礼の翌日には必ず大雨が降ると、市に集められた牛馬の排泄物を洗い流すことから「大山さんの大くそ流し」といわれた。

現在は、**大山寺**に伝わる小振りの御輿を公募した厄年の青年が担ぎ御幸する。また、この日の午前中、大山へ向かう道の一息坂（中山町香取）では同町束積の小谷家が参拝者を接待する「一息坂のもてなし」が江戸時代さながら行われる。

②夏山開き（六月第一土・日曜日）

夏山開きは、登山の安全を祈願する新しい祭で、多くの登山客で賑わう。土曜日の夜、**大神山神社奥宮**で祭典が行われた後、たいまつを手にした参拝者が**博労座**まで行進する。翌日は山頂の祭壇で神官・山岳関係者によって神事が行われる。

③もひとり神事（七月十四日）

もひとり神事は、本来「弥山禅定」と呼ばれ、僧侶がこの日だけ霊水と薬草を求めて山頂に登ることのできる行事であった。

しかし、明治の神仏分離政策以降は**大神山神社奥宮**の神宮に引き継がれ、現在は**大山**の正式な山開きの儀式となっている。七月十四日の夜中、神官と先達に先導された信者一行は、梵字ケ池（八合目）へ登る。ここで池の水と周囲に生えるヒトツバヨモギを採取し下山する。下山後、霊水と薬草は参詣者に配布される。

④施餓鬼法要（八月十五日）

施餓鬼供養は**阿弥陀堂**（建造物、阿弥陀三尊像ともに国の重要文化財）で行われる。この日は、参詣者の先祖供養として、流れ灌頂が行われる。

⑤採灯護摩法要（十月二十四日）

秋の採灯護摩は、大山町の観光イベント「紅葉まつり」の中心であり、稚児と大峯行者が**大山寺**本堂まで行列し、採灯護摩が行われる。さまざまな山伏の作法が続いた後、信者・参拝者の祈願が書かれた護摩木が加持されてくべられる。

大山寺

大山寺がいつ創建されたかは不明である。知積上人・行基菩薩の創立といわれたり、あるいは養老（奈良時代）のころ、玉造の俊方（出家して金蓮）が開いたなどといわれたりしているが、伝説の域を出ていない。

平安時代の初期には密教が流行し、奈良時代の平地仏教が山岳仏教となった世の風潮につれ、高野山や比叡山がそうであったように、**大山**も開かれ、建立されたものと推察される。

慈覚大師が唐から帰朝し、引声阿弥陀経を貞観七年（八六五）にここに伝えたと寺伝にあるが、自ら来山したということは確かではない。

阿弥陀堂や内部の諸仏によって、当寺が平安時代に非常に栄えていたことが考えられる。その末期の寛治八年（一〇九四）には、大山僧兵が三百人も京都に強訴に出かけている（中

右記）。基好のような学僧が出ていることも、その寺が隆盛であり学問が盛んであったことを物語っている。

平安時代には、ほとんどの寺社で神仏混淆が行われていたが、大山もそれにもれず大智明権現・地蔵信仰が盛んとなり、神社と仏寺とが併存した。いまも寺内に多くの神社や鳥居を見ることができる。

源平時代には西伯の豪族・紀成盛が厚く尊崇し、承安元年（一一七一）七月に起きた大山火災のときには、金銅地蔵尊（たびたびの火災で破損、いまは頭部だけが残る）、鉄製厨子（破損してばらばらになっているが、補修して元の形にした。これに張った鉄板には銘文が鋳出してある）を寄進した。この二つは明治三十七年（一九〇四）二月に国の重要文化財に指定されている。南北朝時代には**名和長年**の弟・信濃坊源盛が僧兵を引き連れ**船上山**合戦に参加し、天皇方に尽くした。

戦国時代になると信仰と僧兵の武力により、盛んに活動していたことが諸書に散見される。

また、尼子氏も晴久以来数代、大山の信者で、天文二十三年（一五五四）三月の大火の後も、尼子晴久一門の大々的な再興の寄進が行われた。洞明院所蔵の棟札写に詳しく見える。尼子氏が永禄九年（一五六六）、毛利氏に亡ぼされた後は、毛利氏が仏殿、宮殿、仏体などの大規模の奉納をしている。毛利氏は寄進などをして、大山信徒を味方につけようとした。

天正十年（一五八二）には毛利輝元、吉川元春、小早川隆景などが諸堂を建立したり、諸仏の奉納したりしたのもその表れである。

吉川氏は特に崇敬が厚く、文禄の役では、吉川広家が船に大山丸と名づけ、下山善神を祀って戦勝を祈った。

また、尼子氏遺臣・亀井氏の尊敬も厚く、亀井政矩は大坂の役の戦勝を祈り、戦後は社殿を改造している。現存の下山神社は、文化二年（一八〇五）に建築されたものである。八棟造りの社殿は亀井氏の寄進によるもので、社殿の所々に亀井氏の四目結の紋章がある。

慶長年間（一五九六～一六一五）、米子城主・加藤貞泰も、神輿を奉納して崇敬の誠を表わしている。江戸封建制が確立し各領主の所領が定められたが、慶長年間に豪円が幕府に哀願し、慶長十五年（一六一〇）に三千石寺領安堵（寺領確保の証明）の朱印状を得て、長く鳥取藩の治外法権の区域として盛えた。三千石の寺領はいわゆる大山領であって、汗入（西伯郡の一部）日野両郡にまたがる二十三カ村である。

また、寺内には、四十四の塔頭の諸院があったが、現在は理観院、蓮浄院、金剛院、普明院、法雲院、観証院、洞明院、円流院、寿福院、禅智院などが残っているにすぎない。大山寺本堂に登る石畳の左右や南光院川を渡って**阿弥陀堂**までにある草に埋れた石垣や屋敷跡は、全て廃寺の跡である。**寂静山**などにも屋敷跡が多く、往時の大山がいかに盛んであったかを物語っている。

宝永七年（一七一〇）までは多く天台座主が兼任して大山を支配したが、これ以後は滋賀法親王（坂本滋賀院・日光法親王の隠退所）の支配となり、いよいよ大山の権勢はあがった。大山の政庁は本坊で西楽院といい、現在の**大神山神社奥宮**社務所の後方にあたり、いまも広い屋敷と壮麗な石垣を残している。坂本から派遣された代官はここにいた。

現存の諸社寺は、大神山神社奥宮、下山神社、大山寺本堂、阿弥陀堂であるが、盛時には金門をはさみ求問持堂、金剛童子、山神護法、釈迦堂、利寿大権現、霊像権現、虚空蔵、八大龍王などがあった。

隆盛を極めた大山寺も明治の廃仏毀釈により、明治八年（一八七五）に大山寺号が廃止となり、大智明権現は大神山神社奥宮となり、多くの大山に伝えられた文化財も散逸し、寺運も急速に衰えた。明治三十六年（一九〇三）に大山寺号が復活したが、本堂は昭和三年（一九二八）に炎上し、信徒の浄財によって再建された。

なお、大山寺内には、豪円僧正石

像、信濃坊源盛碑、高網等身地蔵、僧塔然の碑、三輪平太碑、基好の墓などがある。

年中行事は左のとおりである。

一月　三日　元三会
二月十五日　涅槃会
四月八日　仏生会　春秋彼岸会
六月四日　山家会
六月十五日　孟蘭盆会
十一月二十四日　天台会
五月二十四日・七月十五日、九月二十四日　祭日

大山寺阿弥陀堂

西伯郡大山町大山寺
ＪＲ米子駅よりバス約五〇分、大山寺下車、徒歩五分

南光河原の西に位置するブナ林の中にある。**大山寺**の堂で現存する唯一のものである。五間四方単層宝形造で柿葺きの美しい建物である。寺伝によると貞観七年（八六五）、慈覚大師によって創建されたというが、明らかではない。明治三十七年（一九〇四）、国の重要文化財に指定されている。

堂内には木造阿弥陀如来、両脇侍像が安置されている。これらは明治三十六年（一九〇三）四月に国の重要文化財に指定された。

大山寺宝物館「霊宝閣」

西伯郡大山町大山
ＪＲ米子駅よりバス約五〇分、大山寺下車、徒歩五分

霊宝閣は、**大山寺**の宝物館として昭和五十五年（一九八〇）に設置された。

かつて大山寺本堂に安置されていた重要文化財である観音像四体をはじめ、県指定保護文化財の梵鐘や各寺で保管されていた仏像などが展示されている。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
●休館日　十二月～三月末
●問合せ先　☎０８５９・５２・２０７２

大山のカラス天狗

大山では、くちばしのある天狗、「カラス天狗」の姿を絵馬や土鈴に見る。また、平成九年（一九九七）五月、大山町仁王堂公園には高さ八・八八メートル、重さ一〇トンで、翼があり、鳥の頭に山伏姿をした天狗像が設置された。

大山には、「大山伯耆坊」とも「伯耆大山清光坊」ともいわれる天狗が棲んだと伝えられる。前者は日本の「八大天狗」の一つであり、後者も「四十八天狗」に数えられる。

また、米子市や日南町には大山の天狗が羽根を休めたという木の伝承があり、『陰徳太平記』には、大山大智明権現の神勅を尼子晴久に伝える天狗風の山伏が登場する。たくさんの天狗伝承は、大山が日本有数の霊山であったことを伝える証拠である。

大山と文学

大山はさまざまな作品に登場している。

『出雲国風土記』には「大神岳」と記され、「輪郭に張切った強い線を持つ」大山の霊気が表現されている。

志賀直哉（一八八三～一九七一）の代表作『暗夜行路』のクライマックスは、大山が舞台となっている。ここに記された大山寺の風物、頂上からの展望など、みごとな描写は読者を引きつけて離さない。大正三年（一九二八）、**大山寺**・蓮浄院に宿泊したときの体験が、鮮烈に生きている。

また、日野郡溝口町生まれの大江賢次（一九〇五～一九八七）は、大山を父と仰いだ。『望郷』（昭和四十四年）の一節は、江府町御机の文学碑に刻まれている。

「おお大山、大山！
いや、大山さん
おんみは私の親父
永遠に慈愛と威厳をもつ
母なるふるさとの父よ」

プロレタリア作家であった大江は、非合法活動で検挙され、昭和九年（一九三四）に失意の心で帰郷した。そのときの思いを次のように書いている。

「――結婚も破れ、死を決してひそかに帰郷した時の、伯耆大山駅のプラットホーム。陽を受けた大山は朱にかがやき、その『親父』の朱をそそいだ沈黙の諫めは、私を現在まで生きのびさせて下さった」

高浜虚子（一八七四～一九五九）

は昭和七年（一九三二）に訪れている。

「秋風の急に寒しや分の茶屋」

大山寺参道には、昭和四十年（一九六五）に建立された句碑が立っている。

虚子句碑に並ぶように米子市生まれの安部東水（一八九九～一九七三）の句碑が立つ。

「笹鳴や春待ちたまふ佛たち」

これは、昭和五年（一九三〇）、東京日日と大阪毎日新聞社が公募した「日本新名勝俳句」に入選した作品。

このほか、大町桂月（一八六九～一九二五）、河東碧梧桐（一八七三～一九三七）、田山花袋（一八七二～一九三〇）、斎藤茂吉（一八八二～一九五三）ら多くの文学者が大山の魅力を文学作品に残している。

県立大山自然科学館

西伯郡大山町大山
JR米子駅からバス五〇分、大山寺バス停下車すぐ

大山の自然、歴史、文化などを紹介する施設として昭和五十一年（一九七六）三月に開設された。大山の地形、地質、動植物の標本が展示されているほか、平成二年（一九九〇）に設置された映像ホールでは、マルチスライドにより美しく、迫力のある映像で大山の素顔が紹介されている。自然保護活動の拠点施設としての役割も果たしている。

なお、現在、新たな施設（「大山自然歴史館」（仮称））が計画されている。

●開館時間　午前九時～午後四時
●休館日　毎週月曜日
●問合せ先　☎0859・52・2327

大神山神社奥宮

西伯郡大山町大山
JR米子駅よりバス五〇分、大山寺下車、徒歩二〇分

大神山神社は『延喜式』に記載され、伯耆国二宮として崇拝を集めた古社で、本社を米子市尾高に置く。古代・中世には山陰道における修験霊場の中心として大山寺の本地仏三所権現を祀った。初めは大山中腹の現奥宮に鎮座していたが、中古には山麓と山腹に社殿を造営し、それぞれ冬宮と夏宮にと称した。冬宮はのちに二宮大明神と称し、延宝年間には現在の米子市尾高に社殿を移したが、夏宮は社僧によって本地仏が置かれて大山権現となり、明治の神仏分離令により今の大神山神社奥宮となった。

奥宮はかつて、大山寺の諸堂・諸院が建ち並んでいた地域の最奥に位置した。今も、大山寺本堂前左手に石造明神鳥居が残り、約六〇〇メートルの石畳の参道が伸びている。途中には、銅製鳥居と神門が設けられている。石造明神鳥居には文政三年（一八二〇）の銘が、銅製鳥居には天明二年（一七八二）の銘がある。

奥宮社殿は参道突き当たりの石段上のやや広い平坦地に西面して建つ。社殿は前方に拝殿、後方に本殿を設け、この二棟を弊殿で連結する複合社殿である。現社殿は寛政八年に焼失し、文化二年（一八〇五）に再建されたものである。

本殿は、桁行二間・梁間二間の身舎の周囲に高欄付切目縁を廻し、向拝三間を弊殿に取り込んでいる。基壇は亀甲形の切石積みで、身舎は石造亀腹上に土台を巡らして円柱を建てる。中備蟇股・拳鼻・木鼻などの彫りや装飾は簡素であるが、垂木先の長押釘隠しには飾金具を付けるなど、外観は重厚な造りになっている。

本殿内部は前面を外陣、背面を内陣とし、内陣中央間を一段高い板床にして間仕切り、御神体を安置する。向拝は角柱に虹梁形頭貫を通し、出三斗を組んで身舎柱と虹梁で繋ぐ。向拝中央間に木階を設け、その両脇間は縁と同じ高さの張り出し床板とし、高欄を巡らす。向拝全体は総漆塗に、組物や中備蟇股極彩色とし、弊殿内の装飾と合わせているが、外廻りの他の部位並びに本殿内部は素木造りとしている。

弊殿・拝殿は、本殿向拝に接続する桁行八間・梁間三間の建物で、棟は本殿にT字形に取りつくが、桁行八間のうち本殿寄り四間を弊殿とし、前寄り四間が拝殿となる。弊殿の左右には、一間幅の庇を付け、拝殿の左右には各々桁行一〇間・梁間二間の身舎の周囲に切目縁を巡らした長廊が張り出し、長大な建築となっている。

弊殿身舎内の床は畳敷（六十三畳）、天井は格天井である。身舎の柱は本殿より一回り太い円柱で、金箔張り、柱頭、頭貫、組物、桁等を極彩色とし、周囲小壁に奏楽天女を付し、天井格間には花鳥・人物・動物描かれている。深い杜に包まれた外部から拝殿を経て弊殿内部に入ると、壮麗かつ荘厳な空間が間近に迫り、圧巻である。

拝殿は、正面の入母屋屋根と大きな軒唐破風や飛貫、頭貫上の龍の丸彫り、拝殿両脇張り出し小間の半唐破風屋根など、特色ある外観をつくっている。また、拝殿に接続する左右の長廊は八間の各梁間に二重の虹梁を架けて棟を受け、化粧屋根裏を支えている。棟は弊殿・拝殿の棟より一段低くし、拝殿屋根に取りつく。

本殿・弊殿・拝殿からなる複合社殿は、共に他に見られない珍しい形式である。奥宮社殿は、左右の長廊を含む正面間口が五二メートル余り、本殿を含む奥行が三三メートル余りと長大で、神社建築としては最大級の規模である。内部構成や格部の技法も優れており、全国的に見ても江戸時代末期の神社建築を代表するもので、隣接する下山神社社殿と共に昭和六十三年（一九八八）十二月に国の重要文化財（建造物）に指定された。

阿弥陀滝

阿弥陀川の源流は、**三鈷峰**をはさんで一つは宝珠尾根との間の剣谷、もう一つは振子山親指ピーク、野田山との間を流れる阿弥陀沢とが合流して川床へと流れている。その合流地点より剣谷の方へしばらくさかのぼると阿弥陀滝がある。水脈の少ない大山地域内では**大山滝**とともに名のある滝の一つであり、修験の滝ともいえる。滝の水量は少ないがその周辺の景観と相まって神気漂う幽寂の滝である。

博労座

（大山の項参照）

西伯郡大山町大山寺部落の入口、道路に面した東側の広場で、また自動車の駐車場として利用されている。なお、ここで、昭和二十六年（一九五一）十月二十八日、第六回国民体育大会登山の開会式が挙げられたので、道路に面した一隅に国体記念碑が建立されている。それ以来、山岳・スキーの全国大会などの開閉会式場に利用されている。

昭和十二年（一九三七）ごろまでは、有名な大山牛馬市の開催場所として、中国・四国はもとより中部・京阪神地方にまで知られた。大山牛馬市は、七百年前、**基好**上人が「大山地蔵菩薩は牛馬の守護仏」と唱え牛馬守護の守礼を施与されたことにはじまり、霊場勝区を避けて例年祭礼に合わせて開かれるようになったという。

大山山腹から岡山・広島県方面のいたるところに原野があり、牛馬の放牧が盛んに行われていた。

また、大山は地方信仰の的であり、大山詣りを兼ねて祭礼には市がたち、その際ほかの座とともに博労座も開かれ牛馬の売買が行われ、後代まで繁栄した。八代将軍・吉宗の享保十五年（一七三〇）、日野郡大河原村の吉川右平太という者がこれを組織的にして以来、ますます盛んになったといわれている。当時は隠岐・四国・中国の各地から毎年一万頭におよぶ牛馬が集まり、その街道筋も従来の伯楽飼主等によって、数カ所に茶屋までできるというにぎにぎしさであった。

豪円山

（大山の項参照）

大山の歴史や自然の探索、登山などの出発点である**博労座**から約五〇〇メートルという所にあり、大山**北壁**、**日本海**などの展望台、歴史散歩の地として親しまれているところである。

標高八九一メートル、大山火山群の一つである。この登り道の尾根筋には、見事なクロマツの純林がある。**中ノ原**、**上ノ原**低部のクロマツ林とともに、厳しい気象条件のため生息できない赤松にとってかわり、海岸低地の塩風に耐えて林をなしているクロマツが分布している貴重な資料である。

また、付近に叢生するタニウツギの群落は山開きのころ、ピンク色の花をほころばせる。昔は呼滝山といって盆の送り火をこの山頂で焚いて祈ったと伝えられている。今は、豪円山といい、**大山寺**中興の祖である豪円僧正の御影として、頂上には大きな豪円地蔵があり、伝説を秘めて西方に向っている。途中の登り道には豪円僧正を中興の第一世として、第二世より第八世までの墓碑があ

り、「世代墓」と称して拝まれている。冬季には絶好のスキーゲレンデとなる。

豪円山のクロマツ美林

この四百年近い年月の間、強い北西の季節風下の**豪円山**（典型的なトロイデ式火山）の標高八九二メートルの頂上に百二十本程のクロマツが生育し、世界最高分布として有名となった。

このクロマツは、下方にある並木マツが母樹となったものである。クロマツ林の下部にはブナ・ミズナラ・カスミザクラなどの落葉広葉樹が逆転分布している。

また、豪円山のクロマツが母樹となり、上ノ原スキー場に更なるクロマツの分布をなしている。

上ノ原・中ノ原

（大山の項参照）

大山の主稜の東端付近から発してえんえんと続く宝珠尾根末端のピークである宝珠山から北方に位置する**豪円山**方面に向けて放射状に流れ出し、大谷で分断されている二つの大斜面があるが、この一帯を上ノ原という。中ノ原とは、西端に位置する中の原スキー場一帯の通称である。

放射線上の頂点宝珠山山頂付近はブナ林帯である。そこから中ノ原方面に小路をたどって下ると、左側はブナ林、右側にミズナラの純林があり大山でも珍しい林相をしている。

美しい林間の道を行くと、**大神山神社奥宮**、下山神社につづく。

冬季は、一帯はスキー場エリアとしてよく知られている。大谷を隔てて西側の広大な草原が中の原、上の原スキー場、東側の林間の長大なコースが大山国際スキー場である。北向き斜面のため良質の雪に恵まれ、西日本における有数のゲレンデとなっている。

寂静山

（大山の項参照）

開基金蓮上人寂定の地と伝えられている。山頂にある金蓮塔は、形体は原形を模倣し改修建立されたものである。**大神山神社奥宮**参道の中途、**大山寺**裏あたりから左に折れる道を約一五〇メートルほど登ったところにあって頂上は狭いけれども、展望台としては**豪円山**と共に**大山**眺望の好位置で、ことに**北壁**と**元谷**を望むのに適している。参詣道からもっとも近く登るに楽な山であるため多くの人に親しまれているが、ここからさらに林間を登れば**中ノ原**へ通じている。

金門

（大山の項参照）

大山寺本堂に向かって左裏にあたる。**南光河原**の上流いわゆる**賽の河原**とのあいだにあって、両側に断崖がそびえたって数間の幅にせまっているが、今はそこに砂防用の堰堤があり清冽な山水が流れ落ちている。堰堤のできる以前はキリワケともいって、ここから不浄の徒が入ることを許さなかったとも伝えられている。大山寺草創の頃、今の奥宮、すなわち大智明権現の本殿を造営する際、金剛鳥が舞い降りて来て、

大山多宝仏　開鑰御金門
応化身垂迹　釈迦両足尊

という偈を説いたので、以来ここに「御金門」という額面をかかげて権現本殿の正門としたという。この地点から眺める**元谷**から**北壁**の景観は、**大山**の代表的絶景の一つである。

南光河原

（大山の項参照）

大山**北壁**の沢が集中して、**元谷**となり、これが**金門**を越えて流れ出ている河原をいう。ここから「風穴」を過ぎ、行基伝説の利生水を経て、もと**阿弥陀堂**のあったといわれる常行院谷を通れば、夏路登山道、阿弥陀堂に至る。千石岩の下手を通れば大山七池で一番小さな烏ヶ池を見て**大山寺**本堂へ続く。昭和三十八年（一九六三）の大洪水によって流され新しく架けられた大山寺橋（海抜七六二メートル）から山頂の見晴らしは勿論、朝鮮半島との伝説で名高い**孝霊山**（海抜七五一メートル）ごしに**日本海**が眺められる。

賽の河原

（大山の項参照）

無明橋を渡り、木漏れ陽を浴びながら、苔むす石の参道を**大神山神社奥宮**へ行く途中、右へそれる道を歩くと、**北壁**を望むことのできる**金門**の上の河原に出る。この辺りを「賽の河原」ともいう。俗説によると、地蔵和讃から名づけたものといわれ、人知れず小石をつみ、冥府の小児を

偲んだ。地蔵尊が両岸に安置されている。この河原の上部を**元谷**といい北壁につながり、また金門から下を**南光河原**という。

下流にむかって左側（左岸）つまり対岸の尾根には、たくさんの屋敷跡があり、これらは天台密教修行の場と考えられ、天狗屋敷の名で呼ばれている。杉の大木があり天狗杉と呼ばれ、そのなかに上田秋声の書に書かれた大納言杉があると伝えられる。また、金門に望む岩を僧兵荒行の岩といって、一騎当千勇猛をもって知られる僧兵荒行の一つとしてこの岩から飛んだと伝えられる。

右岸の断崖絶壁の上にも、昔、山伏（天狗）がのぞき修行したと伝えられる天狗岩がある。早朝、または人のさざめきの絶えたとき、オオルリ・ケラ・セキレイなどのさえずりがきこえる。

元谷（大山の項参照）

本谷とも書く。**大神山神社奥宮**の右奥から道を南の方に進むと、約三〇〇メートルで**賽の河原**の上部に出る。さらに護岸に沿って進むと河原に出て「二股」にいたり、ブナ林の大地が中央を上に走っている。この一帯を元谷とよんで、右は**北壁**の大景観に接し、左には宝珠尾根の樹海を仰ぐ幽玄閑静な場所である。

北壁（大山の項参照）

北壁を見ずに**大山**の景観を口にすることはできない。西方、米子や島根県の方から眺める大山が伯耆富士、出雲富士といわれるくらい富士に似た優美な山容を見せているのに対し、北壁の山容はわずか二、〇〇〇メートルに足らない山とは思えないくらい荘厳である。強風や積雪、低温をもたらす季節風の直撃を表わしている。これを望むのには**寂静山**、**豪円山**、**金門**、**元谷**等からが最適である。

向かって右にそびえるのは別山、その右の切れ込みが別山沢、左に切れ込んでいるのが弥山沢で頂上弥山につづく。中央に二本並んで右が滝沢、左が中ノ沢で縦走路の険、らくだの背にいたる。その左横大ガレの右上端が小屏風、その左に黒くそびえているのが大屏風、その左側に絶えず水が流れている岩壁が天狗沢、その左が元谷沢、そして遭難の多い泥壁、上宝珠ごえから砂滑りをして降る上宝珠沢とつづく。これらの取り付きには盛夏もなお雪渓が残っている。

融雪期や早霜期には、壁の各所で岩石が崩壊し百雷とどろく音がする。

三鈷峰（大山の項参照）

大山の主峰東端の天狗ヶ峰から、北東にはりだした尾根筋の末端をなすピークで、大山寺部落から眺めると、**北壁**の左方に独立峰のように三角錐の形をしてそびえている。しかもその山肌は灰白色の岩肌を露呈して、大山山群中でもっともエキゾチックな感じをもつ。標高一、五〇〇メートル、新期火山の一つである。頂上からは北壁の豪壮なアルプス型山容を一望のうちにおさめることができるが、この附近から天狗ヶ峰にいたる鞍部一帯には、ナンゴククガイソウ・オオバギボウシ・シモツケソウなどをはじめ高山性植物の一大群落がある。盛夏の七月ごろには、この辺り一帯から野田ヶ山側にかけて千紫万紅のお花畑が現れる。この周辺はユートピアと名付けられ、ここにある県営避難小屋はユートピア小屋と呼んでいる。西側の岩骨の崩壊した様相に反して、東西は平凡な草のはえた山肌である。

地獄谷（大山の項参照）

主稜の東端天狗ヶ峰から尾根は二つにわかれ、一つは前方に向かって槍ヶ峰から**烏ケ山**に走り、一つはユートピアの鞍部に落ちて**三鈷峰**に連なっているが、その槍尾根の真下に沿っていわゆる東壁のしたを流れる谷がこの地獄谷である。加勢蛇川の源流となって下流に**大山滝**を控えている。普通ここからはいるためには、大山寺部落から横手道を廻って文殊堂から林間を登り鳥越峠を向こう側

にくだれば「駒鳥」の地点に出る。

烏ケ山（大山の項参照）

大山連峰の一つで、標高一、三八六メートル。主峰から東南に派出した唯一の山峰である。西方から望むと岩稜がそそり立って奇型を呈し、ほかの山群とは異なった印象をうける。

トロイデ型火山群の一つで第一期噴火後にできたカルデラ（陥没凹地）を埋めて、新しく噴出した寄生円頂丘（トロイデ）である。黒雲母角閃石安山岩や両輝石安山岩などの溶岩からなる。主峰の弥山や、**三鈷峰**などはその後に噴出した円頂丘である。頂上は狭隘であるが、ここから眺める主稜の南壁はすばらしいもので、**鏡ケ成**・上・中・下の三**蒜山**、日野郡方面の眺望も大山随一といえる。

赤松の池

西伯郡大山町赤松
ＪＲ米子駅より車で二十五分

火山によって出来た**大山**には、自然の池が少なく、大山寺を中心にある有名な池は昔から「大山七池」といって大切にされていた。山頂にある地蔵ヶ池を始めとして硯ヶ池・**大野池**・赤松の池・かんまん池・釜が池である。この中で一番大きく、古期大山と新期大山との境に水を湛えているのが赤松の池である。

赤松の池は、大山参拝の要所であり、農用の水源としていかなる旱魃にもいまだかつて干上がったことのない池で、雨乞いの龍神がおわすとして、今もなお厚い信仰を集めている。その赤松池大明神の祭礼は、旧暦六月一八日に行われている。

『大山寺縁起』には、伯耆国守護職・葦名次郎左衛門という、神仏をはばからず、殺生を続ける荒武者が、赤松の池の鳥や魚はもとより、大蛇まで切り殺したところ、大山の三社権現の玉興が空中に現れ、葦名は目がくらんで落馬して気を失った。家で病臥していると、西方から龍に乗ってやって来た僧が錫杖を振りかかげて家に入ったとたん、気を失い狂った。そこで大山と**三徳山**の修験者を招いて加持祈祷したところ、「罪を犯した者を戒めねばならぬ者が、罪もなく大権現を崇めている者を殺すとはけしからぬことだ。」と験者が言ったので、葦名一門は大山に帰依し、殺生禁断の札を立て、精進潔斉し、善行を努めてようやく恢復したという。今でも、魚を取れば腹痛し、池を干そうとする者には、火事や一身に祟りがあると伝えられる。また、大野池とは底が通じていると伝えられている。

龍神お初の伝説もあり（伝説参照）、池の向こう岸、半島の祠に御神体として龍神お初の姿が木彫りにして安置してある。『伯耆民談記』には、同じような話があり、赤松の娘が大山の会式に参加したところ、**大山寺**の稚児僧を見初め、ついに悶々の情に耐えかねて赤松の池に身を投げた。蛇神となってかの稚児僧の所へ行き、恋しさのあまり彼も池の中に引き入れて沈んでしまったという話もある。

伝説

昔、松江（雲州）に松平頼母という千五百石取りの武士があった。不足のない生活であったが、子供がないので大山さんに祈願したところ女子が生まれ、やがて評判の美人に成長した。

やがて十六の春を迎えた頃、藩主の目にとまった。聞き入れれば贈石、ことわれば追放と言われ、まず大山に参った。

途中、赤松の池の立寄ったところ、娘は蛇神になり乳母に告げた。

「両親の念願のあまり、人の世に姿を現したが、今、女龍身として務めねばならなくなりました。毎年今月今日きっと家に帰るから、たらいにすすぎ水を汲んで出してください。私の姿が見えなくても、その水が濁るのはわたしの来た証拠です。また、私に願いをする人は、供養に山椒の実を池に散じて祈れば、長く幸福を与えます」といって池に入った。

この日を祭日としている。

桝水高原

ＪＲ伯耆溝口駅より車で二〇分

伯備線溝口駅に下車して正面登山道を登ると、途中金屋谷の部落をへて、道は正面に秀麗な富士山形の**大山**の偉容を望みながら広大な原野に出てくる。この雄大な裾野原一帯が桝水高原である。面積三四五ヘクタール。ここは大山の展望地としても最も優れた場所の一つで、前面にシ

ンメトリカルな山稜の全容を見せ、頂上から一気に流れ出た斜面は、雄大である。

西方を望むと、島根半島、**弓ヶ浜半島**、**中海**、宍道湖を一望のうちにおさめることができる。夏はキャンプ、冬はスキーに適する。

大山高原ライン

大山高原ラインの愛称は公募の結果、昭和三十八年（一九六三）一月十七日に決定された。延長約六三キロメートル、六つの町にまたがり、**大山隠岐国立公園**を取り巻く鉢巻道路となっている。

東伯郡赤碕町から西伯郡中山町羽田井を経て香取牧場を通り、川床橋を渡って大山寺部落に行く道路が完成した。香取牧場近くの峠道から、**大山**山麓の大高原をはじめ島根半島、**日本海**を眼下に望む景観は、一大パノラマである。さらに進むと深い川床渓流に出る。大山寺部落より**桝水高原**を通り、横手道を大平原に出て江府町御机に入る。この道では裏大山の男性的な壮観が満喫できる。

蒜山・大山スカイライン

蒜山大山スカイラインは江府町御机から岡山県川上村上福田へ通じている。歴史を秘めた**大山寺**、**桝水高原**、二ノ沢、**鍵掛峠**、御机に至る道は雄大な山岳美、平原美、渓谷美、自然林美など、大きな感興をそそる地帯である。御机から**鏡ケ成**に至る道は大原野を紆余曲折して鬼女台へと登る。鬼面台に立って岡山県側に目をやると左手に美しい蒜山三座が悠然とならんでいる。

西側には裏大山の男性的な景観が広がる。その東に奇怪な山容の**烏ケ山**（一、三八七メートル）、さらに東には一転して穏やかな擬宝珠山が続く。

これらのすそに広がる鏡ヶ成には、心の安らぎを覚える。

鬼面台から道を東に走ると、蒜山国民休暇村に通じ、さらに川上村を縦走し、**犬挟峠**を経て**関金温泉**に行くこともできる。

鏡ケ成

JR江尾駅よりバス四十五分　休暇村大山鏡ケ成下車すぐ

奇峰**烏ケ山**の東南、麓に広がる標高九〇〇メートルから九五〇メートルに位置する、茫漠としたススキの大原野であった。成と呼ばれるこの原野は烏が山の火山活動にともない噴出した火砕流が流れ下り、もとの裾野にできていた谷々を埋めて平坦な高原状地形を形成したものである。西部に城山の奇観を連ね正面北部に烏ヶ山のピークを仰ぎ、東部に擬珠宝山のなだらかな山容を廃し、さらに**蒜山**連峰を望む景観は高原として絶景である。

昭和三十一年（一九五六）六月、この鏡ヶ成は約四八ヘクタールが厚生省（現厚生労働省）から大山国立公園集団施設地区として指定された。昭和三十七年（一九六二）十二月十日付には集団施設地区を含む一二九・七ヘクタールがその名称も鏡ヶ成国民休暇村と変更された。

なお、国民休暇村というのは厚生省と国民休暇村協会がタイアップして広く国民の保健休養の場を提供するため、昭和三十六年度から全国のおもな景勝地に各種施設の建設に着手したものである。

大野の池

西伯郡大山町

大山の麓、アカマツの林の中に静寂な雰囲気に包まれた湖面が広がる。四季折々、ボートや釣り、散策に人々が訪れる。大山を望む湖畔には瀟洒なホテルも建っている。

米子市から大山寺につづく大山道路から一本東側、あけまの森や槙原駐車場の向こうに、大山寺から坊領を経て大山町役場さらに国道九号へ直接に通じる道路がある。クロマツの老大木が並ぶ参道の一つである。大野池はあけまの森の近くに位置し、この脇道をたどると湖畔に達す

る。

標高四三五メートルの位置にあり、約二百年前に溜池として作られたと伝えられる。堤高五〇メートル、堤長八〇メートル、貯水量十八万立方メートルで、地元の種原から鈑戸一帯の農地三〇ヘクタールを潤している。また、鈑戸川の水源地でもあり、住民やホテルを含めて生活廃水の流入を防ぎ水質保全に努めている。

蒜山

鳥取県と岡山県の県境をなす稜線を形成する山で、東から西へ下蒜山（一、一〇〇メートル）、中蒜山（一、一二二メートル）、上蒜山（一、一九九メートル）の三つのピークからなり、蒜山三座と呼ばれる。

いずれも、黒雲母、角閃石、斜方輝石をもつデイサイトの溶岩からなる第四紀更新世の火山である。このうち下蒜山が最も古く約八十～九十万年前、中蒜山と上蒜山はともに約五十万年前に形成されたといわれている。約百万年前から活動を始めた東隣の**大山**とほぼ同じ時代になるが、蒜山の方が活動を早く停止した。上蒜山の西にある二股山（一、〇八〇メートル）と擬宝珠山（一一〇メートル）も独立の火山と考えられ、蒜山三座とあわせて蒜山火山群と呼ばれている。

鳥取県側の北斜面は急峻で、小鴨川支流の清水川、福原川、小泉川、泉谷川などが深く浸食し、谷頭は稜線近くまでせまっている。これに対して、岡山県側の南山麓は比較的穏やかで、裾野は標高五〇〇メートルほどの蒜山高原に緩やかに移行している。また、北斜面にはブナ林が発達するが、稜線から岡山県側はササを主とする草原である。上蒜山北東の鞍部、標高六六〇メートルの分水界の岡山県側に蛇ヶ乢湿原がある。約〇・七ヘクタールほどの小面積であるが、ミズゴケ類やイワショウブなどが生育し、浮島や池塘が散在して良好な湿地環境が残されている。蒜山三座の稜線は、**大山隠岐国立公園**に含まれる。

米子市

〔米子市街地〕

史跡 清洞寺跡

米子市
JR米子駅より徒歩二〇分

湊山公園の北岸に、老松巨岩の群がっている所があり、公園内の景勝地となっている。ここは慶長十五年（一六一〇）、伯耆・会見・汗入郡六万石に封ぜられて米子にきた加藤貞泰が、朝鮮の役で戦死した父光泰の菩提を弔うため曹渓院を建て、その後、境内に五輪塔を建てたところである。

また、池田由之（池田光政時代の米子城の城代）の子、由成が父のために建てた海禅寺があった。しかし、これらの寺は、元禄時代の激浪により壊され、それぞれ移転あるいは廃寺となった。

後に、大亀山清洞寺が建ち、この海岸を「清洞寺灘」ともいうようになった。しかし、明治の廃仏毀釈で建物は壊された。

昭和五十二年（一九七七）、米子市の史跡に指定されている。

現在、ここには光泰の五輪塔とともに池田由之夫妻の五輪が並ぶのみである。中央が池田由之の塔で、向って左が由之の妻の塔である。また公園の入口には、米子城築城のとき、海岸線に植えたと伝えられる、クロマツの巨木群があり、これは当時の防潮林の名残である。

湊山公園

米子市西町、内町、久米町
JR米子駅より徒歩二〇分

中海に面して設置された公園。

明治四十年（一九〇七）、当時皇太子だった大正天皇の訪問を記念して造られ錦公園と呼ばれた。園内には、山陰随一の名城と言われた米子城跡をはじめ日本庭園、**清洞寺跡**、汐止め松、児童文化センターなどがあり、市民の憩いの場となっている。

米子市街地や**大山**、島根半島が一望できる。桜の名所としても知られ、春は多くの人でにぎわう。

米子港

（米子市灘町）

市街地から米子城跡のある湊山（標高九〇メートル）を巻くように通ると、米子港に出会う。

また、旧加茂川筋を伝統建築の町並みに誘われて下ると、**中海**に注ぐ

河口に港がある。**日本海**から来るには、美保関灯台を右にみて、境水道を抜け、中海に入り中浦水門を通ると米子港が見える。波静かな中海を望み、水鳥の姿も多く、夕日が美しい。

弓ヶ浜半島の付け根にあって、昔は風の影響が少ない良港として、また米子城下に近接した外港として重視されてきた。江戸時代には、港で浮船に積み替えて、問屋が立ち並ぶ加茂川をさかのぼり、米子城下に物資を運んだ。川口番所という藩の役所が設置され、入港する船舶を監視した。今の灘町の位置には「魚鳥座」と呼ぶ魚市場があり、港では日野川奥の鉄や弓ヶ浜の産物である綿製品の取引で**境港**と競った。しかし、明治後期になって鉄道が境港に通じ、米子港の役割は小さくなる。

防波堤の設置は明治期から始まり岸壁の整備が進んだ。昭和二十七年（一九五二）に地方港に指定され、昭和四十八年（一九七三）から昭和五十六年にかけて、北側の旗ケ崎地区で四〇ヘクタールが埋め立てられ工場団地が形成された。

漁業では、中海あるいは日本海沿岸での刺し網漁とイカ釣り漁や他にイワガキなどの採貝が中心に行われている。

米子港は、**米子水鳥公園**に続くウォーターフロントとして貴重な存在である。旧加茂川筋と結び、自然環境の復元や町並み整備が進めば、県西部のすばらしい観光ポイントになると期待される。

米子市立山陰歴史館

米子市中町
ＪＲ米子駅よりバス五分、市役所前下車

米子町は町役場を昭和元年に焼失したが、昭和二年（一九二七）に市制を施行し、これを機に人口十万人を想定する市庁舎を建設することになった。新庁舎の設計は、第一人者の佐藤功一に任された。工事は大阪の鴻池組が請け負い、先本喜一郎、栗林利吉など地元の業者も参画した。当時としては山陰随一の鉄筋コンクリート造三階建の新庁舎が誕生した。

この建物の特徴は、正面ファサードがシンメトリー（左右対称）の古典主義的な建築スタイルである。正面玄関を中央に据え、その上部に塔屋を立ち上げる中心性を強調した容姿は、佐藤が手がけた群馬県庁舎など一連の庁舎建築に一貫して用いられたデザイン手法である。

外観は一階を人造石でポディウム（基壇）風にして、上部にはレンガ風の硬質タイルを張った壁面に均整のとれたピラスター（付け柱）を表わし、どっしりした構えになっている。佐藤は庁舎を設計するにあたって「新古典主義」を基調にデザインしながら「現代の建築を過去と未来の一線上に置いていながら、できるだけ流転しない建築様式」を求め続けたという。次世紀をにらんでつくられた建物であった。

八十年近くを経た現在、この建物は山陰歴史館として使用され、その機能も変わってきたが、赤褐色のタイルや古典的な半円アーチを備えた建物自体が米子市発展の歴史をみごとに表現し、今や、米子市のシンボル的存在になっている。夜になるとライトアップされ、建物のシルエットが夜空に浮き上がり、道行く人にロマンチックな風情を与えている。

米子市は昭和五十二年（一九七七）に市制五十周年を記念してこの建物を文化財に指定した。また、平成十年（一九九八）には「全国公共建築一〇〇選」にも選定されている。館内には、米子城の歴史や、明治から昭和にかけての生活用品や民俗資料、原始・古代時代の土器・石器など、約千点が展示されている。

●開館時間　午前九時三〇分～午後六時（入館は午後五時三〇分まで）
●休館日　火曜日、祝日の翌日、年末年始
●問合せ先　☎０８５９・２２・７１６１

米子れいるろおど館

米子市法勝寺町
ＪＲ米子駅から十二分

山陰線（現山陰本線）の開通など、鉄道の歴史を紹介した資料が展示されているほか、山陰最大規模の総延長二〇〇メートルの鉄道ジオラマがある。

●開館時間　午前一〇時～午後六時
●休館日　水・木曜日　※祝日は営業

●問合せ先　☎0859・37・6373

米子市美術館

米子市中町
JR米子駅よりバス五分、市役所前下車

美術館建設を求める市民の声に応え、昭和五十八年（一九八三）六月に山陰地方初の公立美術館として開館した。

一、五〇〇点を越える収蔵品には、**前田寛治**、**濱田台兒**、**辻晋堂**、**橋本興家**、**植田正治**、**塩谷定好**など郷土ゆかりの芸術家の作品をはじめ内外の版画や、日本を代表する著名な写真家などの作品が含まれる。

年一、二回開催される特別展のほか収蔵品を紹介する常設展のほか、美術講演会やワークショップなどの普及事業が行われている。

●開館時間　午前一〇時～午後六時
●休館日　水曜日、祝日の翌日、年末年始
●問合せ先　☎0859・34・2424

素鳳館

米子市加茂町一丁目
JR米子駅よりバス五分、市役所前下車すぐ

この建物は米子税務署として建てられた。明治二十九年（一八九六）設置の米子税務署は西町の義方校向い側の借家を充てていたが、同四十三年（一九一〇）三月、加茂町一丁目に新築移転した。前年新築の米子郵便局とともに、米子最初の木造洋館建築として人々の話題となった。米子市内に現存する木造洋風建築中では最も古い。

古写真を見ると、当初は正面（南側）両翼をわずかに前面に突出させるコ字型の平面を持ち、下見板張りの比較的小規模な木造洋風建築であったが、地方の行政庁舎としての風格を十分に備えていた。特に正面中央部には、ジャイアントオーダーの付柱があり、ペジメント式とまぐさ式の窓枠縁が上下を飾るなど凝った造りであった。現在残るのはコ字型平面の正面東翼廊部分のみで、他はすべて昭和三十八年（一九六三）の改造である。

現在の外観を特徴づける、西面の切妻破風部分も改造であって、このとき南側にも付属屋を増築した。構造は木造二階建で壁は下見板張り。板の張り方は水平方向と斜め方向の二種類を併用する。新・旧部分ともよく似たデザインの上げ下げ窓を上下層につけ、一体感がある。南面の当初翼廊部分は、櫛形ペジメントを上部に持つ三尊式窓、メダル型装飾、軒上の五角形の額などが外観を飾り、旧態を残す。

大きな改造は受けてはいるが、増築部分も含めて町並みに溶け込み、市民に愛される存在となっている。昭和三十五年（一九六〇）頃、税務署移転に伴い、所有者が変更となり、昭和三十八年には前面の国道九号拡幅工事のため大改造された。その後、オーナーの私設美術館「素鳳館」となり、江戸時代の雛人形が数多く収蔵されている。

なお、平成十二年（二〇〇〇）十月に発生した鳥取県西部地震で被害を受け、現在閉じたままになっている。

後藤家住宅

米子市内町
JR米子駅よりバス五分、市役所前下車、徒歩一〇分

後藤家は、戦国時代末期に石州から移住し、この地に屋敷を構えたと伝えられている古い家柄である。江戸時代には鳥取藩の米や鉄などの回漕について特権を与えられ、廻船問屋を営む米子屈指の商人であった。屋敷は**米子港**に注ぐ加茂川河口に近い京橋のたもと、立町から米子城に通じる内町の角地にある。現存する主屋はもちろん、背後の一番蔵・二番蔵も寛政期以前の遺構であり、その普請は十八世紀中期以前にさかのぼると思われる。しかし、先年の解体修理では、主屋は奥座敷や玄関廻りが増設された十八世紀後半の状態に復元された。

主屋は間口十二間、奥行九間と大きく、右側の通り土間とミセ部分からなる「表構え」、裏側に続く住居部分の「勝手構え」、左表側の玄関・式台と奥の庭に面する客座敷などからなる「座敷構え」の三つの部分に分けられる。土間境の板の間とその上手にならぶ部屋とは二〇センチばかりの段差があり、「座敷構え」「表構え」と「勝手構え」は空間的にも異質である。京都・大坂（阪）の「表屋造」にも似ている。

主屋の外観は、道路に面した表側には格子が並び、つし二階に開かれた低いむしこ窓があり、表側の屋根はこの地方では珍しい本瓦葺となっている。庇は表側だけでなく、加茂川に面する妻壁にも付いているが、妻側の庇は加茂川を利用する物資の搬入のために設けられたものである。京橋のたもとからのぞむ後藤家住宅のたたずまいは、加茂川沿いの歴史的景観の中でも異彩をはなつ存在である。

昭和四十九年（一九七四）二月、国の重要文化財に指定された。（平成五年八月十七日追加指定、平成八年七月九日追加指定）

加茂川土蔵群

米子市灘町・尾高町
ＪＲ米子駅よりバス五分、市役所前下車

「山陰の大阪」ともいわれる商都米子が、近世城下町として整備されたのは慶長六年（一六〇一）に入封した中村一忠の代といわれる。内海を背にした湊山に大小二基の天守閣を擁した米子城が築かれ、外濠の内側に武家屋敷、外側に町人町が配置された。島根県との県境にある鷲頭山を源流とする加茂川は米子市の南部の田園地帯を流れて市街地に入り、この地で旧米子城外濠と合流し、**中海**に注ぐ。江戸時代は水量も豊かで、米子港を拠点とする水運も盛んで、港に近い灘町、立町や内町には、鹿島家、後藤家をはじめとする米問屋、廻船問屋などの豪商の屋敷が構えられ、繁栄した。

加茂川は、昭和戦前までは積み荷を運ぶはしけが上流の糀町あたりまで往来する姿も見られた。川べりは町屋の裏にあたり、石垣は家ごとにその積み方も異なり、所によっては石に彫り物も見られる。石垣の間に設けられた石段は往時の積み荷場の名残で、この石段を利用して家庭では洗い物もされていた。加茂川は日常生活にあっても多いに活用されていたのである。

今では、水を生活用水に利用されることはなくなったが、石垣の上に土蔵が立ち並び、水辺と石垣と白い土蔵が交錯する風景は独特である。

また、夏には加茂川祭が、秋には岩倉町を中心にしょうじき村祭が行われる。灘町、立町、岩倉町の外濠沿いには、商家の古い土蔵や離れ座敷が点在し、情緒ある風景を今も伝えており、米子市における歴史的な景観形成地域として位置付けられる。

米子盆踊り

米子市富士見町

毎年八月十四日、に**米子市公会堂**（同市角盤町）前広場で踊られる。

起源として、「母思いの木蓮尊者は、地獄に落ちた母を極楽に住みかえさせる願いが叶い、喜んで連日連夜踊り続けた」という独特の盂蘭盆経の異型話を伝える。

踊りは輪踊りで、「こだいぢ踊」「さいご踊り」「たいしょう踊り」の種類がある。豪快な大太鼓を打つのが特徴である。県の無形民俗文化財に指定されている。

米子市公会堂

米子市角盤町
ＪＲ米子駅よりバス八分、公会堂前下車すぐ

昭和三十三年（一九五八）、市制三十周年の記念として建設されたものである。

敷地は、将来の米子の中心的存在となるべく国道九号と国道一八一号が分岐する一角に決められた。当時は、この一角が米子市の中心と位置付けられており、都市改造によって街路を整備し、周辺をオフィス街にし、公会堂を市民のオアシスにする構想だった。

その建設資金は「一世帯が毎日一円を貯えて公会堂を」との運動から始まった。この運動は全市的な盛り上がりをみせ、総建設費一億七千五百万円のうち三千万円余りは募金で賄われた。

設計は当時の日本建築界の重鎮村野藤吾である。村野は昭和三十二年（一九五七）にアメリカ大陸を旅するが、それは米子公会堂の最終イメージを固める旅でもあったようで、ブラジルの教会にピアノのイメージを重ね合わせて今の公会堂の形ができ上がったと言われている。

前庭には芝生を敷きつめて市民広場とし、一角には噴水の池を穿ち、平和の泉と命名された。池の中には郷土出身の彫刻家・**辻晋堂**が制作したブロンズ像が置かれた。

市民の憩の場であり、平成十年（一九九八）には「日本の公共建築一〇〇選」に選定され、シンボル的な存在は不動のものとなった。

近年、米子駅周辺には米子市文化ホール、ビッグシップが造られ、文化施設が充足されてきたが米子市公会堂が記念碑的な建造物であることに変わりはない。今後もこの記念碑

的施設に対して米子市民が変わらぬ愛着を注ぐであろう。

より一層の充実した活用が期待される。

加茂神社天満宮

米子市加茂町
JR米子駅より徒歩十五分

賀茂神社天満宮は、別雷命や品陀和気命、菅原道真公などを祭神とし、旧米子町の産土神として崇められていた。かつては、米子を「加茂の里」といい、この神社のある町の名を加茂（町）といった。神社の勧請は慶長三年（一五九八）と伝えられる。

また、境内の井戸水は、「宮水」といわれ名水として知られていた。

昔、子を授りたい老人が宮水を頂き神社に祈ったところ、八十八歳にして子を得たので、加茂の里を米子というようになったという伝説もある。

神社西隣の八幡宮は、中村氏が米子城御門下の八幡丸に、城の鎮守として勧請したと伝えられている。軍陣八幡宮とも呼ばれた。延宝八年（一六八〇）賀茂神社へ移され、明治元年（一八六八）に賀茂神社に合祀された。

昭和三十七年（一九六二）、かつて天神町にあった天満宮（合祀され稲荷神社）も賀茂神社に合祀し、現社名となった。

『米府神社由来記』によると、近世の天満宮の祭礼は六月二十五日に行われた。前夜には町中の寺子屋の献灯や幟が境内を埋め、当日は町中を神輿が巡幸した後、深浦から錦海に出て船渡御が夜半まで行われた。町民は御輿を守ってそれぞれに舟を海に浮かべ歌舞や酒宴を楽しみ、その間を商い舟が行き来したという。このにぎやかな祭礼の夜は、「天満の涼み」といわれた。

勝田神社

米子市勝田町
JR米子駅よりバス一〇分、勝田神社前下車すぐ

米子地方の氏神として、維新後の改正には郷社になっていた。伝説に応仁の乱後、浜の目（弓ケ浜地方）に賊徒の一団があって近隣を荒したので、住民たちが津和野（島根県）から勝田上総介一党を迎えてこれを討伐したが、この戦いで郎党浜田五郎丸のほかは上総介以下おもだった家士を失ったので、五郎丸はこの地に主従を葬り、勝田明神として祀った。のちにこれが勝田神社となって、慶長年間（一五九六～一六一五）には米子に移され、今日に至ったという。しかし、神社の由緒書はこれを否定し、祭神は正哉吾勝速日天忍穂耳命で、昔、外江に鎮座していたがのち新屋村に移され、その後、元勝田山から現在の地に移されたという。加茂神社天満宮などとともに米子市における最も古い神社の一つであるが、現社殿は最近の造営になるものである。祭日は四月・十月のいずれも十五日で、古くからの氏子である弓ケ浜方面をはじめ、遠近からの参詣者でにぎわう。

生田春月

生田春月は、大正後期から昭和初期にかけて活躍した詩人である。

明治二十五年（一八九二）、米子の道笑町に生まれた。本名は清平。家業の酒造業が破産したため高等小学校を二年で中退し、家計を助ける苦しい生活の中で、文学に心を寄せていった。

明治四十一年（一九〇八）、十七歳で上京し、日野町出身の評論家・**生田長江**宅に寄宿した。ここで佐藤春夫と知り合う。

二十六歳で出版した第一詩集『霊魂の秋』、翌年の第二詩集『感傷の春』で詩人としての地位を固めた。その後、数十冊の詩集や訳詩集、感想集を出版している。唯一の長篇小説『相寄る魂』は米子地方を舞台とした自伝的色彩の濃い小説である。

昭和五年（一九三〇）、瀬戸内海を航行中の客船から身を投げ自死した。三十九歳であった。

昭和四十年（一九六五）、米子市の皆生海浜公園に文学碑が建てられた。碑文には『相寄る魂』冒頭の詩が、春月直筆の色紙から写し取られている。

「生きとし生ける人の胸に
　限りも知らぬ寂しさが
　雲のごとくに湧くときは
　　離れ離れし　人も相寄る」

また母校である米子市東町の明道小学校前に昭和四十年に建立された碑にも、『相寄る魂』の一節が彫られている。

父の生地である西伯郡淀江町には、昭和四十九年（一九七四）、中央公民館前に詩碑が建立された。

「恋しなつかしわがふるさとは
　海のほとりの田舎町
　その町なみの柳でさへも
　昔ながらのなつかしさ」

米子市水道記念館

米子市車尾
JR米子駅よりバス一〇分　国立病院前下車、徒歩一〇分

米子に上水道が通ったのは鳥取市に遅れること十一年、市制施行を翌年に控える大正十五年（一九二六）であった。現在、水道記念館になっているポンプ場は大正十五年に建てられたもので、消火用水にもできるように、五十五馬力のタービンポンプが二基据え付けられた。建物は約百五十平方メートルの鉄筋コンクリート造平屋建で、五基のポンプを並べるだけの広さがあった。屋根は赤瓦、外観は白壁、一部に半円アーチの窓を設け、ロマネスク風のモダンな建物で、新生米子（市）への期待がにじみ出ている。敷地の一角には水道事業の大成を記念する高さ四メートル程の碑が建つ。

記念碑には時の内閣総理大臣・若槻礼次郎による「源泉混々」が刻まれ、ポンプ室入口上部には西尾町長（初代米子市長）による「天助人」の扁額がはめられている。二つの扁額を合わせて読むと「人為を自然に加えたことによって、水源のある水はこんこんと湧き出して、昼も夜も止むことがない」となる。

現在は水道記念館として市民に公開されている。

平成十三年（二〇〇一）八月、国の登録文化財として登録された。

名勝 深田氏庭園

米子市車尾
米子駅よりバス十四分、国立病院前下車、徒歩十五分

深田氏は、中世に米子に来て沼沢地を開拓したと伝えられる。その後、居を構え、深田姓を称し現在に至っている。

庭園は、南西隅に築山を設け、ここに後醍醐天皇を祀る小社がある。その前に三尊石組の巨石の立石が庭園の焦点で、枯滝を表現し池泉中に右手より鶴島・亀島を配し、さらに北東隅に集団石組がある。植栽も二十数種類に達する。石組の主要材料は島根半島の美保関と大根島から運ばれたと伝えられている。

作庭時期は、①庭園の地割りが鎌倉あるいは吉野時代の特徴を示している。②庭園の立石手法が南禅寺と同じく三尊組である。③元弘二年四月頃、隠岐に配流となる経路で後醍醐天皇がこの深田家家屋を訪れている。などの理由から、山陰地方に現存する庭園のなかで最古のものと考えられ、昭和二十八年（一九五三）には県の名勝に指定されていた。そののち平成十年（一九九八）の調査によって「現在見る庭園は江戸時代に構築されたものと考えるのが自然であり、治水に貢献した十八代以降のことであると考察される」と新たな見解が発表されており、現在、作庭年代については再考が求められている。

ともあれ、中世文化に大きな位置をしめる蓬莱思想からくる鶴亀が、この庭には極めて写実的に表現されている。庭園からは、深田家の繁栄のみならず、歴史の一端をうかがい知ることができる。

平成十二年（二〇〇〇）十二月、国の名勝に指定された。

慈眼庵

米子市車尾観音寺
JR米子駅よりバス二〇分　終点下車すぐ

観音院にある小庵である。ほぼ室町時代の作と推定される木彫漆箔（漆のうえに金がぬってあるもの）の十一面観音坐像は、昭和二十八年（一九五三）八月、県の保護文化財に指定された。ただし、台座と頭上の化仏はのちに補ったものと考えられる。伝来の事情はよくわかっていない。

了春寺

米子市博労町
JR博労町駅より徒歩一分

江戸時代には荒尾氏の菩提寺として栄えていた。黄檗宗に属し、祥光院荒尾成直と了春院荒尾成重の法号をとって祥光山了春寺といった。

もとの境内である勝田山麓には、荒尾家の墓地があり、荒尾家歴代の城主の墓が並ぶ。鳥取藩の主席家老であった荒尾家は、ほとんど鳥取の邸に居て藩政を司っていたが、米子城代として城を預り、死後は米子に帰葬された。

村川与一右衛門

村川家は鳥取藩の家老・荒尾の重臣で、代々与一右衛門を通称とした。九代目村川与一右衛門は、嘉永元年（一八四八）正月に家職を継ぎ、荒尾を助け藍座、蝋座、木綿座等を盛んにし、新たにニンジンの耕作を始め、大いに理材に努めた。勤王の志が厚く、諸国の志士との交友も広く、大和五条の天誅組が破れたときは、その一人三枝真洞がここに逃れ、身を寄せたこともある。与一右衛門も米子で討幕の挙兵を企て、当時、日

野郡黒坂に幽閉されていた因幡二十士と図り、長州と計画を進め、土佐の中岡慎太郎も加わって密議した。

挙兵の地として**大山**を選び、慶応三年（一八六七）には着々と計画を進行していた。しかし、露見し一族は、主家並びに鳥取藩に禍がおよぶことを恐れ、自殺させようとしたが、与一右衛門は聞き入れなかった。

慶応三年（一八六七）十月十一日に親族により暗殺された。四十四歳であった。

墓は、**了春寺**裏の荒尾家の墓地に続き、道に面したところにある。

大谷甚吉

江戸前期に米子で活躍した海運業者の一人として知られる大谷（大屋）甚吉の墓が、米子市愛宕町の**総泉寺**境内にある。大谷家墓地の奥に、大型の五輪塔が祀られている。

米子城下の灘町に住み、海運業を営んでいた大谷甚吉は、元和三年（一六一七）に、越後（新潟県）からの帰途、強風に吹き流され無人島に漂着した。上陸してみると、そこは海陸の産物が豊かであった。帰国して、米子の村川市兵衛と相談し、この島への渡海を幕府に願い出て、翌四年に許可された。（その島は朝鮮国のウツリョウ島であり、当時は無人島であった）。

島には大竹が茂っており、日本では竹島と呼んだ。以後、元禄九年に至るまで約七十八年間、大谷家と村川家は一年交代に渡航し、アワビなど海の幸を持ち帰った。

しかし、年々朝鮮国からの移住者が増加し、幕府の渡海禁止令によって、両家の渡航も中止された。

総泉寺

米子市愛宕町
ＪＲ米子駅より徒歩一〇分

総泉寺は、山号を大龍山といい、曹洞宗に属し、本尊は釈迦如来である。

『総泉寺縁起』によると、この寺は今も市内尾高にある観音寺から分かれた寺といわれる。戦国末期、荒廃した作州青蓮寺から諸仏が観音寺に移されていた。

慶長年間（一五九六～一六一五）青蓮寺・八代棟室賢梁が、この諸仏を米子城下に移し青蓮寺の再興を図っていたところ、両親供養のため寺を作ろうとしていた中村氏に寺域を提供され僧として迎えられた。中村氏の父の法名から山号を、母の法名から寺号をとって、大龍山総泉寺を開いた。中村氏は寺領として百石を寄進している。

近世には能登総持寺の直属の末寺として威勢があった。元禄九年（一六九六）には西伯耆三郡（汗入・会見・日野）の曹洞宗寺院を管轄する僧録所となった。現在も末寺二十か寺を持つ曹洞宗の大寺である。

寺の裏山には西国三十三か所観音を巡る小型巡拝路があり、墓域には米子組士の山内氏、因幡二十士の清水千万人、現ウツリョウ島へ渡り海産業で財を成した**大谷甚吉**、小説家村雨退二郎などが眠る。

感応寺

米子市祇園町
ＪＲ米子駅より徒歩十五分

日蓮宗身延山久遠寺の直末寺で、日本三感応寺の一つとして知られている。

米子城主・中村一忠の菩提寺で、一忠と殉死した小姓・垂井勘解由延正、服部若狭邦友の彩色による木像三体と墓所がある。

中村一忠は、慶長六年（一六〇一）十二才で駿河（静岡県）から入国して十七万五千国の領主となった。はじめは**尾高城**にいたが、慶長七年（一六〇二）に米子城を完成してこれに移った。老臣・横田内膳村詮は後見として内政に尽くしたが、一忠は内膳を専横であるとして、慶長八年（一六〇三）二月十四日、賀儀の日に暗殺した。一忠は、慶長十四年（一六〇九）に病気で亡くなり、以後、中村家は断絶した。暗殺された横田内膳は当寺の日長上人によって屍をここに葬られたが、その後、内膳の墓は米子市寺町妙興寺に移された。

大神山神社

米子市尾高
ＪＲ伯耆大山駅よりバス三〇分、神社前下車

大己貴命、大山祇命、須佐之男命、少彦名命などを祭神とする。本殿、弊殿、拝殿神、楽殿そのほかを備え、昔から有名な神社であった。

『出雲国風土記』によると、**大山**が古くは「大神岳」といわれているところから、大神山神社は大山を神格化して祀ったものと考えられる。また、古記録に伯耆国大山神にたびたび神階が贈られており、千年前の『延喜式』に載っている神社が西伯耆ではこの社と**宗形神社**のみであることから、西伯郡第一の古社であり、大社であったことがわかる。

古くは、日野都丸山、福万原（岸

本町）などに社殿があり、江戸時代に、現在の地に移ったといわれる。

境内にある菖蒲園は六月上旬になると、数万本の菖蒲に彩られる。

なお、大山にある旧大智明権現の宮（現大神山神社）は、この神社の奥宮であり、毎年六月上旬の夏山開きの前夜祭には約五千人の人が集まる。山の安泰の祈願の後に行われるタイマツ行列は壮観である。

尾高浅山遺跡

米子市尾高　ＪＲ米子駅よりバス約三〇分、米子ハイツ前下車すぐ

米子平野を一望できる標高六〇メートルの丘陵にある弥生時代後期の環壕集落と古墳群からなる一大遺跡である。周辺には**「尾高城跡」「大神山神社（里宮）」**などの史跡をはじめ古代遺跡も数多く分布している。

この遺跡は、二つの丘陵尾根に分布するが、北側の尾根では三重の「環壕」によって区画された弥生時代後期の集落遺構、南側の尾根からは「四隅突出型墳丘墓」、南東側に円形墳丘墓、北西尾根上に三基の方形墓が存在する。

環壕は、第一環壕が長軸一一〇メートル、短軸五〇メートル、断面逆台形で幅三・五メートル、深さ一・五メートルある。第二環壕が、長軸一三〇メートル、短軸六〇メートル、深さ一・八メートル。第三環壕は丘陵西端を半弧状に巡り、断面逆台形で幅二・五メートル、深さ一メートルある。環壕の内側に竪穴住居跡十棟、集石遺構一基、貯蔵穴二基が確認された。これらは、いずれも弥生時代後期前葉～中葉のものである。西伯者では、十か所の環壕集落が知られているが、その中でも規模の大きさ、環壕内部の居住の状況、時期などの明確さで注目される。

古墳群は、環壕集落が遺棄された後の五世紀末から六世紀後半に造られたもので、三基の古墳がある。一号墳は帆立貝古墳で、全長三四メートル、高さ五メートルあり、葺石、埴輪が巡らされている。二号墳は円墳で径一〇メートル、三号墳は前方後円墳で、六世紀の築造と考えられる。

史跡　尾高城跡

米子市尾高　ＪＲ米子駅よりバス約三〇分、米子ハイツ下車すぐ

米子市と岡山県落合とを結ぶ「米子自動車道」の入口近くにある。城は泉山城とも呼ばれた。標高四〇メートルの段丘上に、二の丸・本丸・中の丸・天神丸・館跡等々と呼ばれる、空堀と土塁に囲まれた曲輪が連続し、中世の西伯耆の城跡を代表する姿をよく残している。昭和五十二年（一九七七）四月一日、米子市の史跡に指定された。

城の歴史は古く、江戸初期に米子城が完成するまでは、この城が米子地方の行政・交通上の要所として重要な存在であった。戦国以前は山名氏ゆかりの行松氏が居城した。

戦国時代には出雲の尼子氏の城となり、後には毛利氏の家臣・杉原盛重が城を守った。山中鹿之介が捕らわれて一時この城に幽閉されたこともある。戦国時代の古戦場である。

現在の城跡には、米子勤労総合福祉センター米子ハイツがある。アジサイと梅の名所としても知られる。

鷲見三郎

鷲見三郎は偉大なバイオリン奏者であり、日本のバイオリン音楽を世界的レベルに引き上げた指導者でもある。

明治三十五年（一九〇二）、米子市尾高町に生まれた。幼いころ、教会でオルガンや讃美歌に触れ、西洋音楽に強くひかれていった。

大正十三年（一九二四）、バイオリンで身を立てることを決意し上京、多久寅の指導を受けた。

大正十五年「新交響楽団」（現在のＮＨＫ交響楽団）に入団し、第二バイオリンを担当した。昭和十年（一九三五）からは自由学園でバイオリンを指導し始めた。また、昭和二十一年（一九四六）には国立音楽大学に招かれている。

鷲見は早期教育、一対一の個人レッスン、合奏演奏を重視した。鷲見が指導した者のなかから、国際的なコンクールの上位入賞者や、国内外で活躍しているバイオリニストが多く誕生している。

昭和五十九年（一九八四）、八十二歳で死去。米子市長砂町の聖公会墓地に眠っている。

〈福市周辺〉

宗形神社

米子市宗像　ＪＲ米子駅よりバス約一〇分、宗像下車徒歩一分

宗形神社は、田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命の宗形三女神と経津主命、武甕槌命を祀っている。これらは、古代、九州の宗像あたりから当

地に移住した人々が奉じてきた神々と思われる。『延喜式神名帳』に記載され伯耆五ノ宮ともいわれた。

古くは、現在地より北に位置する宮谷の本宮という所にあったが、弘治二年（一五五六）に、尼子晴久によって現在地に移されたと古棟札にある。

尼子氏は三百石、吉川氏は百二十石の社領を寄進したが、中村氏によって全て没収された。近世になり藩主池田氏によって再び保護され藩主祈願所に指定された。

小児のカンの虫封じの神社として親しまれた。

また、吉川元春寄進と伝えられる桃形兜一領が所蔵されている。また、近くには宗形神が渡来時に使用した船という舟形石が近年まであった。

安養寺

米子市福市
JR米子駅よりバス二〇分、安養寺入口下車、徒歩三分

後醍醐天皇皇女・瓊子内親王の廟所としてよく知られる。また、境内はサクラの名所としても名高い。

元弘二年（一三三二）、後醍醐天皇が隠岐に流されたとき、瓊子内親王は十六歳であったが、父天皇を慕いともに伯耆に入った。ところが、隠岐に渡ることが許されず、ここで出家し、名を安養尼と称して隠遁し、二十四歳で世を終えた。このことは『新葉集』に、兄の尊良親王と贈答された歌があることなどから、伯耆の学者、**門脇重綾**が考証したが、史実としては不明である。寺宝として、天皇の肖像と内親王の所持したと伝えられる鏡が所蔵されている。

また、当寺に保管されている資料は、平成二年（一九九〇）に米子市の有形文化財に指定されている。

また、寺内には歯の跡が残っているので「歯形栗」といわれる内親王ゆかりの栗の木がある。

史跡 福市遺跡

米子市福市
JR米子駅よりバス二〇分、安養寺入口下車すぐ

標高二〇～四〇メートルの丘陵地帯に広がる弥生時代後期から古墳時代の集落跡と墳墓群。周辺には**青木遺跡**をはじめとして、数多くの古代遺跡があり、市内でも有数の遺跡密集地帯である。

この遺跡は、集落跡（吉塚地区）と墳墓群（日焼山地区）が明確に区分し配置されている点で特徴がある。「住居の構造」「集落の変遷」を考える上で重要な遺跡である。

遺構は、遺跡全体で二百四十一基確認されている。「史跡指定地」内では、住居跡九十、土壙墓二十六、古墳一、横穴墓一、柱穴群六、溝二、合計百三十三基ある。遺跡からは、約三万五千点の土師器をはじめ、弥生土器、須恵器、鉄器、石器（たたき石、台石、砥石）、玉類（勾玉、小玉）、ペンダント、碧玉（めのうの原石）、紡錘車、鏡片、獣首、子持勾玉、土製鏡、ミニチュア土器など、当時の生活を物語る遺物が大量に出土している。これらは、史跡公園内の**福市考古資料館**に展示されている。

本遺跡は昭和四十一年（一九六六）の住宅団地造成を機に発掘調査が行われ、山陰で初めて調査された集落遺跡として、昭和四十五年（一九七〇）に国の史跡に指定された。もともと、「福市遺跡」は、東西五〇〇メートル、南北四〇〇メートルの範囲で確認され、保存された「吉塚」「日焼山」地区を含めて、七つの地区・支群からなっていた。ところが、昭和四十二年（一九六七）ごろから宅地などの開発が盛んになり、遺跡の大部分は破壊され、消滅した。

七地区のうち、「吉塚」「日焼山」二地区が、米子市民による文化財保護運動の成果として「国史跡」の指定を受けた。保存されている面積は、

三九、四一四平方メートルである。現在は「史跡公園」として整備され、またツツジなどの名所として一般市民に開放されている。

福市考古資料館

JR米子駅よりバス二〇分、安養寺入口下車すぐ

米子市福市の国道一八一号沿いにある考古資料館。昭和五十五年（一九八〇）に、福市遺跡の史跡公園内に開館した。当初は、徒歩一分の所にある**「福市遺跡」**や徒歩十分の所にある**「青木遺跡」**、この二つの国指定史跡の出土品を中心に展示していたが、最近は、米子市内の発掘資料を含めて展示している。また資料館脇には、竪穴住居が復元してある。

●開館時間
午前九時三〇分～午後四時三〇分
●休館日　火曜日、祝日の翌日、年末年始
●問合せ先　☎0859・26・3784

史跡 青木遺跡

米子市永江　JR米子駅よりバス二〇分、青木団地入口下車

長者原台地の北端部、標高四〇メートル前後のなだらかな丘陵上に広がる縄文時代晩期から平安時代に至る遺跡。発掘調査の時の地名から、この名称で呼ぶ。この地域の住宅団地造成計画にともない、昭和四十六年（一九七一）から五十二年（一九七七）にかけて事前の発掘調査が行われ、四〇ヘクタールの広大な規模の遺跡の存在が明らかになった。

遺構は、縄文時代から平安時代までの九百九十五基を数えるが、中心的な遺構は、弥生時代中期から奈良時代にかけての住居跡と古墳である。各時代の遺跡の存在する丘陵は、その地形によって十の地区に分けられ、遺構が確認された地区の一部（四ヘクタール）が昭和五十四年（一九七九）に国の史跡に指定された。

この保存地区は五か所からなり（一号～五号地区）「史跡公園」として親しまれている。この公園内には、竪穴住居跡二十二棟、掘立柱建物総数九棟、土拡十基、古墳十九基、周溝墓二基、その他二基の計六十二基などの遺構が保存・整備されている。その中には青木遺跡で最大の「青木一号墳」（全長三三メートル、後円部径一八メートル、後円部高さ三五メートル、前方部幅一六メートル、高さ三メートルの前方後円墳）も含まれる。

この遺跡の北には小谷を隔てて、**福市遺跡**がある。この二つの遺跡がある丘陵は、西方の**安養寺**辺りから北東に延び、米子市から会見町に及ぶ。この丘陵には点々と土器や住居跡が確認されていて、この丘陵の地下には大規模な集落がねむっている。

史跡 目久美遺跡

米子市目久美　JR米子駅より徒歩五分

米子駅の南側にある、縄文時代から弥生時代の低湿地（地下約一メートルから四メートル）の複合遺跡。足尾山付近を中心に東西五〇〇メートル、南北四〇〇メートルの範囲に確認される。

昭和八年（一九三三）、新加茂川の開削工事の折に地元の清水安造によって発見され、翌年、京都大学教授・梅原末治の調査によって、原始農耕を物語る貴重な遺跡として世に知られるようになった。

その後、昭和五十七年（一九八二）、新加茂川の川幅改修工事にともなう大規模な調査で、弥生時代中期の水田跡などの遺構と大量の遺物が発見され、具体的な姿が明らかになった。その後も数次にわたり発掘調査が継続され、全体像が解明されつつある。

縄文時代には、この地は照葉樹の森と湖に囲まれた**中海**の入り江の奥に位置し、居住に適していたと考えられる。発掘によって縄文前期（六千年前）から晩期（三千年前）の貯蔵穴や土器、石器、骨角器、獣魚骨が出土している。

弥生時代になると、水辺が退き湿地帯が広がっていたと考えられる。稲作文化（水稲耕作）が「目久美」にも早くから伝えられた。発掘された水田跡は、一枚の区画は小さめだが、用水路、入排水路、畦、水口などの施設が整っている。水田には、多数の弥生人の「足跡」が残され、鍬、鋤、田下駄などの農耕具も発見されている。

主な遺物では、弥生各期を通じた土器、土製品、木製農耕具、稲作文化とともに伝わった石器などが確認されている。

この遺跡の内、「美吉橋」付近二二五平方メートルが、昭和五十二年（一九七七）に米子市の史跡に指定された。

〈弓ケ浜周辺〉

名所 粟嶋神社と社叢

米子市彦名　JR河崎駅より、徒歩三〇分

粟嶋神社は『伯耆国風土記』逸文

に少彦名命（すくなひこなのみこと）が粟の穂にはじかれて常世の国に渡られたので粟嶋と名付けられたと伝えられていて、古くから神の宿る山として信迎された長い歴史と伝承をもつ神社である。古樹老木に覆われた小山全体が境内で、山頂の本殿には『古事記』に登場する少彦名命が祀られている。

社叢になっているこの山は標高三八メートル、長砂流紋岩の隆起によって形成されたもので、周囲は傾斜三十五度ほどの崖地が多く、全山ほとんど手つかずの自然林となっている。主にスダジイが占め、ヤブツバキ、シャシャンボ、タブノキ、クロキ、カクレミノ、コナラ、アオキなどが生育する典型的な照葉樹林である。これほどまとまった森は県下でも数少なく、海浜型のスダジイ林として昭和五十七年（一九八二）四月に県の天然記念物に指定された。特にシャシャンボの生育がよく、トベラ、ツワブキ、モチノキなども多く見られ、昭和五十二年（一九七七）、米子市の名勝に指定されている。

伝　説

漁師の集まりで出た料理を誰も気味悪がって食べなかったが、漁師の娘一人が食べた。それは、食べると寿命が尽きないといわれる人魚の肉で、娘はいつまで経っても十八歳のままだった。

そこで娘は尼となり（八百比丘尼）洞窟にこもり何も食べないまますごした。八百歳で息絶えたという洞窟（静の岩屋）が粟嶋にある。

米子水鳥公園（よなごみずどりこうえん）

米子市彦名新田
ＪＲ米子駅からバス十三分、米子水鳥公園入口下車、徒歩一〇分

米子水鳥公園は、コハクチョウの集団越冬地としては南限の**中海**に位置し、眼前に**大山**を望む。彦名干拓地の一部を、野鳥生育地の保護と市民が自然と触れ合う公園として整備し、平成七年（一九九五）十月にオープンした。

約二八ヘクタールの公園では、毎年約百種類、最大一万羽以上の野鳥が観察されており、西日本屈指の野鳥飛来地となっている。

ネイチャーセンター内の観察ホールでは、四季を通じていろいろな野鳥を観察することができる。そのほかにも、野鳥に関するパネルや標本、バードカービングなどの展示や映像でコハクチョウの生活史を紹介している。また、ロシアなど海外の研究者と鳥に関する国際交流や自然観察会などの普及活動を進めている。

●開館時間　四～十月午前九時～午後五時三〇分　十一～三月午前八時三〇分～午後五時三〇分
土・日曜日及び祝日は午前七時～
●休館日　火曜日（祝日の場合はその翌日）、祝日の翌日、年末年始
●問合せ先　☎０８５９・２４・６１３９

弓ケ浜公園（ゆみがはまこうえん）

米子市両三柳
ＪＲ米子駅からバス二十五分、三柳団地下車、徒歩一分

国道四三一号沿いに平成十年（一九九八）十月にオープンした。

日本海に面した約一四ヘクタールの敷地内には、公設ゴルフ場をはじめ、「芝生の広場」、海と船をイメージして遊具が整備された「みんなの遊具広場」などがある。これらは小さな子どもからお年寄り、そして体の不自由なかたも利用しやすく楽しめるものとなっている。

また、高さ四〇メートルの観覧車やメリーゴーランドなどが設置された「弓ケ浜わくわくランド」もあり、市民の憩いの場となっている。

●開園時間　午前九時～午後六時
九月～十一月は午前九時～午後五時
●休園日　水曜日（祝日の場合は翌日）、十二月～二月
●問合せ先　☎０８５９・４８・１５１５

アジア博物館・井上靖記念館

米子市大篠津町五七
ＪＲ米子駅からバス二十五分、大篠津下車

中国、ペルシャなどアジアの国や地域の文化が、陶磁器や書・画などを通して紹介されている。モンゴル館には「ゲル」が展示されている。

また、染色工房棟では、古くから弓ケ浜地方で行われてきた**弓ケ浜絣**の染めと織りの工程を見学したり、体験（要予約）したりすることがで

きる。

鳥取県にゆかりの文豪・**井上靖**の資料を多数展示した「井上靖記念館」も併設されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
●休館日　無休
●問合せ先　☎０８５９・２５・１２５１

湯景　皆生温泉（かいけおんせん）

米子市皆生
ＪＲ米子駅よりバス十七分、米子市観光センター前下車

ゆるやかなカーブを描いて伸びる**弓ヶ浜半島**の東端に位置する。美保湾に面し白砂青松が美しい。遠くに**大山**を眺めることもできる。

昔から地元の漁師たちの間では皆生の沖合に白い泡が出ているといわれ、潜ると泡が大きくなり暖かい湯が沸いていたという。砂浜にも湯徴があり、明治三十三年（一九〇〇）自噴泉が発見され、大正十年（一九二一）、**有本松太郎**が掘削に成功し皆生温泉土地株式会社を設立した。一時期、電気鉄道が走っていた。

二十三の泉源のうち五つは未利用泉である。そのほかは集中管理されている。平均温度は六十六・五度、毎分四、一〇一・七リットルの湧出量は鳥取県一である。

温泉は新第三紀層の火砕岩中の割れ目（断層）を通って上昇する裂か泉と、更新世の堆積岩中の層状泉とからなっている。断層は東西に走るものと南北のものが伏在している。地下五百メートル前後以下にある花崗岩がマグマ溜から伝導して熱源となり、深層水となった南方山地からの地下水流を熱し温泉となり、割れ目に沿って上昇したと考えられている。

泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物を含むいわゆる食塩泉である。海岸近くに湧出する温泉であるにもかかわらず成分上は海水と直接関係がない。神経痛、皮膚病、貧血などに効果があるという。

皆生海岸は海水浴場としても有名で、夏には多くの海水浴客でにぎわう。また、皆生は鉄人レースとして知られるトライアスロンの日本の発祥地でもあり、毎年、多くのアスリートたちが街のなかを駆け抜ける。

米子空港、ＪＲ米子駅にも近く、四季を通じて**大山**や**とっとり花回廊**などへの観光客の休養の拠点である。

有本松太郎（ありもとまつたろう）

有本松太郎は、**皆生温泉**を一大温泉郷に整備しようとそのまちづくりに尽力した。

文久三年（一八六三）、兵庫県美方郡浜坂町に生まれた。明治十四年（一八八一）、鳥取で土木工業に従事して以来、各地を転々としている。日露戦争に際し中国大陸に渡って鉄道工事を請け負い多くの財産を得たという。

米子に定住した有本松太郎は、荒廃していた皆生温泉を一大温泉郷に整備しようと決意し、大正十年（一九二一）、皆生温泉土地株式会社を起こした。新しい技術を導入して温度七十二度、湧出量毎時百五十石の温泉を掘りあて、各旅館に配湯することを可能にした。また、京都にならい整然とした街路をつくり、公衆浴場や料亭などの建設を進めた。

さらに米子電気軌道株式会社を設立し、大正十四年（一九二五）には米子駅と皆生を結ぶ電車を通した。

その間、大正七年（一九一八）に県会議員、同十年（一九二一）十二月には米子商工会議所会頭を務めている。

昭和十六年（一九四一）、七十八歳で死去。

笹鹿彪（ささかひょう）

笹鹿彪は画家として活躍する一方、日展審査員・評議員などを歴任し、日本の美術界にあって中心的な役割を担った。

明治三十四年（一九〇一）、西伯郡米子四日市町（現在の米子市四日市町）に生まれた。幼いころから絵を描くことが好きで画家になることを決めていたという。

大正九年、十九歳のときに勤めていた銀行を辞めて上京し、岡田三郎助が主宰する本郷絵画研究所に入り、本格的に絵を勉強し始めた。翌

年には第三回帝展に『少女』が初入選している。

太平洋戦争の激化に伴い、昭和二十年、西伯町に疎開した。そのとき香田勝太、**辻晋堂**らと文化団体「麓人会」を立ち上げ、郷土の美術、文化の向上に努めた。

戦後まもなく大阪駅構内に掲げた五〇〇号の大作『フラナガン神父と子供達』は、全国的に話題となった。

昭和五十二年（一九七七）に七十六歳で亡くなった。

白井喬二（しらいきょうじ）

白井喬二は一般庶民に愛される文学作品を多数残し、「大衆文学」の開拓、普及に努めた。

明治二十二年（一八八九）、横浜市で生まれた。本名は井上義道。両親はともに鳥取県人である。明治三十五年、米子市に移り住んでいる。

星蔭というペンネームでさかんに新聞などに投稿、文芸誌『水脈（みお）』の創刊にも関わった。大正九年（一九二〇）『怪建築十二段返し』を発表し、本格的な文学活動に入った。同十三年（一九二四）、『新撰組』『富士に立つ影』の連載を開始、大衆文学作家としての地位を固めた。なかでも『富士に立つ影』は「報知新聞」に三年間連載され、広く読者の支持を得て白井の代表作となった。

雑誌『大衆文芸』を創刊し、大衆文学の普及に努めた。これがベースになり、昭和二年（一九二七）に刊行を開始した『現代大衆文学全集』（平凡社）全六十巻は大成功を収めた。

主な作品に『神変呉越草紙』『兵学大講義』『祖国は何処へ』『盤嶽の一生』『金襴戦』などがある。

昭和五十五年（一九八〇）、九十一歳で死去。

岩宮武二（いわみやたけじ）

岩宮は、対象に肉薄する力強さで知られる写真家である。

大正九年（一九二〇）、米子市に生まれた。大阪に出て百貨店などに勤め、そのかたわら写真倶楽部で撮影活動を続けた。昭和十四年（一九三九）、全日本写真連盟西日本部展で特選にはいった。

戦後、カメラ雑誌を舞台に、積極的に活動を開始した。昭和二十七年（一九五二）、自宅裏の工場で見たマネキンを撮影した作品が、第二回富士フォトコンテストで金賞を受賞し、プロへのデビューを果たした。

昭和四十四年（一九六九）から四年間にわたって、青森県から山口県までの**日本海**を撮影した『日本海』は叙情的作品である。これとは対照的な『かたち――日本の伝承――』は、徹底した客観の視点で表現された作品群であるといわれる。

平成元年（一九八九）、六十九歳で死去。

境港市

弓ケ浜半島（ゆみがはまはんとう）

米子市と境港市の両市域に含まれ、美保湾と**中海**を仕切っている半島で、長さが二〇キロメートル、幅四キロメートルの大砂州である。大町桂月（おおまちけいげつ）はこれを評して「大天橋」と呼んだ。

『出雲国風土記』には、弓ヶ浜半島を綱とし、**大山**を杭にして国を引き寄せたという国引き神話がある。

弓ヶ浜は西北へ環流する美保湾流

と東北へ環流する中海湖岸流が合流し、流速の弱まった地点に**日野川**河口からの土砂が堆積してできた浅い砂州が、その後相次ぐ海面低下によって海面上に姿を見せたものである。奈良時代までは島状の砂州であったが、半島状になった。

半島に平行する三列の砂州列がある。中海側から順に内浜、中浜、外浜とできた。外浜は砂州の粒子に砂鉄精錬の際の鉱滓が含まれていることから、形成は中世以降のものとされている。江戸時代以降、開拓が進められ、米川用水も完成し、後に綿と木綿の大産地となった。

米子空港やＦＡＺの指定を受けて産業基盤整備が進められたほか、内浜沿岸と外浜の竹ノ内に埋め立てが行われ、商工業地として活用されている。

皆生海岸付近は、海岸浸食が進んだことから、離岸堤を設置し保全されている。

境港

境港市

弓ヶ浜半島の先端に広がる国際貿易港。漁港としても、水産業上特に重要な港として特定第三種漁港に指定（全国十三漁港）されている。平成四年（一九九二）年から平成八年（一九九六）までの五か年間、漁獲の水揚量が全国一であった。西は**中海**、東は美保湾から**日本海**、北は境水道を隔てて島根県の美保関である。

有料の境水道大橋は、橋の長さ七〇九メートル、幅員八メートルで歩道付きである。橋の高さは四〇メートルあり、一万トンクラスの船舶の出入りが可能である。架橋には昭和四十三年（一九六八）から四年の歳月がかけられた。

半島先端をぐるりと取り巻く港湾地域に包まれるように、境港市の市街地がある。港湾地域は、境水道に面した内港と美保湾に面した外港に大別される。外港には沿岸の埋め立てにより造成された昭和町の埠頭や竹内工業団地が広がる。団地には公共マリーナが付設されている。漁港は内港にある。中海へ廻ると、木材工業団地を中心とした外江町地区があり、貯木場もここにある。

境港については、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に夜見島あるいは外江の関の記載がある。中世から近世にかけて、既に日本海の重要な港として知られていた。江戸時代の北前船の往来では、最大級の和船「千石船」が出入りした。船積みされた物資は、藩米、鉄、綿の三品が代表的なものである。陸揚げされたものは、綿作の肥料となったニシン粕が多い。

明治に入ると、改めて北海道、大阪、隠岐、舞鶴と汽船航路が開かれ、明治二十九年（一八九六）には大陸との航路も開かれた。鉄道敷設の起点も境港であり、明治三十三年（一九〇〇）に始まり、明治三十五年（一九〇二）には米子を通り御来屋まで開通している。**山陰線**（現山陰本線）として最初の開通区間となった。鉄道が延びるに従って海路は廃れたが、大陸貿易が拡大した結果、境港は息を吹き返した。

昭和四十年代以後、埋め立ての一方、大型船の接岸を可能にするために一万トン岸壁や四万トン岸壁が次々築造された。

境港の港湾区域は漁港区域を除いても一、七七六ヘクタールあり、平成十二年（二〇〇〇）の貨物取扱量は魚の水揚げを除いて四八〇万トン、その内の外国貿易は二一三万トンである。ただし、貿易の八割は木材、チップなど木材関連である。米子市内には、王子製紙の紙パルプ工場が立地している。

漁業では、大型まき網によるアジ、**サバ**、**イワシ**、マグロが漁獲高の大半を占めている。とくに、イワシの漁獲高が境漁港全体の活気に影響を与える。次いで、沿岸イカ釣り漁によるスルメイカ、他にかご網漁による**ベニズワイガニ**が多い。なお、水産加工団地があり、全国の漁港の船団が水揚げに立ち寄る。**松葉がに**の水揚げ港の一つでもある。毎年開催される「境港水産まつり」は八万人近い人出でにぎわう。

みなとさかい交流館（マリンプラザ21）

境港市大正町
ＪＲ境港駅から徒歩一分

境港駅に隣接して平成九年（一九九七）に建設された。「マリンプラザ21」は、**境港**はもとより、世界の船や港のしくみ、歴史について、ゲームなどを通して体験しながら、遊びながら学べる施設である。また、バーチャルリアリティーを使用した「プレジャー号」では仮想航海を体験できる。

四階建ての施設内には、海を眺めながら入浴できる施設のほか、隠岐

汽船のチケット売場などもある。

また、平成十三年（二〇〇一）七月には、みなとさかい交流館の近くに境港重要港湾指定五〇周年を記念し、「海の交流」をテーマにした記念碑が建設された。

●開館時間　午前九時～午後四時三〇分
●休館日　水曜日、年末年始
●問合せ先　☎0859・42・3730

水木しげるロード

境港市大正町、松ケ枝町、本町
JR境港駅よりすぐ

境港市出身の漫画家・水木しげるの漫画「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する妖怪のブロンズ像が、駅前からのメインストリートに設置された彫刻ロードで、新しい観光スポットである。

平成六年（一九九四）七月に開設された。まず鬼太郎・ねずみ男などのブロンズ像四十体を黒御影石の台座にのせて歩道に並べたところ全国的にも注目を集め、同八年度にはブロンズ像四十体、レリーフ五基がさらに加えられ、ブロンズ像は、現在、八十三体ある。その他の関連整備も進み**妖怪神社**も創建され、現在、駅前には水木しげる記念館の建設が進行している。

訪れる人々は妖怪たちに親しく話しかけ、一緒に記念写真をとるなど、ほほえましい光景が見られる。

境港市は「鬼太郎に逢えるまち、境港市」をキャッチフレーズにしている。地域おこし、まちづくりに境港ならではの話題性のある素材を使ったアイデアが呼び水となり波及効果が出ている。妖怪たちがまちの顔の一つになっている。

妖怪神社

境港市大正町
JR境港駅よりすぐ

境港出身の漫画家・水木しげるにちなみ平成十二年（二〇〇〇）一月に開設された。

鳥居の横木には「ゲゲゲの鬼太郎」のキャラクターで知られる一反木綿がかたどられている。

水木しげるロードと並んでまちの人気スポットになっている。

海とくらしの史料館

境港市花町
JR境港駅から徒歩二〇分

海とくらしの史料館は使われなくなった酒蔵を改造し、漁業の町・境港に現われた新しい博物館である。館内のいたるところに木造の小屋組が見えるのがこの博物館の特徴である。玄関ホールを入ってまず目に入るのは、大きな円形の水槽や、ビデオシアターである。はく製展示コーナーはその数日本一、カニやマグロやタイなどの剥製が所狭しと並べられている。メインホールに置かれている漁船「みなと丸」に乗れば**日本海**も体感できる。二階には人びとのくらしをテーマに、農具・民具・漁具などの民俗資料も展示されており、境港周辺の歴史もわかるようになっている。

外観は酒蔵当時の姿を留めており、町並みとも溶け込み、周辺を歩けば境港の歴史的な景観を楽しむこともできる。

●開館時間　午前一〇時～午後五時
※入館は午後四時三〇分まで
●休館日　火曜日（祝日の場合はその翌日）
●問合せ先　☎0859・44・2000

史跡 台場公園

境港市花町
JR境港駅よりバス七分、上道下車、徒歩二〇分

文久三年（一八六三）、鳥取藩が築いた砲台場跡を中心に整備された公園。県内にはこのような砲台場が八か所設けられたが、その一つである。園内には山陰最古といわれる木造の白亜で六角形の灯台が復元されている。

春は三百五十本植えられた桜の花

が咲き誇り、花見客で賑わう。市民の憩いの場である。

昭和六十三年（一九八八）七月、国の史跡に指定されている。

光祐寺

境港市馬場崎町
ＪＲ馬場崎町駅よりすぐ

浄土宗に属し、本尊は阿弥陀如来である。米子心光寺の末寺である。昭和三十一年（一九五六）までは市内栄町の**大港神社**近くにあった。

昔、当寺域には延盛山薬師寺という大寺があったが、文安四年（一四四七）に焼失したといわれる。しかし、仏像は焼失を免かれ、この寺に安置された。寛永十二年（一六三五）、総本山知恩院から現在の寺号を受け、報誉上人が開き、寛文八年（一六六八）に寺は完成した。

当寺では正月三日に、「投げ杓子」という珍しい仏事が行われる。これは薬師寺当時の遺習の伝承といわれている。また、文政の頃（一八一八～三〇）から、春彼岸に「諷誦あげ」という新仏に諷誦文を回向・供養する仏教行事が盛んに行なわれ始めた。

大港神社

境港市栄町
ＪＲ境港駅より徒歩一〇分

大港神社は、誉田別命・武内宿弥命などを祭神とし、正八幡宮といった。また、明和五年（一七六八）の『御社帳・会見郡』には、当社の末社には航海安全の神である高良神が祀られていることが記載されている。そのことからこの神社は古くから航海安全の神社として祀られていたと考えられる。その信仰は厚く、境港に入港した全国の回船船頭たちは航海安全を祈って、当社の波切り御幣を受けるのを常とした。中でも若狭や丹後の船頭は、例祭には代参者を派遣するほどだったという。境内には各地から寄進された手水鉢、石鳥居、燈明台などが残っている。

社殿背後に代台寺（現正福寺の前身）という神宮寺があったが、慶長年間（一五九六～一六一五）の大洪水により廃寺となった。明治初年（一八六八）に今の神社名に改められた。

また、大港神社の隣に稲田姫命、手摩乳命、足摩乳命を主祭神とする餘子神社があった。この社は戦国期には尼子氏の祈願所として社領五十四石を寄進され、近世には境・上道・中野・福定・竹内五か村の産土神であった。

うっそうとした社叢に囲まれ、本殿・拝殿・神楽殿随神門を有したが、第二次大戦末期に起った境水道での玉栄丸爆発事故によって類焼し、祭神は大港神社に合祀され廃社となった。

大港神社東側には、新八幡宮と称してこの地で非業の死を遂げたという、尼子氏の武将・亀井能登守安綱などを祀る神社もあった。明治元年（一八六八）に亀井神社と改称され、大正四年（一九一五）に大港神社に合祀された。

境港市文化ホール「シンフォニーガーデン」

境港市中野町
ＪＲ上道駅より徒歩五分

境港市郊外、山陰の空の玄関である**米子空港**に程近い所に、平成六年（一九九六）に造られた文化ホールである。ホールに重なり合う高さ九メートルの空中に浮遊する円環（上部には花壇が設けられている）は、花壇のイメージを超えて天空に誘うファンタジックな空中回廊となっている。また、この施設をより印象的に演出するのがこの円環に取り囲まれた中庭である。中庭にある広場は、池があり、噴水、人工滝、照明によってドラマティックに演出されるウォーターミュージアムである。

ホールは客席数四百と小規模であるが、音響効果もよく本格的なクラシックコンサートも楽しめる。また、ホールの内部は舞台と客席が一体となっており、会議・映画など各種イベントにも対応できる。このコンサートホールは「シンフォニーガーデン」と称され市民に親しまれ、市民の貴重な文化的オアシスとなっている。

上道神社

境港市上道町
ＪＲ米子駅よりバス三十五分、境高校前下車すぐ

上道神社は、祭神、事代主命、市杵島姫命など四神を祀る。慶安

二年（一六四九）恵美須神社として創られたものといわれる。「おえびすさん」「いずきさん」といって氏子から親しまれ、豊漁を願って祀られた神社と考えられる。

また、寛文十二年（一六七二）の棟札（神社の棟上げの時、工事の由緒、建築の年月、建築者などを記して棟木に置く木札）には「…五個村氏子……」とあるところから、当社は上道・境・中野・福定・竹内五か村の氏神であったことがわかる。

明治元年（一八六八）、近隣小社を合祀し、上道神社と改名された。

社前の樹齢三百年を超える黒松の巨木は「おえびすさんの松」と呼ばれ、沖で漁をする漁師の目印になっていたという。この巨松を中心に緑濃い社叢が形成されている。この社叢は昭和六十二年（一九八七）に境港市の天然記念物に指定されている。

正福寺

境港市中野町
ＪＲ上道駅より徒歩五分

山号を巨嶽山といい、曹洞宗に属する。本尊は釈迦如来である。正福寺の『縁起』によると、この寺は、昔は境村にあり、正八幡宮（現大港神社）と餘子神社の別当寺（神仏習合説によって神社に付属して作られた寺、神宮寺ともいう）で、真言宗・代台寺といった。

慶長年間（一五九六～一六一五）の大洪水により寺は流された。その後、吉祥寺として再興されたが、火災により焼失している。文禄末年（一五九五）に現在地に移され、曹洞宗に改められた。併せて山号・寺号も現在の名に改められ、米子総泉寺の末寺となった。本堂南に二世祖淳和尚（寛保元年・一七四一）が本山の越前永平寺より移植したと伝えられるカヤの大木があった。このカヤは昭和六十二年に市の天然記念物に指定されたが、平成三年（一九九一）の台風によって倒れた。

境内には地元の俳人一仙堂蘭石（文化十四年・一八一七没）の建立した芭蕉句碑がある。『伯耆志』の編者である景山粛はここに眠る。

また、正福寺には「地獄極楽絵図」がある。この絵は、境港出身の漫画家・水木しげる氏を妖怪の世界へ導いたともいわれる。

平成十四年三月、境内に水木しげる氏の銅像が設置された。

渡町・西東のゴヨウマツ

境港市渡町
ＪＲ境港駅より車で十五分

渡部家の邸内には、ゴヨウマツの巨木がある。樹高五・五メートル、胸高直径約一メートル、枝張りの周囲は四二メートルで富士山の姿に似せて樹形が作られており、樹冠面積が一五〇平方メートルもあり、その姿は壮観である。家伝によると、この木は文政年間（一八一八～一八二九）に北前船の乗組員から求めたといわれている。ゴヨウマツにはヒメコマツ（ゴヨウマツ）とキタゴヨウの二種類があり、中国地方にはヒメコマツは分布しているが、キタゴヨウはない。このマツは種子の翼の形態から北方系のキタゴヨウである。

昭和四十五年（一九七〇）二月に県の天然記念物に指定された。なお、西東というのは所有者の屋号であり、渡町に渡部姓が多くあるので、混乱を避けるためにこの名称を用いている。

白尾神社

境港市外江町
ＪＲ外江駅より車で一〇分

白尾神社は、天照大神を主祭神とし他六神を祀る。創社年代は不明である。

『鳥取県神社誌』によると、正応年間（一二八八～九二）に石州津和野の浪士・勝田上総介四郎（五郎とも）という者が当地にやって来て、市内鬼ケ沢に住んで農耕を妨害する悪賊を亡ぼし、土地を開拓して勝田庄を作った。勝田四郎の死後、地元の人々は、その功績を讃え、勝田明神として新屋村に神社を創り祀ったといわれる。後に外江の現在地に神社は移されたが、米子城が築城されたとき（天文二十二年・一五五三）、城の鬼門鎮護の神として、祭神は再び米子に遷された。これが現在の勝田神社である。祭神勝田四郎を失った当社は、その後に伊勢神宮を勧請し、近世になると、「伊勢の宮」と呼ばれていたという。

明治五年（一八七二）、現在の社名となった。白尾とはかつての祭神、勝田四郎の名前の転化といわれている。

補岩寺

境港市外江町
ＪＲ余子駅より車で五分

曹洞宗に属し、米子総泉寺の末寺である。本尊は聖観音である。元永二年（一一一九）に創建当時は、真言律宗に属し、長福寺といい東寄り

の場所にあった。

文明五年（一四七三）に、海岸愚禅という曹洞宗の僧が来住し、荒廃していた長福寺を再興し、宗旨も曹洞宗に改めた。その後も焼失・再建を繰り返した。元禄二年（一六八九）、米子**総泉寺**の竺法梅園和尚が寺に来て、当時、荒地で妖怪の七尋女房が出ると噂されていた現境内に寺を移し、同十三年（一七〇〇）に再建し、寺の名も補岩寺に改めた。

境内の阿弥陀堂には、仁安三年（一一六八）に海中より出現したといわれる阿弥陀如来像と、平安時代の作と思われる毘沙門像が祀られている。阿弥陀如来像は昭和六十二年（一九八七）三月、市の有形文化財に指定されている。両仏共に年二回（正月三日・旧暦三月十日）開帳される。当日は福木も出て、多くの信者でにぎわう。また、当寺は失せ物・盗難物などに霊験があると伝えられている。

寺の外には芋代官碑や、天保六年（一八三五）に刻み煙草機械を発明した浜田与一の碑などがある。

夢みなと公園

境港市竹内団地内　JR境港駅よりはまるーぷバス三〇分、夢みなとタワー下車

平成九年（一九九七）に開催されたジャパンエキスポ山陰夢みなと博覧会の会場および施設をリニューアルした施設。

大山（だいせん）や**日本海**を見渡すことのできる**夢みなとタワー**、夢みなと温泉館などがある。

物産　水産物販売所

日本有数の漁獲量を誇る**境港**から水揚げされた、**日本海**の旬の魚介類が並ぶ。新鮮な旬の魚介類、塩干物、乾物などが販売されている。

境港さかなセンター　境港市竹内団地

JR境港駅から車で一〇分

●問合せ先　☎〇八五九・四五・一一一一

なかうら大魚市場　境港市竹内団地

JR境港駅から車で一〇分

●問合せ先　☎〇八五九・四五・一六〇〇

境港水産物直売センター　境港市昭和町

JR境港駅より車で五分

●問合せ先　☎〇八五九・四四・六六六八

夢みなとタワー

境港市竹内団地　JR境港駅よりはまるーぷバス三〇分、夢みなとタワー下車

夢みなと公園内にガラス張りの円柱形の建物がそびえる。

平成九年（一九九七）夏に開催されたジャパンエキスポ「山陰夢みなと博覧会」のシンボルタワーだった。この施設は、平成十年（一九九八）五月にリニューアルオープンした。

一階には、鳥取県の名産や特産品が並ぶ大正・昭和初期のみなとまちを再現した「みなとまち商店街」、三階には大型で迫力満点の映像と音響を用い鳥取県を紹介した「夢みなとシアター」、四階には対岸諸国六地域について紹介する「夢みなと交流村」がある。また、地上四三メートルに位置する展望台は、三六〇度見渡せる。

●開館時間　午前九時～午後六時（一〇月～三月午前九時～午後五時）

●休館日　第二水曜日

●問合せ先　☎〇八五九・四七・三八〇〇

温泉　夢みなと温泉館

境港市竹之内団地内、JR境港駅より車で十五分

平成九年（一九九七）に開催されたジャパンエキスポ「山陰夢みなと博覧会」の跡地の一部に整備された**夢みなと公園**内にある。博覧会開催期間中は、地下一、五〇〇メートルから湧き出る天然温泉を利用した施設として多くの入場者に利用された。

その後、より利用しやすい温泉施設として整備され、平成十年（一九九八）五月にリニューアルオープンした。館内には、三〇人程入浴できる浴室のほか、サウナや**大山**（だいせん）と**日本海**を望む露天風呂が備えられている。

●開館時間　正午～午後八時（入館は午後七時三〇分まで）

●休館日　第二水曜日

●問合せ先　☎〇八五九・四七・三八七〇

大同寺

境港市竹内町
ＪＲ余子駅より徒歩五分

大同寺は、山号を瑠璃光山といい曹洞宗に属する。本尊は薬師如来である。近世には大堂といった。現在でも堂とか薬師堂といわれることがある。

寺の略縁起によると、もとは大同元年（八〇六）に、飛騨の匠が建立した七堂伽藍のある真言宗の寺院だった。幾度も火災に遭ったが、幸い本尊は難から免かれたという。いつ、どんな理由で曹洞宗に転宗したかはわからない。

この寺には毎年一月九日に行なわれる「おこない」と称する行事が継承されている。これは密教寺院で行なわれる豊饒祈願の修正会・修二会の名残りと考えられる。当寺の前身、真言寺院時代の遺習と推定される。町内の旧家十五戸が輪番で当屋になり、祭りの前日までに餅米二斗で直径八〇センチの大餅四個などをつき、その餅に薬師如来の尊号を墨書し、割木を十文字にして餅を結び、当屋から寺に運ぶ。それを仏前の柱四本に懸け供え、大般若経を転読する。また、参詣する際に、二歳児の男児は護摩木を背負い、女児は白紙を懐中に入れ、これらを供物として供え、後に木は大火鉢で焚き、白紙は薬師如来の尊号を書いて、十五等分された大餅に付けて十五戸に配られる。以前は花の木とうつぎも添えていたという。十五戸に配られた餅は、それぞれの組内・分家筋に細分される。

境内には戦国期にこの地で非業の死を遂げたという亀井能登守の若君と乳母や家臣小磯氏にまつわる話とともに「乳母が松」（若君松もあったが焼失した）「乳母が池」「小磯の社」「亀井六地蔵」がある。また、近世の地元俳人一仙堂蘭石の句碑もある。

本尊は、特に眼病に霊験があるといわれ、信仰されていた。

門脇重稜

門脇重稜は国学者である。文政九年（一八二六）に会見郡渡村（現在の境港市渡町）の日御碕神社神官の家に生まれた。国学を修めるかたわら、儒学者で医師の景山粛に学び、歴史、地誌の研究に目を向けるようになった。

数年かけて研究した『名和氏紀事』は建武の政権に重用された**名和長年**の事蹟を調べた労作である。これが藩主・池田慶徳に認められ、文久三年（一八六三）、鳥取藩士となった。

元治元年（一八六四）、伯耆の地誌編さんを命じられ現地に入って調査を始めた。この調査は維新まで続いた。

明治改元にともなう大嘗会では鳥取藩から**飯田年平**ら三人とともに選ばれ、歌を奉っている。これは当時、歌人として最高の名誉とされていた。明治新政府では教部省の高官となった。

明治五年（一八七二）、在職中に四十七歳で亡くなった。郷里の渡町に墓と顕彰碑がある。

杉谷代水

杉谷代水は、近代文学創成期の一人であり、特に児童文学の担い手として活躍した。

明治七年（一八七四）、現在の境港市に生まれた。父の仕事の関係でしばしば転居し、代水は二歳で松江、九歳で鳥取市に移り住んでいる。本名は虎蔵という。代水の号は鳥取市内を流れる**千代川**にちなんだ。

東京専門学校（現在の早稲田大学）に進学、創作力や研究態度が坪内逍遥に認められたが病気のため中退した。逍遥の力添えにより冨山房に入社し、小・中学校用の『国語読本』を編集した。この教科書は画期的な教科書であるとして評判になり、のちの国定教科書に大きな影響を与えたといわれる。

このころ、早稲田派の詩人としても活躍している。島崎藤村に似た七五調のなだらかな作品が多い。小説や脚本、狂言も書いている。同郷の作曲家、**田村虎蔵**に頼まれて唱歌の作詞もした。六十余編書いた作品の中には、よく知られる『星の界』もある。

「月なきみ空にきらめく光
嗚呼その星影希望のすがた
人智は果なし無窮の遠に
いざ其の星影きはめも行かん」

明治四十四年（一九一一）から雑誌『新日本』の編集に参画するなど活動の幅を広げていったが、病気が再発し大正四年（一九一五）、四十歳で死去。

著書には『学童日誌』『希臘神話』『作文講話及文範』などがある。また、『クオレ』（母を訪ねて三千里）

を翻訳している。

植田正治

植田正治は、独自の写真表現を確立し、日本の写真史に大きな功績を残した。

大正二年（一九一三）、西伯郡境町（現在の境港市）に生まれた。昭和六年（一九三一）、米子写友会に入会し、アマチュア写真家として活動を始めた。同十二年（一九三七）中国地方の写真家たちと中国写真家集団を結成し、ローカル色を強く打ち出す。

昭和十四年（一九三九）の『少女四態』は、砂浜で遊んでいる四人姉妹をオブジェ風に配置した「UEDA-CHO」（植田調）の原点となる作品であり、植田正治はこの演出写真で一気に名声を高めた。平成七年（一九九五）、**大山**のふもとに**植田正治写真美術館**がオープンした。翌年、日本人写真家としては初めて、フランス政府から芸術文化勲章を受賞している。

平成十二年（二〇〇〇）、八十七歳で亡くなった。

西伯町

史跡 法勝寺城跡

西伯郡西伯町鴨部
ＪＲ米子駅よりバス二十五分、法勝寺下車、徒歩七分

中世の古城跡である。現西伯町役場（法勝寺）に川を隔てて隣接する。突き出た丘端を三段に削り、空堀や土塁の遺構が残っている。尾崎城の別名がある。昭和五十四年（一九七九）四月一日、西伯町の史跡に指定された。

この地は、西方は出雲国に接し、南方は五輪峠を越して日野・備中・備後へと通じる。交通の要衝であり、城の歴史も古い。南北朝末期の「明徳の乱」のとき山名満幸が一時在城したといわれる。戦国時代に入ると、山名氏から尼子氏の領となり、戦国末期には毛利氏の支配下となり、幾度か攻防戦が繰り返された城跡である。城跡には古城砦の外郭を示す「戸構」の地名が残る。

城跡や川岸には桜並木が続き、春の開花期には例年**「法勝寺一式飾り」**（町指定民俗文化財）が家々に飾られ、人出でにぎわう。

長田神社社叢

西伯郡西伯町馬場
ＪＲ米子駅よりバス二十五分、法勝寺下車、徒歩十五分

スダジイ、タブノキ、サカキ、クロキ、ウラジロガシにクロガネモチが混じった常緑広葉樹を主とする社叢で、みごとな原始林である。クロガネモチは暖地の植物で、県下では米子、福成、法勝寺をつなぐ線が東限にあたるようである。

昭和三十六年（一九六一）、県の天然記念物に指定された。

一式飾り

西伯郡西伯町法勝寺で四月第二土・日曜日に公開される伝統行事である。陶器・塗物・竹細工などの素材一式（一種類）を使用し、班ごとに干支や芝居の名場面、その年に流行したものを組み立てる。組み立て作業は各班ごとに内密に行われ、かつては、そのできばえでその年の農業の豊作などを占ったともいう。小正月行事であったが、長田神社の春の祭礼に合わせて行われるようになった。

一般的には「つくりもの」と呼ばれるもので、起源・由来とも正確なものは伝わっていないが、江戸時代後期に上方を中心に流行した「見立て」の文化が地方に流入したものと考えられる。宿場町であった法勝寺にふさわしい行事である。

西伯町「祐生出会いの館」

西伯郡西伯町下中谷
ＪＲ米子駅よりバス二〇分、緑水園前下車すぐ

「祐生出会いの館」は、西伯町にある緑水湖畔に建つ郷土玩具と孔版画の博物館である。地元で教員などを務めながら独自の技法で孔版を創作した**板祐生**の作品をはじめ祐生が集めた郷土玩具やポスター、浮世絵など、三万点余りの時代を語る品々や祐生の生涯を展示している。

また、棟方志功や武井武雄など戦中、戦後活躍した活躍した版画家たちが参加した「椿の会」のアルバムが全て収蔵されている。

●開館時間　午前九時～午後五時

●休館日　火曜日、年末年始

●問合せ先　☎０８５９・６６・４７５５

板祐生

板祐生はすぐれた孔版芸術家として、また郷土玩具収集家として知られる。

本名は愈良。明治二十二年（一八八九）、鳥取県会見郡東長田村（現在の西伯郡西伯町）に生まれた。地元の法勝寺高等小学校を卒業したあと十五歳で落合小学校の代用教員を務めた。以来、五十六歳までほとんど山間の学校で教員生活を送った。

そんな生活の中で、身の回りにある切手、包装紙、うちわ、手拭いなど、庶民の日常生活のなかにある雑多なものに心を躍らせ、収集を始めた。特に郷土玩具には力を入れた。

学校で教材をつくるうちにガリ版（孔版）に興味をもった。これをきっかけに、版画にひきつけられ制作するようになった。ろう引きの原紙に鉄筆で文字や絵を書き、これに印刷インクをにじみ出させて刷る軽便な印刷機を用い、昭和十五年ごろ、「切り抜き孔版」という独自の技法を開発した。昭和三十一年（一九五六）、六十八歳で死去。

平成七年（一九九五）、祐生の作品や収集品を集めた**「祐生出会いの館」**が西伯町下中谷に開設された。約千五百点の作品をはじめ、生涯にわたって板が集めた郷土玩具やポスター、うちわなど、約四万点が展示されている。

名所　南さいはく自然休養村

西伯郡西伯町下中谷
ＪＲ米子駅よりバス二〇分、緑水園前下車すぐ

緑と水に親しむ総合的なレクリエーションサイト。平成元年（一九八九）、**日野川**水系法勝寺川をせき止めて賀祥ダムが完成した。ダムの高さ四六メートル、提長一七四メートル、貯水容量七四五万立方メートル、周囲八キロメートルのダム湖が誕生し、ダム湖は緑水湖と名付けられた。湖岸には、花木園やスポーツ広場が九ヶ所設けられ、その後、各種のレクリエーション施設が整備され、農林水産省の自然休養村の指定を受けている。

下中谷地区には、自然休養村の中心的な施設として、宿泊、食事、会議室を備えた「緑水園」が整備された。国道一八〇号を挟んで西側にはバンガロー七棟と研修センター棟を備えた「虹の村」がある。

さらに緑水湖の周辺に、森林公園、フィールドアスレチック、キャンプ場など自然に親しみながら楽しむ施設のほか、バンガローなどの宿泊施設やレストラン、テニスコートや野球場などのスポーツ施設が整備されていて、多目的に利用できる。年間約二〇万人以上の人が訪れている。

平成十三年（二〇〇一）四月には、森林公園内の小高い丘の上に木工や草木染めなどが体験できる体験実習館も設置された。地元出身の孔板画家・**板祐生**の作品を収蔵展示している**「祐生出会いの館」**があり、一見の価値がある。

また、涼風そよぐ緑水湖ではボートに乗ったり釣りができるほか、その湖畔でも一年を通じさまざまなイベントが行われている。

●問合せ先　☎0859・66・5111

賀茂神社

西伯郡西伯町倭
JR米子駅よりバス二十五分、宮前下車

賀茂神社は、別雷命など七神を祀る。京都賀茂神社を勧請し大平山に祀ったと伝えられている。創社された年代は不明である。後に大平山中腹に移され、更に、万治三年（一六六〇）、現在地に再び移された。

戦国期には尼子氏に崇拝され、社領百石の寄進を受けたが、同氏滅亡後は衰えた。

近世になり享保十八年（一七三三）に藩主・池田氏が社領十石を寄進している。

明治～大正時代にかけて近郷小社を合祀した。その中には、かつて猪小路村渡田峠に鎮座し、疱瘡除けの神として藩主も信仰した鷺神社があり、今も境内に祀られている。

伝説

江戸の昔、賀茂神社の石の鳥居を石工屋から運ぶ時のこと。力自慢の石工が相方を神主に頼んだところ、村から出て来た相方は頼りなさそうな男だったので石工はばかにしていた。

二人ははだしで石柱を運び、途中の休けいも杖を立てたままで石を降さずに煙草を吸って休んだ。

運び終わった後にキセルを見ると、石工のキセルには歯型ががっちり付いていたが、村の男のキセルには何も付いてなかったという。

賀祥の鉄仏

「賀祥の鉄仏」は、白山神社に祀られる鉄造聖観音立像、鉄造十一面観音立像の二体と、鉄製光背一面を称し、昭和十七年（一九四二）十二月に国の重要美術品に認定された。

国道一八〇号を米子市から西伯町へ向かい、法勝寺を過ぎて約三キロメートル進むと、鳥取県賀祥ダム管理事務所へ至る。その近くの山麓に、白山神社の社がある。神社といっても本尊は木造十一面観音座像（昭和五十四年四月一日、西伯町指定文化財）を祭り、平安時代の神仏習合の姿を今に伝えている。

この「賀祥」の地名は、平安時代の古い年号「嘉祥」（八四八～八五一）とも書いた。

また、白山神社裏からは経塚や藤原鏡などが出土していることから、ここは**伯耆国**の平安仏教の一拠点であったであろうと推察されている。

仏像の背後には「大壇那藤原泰親、大願主藤原氏女、院主宗賀、大工道覚、元応二庚申四月廿一日」の銘文が書かれている。

元応二年（一三二〇）といえば後醍醐天皇の時代で、泰親はこの地方を支配していた領主であろう。この地方で盛んであった「たたら製鉄」の歴史を伝える仏像である。

現在、鉄仏は西伯町歴史民俗資料館で拝観できる。

金花山

西伯郡西伯町八金

標高三六〇メートルの孤立峰で、金華山ともいう。山腹の斜面は急で、南北に延びた円錐状の山形をもつ。山の主な部分は流紋岩質凝灰角礫岩からなり、南側の山麓は安山岩質凝灰角礫岩からなる。これらは、白亜紀末期の花崗岩を不整合に覆う火山噴出物で、米子市南部に広く分布する新第三紀中新世の石見層群に含まれる。金花山は石見層群の分布南端にあたる。

山頂付近では、巨岩や絶壁など凝灰角礫岩に特有な荒々しい浸食地形が見られ、この景観から金華山全体が町の天然記念物に指定されている。

金花山熊野神社社叢

西伯郡西伯町八金
JR米子駅より車で三十五分、徒歩二〇分

金華山は、凝灰角礫岩の孤立した標高三五七メートルの岩山で、山頂部に熊野神社が祭られている。

社叢は自然性のヒノキやスダジイが疎密な群落をつくり、ネジキ、ナンキンナナカマド、アセビ、ソヨゴ、シャンシャンポなどが生育している。粗悪な土壌環境に加え孤立峰であるため風衝が厳しく、樹木の樹高が低く歪曲した樹形のものが多い。

岩上には希少植物であるムギランが生育し、スダジイ林内には暖地性のクロバイやヤマモモなどが見られる。植物分布上貴重であることから、昭和五十七年（一九八二）四月、金華山熊野神社社叢として県の天然記念物に指定された。また、県の自然

環境保全地域にも指定され、保護されている。

馬佐良（ばさら）の申し上げ

西伯町馬佐良

申し上げは、西伯耆地方に広く分布する、荒神に一年の収穫を感謝申し上げる祭である。なかでも、馬佐良の申し上げは神饌献上や年占など、祭の古い形態を伝えていることから、平成二年（一九九〇）に県の無形民俗文化財に指定されている。

毎年十二月四日、馬佐良集落の各戸は、新稲藁三束と女竹二十数本を持参し、竹には神官の切った荒神幣を差して幣串を作り、藁で注連縄（しめなわ）を作り大蛇を作る。十数メートルに達する蛇体は、一年（十二か月）を意味する十二回のとぐろを巻かせ、神官を先頭に行列を仕立て、荒神さんに運ばれる。神事では、新米で作った甘酒を玉垣内の埋め瓶に入れるが、その際残っていた量で作物の豊凶を占う。

長寿寺・落合神社社叢

西伯郡西伯町法勝寺　ＪＲ米子駅よりバス二十五分、地蔵前下車、徒歩二分

長寿寺、落合神社社叢は、西伯郡西伯町を南北に貫く国道一八〇号を中心にして、東方の**法勝寺城跡**の城山と対比する位置にある。

社叢は尾根の最北端部の、標高五〇～九五メートル付近にスダジイが優占するうっそうと茂る照葉樹林である。

特に、社殿の北側には樹高約二〇メートルに及ぶ近郷にあまり例をみないスダジイがあるほか、尾根の東側斜面全体は里部には珍しい典型的な照葉樹林として昭和六十年（一九八五）六月に県天然記念物に指定された。

なお、社殿後方の尾根北側に、低地での生育が珍しいアカガシの巨木が三本見られ、過去の植生を現在に伝えるものとして貴重である。

金山（かなやま）の三肢（みつまた）エノキ

西伯郡西伯町東上（ひがみ）

生田氏宅の裏にある。エノキはニレ科、古名は工という。従来、榎という字を使うがこれは和字で、夏には木蔭が好まれるので、木に夏を付けたという。漢字の榎は別物である。

ここのエノキは胸高周囲が三・九〇メートルで、高さ一・五メートルのところから三肢に分れている。東方の枝の周囲は二・二メートル、南方は二・五メートル、西方は一・八メートルある。枝は東西に二五・五メートル、南北に二四メートル広がる。

東上集落には古くから「地しめうた」という民謡がある。

こちのよどめ三肢榎
　榎実ならいで金がなる

とある。実際には榎の実はなる。

有数の名木で「とっとりの名木一〇〇選」に選ばれた。

佐伯氏のクロガネモチ

西伯郡西伯町福成　ＪＲ米子駅よりバス十五分、谷川作業所前下車、徒歩二分

佐伯氏の庭には、クロガネモチの巨木がある。クロガネモチは、モチノキ科の暖地性常緑高木で、主に中部地方以南の太平洋側が分布の中心で、**日本海**側では本県の米子市、西伯郡会見町、西伯町を結ぶ線が分布の限界であると考えられる。

この木が自生か植栽されたものか定かではないが、胸高直径九〇センチ、枝張りは東西約一四メートル、南北一六メートル、樹高約一三メートルに達し、これだけに成長した大木は非常に珍しく、昭和三十六年（一九六一）に県の天然記念物に指定された。また、「とっとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

なお、クロガネモチは雌雄別株で、雌株は秋に赤い実をつけ美しいので、街路樹や庭園木に植えられる。この木は残念なことに雄株であるため六月に開花はするが実はできない。

会見町

雲光寺

西伯郡会見町御内谷
ＪＲ米子駅よりバス三〇分、御内谷下車

雲光寺は、山号を金龍山といい、曹洞宗に属し、本尊は聖観世音である。越前龍泉寺（現福井県武生市）や丹波永沢寺（現兵庫県三田市）を開いた通幻寂霊の弟子・天真自性によって、明徳年間（一三九〇～九四）に開かれた。当初は丹波永沢寺の末寺であったと伝えられる。その後、定光寺（現倉吉市）の俊鷹道青和尚を迎えて中興開山し（『伯耆志』）、以後、定光寺の末寺となった。

戦国期、尼子氏や南条氏が当寺に帰依した。

当寺には、足利義満（「鹿苑院殿天山義公大禅定門」）と、小野小町（「誠清院殿霊顕妙照大禅尼」）のものと伝えられている位牌がある。

本堂横にある観音堂は、伯耆札の一番で、堂の縁日（八月十七日）には、ここで盆踊・**小松谷踊**が踊られる。

小松谷盆踊

西伯郡会見町の中央を流れる小松谷川沿いの市山・御内谷・井上・高姫ほかの集落で踊られる盆踊り。

江戸時代末頃から各集落の辻などで踊られていた。踊りには「小松谷盆踊」と「バンバ踊り」の二種類ある。踊りの起源は、金田集落にあった小松谷城で盆の十七夜に城内あげて無礼講の盆踊りが催されたという説と、御内谷集落にある**雲光寺**で本尊聖観音の縁日の十七夜に念仏踊りをしたのが始まり、という二説ある。

平成七年（一九九五）に県の無形民俗文化財に指定されている。

赤猪岩神社

会見町寺内
ＪＲ米子駅より車で二〇分

『古事記』によると、因幡の八上姫を大国主命に奪われた兄の八十神が、弟・大国主命に『赤い猪がこの山（手間山）にいる。そのため、我々は上から追って下るので、おまえは下で待っていて討ち取れ。もし討ち取らなかった場合はおまえを殺す。』と言って、赤い猪に似せて大石を焼き、転落させた。そして、大国主命はその石を抱えて死んだとある。

赤猪岩神社はその大国主命受難の地にあり、神社名もこの神話に由来する。古くは手間山（標高三二九メートル）山頂にあった。赤磐権現（赤猪とも）といい、大国主命他三神を祭神とする。明治元年（一八六八）に赤猪神社となり、大正十一年（一九二二）に現在地に移された。その際に、以前から遷座地にあった久清神社と合祀されて赤猪岩神社となった。境内には八十神が赤猪と偽って落としたという大岩（赤猪岩）が残っている。

なお、近くの西伯町清水川には、この焼石によって死んだ大国主命を蘇生させたという清水井がある。また、米子市大袋は大国主命が肩にかけていた大きな袋を置いた所と伝えられている。

史跡 三崎殿山古墳

西伯郡会見町三崎
ＪＲ米子駅よりバス十五分、丘陵上まで徒歩一〇分

通称「殿山」（標高八三メートル）と呼ばれる独立丘陵の頂部に築かれた前方後円墳。この丘陵はさほど大きいものではないが、本古墳の他にも小円墳などが二十基あり、これらを一括して「三崎古墳群」と呼ぶ。そのうちの十号墳が「殿山古墳」である。全体の長さが約一〇八メートル、後円部が約五八メートル、高さ約八メートル、前方部の幅約三五メートル、高さ約六メートルあり、西伯耆では最大の大きさである。

古墳時代中期（五世紀）の築造と考えられており、この時期に当地が有力豪族の拠点となっていたことを物語っている。この付近には、安来市の大成古墳出土の鏡と同型の「三角縁神獣鏡」が出た普段寺二号墳や、『古事記』の大国主命が兄神たちによって大火傷を負わされたという伝説を伝える**赤猪岩神社**など、古代に係わる遺跡が多い。

県立フラワーパーク とっとり花回廊

西伯郡会見町鶴田
JR伯耆溝口駅より車で五分

平成十一年（一九九九）四月にオープンした国内最大級のフラワーパーク。総面積八〇ヘクタールという広大な園内には直径五〇メートル、高さ二一メートルの円形ガラスのフラワードームをはじめ、一周一キロメートルの展望回廊、五大陸展示花壇などがある。

四季折々にさまざまな花に彩られるワイルドフラワーの丘の背後には、秀峰大山の美しい姿を望むことができる。

●開館時間
四～十一月　午前九時～午後五時
十二～三月　午前九時～午後四時三〇分
●休園日　四～十一月　無休
十二月～三月　毎週火曜日、年末
※祝日の場合は翌日
●問合せ先　☎〇八五九・四八・三〇三〇

物産

特産センター「野の花」

西伯郡会見町鶴田
JR米子駅よりバス二十五分、花回廊下車

県立フラワーパークとっとり花回廊の中にある物産館。花回廊がまたがる会見町、溝口町、岸本町が出資し第三セクターによって運営されている。三町の特産品や民工芸品をはじめ新鮮な農産物などが販売されている。

●開館時間　午前九時三〇分～午後五時
●休館日　四月～一一月無休、それ以外の期間は毎週火曜日
●問合せ先　☎〇八五九・四八・三〇八七

水無月（みなづき）さん

水無月晦日に近い日に、各地の神社・神道系教会では鳥居にチガヤで編んだ輪を取り付ける。この茅の輪をくぐると厄を除け、無病息災で暮らせるといわれる。事前に流しびなと同義の人形（ひとがた）を配り、氏子が身体をなでたものを茅の輪とともに川や海に流してしまうところもある。「輪くぐりさん」とも呼ばれる。

八幡神社（米子市八幡）、天萬神社（会見町天万）などでは、境内に露店が並び、花火や余興も盛りだくさんに行われる、にぎやかな夏祭りである。

岸本町

史跡

大寺廃寺（おおてらはいじ）

西伯郡岸本町大殿
JR岸本駅より徒歩十五分

白鳳時代創建の寺院跡。この地は、『和名抄（わみょうしょう）』に記された会見郡巨勢郷に当たると推定される。この寺跡は、大正十八年（一九一八）足立正による「石製鴟尾（しび）」の発見をきっかけに、塔（とう）の心礎（しんそ）を調査する課程で明らかとなった。

この寺の伽藍（がらん）配置は、北に塔、南に金堂を並列させ、その背後に講堂を建て、回廊が塔・金堂を囲み、講堂につながる形態をとっている。寺跡からは、この寺院が平安時代（九世紀）まで存続していたことを示す各種瓦（軒丸瓦・軒平瓦・一般の瓦）類や塑像残欠（粘土を焼いて作った像）などが出土した。また塔跡は、町の史跡に指定され、心礎が国道一八一号の道路脇に保存・公開されている。この寺院の屋根を飾っていた石製鴟尾は、高さ約一メートル、幅四五センチで鰭が十段表現されている。白鳳時代のものと考えられる。

鴟尾とは海中の魚で水を吹いて火

を消すという伝説から、寺院などの屋根に取り付けたという。瓦製のものが一般的で、石製のものは群馬県の山王廃寺のものが知られているのみである。

昭和三十四年（一九五九）に国の重要文化財に指定された。現在は、国道一八一号から五〇メートルほど入った**福樹寺**境内に保存されていて、いつでも見学できる。

福樹寺（ふくじゅ）

西伯郡岸本町大殿
ＪＲ岸本駅より徒歩一〇分

大寺廃寺で発見された石製鴟尾（しび）が境内にある。鴟尾は瓦製がほとんどで石製は珍しい。国の重要文化財に指定されている。

越敷山（こしきやま）

西伯郡会見町・岸本町
米子駅より車で三〇分

日野川左岸の西伯郡会見町と岸本町の境界に位置する標高二二六メートルの山。越敷山は、越敷野あるいは越敷原と呼ばれる、玄武岩溶岩流のつくる台地の上にある。台地面からの比高は三〇メートルほどで、かなり風化が進んでいるが、本来は丸いドーム状の山容であったと考えられる。台地上には越敷山と、越敷山によく似た高塚山（三〇一メートル）、その二つに挟まれた二七〇・五メートルの三角点を持つ山がある。これらは、最近の調査・研究により、いずれもかつての噴火口の周囲にスコリアが降り積もってできたスコリア丘であることが明らかになった。台地をつくる玄武岩もこれらの噴火口から流出したもので、その時代は約百万年前である。越敷山の山頂部や台地の表面は、日野川をはさんだ東隣の大山火山から飛来した約十三万年前の降下軽石層によって覆われている。

平成十一年（一九九九）、高塚山の北に国内最大級といわれるフラワーパーク**「とっとり花回廊」**がオープンし、多くの観光客が集まるようになった。

伝説

平安時代の女流歌人で、絶世の美女と言われた小野小町の墓といわれる五輪塔がある。この五輪塔の一番目と二番目の石をこすりあわせてできた白い石粉を顔に塗れば美人になるという言い伝えがある。

植田正治写真美術館（うえだしょうじ）

西伯郡岸本町須村
ＪＲ岸本駅下車よりバス一〇分、美術館前下車すぐ

国内はもちろん海外でも情景写真家として高い評価を受けている**植田正治**の作品を展示する美術館として平成七年（一九九五）に造られた。

植田正治が独自の視点と感性で七十余年にわたり制作した膨大な遺作が収蔵されている。

建物外観は打ち放しコンクリートの斬新なデザインに特色がある。植田正治の代表的な写真「少女四態」をイメージして造られたとも言われている美術館の姿が印象的である。また、**大山**（だいせん）の雄大な姿によく溶け込みながら、新たな風景を作り出し、平成八年（一九九六）に鳥取県景観大賞に選定された。

また、大山山麓にある福岡堤は「逆さ大山」が映る池として多くの写真家・画家から親しまれているが、福岡堤の縁にあるこの美術館でも、各展示棟の間から望む水面には逆さ大山がみごとに再現されている。

●開館時間　午前九時～午後五時
※入館は午後四時三〇分まで
●休館日　毎週火曜日（祝日の場合は翌日）
●問合せ先　☎〇八五九・三九・八〇〇〇

植田正治美術館より大山を望む

大山ペンション村（だいせん）

西伯郡岸本町小林・真野

昭和四十五年（一九七〇）、群馬県草津に登場したペンションは全国に広がり、ペンション村も各地造られた。大山ペンション村は西日本で最初のペンション村として昭和五十一年（一九七六）に誕生した。オーナーの中には、**大山**の豊かな自然に魅せられて県外からやってきた人も少なくない。

開発当初、なかなか増えなかったペンションも、今ではレタス通り、トマト通り、ポテト通りと三つのブ

ロックが整い、併せて三十軒近くが林の中に点在している。また、建物も洋風のものから和風のものまで多様である。

ここでは、自動販売器の設置や看板などが自粛され、住民の景観づくりへ相互協調が図られている。四季の花が庭先を美しく彩り、個性的でメルヘンチックな景観を演出している。

物産 大山ガーデンプレイス

西伯郡岸本町丸山
JR岸本駅より車で五分

日本海と大山を一望できる絶好の場所に位置する。観光案内所、特産品販売店、生鮮野菜等直販店、レストランなどが揃い、旅する人に便利な施設である。

お土産コーナーでは山陰の土産が取り扱われているほか、「マルシエ岸本」には、地元岸本町の特産品や、近隣の農家から採れたての新鮮な野菜や加工品が並ぶ。

また、アグリスペースでは、もち、ジャム、ソース、おこわなど地元の豊かな食材を活かした食品の加工・販売を行っている。このほか鳥取和牛を味わうことのできるバーベキューハウスもある。

●開館時間（売店）午前九時～午後六時
●休館日　水曜日（祝日の場合はその翌日）
●問合せ先　☎〇八五九・三九・八一一一

物産 大山まきばみるくの里

西伯郡岸本町小林水無原
JR岸本駅より車で二〇分

背後に大山がそびえ、前方には緑の牧草地が広がる。牧歌的な景色の中に、平成十年（一九九八）四月にオープンした。

四ヘクタールの敷地内には、アイスクリームづくりなどが体験できるミルク工房や搾乳体験のできる牛舎がある。地元の乳業協同組合が運営するこの施設では、乳製品や牛肉をふんだんに味わえるレストハウスや物産販売所がある。

●開館時間　午前一〇時～午後五時
　※夏休み期間中は午後九時まで
●休館日　十二月上旬～三月下旬の間
●問合せ先　☎〇八五九・五二・三六九八

赤岩神社

西伯郡岸本町上細見
JR岸本駅よりバス一〇分、上細見下車、徒歩一〇分

赤岩神社は、岸本町上細見集落北方百メートルの山腹にある赤色の大岩の下に鎮座する。『伯耆志』によるとこの岩が社名の由来といわれ、この大岩は、古代の磐座信仰に関わるものと考えられる。天津彦火瓊々杵命、大山祇命などを祭神とする。

その昔は町内吉定の字天津社（数多社とも）にあったが、いつの頃か現在地に移されたという。

江戸時代には赤岩権現といって信仰された。また、昔から大神山神社（現米子市尾高）の摂社であった（『鳥取県神社誌』）。明治元年（一八六八）に赤岩神社に改称された。

昭和十六年（一九四一）頃までは祭日（十月十五日）に、境内で宮相撲が開かれた。今は七月十五日に子ども花相撲が行なわれている。

善福寺

岸本町久古
JR岸本駅よりバス五分、久古下車すぐ

山号を松寿山（その昔は満滝山）といい、曹洞宗に属し本尊は聖観音である。かつては天台宗であったが、慶長年間（一五九六～一六一五）に米子総泉寺九世玄龍和尚を招き開山とし、同時に曹洞宗に宗旨を改めた。

宝永五年（一七〇八）に現在地に寺を移した。旧寺跡がどこであったかは不明である。寛政五年（一七九三）に伯耆一国を勧化して寄附を集め寺は修復された。そのとき寄進された大般若経二百軸が今も残っている。

寺には、宝永五年（一七〇八）に鳥取藩絵師・狩野清信が描いた「涅槃図」や、寛政六年（一七九四）制作の「拾六善神画像」、文化十二年（一八一五）制作の「羅漢図」が所蔵されている。

また、境内にある観音堂は日野郡札所の第二十番札所になっている。

日吉津村

蚊屋島神社

日吉津村日吉津
ＪＲ米子駅よりバス約二〇分、富吉入口下車、徒歩一〇分

天照皇大神、高比売命などを祭神とする。ここには三野御厨があったことから伊勢神宮を勧請した神社ともいわれ、近世には伊勢大神宮・天照皇大社などと呼ばれた。祭神高比売命が出雲系の神であるところから、かつて出雲系の神を祀る神社と伊勢神宮の勧請社が、この地で別々に祀られていたのを合祀してできたとの説もある。中世から近世にかけてここを治めた武将・藩主にも深く信奉されている。

明治元年（一八六八）に現社名に改められ、大正期、近郷の諸社を合祀した。

社家は、弓を射ること、雉肉を食べることが禁じられていた。これは祭神高比売命の夫・天稚彦が、天の神の使いである雉を弓で射落して殺し、自らもその矢に当たって死んだ（『日本書紀』）という神話によるといわれる。

また、氏子は鹿肉を食べることを禁じられていた。それは鹿が害虫から社や人々を守っているという言い伝えに起因する。昔から、鹿がどこからともなく神社にやって来ては、参詣する前に海に入って垢離をとっていた。参拝した鹿は宮司から供物をいただいて途中まで送られて帰った。その甲斐あってか、神社にも人にも毒虫の害がなかったと、『伯耆民談記』には記されている。

春と秋に盛大に例祭が行われる。

淀江町

淀江港

西伯郡淀江町淀江

国道九号沿いの家並み一筋北に漁港がある。**上淀廃寺**や**妻木晩田遺跡**で著名な淀江町であるが、元は伯耆街道の宿場として、また隠岐の島との往来で重要な港町だった。現在も、今津地区から淀江地区にかけて、町中の旧道に街道の面影が残る。

江戸時代から藩米の廻送を受け持った港の一つであり、**日本海**沿岸の港との行き来も盛んであった。とくに、**大山**の博労市（牛馬市）へ送る隠岐牛の陸揚げ港として知られていた。

文久三年（一八六三）には、松波徹翁父子の尽力により農兵百名が組織され、淀江台場が築かれた。砲三門に始まり、後に八門に増やされた。今も淀江港の東側、今津地区に台場跡が残り国の指定史跡である。公園となっている。

明治期以後、漁港としての役割が大きくなった。「夫婦船」といわれる小舟の漁が中心であり、そのため防波堤が本格的に築かれたのは、昭和に入ってからである。昭和七年（一九三二）に始まる築堤は「沖一文字防波堤」と呼ばれ、その後、昭和五十二年（一九七七）まで続けられ、今の港の形が出来上がった。刺し網漁が主で、ブリ、カタクチイワシ、アジ、タイさらにメバルの水揚げが多い。

伯耆古代の丘公園

西伯郡淀江町福岡
ＪＲ淀江駅より徒歩二〇分

国内最大級の彩色仏教壁画が出土した**上淀廃寺跡**や、多くの古墳に囲まれた所に位置する公園。約九・八ヘクタールの敷地内には、推定二千年前といわれる大賀ハスなど約四十種類の古代ハスが美しく咲きそろう「古代ハスの園」をはじめ、火おこしや土器、埴輪、土笛づくりが体験できる「古代体験の館」などがあり、古代人の生活や文化を知ることができる。

また、古墳や竪穴住居、高床建物が復元され、高さ一五メートルの高床建物からは**日本海**や淀江平野が一望できる。

●開園時間　午前九時三〇分～午後五時
※入園は午後四時三〇分まで

●休園日　第二・四水曜日（祝日の場合はその翌日）
●問合せ先　☎〇八五九・五六・六八一七

物産館「白鳳の里」

西伯郡淀江町福岡
ＪＲ淀江駅から徒歩十五分

「白鳳の里」は、平成七年（一九九五）四月に開設された。名水百選にも選ばれた「天の真名井」を用いて作られた豆腐や特産物となったどんぐりを用いた製品などを販売を行う物産館とこれらの食材を用いた食事処からなる「どんぐり館」がある。

周辺には**妻木晩田遺跡**などもあり、弥生の里にふさわしく、古代米（黒米）を用いた「古代食」と呼ばれる珍しい料理も供されている。また、平成十二年（二〇〇〇）八月には、アルカリ性単純泉の温泉「ゆめ温泉」が併設された。

●開館時間
どんぐり館：午前一〇時～午後六時
ゆめ温泉：午前九時～午後一〇時
※入館は午後九時まで
●休館日　どんぐり館　無休
ゆめ温泉　第四水曜日（祝日の場合はその翌日）
●問合せ先　☎〇八五九・五六・六七九八
ゆめ温泉　☎〇八五九・五六・六八〇一

史跡 向山古墳群

西伯郡淀江町福岡
ＪＲ淀江駅より徒歩二〇分

「向山丘陵」とよばれる小高い丘と、それに接する丘陵にある古墳群。ここには、前方後円墳九、円墳四、方墳二のほか計十七基の古墳があり、山陰一の古墳密集地となっている。これらの古墳は、五世紀後半から六世紀後半に至る百年という短期間に築かれた首長墓（有力者の墓）である。五世紀代に中型の古墳が築造されていたが、六世紀代には大型化している。それは、小首長から、一躍郡領域程度の地域を統括する首長へと発展したことを示している。

「岩屋古墳」が昭和七年（一九三二）に国の史跡として指定され、**「石馬」**が昭和十年（一九三五）に国の重要美術品、ついで昭和三十四年（一九五九）には重要文化財に指定された。近年の調査、研究によって向山古墳群全体（向山古墳群、瓶山古墳群、石馬谷古墳）をまとめて、「向山古墳群」として平成十一年（一九九九）に国の史跡に指定された。

①岩屋古墳（向山一号墳）

古墳群の最も北に位置する。六世紀の終わりごろに築かれた全長五二メートルの前方後円墳。後円部南側に切石造りの横穴式石室が開いており、外から内部を見ることができる。石棺式石室といわれる石室の内部は、天井と三方向の壁面が、それぞれ一枚の板石で造られ、赤色顔料が塗ってあった。

②長者ヶ平古墳（向山五号墳）

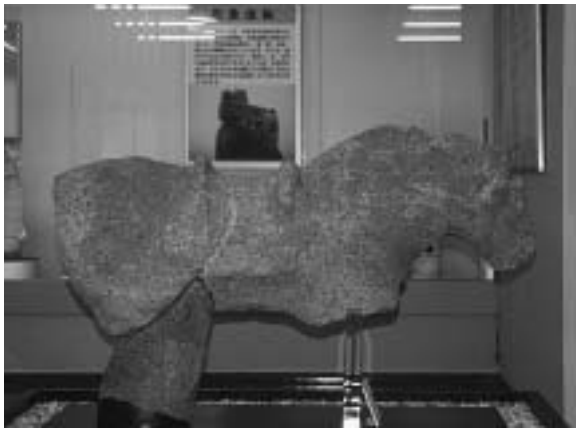
古墳群の最も南に位置し、六世紀の中頃に作られた全長四八メートルの前方後円墳。後円部東側には、全長約一〇メートルの県内最大の横穴式石室が開口している。石室は岩屋古墳のような切石造りではなく、多数の石を組み合わせてある。この石室の東側にかつて箱式石棺があり、中から金銅製の冠、装飾付太刀、須恵器、鉄鏃などの副葬品が出土した。これらは大陸との交流をうかがわせる貴重な資料で、現在、東京大学の資料館に収蔵され公開されている。

③石馬谷古墳

向山丘陵から道路を隔てた小枝山丘麓に位置し、小枝山五号墳とも呼ばれる。全長約六一メートルの前方後円墳。墳丘は二段になっており、墳丘全体に石が敷き詰められていた。六世紀の中頃に築かれたと考えられる。有名な「石馬」は、この古墳に立てられていたという。

④石馬

角閃石安山岩を彫って作られた体長約一五〇センチ、高さ約九〇センチの石製の馬。前足を欠いているが、馬の特徴をよくとらえており、手綱や鞍などの馬具も細かく表現されている優品である。石馬は北部九州には数例あるが、本州では唯一の出土品である。**淀江町立歴史民俗資料館**に常設展示されている。



淀江町歴史民俗資料館

西伯郡淀江町福岡
ＪＲ淀江駅より徒歩二〇分

淀江町歴史民俗資料館は、**上淀廃寺**や**妻木晩田遺跡**など豊富な遺跡に囲まれた所に、昭和六〇年（一九八五）九月に開館した。国指定の重要文化財**「石馬」**や上淀廃寺から出土した白鳳時代の日本最古の壁画などが展示されている。また、角田遺跡から出土した弥生時代の壺形土器には絵画が線刻されており、佐賀県の吉野ヶ里遺跡の物見櫓復元のもとになった。当時のくらしや大陸との交流をうかがわせる貴重な資料が、時代を追いながらわかりやすく展示されている。

●開館時間　午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）
●休館日　水曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始
●問合せ先　☎０８５９・５６・３３１６

上淀廃寺跡

西伯郡淀江町福岡
ＪＲ淀江駅より徒歩二〇分

白鳳時代の寺院跡。平成三年（一九九一）の発掘調査によって、彩色壁画が発見され一躍全国的な注目を浴びた。

この寺院が創建されたのは、「癸未年」という文字を刻んだ瓦が出土したことから、白鳳時代（六八三年＝天武十二年）頃と考えられている。伽藍配置は、西に金堂、東に南北三塔を配する、他に例のないものである。北塔は基壇が確認できず、計画だけで実際には建てなかった可能性もある。中塔の心礎を根石の位置へ戻すと、三塔の心礎が一直線に等間隔で並ぶことからも、計画があったと考えられる。このように三塔を建立する例は奈良時代以前の国内には例がなく、南北に並ぶ例は朝鮮半島にもない。講堂跡は確認されなかったが、残っている礎石の位置から金堂の南西に立地していたと推定される。中心となる金堂・中塔・南塔の基壇は二重に作られ、瓦積の周囲には石列が築かれている。このような方法は、三国時代（新羅・高句麗・百済）にも見られ、寺の建築に百済の影響を受けていることがわかる。この中心伽藍は南側が回廊、東側が築地によって区画され中門跡も発見されている。

また金堂周辺を中心に、寺院壁画片が五千三百九十四点など出土した。壁画片には、「菩薩」や「天衣」「神将」「遠景樹木」などが描かれており、彩色が施されていた。国内で白鳳期の寺院壁画は唯一、法隆寺金堂壁画（火災で焼失し現存しない）が知られているのみで、考古学、美術史において極めて重要な発見となった。

現在、壁画は**淀江町立歴史民俗資料館**に展示されている。上淀廃寺跡は平成八年三月、国の史跡に指定されている。

八朔祭

西伯郡淀江町福岡

八朔とは八月朔日のことで、農村では田の水を落とす、案山子を作って立てる、この日から昼寝がなくなって夜なべが始まるなど、農繁期の始まりであった。

儀礼的なものとして、滝の祭り、鳥追いや虫送り、綱引きや相撲、早稲の初穂や粟もちや桃の実を神に供えることなどが行われる。鳥追いや虫送りは、稲が無事に成熟することを祈る儀礼であり、綱引きや相撲は、作物の豊凶を占うものと考えられる。初穂を供えるのは実りを神に感謝する行為であり、粟もちは節句に作られるお供えもち、桃はその形から豊かさの象徴であるとか、神話にあるように邪気を払う力があると考えられる。豊作を祈ったり、食べることによって力を得ようとする行為と考えられる。

淀江町福岡では、毎年の八朔に、集落の荒神さんに収穫を感謝する儀礼がある。長さ五〇メートル以上の藁蛇を作り、荒神の周りを回した後、蛇の胴体にあたる部分を使って集落内の小路で綱引きをする。また、亥の年には遷宮とどぶろくの奉納が行なわれる。

史跡 妻木晩田遺跡

西伯郡淀江・大山町
ＪＲ淀江駅から車で五分

妻木晩田遺跡は、西伯郡大山町と淀江町にまたがる。弥生時代の中期

末から古墳時代まで継続した、総面積約一五二ヘクタールの大規模な遺跡である。

この遺跡は七地区からなり、各地区はそれぞれ特色がある。

居住区域とされるのは、「松尾頭地区」「妻木山地区」「妻木新山地区」、首長墓区域は、大・中・小のさまざまな四隅突出型墳丘墓が出土して注目された「洞ノ原地区」「仙谷地区」「松尾頭地区」、環壕区域である「洞ノ原地区」は丘陵先端部にある。調査によって確認された遺構の総数は、縄文時代の落とし穴七百十二、弥生時代各期の竪穴住居跡三百八十四棟、同じく掘立柱建物跡五百二棟、

貯蔵穴百四十一、弥生時代後期の墳丘墓三十二基、四世紀～七世紀の古墳三十二基である。

これらは、弥生時代後期を中心に造られ、中期まで丘陵下に居を構えていた弥生人が、まとまって丘陵上に、「クニ」ともいえる大規模な集落を形成したのである。ちなみに、同じ弥生時代の大集落「吉野ケ里遺跡」（佐賀県所在）と比べると、面積は約一・三倍で、国内最大規模の弥生遺跡である。

そして、まるで「都市計画」のように、「墳丘墓」「首長の居住区域」「防護施設（環壕）」などの各区域がそれぞれの役割をもち、かつ有機的につながって一つの拠点集落（クニ）を形成していた。この標高一〇〇メートル前後の高地に、弥生時代後期の約三百年間にわたって、拠点集落（クニ）が存続していたことは大変重要である。山陰のこの時期の歴史、ひいては全国的な社会のあり方を知る上で貴重な存在であるといえよう。

また、この遺跡から出土した遺物は、各種土器、石包丁、石斧、石錘などの石器、鉄鏃、鉄斧、ヤリガンナ、鋤先、鍬の刃、紡錘車など約二百点の鉄器が出土した。とくに鉄器が大量に出土している点では、同じ弥生時代の**「青谷上寺地遺跡」**出土品とともに多くの注目を集めている。

この遺跡周辺は、鳥取県のリゾート開発計画の中で、「ゴルフ場」の対象に選ばれていた。開発に先立つ発掘調査によって大規模な遺跡であることが判明し、市民を巻き込んだ保存運動が起こり、遺跡の保存か開発かで、全国的な注目を浴びた。最終的に保存が決まり、平成十一年（一九九九）に国の史跡に指定された。

現在、遺跡には展示室や体験学習室、広場、復元建物（住居、倉庫）などが整備されている。

伝　説

淀江町と大山町との境にある孝霊（高麗）山には、大山との山比べの伝説がある。

昔、韓の国の神様が日本の山と山比べをしようと韓山を船に乗せてやってきたところ、大山の姿が見えた。神様は大山にはかなわないと思い、山を置いて帰ってしまった。

この山は韓の国にちなみ高麗山と呼ばれた。

天の真名井

西伯郡淀江町高井谷
ＪＲ淀江駅より車で一〇分

大山の北西麓にある湧水。昭和六十一年（一九八六）、環境庁により国の「名水百選」として選定された。新生代鮮新世の安山岩の亀裂から湧出し、古来より清浄で水質も優れていることから、この名が付けられた。

代表的な大山山麓の湧水として、多くの人々に知られている。幅一五メートル、奥行き五メートルの湧出池は、古くから地域の人に利用され、大切に管理されている。湧水量は一日に二、五〇〇立方メートルである。

本宮の泉

西伯郡淀江町本宮
ＪＲ米子駅より大山寺行バス二〇分、徒歩一〇分

天の真名井と同様に、**大山**北西麓の新生代鮮新世の安山岩に生じた亀

裂から湧水する。湧水量は一日に三〇、〇〇〇立方メートルで、水質も優れ、古くから生活用水、灌漑用水として利用されてきた。

昭和六十年（一九八五）六月、「因伯の名水」として県の指定を受けた。水源一帯は、珍しい亜熱帯性のクリハラン等が群生し、ニジマスやアマゴの養殖に利用されている。

物産 どんぐり村

西伯郡淀江町本宮
ＪＲ淀江駅より車で十五分

山小屋風の外観の建物には、レストランと特産物販売所が設置されている。また、すぐそばに「因伯の名水」の一つと知られる**「本宮の泉」**がある。レストランでは、淀江町の特産物であるどんぐりを使ったうどんやそばなどが味わえる。

また、午前一〇時から午後四時まで、地元の取れたて野菜や果物などが並ぶ「ときめき市」が開かれ、利用者は町内外を問わず多い。

●開館時間　午前一〇時～午後四時
●休館日　木曜日
●問合せ先　☎０８５９・２７・６０９８

小波城跡

西伯郡淀江町小波
ＪＲ淀江駅より車で十五分

三輪神社の南方にあった城跡と伝えられる。小波城は、鎌倉時代に幕府の西伯耆の行政上の重要な位置を占めた城であった。壺瓶山の南につづく丘陵三輪山の西にあり、字名「大名屋敷」の地であったと伝えられている。

小波城の名は、鎌倉末期の元弘三年（一三三三）、隠岐国を脱出した後醍醐天皇を奉じて、**名和長年**が**船上山**で挙兵したときの古戦場として知られている。

幕府の将佐々木清高は大軍をもって船上山を攻めたが敗れ、ここ小波城へ退いた。しかし、追撃してきた名和勢のために城を焼打ちにされ、近くの港から船で脱出したといわれている。

三輪神社の横には、周辺から出土したその時代の様式を伝える古式の五輪塔・宝篋印塔等が多く保存されている。訪れる人に、鎌倉時代の歴史を動かした激動の出来事を語りかけてくる。

伝説

昔、淀江山にオサンという狐がいた。そして、上万（大山町）にはオサイ、戸上（米子市）には藤内という狐がいて当地三狐として有名だった。

ある時オサン狐が人に憑いて「オサイも藤内も祠に祀られている。自分も祠に祀ってもらいたい」と言った。そこで、精明寺が管理する津野橋畔に小祠を造り祀った。後にまたお告げがあり、精明寺の裏に一尺四方の祠を建てて祀ったという。

日吉神社

西伯郡淀江町西原
ＪＲ淀江駅より車で五分

日吉神社は、大己貴命・天乃佐奈咲神など十三神を祭神とする古社である。創建年代は不明である。

『日本三代実録』の貞観十六年（八七四）の条に、「伯耆国天乃佐奈咲神、正六位上から従五位下に進階」と記載されているのは当社のことと思われ、かつては天乃佐奈咲神の神社であったと考えられる。その後、宇多河庄の鎮守として山王権現を勧請したといわれる。戦国期、神社は兵火で焼失した。しかし、この神社の縁起には、その頃、京からここに来ていた足利義政の庶子、谷若狭守成安によって再建されたと記されている。藩政期には、藩主・池田光政が参拝し、多くの物を奉納したと伝えられる。現在の精明寺が、かつてこの神の神宮寺であったといわれる。

明治五年（一八七二）、現社名に改称された。

祭日（五月三日）には山車・神輿を中心に氏子二百余人が参加する御幸行列「よいとまかせ」が行われる。この行列道具が頭に触れた氏子は長命になるとか、賢くなるといわれており、ご利益にあずかろうと行列に頭をさし出す者が絶えない。伝承ではこの御幸は寛永年間（一六二四～一六四四）から始まったといわれ、町の無形民俗文化財に指定されている。

神社境内にある佐奈咲池の水で心汚れた者が口をすすぐと、たちまち濁水に変わるといわれる。また、冬、この池に張る氷の状態をみて、その年の気候や五穀の豊凶を占ったといわれる。

三輪神社

西伯郡淀江町小波
ＪＲ淀江駅より車で一〇分

大物主命ほか二神を祭神とし、崇神天皇の時に国家鎮護の神として、大和国大神神社（現奈良県桜井市）から勧請したと伝承されている。かっては三輪山東方にあり、広さは東西八町、南北六町余りといわれる。東を「神社のある宮広峰」、中を「大鳥居のある鳥居峰」、西を「薬師寺と称する神宮寺のある堂の峰」と称したという。貞観十五年（八七三）に、正六位上から従五位下に進階した「伯耆国三輪神」（『日本三代実録』）は当社のことと想像される。

社殿は、元弘三年（一三三三）の小波城落城のときと大永四年（一五二四）の五月崩れの時などに焼かれ、その度に衰退していったが、近世に入り藩主・池田氏より社領二石六斗を安堵された。正保二年（一六四五）に現在地に遷座、新築され、地元福田庄大社（後には中間庄大社）と称せられた。

当社では古来から、春祭りに狼神事、秋祭りに大注連神事、御酒献上神事が継承されているといわれる。

淀江さんこ節

さんこ節は、安来節の原形ともいわれ、鳥取、淀江、境港など県内の港町に点在する。由来については、境港に住んでいた「さん子」という女性が船乗りから習った佐渡おけさを改良して作ったとか、江戸で流行った「三鼓節」が出雲地方に移入して「出雲節」となり、以後山陰地方に広まったという説がある。

淀江さんこ節には、踊り手が左官に扮し、さんこ節と三味線の伴奏に合わせて土練りと壁付けの所作を演じるユーモラスな仕草踊りもある。昭和五十三年（一九七八）、町の無形民俗文化財に指定されている。

サイノカミ信仰

サイノカミ（道祖神）信仰は、因幡・伯耆両国とも存在するが、因幡では境界の神、旅の安全を祈る神であるのに対し、伯耆地方、特に**大山**の北西方向の裾野では、縁結びの神としての信仰が顕著である。

御神体は、因幡地方で樹木や祠、五輪塔などであるのに対し、西伯耆地方では、集落ごとに石造物がほぼ存在する。いずれも江戸時代後半から明治・大正期に作られたもので、「道祖神」・「妻神」などと刻字されたものから、男女二柱の神像が彫られているものまで多数見られる。淀江町亀甲や大山町末吉には、十基近くのサイノカミ像があるが、これはかつて青年団でお互いに盗み合う習慣があったためである。

現在でも「サイノカミさん」と呼ばれる祭が、十二月十五日に、中山町、名和町、大山町、淀江町で行われる。御神体の注連縄を掛け替え、長草鞋や大足半、藁馬を供えるのは各地域共通であるが、中山町では、男女の性器を象った藁細工を供えるという特色がある。

松原岩五郎

松原岩五郎は、日本最初のルポルタージュ作家である。

慶応二年（一八六六）、現在の西伯郡淀江町に生まれた。十五歳のとき大阪へ出、二年後に上京した。いろいろな職業につきながら、夜塾で勉強した。

明治二十五年（一八九二）、徳富蘇峰の国民新聞社に入社し、下層社会で生きる人たちの姿を克明に記した探訪記事を連載した。翌年『最暗黒之東京』を出版、明治三十年（一八九七）には足尾銅山探訪記などをふくむ『社会百方面』を出版し日本の暗部を探った。昭和十年（一九三五）、六十九歳で亡くなった。

東京都文京区千駄木の養源寺に墓地がある。

なお、北海道の最高峰「大雪山」の名付け親としても知られる。この名前は大山に姿が似ていたからといわれる。

大山町

高杉神社（たかすぎ）

西伯郡大山町宮内
ＪＲ大山口駅よりバス二〇分、坊領下車、徒歩二〇分

景行天皇（大帯孫神）、孝霊天皇、などを祭神とする。『大山寺縁起』に記載された大山金門の笠木を提供した神社であるといわれる古社である。当社には、平安時代作と思われる古神像が二躯所蔵されている。

当神社では、本媛之命、松媛之命、千代媛命の三女神も祭神としている。これらの女神に係る**「うわなり神事」**という奇祭が伝えられている。毎年旧暦九月十五日の夜半に行なわれる。

伝説

第七代孝霊天皇の御代に、さる高貴な方がこの地に滞在された。地方ではまれなことなので、この土地で美しい松姫、千代姫の二人を近くに侍らせた。しかし、都から正妻である細姫（くわしひめ）がやって来たため、三人の女性の間に嫉妬による闘いが始まった。

遂に松姫、千代姫は恨をのんで亡くなった。その後、雄略天皇の御代、近郷に悪いことが続き、神のお告げにより、正妻に対する二人の姫のたたりであると知れた。そこで一の宮（本殿・細姫）・二の宮（中殿・松姫命）・三の宮（末殿・千代姫命）の三殿を建立して祀ることになった。

高杉神社のうわなり神事

西伯郡大山町宮内
ＪＲ大山口駅よりバス二〇分、坊領下車、徒歩二〇分

高杉神社に伝えられる奇祭である。神社祭礼は毎年旧暦九月十五日に行なわれるが「うわなり神事」が行われるのはうるう年の旧暦九月十五日の夜半である。月のはじめに氏子の中から三人の霊代（三女神の霊がのりうつるもので、打神ともいう）が選ばれる。

祭礼の前夜は社務所に泊り、心身を清め、祭礼当日の朝は所子海岸で身を清める。祭礼が夕刻から始まり、うわなり神事は夜半から始まる。

まず霊代が、白装束で神前に並びび、神官が祝詞を奉上し秘法を修する。そうしているうちにしだいに異常心理状態に入り霊代にうつった三女神は、お互に嫉妬の情にかきたてられ争い始める。そのままにしておくと死ぬまで闘うので、左右に護丁が付き、時々争いを制している。

一度近くの小川で、みそぎをし神苑の所定の位置に帰り、「投げ盃」の式が行われる。社殿に供えた酒をいただいて順次に渡す。渡すときには右足の指に挟んで渡す。

これが終了すると「打杖渡し」の儀がある。ススキの束で三人がそれぞれ地面を突きたたく行事である。終了後、神主は古例の賀詞を述べる。これよりしばらく三神が、日頃抑えていた嫉妬の情を発散させるように打合いをするが、（つねに左右から抑えて自由にさせないようにする。そうしないと本当に、つかみあって怪我をする）やがて神主が「本殿（もとどの）の勝」と宣して、本妻に花をもたせ、後妻の負けとしてこの場の終末をつける。うわなりとは後妻のことである。

やがて三霊代は神主の神事により神懸状態から脱する。昔は、この霊代は女性が仕えたという。なお、この神事には、帽子をかぶったものを非常に嫌う。

壱宮神社（いちのみやじんじゃ）

西伯郡大山町大字上万
ＪＲ大山口駅よりバス五分、一ノ宮神社前下車

天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）・豊秋津師姫命（とよあきつしひめのみこと）・瓊々杵命（ににぎのみこと）をはじめその他合併社の十三神を祭神とする。創立年代は不明であるが、西伯郡の旧社で、古くから一宮大明神と崇敬の厚い大社である。

『伯耆民談記』『朝妻縁起』によると、昔、妻木（むき）の長者老夫婦には子供がなく、当社に毎日お祈りしたところ、祈願が叶い、玉のような女子に恵まれたという。

本殿の右には老夫婦が休息したという平たい石が二個ならび、安産石とよばれ縁起のよい石とされている。古くは遠近からの参拝者があって、信仰を集めていた。西部地方に多い塞の神も祀られ、二体は線彫り、二体は浮刻の貴重な石造物がある。

門脇家住宅（かどわきけ）

西伯郡大山町所子
ＪＲ大山口駅より車で五分

大山の裾野が**日本海**に緩く広がり、海の向こうに島根半島や**弓ケ浜半島**を見渡せるところに所子の家々は散在している。

門脇家はこの村の中でもまとまった集落をなしている地区の中心部に

屋敷を構えている。東側の道路に沿って透塀が延び、中ほどに薬医門が設けられている。門脇家は、「門脇殿」ともいわれた中納言・平教盛の末裔と伝えられ、古くからこの地方の名門で江戸時代には代々大庄屋を勤めた家柄である。

外観は江戸中期の**尾崎家**や**河本家**と似ているが、平面構成や構造形式は江戸末期の高田家と同じである。主屋の間取りは伯耆地方独特のもので「整型九間取」と称され、その基本形式を今に伝える遺構である。客座敷は鍵型に配置されているが、奥の客座敷は呼び名そのままに「カギノマ」と呼称され、表側の次の間を「オクノマ」と称している。小屋組は梁を四段に重ね、最上段の上屋梁は扠首を受けるとともに中央で棟束を支えているが、さす組とうだち造を兼ね備えた「半小屋造」になっている。主屋の北東、道路に面して木小屋・水車小屋・大工小屋・供部屋を備えた長屋があり、南東には検査場が道路に面して建ち、主屋の奥の西側には米蔵・新蔵などの土蔵が立ち並ぶ。なお、門脇家住宅前の道沿いには、南に接して南門脇家、東側に道路を挟んで東門脇家がある。これらの屋敷構えは門脇家同様で、長屋門を備わっており、そのたたずまいは周辺の民家を取り込んで、まとまりのある集落景観となっている。

当家に所蔵されている明和六年（一七六九）の文書「居宅棟上一式」は建築年が明らかになるだけでなく、棟上げの時の行事や普請の時の「ゆい」の状況も細かく記載されており貴重である。

昭和四十九（一九七四）年二月、国の重要文化財に指定された。（平成五年八月十七日追加指定）

上万（原）

西伯郡大山町上万
ＪＲ大山口より徒歩三〇分

西伯郡大山町の**日本海**沿岸に、「上万」の地名がある。ここには古社壱宮神社があり、境内には「すくね塚」と呼ばれる古代信仰に関わる聖地がある。

ここから南東の孝霊山を仰ぎ見ると、不思議なことに山の姿全体が美しい「山」の文字を描き、**大山**はすっぽりと後方に隠れてしまう。

また、ここ上万には「東上万原」「西上万原」の小字名があり、この神社周辺の広い原野が「上万原」と呼ばれたであろうことが推察される。さらに、この「上万原」については、一説によると『雲陽軍実記』などの諸本で「浄満原」と記される場所と推定される。

戦国末期の尼子回復戦の際に尼子勢平野加兵衛の三百余騎が、毛利方の尾高城主・杉原盛重の一千余騎に攻められ、大将・平野加兵衛は討たれ、尼子勢は敗退した。元亀二年（一五七一）二月の古戦場であると伝えられている。

荒岩亀之助

荒岩亀之助は、明治の末期、名力士としてその名をうたわれた。明治五年（一八七二）、現在の鳥取県西伯郡大山町に生まれた。幼い頃から木こりであった父に連れられて山に入り、体重の倍もある材木を背負って山道を歩いていたという。

相撲取りをめざし、十歳のとき、大阪で稽古に励んだ。やがて上京し、鳥取市湖山出身の**尾車文五郎**に弟子入りした。明治三十年（一八九七）の春場所に西前頭の八枚目で入幕、横綱・小錦をけたぐりでやぶり評判になった。

明治三十八年（一九〇五）には西の大関となり、同四十二年（一九〇九）に引退するまで大関の地位を保った。身長一・六九メートル、体重九三キログラムと力士としてはあまり体格は大きくなかったが、幼いころに鍛えた足腰や腕に支えられた。大正九年（一九二〇）、五十歳で亡くなった。

昭和三十三年（一九五八）五月、**大山寺**、**博労座**に顕彰碑が建てられた。碑文は時津風定次（第三十五代横綱・双葉山）が書いた。

名和町

大雀海岸

西伯郡名和町富長
ＪＲ名和駅より車で五分

日本海に面し、礫の密集した礫浜である。**大山**の阿弥陀川水系が作る河口扇状地の礫質堆積物や火山性礫岩が波浪の影響で遊離、淘汰されて、一〇センチ～二〇センチの卵状ないしは楕円状の円礫だけとなった海岸である。大雀から小雀間の約五〇〇メートルの海岸一帯には、細粒の砂や小礫をほとんど含まないで、中礫のみが集積している。礫は波浪によってゴロゴロと音を発しながら揺れ動く。

岩質は大部分が大山系の火山岩で、黒雲母角閃石安山岩と両輝石安山岩である。

扁平なこれらの円礫を大小二つ重ねて石こけしとして利用するため採集されたこともある。この付近は眺望がよく、美保湾、島根半島、そして好天時には隠岐島も見ることができる。

御来屋御着船所

山陰線名和駅・御来屋駅より徒歩約十五分

安政五年（一八五八）に、**名和長年**を祀った氏殿権現（現在**名和神社**）のそばに建碑の声が再燃した。

藩では大窪友尚に建立を命じた。大窪は森尚謙が選んだ碑文によって、正墻薫に建立を命じ、薫は御来屋にやってきて碑を完成した。

また、正墻薫は、滞在中に戸屋に残る言い伝えにより「元弘帝御着船之碑」も建立している。

名和長年

元弘の乱に敗れた後醍醐天皇が、鎌倉幕府によって**日本海**の孤島隠岐島へ移されたことは歴史上有名な出来事である。

元弘三年（一三三三）天皇は自分に味方するものたちが諸国で立ち上がったのをきいて隠岐島を脱出し、伯耆（鳥取県西部）へ遷幸した。このとき天皇を守護して**船上山**に立て籠もったのが名和庄（御来屋付近一帯）の豪族・名和長年である。『新葉集』に「忘れめやよるべも波のあら磯をみ船の上にとめし心は」とあるように、天皇は長年の忠誠を称えている。

名和氏は承久の変に宮方として働いた村上行秋の曾孫であるといわれ、その郷国但馬（兵庫県北部）から元弘三年二月以来、幕府方の佐々木清高らと戦い、これに勝って近国の武士たちの協力を得て伯耆一帯を平定した。

のち建武の中興がなると長年は伯耆守となり、中央政府の重職に就いた。しかし、天皇政治も長く続かず建武二年（一三三五）には足利尊氏によって京都を占領され、天皇は吉野（奈良県南部）に逃れて南朝をたてる悲運に見舞われた。長年は楠木正成・新田義貞等とともに天皇を守護して一度は尊氏を九州へ追い払ったが、尊氏が西国の大兵をひきつれ京都を目指して進軍すると、楠木正成は兵庫湊川の戦いに死に、義貞も敗れた。長年も京都で足利軍を防いだが、ついに延元元年（一三三六）六月三〇日京都一条大宮で壮烈な戦死をとげた。

後醍醐天皇が京都から吉野に退去されると、名和長年の孫・顕興らの一族は征西将軍宮・懐良親王に従って九州へくだった。長年の弟で**大山寺**の僧であった信濃坊源盛も行動をともにしている。以来、名和一族は、九州で後醍醐天皇方として奮闘する菊池氏らに協力している。

長年は明治時代になると、従三位を追贈されその後従一位になり一族とともに**名和神社**にまつられた。

名和神社

西伯部名和町御来屋
ＪＲ名和駅より徒歩五分

名和駅の上方に位置する。**名和長年**を祀り、長重など四十二人の一族も祭られている。

名和長年を祭った延宝五年（一六七七）十月、鳥取藩主・池田光仲は名和町に氏殿権現を祀る一社を建てた。これは、明治十一年（一八七八）一月に別格官弊社となり、名和神社と改められた。明治十六年（一八八三）には、社殿が現在地に造営された。

ここは地名を長者原といい社殿の裏手からは焼米が発見されている。これは、長年が後醍醐天皇を擁護して**船上山**に立てこもった際に、倉庫を焼いたためであるという説があり、この地が倉跡と示す碑も建っている。

この社地は御来屋の南の高台に位置し、眺望がよく、**日本海**や隠岐島

を眼前に望む景勝地である。また、県下屈指のサクラの名所でもある。

名和町には坪田に名和氏の邸跡と伝える所があり、箕浦徳胤の筆による名和神君の碑がある。近くに長年の首塚と伝える三人五輪という五輪塔もある。**長綱寺**は名和氏の菩提寺であると言い伝えられている。長綱寺に近い門前集落の田畑の中には古い礎石群が残っている。また小学校門前には天正二年（一九一三）の銘のある真島氏逆修塔もあり一見の価値がある。

名和氏については、**門脇重綾**の著書が二冊あり、これらは文久二年（一八六二）に完成した。名和氏一族の事跡を明らかにし、公の忠誠を表彰しようとしたものである。上巻には名和長年が義兵を挙げた事跡、下巻には系譜・綸旨感状・碑文等を掲載する刊本もある。

長綱寺

西伯郡名和町名和
ＪＲ名和駅より徒歩二〇分

山号を万歳山という。『長綱寺縁起』によると、元徳二年（一三三〇）に名和長年が開いた寺で、本尊は長年の念持仏であった阿弥陀三尊であるといわれる。

この寺はもとは万歳山の中腹にあり、天台宗に属し、長高庵といった。しかし、足利高氏をはばかり「高」を「綱」に改め、長年の父の名と同じ「長綱」としたといわれる。

文明十一年（一四七九）に、**退休寺**（中山町）山内の達恵道光和尚を迎え、曹洞宗に改宗した。

周辺には名和氏屋敷跡、氏殿権現、的石などがあり、建武の中興で名を挙げた名和長年ゆかりの地に位置する。また、裏山には名和氏一党の墓と称する三百余の五輪塔がある。これは元弘三年（一三三三）、長年が天皇を奉じて**船上山**に登った後に、敵に襲われた名和の舘を死守して果てた妻女たちの墳墓ともいわれている（『王身代家文書』）。

史跡 富長城跡

西伯郡名和町富長
ＪＲ名和駅より車で五分

日本海に面した海岸に残る中世の古城跡である。富長館跡とも呼ばれる。

城跡は、江戸前期の万治四年（一六六一）に富長神社の境内となった。国道九号からも土塁上に茂る巨木の社叢を望むことができる。約一町四方の土塁に囲まれた城跡は、北は日本海に面して断崖をなし、三方は深い堀と高い土塁に守られていた旧状をしのばせる。昭和五十七年（一九八二）五月、名和町の史跡に指定された。

この城跡には、東口に深い渓流の堀があり、曲輪の西隅に海を見渡す物見台の遺構が残されており、注目される。鎌倉時代の文永・弘安には二度にわたる蒙古襲来があり、海からの敵に備えた伯耆沿岸防衛の一城であったと考えられる。

住雲寺のフジ

西伯郡名和町御古堂
ＪＲ名和駅より車で五分

住雲寺のフジは、穂の長さが二メートル近くにもなり、通称六尺藤の名で親しまれている。また、寺もふじ寺と呼ばれる。

樹齢は五十年で、山野に自生するノダフジの園芸品種で、親木は天然記念物に指定されている埼玉県春日部市の牛島の古藤という。

境内いっぱいに藤棚が張りめぐらされ、毎年五月上旬から中旬にかけ、甘い薫りとともに、平均一～一・五メートルの長さの優雅な花房をつけ、近郷からの見物客でにぎわう。

このフジは、酒を好み、酒をこしたあとに残る酒糟を根近くに与えることによって、より幻想的な花をつけるといわれている。

名和滝護摩供養

西伯郡名和町加茂

旧奈和地区には不動滝と呼ばれる滝があり、不動明王を祀る堂宇がある。この堂は明治二十九年（一八九六）に当地に疫病が流行ったときに勧請されたものといわれ、地元の大峯行者に管理されており、八月十八日（戦前は七夕）に、無病息災を祈願する夏の祭礼として火渡護摩が行われていた。

祭礼では、堂の前に注連縄が張られ、東西南北と正面に五大明王を勧請する。この神域には杉の葉と松の割木が敷き詰めてあり、行者が短刀を使って加持祈祷し点火する。行者はその火の上を歩いて渡り、その後、参拝者・信者も渡る。

住吉神社祭・船曳き

西伯郡名和町御来屋
JR名和・御来屋駅より徒歩一〇分

住吉神社は底筒之男命、中筒之男命などを祀る。この神社には「お船曳きの神事」という祭礼行列が、隔年の十一月三日に行われる。

「お船」は長さ三メートルあまりの千石船の模型で、これを前の台車に一艘、後ろの台車に二艘載せて引っ張るものである。「お船」にはそれぞれ御神紋三つ巴を描いた白帆が立っており、前の台車の先端には榊を一本立て、そこに五色の御幣、麻緒、宝剣、鏡などをぶら下げる。

また、この榊のそばに男が一人立ち「お船曳き」の口説を歌う。この船曳きは、朝住吉神社を出て午後帰ってくる。その途中の要所では、大幣を持った男たちが歌に合わせて踊りを披露する。

オオサンショウウオ

オオサンショウウオは渓流にすむ動物である。動物学上からはイモリと同じ両生類で一名ハンザキ、またはハンザケと呼ぶ。全体は魚形であるが、四肢があり泳ぐことも歩くこともできる。体の前の方は扁平で尾は縦になっている。色は褐色で黒斑のあるものもある。サンショウウオは前肢は四指、後肢は五指あるが指先きは丸く爪はない。体には疣状突起が多数あって、外敵に対して山椒臭の白汁を放出し、また粘液を出して防ぐ。

口は一般両生類と同様にとても大きく開く。顎の前方周辺には細歯が並んでいて、上顎には両鼻孔のあいだに外の歯の列と並行した歯が二重に並んでいる。噛み付かれたら雷が鳴らないと離さないという言い伝えがある。

水中から先端の鼻孔をちょっと水面に出して呼吸する。息が長く二十分から数時間におよび、特に冬季には長く呼吸しない。鼻孔を外に出してときどき「ギエ、ギエ」と鳴く。産卵は一般の両生類と異なり、八月下旬から九月である。雄は産卵の一、二カ月前に渓流を上って居屋と称する安全な産卵場所をつくる。産卵期になると雌はこの居屋をさがし求めて雄のあとを追う。卵は大きく直径が五ミリで、寒天質に包まれている外方も入れると一センチ半もある。これらは紐状の寒天質でつながり、長さは一〇メートルにも及ぶ。一つに五百個くらいの卵がついている。卵は二十日余で孵化し、外鰓時代が三年、体調が五十五センチになると親になる。サワガニやカエル、魚、昆虫など生きた物なら何でも食べる。体長六〇センチ内外のものが多いが、ときに一メートルを超えるものもある。寿命は長く、百年以上に及ぶものもいる。

岡山県真庭郡湯原温泉にはハンザキ大明神があり、西伯部名和町にはハンザキ屋の屋号のある家がある。これはみな大きなサンショウウオから出たものである。

この類のもので現世に生き残っているのは、アメリカ「オオサンショウウオ」と日本のオオサンショウウオだけである。日本では南は九州の大分県馬館川上流から中国地方、近畿地方、岐阜県和良川上流までに限られ、四国には産しない。鳥取県では**大山・蒜山**の南北で南は岡山県旭川上流、北はこれを分水嶺とする**日野川**、**天神川**上流である。西から日野川の支流西伯郡法勝寺川、西伯町八金・東上・会見町松谷川・日野郡溝口町田代川・懸橋川・江府町俣野川、生山付近では上菅・板井原の小原川、日南町松本・神福・飛時原の井原川、新屋の野租川、さらに東に大山から流れる阿弥陀川また西伯郡名和川・東谷川付近、天神川では関金町の矢送川の上流、竹田川上流穴鴨の余川、大体三〇〇メートル以上の急流で花崗岩地帯が多いが名和川のような安山岩の地帯もまれにある。鳥取県はこのように世界に比類のないオオサンショウウオの生息地

である。

昭和二十七年（一九五二）三月、特別天然記念物に指定された。また東長田オオサンショウウオ生息地は昭和二十六年（一九五一）六月、天然記念物に指定されたが、自然環境破壊のため生息しなくなったので昭和五十一年（一九七六）、指定解除された。

茶畑山道遺跡（ちゃばたやまみち）

西伯郡名和町茶畑
JR名和駅より車で五分

水田下にある弥生時代の集落遺跡。平成九年（一九九七）のほ場整備にともなって遺跡の存在が明らかとなり、平成九年から同十年（一九九八）まで本調査が行われた。

遺跡の立地する丘陵の標高は五〇～五五メートルで、微高地である。遺物から、この地に人々が生活したのは、縄文時代早期から、平安時代に及ぶと考えられるが、中心となるのは弥生時代中期である。掘立柱建物や、周囲より一段高い所に祭殿と推定される「大型高床建物」などがまとまって確認された。当時の首長の居館や祭殿の実態を知る貴重な遺跡である。

しかし、この遺跡は調査終了後、水田の下に眠っている。

夕陽の丘神田

西伯郡名和町加茂
JR御来屋駅より車で十五分

大山（だいせん）の麓の丘陵地帯に位置する。**日本海**や島根半島を望む。神田はリンゴの産地としても知られ、リンゴ狩りを楽しめるリンゴ園、遊技施設、宿泊施設などもある。

峰地光重（みねじみつしげ）

峰地光重は、「自分の経験を見つめることによって作文を書く」という生活綴り方運動を呼びかけ、実践した教育者である。

明治二十三年（一八九〇）、汗入（あせり）郡光徳村豊成（現在の西伯郡名和町）に生まれた。鳥取県師範学校を卒業し、西伯郡内の小学校を歴任した。大正九年（一九二〇）、学級文集『芽ばえ』をつくり綴方教育を始めた。

大正十一年（一九二二）『文化中心綴方新教授法』を出版し、この中で「綴り方は児童の人生科」であるとして生活指導が大切であることを説いている。

文部省、鳥取県教育委員会から教育功労賞、広島大学教育学部からペスタロッチ賞を贈られた。昭和四十三年（一九六八）に七十八歳で死去。

中山町

中山町ハマナス自生南限地帯

西伯郡中山町松河原
JR下市駅より車で六分

下市川河口の両岸に生育するハマナスは南限であるばかりか、海岸帯に堆積した転石のなかに生えている点で、生態学的にも地史学的にも極めて珍しい。地質時代末期の氷河時代には、砂浜だった所に北方寒地植物が南下し分布した。その後、**大山**（だいせん）から出た転石で六五センチ覆われたが、ハマナスが強く残ったものと考えられる。

鳥取市白兎には既指定地がある。昭和四十年（一九六五）、県の天然記念物に指定された。

温泉 中山温泉ゆーゆー倶楽部NASPAL（ナスパル）

西伯郡中山町赤坂　JR下市駅より車で約五分

ホールなどからなる生活想像館と温泉館からなる。中山温泉の泉質は、アルカリ性単純温泉で触った感じがツルツルすることから「美肌の湯」とも言われている。大浴槽のほか、水風呂、サウナが設けられている。

●開館時間
午前一〇時三〇分～午後九時

●休館日　月曜日（祝日の場合はその翌日）

●問合せ先　☎0858・49・3330

中山神社（なかやま）

西伯郡中山町束積　JR山口駅より車で約七分

大己貴命（おおなむちのみこと）ほか八神を祭神とする。神社が創られた年代はわからない。近世までは大森大明神といわれ、多くの人々の信仰を集めた。昔は社域が広く、かつては県の天然記念物であった大犬槙（枯死）もあり、大森大明神の名にふさわしい社であった。しかし、水田開発によって神域は狭められた。

境内摂社に、伯耆の白兎伝説を伝える疱瘡除けの神・鷺（さぎ）神社があり、近世には厚い信仰を受けていた。願をかける時には当社の竹笠を借りて帰って、病人のお守りとし、無事治癒すればお礼に新しい笠を一つ添えて倍にして返したものといわれる。

明治六年（一八七三）に束積神社と改称され、同三十八年（一九〇五）に中山神社となった。

退休寺（たいきゅうじ）

西伯郡中山町退休寺　山陰線下市駅より車で五分

曹洞宗に属す。寺伝によると正平九年（一三五四）、石井垣城主・筧（の）津（つ）敦忠が、亡妻の供養のため、玄翁（源翁とも）和尚に開かせ、建立したといわれる。玄翁は、至徳三年（一三八六）、衆人に害をなしたという那須の殺生石を破摧済度した。その功により、後小松天皇の勅旨により国家鎮護の道場、勅願所となった。

慶長十二年（一六〇七）三月、野火のため全焼し、寛永十年（一六三三）、因伯国主・池田光仲（いけだみつなか）によって再興された。

昭和十六年（一九四一）四月に、隣村部落の大火に類焼し、勅使門を除いて全焼し、古書宝物も全て灰となった。

なお、後小松天皇下賜の「金龍山」という勅額が火を逃れ現在も保存されている。

逢坂八幡神社御神幸行列（おうさかはちまんじんじゃみゆきぎょうれつ）

西伯郡中山町松河原　JR下市駅より車で五分

逢坂八幡神社は、誉田別尊（ほんだわけのみこと）などを祭神とする。貞観七年（八六五）年大分県の宇佐八幡宮を勧請し、逢坂八幡宮としたのがはじまりである。

逢坂八幡神社の例祭日は、五月四日、国民の休日である。もとは、八幡神社の放生会式が行われた十月十五日であった。この日は、盛大な御神幸行列が催される。榊・社旗・傘・鎧武者・鉄砲・たんぽ・弓・鳥毛・白毛・笛・太鼓・御輿（三柱）が行列をなし、御幸場に渡る。

史跡 岩屋平（いわやな）ル古墳

西伯郡中山町八重（やえ）　JR中山口より車で十五分

古墳時代後期（六世紀）の古墳。墳丘はよく整った円墳で、直径一八メートル、高さ約三・三メートルある。この一帯には古墳が密集し、所在地名をとって「八重二号墳」とも呼ばれる。石室は、出雲地方に多い「石棺式石室」である。この石室は出雲、伯耆、因幡に分布し、伯耆では淀江町の岩屋古墳も同様の石室を持つ。

本古墳の石室は、安山岩の切石を用い、玄室は一枚岩を用いているが、天井石のみ切石と割石の二枚からなっている。石室の規模は、玄室の奥行三・三メートル、幅二・一メートル、高さ一・九メートルである。

本石室は、出雲地方の「石棺式石室」の影響を強く受けながら、両側壁で奥壁及び前壁をはさみ、玄室が長方形をとる点で西伯耆地方の横穴式石室の特徴をよく示している。

この「石室」の状態から、古墳時代の西伯耆の政治社会的関係を考える上で重要とされ、平成三年（一九九一）三月、県の史跡に指定された。古墳は、現在、公開されている。

木ノ根神社

西伯郡中山町松河原
ＪＲ下市駅より徒歩十五分

山陰地方は多くの古代の民俗が残存している。これについてとくに著しいのは原始信仰である生殖器崇拝である。

木ノ根神社は、愛知県田県神社と同様、男根崇拝で知られている。木ノ根神社は「木の根さん」「への子マツ」ともいわれ、近くはもとより遠くは九州・北海道からも参拝者があって、昔から信仰を集めていたが、神社法の制定当時、淫祠として廃棄を勧められた。現在はこのマツの根の傍らに小祠や堂が建てられている。

またこの地区一帯にはサクラの植栽もほどこされ、展望のすぐれていることなどから近年訪れる人も多い。

文芸の小径

西伯郡中山町羽田井
ＪＲ中山口駅より車で十五分

大山へ通じる西伯郡中山町の報恩峠に七百本の桜並木が三キロメートルにわたって続いている。

これは俳人として著名だった末次雨城町長が昭和三十七年（一九六二）に植えたもので、この桜並木の中に文学碑が立ち並び、「文芸の小径」と呼ばれている。

昭和六十一年（一九八六）、桜並木を生かした町の文芸振興をめざし文学碑設置を進める実行委員会が町内の老人クラブや文芸愛好家を中心に組織された。町の内外から文学碑建立の申し込みが相次いだ。短歌・俳句・川柳など作品のジャンルは問わない、碑の形や材質は自由、というのが魅力だったのだろう、翌年春の完成式には、五十八基の碑が並んだ。

以来、毎年春と秋には碑を囲んで「文芸のつどい」が開かれ、句作や野点を楽しんでいる。

平成九年（一九九七）、住民参加による景観づくりが高く評価され、鳥取県景観大賞を受賞した。

一息坂峠

西伯郡中山町萩原
ＪＲ中山口駅より車で二〇分

主要地方道赤崎大山線が**大山**に向かって中山町から大山町香取へ越える峠道である。**大山隠岐国立公園**に位置し、標高は五二〇メートルと比較的低いが、見通しの広い景観は絶景である。南に大山、さらに尾根続きの矢筈ケ山、甲ケ山、勝田ケ山の三山を望み、北に**日本海**を見る。国道九号から峠への道は、一つに赤崎町から主要地方道を尾張川沿いに上るコース、他に中山町から県道二三九号を甲川沿いにのぼるコースがあり、この二つの道は中山町羽田井で合流し萩原へ至る。峠を越えると、香取開拓団の入植地に入る。畜舎と牧草地の向こうに大山が迫る雄大な景観が広がる。

元来、峠道は古くから**大山寺**を目指して参詣人や牛馬が通った道である。羽田井から萩原の沿道には参道を示す松並木が残る。

なお、江戸時代から続く行事として、毎年五月二十四日に大山寺の春祭り（会式）に合わせ、この峠で茶事の接待が催される。

道路はそのまま川床渓谷を抜け、大山国際スキー場、上の原スキー場、中の原スキー場、豪円山スキー場を通り、大山寺に至る。また、萩原では**船上山**から山周りに来る県道とつながっており、船上山と大山を結ぶドライブコースともなっている。春の山桜、新緑、夏の夕涼み、秋の紅葉、白雪の大山と季節の変化に応じ華やかな風景が繰り広げられる。沿線各地に展望駐車場が整備されており、車を止めてゆっくり楽しみたい。

日南町

奥日野県立公園

日野郡日南町・日野町

日野川上流にあって、山と渓谷と花に彩られ、野外レクリエーションの場に恵まれた県立自然公園である。公園へのアクセスは、国道一八〇号、一八一号、一八三号とつながる道によって、簡単にたどることができる。

眼下に日野川が広がるハイキングコースの古峠山（標高七六七メートル）や日野川と板井原川の合流点にあるサクラとツツジの塔ノ峰、**根雨の町並み**、オシドリが飛来する**鵜ノ池**、ダイセンミツバツツジと竜王滝で名高い**滝山公園**、白いキシツツジが映える日野川渓谷、奇岩とツツジの**石霞渓**、県下一のダム湖を持つ**菅沢ダム**、スキー場と麓にフラワーパークがある**花見山**（標高一一八八メートル）と多彩な見所にあふれている。

公園の面積は、日野町と日南町にまたがる四、八二三ヘクタールで、そのなかに特別地域が八七一ヘクタール含まれる。花見山は岡山県との県境に位置し、近くには大倉山、鬼林山、**船通山**、**道後山**と一、〇〇〇メートルを超す名山が控える。

中国山地は一般的に、山麓では急峻な地形と渓谷が発達し、山腹を登りきると一転して盆地や平原が広がる。公園内には、山上の別天地と思える山村や高原が少なくない。しかも、あちこちにたたら製鉄の砂鉄を採取したカンナ流しの跡がある。

日野町根雨の近藤家は、日本で最も遅くまで和鉄生産を行っていたことで知られる。日野川筋は、東の**千代川**上流の智頭と並ぶ林業地でもあり、山を歩くと木を切るチェンソーの音を聞いたり、木を植える人の姿を見たりする。四季折々、山里の生活と歴史に触れることができる。

日南町美術館

日野郡日南町霞
ＪＲ生山駅よりバス一〇分、日南中学校前下車、徒歩五分

日南町総合文化センターに隣接し、平成八年（一九九六）六月に開設された。

サクラクレパス創立者であり、日南町出身の佐竹林蔵氏が収集した近代芸術家の絵画や彫刻など約三十点が寄託されているほか、同町出身である足羽俊夫氏の洋画・版画・デッサンなどを約一〇〇点収蔵、展示している。このほかにも梅原龍三郎、川合玉堂などが展示されている。

●開館時間　午前一〇時～午後六時
　※入館は午後五時三〇分まで
●休館日　月曜日、祝日、年末年始、展示替期間
●問合せ先　☎〇八五九・七七・一一一三

石霞渓

日野郡日南町生山
ＪＲ生山駅より徒歩一〇分

日野川とその支流が花崗岩を浸食した渓谷。**奥日野県立自然公園**に含まれる。花崗岩は、白亜期末から古第三紀にかけて貫入した根雨花崗岩と呼ばれる粗粒な黒雲母花崗岩で、互いに直交する三つの面に平行する方状節理が発達する。

石霞渓にはもともと北石霞渓、中石霞渓、南石霞渓の三つがあったが、日野川との合流点から遡る印賀川沿いの北石霞渓は、**菅沢ダム**により水没したり水量が減ったりして、往事の面影はほとんど残っていない。日野川と生山の町並みが平行するあたりが、中石霞渓である。ここは日野川が穿入蛇行をして大きく屈曲するところで、川岸に面して花崗岩の絶壁が切り立ち、河床には崩落した巨岩が点在している。南石霞渓は、中石霞渓から南に分かれる石見川沿いの渓谷である。日野川との合流点に近いこの付近は、石見川の流れが急になる地点にあたり、そのため流れが速く、川底が深く刻まれ、谷幅の狭い深いＶ字渓谷になっている。

谷壁の急崖をつくる花崗岩は、間隔の広い方状節理に沿って割れ目が開き、巨大な箱形ブロックを積み重ねたように見える。谷底にはこの巨大ブロックが転落し、滝や淵ができ、またおう穴も随所に見られ、花崗岩地帯特有の渓谷美をつくりだしている。現在では、石霞渓といえばこの

南石霞渓を指すことが多い。

日南町総合文化センター

日野郡日南町霞
JR生山駅よりバス五分、中学校前下車、徒歩二分

日南町は、昭和の文豪**井上靖**、**松本清張**と関わりがあり、作品に描かれたことも少なくない。町内には幾つかのゆかりの施設もある。

平成八年（一九九六）六月に**日野川**沿に開館した日南町総合文化センターには、井上靖が長野県軽井沢に所有した別荘の書斎を模した「井上文学展示室」と東京都杉並区にある松本清張の居宅の応接間を模した「松本清張文学展示室」が設置され、さまざまな作品を生み出した二人の作家の世界に浸ることができる。

また、ホール内の図書館には井上靖・松本清張のコーナーが設けられているほか、屋外には二人の作家の愛用品や作品などをモチーフにした彫刻などが配置されている。

●開館時間　午前一〇時～午後六時
●休館日　月曜日（図書館水曜日）、祝日
●問合せ先　☎0859・77・1111

楽楽福神社（ささふく）

日野郡日南町宮内
JR生山駅よりバス十五分、神社前下車すぐ

日野川をはさんで西社・東社に両社がある。伝説によれば孝霊天皇の皇子・大吉備津彦命の弟・若建吉備津彦命がこの国に軍を進めて鬼林山の賊を平げたが、その後ここで死去したので二柱を祭ったというのである。ただし正史にはみえない。西社は特に社殿が壮麗で彫刻やそのほかにも美術的価値がある。これから北方約二〇〇メートルのところに崩御山がある。これは大吉備津彦命の墓と伝えられているもので、頂上には塁々として石が群がっている。自然か、人工の積石塚の類であるかはよくわからない。また、東社の境内には一箇の古墳があって、石室が開口している。西社の南方約一〇〇メートルのところに神宮寺があり、古棟札等を所蔵している。

江戸時代には日野郡の大社として崇められ奥日野の総産土神でもあった。

楽楽福神社社叢（ささふく）

日野郡日南町印賀
JR生山駅よりバス二〇分、学校前下車、徒歩一分

社叢は印賀川上流の左岸にある標高四五〇メートルに位置し、コナラ、モミ、亜高木にはアオハダ、ミズナラの高木や、アセビ、ソヨゴなどが見られる。自然林の少ない日野郡内で、照葉樹林帯からブナ帯へと移行する中間林帯における典型林とみなされる貴重なモミ林として、昭和六十年（一九八五）二月に県の天然記念物として指定された。

松本清張（まつもとせいちょう）

「幼き日
夜ごと父の手枕で聞きし
その郷里　矢戸
いまわが目の前に在り」

日野郡日南町矢戸（やと）にある松本清張の文学碑には、清張自筆の文字で記されている。この碑は、昭和五十九年（一九八四）に建立された。

松本清張（一九〇八～一九九二）の父、峯太郎は矢戸で生まれた。清張はこの父を小説『父系の指』（昭和三十年）に書いている。

「私の父は伯耆の山村に生れた。中国山脈の脊梁に近い山奥である」「父は十九の時に故郷を出てから、ついぞ帰ったことがなかった。汽車賃さえ工面できない生活のためである。それだけよけいに故郷に愛着をもち、帰郷することが父の一生抱いていた夢であった」

清張が『父系の指』について、「自伝的なもののもっとも濃い小説である」と述べているように、清張にとっても矢戸は心のふるさとであったのかもしれない。

同じ中国山脈に連らなる山里、島根県仁多町亀嵩（かめたけ）には「小説砂の器舞台の地」と書かれた清張の記念碑も建っている。名作『砂の器』（昭和三十五～三十六年）の重要な舞台は、この亀嵩であった。映画化にともなって、この地で撮影が行われた。

解脱寺（げだつじ）

日野郡日南町下阿毘縁
JR生山駅よりバス四〇分、高祖前下車すぐ

日蓮宗の大寺で、通称「高祖（こうそ）さん」と呼ばれ親しまれていた。しかし、昭和二十六年（一九五一）六月頃の

失火により、鐘堂をのこして類焼してしまった。

寺伝によると、足利尊氏の一族・日野中将が、山陰征服のため出発するとき、京都本国寺の日静上人に頼み、日蓮直作の尊像一体を受け、ここに堂を建て肖像を安置して祭ったのがはじまりといわれている。

後に、慶安元年（一六四八）十一月米子本数寺の住僧・日要上人が霊夢を感じ、ここにやってきて堂守をおこし、さらに身延山久遠寺の日感上人を招いて開山したともいわれる。山門の花崗岩の大鳥居をくぐって石段を登ると約四メートルの馬場があり、これに沿って高い石垣が組まれている。さながら一大城廓のようである。この馬場には、昭和三十六年（一九六一）六月、県の天然記念物に指定されたみごとなモミの並木がある。寺庭にはかつて、本堂、恵日講舎、庫裡、七面神御堂等もあったが、これも焼失した。また、日蓮上人親筆断片、藤原定家書、池田光政、光仲書や、本尊も消失し、当寺第一の本尊・宗祖日蓮直作の木像と日蓮上人一代絵巻を残すのみとなった。

見逃してはならないものに、これから下の宇馬の背に日臨本妙律師が建てた法塔がある。日臨は不受不施派という日蓮宗の一派を強調し身延山に反対し、一時解脱寺に仮り住まいしたこともあった。死後二十三年の弘化二年（一八四五）、その直筆によってこの法塔を建てた。高さが約二メートルある。

解脱寺の縁日はもと四月十二日、八月十二日であったが、陽暦では五月十二日、九月十二日となった。

ゆきんこ村

日野郡日南町下阿毘縁　JR生山駅からバス約二〇分　高祖前下車

島根県との県境に近い、自然豊かな場所に平成六年（一九九四）四月に開館した。

宿泊・会議施設やレストランを備えた「四季彩」やログハウスが整備されている。また、昔の民家を復元したかやぶきの家では、地元の素材をふんだんに使った料理を味わうことができる。このほかにも、天文台、乗馬施設、運動広場、ハーブ園などがあり、夏はキャンプやハイキング、冬はスキーと四季を通して遊び楽しめる。

●開館時間　午前一〇時～午後五時（レストランの場合）

●休館日　毎週火曜日

●問合せ先　☎〇八五九・八七・〇四三一

菅沢ダム

日野郡日南町菅沢　JR生山駅よりバス一〇分　菅沢ダム前下車すぐ

鳥取県下最大の多目的ダムであり、ダム湖も広い。**奥日野県立公園**の一角を形成している。**日野川**に沿って国道一八一号を走り、日野町根雨で分かれて国道一八〇号に入る。これを進むと国道一八〇号は日野川と別れて山登りにかかり、ヘアーピンカーブを抜けると眼前に湖面が見えてくる。

日南湖と名付けられたダム湖の面積一〇〇ヘクタール、総貯水量一、九八〇万立方メートル、集水域は八五平方キロメートルに及ぶ。ダム本体は重力式コンクリートダムで、ダム高は七三メートル、堤長は二一〇メートル。コンクリート製のダム自体の重さで水圧に耐えている。旧建設省の直轄事業として日野川の支流、印賀川をせき止めて昭和四十三年（一九六八）に完成した。ダム湖に流れ込む水の八割を貯水し、洪水調整の機能を果たしている。ダム工事と並行して日野川第一発電所が建設され、最大出力四千三百キロワットの水力発電を可能とした。また、工業用水として、下流の米子市、境港市、日吉津村へ送られている。さらに、日野川流域の農業用水としても利用されている。

日南湖には、平成五年（一九九三）にリニューアルされたアーチ式の本山橋がある。これは景観に配慮し紅葉の季節に合わせた架橋が試みられている。対岸には、サイクリングロードがあり釣り場も多い。毎年五月には日南湖一周十キロメートルを中心に「にちなん湖畔マラソン大会」が催される。七月にはダム湖遊覧ができるダム見学会があり人気を集めている。

下阿毘縁神社の大シダレザクラ

日野郡日南町阿毘縁　JR生山駅よりバス四〇分　高祖前下車すぐ

下阿毘縁神社境内の入口にあるシ

ダレザクラの老木である。シダレザクラは県内に自生するエドヒガン（ヒガンザクラの一種で、葉の開出に先立って花が咲く）から改良された栽培種で、枝がしだれていることから名付けられた。

花期は毎年四月下旬で、鮮やかな紫色がかったピンクの八重咲きの小花が開く。ソメイヨシノやエドヒガンに比べて花持ちが長い。

近郷に希な神社の名木として住民に親しまれ、昭和三十二年（一九五七）十二月に県の天然記念物に指定された。

指定以後、周囲の樹木の成長に伴い日照不足や老木のためか、折損などが起こり、現在では樹勢にかなりの衰えが見られる。

ふるさと日南邑

日野郡日南町神戸上
ＪＲ生山駅からバス二〇分、砂田下車

文豪**井上靖**が「天体の植民地」と絶賛した標高六〇〇メートルの高原に昭和六十一年（一九八六）七月に開設された。

テニスなどのスポーツが楽しめるほか、農作物を収穫する喜びを味わうことのできる「体験農園」、きのこやくり、果物などを自分で収穫できる「収穫の森」などがあり、自然をさまざまな角度から体験できる。

このほか、ホールやキャンプ場やログハウス、バーベキューハウスも設置され、多目的に利用できる施設である。また、平成九年（一九九七）八月には広さ三ヘクタールのフラワーセンターも整備された。

●開館時間　施設によって異なります。
●休館日　年末年始
●問合せ先　☎０８５９・８３・１１８８

池田亀鑑

池田亀鑑は、昭和期の国文学界に〝池田時代〟ともいうべき一時代を築いた。

明治二十九年（一八九六）、日野郡福成村神戸上（現在の日野郡日南町神戸上）に生まれた。鳥取師範学校を卒業し、溝口小学校に教師として勤めた。わずか二年間だったが**大江賢次**・下村章雄らに大きな影響を与えた。

東京高等師範学校、さらに東京帝国大学に進み、平安朝の女流文学を研究した。文才豊かな亀鑑は七種類のペンネームを使い分け、少年少女小説や婦人小説を書き研究費や生活費に充てたという。

平安朝文学、特に『源氏物語』研究の権威であり、源氏物語研究の貴重な基礎資料である『源氏物語大成』八巻のほか、著書は百冊を超える。

昭和三十一年（一九五六）、六十歳で亡くなった。日野郡の溝口町役場前と日南町石見東小学校に記念碑が建てられている。

井上靖

「ここ中国山脈の陵線　天体の植民地……」

日野郡日南町の福栄峠に建つ井上靖の文学碑に刻まれている。

昭和二十年（一九四五）六月、第二次大戦の戦火を避け、海抜六〇〇メートルのこの高原の地へ、家族六人を疎開させた。当時、井上は新聞記者であった。同二十四年（一九四九）『闘牛』で芥川賞を受賞し、多忙な毎日を送ることになるが、しばしばこの地を訪れている。作品『通夜の客』『高原』は奥日野が舞台となっている。

昭和五十三年（一九七八）、文学碑が建立され、また、近くには記念館「野分の館」もあり、井上ファンに人気が高い。

平成元年（一九八九）、町制三十周年を迎えた日南町の名誉町民に選ばれた。米子市大篠津にある**「井上靖記念館」**には、肉筆原稿や蔵書約二千冊を収めた書斎や居間が再現されている。井上文学が生み出されたその側面を見る思いがする。

井上靖記念館「野分の館」

日野郡日南町神福
ＪＲ生山駅よりバス二〇分
太田分かれ下車、徒歩一〇分

昭和の文豪・**井上靖**は、終戦間近の昭和二十年（一九四五）に日南町神福に家族を疎開させていたこともあり、後の井上作品には、ここでの生活や自然などが記されている。

井上靖が再びこの地を訪れたことを機会に始まった町とのふれあいを

後世にも残したいという願いから、小説『通夜の客』に記された「F村が一望できるらくだこぶの峠」に昭和六十年（一九八五）三月に建設された。

なお、「野分の館」という名前は井上靖による。展示室には、原稿や著書、写真などが展示され、作品とともに町との関わりがよくわかる。

また、近くには井上靖直筆による文学碑や井上靖が作った詩を夫人が記した詩碑も設置されている。

●開館時間　午前七時～午後五時
●休館日　無休
●問合せ先　☎0859・82・1111

亀山公園（かめやま）

日野郡日南町下石見
ＪＲ生山駅よりバス五分、道原下車、徒歩三分

鳥取県西部の**日野川**筋で最も奥に位置するツツジの名所である。日南町生山から国道一八三号と別れ、奇岩・巨石で有名な**石霞渓**（せっかけい）を脇に見て石見川をさかのぼると下石見地区に入る。脇道に沿って上がると公園入口に到達する。小山に盛り上がった斜面に二千本近くのツツジが植え込まれ、開花期には全山赤く染まる。満開の時期は少し遅く、五月のことが多く、県東部や中部のツツジの開花が終わる頃に見頃を迎える。

上石見（かみいわみ）のオハツキ・タイコイチョウ

日野郡日南町上石見
ＪＲ上石見駅より徒歩七分

上石見神社の社叢はイチョウ、ケヤキ、カヤ、ヤブツバキなどで構成されている。オハツキ・タイコイチョウは、社殿の前に植えられた二本のイチョウのうちの東側の巨樹で、胸高直径は約一・三メートルある。幹には多数のコブ状の乳柱ができ、大きい幹のつけ根から乳房状に垂れ下がっている。

オハツキ・タイコイチョウの意味は、葉の先に種子が付いたもの、また一本の柄の先に着いた二個の胚珠が受精しないまま生長し、実が太鼓形になったものがあることから名付けられた。大変珍しい異型のイチョウとして、昭和四十五年（一九七〇）二月に県の天然記念物に指定された。

なお、年によって増減はあるが、正常な種子のほうが一般に多く付く。「とっとりの名木一〇〇選」に選ばれている。

多里（たり）のクロム鉱山

日野郡日南町多里
ＪＲ生山駅より車で四〇分

日南町の南西地域にあるクロム鉱山。クロム鉱床は非変成古生層に貫入した蛇紋岩中に形成される。かつては日野上鉱山、広瀬鉱山、若松鉱山と三つの鉱山があり、最盛期にはわが国が産するクロム鉱石のほとんどを出荷していた（昭和三十八年、全国の七十四パーセント）。しかし、現在運営されているのは若松鉱山のみで、すでに採掘し貯鉱していた鉱石を出荷している。（平成七年二月に採掘休止）。これらのクロム鉱石は主に耐火レンガ用に利用されている。

花見山（はなみやま）

日野郡日南町、岡山県新見市
ＪＲ生山駅より車で二〇分

日野郡日南町と岡山県との境界にある一、一八八メートルの非火山性の孤立峰で、中国山地の連峰の一つである。別名を小栗ヶ山という。地質は中生代に貫入した花崗閃緑岩からなり、周辺の花崗岩と比較すると堅く、浸食に耐えて突出したものである。近くの大倉山（一、一一二メートル）も同じ様にしてできた。

山麓の六〇〇メートル～八〇〇メートルの緩斜面は、**道後山**（どうごやま）面と呼ばれる面に続くものであると考えられる。花見山、大倉山、鬼林山、稲積山とともに、準平原上に形成された残丘状の孤立峰である。風化した花崗岩からなり、ここでは砂鉄採取のためにカンナ流しが盛んであった。その結果、カンナの残丘やカンナ流しでできた「カンナ地形」が発達している。

南の斜面には花見山スキー場があり、山麓の緩斜面には日南邑の自然体験、農作業体験、スポーツ、創作活動の諸施設がある。**奥日野県立自然公園**に含まれる。

花見山のシャクナゲ

日野郡日南町神戸上
ＪＲ上石見駅より車で二〇分

花見山は、岡山県との県境の山で、標高は一、一一八メートルで、岡山県倉敷市を経て瀬戸内海に注ぐ高梁川の源流である。別名を小栗ヶ山と呼び、地質は中生代に貫入した花崗閃緑岩よりなる。

西麓にはスキー場ができ、また神戸上から岡山県側の千屋花見へ抜ける県道ができ、登頂が便利になった。

登山路に沿った夏緑広葉樹林内の低木層にはホンシャクナゲが自生し、四月下旬の開花期には登山者の目を楽しませている。

ホンシャクナゲはシャクナゲの仲間の代表的な種で、県内をはじめ中国地方や四国北部に分布し、花崗岩地質を好んで群生する。

紅紫色の花は直径五センチもあり、花冠は広い漏斗状で七裂して平らに開き、多数つけて美しい。

道後山

日野郡日南町多里

広島県東城町との境界に位置する高さ一、二六八・九メートルの山。西に連なる岩樋山（一、二七一メートル）とともに中国山地の山並みの一つである。一般には両者を含めてこの山塊を道後山と呼ぶことが多い。

道後山を水源とする水系は、一つは北流し**日野川**に合流して**日本海**に注ぎ、南流する二つのうち一つは江川水系に、もう一つは高梁川水系に合して瀬戸内海に流れる。道後山の山頂は円丘状で、一等三角点がある。千メートル付近に広がる前座野呂、月見が丘などの緩斜面は高位浸食面で、中国山地に広く伸びていることから道後山面と名付けられている。一方、五〇〇メートル付近に広がる平坦面は吉備高原面と呼ぶ。このように浸食を受けて削剥されてできた小起伏の浸食面のことを準平原と呼ぶ。

道後山面から突出する道後山や岩樋山は浸食されずに残った残丘（モナドノック）である。道後山の山体は、斑糲岩や黒雲母花崗閃緑岩からなり、広島県側の山体は古生層や斑糲岩、蛇紋岩などでできている。花崗閃緑岩の風化したものからは砂鉄が採取され、斑糲岩はクローム鉱を伴う。

草原が広く牧場が見られる。また、高山植物が自生し、レンゲツツジやハンカイソウ、タニウツギの群落が有名である。広島県側にはスキー場や宿泊施設があり、山頂からの眺望もすばらしいので、**比婆道後帝釈国定公園**に指定されている。

船通山

日野郡日南町上萩山
ＪＲ生山駅よりバス三〇分、終点下車、頂上まで九〇分

標高一、一四二メートルの島根県仁多郡との県境の山で、八俣のおろちで有名な、神剣出現の伝説がある。昔、製鉄がさかんであった地方であったことから、滑鉄山所などもあった。

船通山に登る道は多里から上萩山への道が一番よく、また高宮方面から登る道もある。上萩山からは島根県仁多郡横田町に通じている。山頂には「天叢雲剣の出現」の碑もあり、近年登山者の多い観光地の一つとなっている。

昭和三十八年（一九六三）七月に**比婆道後帝釈国定公園**として指定された。面積は三四五ヘクタール（本県地域のみ）である。

船通山の鳥取県側九合目の斜面に一本のイチイの巨木がある。直幹で樹高五・四メートル、高さは低いが根囲り八・三メートルある。下部がすこぶる太く、上が細いピラミッド形をしている。枝は三十本ばかり張り出し、上方のものは短いが、下方のものは最長一九メートル以上もある。このような木が六、七本ある。枝張りの全周は七七・五メートル、その総面積は実に一九一平方メートルに及ぶ。生育推定は二千年、日本最大級のイチイの巨木であり、神木である。イチイは雌雄別株で、ここの木は雌株で実をつける。

このイチイには、須佐之男命が稲田姫と結婚し、ここに宮居を構えたとき、大蛇の霊を慰めるために植えられたという伝説がある。

昭和三十二年（一九五七）七月、国の天然記念物に指定された。イチイはイチイ科で一位とも書く。これはこの木から神官が用いる笏（しゃく）を作ることから正一位・従一位にちなんでこの名がつけられたという。

ブッポウソウ

日本に住む有名な鳥の一つにブッポウソウがある。声のブッポウソウと姿のブッポウソウとを区別する場合があり、前者はコノハズクをさす。ブッポウソウは南方熱帯で越冬し、五月に日本に飛来して産卵する。そして八月の終りに南国へ帰る夏鳥である。大きさはハトとツグミのあいだくらいで大きな黄色のくちばしを持ち、全身は瑠璃色で美しく、熱帯鳥を思わせる。翼を拡げるとその中央に白い円斑があるので日野郡ではモンツキともいい、ギャアギャアと鳴き、カラスに似ていることから、日野郡ではコッテイカラス・チョウセンカラス等とも呼ばれる。

日本では本州各地に飛来するが、本県は他府県に例を見ない大繁殖地であった。その中心は伯備線の日南、日野、江府、溝口町である。また、八頭郡八東町で繁殖していることが確認されている。日野地方では、木製の電柱の穴を利用して営巣していたが、コンクリート製に取り替えられたため減少した。現在、巣箱を掛け、かつての生息状況を取り戻そうとする試みがなされている。

日野町

根雨（ねう）の町並み

日野郡根雨町根雨
ＪＲ根雨駅より徒歩三分

根雨は**日野川**とその支流板井原川の合流点に位置し、上方に上る出雲往来と、備後に通じる日野往来とが交差する交通の要衝で、物産の集散地として開けた町である。特に出雲往来の主要な宿駅で、寛永十四年（一六三七）にはすでに当宿の名が見え、寛文年間には渡船場・御茶屋の整備も図られた。

宿場町の面影を残す町並みは南北に長く、出雲往来は通りを南進し、日野往来は町並みを右折して板井原川を渡り、根雨神社の前を通る。

松江藩主の御茶屋は、町並みの中央部にあったが、梅林家の前に残る「本陣の門」（町指定保護文化財）は、移築されたものである。梅林家は代々根雨神社宮司職を勤めており、家構えも古い。敷地の南側にある祠は旧根雨神社本殿を移築したもので、形式から見て寛文年間に造られたものと見える。

また、日野川流域は、昔から奥出雲地方と並んで「たたら製鉄」の産地として知られており、江戸時代から明治・大正・昭和にかけては近藤家が地域産業・経済の中心となっていた。

近藤家住宅は町並みのやや上手にあるが、江戸時代末期の建築で、土蔵と一体となった店構えは、根雨の町並みの中でも、ひときわ豪壮で精緻な造りである。向かいには同様の造りの出店近藤（現日野町公舎）がある。

板井原川に架かる祇園橋（昭和八年、ＲＣ造）は高欄にぎぼしを載せた風情のある橋である。祇園橋の反対側、町並みを見下ろす山の中腹に

は、近藤家が町に寄贈した町家風のモダン建築・**旧根雨公会堂**（現日野町歴史民俗資料館・国指定登録文化財）や、梅林家の下手には洋風の山陰合同銀行根雨支店（昭和初期、旧松江銀行根雨支店）があり、町並みに彩りを添えている。根雨は歴史と文化の薫る町である。

根雨神社社叢

日野郡日野町根雨
ＪＲ根雨駅から徒歩七分

根雨神社社叢は、板井原川が**日野川**に合流する地点、国道一八一号の新旧道路に挟まれる位置にある。根雨中心地東方に位置する旧社殿域と西方にある現社殿社叢からなる。ともに昭和五十九年（一九八四）二月に日野川流域に残る貴重な照葉樹林として、県の天然記念物に指定された。

旧社殿域は標高二一〇～二七〇メートルの尾根の末端にある。社叢は手厚く保護されたシラカシ、ウラジロガシ林で、樹高約二〇メートルの巨木も多く樹勢もよい。主要樹林の胸高直径はシラカシ一メートル、ウラジロガシ一・二メートル、アラカシ〇・七メートルなどである。

現社殿は標高一九〇メートルで、道路建設によって細長く縮小されたが、シラカシ巨木林の面影を残している。そして近郷に見ないカゴノキやオオキヨスミシダが生育する。

日野町歴史民俗資料館

日野郡日野町根雨
ＪＲ根雨駅より徒歩一〇分

宿場町根雨の東の高台、根雨神社と相対する山の中腹、旧八幡神社の社地に建つ木造二階建、切妻造妻入りの建物である。

鉄山経営で財をなした近藤家七代当主寿一郎が建設費の大部分を寄付し、根雨公会堂として昭和十五年（一九四〇）三月に竣工した。

根雨公会堂は、戦前の多くの公民館と同じく、映画・演劇・講演など各種の催し物会場として使われ、日野往来の文化の発信地となった。戦後も長らく町の公民館として親しまれていたが、他の公共施設の充足にともない公会堂としての利用は年々減少した。昭和六十一年（一九八六）からは日野町歴史民俗資料館に衣替えし現在に至っている。屋根が平成七年（一九九五）に葺き替えられているが、そのほかは改造されておらず内外装とも当初の状況をよく伝えている。

眼下に広がる町並みと調和する民家調のデザインは寄贈者・近藤寿一郎の希望でもあり、屋根は赤い石州瓦で葺かれ、外壁は大壁造りモルタル粗面仕上げ・ポツ窓の組み合わせとなっている。大正末期から関西の住宅建築で多用されたものである。これは建築家・武田五一（たけだごいち）が和洋折衷の住宅に最適としたデザインで、和風にスパニッシュ趣味が取り入れていて、武田自身「新日本式」と称したものである。一階正面や側面にみられる円柱を立てたコロネード風のデザインにもその影響がうかがえる。

町並みを表現したデザインからは派手さが見えないが、劇場としての価値は今も高く、その機能も失われていない。正面入り口上部の妻壁には、当初から、モザイクタイルで根雨のネと文化の文を重ねたシンボルマークがあり、文化の殿堂としての容姿も変わらない。

- ●入館を希望する場合は要予約
- ●開館時間　午前九時～午後四時
- ●問合せ先　☎０８５９・７２・２１０７

オシドリ

鳥取県の南西部に位置する日野町**日野川**には毎年秋から春にかけて多くのオシドリが飛来する。

数年前、住民によってオシドリを観察するための小屋が設けられ、オシドリを見ようと町内外から多くの人が訪れる。

また、町内には、オシドリの餌となるドングリ集めや、川の清掃、オシドリの情報提供等の活動に取組むグループがある。このような地道な活動が実を結び、現在、日野川では多いときで七〇〇羽以上のオシドリを見ることができる。

オシドリは日野町のシンボルであり、その愛らしい姿は菓子や木工芸品等のグッズにもなっている。

生田長江

日野郡日野町黒坂
ＪＲ黒坂駅より徒歩一〇分

生田長江は、大正期を中心に、評論、小説、戯曲、翻訳と多彩な文芸活動を展開した。

明治十五年（一八八二）日野町に生まれた。本名は弘治。東京大学在学中に『小栗風葉論』を発表して注目され、以降、昭和十一年（一九三六）に亡くなるまで、評論や小説、戯曲など幅広く活躍している。特に、文芸評論ではしばしば厳しい見解を示したことから、文壇から孤立する側面もあったが、その実力と発言は無視されなかった。また、『ニイチェ全集』の翻訳にも力を入れている。

日野町根雨の延暦寺境内には、生田長江の二段の碑がある。上の段には彫刻家・**辻晉堂**が描いた似顔絵が彫られている。下の礎石には弟子であった佐藤春夫の文章が刻まれている。この碑は地元の「長江顕彰会」が昭和三十三年（一九五八）に建てた。

黒坂城跡

日野郡日野町黒坂
ＪＲ黒坂駅より徒歩一〇分

日野川の上流部に近い黒坂の住宅地の周辺に、中世と近世と時代の異なる二つの古城跡がある。

住宅地の北方にある要害山は、文字どおりに天然の地形に守られた中世の山城跡で、日野郡の豪族・日野氏代々の居城跡である。元弘三年（一三三三）、**名和長年**が後醍醐天皇を奉じて**船上山**に挙兵したとき、この地の日野三郎義行は一族とともにはせ参じた。

一方、近世の古城跡は、住宅地の西方、現在県立日野高校黒坂校舎のある所である。ここには慶長十五年（一六一〇）に、五万石の領主として伊勢の亀山から転任してきた関一政が城を築いた。鏡山城とも呼ばれた。元和四年までの短年ではあったが、日野郡の行政の中心地として栄えた。

今も日野川に平行して約八〇〇メートルにもおよぶ直線道路が南北につづき、五万石の城下町の面影をしのばせている。

黒坂のキシツツジ

日野郡日野町黒坂
ＪＲ黒坂駅よりすぐ

キシツツジは、ツツジ科に属し、紅紫色で美しく、中国地方の西部および四国に分布する。日本固有種である。

日野町上菅・日南町生山の**日野川**の沿岸近くに限って、白い花崗岩の上にキシツツジが生育し、五月中旬の開花期に旅行者の眼を驚かせる。その中心地点が黒坂である。特に日野川の藪津橋付近の約一キロメートルの間は、キシツツジの大群落地帯である。

泉竜寺

日野郡日野町黒坂
ＪＲ黒坂駅より徒歩一〇分

曹洞宗の寺である。寺伝によると、慶長二年（一五九七）に関一政が、伊勢（三重県）から日野会見五万六千石に転封されて来たとき、泉竜寺を上菅から現地域の一〇〇メートル奥に位置する杉ガ谷に移し、祈願所としたことに始まるといわれる。その後、洪水により大破し、安永五年（一七七六）に現地に移建された。

観音堂は同年に建てられたもので、本堂は天明三年（一七八三）の建立である。幕末の因幡二十士の流謫幽閉の寺として名高く、その遺品として剣術具、机、本箱、碁盤なども所蔵されている。寄せ書のような遺墨は、二十士の感懐をうかがわせる。また、大西正虎の血書の歌は特に名高い。二十士の幽閉の室、馬小屋、槍つきのマツなども残っている。なお、二十士が分宿していた光明寺、正法寺、光徳寺も町内にある。

因幡二十士とは次のとおり。鳥取藩主・池田慶徳は、水戸烈公の第五子であった関係もあり、天下に率先して尊王攘夷を唱えた。しかし、藩内では佐幕派と討幕派の対立が激しく、因幡の青年勤王派は、君側の重臣の態度を疑い、「佐幕派と目し藩主の明をおおい天下に誤解を生ぜしめた」と憤激し、文久三年（一八六三）八月十七日、君側の奸を除くと称して、京都本国寺を襲い、黒部権之介、早川卓之丞、高沢省己を斬殺した。なお、二十士は正しくは二十二士である。

長楽寺

日野郡日野町下榎
ＪＲ根雨駅よりバス一〇分、安原入口下車、徒歩三〇分

日野川畔から約二〇分の行程の山峡にあって、紅葉の頃が最もよい。かつて寺は現寺域の上方にあたる**鵜ノ池**畔に近い所にあった。

現在は曹洞宗に属すが、寺伝によるともとは天台宗に属した。僧坊は十二院が建ち並び、平宗盛の尊敬が厚かったが、平家の滅亡時に**大山寺**とことをかまえたため焼き滅ぼされ

たと伝わる。

寺は小庵であるが、多数の旧国宝仏を有している。本尊薬師如来、両脇侍の日光、月光の両菩薩はいずれも木彫で、平安朝後期の優秀な古仏である。毘沙門天は、時代を少しさかのぼって藤原時代の作とみられる。鋭利にして精緻な彫刻である。これらは大正九年（一九二〇）四月に国の重要文化財に指定された。不動明王は平安後期の作とみられる。昭和十七年（一九四二）十二月に国の重要文化財に指定された。左右に揃う十二神将像は、足利時代までの作と思われる。ほかに寺内から出た平安朝の唐草古鐘、もとの寺跡から出た宋銭二枚が所蔵されており逸品である。

寺の建築は新しいが、格天井の花鳥は、精密極彩色でなかなか巧みである。これは備後（広島県）の狩野派の画家・法橋索準の手によるものである。

金持神社

日野町金持
JR根雨駅よりバス一〇分

天常立尊・八束水臣津奴命などを祭神とし、近世までは「三体妙見宮」といわれていた。

社伝によると、出雲国薗妙見宮から勧請されたという。勧請された年代は不明である。維新後に、現社名に改称された。「金持」という景気のよい地名は、タタラか鍛冶に係わるカヌチ・カナジの語から出た地名だろうといわれる。また、『太平記』に登場する金持景藤をはじめ、『吾妻鏡』『愚管抄』『大山寺縁起』などに名が出る金持氏の本拠地であったと思われる。

この「金持」という縁起の良い名前から、昭和後期から注目され始めた。「当社に祈願してから宝くじを買ったら大当りした」とか、その真偽は別として、噂が噂を呼んで今様流行神となりつつある。

鵜ノ池

日野郡日野町下黒坂・下榎
JR根雨駅から車で十五分

標高四〇五メートルの所に位置する。**日野川**左岸に位置し、河床からの比高が約一八〇メートルで、標高四〇〇～四七〇メートルに広がる鵜の池高原とよばれる緩起伏の河岸段丘状の台地上にある。

周囲四キロメートル、水深一二メートル、面積〇・一九平方キロメートルの池。もとは自然にできた池であったが、文化年間（一八〇四～一八一八）と昭和十四年（一九三九）に堤防がかさ上げされ、現在、灌漑用、発電用と多目的に利用されている。

周辺の山々にはコナラやクヌギが茂り紅葉の名所としても知られるほか、ウグイス、シジュウカラ、マガモなど留鳥、夏鳥、冬鳥が生息し、四季を通じて野鳥の楽園となっている。県の鳥である**オシドリ**自生地として知られ、多いときには二百五十羽が飛来した。鳥獣保護区に指定され、**奥日野県立自然公園**に所属する。

近くに**長楽寺**があり、かつては鵜の池の形成にまつわる伝説の一つ、卯野左内にちなみ「卯の池」と呼ばれたが、現在は池に多い鵜にちなんで「鵜の池」と呼ぶようになったといわれる。

滝山公園

日野郡日野町中菅
JR黒坂駅より徒歩二〇分

平安時代、承平七年（九三七）の創建ニ伝えられる滝山神社と全山燃えるように咲くダイセンミツバツツジで有名な公園である。**奥日野県立公園**に指定されている。国道一八〇号を日野町黒坂まで行き、黒坂橋の前から**日野川**と別れ一本道を行くと、滝山公園前の広い駐車場に到着する。ここには、自然石を使った親水護岸の工法で整備された河川公園がある。橋を渡り、大径のスギ並木が続く参道を登ると、本殿の奥に落差五〇メートル程の**竜王滝**がある。

竜王滝は小泉八雲の小説『骨董』の中で、幽霊滝として紹介されている。

滝の上に出ると、春先には高山植物のイワカガミが咲く。さらに、公園の上方にある茗荷峠（標高八八八メートル）に続く。峠の近くには不動ケ嶽と呼ばれる岩屋があり、不動尊を祀っている。この辺りが戦国期の尼子合戦の古戦場である。夫婦桜と呼ばれるヒガンザクラの巨樹も一見に値する。なお、ツツジの見頃でもある四月二十九日が滝山神社の祭日であり、花見を兼ねた参詣人でにぎわう。

竜王滝

日野郡日野町中菅
ＪＲ黒坂駅より徒歩二〇分

竜王滝は日野町黒坂の滝山神社の裏山にかかる滝である。滝山神社は滝山竜王権現と不動明王を祀り、病気平癒を主とする滝行が行われた信仰の山と滝である。小泉八雲が『怪談』のなかで「幽霊滝」として紹介したように、この地には天狗が棲むという伝説がある。

伝説

日野町中菅の女性たちが集まって夜なべ仕事をしていると、肝試しをすることになった。大工の若嫁が出発し、肝試しの証拠に賽銭箱を抱えて帰る途中、天狗が笑っているのを見た。恐ろしくなった嫁が神社から駈け降りてくると、背中の子どもの頭がなかったという。

この伝説により、滝山神社には二歳になる子を連れて行ってはいけないと言い伝えられている。

また、同じように天狗が棲むと信じられた大山では、二歳の時に詣り、それから十歳までは詣ることができないという。この禁を犯すと、背負った子どもの頭が失われたり、歩ける子どもは行方不明になるという。

久住滝

日野郡日野町久住
ＪＲ黒坂駅より車で七分

黒坂から北西にいたる天郷川支流沿いの標高四五五メートルから五三〇メートルにある多段滝である。花崗岩に形成された断層や節理のある部分にできた滝で、道路からは二段の滝に見えるが、その上にも滝がある。滝の幅は六～九メートルで、滝つぼの水深は〇・五メートル～一メートルである。

平成三年（一九九一）、周囲の樹木が伐採されてから、多くの人に知られるようになり、募集してこの名が付けられた。

宝仏山

日野郡日野町・江府町
ＪＲ根雨駅より車で二〇分

県西部、日野郡江府町と日野町の境界にある標高一、〇〇二メートルの山。南側を**日野川**支流の板井原川、西～北側を日野川本流と支流の俣野川に区切られ、東は岡山県との県境稜線の毛無山（一、二一八メートル）、白馬山（一、〇六〇メートル）、金ケ谷山（一、一六四メートル）、朝鍋鷲ヶ山（一、〇七四メートル）へと続く山塊の西端に位置する。この山塊は開析がかなり進み、壮年山地の山容を見せている。

宝仏山を構成する岩石は、三郡変成岩の泥質片岩、砂質片岩、苦鉄質片岩と、これらを貫く花崗岩類である。花崗岩類には黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、ハンレイ岩があり、白亜紀末期から古第三紀にかけて貫入した。山頂の南西山腹にある後谷鉱山は、苦鉄質片岩分布域に位置し、銅・鉛・亜鉛などを産出したが現在は廃鉱になっている。

宝仏山～朝鍋鷲ヶ山の一帯は良好な自然が保たれており、平成十四年（二〇〇二）三月、**大山隠岐国立公園**へ編入された。

江府町

江美城跡

日野郡江府町江尾
ＪＲ伯備線江尾駅より徒歩一〇分

まちを見おろす高台に位置する城跡。城跡上部は平坦で田地となり、所々わずかに石垣を残している。戦国時代には、尼子氏の臣・蜂塚氏の居城であった。日野方面の押さえの城であったが、永禄七年（一五六四）（一説には永禄八年）八月、毛利方である尾高城主・杉原盛重の軍勢に攻められ落城した。

日本各地に「えび」を地名とする所は数多い。地名の由来も「えび」の背のように美しく湾曲する地形にちなむ所が多い。**日野川**の岸が見事にカーブする景観の美が、ここの江尾の地名の由来ともいわれている。昭和五十四年（一九七九）に、城跡への入口に歴史民俗資料館「八幡丸」が建ち、豊かな地元の郷土資料を展示している。

また、例年八月十七日の「江尾十七夜」には、戦国の昔をしのび**「江尾のこだいぢ踊」**（県指定無形文化財）が踊られる。

江尾のこだいぢ踊

毎年八月十七日に開催される「江尾十七夜」で踊られる盆踊り。編み笠に浴衣姿の多数の踊り子が太鼓と音頭に合わせて優雅に踊る。

「こだいぢ踊」という名称の「こだいぢ」とは、古代の地おどりという言葉に由来する説と新潟県の新保「広大寺」のことで、江戸時代後期に流行した歌に由来するという説がある。その口説きを真似て盆踊りに唄い踊られてきたものである。昭和四十九年（一九七四）、県の無形民俗文化財に指定された。

江美神社

日野郡江府町江尾
ＪＲ江尾駅より徒歩五分

饒速日命などを祭神とする。社伝によると、天暦年間（九四七～九五七）に当地方を治めた豪族・進氏が、大和国石上神宮（現奈良県天理市）の分霊を、天の磐船に模した神輿に安置して勧請したことから、かつては磐船神社と称したという。その後、厩戸豊聡耳命を合祀し、王子権現と神社名を改めた。

天文五年（一五三六）には、江尾城主・蜂塚右衛門が本社を造営し、社領六十三石寄進した。しかし、永禄八年（一五六五）、毛利・尼子の戦で神社は古文書・什宝と共に焼失したという。天正元年（一五七三）銘の棟札には、吉川元春が社殿を再興したとある。慶長六年（一六〇一）、米子城主・中村一忠は社領六石と家屋敷を寄進した。

明治六年（一八七三）に江尾神社と改称され、大正十一年（一九二二）に近隣の小祠を合祀し、現在地に移され、社名も江美神社に改めた。

東祥寺

日野郡江府町江尾
ＪＲ江尾駅より徒歩五分

東祥寺は、山号を仏日山といい、日野郡内唯一の黄檗宗寺院である。本尊は釈迦牟尼仏である。

『江尾宿東祥寺縁起』によると、この寺が開かれたのは寛文七年（一六六七）のことという。それ以前は、江尾城主・蜂塚氏に関わる天台宗の大森山清洞寺という寺院があったといわれる。城主滅亡と共に衰退していった清洞寺は、杉谷（同町内）の大林寺、貝田（同町内）の常楽寺、宮市（同町内）の宝勝寺の三寺と合して東祥寺とした。

承応三年（一六五四）黄檗宗布教のために明（現中国）より渡来した三十六人の僧の一人、独吼和尚が開いた。和尚はまず米子**了春寺**を開いて教化し、次いで東祥寺を興したと伝えられている。

下蚊屋明神のサクラ

日野郡江府町下蚊屋
ＪＲ江尾駅よりバス十五分、終点下車、徒歩三分

明神のサクラは、岡山県境に近い標高六〇〇メートルに位置する下蚊屋明神の境内にそびえる巨木である。サクラは、本州から九州に自生

するエドヒガンで山桜の中でも花期が早く、学術上貴重であることから昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

幹は地上三～七メートルの所で六本に別れ、広い傘形の樹冠をつくり、社叢の他の木より抜き出ていて、遠くから眺めても見分けがつく。花は小形でうすい紅色、花弁は五枚で、満開期は四月中、下旬である。

なお、大型の樹木で樹齢も長く、社寺林によく植えられているシダレザクラは本種の栽培品種である。

下蚊屋（さがりかや）の荒神神楽

鳥取県の南西部に位置する日野郡日野町、日南町、江府町では、備中神楽を伝承する集落がある。なかでも、江府町下蚊屋の荒神神楽は、集落の青年団が大正末期に美作から来た神楽を習い、昭和初期から長年の間、伝え継いできた民俗芸能である。

演目には、スサノオノミコトが大蛇を退治する「八重垣」、オオクニヌシノミコトの国譲り神話を扱った「国譲り」などがある。

本来、岡山で行われていた荒神に奉納される神事・備中神楽を導入したものであるが、現在では鳥取県西部地方を代表する民俗芸能として受け継がれている。

昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。

毛無山（けなしやま）のカタクリ

日野郡江府町俣野
ＪＲ江尾駅よりサージタンクまで車で二十五分、徒歩四〇分

毛無山は、江府町の南東、岡山県との県境である標高一、二一八メートルの山。古い登山路は岡山県側から延びていたが、近年、江府町俣野（またの）川（がわ）下発電所に付設された巨大サージタンク（標高七〇〇メートル）から山頂に向かう登山道路が開かれ、鳥取側からも容易に登山できるようになった。

俣野からの登山路を登り、標高一、一六〇メートルで毛無山と白馬山の稜線が合流するあたりのブナ林の林床がカタクリの生育地として知られる。カタクリはユリ科の多年草で、地下茎に良質のデンプンが含まれ、かつては粉を精製したが、近年では乱獲を防ぐため保護の対象になっている。

早春の花の代表として知られ、毛無山での花期は四月下旬から五月上旬である。一本の花茎の先に、紅紫色の大きな花被片が反り返り群生して咲き乱れる様はみごとである。

熊野（くまの）神社社叢

日野郡江府町俣野
ＪＲ江尾駅よりバス十五分、農協支所前下車すぐ

熊野神社社叢は、標高約三五〇メートルに位置し、**日野川**の支流である俣野川下流に沿って、俣野小学校に隣接している。

社殿付近には植栽されたイチイ、スギ、ヒノキ、ヒメコマツなどの巨木もあるが、天然のウラジロガシ、ケヤキ、ヤブツバキが多く昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

特にウラジロガシの巨木が多く、胸高直径が一・三メートルに達するものがあり、その他ケヤキの胸高直径一・三メートル、イチイ〇・八メートルなどの巨木を見る。

かまこしき渓谷

日野郡江府町
ＪＲ江尾駅よりバス二〇分

俣野川中流部に位置する渓谷で、約六〇〇メートルにわたって花崗岩の特異な浸食地形が見られる。花崗岩は白亜紀末～古第三紀の黒雲母花崗岩で、互いに直交する水平と垂直の三方向の節理面が発達する。渓谷の流路はこの節理に規制されて、直角に方向を変えながら屈折し、切り立った壁の間を廊下状に流れ、階段

状の小瀑布や瀬・淵が続いている。

渓谷の最下流部には低い二段の滝があり、ここに名称の由来である〝かま〟（釜）と〝こしき〟（甑）とよばれる地形が見られる。釜は下段の滝壺に円形にひろがる淵で、甑は上段の幅狭い滝壺に形成された深い穴で、甌穴（ポットホール）と考えられる。この甌穴の口径は約三メートル、深さは七メートルあるいは九メートルとも言われ、口径に比べてかなり深い。

こうした特徴的な花崗岩の浸食地形から、平成十一年（一九九九）に「かまこしき渓谷の浸食地形」として県の天然記念物に指定された。

渓谷の上流には、流路に沿って下る遊歩道が整備されている。また、渓谷の八〇〇メートルほど上流の助沢地区には下蚊屋ダムが建設された。

俣野川ダム

日野郡江府町武庫
ＪＲ武庫駅より車で一〇分

中国電力株式会社俣野川発電所の発電用ダムで、珍しい揚水式であり、見学することができる。米子市から国道一八一号で**日野川**をさかのぼる。俣野川が日野川に注ぐ合流点にある。

俣野川ダムには駐車場や案内ホールの建物があり、猿飛湖と名付けられたダム湖や上流の発電所を一望できる。昭和五十九年（一九八四）に完成したもので、ダム高は六九メートル、堤長一八五メートル、総貯水容量七九四万立方メートルである。

南に位置する岡山県新庄村の土用川に「上池」となるダム湖が造られている。この俣野川ダムを「下池」として、両者を三・四キロメートルの導水路で結んでいる。二つのダムの落差五〇〇メートルを利用して百二十万キロワットの発電が可能である。ここでは、電力消費の少ない夜間に、他の発電所で発電された電気を使って「下池」の水を「上池」へ汲み上げ、一方、電力消費の多い昼間に「上池」の水を「下池」に落として発電している。汲み上げる時に、俣野川発電所はちょうどポンプの役割を果たしていることになる。

なお、俣野川の本流では、さらに上流で農業用の下蚊屋ダムがある。ダム湖の横を走る県道上徳山俣野江府線を行くと、途中で俣野川と分かれて大山広域農道を上り、内海峠に至る。右に行けば岡山県川上村の蒜山高原で、左をとれば御机を経て大山方面に通じている。新緑や紅葉の時には、ドライブに最適なよいコースである。

武庫の七色ガシ

日野郡江府町武庫
ＪＲ武庫駅よりすぐ

小学校の後方にある雑木林のふもとに樹齢三〇〇年、樹高一八メートルの一本カシの大木がある。伝説によると、現在ある武庫一帯の水田は昔は淵で、ここに大蛇が住んでいた。ところがこの淵が水田になってしまったので、大蛇のいるところがなくなり、ついにこのカシに巻きついたというのである。したがって、蛇樫（ジャガシ）とも呼ばれ、木に傷をつけると血が出るといわれている。

七色カシという名は、一年中いろいろと葉芽の色を変えることからつけられた。四月ごろは紫、五月ごろには黄、六月は白、七月は赤、八月は緑、九月下旬から翌年三月ごろまでは青黒色と順次変色する。変色の原因は、日光に対する保護作用によるものと思われる。この七色ガシは環境による個体変異であって、この木のタネを取って蒔いても七色ガシにはならない珍種である。当地方の名木になっている。

州河崎のカツラ

日野郡江府町州河崎
ＪＲ江尾駅より徒歩一六〇分

州河崎のカツラは、江尾駅から**日野川**を渡り、大谷林道を約二キロメートル上がった熊ケ山（四三六メートル）の山麓で、標高三二〇メートルの渓流沿いの西向き斜面に生育する。カツラは鉄山の守護神とされるカツラ科の落葉高木で、その頃からこのカツラは金屋子神が宿る神木として祀られ、大切に保護されてきた樹である。

巨樹は根元近くから分岐しており、それを一本の材として測定すると、目通り一一メートル、樹高二八メートル、枝は三〇メートルに達する。

その形状から大きさを比較することは難しいが、河原町落河内のカツラとともに日本有数の巨樹と考えられている。「とっとりの名木一〇〇選」に選定されている。

物産 エバーランド奥大山

日野郡江府町御机
ＪＲ江府駅よりバス二〇分、太平原下車

奥大山のふもと、大山環状道路沿いに平成十一年（一九九九）十二月

に開設した。レストランからは奥大山の雄姿を望むことができ、「奥大山スキー場」もすぐそばという絶好の場所に位置する。館内にはビールを仕込む「ブルワリー」があり、奥大山の名水を利用して、地ビール『ブナの森から』が造られている。

江府町は自然保護憲章発祥の地でもあり、この地ビールの売上金の一部は自然保護のために役立てられている。施設内の物産コーナーでは、地元の特産品や地ビールが販売されている。

●開館時間　午前一〇時～午後八時
●休館日　火曜日（祝日の場合は翌日）
※夏休み等は無休
詳しくはお問い合わせください。
●問合せ先　☎〇八五九・七七・二八二八

溝口町

伯耆鬼ミュージアム

日野郡溝口町宇代
ＪＲ溝口駅より徒歩二〇分

日本最古といわれる鬼伝説がある溝口町に、平成八年（一九九六）四月に開設した。山の中腹から町を見下ろす高さ三二メートルの鬼のブロンズ像が目印。施設には、国内外の鬼伝説や地元の鬼伝説「鬼住山物語」を紹介する三Ｄシアターやアニメーションシアターが設置されている。

展望台からは、鬼伝説の舞台となった山々や町の守護神として配置されたいろいろな鬼たちを見ることができる。

平成九年（一九九七）四月には、周辺に多目的グランド、大型遊具、野外ステージを備えた「おにっ子ランド」が隣接して整備された。

●開館時間　午前九時三〇分～午後五時
●休館日　毎週火曜日、一月一日
●問合せ先　☎〇八五九・六二・〇二〇二

伯耆国山岳美術館（ほうきのくにさんがくびじゅつかん）

日野郡溝口町金屋谷
ＪＲ伯耆溝口駅より車で七分

大山の南側の裾野に平成五年十二月に開設された私立美術館。大山を中心とする国内外の山岳と自然をモチーフにした作品や、地元で活躍中の作家の作品を展示している。展示品には、山岳画家として知られる足立源一郎氏の作品など、社団法人日本山岳会から寄託されているものが含まれる。

また、併設されたサブホールは、貸しギャラリー（無料）として小品展や趣味の会展などに利用されている。

●開館時間　午前一〇時～午後五時
●休館日　月曜日・祝日の翌日
●問合せ先　☎〇八五九・六三・〇三九六

楽楽福神社（ささふくじんじゃ）

日野郡溝口町宮原
ＪＲ伯耆溝口駅より車で五分

近世までは楽々福大明神といわれ、孝霊天皇と皇妃細姫（くわしひめ）を主祭神とする。

孝霊天皇が伯耆国巡幸の際、笹をもって行宮を葺いたので楽々福宮（ささふくのみや）と称し、和銅二年（七〇九）に天皇・妃を祀って楽々福大明神としたといわれる。境内にある古墳は同天皇のものと伝えられる。孝霊天皇伝説は西伯耆各地で語られている。神社近くの鬼住山（きずみやま）には「悪鬼が住み、人々を苦しめていた。隣の笹包（ささつと）山は、その悪鬼を退治された同天皇に笹に包んだきびだんごを献上した所」という伝説がある。

かつて村内には神宮寺である三帝山孝霊院があったが、元禄年中（一六八八～一七〇四）の大火で焼失した（『伯耆志』）。藩政期には日野郡の大社であり、口日野の総産土神であった。近代まで当社の祭日に催される奉納相撲は、郷土力士の出世相撲の場所であった。

明治元年（一八六八）に現社名となり、大正五年（一九一六）に近郷小社を合祀した。

当社では、伝承に基づく「悪鬼降伏祭」や氏子の無病息災を祈る「福笹授け」などが行われる。また、歯痛止めの神としても信仰された。

福岡神社の蛸舞神事（たこまい）

日野郡溝口町福岡
ＪＲ伯耆溝口より車で二〇分

福岡神社は鎌倉時代に熊野神社を

勧請したと伝え、速玉男命を祭っている。もとは上代神社といい、「蛸さん」といわれ親しまれている。創立年代は不明であるが、古くは若一王権現といわれた。

社伝によると若一王子権現は熊野三社内の速玉男神であり、大昔、紀伊国熊野浦より大蛸に乗り、吉備国へ上陸しこの地に到来されたという。

当神社には毎年十月十九日の例祭で行われる蛸舞神事という奇祭がある。これは、藁で造った蛸を奏楽の拍子に合わせて舞わせるもので、昔、当社の祭神速玉男命が海中で蛸に助けられたことを記念しそれをかたどったものという。蛸舞が終了すると人が棟木に抱きつく。奏楽に合わせながら、下にいる人々によって棟木を回される。なお、この行事は氏子が裸で参加する。昭和六十一年（一九八六）に県の無形民俗文化財に指定されている。

辻晋堂

辻晋堂は現代彫刻の異才である。

明治四十三年（一九一〇）、日野郡二部村（現在の日野郡溝口町）に生まれた。本名は為吉。大工に弟子入りし彫刻の才能を発揮、評判になる。昭和六年（一九三一）に上京し、洋画を学びながら彫刻を独学した。昭和八年（一九三三）の日本美術院展に『千家元磨氏像』が初入選し、彫刻家としての第一歩を踏み出した。

このころ晋堂は、写実的な木彫の作品を多くつくっている。また、禅の思想にひかれて僧籍に入り、晋堂と号した。

昭和二十四年（一九四九）、京都市立美術専門学校（現在の京都市立美術大学）の教授になる。写実的な作風から離れ抽象的な作品を（自分の精神の内面を）作るようになる。その後、「陶彫」という粘土を焼いて制作する彫刻作品で、独自の世界を拓いた。

昭和三十二年（一九五七）サンパウロ・ビエンナーレ展、翌年のベニス・ビエンナーレ展に出品、東洋的な作品として高く評価されている。

昭和五十六年（一九八一）、七十歳で死去。昭和五十一年（一九七六）に京都市文化功労者に選ばれた。

主要作品に『寒山』『拾得』をはじめ『下田光造氏像』や『佐々木惣一氏像』などがある。

二部小学校の『拓士の像』は故郷への記念碑的な作品である。

語彙の説明

本文中に使用した語彙のうちあまりなじみのないものを掲載しています。語彙によっては、特定の分野を想定して説明しているものがありますので予めご了承ください。なお、記載に当たっては「広辞苑第四版」（岩波書店）「建築大辞典」（彰国社）等を参考にしました。

《あ行》

入母屋…屋根形式の一つ。上部を切り妻形式にし、その四方に庇屋根を付けたもの。

入側柱…入側とは民家において座敷の外の縁側のことをいう。入側柱は座敷寄り（内側）にある柱。これに対しては側柱は建物の外周に並ぶ柱の総称。

磐座…神の鎮座する所。

磐境…神の鎮座する施設・区域。

うだつ…卯立、宇立、卯建などと書き、ウダチとも称する。棟を支えるためにはりの上に垂直に立てられた材の呼称。町家において、二階の両端に突き出る控え壁の呼称。

※**うだつ造**…茅葺き屋根で、さす組と違い、棟木を棟束で支えている小屋組。

『**延喜式**』…弘仁式・貞観式の後を承けて編集された律令の施行細則。平安初期の禁中の年中儀式や制度などを漢文で記載したもの。

《か行》

笠木…鳥居や門・坂塀などの上にわたす横木。

花頭…花頭は火灯、華頭とも書く。花頭窓にみるように上が狭く、下の広がった形。なお、花頭窓は、禅宗建築とともに日本に広がった。

唐門…唐破風造りの屋根の門。

※**平唐門**…棟の両端に唐破風が付いた門。

※**向唐門**…棟の前後に唐破風が付いた門。

伽藍…寺院の建築物の総称。

雁行…雁が列をなして飛ぶようになめに並ぶこと。

※**雁行形（建築）**…雁が列をなして飛ぶようになめに建物が配置される形。

勧請…神仏の来臨をこうこと。神仏の分霊を請じ迎えてまつること。

基壇…建物の下の石または土の壇。

木鼻…社寺建築の隅柱などで柱の頂部を貫通して横に架けてある材が柱の向う側に突出している部分。

※**拳鼻**…木鼻の一つ。拳状のもの。広義には木鼻と同義。

切目縁…縁板となる板を縁の長手方向には張らないで、直角に木口が見えるように張った縁。

曲浦…曲がりくねった海岸。

『**愚管抄**』…鎌倉書記に作られたわが国最初の史論書。神武天皇から順徳天皇までの歴史を仏教的世界観で解釈し、政治の変遷を説明したもの。

庫裏…寺の台所。住職や家族の居間。

潔斎…神事・法寺などの前に酒や肉食などをつつしみ、沐浴などをして心身を清めること。

格天井…断面二〜二・五寸角の材（格縁）を縦横に組合せて裏板を張った天井。格間は正方形で格縁間隔は一・五〜三尺ばかり。

※**折り上げ格天井**…格天井の一つ。天井長押（回り縁）から丸形の支輪にて折り上げた格天井。

高欄…建物の縁回り、須弥壇の四方、階段や橋の端部に設けられる手擢状の工作物で、特に伝統様式を持つものをいう。

虹梁…社寺建築において化粧を兼ねた梁。

向拝…社殿や仏堂の正面階段の上に張り出した庇の部分。

垢離…神仏に祈願するため、冷水を浴びて身体のけがれを去って清浄すること。

コロネード…庇の下など壁のないところに点々と柱を立てた廊（下）。

《さ行》

ささら子下見…外壁の板張り手法の一つ。建物の外壁の下部に板を張る際羽重ねに張り、外側をその形にあわせてささら子（刻みのついた押し縁）を用いて押さえた板壁仕上げ。

扠首…茅葺き屋根で、丸太や角材などを交ささせて合掌組みにした小屋組をさす呼称。

散形花序…主軸の先端から多数の花びらが算出して傘の骨のように広がって咲く花の並び方。

三尊…本尊とその左右に控える二脇侍の菩薩の総称。

※**三尊形式**…三尊の配置のように見せる石組。

ジャイアントオーダー…一階から二階までにわたる大オーダーのこと。オーダーとはギリシア・ローマ建築における柱の呼称で、ギリシアではドリス式、イオニア式、コリント式の三種があった。

須弥壇…仏像を安置する木造の壇。

準平原…一つの浸食輪廻が完全に終わったときに現れる地形。ゆるやかに波打つ平坦な地形。

神撰…神に供える飲食物。

心礎…木造の塔にある中心の柱の礎石。普通の礎石よりも大きく、中心に柱を受ける座や孔があることが多い。

神仏混淆・神仏習合…神の信仰と仏教信仰を折衷して融合・調和すること。

透き塀…塀の一つ。支柱の間は格子組などを入り透かしている塀。

整形九間取…座敷部分は桁行で三室、梁行で三室、計九室からなる民家形式。伯耆地方の大規模民家に見られる。

摂社…本社に付属し本社に縁故の深い神をまつった神社。

節理…岩石、特に火成岩に見られるやや規則的な割れ目。マグマが冷却固結した結果生じたもの。

遷幸…天皇・上皇が他の場所に移ること。

《た行》

垂木…屋根の板裏。または木舞を支えるために棟から軒にわたす材。

※**繁垂木**…垂木を密に並べた垂木割りまたはその垂木。

※**疎垂木**…垂木の配列法の一。垂木の間隔を粗く取ったもの。

塔屋…屋上に突出した部分。階段室、機械室などとなる。

勅使門…天皇の意思を伝達するために派遣される特使が出入りに使用する門。

ツシ二階…民家の屋根裏。窓を持つ場合が多く、物置・蚕室・使用人の寝間などに用いられた。「ツシ」「ズシ」とも称される。

島嶼…島、島々。

《な行》

『日本三代実録』…清和・陽成・光孝三天皇の時代約三〇年間のことを記した編年体の史書。五〇巻からなる。

貫…柱と柱を横に貫いて連なる材

※**頭貫**…柱の頂部を貫通する横架けの材。

※**飛貫**…貫の一つ。頭貫の下、内法貫の上に位置する貫。

塗屋造り…外観や外部のみ、厚さ三～五寸程度に塗り回した町屋の造りで、柱は隠れるが垂木は塗り込められない場合もある。

《は行》

破催済度…法を説いて人々を迷いから開放し悟りをひらかせること。

柱真…柱心とも書く。柱幅の中心線。柱の位置や柱間寸法をきめる基準線となる。

破風…日本建築で屋根の切妻についている合掌形の装飾板。またはそれのついている所

※**唐破風**…そり曲がった曲線状の破風（屋根の切り妻についた合掌形の装飾板。あるいはそれがついている所）玄関・門・神社の向拝などの屋根や軒に造られる。

※**切妻破風**…切妻造りの屋根の先端に取付られた破風。

※**縋破風**…本屋根の軒先から更に付け出された片流れの破風。社寺建築の前面に向拝が取付けられた場合、その側面に現われる場合が多い。

半小屋造り…茅葺き屋根で、小屋組を強化するために、棟束をたて、棟束相互間や合掌と棟束の間に貫を通した構造形式を指す呼称。

肘木…組物の一つ。組物（斗拱）において斗または桁を受ける水平材。その形状は和様・大仏様・禅宗様などで形式を異にする。

※**実肘木**…桁を直接受ける肘木。

神籬…神霊が宿っていると考えた山・森・老木などの周囲に常磐木を植えめぐらし、玉垣で囲んで神聖を保った場所。室内、庭などの場合も常磐木を立て神の宿る所として呼ばれた。

ファサード…建物の正面。

二手先組物…社寺建築の柱頭に付けられた組物が壁面から前方に二段出ているもの。

二軒…社寺建築に見られるもので、上下二段で出の異なる垂木からなる軒。

幣殿…神社において本殿と拝殿との間にあって、参拝者が弊帛を供進するための建物。

ペディメント式…一般に窓や開口部の上部にある三角形（または櫛形）の部分をペディメントといい、それを意匠として表現したもの。

※**櫛形ペディメント**…ペディメントの形が円弧形もの。

ポディウム…古代神殿建築における基檀。ローマ神殿は、しばしば正面にのみ階段を設けた高い基檀の上に建てられる。

諷誦…声をあげて経を読むこと。

幣…神仏へおさめるもの。

宝篋印塔…宝篋印陀羅尼（梵文で書かれた呪文）を納める塔。

奉幣…神に物をたてまつること。

《ま行》

まぐさ式…窓や開口部の上部の水平材をまぐさといい、それを意匠として表現したもの。

斗組…斗拱ともいう。方形の斗（ます・と）と細長い肘木（ひじき）によって構成され、両者を交互に組合せて前方に持ち送りとして突出し、深い軒を広く支える。

棟札…棟上げのときに、工事の由緒、建築の年月、建築者または工匠の名などを記して棟木に打ち付けた札。

モールディング…建築などに突出した帯状の装飾。

持ち送り…壁や柱から突出して庇・梁・棚・出窓などを支える部材、またはその構法。実用的なものだけでなく装飾的なものもある。

身舎・母屋…木造に本屋構造の部分。周囲に取り付く庇部分に対する呼称。

《や行》

ゆい…組織内で行われる労働交換の社会的慣行を指す呼称。屋根葺き材の準備や葺き替え作業から、冠婚葬祭や農作業などにも及ぶ。

疣状…いぼとこぶ。

鳥 取 県（旧郡域・現市町村域対照図）

1：550,000　0　10　20km

旧郡界
現行の町村界

付　　録

文　化　財　一　覧

郷　土　芸　能

自然公園（国立、公定、県立）

温　　泉

花・新緑・紅葉等の名所

ス　キ　ー　場

（後からご覧ください）

文化財一覧

（1）国指定文化財

略号			
重文	重要文化財	無民文	重要無形民俗文化財
重美	重要美術品	特天記	特別天然記念物
天記	天然記念物	有民文	重要有形民俗文化財
登文	登録文化財	重伝建	重要伝統建造物群

鳥取市（21）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	建造物	樗谿神社本殿・唐門・拝殿及び弊殿	昭27. 7.19	上町　樗谿神社
重文	建造物	仁風閣	昭48. 6. 2	東町
重文	建造物	福田家住宅	昭49. 2. 5	紙子谷
重文	絵画	絹本著色普賢十羅刹女像	明37. 2.18	行徳　常忍寺（東京国立博物館へ出品）
重文	工芸品	梵鐘	昭57. 6. 5	寺町　本願寺
重文	考古資料	子持勾玉	昭38. 2.14	東町　鳥取県立博物館
重文	書跡	紙本金字法華経巻第二、第四	昭17. 6.26	立川町　大雲院（鳥取県立博物館へ出品）
史跡	城跡	鳥取城跡附太閤ケ平	昭32.12.18	東町、栗谷町、百谷、円護寺
史跡	古墳	布勢古墳	昭49.12.23	布勢
名勝	庭園	観音院庭園	昭12.12.21	上町
天記	動物	キマダラルリツバメチョウ生息地	昭 9. 5. 1	長田神社、興禅寺、樗谿公園
天記	植物	ハマナス自生南限地帯	大11. 3. 8	白兎
天記	植物	倉田八幡宮社叢	昭 9. 5. 1	馬場
天記	植物	大野見宿禰命神社社叢	昭 9. 8. 9	徳尾
天記	植物	白兎神社社叢	昭12.12. 8	白兎
天記	植物	松上神社のサカキ樹林	昭19. 3. 7	松上
天記	地質・植物	鳥取砂丘	昭30. 2. 3	浜坂（福部村湯山）
重美	工芸品	埴輪鹿　脚部補修 埴輪男子像　残闕	昭10. 5.20	湖山　鳥取大学（鳥取県立博物館へ出品）
重美	工芸品	袈裟襷文銅鐸	昭 9. 9. 1	東町　鳥取県立博物館
重美	考古資料	家屋形弥生式土器　下部欠失	昭10. 2.14	東町　鳥取県立博物館
登文	建造物	立川吉村家主屋、什器蔵 通用門、勝手蔵、米蔵、付属棟	平10. 2.20	立川

倉吉市（18）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	大11. 4.13	桜　大日寺
重文	彫刻	木造持国天立像一躯、木造増長天立像一躯	大12. 3.28	長谷　大慈寺　盗難

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	考古資料	伯耆国分寺古墳出土品 （き鳳鏡一面、三角縁神獣鏡一面 二神二獣鏡一面、附鉄剣鉄斧頭等 一括）	昭34. 6.27	国府　国分寺
重文	考古資料	子持壺形須恵器五箇、脚付子持壺形須恵器二十箇（倉吉市三江上野遺跡出土）	昭60. 6. 6	倉吉博物館で展示 国（文化庁）所有
重文	考古資料	鳥取県野口１号墳出土須恵器	平 6. 6.28	仲ノ町　倉吉博物館
重文	考古資料	鳥取県谷畑遺跡出土祭祀遺物	平 8. 6.27	仲ノ町　倉吉博物館
重文	建造物	長谷寺本堂内厨子	昭63.12.19	仲ノ町　長谷寺
重伝建	伝建群	倉吉市打吹玉川伝統的建物群保存地区	平10.12.25	倉吉市魚町、研屋町、東仲町、新町、堺町
史跡	古墳	三明寺古墳	昭 6.11.26	巌城　山名寺
史跡	古墳	阿弥大寺古墳群	昭56. 5.11	下福田
史跡	社寺跡	大原廃寺塔跡	昭10.12.14	大原
史跡	社寺跡	伯耆国分寺跡	昭49. 3.12	国府　国分寺
史跡	国庁跡	伯耆国庁跡附法華寺畑遺跡	昭60. 5.14 平10. 9.11 （追加指定）	国府　国分寺
史跡	寺院跡	大御堂廃寺跡	平13. 1.29	倉吉市駄経寺町
天記	植物	波波伎神社社叢	昭 9. 5. 1	福庭　波波伎神社
有民文	生産・生業	倉吉の鋳物師（斎江家）用具及び製品	昭60. 4.19	上古川　倉吉歴史民俗資料館へ出品
登文		小川酒蔵主屋他６棟	平10.10. 9	倉吉市河原町
登文		協同組合倉吉大店会（旧国立第三銀行倉吉市店）	平 8.12.16	倉吉市魚町

米子市（5）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	建造物	後藤家住宅　主家・一番蔵・二番蔵 附座敷棟札一枚（主家）・棟札一枚（一番蔵）・棟札一枚（二番蔵）・味噌蔵一棟、家相図一枚、宅地916.71㎡	昭49. 2. 5 平 5. 8.17 平 8. 7. 9 （追加指定）	内町
重文	工芸品	短刀　銘：備州長船住兼光附金熨斗付合口拵	大 1. 9. 3	尾高　大神山神社（東京国立博物館へ寄託）
史跡	住居跡	福市遺跡	昭45.10.17	福市
史跡	住居跡・古墳	青木遺跡	昭53. 3.22	青木、永江
名勝	庭園	深田氏庭園	昭12.12.20	米子市車尾

境港市（1）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
史跡	政治に関する遺跡	鳥取藩台場跡（境台場跡）	昭63. 7. 27	花町ほか

岩　美　郡　(14)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	彫刻	木造薬師如来及び両脇侍坐像	大 1. 9. 3	国府町松尾　学行院
重文	彫刻	木造吉祥天立像	大 1. 9. 3	国府町松尾　学行院
重文	考古資料	鳥取県栗谷遺跡出土品	平 6. 6.28	福部村　福部村歴史資料館
史跡	古墳	梶山古墳	昭54. 4.21	国府町岡益
史跡	社寺跡	岩井廃寺塔跡	昭 6.11.26	岩美町岩井
史跡	社寺跡	栃本廃寺塔跡	昭10.12.24	国府町栃本
史跡	国庁跡	因幡国庁跡	昭53. 7.21	国府町中郷
史跡	墳墓	伊福吉部徳足比売墓跡	大13.12. 9	国府町宮下無量光寺
史跡	墳墓	鳥取藩主池田家墓所	昭56.10.13	国府町奥谷、宮下
史跡	政治に関する遺跡	浦富台場	平10.12. 8 (追加指定)	岩美町浦富
名勝及び天記	海浜・海食	浦富海岸	昭 3. 3.27	岩美町浦富、牧谷、田後、網代、大羽尾、小羽尾、陸上
無民文	風俗習慣	因幡の菖蒲綱引き	昭62. 1. 8	岩美町大羽尾
天記	植物	唐川のカキツバタ群落	昭19. 3. 7	岩美町唐川
天記	地質・植物	鳥取砂丘	昭30. 2. 3	福部村湯山（鳥取市浜坂）

八　頭　郡　(8)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
国宝	絵画	絹本著色普賢菩薩像	昭27.11.22	智頭町新見　豊乗寺（東京国立博物館へ出品）
重文	建造物	不動院岩屋堂	昭28.11.14	若桜町岩屋堂
重文	建造物	矢部家住宅	昭49. 2. 5	八東町用呂
重文	絵画	絹本著色楊柳観音像	明37. 2.18	智頭町新見　豊乗寺（東京国立博物館へ出品）
重文	彫刻	木造毘沙門天立像	大 9. 8.16	智頭町新見　豊乗寺（東京国立博物館へ出品）
重文	彫刻	木造持国天立像、木造多聞天立像	大12. 3.28	郡家町下門尾　青龍寺
史跡	社寺跡	土師百井廃寺跡	昭 6.11.26	郡家町土師百井
登文	建造物	石谷家住宅主屋、玄関棟離れ茶屋、車庫、門番小屋、1～7号蔵、倉庫、大工小屋、裏門、外塀、内塀	平 9. 7.15	智頭町智頭

気　高　郡　(1)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
無民文	風俗習慣	因幡の菖蒲綱引き	昭62. 1. 8	気高町宝木、水尻、青谷町青谷

東　伯　郡　(27)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
国宝	建造物	三仏寺奥院（投入堂）	昭27. 3.29	三朝町三徳
国宝	考古資料	伯耆一ノ宮経塚出土品 銅経筒一口、金銅製観音菩薩立像一躯、銅造千手観音菩薩立像一躯、銅板線刻弥勒立像一面、銅鏡二面、檜扇残片一括、短刀刀子残闕一括、瑠璃玉一括、銅銭二枚、漆器残片一括	昭28. 3.31	東郷町宮内（東京国立博物館へ出品） 倭文神社
重文	建造物	三仏寺納経堂	明37. 2.18	三朝町三徳
重文	建造物	三仏寺地蔵堂	明37. 2.18	三朝町三徳
重文	建造物	三仏寺文殊堂	明37. 2.18	三朝町三徳
重文	彫刻	木造蔵王権現立像　附紙本墨書仁安三年造立願文一巻	明37. 2.18	三朝町三徳　三仏寺
重文	彫刻	木造十一面観音立像	大 9. 4.15	三朝町三徳　三仏寺
重文	彫刻	木造蔵王権現立像六躯	大 9. 4.15	三朝町三徳　三仏寺
重文	彫刻	木造千手観音立像、木造十一面観音立像	昭17.12.22	大栄町東高尾　観音寺
重文	彫刻	木造地蔵菩薩半跏像	昭54. 6. 6	関金町関金宿　地蔵院
重文	工芸品	銅鏡　長徳三年九月二十日　云々の文あり	明34. 2.18	三朝町三徳　三仏寺
重文	工芸品	楽焼黒茶碗（東陽坊）長次郎作	昭37. 6.21	三朝町三朝
重文	考古資料	伯耆長瀬高浜遺跡出土埴輪 甲冑二箇　盾三箇　鞆一箇　家四箇　蓋八箇 附形象埴輪残欠一括　朝顔形埴輪残欠共一括 円筒埴輪残欠共一括	昭61. 6. 6	羽合町久留 （羽合町歴史民俗資料館） 伯耆長瀬高浜遺跡出土埴輪収蔵庫
特別史跡	社寺跡	斎尾廃寺跡	昭27. 3.29	東伯町槻下
史跡	古墳	橋津古墳群	昭32. 6. 3	羽合町橋津
史跡	古墳	北山古墳	昭55. 6. 3	東郷町野花、長和田
史跡	経塚	伯耆一ノ宮経塚	昭10.12.14	東郷町宮内　倭文神社
史跡	宮跡	船上山行宮跡	昭 7. 5. 3	赤碕町山川
史跡	政治に関する遺跡	鳥取藩台場跡　橋津台場跡	昭63. 7.27	羽合町長瀬
史跡	政治に関する遺跡	鳥取藩台場跡　由良台場跡	昭63. 7.27	大栄町由良宿
名勝及び史跡	山岳仏教遺跡	三徳山	昭 9. 7. 7	三朝町三徳
名勝	庭園	尾崎氏庭園	昭12.12.21	羽合町宇野
名勝	峡谷・渓流	小鹿渓	昭12.12. 8	三朝町神倉、中津
天記	植物	伯耆の大シイ	昭12. 4.17	東伯町宮場　春日神社
重美	彫刻	木造 十一面観音立像　二 地蔵菩薩立像　一 不動明王立像　一 吉祥天立像　一 兜跋毘沙門天立像一 四天王立像　三	昭17.12. 6	大栄町東高尾　観音寺

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
登文		大橋旅館本館、離れ	平 9. 9. 3	三朝町三朝
登文		大橋旅館大広間棟、西離れ 太鼓橋	平 9.11. 5	三朝町三朝

西伯郡（18）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	建造物	大山寺阿弥陀堂	明37. 2.18	大山町大山
重文	建造物	門脇家住宅　主屋・水車小屋・米蔵・新蔵附湯殿・雪隠一棟・茶室一棟・普請文書二冊（主屋）棟札一枚（米蔵）普請文書一冊（新蔵）家相図一枚・宅地3,381.80㎡	昭49. 2. 5 平 5. 8.17 （追加指定）	大山町所子
重文	建造物	大神山神社奥宮　本殿・弊殿・拝殿 末社下山神社本殿・弊殿・拝殿 （附石造明神鳥居、銅製明神鳥居、末社下山神社本殿・弊殿・拝殿棟札）	昭63.12.19	大山町大山　大神山神社
重文	彫刻	銅造十一面観音立像	明36. 4.15	大山町大山　宝物館霊宝閣
重文	彫刻	銅造観世音菩薩立像一躯	明36. 4.15	大山町大山　宝物館霊宝閣
重文	彫刻	木造阿弥陀如来及び両脇侍像	明36. 4.15	大山町大山　阿弥陀堂
重文	彫刻	銅造観世音菩薩立像二躯	明37. 2.18	大山町大山　宝物館霊宝閣
重文	工芸品	鉄製厨子　附祈願文鏤刻ノ鉄板三枚、鉄造地蔵菩薩の頭部	明37. 2.18	大山町大山　宝物館霊宝閣
重文	考古資料	石馬	昭34.12.18	淀江町福岡　淀江町歴史民俗資料館
重文	考古資料	石製鴟尾	昭34.12.18	岸本町大殿　福樹寺
重文	考古資料	三角縁神獣鏡（鳥取県西伯郡会見町普段寺１号墳出土）	昭62. 6. 6	会見町天万　大安寺 県立博物館に寄託
史跡	古墳	向山古墳群	昭 7. 7.23	淀江町福岡
史跡	政治に関する遺跡	鳥取藩台場跡（淀江台場跡）	昭63. 7.27	淀江町今津
史跡	社寺跡	上淀廃寺跡	平 8. 3.29	淀江町福岡
史跡	古墳	妻木晩田遺跡	平11.12.22	大山町、淀江町
特天記	植物	大山のダイセンキャラボク純林	昭27. 3.29	大山町大山　大山山頂付近
天記	植物	ハマナス自生南限地帯	大11. 3. 8	中山町松河原
重美	彫刻	鉄造｛聖観音立像 十一面観音立像附鉄製光背一面	昭17.12.16	西伯町下中谷　西伯町歴史民俗資料館

日野郡（5）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	彫刻	木造薬師如来及び両脇侍像	大 9. 4.15	日野町下榎　長楽寺
重文	彫刻	木造毘沙門天立像	大 9. 4.15	日野町下榎　長楽寺

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
重文	彫刻	木造不動明王立像（ふどうみょうおうりつぞう）	昭17.12.22	日野町下榎　長楽寺
天記	植物	船通山（せんつうざん）のイチイ	昭32. 7.27	日南町上萩山　船通山
登文		日野町歴史民俗資料館（旧根雨公会堂）	平 9. 5. 7	日野町根雨

地域を定めず　(7)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
特天記	動物	オオサンショウウオ	昭27. 3.29	地域を定めず
天記	動物	柴犬	昭11.12.16	地域を定めず
天記	動物	イヌワシ	昭40. 5.12	地域を定めず
天記	動物	マガン	昭46. 6.28	地域を定めず
天記	動物	ヒシクイ	昭46. 6.28	地域を定めず
天記	動物	ヤマネ	昭50. 6.26	地域を定めず
天記	動物	オジロワシ	昭45. 1.23	地域を定めず

（2）県指定文化財

略号　保文　保護文化財　天記　天然記念物
無文　無形文化財
有民文　有形民俗文化財
無民文　無形民俗文化財

鳥取市（44）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	彫刻及び建造物	聖神社本殿	昭32. 4.16	行徳
保文	絵画	絹本著色群鯉図	昭51. 8. 3	東町　鳥取県立博物館
保文	絵画	紙本墨画雲竜図	昭51. 8. 3	東町　鳥取県立博物館
保文	絵画	紙本墨画群鯉遊泳図六曲屏風	昭51. 8. 3	東町　鳥取県立博物館
保文	絵画	絹本著色猛虎図	昭51. 8. 3	猪子　（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	絵画	絹本著色富士見西行図	昭51. 8. 3	元魚町（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	絵画	紙本淡彩老樹図	昭51. 8. 3	立川町
保文	絵画	絹本著色東方朔図	昭51. 8. 3	東町　鳥取県立博物館
保文	彫刻	木造麒麟獅子頭	昭29. 9.21	中砂見
保文	彫刻	木造毘沙門天立像	昭34. 6. 5	正蓮寺
保文	彫刻	木造吉祥天立像	昭34. 6. 5	正蓮寺
保文	彫刻	木造薬師如来坐像	昭34. 6. 5	古郡家　森福寺
保文	工芸品	太刀、銘（表）信濃大掾藤原忠国玉纏太刀式の太刀拵	昭50. 3.28	上町　樗谿神社（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	工芸品	太刀、銘（表）信濃大掾藤原忠国第一太刀式の太刀拵	昭50. 3.28	上町　樗谿神社（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	工芸品	太刀、銘（表）信濃大掾藤原忠国錺剣（飾太刀）拵	昭50. 3.28	上町　樗谿神社（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	工芸品	太刀、銘（表）伯耆国倉吉住人播磨大掾藤原正綱	昭50. 3.28	上町　樗谿神社（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	考古資料	切支丹灯籠	昭32. 4.16	栗谷町興禅寺、戎町一行寺、西町、上町観音院
保文	考古資料	子持勾玉（鳥取市高住青島遺跡出土）	昭55. 3. 4	東町　鳥取県立博物館
保文	考古資料	流水文銅鐸（鳥取市越路出土）	昭55. 3. 4	東町　鳥取県立博物館
保文	考古資料	県立博物館所蔵資料	平13. 2.23	県立博物館
保文		三十六歌仙	平10. 2.20	上町
史跡	城跡	天神山城跡	昭51. 8. 3	湖山町
史跡	古墳	坊ケ塚古墳	昭56.11.27	広岡
史跡	古墳	空山２号墳	昭56.11.27	香取
史跡	古墳	空山10号墳	昭56.11.27	広岡
史跡	古墳	空山15号墳	昭56.11.27	久末
史跡	古墳	空山16号墳	昭56.11.27	久末
史跡	古墳	山ケ鼻古墳	平 3. 3.26	古海
天記	植物	矢矯神社社叢	昭31. 3. 6	矢矯

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
天記	植物	意上奴神社社叢	昭59. 2.21	香取
天記	植物	桂見の「二十世紀」ナシの親木	昭60. 2.22	桂見
天記	地質鉱物	扇ノ山の火山弾	昭55. 3. 4	東町　鳥取県立博物館
天記	地質鉱物	ナウマンゾウ牙（温泉津沖日本海底産）	昭55. 3. 4	東町　鳥取県立博物館
天記	鉱物	ナウマンゾウ牙（萩沖日本海底産）	昭62. 4.14	東町　鳥取県立博物館
有民文	民族資料	馬場八幡人形芝居道具	昭34. 6. 5	馬場
無民文	風俗慣習	大和佐美命神社獅子舞	昭34.12.25	上砂見、中砂見
無民文	風俗慣習	岩坪神社獅子舞	昭34.12.25	岩坪
無民文	風俗慣習	越路雨乞踊	昭34.12.25	越路
無民文	風俗慣習	栖岸寺の双盤念仏	昭38. 3. 5	湖山町　栖岸寺
無民文	風俗慣習	下味野神社の麒麟獅子舞	平10. 4.21	下味野
無民文	民俗芸能	因幡の傘踊	昭49.10.18	横枕
無民文	民俗芸能	円通寺人形芝居	昭59. 2.21	円通寺
無民文	民俗芸能	倉田八幡宮の麒麟獅子舞	平10. 4.21	倉田
無民文	民俗芸能	賀露神社の麒麟獅子舞	平10. 4.21	賀露

倉吉市（24）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	建造物	永昌寺十三重塔	昭31. 5.30	岩倉　永昌寺
保文	彫刻	秋葉大権現	昭29. 6. 9	八屋　秋葉神社
保文	彫刻	木造稲荷像	昭31. 5.30	下田中　勝宿弥神社
保文	彫刻	木造稲荷像	昭31. 5.30	円谷　神庭神社（鳥取県立博物館が借用）
保文	彫刻	不入岡の石仏	昭31. 5.30	不入岡
保文	彫刻	伯耆国分寺石仏	昭31. 5.30	国分寺　社小学校
保文	彫刻	木造日光菩薩立像、木造月光菩薩立像	昭32. 2. 6	八屋　極楽寺
保文	彫刻	木造狛犬	昭62.12.15	大宮　小鴨神社
保文	彫刻	木造薬師如来立像	平 6. 4.19	桜　大日寺
保文	彫刻	銅造誕生釈迦仏立像一躯	平 7. 4.21	井手畑　胎蔵寺
保文	彫刻	銅造誕生釈迦仏立像一躯	平 7. 4.21	仲ノ町（倉吉博物館寄託）
保文	工芸品	古三彩鉢皿	昭31. 5.30	東町　大岳院
保文	工芸品	梵鐘	昭31. 5.30	仲ノ町　長谷寺
保文	古文書	山名氏・尼子氏文書　附尼子経久肖像画　一幅	昭31. 5.30	和田　定光寺

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	考古資料	埴輪人物	昭31. 5.30	仲ノ町　倉吉博物館
保文	考古資料	埴輪鹿（巌城向山142号墳出土）	昭55. 3. 4	仲ノ町　倉吉博物館
保文	考古資料	袈裟襷文銅鐸　二箇 （倉吉市小田出土）	平 4. 4.14	仲ノ町　倉吉博物館
保文	考古資料	阿弥大寺弥生墳丘墓群出土遺物　一括 （一）壺形土器　六箇 （一）甕形土器　五箇 （一）高坏形土器　一箇 （一）器台形土器　三箇 （一）手捏土器　二箇 以上一号墳出土 （一）甕形土器　二箇 以上二号墳出土 （一）手捏土器　一箇 以上三号墳出土 附弥生土器片　一括	平 4. 4.14	仲ノ町　倉吉博物館
保文	考古資料	谷畑遺跡祭祀関係遺物一括	平 5. 1.29	仲ノ町　倉吉博物館
史跡	古墳	福庭古墳	昭31. 5.30	福庭　波波伎神社
史跡	廃寺跡	石塚廃寺塔跡	昭31. 5.30	石塚
史跡	墳墓	大日寺古墓群	昭58. 4.26	桜　大日寺
天記	植物	大日寺の大イチョウ	昭31. 3. 6	桜　大日寺
有民文	民族資料	長谷寺の絵馬群	昭32. 2. 6 昭45. 9.11 （追加指定）	仲ノ町　長谷寺

米子市（7）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	建造物	高田家住宅　附家相図一枚	昭49. 3.29	福万
保文	彫刻	十一面観音坐像	昭28. 8. 8	観音寺　慈眼庵
保文	工芸品	刀　無銘古伯耆物　附銀造糸巻太刀拵	昭62.12.25	尾高　大神山神社（米子市美術館へ寄託）
名勝	庭園	深田氏庭園	昭28. 8. 8	車尾
天記	植物	粟嶋神社社叢	昭57. 4. 9	彦名町　粟嶋神社
無文	工芸技術	弓浜絣	昭53.12.12	米子市ほか
無民文	風俗慣習	米子盆踊	昭49.10.18	博労町

境港市（2）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
天記	植物	渡町西東のゴヨウマツ	昭45. 4.20	渡町
無文	工芸技術	弓浜絣	昭53.12.12	境港市ほか

岩　美　郡　(14)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	工芸品考古資料	木造麒麟獅子頭	昭32. 2. 6	国府町岡益　岡益公民館
保文	工芸品考古資料	廃阿代寺正平在銘鐘	昭33.11.17	岩美町網代　網代小学校（鳥取県立博物館が借用）
保文	考古資料	銅鰐口	昭32. 2. 6	国府町清水（国府町役場で保管）
保文	考古資料	栗谷遺跡縄文時代出土遺物一括 (一)　土器類 無文精製深鉢形土器　一箇、 有文深鉢形土器　十二箇、 有文浅鉢形土器　二箇、 精製浅鉢形土器　二箇、 無文粗製深鉢形土器　十箇 (一)　石器類 石鏃　百三十三箇、石錐　二箇、 石小刀　二箇、石匙　三箇、 異形石器　三箇、楔形石器　四箇、 調整石器　七箇、石鍬　二箇、 打製石斧　十箇、 磨製石斧　四十八箇、 砥石　十箇、礫石錘　六十四箇、 切目石錘　二十三箇、 有溝石錘　四箇、敲石・磨石・凹石・石皿等　百四箇 (一)　木器類 異形木器　三箇 (一)　骨角牙器類 附土器片一括、 石器剥片、石核等一括、人骨、獣骨、魚骨一括、堅果類一括 （昭和62年～平成元年度調査出土遺物）	平 3. 3.26	福部村湯山 福部村歴史資料館
保文	考古資料	小札鋲留眉庇付冑	平 3. 3.26	福部村湯山 福部村歴史資料館
史跡	古墳	鷺山古墳	昭56.11.27	国府町町屋
史跡	城跡	二上山城跡	平10. 4.21	岩美町岩常
天記	植物	高岡神社社叢	昭34. 6. 5	国府町高岡
天記	植物	菅野ミズゴケ湿原	昭42.12.12	国府町菅野
天記	植物	坂谷神社社叢	昭58. 9.27	福部村栗谷
有民文	民族資料	宇倍神社御幸祭祭具	昭39. 3. 3	国府町宮下
無民文	風俗慣習	宇倍神社獅子舞	昭34.12.25	国府町宮下
無民文	民俗芸能	因幡の傘踊	昭49.10.18	国府町高岡、美歎、麻生
無民文	風俗慣習	牧谷のはねそ踊	昭49.10.18	岩美町牧谷

八　頭　郡　(36)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	建造物	三百田氏住宅　附一代普請方合力人数帳一冊	昭39. 3. 3	若桜町屋堂羅（合力人数帳は若桜町歴史民俗資料館に出品）
保文	建造物	木下家住宅	昭49. 3.29	河原町布袋
保文	絵画	絹本著色花鳥図	昭51. 8. 3	智頭町智頭
保文	絵画	絹本著色不動明王像	昭55.12.23	智頭町新見豊乗寺（鳥取県立博物館へ寄託）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	絵画	絹本著色両界曼荼羅図	昭55.12.23	智頭町新見豊乗寺（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	絵画	絹本著色釈迦十六善神像	昭55.12.23	用瀬町鷹狩大安興寺（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	彫刻	勢至菩薩立像	昭30. 9. 6	河原町北村　観音寺
保文	彫刻	木造大日如来坐像（金剛界、胎蔵界）	昭34. 6. 5	若桜町長砂（鳥取県立博物館へ寄託）
保文	工芸品	和欄陀写水指	昭29. 9.21	河原町河原
保文	工芸品	梵鐘	昭59. 2.21	河原町片山　国英神社（鳥取県立博物館が借用）
保文	考古資料	新興寺至徳宝篋印塔	昭58. 4.26	八東町新興寺　新興寺
保文	考古資料	新興寺金峯山経塚出土遺物　一括 （一）銅経筒　二口 （一）外容器　一口 （一）銅鏡　八面 内　残片　五面 （一）白磁合子　一合 （一）白磁皿　一口 （一）銅鈴　一箇 （一）金銅製金具　三箇 （一）経軸残片　一括 （一）檜扇残片　一括 （一）刀残欠鍔共　一括	平 4. 4.14	八東町新興寺　新興寺（鳥取県立博物館へ寄託）
天記	植物	弓河内の大シダレザクラ	昭30. 9. 6	河原町弓河内
天記	植物	清徳寺の巨樹名木群	昭31. 3. 6	八東町清徳　清徳寺
天記	植物	落河内の大キリシマ	昭32. 2. 6	河原町北村
天記	植物	長瀬の大シダレザクラ	昭34. 6. 5	河原町長瀬
天記	植物	福本のオハツキイチョウ	昭45. 2.20	郡家町福本
天記	植物	西御門の大イチョウ	昭45. 2.20	郡家町西御門
天記	植物	落河内のカツラ	昭48. 3.30	河原町北村
天記	植物	田岡神社のツバキ樹林	昭48. 3.30	佐治村津無　田岡神社
天記	植物	中江の一本スギ	昭48. 3.30	若桜町中原
天記	植物	豊乗寺のスギ	昭48. 3.30	智頭町新見　豊乗寺
天記	植物	若桜神社社叢	昭57. 4. 9	若桜町若桜　若桜神社
天記	植物	犬山神社社叢	昭60. 2.22	用瀬町宮原　犬山神社
天記	植物	虵井神社社叢	昭61.12. 2	智頭町大呂　虵井神社
名勝	渓流	三滝渓	昭31. 2. 3	河原町北村
無文	工芸技術	因州佐治みつまた紙	昭51. 8. 3	佐治村加瀬木、大井、刈地、高山、津無、加茂、春谷、河本
無民文	風俗慣習	細尾の獅子舞	昭49.10.18	佐治村加茂
無民文	風俗慣習	余戸の雨乞踊	昭49.10.18	佐治村余戸
無民文	風俗慣習	用瀬のひな送り	昭60. 6.25	用瀬町
無民文	風俗慣習	虵井神社の花籠祭り	平 2. 1.30	智頭町芦津
無民文	風俗慣習	諏訪神社柱祭り	平13. 2.23	智頭町智頭

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
無民文	民俗芸能	江波の三番叟	平 6. 4.19	用瀬町江波
無民文	民俗芸能	口佐治神社の麒麟獅子舞	平 9. 2.28	佐治村古市
無民文	民俗芸能	虵井神社の麒麟獅子舞	平10. 4.21	智頭町堂本
無民文	民俗芸能	澤神社の麒麟獅子舞	平10. 4.21	八東町八束

気高郡（16）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	考古資料	切支丹灯籠	昭32. 4.16	気高町酒津　東昌寺
保文	彫刻	木造薬師如来坐像	昭32.12.25	気高町常松　薬師堂
保文	古文書	吉川元春祈願状　寄進状	昭32.12.25	鹿野町寺内　加知弥神社 県立博物館に寄託
保文	工芸品	伝　亀井茲矩将来品	昭32.12.25	鹿野町今市　譲伝寺 県立博物館に寄託
保文	彫刻	木造薬師如来立像	昭32.12.25	鹿野町鹿野　三光院
保文	古文書	塩文書	昭32.12.25	青谷町早牛 県立博物館に寄託
保文	彫刻	木像十一面観音立像	昭58. 9.27	気高町飯里　延命庵
史跡	古墳	阿古山22号古墳	昭56.11.27	青谷町青谷
天記	植物	相屋神社社叢	昭58. 9.27	青谷町青谷　相屋神社
無文	工芸技術	因州青谷こうぞ紙	昭51. 8. 3	青谷町山根、河原
無民文	風俗慣習	百手の神事	昭34.12.25	気高町八束水　姫路神社
無民文	風俗慣習	城山神社祭礼行事	昭34.12.25	鹿野町鹿野　城山神社
無民文	風俗慣習	志加奴・城山神社獅子舞	昭34.12.25	気高町宿、鹿野町鹿野 志加奴神社、城山神社
無民文	風俗慣習	亀井踊	昭49.10.18	鹿野町鹿野
無民文	風俗慣習	日置のはねそ踊	昭49.10.18	青谷町河原
無民文	風俗慣習	酒津のトンドウ	平 3. 1.25	気高町酒津

東伯郡（38）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	建造物	神崎神社本殿	昭27. 9.15	赤碕町赤碕　神崎神社
保文	建造物	赤碕塔	昭31. 5.30	赤碕町赤碕
保文	建造物	河本家住宅	昭49. 3.29	赤碕町箆津
保文	建造物	鳥飼家住宅　附家相図一致	昭49. 3.29	関金町関金宿
保文	彫刻	神崎神社の本殿、拝殿、向拝天井の竜 木端の獅子　その他一切、扉	昭27. 9.15	赤碕町赤碕　神崎神社
保文	彫刻	弘法大師坐像	昭29. 6. 9	泊村石脇

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	彫刻	大日如来坐像	昭29. 6. 9	東郷町高辻
保文	彫刻	木造空也上人像（三尺修行姿）	昭31. 5.30	東伯町別宮　転法輪寺
保文	彫刻	木造四天王立像	昭31. 5.30	東伯町矢下　円応寺
保文	彫刻	木造十一面千手観音立像	昭33.11.17	大栄町瀬戸　観音寺
保文	彫刻	観音寺古仏群	昭61. 4.18	大栄町東高尾　観音寺
保文	彫刻	木造随身立像	昭61. 4.18	東伯町上伊勢　方見神社
保文	彫刻	木造狛犬	昭62.12.25	三朝町三徳　三仏寺
保文	彫刻	木造狛犬	昭62.12.25	三朝町湯谷（鳥取県立博物館が借用）
保文	彫刻	木造阿弥陀如来立像	昭63. 3. 8	東伯町別宮　転法輪寺
保文	彫刻	銅造誕生釈迦仏立像一躯	平 7. 4.21	三朝町三徳　三仏寺
保文	彫刻	恵比寿像	平 9. 2.28	泊村園
保文	彫刻	大黒天像	平 9. 2.28	泊村園
保文	彫刻	木造恵比須像一躯	平 9. 2.28	泊村園
保文	彫刻	木造大黒天像一躯	平 9. 2.28	泊村園
保文	工芸品	宋青磁香炉	昭29. 9. 2	関金町関金宿　地蔵院 （鳥取県立博物館へ寄託）
保文	工芸品考古資料	擬宝珠	昭29. 9.21	関金町関金宿　地蔵院 （鳥取県立博物館へ寄託）
保文	工芸品考古資料	智積寺梵鐘	昭33.11.17	赤碕町竹内　智積寺
保文	考古資料	長瀬高浜遺跡玉作関係資料　一括 （一）　管玉未製品　六十八箇 （一）　攻玉工具類 叩き石　一箇、錐状石器　十一箇、石製有孔円盤及び同未製品　二箇、土製有孔円盤一箇、附弥生土器片　一括 以上第百十三号住居跡出土 （一）　管玉未製品　八十四箇 （一）　攻玉工具類 砥石　三箇、錐状石器　十二箇、附弥生土器片　一括 以上第百五十六号住居跡出土 （一）　管玉未製品　三十三箇 （一）　勾玉未製品　一箇 （一）　攻玉工具類 砥石　一箇、錐状石器　十九箇、附弥生土器片　一括 以上第百五十八号住居跡出土 （一）　管玉未製品　二十七箇 （一）　攻玉工具類 錐状石器　百四十八箇、附弥生土器片　一括 以上第百六十九号住居跡出土	平 4. 4.14	羽合町久留 羽合町歴史民俗資料館
史跡	古墳	出上岩屋古墳	平 3. 3.26	赤碕町出上
史跡	城跡	羽衣石城跡	平13. 2.23	東郷町羽衣石
天記	植物	転法輪寺の大イチョウ	昭31. 5.30	東伯町別宮　転法輪寺
天記	植物	東伯町の大イヌグス	昭31. 5.30	東伯町別宮　別宮
天記	植物	古布庄の大スギ	昭32.12.25	東伯町中津原　大正神社

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
天記	植物	花倉山のヒノキ・ホンシャクナゲ群落	昭39. 3. 3	三朝町笏賀、花倉谷ほか
天記	植物	関金のシイ	昭48. 3.30	関金町安歩
天記	植物	福本のツバキ	昭48. 3.30	三朝町福本
天記	植物	箆津のハマヒサカキ群落	昭48. 3.30	赤碕町箆津
天記	植物	マテバシイの北限地帯（智光寺の樹叢）	平 1. 4.18	赤碕町赤碕　智光寺
無民文	風俗慣習	東郷町浪人踊	昭37.10.16	東郷町
無民文	風俗慣習	三本杉の盆踊	昭49.10.18	東伯町三本杉
無民文	風俗慣習	田後神社頭屋祭「宮の飯」	昭61. 4.18	羽合町田後
無民文	民俗芸能	さいとりさし	昭49.10.18	三朝町内、関金町大鳥居

西伯郡（16）

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	建造物	大神山神社奥宮　神門	昭28. 8. 8	大山町大山　大神山神社
保文	建造物	吉持家住宅　附棟札二枚	昭49. 3.29	会見町田住
保文	工芸品	鉄茶釜	昭32. 2. 6	淀江町中間
保文	工芸品	梵鐘	昭60. 6.25	大山町大山　宝物館霊宝閣
保文	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	平 6. 4.19	大山町前
保文	歴史資料	鉄造聖観音立像・鉄造十一面観音立像　附鉄製光背	昭61. 4.18	西伯町下中谷
史跡	窯跡	金田瓦窯跡	昭51. 8. 3	会見町金田
史跡	古墳	岩屋平ル古墳	平 3. 3.26	中山町八重
史跡	古墳	高田26号墳	平 3. 3.26	名和町高田
天記	植物	佐伯氏のクロガネモチ	昭36. 2. 3	西伯町福成
天記	植物	長田神社社叢	昭36. 2. 3	西伯町馬場　長田神社
天記	植物	金華山熊野神社社叢	昭57. 4. 9	西伯町八金　熊野神社
天記	植物	長寿寺・落合神社の社叢	昭60. 6.25	西伯町落合　長寿寺　落合神社
無文	工芸技術	弓浜絣	昭53.12.12	淀江町ほか
無民文	風俗慣習	馬佐良の申し上げ	平 2. 1.30	西伯町馬佐良
無民文	民俗芸能	小松谷盆踊	平 7. 4.21	会見町御内谷

日　野　郡　(20)

指定種別	分類	名称	指定年月日	所在地
保文	建造物	印賀宝篋印塔	昭28. 8. 8	日南町印賀
保文	建造物	内藤家住宅	昭49. 3.29	日野町板井原
保文	彫刻	十一面観音立像	昭28. 8. 8	日南町上石見　竜泉寺
保文	考古資料	助沢正平五輪塔	昭58. 4.26	江府町助沢
天記	植物	下阿毘縁神社の大シダレザクラ	昭32.12.25	日南町下阿毘縁　下阿毘縁神社
天記	植物	解脱寺のモミ並木	昭34. 6. 5	日南町下阿毘縁　解脱寺
天記	植物	上石見のオハツキ・タイコイチョウ	昭45. 2.20	日南町上石見　大石見神社
天記	植物	武庫の七色ガシ	昭48. 3.30	江府町武庫
天記	植物	下蚊屋明神のサクラ	昭48. 3.30	江府町下蚊屋
天記	植物	熊野神社社叢	昭48. 3.30	江府町俣野　熊野神社
天記	植物	聖神社社叢	昭57. 4. 9	日野町黒坂　聖神社・稲荷神社
天記	植物	根雨神社社叢	昭59. 2.21	日野町根雨　根雨神社
天記	植物	楽楽福神社社叢	昭60. 2.22	日南町印賀　楽楽福神社
天記	植物	洲河崎のカツラ	平 1. 4.18	江府町洲河崎
天記	植物	かまこしき渓谷の浸食地形	平11. 6.29	江府町助沢　俣野
天記	植物	ハンノキ沢沼林	平12. 3.28	日南町神社
天記	動物	荒神原のオオサンショウウオ生息地	昭61.12. 2	日野町上菅
無民文	風俗慣習	江尾のこだいぢ踊	昭49.10.18	江府町江尾
無民文	風俗慣習	下蚊屋の荒神神楽	昭49.10.18	江府町下蚊屋
無民文	風俗慣習	福岡神社神事	昭61. 4.18	溝口町福岡

郷土芸能

名　　称	保　存　地	内　　容
鳥取しゃんしゃん傘踊り	鳥取市	因幡のかさ踊りを老若男女を問わず気軽に踊れるよう振付けた新民踊。
越路雨乞踊（こえじあまごいおどり） **（県無形民俗文化財）**	鳥取市越路	雨が授かったことを神に感謝する踊りとして伝承されてきた。現在は民俗芸能の要素もあり随時行われる。円陣をつくり、格調高く優美に踊られる。
栖岸寺の双盤念仏（せいがんじのそうばん） **（県無形民俗文化財）**	鳥取市湖山町北１丁目	「常念仏回向」という行の結願を感謝する儀式の中で奉納されてきた伝統行事。現在は、３年毎の４月に双盤念仏のみ行われている。
大和佐美命神社獅子舞（おおわさみのみことじんじゃししまい） **（県無形民俗文化財）**	鳥取市上砂見及び中砂見大湯棚	キリン獅子舞に属するものであるが、舞方の細目の宇倍神社のそれと較べると大いに異なる。
岩坪神社獅子舞（いわつぼじんじゃししまい） **（県無形民俗文化財）**	鳥取市岩坪	「権現堂古流三方舞」といわれ、神楽獅子頭を用いた雌雄２頭の獅子が演じる。夏秋の岩坪神社の祭礼に奉納される。
円通寺人形芝居（えんつうじにんぎょうしばい） **（県無形民俗文化財）**	鳥取市円通寺	労働の中から生じた石切歌が円通寺節として伝承され、これにあわせて行う人形芝居。三味線、胡弓、締太鼓の伴奏による七七調の念力節に合わせて人形を操る。
米子がいな太鼓	米子市	新しい文化を築こうとする米子人の心意気を太鼓に託した新しい創作芸能。米子の夏を彩る「がいな祭り」で披露される。
米子盆踊 **（県無形民俗文化財）**	米子市博労町３丁目	300年以上の伝統を持ち、毎年８月に米子公会堂前広場で踊られる踊りで豪壮な太鼓の音とはやしで有名である。
福光伝承みつぼし踊り（ふくみつでんしょう） **（市無形民俗文化財）**	倉吉市福光	江戸時代から受け継がれた円舞式の盆踊り。
境港大漁太鼓（さかいみなとたいりょう）	境港市	昭和47年、境水道大橋の開通を記念して始められた太鼓。 岩肌を打ち砕き、怒涛逆巻く日本海での操業、大漁の喜び、漁師の野性的な力強さを表現した。
牧谷のはねそ踊り **（県無形民俗文化財）**	岩美郡岩美町牧谷	六尺長柄の鈴傘を持った男性と、編笠をかぶった女性が対になって踊る。鳥取県東部の各地に伝わる優雅な「はねそ踊り」の一つ。
江波の三番叟 **（県無形民俗文化財）**	八頭郡用瀬町江波	毎年、江波神社例祭の日に神社の回り舞台で演じられる。大阪の商人が歌舞伎とともに教えたといわれる。
貝がら節	気高郡気高町浜村	イタヤ貝（一般に帆立貝）漁を歌ったもの。櫓を漕ぐなどの労働作業が盛り込まれている。昭和８年にレコード化され県を代表とする民謡となった。
亀井踊 **（県無形民俗文化財）**	気高郡鹿野町鹿野	因幡地方に伝わる「はねそ踊り」の一つ。亀井氏にまつわる伝承に由来し紋付黒装束で踊られる。
河内はねそ踊（こうち）	気高郡鹿野町河内	因幡の盆踊りは中世に始まった。念仏踊系「はねそ」が最も古い。

名　　称	保　存　地	内　　容
日置のはねそ踊 **（県無形民俗文化財）**	気高郡青谷町河原	江戸時代中期から因幡地方各地で伝承されてきた盆踊りである。舞に近い優雅なものである。
勝部の岩力踊 **（町無形民俗文化財）**	気高郡青谷町紙屋	男女ともに豪快に踊る。全体の構成は櫓の上に太鼓、唄い手を真中にし、踊り子は輪をつくり、左廻りに踊っていく。
宇野三ツ星盆踊り **（町無形民俗文化財）**	東伯郡羽合町宇野	三ツ星盆踊りの中でもこの地区独特の盆踊り。
泊貝がら節	東伯郡泊村泊	むかしのきびしい漁労（帆立貝）の苦しさを忘れるために歌われた。
東郷町浪人踊 **（県無形民俗文化財）**	東伯郡東郷町	羽衣石城落城後、浪人たちが城主を慕いうら盆の夜に供養のため踊ったのが起りと伝えられる。 静かで優美な踊りで毎年行われる水郷祭で踊られる。
九品ばやし	東伯郡東郷町	流勧請の供養、中将姫の練り供養が修行される。太鼓と鐘を打ち鳴らす。
白狼太鼓	東伯郡三朝町三朝温泉	大久保大明神の神前で神楽を奉納して、三朝温泉発見の誘因となった白狼に感謝する祭りが行われた。白狼太鼓はこの時代から引継がれ、一時中断していたが、最近復元された。
さいとりさし **（県無形民俗文化財）**	東伯郡三朝町湯谷 関金町大島居	藩主の許可を得た天下ご免の刺鳥刺師が小鳥を捕獲する様を狂言風に踊ったのが始まり。祝狂言として伝承されてきた。
三朝小唄	東伯郡三朝町三朝温泉	昭和２年、野口雨情作詞、中山晋平作曲、島田　豊振付で作られた。各学校の運動会、花湯祭、キュリー祭などで誰でも踊れる踊りとして親しまれている。
関金田植唄おどり	東伯郡関金町内	関金町に伝わる田植え唄に踊りが創作されたもの。早乙女の田植作業を笛・太鼓・唄に合わせた踊り。
八賢士太鼓	東伯郡関金町内	「南総里見八犬伝」のモデルとなったといわれる房総里見氏十代安房守忠義とその家臣（八賢士）の霊を弔うごとく、八賢士にふんした若者が勇壮に打ち鳴らす。
台場太鼓	東伯郡大栄町	国指定の史跡となった由良台場の歴史を情景、大地、終曲の三節からなる13分の組曲にしたもので、青年団男女９名によって演奏される。
瀬戸獅子舞	東伯郡大栄町	戦後中断した伯耆神楽の獅子舞を昭和61年に地元の有志たちが復活させたもの。
逢束踊 **（町無形民俗文化財）**	東伯郡東伯町逢束	古い念仏踊りに、伏見踊り（京都）、伊勢音頭（伊勢）、隠岐の盆踊りが組み合わさったものといわれる。
三本杉の盆踊 **（町無形民俗文化財）**	東伯郡東伯町古布庄地区（三本杉）	江戸中期から三本杉で踊られていた踊りで供養踊りとして近郷に広まった。服装はあみがさ、ぞうりにかすりの姿で、太鼓に合わせて踊る。

名　　称	保　　存　　地	内　　容
以西おどり	東伯郡赤碕町以西	櫓太鼓を中心に輪になり、浴衣に編水笠・頬被りという出で立ちで、体全体で「しな」をつくるように踊る。
小松谷盆踊 **（県無形民俗文化財）**	西伯郡会見町	小松守氏が農民慰安のため始めたと伝わる優雅で素朴な盆踊。中央につるされた太鼓を踊り子たちが二重、三重に囲む。
淀江さんこ節 **（町無形民俗文化財）**	西伯郡淀江町	江戸時代から生活労働歌として広まった歌で哀調をおびた歌詞で親しまれている。
大山僧兵太鼓	西伯郡大山町大山	僧兵の出で立ちをした男性が打ち鳴らす勇壮な太鼓。
長年太鼓	西伯郡名和町	名和長年の遺徳を偲び創作された5曲の組曲からなり、大太鼓、胴太鼓など9種類の楽器を打ち鳴らす。
ハーン踊り	西伯郡中山町	赤碕町に伝わる以西踊りと同様に櫓太鼓を中心に輪になって踊る。妙元寺でラフカディオ・ハーンがこの盆踊りを見て強く魅了された。
こだいぢ踊 **（県無形民俗文化財）**	日野郡江府町江尾	永禄8年江美城落城後、城主を追慕慰霊する供養踊として発祥。江尾十七夜に踊られる。
下蚊屋の荒神神楽 **（県無形民俗文化財）**	日野郡江府町下蚊屋	江戸時代初期、因伯牛の守護神「荒神」に、村の守護、五穀豊じょうなどの祈念と感謝をこめて神楽を奉納したのが始まり。神降ろしの神事や神の国譲り、八岐のおろちの「八重垣」など能風のものがある。
丸山田植え唄踊り	日野郡日南町丸山	苛酷な労働を唄で紛らわせ楽しい行事に転換させる知恵であり、また豊作祈願の唄として歌い継がれてきた。美しい早乙女姿と牧歌的な田園風景を後世に伝えようとするもの。
かしらうち	日野郡日南町多里地区 日野郡日南町福栄地区	「かしら」とは大きな太鼓のことで、それを打つのが「かしらうち」であり、両地区とも明治以前から行われ、神社の秋祭に行われる行事。
上三栄餅つき唄	日野郡日南町三栄	正月を迎える準備に隣り近所でお互いに手伝いに行き、大勢が陽気に歌いながら餅をつく。四人のつき手と向かいあった二人が同時にそれぞれを振りおろすというつき方が珍しい。
鬼面太鼓	日野郡溝口町	溝口町に古くから伝わる鬼退治伝説を「平穏」「怒濤」「喜楽」の楽章が表現し、鬼の面を付け荒々しく打ち鳴らす。

自 然 公 園

（1）国立公園

名　　称	概　　説	指定年月日	全面積	県内面積	関係市町村
大山隠岐 国立公園	中国地方一の名峰大山を中心とし、岡山県蒜山高原・島根県隠岐・島根半島・三瓶山を包含する。春は新緑、夏は登山・キャンプ、秋は紅葉、冬は西日本随一のスキー場。史跡にも富み、四季折々の魅力をもっている。志賀直哉の名作「暗夜行路」に大山の情景がよく描き出されている。	昭和 11. 2. 1 38. 4.10 拡大 平成 14. 3.26 拡大	ha 35,053	ha 15,483	大山、溝口 江府、岸本 関金、東伯 赤碕、名和 中山、日野
山陰海岸 国立公園	鳥取砂丘から京都府網野町に至る１府２県にまたがる海岸の自然公園で、このうち鳥取県内の中心地は鳥取砂丘と浦富海岸である。鳥取砂丘は、南北２㎞、東西16㎞にわたる海岸砂丘で、内陸砂丘的な起伏量をもつ全国一の規模で、風が描く砂上の風紋と夕陽に映える砂丘の表情が美しい。浦富海岸は「山陰の松島」といわれ洞門・洞くつ・奇岩・奇勝など海岸美の粋を集め、鳥取砂丘と共に国より天然記念物の指定を受けている。 なお、昭和46年１月22日、浦富海岸の田後地先海面地区が海中公園（9.8ha）に指定された。	昭和 38. 7.15	8,784	1,517	鳥取、福部 岩美

（2）国定公園

名　　称	概　　説	指定年月日	全面積	県内面積	関係市町村
比婆道後帝釈 国定公園	鳥取・島根・広島の３県にまたがる中国山地の中心部で、鳥取県関係は、つつじの名所道後山、神話「八俣のおろち」で有名な神剣出現の伝説のある船通山がある。高原の詩情・渓谷美が豊富である。	昭和 38. 7.24	ha 7,808	ha 1,437	日南
氷ノ山後山 那岐山 国定公園	鳥取・兵庫・岡山３県にまたがる山岳地帯で、中国山地第２の高峰氷ノ山を中心とし、北は扇ノ山、南は後山、西は那岐山に至る延長約95㎞、総面積４万haを超える地域で、千m級の山なみがうちつづき、「高原と瀑布と渓谷」に代表される山岳美の景観に恵まれた公園である。 本県関係では、山岳スキーで知られる氷ノ山、那岐山をはじめ扇ノ山山麓の河合谷高原の展望、雨滝の風潮・瀑布群約８㎞にわたる芦津渓の紅葉などが有名である。	昭和 44. 4.10 58. 2. 9 拡大	48,803	8,579	岩美、国府 八東、郡家 若桜、智頭 用瀬、佐治 河原、三朝

（3）県立自然公園

名　　称	概　　説	指定年月日	全面積	関係市町村
三朝東郷湖 県立自然公園	鳥取県最初の県立公園で倉吉市・三朝町・東郷町・羽合町にまたがる温泉・山岳・湖水・海岸をふくむ多面的な自然公園である。区域内には景勝地として知られる、小鹿渓・東郷湖、史跡名勝地の三徳山・打吹山がある。ラジウム含有量世界有数の三朝温泉、風光明媚な東郷湖をはさんで東郷・はわい温泉もある。鳥取県名産二十世紀梨もこの地方から多く生産される。	昭和 29. 4. 2 39. 6. 1 拡大指定 平成 6.12. 1 見直し指定	ha 15,067	倉吉、三朝 東郷、羽合
奥日野 県立自然公園	鳥取県の南西部、日野、日南両町にわたる山岳と渓谷の自然公園で、なかでも滝山・鵜ノ池・石霞渓付近の紅葉と渓谷美、花見山のスキー等は近年道路の整備により、脚光を浴び、また菅沢ダムにより生じた日南湖も新しい観光地となった。	昭和 39. 6. 1 平成 6.12. 1 拡大指定	4,823	日野、日南
西因幡 県立自然公園	気高郡気高町・青谷町にまたがる水尻海岸から浜村海岸・長尾岬を経て長和瀬まで16㎞にわたる海岸一帯は、砂浜からなるポケット浜や砂丘帯と、岩盤からなる急斜海崖の半島や岬が交互に発達し、優れた景観を示している。これらの海岸に加え、浜村温泉並びに水鳥の渡来する水尻池、鷲峰山、八葉寺川渓谷等の景勝地もある。	昭和 59. 5. 8 62. 4.28 拡大指定	2,155	気高、青谷 鹿野

温　　泉

名　称	所　在　地	周　遊 指定地	保　養 温泉地	平均温度 ℃	主　た　る　泉　質　及　び　適　応　症
岩井温泉	岩美郡岩美町 岩井	○	○	50.0	カルシウム　ナトリウム　一硫酸塩泉 リューマチ、神経痛、痛風、高血圧症、動脈硬化症、慢性皮膚病、外傷、やけど
鳥取温泉	鳥取市 永楽温泉町 鳥取市 吉方温泉町 鳥取市 末広温泉町			45.1	ナトリウム　一塩化硫酸塩泉 リューマチ、神経痛、痛風、高血圧症、慢性皮膚病、慢性婦人病
吉岡温泉	鳥取市 吉岡温泉町	○	○	46.8	単純温泉 リューマチ、神経痛、運動器障害、ストレス、病後回復、疲労回復、痔、慢性胃腸病、婦人病、皮膚病
浜村温泉	気高郡気高町 浜村	○		48.0	ナトリウム　カルシウム　一塩化物・硫酸塩泉 リューマチ、神経痛、運動器障害、慢性皮膚病、慢性婦人病、外傷、やけど、虚弱（児童）
鹿野温泉	気高郡鹿野町 今市		○	65.0	単純温泉 筋肉痛、関節痛、五十肩、神経痛、運動麻痺、病後回復期、疲労回復、関節のこわばり、うちみ、くじき、慢性消化器病、痔疾、冷え症、健康増進
東郷温泉	東伯郡東郷町 旭	○		72.5	ナトリウム　カルシウム　一塩化物・硫酸塩泉 リューマチ、神経痛、痛風、動脈硬化症、高血圧症、運動器障害、慢性皮膚病、慢性婦人病、外傷、やけど、虚弱（児童）
はわい温泉	東伯郡羽合町 上浅津	○		55.0	ナトリウム　カルシウム　一塩化物・硫酸塩泉 リューマチ、神経痛、通風、動脈硬化症、高血圧症、運動器障害、慢性皮膚病、慢性婦人病、外傷、やけど、虚弱（児童）
三朝温泉	東伯郡三朝町 三朝・山田	○		48.3	単純放射能泉 リューマチ、神経痛、痛風、高血圧症、動脈硬化症、慢性肝、胆道疾患、気管支ぜん息、糖尿病、肥満、末梢循環器障害、慢性皮膚病、慢性婦人病
関金温泉	東伯郡関金町 関金宿	○	○	42.3	単純放射能泉 リューマチ、神経痛、痛風、高血圧症、動脈硬化症、慢性肝、胆道疾患、運動器障害、神経まひ、ストレス、病後回復期、疲労回復
皆生温泉	米子市皆生	○		86.0	ナトリウム　カルシウム　一塩化物泉 慢性皮膚病、健康増進、慢性婦人病、リューマチ、運動器障害、外傷、やけど、虚弱体質

（注）全温泉の共通する温泉の一般的禁忌症
急性疾患（特に熱のある場合）、活動性の結核、悪性腫瘍、重い心臓病、呼吸不全、腎不全、出血性疾患、高度の貧血、その他一般に病勢進行中の疾患、妊娠中（特に初期と後期）

花・新緑・紅葉等の名所

	名称	所在地	みごろ	交通	備考
さくら	岩井温泉 奥山公園	岩美郡岩美町岩井	4月上旬	山陰本線岩美駅下車 バス10分 岩井行終点下車 徒歩15分	千本桜の名所として知られる。 隣接の愛宕山公園にはゆかむりの塔がある。
	鳥取城跡二ノ丸 （国史跡）	鳥取市東町久松山麓	4月上旬	山陰本線鳥取駅下車 市内バス5分 西町下車 徒歩7分	32万石の城跡。 二の丸付近のソメイヨシノは見事である。
	旧袋川堤防	鳥取市元町～材木町 （若桜橋～湯所橋）	4月上旬	山陰本線鳥取駅下車 徒歩10分	市内を流れる袋川沿いに桜のトンネルを形作り見事である。
	湖山池青島公園	鳥取市高住	4月上旬	山陰本線鳥取駅下車 バス25分	ソメイヨシノを主体に数種の桜千余を島の周囲に植え、見事な花を咲かせる。
	天神川堤防	鳥取市立川町	4月上旬	山陰本線鳥取駅下車 バス15分	例年ボンボリを点灯し、桜100本余りが咲く。
	天満山公園	八頭郡船岡町船岡	4月上旬 ～下旬	若桜鉄道因幡船岡駅下車 徒歩15分	ソメイヨシノが約1,000本 地内には学問の神、船岡天満宮がある。
	釜ノ口土手	八頭郡河原町釜ノ口	4月上旬	因備線国英駅下車 徒歩10分	千代川土手の並木は古木ながら見事な花を咲かせる。
	新興寺桜公園	八頭郡八東町新興寺	4月中旬	若桜鉄道安部駅下車 徒歩25分	シーズンには夜間、ボンボリをともし、花見の雰囲気を盛り上げている。
	若桜鬼ケ城跡	八頭郡若桜町若桜 （鶴尾山）	4月中旬	若桜鉄道若桜駅下車 徒歩約50分 タクシー10分	元和3年（1617）廃城。 廊下橋、行止り虎口（仮称）等の全国でもめずらしい遺構が残る山城跡。
	智頭川畔	八頭郡智頭町智頭	4月中旬	因美線智頭駅下車 徒歩10分	国道373号沿い1,300mに約180本のソメイヨシノが植えられている。夜桜を楽しむためライトアップとイルミネーションが取り付けられる。
	鹿野城跡公園	気高郡鹿野町鹿野	4月上旬	山陰本線浜村駅下車 鹿野行バス15分 立町下車 徒歩5分	亀井茲矩公（3万8,000石）の旧城跡。ソメイヨシノの群生（約500本）があり、城跡の内濠外濠に映えて見事である。 夜は、ボンボリ、常夜灯でライトアップされ、また偶数年には「桜まつり」が開催される。

	名　　称	所　在　地	みごろ	交　　通	備　　考
さくら	打吹公園	倉吉市仲ノ町	4月中旬	山陰本線倉吉駅下車 バス11分 市役所・打吹公園前下車 徒歩5分	打吹山山麓にあり、ソメイヨシノが多く、桜名所100選に選ばれた。（約4,000本） また、ツツジも4万本植えられており、桜とともに、ツツジの咲く頃も多くの観光客でにぎわう。
	極楽寺	倉吉市八屋	4月上旬	山陰本線倉吉駅下車 バス5分 八屋下車 徒歩5分	本堂前のシダレザクラは、県内最大で高さ16m、周囲2.6mあり、樹齢約120年といわれている。
	東郷羽合線 （ふじつ荘付近）	東伯郡東郷町藤津	4月上旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩20分	東郷湖岸で一番最初に見頃となるシダレザクラは見事である。
	九品山	東伯郡東郷町引地	4月上旬 ～中旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩約10分	山陰本線沿いにある。 九品山大伝寺にあり、古木ながら見事な花を咲かせる。
	佐美入口	東伯郡東郷町佐美	4月中旬	山陰本線倉吉駅下車 徒歩20分	例年ボンボリを点灯して花見ができる。
	桜小学校	東伯郡東郷町松崎	4月中旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩20分	登校坂にあるサクラ並木は県道から眺めても絶景である。
	東郷川畔	東伯郡東郷町龍島	4月中旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩10分	東郷川土手の並木道も散策路として整備。 ボンボリも取りつけ、憩いの場となっている。
	鳥取牧場	東伯郡赤碕町赤碕	4月上旬 ～中旬	山陰本線赤碕駅下車 徒歩約10分	農林水産省家畜改良センター鳥取牧場の前庭にあり、桜並木が壮観である。
	船上山万本桜公園	東伯郡赤碕町山川	4月下旬 ～ 5月上旬	山陰本線赤碕駅下車 少年自然の家行バス30分 徒歩5分	茶園原にあり、ここから屏風岩が一望できる。 新緑と桜の桃色が美しく山を彩る。
	八橋公園	東伯郡東伯町八橋	4月上旬	山陰本線八橋駅下車 徒歩5分	例年ボンボリを点灯し、桜150本余りが咲く。
	湊山公園	米子市西町・内町・久米町	4月上旬 ～中旬	山陰本線米子駅下車 徒歩20分	例年ボンボリを点灯して桜まつり（4／1～16）を開催。 ソメイヨシノ等約450本

	名称	所在地	みごろ	交通	備考
さくら	福市公園（ふくいちこうえん）	米子市福市	4月上旬 ～中旬	山陰本線米子駅下車 バス20分 安養寺入口下車すぐ	ソメイヨシノ、枝垂桜、約300本 伯耆大山の雄姿が眺望できる。
	境台場公園（さかいだいばこうえん）	境港市花町11	4月上旬 ～中旬	境線境港駅下車 バス7分 上道下車徒歩20分	ソメイヨシノが咲きほこるお台場の高台には、山陰最古の境灯台（復元）があり、境水道を出入りする船を一望できる。夜になれば、ボンボリ（150基）やライトアップされた灯台が美しい。
	木ノ根神社（きのねじんじゃ）	西伯郡中山町松河原	4月上旬 ～中旬	山陰本線下市駅下車 徒歩15分	木ノ根神社一帯にソメイヨシノが咲きボンボリも設置されます。 また、国道9号よりその景観を眺めることができ、ドライブを楽しませてくれる。
	萩原高原（はぎはらこうげん）	西伯郡中山町萩原	4月上旬 ～ 5月中旬	山陰本線中山口駅下車 車で15分	ゆるやかにうねりながら約500mの間、ソメイヨシノ、八重桜など約500本の美しい並木が続く。
	法勝寺城山公園（ほっしょうじじょうざんこうえん）	西伯郡西伯町法勝寺	4月上旬 ～中旬	山陰本線米子駅下車 バス25分 法勝寺下車 徒歩5分	城山から法勝寺堤防にかけ1,000本が咲きほこる。
	名和公園（なわ）	西伯郡名和町御来屋	4月上旬	山陰本線名和駅下車 付近	公園内と名和長年を祭る名和神社参道一帯にソメイヨシノが咲きほこる。
	塔の峰公園（とうのみね）	日野郡日野町根雨	4月上旬 ～中旬	伯備線根雨駅下車 徒歩約15分	公園一帯にソメイヨシノが咲き、例年ボンボリを点灯している。根雨の町並が一望できる。
	滝山公園（たきさん）	日野郡日野町中菅	4月中旬 ～下旬	伯備線黒坂駅下車 徒歩20分	山腹の公園で、温度が平地より低いため、遅咲きの桜が観賞できる。
つつじ	那岐山（なぎさん）（国定公園）	八頭郡智頭町奥本 西宇塚	5月中旬 ～ 6月上旬	因美線那岐駅下車 徒歩120分	標高1,240m ドウダンツツジ、シャクナゲ群生。
	一ノ谷公園（いちのたに）	八頭郡用瀬町用瀬	4月下旬	因美線用瀬駅下車 徒歩10分	ミツバツツジ1,000本 ボンボリが設置され、夜はボンボリの灯りに照らされ美しい。
	打吹公園（うつぶき）	倉吉市仲ノ町	4月下旬 ～ 5月中旬	山陰本線倉吉駅下車 バス11分 市役所・打吹公園前下車 徒歩5分	打吹山麓にあり、ヒラド、クルメ、キリシマ等約40,000本

	名称	所在地	みごろ	交通	備考
つつじ	東郷湖羽合臨海公園（藤津地区）	東伯郡東郷町藤津	5月	山陰本線松崎駅下車 徒歩15分	あやめ池に隣接し、家族連れのピクニックに最適。
つつじ	亀井公園	東伯郡関金町関金宿	4月中旬 ～下旬	山陰本線倉吉駅下車 バス35分 徒歩10分	公園全体にツツジが咲き乱れ、関金温泉街が一望できる。 さらに大山、蒜山三座が一望できる。
つつじ	福市公園	米子市福市	5月上旬 ～下旬	山陰本線米子駅下車 バス20分 安養寺入口下車すぐ	弥生時代末期から古墳時代後期の遺跡。 公園に1,700本のヒラドツツジが見事に咲く。
つつじ	名和公園	西伯郡名和町大字御来屋	5月	山陰本線名和駅下車	公園内と名和公を祀る名和神社参道一帯に紅白のツツジが咲く。
つつじ	滝山公園	日野郡日野町中菅	4月下旬 ～ 5月上旬	伯備線黒坂駅下車 徒歩20分	ダイセンミツバツツジの群落地帯である。一斉に開花すると、公園全体がピンク色に見え、他に類を見ないすばらしさ。
つつじ	寝覚峡	日野郡日野町下黒坂	5月上旬 ～中旬	伯備線黒坂駅下車 徒歩20分	キシツツジの群落地帯。日野川の両岸に迫る白い岩肌がピンク色に染まり、渓谷美に彩をそえている。
つつじ	石霞渓（県立公園）	日野郡日南町生山	5月上旬 ～下旬	伯備線生山駅下車 徒歩10分	2キロメートルにわたる谷に、ヤマツツジ300本、キシツツジ1,000本が自生。
つつじ	道後山（国定公園）	日野郡日南町新屋	6月下旬 ～ 7月上旬	伯備線生山駅下車 新屋行バス30分 新屋下車 徒歩頂上まで180分	標高1,169m 低木と草原の大高原。
つつじ	亀山公園（国定公園）	日野郡日南町下石見	4月下旬 ～ 5月上旬	伯備線生山駅下車 バス5分 堂原下車 徒歩3分	土まんじゅう形の小山がつつじ2,000本で彩どられ、特に5月3日前後は濃艶。
新緑	河合谷高原（県立公園）	岩美郡岩美町 岩美郡国府町	5月中旬 ～ 6月上旬	山陰本線岩美駅下車 蕪島行バス20分 終点下車　徒歩90分 山陰本線鳥取駅下車 車で60分	標高900mの準平原。
新緑	雨滝	岩美郡国府町雨滝	5月中旬 ～ 6月上旬	山陰本線鳥取駅下車 中河原線バス45分 雨滝下車 徒歩30分	高さ40mの瀑布と新緑の調和。 付近一帯の岩肌、原生林との調和が見事。

	名称	所在地	みごろ	交通	備考
新緑	芦津渓（国定公園）	八頭郡智頭町芦津	5月中旬〜6月上旬	因美線智頭駅下車車で40分	大渓谷両岸をミズナラやスギの原生林が覆う絶景の地。
	氷ノ山（国定公園）	八頭郡若桜町春米	5月中旬〜6月中旬	若桜鉄道若桜駅下車春米行バス25分終点下車頂上まで徒歩130分	標高1,000mの草原とブナ、トチの原生林。
	鷲峰山（県定公園）	気高郡鹿野町河内	5月中旬〜6月中旬	山陰本線浜村駅より車で15分	ブナの原生林あり。植物の種類も豊富で、四季を通じて野鳥も多い。
	佐谷峠	気高郡鹿野町佐谷	5月中旬〜6月中旬	山陰本線浜村駅より車で25分	佐谷峠展望台からの眺めと、展望台までのまわりの山々は絶景。
	小鹿渓（国名勝）	東伯郡三朝町神倉	5月中旬〜6月中旬	山陰本線倉吉駅下車バス（三朝温泉のりかえ）40分徒歩30分	ブナ、ヤマグルマ、カツラ、トチノキ等の渓谷植物が多い。
	大山（国立公園）	西伯郡大山町、岸本町、日野郡溝口町、江府町	5月中旬〜6月中旬	山陰本線米子駅下車大山寺・桝水行バス50分登山道入口下車	1,000種を越える植物群が新緑に彩られる。山開きは毎年6月第1日曜日。
	南さいはく自然休養村	西伯郡西伯町下中谷	5月〜6月	山陰本線米子駅下車上長田行バス20分緑水園前下車すぐ	緑水湖周辺及び森林公園
	高清水高原	東伯郡三朝町栗祖	5月中旬〜6月中旬	山陰本線倉吉駅より車で80分	標高約1,000mの大草原で、芝生状のなだらかな大地。
	一向平と吊橋経由地獄谷峡谷（国立公園）	東伯郡東伯町野井倉	5月中旬〜6月中旬	山陰本線浦安駅下車バス30分三本杉終点下車徒歩90分	標高560m、30haの平原。地獄谷峡谷は延長10kmにおよぶブナの原生林と大山特有の植生におおわれ、滝が多い。大山滝の途中に吊橋（幅1m、高さ30m、延長45m）があり、吊橋のすぐ下に鮎返りの滝がある。
	三滝渓	八頭郡河原町北村	5月中旬〜6月中旬	山陰本線鳥取駅下車北村行バス50分床下車徒歩45分	高さ70mの瀑布と長さ41m、高さ40mの三滝つり橋が新緑に調和する。
	船上山	東伯郡赤碕町山川	5月中旬〜6月中旬	山陰本線赤碕駅下車船上山行バス40分徒歩5分	屏風岩と新緑のコントラストが見事。

名称		所在地	みごろ	交通	備考
紅葉	河合谷高原（かわいだにこうげん）	岩美郡岩美町 岩美郡国府町	10月中旬	山陰本線岩美駅下車 蕪島行バス20分 終点下車 徒歩90分	高原一帯の秋を彩る紅葉は別世界。
	雨滝（あめたき）	岩美郡国府町雨滝	10月下旬 〜 11月中旬	山陰本線鳥取駅下車 中河原線バス45分 雨滝下車 徒歩30分	高さ40mの瀑布と付近の岩肌との調和が見事。
	芦津渓（あしづけい） （国定公園）	八頭郡智頭町芦津	10月下旬 〜 11月中旬	因美線智頭駅下車 車で40分	湖水に映す広葉樹の紅葉と天然スギの緑の調和が見事で、西日本屈指と言われている。
	三滝渓（みたきけい）	八頭郡河原町北村	10月下旬 〜 11月中旬	山陰本線鳥取駅下車 北村行バス50分 床下車 徒歩45分	渓谷一帯が紅葉の秋一色に染まる。
	戸倉峠（とくらとうげ）	八頭郡若桜町落折	10月下旬	若桜鉄道若桜駅下車 車で30分	落折から峠までの４㎞でつづら折の道の両側の樹林が美しい。
	山王渓谷（さんのうけいこく）	八頭郡佐治村中	11月上旬	因美線用瀬駅下車 栃原行バス36分 中下車 徒歩約20分	山王滝を中心にナナカマド、モミジ、ブナ等が紅葉する。
	高鉢山・三国山（たかはちやま・みくにやま）	八頭郡佐治村尾際 八頭郡佐治村中	11月上旬	因美線用瀬駅下車 栃原行バス36分 中下車 徒歩60分	高鉢山と三国山全体が紅葉し、ナメタケ等がとれる。
	辰巳峠（たつみとうげ）	八頭郡佐治村栃原 （県境）	11月上旬	因美線用瀬駅下車 栃原行バス40分 終点下車 徒歩40分	ナナカマド、ブナ、モミジ等が見事に色づく。
	鷲峰山（じゅうほうやま） （県定公園）	気高郡鹿野町河内	10月下旬	山陰本線宝木駅下車 河内行フリーバス 25分 古仏谷又は河内下車 山頂まで徒歩120分	ブナの原生林あり。植物の種類も豊富で、四季を通じて野鳥も多い。
	佐谷峠（さだにとうげ）	気高郡鹿野町佐谷	10月下旬 〜 11月上旬	山陰本線浜村駅より 車で25分	佐谷峠展望台からの眺めと展望台までのまわりの山々は絶景。
	小鹿渓（おじかけい）	東伯郡三朝町神倉	10月下旬 〜 11月中旬	山陰本線倉吉駅下車 バス三朝温泉下車乗りかえ神倉行バス40分 終点下車　徒歩30分	渓谷一帯が見事に色づく。

	名称	所在地	みごろ	交通	備考
紅葉	船上山	東伯郡赤碕町山川	10月下旬 〜 11月中旬	山陰本線赤碕駅下車 バス30分 少年自然の家下車 徒歩５分	全山紅葉し屏風岩との調和は見事。
	一向平〜吊橋〜大山滝	東伯郡東伯町野井倉	10月下旬 〜 11月上旬	山陰本線浦安駅下車 三本杉行バス30分 徒歩90分	一向平から吊橋、大山滝にかけて渓谷一帯に紅葉し、とくに大山滝から見る眺めは絶景である。
	三徳山（国名勝）	東伯郡三朝町三徳	10月下旬 〜 11月中旬	山陰本線倉吉駅下車 三徳山行バス40分 終点下車 徒歩頂上まで30分	南方植物と北方植物の混成林の紅葉は三徳山の古刹とともに壮観である。
	笹ケ平高原	東伯郡関金町野添	10月中旬	山陰本線倉吉駅下車 車で60分	主要地方道倉吉・江府・溝口線沿いの展望台より見る眺めはすばらしい。
	大山（国立公園）	西伯郡大山町、日野郡溝口町、江府町	10月下旬 〜 11月上旬	山陰本線米子駅下車 大山寺・桝水高原行 バス50分 登山道入口下車	特に川床、豪円山、寂静山、金門、桝水高原、鍵掛峠、元谷はみどころ。
	鵜ノ池	日野郡日野町黒坂、下榎	10月下旬 11月上旬	伯備線黒坂駅下車 車で15分	鵜ノ池付近の自然林の紅葉、色づいた周囲の山々が湖面に映り、大変美しい。 県の鳥「オシドリ」が生息している。
	滝山公園	日野郡日野町中菅	10月下旬 〜 11月上旬	伯備線黒坂駅下車 徒歩20分	お勝ケ池の周辺の紅葉は特にみごと。谷川沿いにモミジ等の植栽も進められている。
森林浴	町民いこいの里	岩美郡岩美町小田大坂	4月 〜 10月	山陰本線岩美駅下車 車で40分	雨滝を中心に林間歩道が整備され、家族連れでの森林浴に適している。常設テント12基、テントサイト12基も利用できる。
	オアシス広場	岩美郡福部村 砂丘、湯山	年間	山陰本線鳥取駅下車 岩井行バス20分 砂丘東口下車 徒歩10分	生活環境保全林内に遊歩道があり、森林浴を楽しみながら、オアシス広場まで散策できる。
	八東ふるさとの森	八頭郡八東町妻鹿野	4月下旬 〜11月	若桜鉄道丹比駅下車 車で30分	扇ノ山国有林内 大変貴重な森林と言われている、西洋風ブナ林の原生林20ha。 遊歩道が整備され森林浴ができる。キャンプサイトやバンガローも利用できる。
	打吹山	倉吉仲ノ町	年間	山陰本線倉吉駅下車 バス11分 市役所・打吹公園前下車 徒歩10分	森林浴の森日本100選の一つ。 スタジイの原生林50ha

名称		所在地	みごろ	交通	備考
森林浴	三徳山（みとくさん）	東伯郡三朝町三徳	5月中旬 ～ 9月下旬	山陰本線倉吉駅下車 三徳山行バス40分 終点下車 徒歩頂上まで30分	森林浴の森100選の一つ。 南方植物と北方植物の混成林。
	一向平～大山滝～（いっこんがなる～だいせんだき）	東伯郡東伯町野井倉	5月中旬 ～ 9月下旬	山陰本線浦安駅下車 三本杉行バス30分 徒歩90分	大山滝までは遊歩道が整備され、森林浴に最適である。
その他	二十世紀梨の花（にじゅっせいきなしのはな）	県内各地（果樹園）	4月上旬 ～中旬		県花に指定されており、バラ科ナシ属で純白色の花弁をつける。鉄道沿線でも観賞できる。
	唐川のカキツバタ（からかわ） （国天然記念物）	岩美郡岩美町唐川	5月中旬 ～ 6月下旬	山陰本線岩美駅下車 小田行バス20分 唐川口下車 徒歩40分	海抜約300mの湿原地帯約1haに大群落がある。
	らっきょうの花	岩美郡福部村湯山 海士、細川	10月下旬	山陰本線鳥取駅下車 岩井線バス25分 県（あがた）下車 徒歩5分	赤紫のかれんな花が一面に広がり（110ha）、雄大な美しさを見せる。
	白兎海岸のハマナス（はくとかいがん） （国天然記念物）	鳥取市白兎	5月下旬 ～ 6月中旬	山陰本線鳥取駅下車 倉吉・浜村行バス30分 白兎下車	バラ科に属する寒帯植物で、この地域が自生南限地帯として、国の天然記念物に指定されている。
	ハマナス （国天然記念物）	西伯郡中山町松河原	5月中旬 ～ 6月上旬	山陰本線下市駅下車 車で60分	自然の転石の中に自生し、毎年初夏にピンクの花を咲かせる。自生南限地帯。
	あじさい公園	鳥取市美萩野	6月上旬 ～7月末	山陰本線鳥取駅下車 バス20分	2,300㎡の公園に約3,000株のアジサイが咲き見事である。
	アジサイ	米子市尾高	6月下旬 ～ 7月上旬	山陰本線米子駅下車 米子ハイツ行バス約30分 米子ハイツ下車すぐ	尾高城跡に隣接する米子ハイツ内、2,600㎡に約400株のアジサイが植えられ美しい。
	逢束海岸のアジサイ（おおつかかいがん）	東伯郡東伯町逢束	5月下旬 ～ 6月下旬	山陰本線浦安駅下車 徒歩15分	海岸に沿って約300mにわたり群生する。
	打吹公園のツバキ（うつぶきこうえん）	倉吉市仲ノ町	2月中旬 ～ 4月上旬	山陰本線倉吉駅下車 バス11分 市役所・打吹公園前下車 徒歩10分	博物館前の「椿の平」はツバキの古木として有名である。 春先に見事な花を咲かせる。

	名称	所在地	みごろ	交通	備考
その他	大樹寺のウラクツバキ	八頭郡郡家町福地	11月下旬 〜 4月上旬	山陰本線鳥取駅下車 私都行バス40分 福地下車 徒歩5分	樹齢約400年、樹高約8.7m、枝はり10.5m、幹まわり約1.85mで、京都の有楽椿をしのぐ巨木。毎年11月下旬から4月上旬まで優雅な花を咲かせる。
	三滝渓シャクナゲ	八頭郡河原町北村	4月下旬 〜 5月中旬	山陰本線鳥取駅下車 北村行バス50分 床下車50分 徒歩45分	遊歩道の両岸に咲きみだれるシャクナゲの群生。
	那岐山のドウダンツツジシャクナゲ（国定公園）	八頭郡智頭町西宇塚・奥本	5月中旬 〜 6月上旬	因美線那岐駅下車 那岐行バス5分 徒歩120分	9合目付近にヤマツツジ、町花ドウダンツツジ、シャクナゲの群落があり見事である。（町の文化財指定）また、山頂付近にはツツジの群落がある。
	シャクナゲ	日野郡日南町神戸上	5月中旬 〜 6月上旬	伯備線上石見駅下車 車で15分	花見山スキー場のゲレンデに咲きほこる。
	花菖蒲	東伯郡東郷町藤津	6月上旬 〜中旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩15分	東郷湖羽合臨海公園内。3万株の花菖蒲があやめ池をうめる。
	ショウブ	米子市尾高	6月中旬	山陰本線米子駅下車 大山行バス25分 尾高下車 徒歩2分	2,000㎡の園内に約100種10万株のショウブが咲く。
	ショウブ（清水山荘）	日野郡日南町菅沢	5月中旬 〜 6月下旬	伯備線生山駅下車 バス15分 菅沢神社前下車	庭園内一面に300種30,000株のショウブが咲きみだれる。
	フジ	東伯郡東郷町藤津	5月上旬 〜中旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩15分	東郷湖羽合臨海公園。藤棚のパーゴラのもと、1mの長さの房にフジのうす紫の花が咲き美しい。5月上旬に開花。
	フジ（住雲寺）	西伯郡名和町古御堂	5月上旬 〜中旬	山陰本線名和駅下車 車で5分	境内にある樹齢30余年の藤の木が枝を広げる。1〜1.5mの房に見事な花を咲かせる。 5月上旬〜中旬に開花。
	ウメ	鳥取市上町	3月上旬	山陰本線鳥取駅下車 バス7分 徒歩10分	梅鯉庵庭園内
	ウメ	米子市尾高	2月 〜 3月	山陰本線米子駅下車 米子ハイツ行バス約30分 米子ハイツ下車	米子ハイツ内にある梅園に、600本の紅白梅が植えられている。 国立公園大山の眺望がすばらしい。

名称		所在地	みごろ	交通	備考
その他	チューリップ	西伯郡日吉津村	4月中旬	山陰本線米子駅下車 バス20分 または伯耆大山駅下車 徒歩20分	21種類の色とりどりのチューリップの花が咲く。 6 ha
	コスモス	西伯郡淀江町福岡	10月下旬 〜 11月	山陰本線淀江駅下車 徒歩15分	古代伯耆の丘公園周辺に可憐な花が咲く。
	コスモス	西伯郡岸本町須村	9月中旬 〜 11月初頭	山陰本線岸本駅下車 車で5分	植田正治写真美術館周辺に可憐な花が咲く。
	コスモス	西伯郡岸本町小林	9月中旬 〜 10月初頭	山陰本線岸本駅下車 車で15分	大山桝水高原の大山放牧場周辺に可憐な花が咲く。
	コスモス	気高郡鹿野町今市	10月 〜 11月初頭	山陰本線浜村駅下車 鹿野行バス10分 今市下車	鹿野町コスモス街道沿いに咲く。
	スイセン	西伯郡淀江町福岡	1月下旬 〜 3月下旬	山陰本線淀江駅下車 徒歩15分	古代伯耆の丘公園の向山古墳群周辺に3万球が植栽されている。
	スイセン	日野郡日南町神戸上	3月中旬 〜 5月中旬	伯備線上石見駅下車 車で15分	花見山スキー場のゲレンデ一面がスイセンの花でいっぱいになる。
	スイレン	鳥取市上町	5月中旬 〜 8月中旬	山陰本線鳥取駅下車 市内回りバス5分 県庁日赤前下車 徒歩15分	国の名勝・観音院庭園にピンクの花を咲かせる。
	スイレン	米子市尾高	6月下旬 〜 8月中旬	山陰本線米子駅下車 大山行バス25分 尾高下車 徒歩10分	大神山神社の庭園の池に可憐な花が咲く。
	ハス	東伯郡東郷町引地	7月中旬 〜 8月中旬	山陰本線松崎駅下車 徒歩10分	日本最大級の中国庭園燕趙園内に設けられた池が可憐なハスの花に彩られる。
	ハス	西伯郡淀江町福岡	6月中旬 〜 8月中旬	山陰本線淀江駅下車 徒歩20分	弥生時代の種から発芽したと伝えられる、大賀ハスをはじめ約40種が古代伯耆の丘公園内の池に咲く。

名称		所在地	みごろ	交通	備考
その他	ノハナショウブ	日野郡江府町鏡ケ成	7月上旬 ～下旬	伯備線江尾駅下車 鏡ケ成行バス45分 終点下車	休暇村大山鏡ケ成周辺の高原に約20,000株が自生。
	カタクリ	日野郡江府町俣野	4月下旬 ～ 5月中旬	伯備線根雨駅下車 車で15分 徒歩120分	4月下旬から可憐なカタクリの花の大群落がみられ、みごとである。
	ハマヒルガオ	米子市皆生温泉和田町	5月下旬 ～初秋	山陰本線米子駅下車 皆生温泉行バス19分 終点下車 徒歩15分	皆生温泉から和田町にかけての弓ケ浜半島の海岸でみられる。初夏の風物詩である。
	ヒマワリ	西伯郡淀江町福岡	8月上旬 ～下旬	山陰本線淀江駅下車 徒歩20分	古代伯耆の丘公園の白鳳の里周辺に約3万本が太陽に向かって一面に咲き、みごとである。
	ソバ	西伯郡淀江町福岡	9月上旬 ～ 10月初頭	山陰本線淀江駅下車 徒歩20分	古代伯耆の丘公園の白鳳の里周辺に可憐な花が咲く。
	ソバ	気高郡鹿野町小別府	9月上旬 ～ 10月初頭	山陰本線浜村駅下車 鷲峰山行バス20分 小別所下車 徒歩10分	小高い丘一面に可憐な花が咲く。
	サツキ （善福寺）	西伯郡岸本町久古	6月上旬 ～中旬	山陰本線米子駅下車 小林行バス35分 久古下車	善福寺内の庭園内一面にサツキが咲く。

スキー場

名称	所在地	交通	コースの状況		
			標高差（m）	積雪量（cm）	可能期間
安蔵	鳥取市河内	山陰本線鳥取駅下車 安蔵行バス40分	スノー 70 グラススキー 35	50 〜 100	スノースキー 降雪時 グラススキー 4／29〜11／30 土・日祝日・旧盆
わかさ氷ノ山	八頭郡若桜町春米	若桜鉄道若桜駅下車 車で20分	140	100 〜 350	12月中旬 〜 3月下旬
			160		
			430		
大山 中の原	西伯郡大山町大山	山陰本線米子駅下車 バス大山寺50分	215	100 〜 300	12月中旬 〜 3月下旬
大山 上の原			260		
大山 豪円山			130		
大山 大山国際			362	100 〜 300	12月上旬 〜 4月上旬
桝水高原	日野郡溝口町桝水原	伯備線伯耆溝口駅下車 車で20分	160	100 〜 200	12月下旬 〜 3月下旬
鏡ケ成	日野郡江府町鏡ケ成	伯備線江尾駅下車 バス45分 休暇村大山鏡ヶ成下車すぐ	150	200 〜 400	12月下旬 〜 4月中旬
奥大山	日野郡江府町御机字大平原	伯備線江尾駅下車 バス30分 大平原下車すぐ	240	100 〜 300	12月下旬 〜 3月下旬
花見山	日野郡日南町神戸上	伯備線上石見駅下車 車で15分	200	200	スノースキー 12月下旬 〜 3月下旬
					アストロ人工スキー 4月〜12月
					グラス・スキー 4月中旬 〜 12月中旬